黙阿弥全集

第二巻

名題の下書

立作者は番附の版下屋へ名題役割の下書を廻して、版下を認めさせる。これは默阿彌が三人吉三初演の當時認めた、大名題、小名題、淨瑠璃名題の下書である。大名題といふのは「語り」を含む題名であり、小名題はまた四枚とも稱して、第一、第二、第三、第四と四枚に認めて、作の内容を暗示せんとしたもので、何れも座の正面に掲げられた。(但し小名題は紋番附以外の番附には附せられなかつた。)大小各樣の文字の肩に二本三本四本程づゝ引いてあるのは朱線であるが、これは字の大きさの指定であらうと思はれる。無論筆勢から推して、筆者の引いたものであることは疑ひを入れない。

小猿七之助

河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集 第三卷

東京 春陽堂刊行

默阿彌全集　第三卷目次

挿繪目次

御贔屓様の御好みに又繰返す文月も及ばぬ筆に時代世話綴合せし狂言は良齋翁が講談をすき返したる網打七五郎水死の恨み深川にまだ幽靈も初秋やお坊吉三が人眞似の悪事は知れたる青瓢其千成に因ある小猿の七が宵の間に矢矧の橋の夢さへも彼萬字屋の故きを尋ね廓賑ふ新宅に稲木親子が玉菊が追善

「傾城玉菊」は安政四年七月、作者四十二歳の時市村座に書卸された作で、同じく默阿彌の作なる「小猿七之助」と共に「網模樣燈籠菊桐」なる題下に綴られたものである。「菊模樣法の燈籠」なる名題は今回玉菊の部分に對し編者の附したものである。中萬字屋の遊女玉菊が稻木新之丞に對する情と、その妻に對する義理と、新之丞とは惡敵の澁川に對する嫉惡の情と、中萬字屋の彌兵衞に對する義理と、この四つの情義にからまれて自害して果てるといふ筋のもので、三世河竹新七の作なる「星合露玉菊」(明治三十三年七月、春木座)とは、全然趣を異にしてある。四世菊五郎といふ役者はおつとりとした人であつたから、傳法なとか粋なとかいふ女に扮しては效果を擧げ難かつたが、玉菊の如き役柄には打つてつけで非常の好評を得たといふ。この時の興行には中萬字屋から賑々しく見物したり、津藤香以山人の後援もあり、花々しい景況であつたらしい。善孝や魯文のことが作中に見えるのは當込みである。江戸末の吉原の描寫されてある點が特色である。

書卸しの役割は、尾上菊五郎(中萬字屋玉菊)、市川小團次(中萬字屋勘兵衞)、坂東彦三郎(稻木新之丞)淺尾與六(澁川軍十郎、稻木治左衞門)、中村歌女之丞(新之丞妻お民)、坂東又太郎(玉菊親畑助)、中村鴻藏(櫻川善孝)、市川米五郎(藝者おさん)、尾上橋之助(新造玉荻)等。挿繪にしたのは豐國筆の錦繪である。

大正十三年九月　　編者誌す

菊模樣法の燈籠（傾城玉菊――三幕）

序幕

鈴ヶ森八幡の場

〔役名――稻木新之丞、澁川軍十郎、中間畑助、岩淵伴吾、峰岡慶藏、山脇傳八、森下新八、下部權平、小谷佐五郎等。〕

（鈴ヶ森八幡鳥居先の場）――本舞臺正面石の玉垣、上手に大なる石の片鳥居、石燈籠、松の立木、後ろ中遠見に本社拜殿、下の方に二つ引の紋の附いたる幕を張り、次に用水桶、その上に雨覆をしたる手桶を重ねあり。こゝに玉菊の親畑助更けたる紺看板の中間裝にて、一人離れて、辨當を前へおき摺火打にて煙草を喫みゐる。澁川の下部權平、蕎藏、角内、丸助、杢平等何れも紺看板の中間裝にて、後へ槍を立てかけ、辨當を列べ、供待をしてゐる。總て鈴ヶ森八幡鳥居先の體。大拍子にて幕明く。

權平　今日は川崎の大師へ、旦那を始めお組下の衆達も御代參のお役目、この鈴ヶ森の八幡でお小休みと極つて、手前達も樂だらう。

蕎藏　樂な奉公でも、歩きやあ腹が空つて辨當は食ふものゝ、お歸りにやあおらが部屋へ、御酒代でも

下さらうかの。

角内　そりやあ手前御富貴のお屋敷だ、お手當は知れたことよ。

丸助　あんまりさうも言へねえぜ。此間も度々のたゞ奉公、お名さへ澁川軍十郎様だ、お賄ひが變つてから、この節の御儉約。

杢平　それでも當時出頭なれば、御知行はもとより高祿の家柄、その上諸方から賄賂が來るから、だんだんに御內福。

權平　おら達もあやかりてえが、無藝大食何にもならねえぶらんさんの極樂蜻蛉で、部屋通りをごろつくが、彼處にゐる親仁のやうに年を取つて、折助でもあるめえぜ。

蕎藏　さうよ。見慣れねえとつさんだが、お前はどなたの中間だえ。

畑助　あい、わたしや稻木新之丞様の中間さ。

角内　稻木の屋敷の折助なら、よぼくれ親仁が相應だ。

丸助　ひどく言ふなえ、見りやあまだ辨當も喰はねえの。

畑助　まだ腹も空らないが、お前方が食はつしやるから、私も喰はうか知らぬ。

ト辨當を出し飯を食ひかける。角内これを見て、

角内　稻木の屋敷は貧乏にきまつたぜ。

皆々　なぜ〳〵。

角内　あの辨當の菜を見や、梅干に澤庵が二切だ。

權平　不便なものだ。肴の血合が殘つた、骨ごとしやぶらねえか。(ト辨當の殘りを出す。)

畑助　御親切は忝ないが、この年になつても肴の血合や骨をしやぶつたことはない、こなた達は常不斷喰はつしやるであらうから、遠慮なしに喰はつしやれ。(ト偏屈なる思入。)

權平　なんだ、おれに喰へ、大きにお世話だ。おらが屋敷は富貴で、中間小者に至るまで、梅干や香々の尻尾は食はねえ。魚な子一尾喰つたことがあるめえと思ふから、これを喰へといふに、いゝおつなことを言やあがるぜ。

蕎藏　年を取ると我慢になるものだ。論より證據は、親仁の喰ふ辨當を見ろ、米だか麥だか知れねえ飯だ。あれでも喰やあ腹ふさげだ。

角内　犬になるとも大所とやらだ、悔しけりやあ役屋敷の御出頭へ奉公して見ろ、どの部屋へ行つても錢金は降るやうだ。

丸助　おらが殿樣は飛鳥の落ちる御威勢だから、小身の出來星は寐かさうと起さうと心のまゝ。

杢平　誰だつてぐつとも言へねえ胡麻すりばかり、やれ權門だのお見舞のと、無理なことでも通るとは、やつぱりお役のお蔭だわ。

權平　小身者の分際で、ぴこ〳〵する瘦稻子、腹に身のねえ新之丞、どこぞの果にやあほえ、ゝゝゝ、づらを見るやうだ。（ト畑助へあてつけて言ふ。）

畑助　ゝゝゝ、ほえづらかかうがかくまいが、下司下郎が入らぬたは言、おらが主人はまことの武士の道を立て、見す〳〵知れた追從輕薄、そんなことはお嫌ひだ。

權平　なに嫌ひだ、こりやよく聞けよ、貴樣の主人の身元を言やあ、領分の百姓だ、その忰が稻木の養子にならうとも、何で武藝を知るものか。腰拔侍をよいと思つて、新之丞樣はまことの侍だ、外の組下衆は、侍ぢやあねえと言はぬばかりの聞けがしか。

畑助　そのやうにとが〳〵しく言はねえものだ。百姓を安く言ふは大きな僻事、士農工商といふて侍の次は百姓、その百姓にもせよ、職人、商人であらうが一心さへ極れば、劍術の大先生と言はるゝ吉岡兼房、元は紺屋の糊附職人、又百姓なれど毛谷村の六助は、今の世にも噂の高い劍術の名人、此の人達に劣るとも武藝一通り御存じなうて、稻木の家名相續ならうかこ、めつたなことを言はつしやるな、どこぞぢやあ大きな恥をかくぞえ。あゝ、これも年寄の憎まれ口だ、馬鹿々々しい。

トこれにて皆々呆れたるこなし、權平むつとして、

權平　なるほど龜の甲より年の功、謂れを聞きやあ有難い。百姓でも劍術の名人になれるといふからは、貴樣も覺えがなくちやならねえ。（ト後に立てある供槍を取つて）百姓の手並で武藝の引事いふからは覺えがあらう。幸ひこゝでお持槍を貸すから、手並を見せやれ。

畑助　いや、わしやあ雇中間故、持つ術も知らねえが、旦那の事を惡しざまに彼是と言はるゝから、知らぬで武士と言はれうかと、ほんの譬の話だわ。

權平　知らねえとは言はさねえ、高慢らしく士農工商の引別を言ふわれだ。さあ、これを持て突いて見ろ。

ト外の四人の中間無理に槍を畑助に持たせようとし、石突を附突ける、畑助困りながら後退りする。と權平わざと槍の柄を踏み折つてびつくりし、皆々もおどろく、

やあ、お持槍を土足にかけて折つたな。

皆々　えゝ。（トわざとおどろく。畑助思入あつて）

畑助　めつそうなこと言はつしやれ、手にさへ持たぬこの槍を、折つたとは無理難題、おらあ知らねえ、覺えはねえぞ。

權平　手練で槍をこの通り、うぬが折つたに違ひねえ、御主人樣への言譯に此儘ぢやあ濟まされねえ。

畑助　なに、貴樣が折つた不調法、おれへ罪をなするのぢやな。

蕎藏　いけ强情なよぼくれ親仁め、うぬがやうな太え奴は、

權平　いつそ、かうして。(ト畑助を引附けて、)

皆々　かう〳〵〳〵。

ト左右より畑助をさん〴〵に打ち、引立てようとする。と後にて「やあ、ぎやう〳〵しい、者ども控へい」といふ澁川軍十郎の聲する。五人の者は「はあゝ」と控へる。上手より澁川半纏打割羽織にて、小谷左五郎同じ裝にて、後より岩淵伴吾、山脇傳八、峰岡慶藏、森下新平、何れも侍裝、草鞋にてめいめい腰へ鞭をさし出來りて、

小谷　お供先をも憚りなく、

岩淵　かしましい喧嘩口論、

山脇　その相手は兩成敗。

峰岡
森下　殿の御前退りをらう。

ト中間等四人ハツと平伏し、畑助も蹲ひゐる。澁川は床几へかけ、四人の諸士は下手へ附く、權平思入あつて、

權平　へい〳〵申上げます。御覽の通り私どもがお供侍の折柄、これなる親仁が年かさを功に着て、物知り自慢の大樾言。

蕎藏　一つ二つ申し募り、擧句の果はこの通り。（ト折れたる槍を出して）恐れながらお槍を折つた不屆き者、それ故彼奴を御前へ引立て、御法通りに、

皆々　いたしませうと存じました。

小谷　何さま、澁川氏のお持槍へ疵をつけしは下郞が仕業、容易ならざる儀でござる。

山脇　して又親仁は、當家の下郞か、

皆々　但しは他家へ仕へるものか。

畑助　へい〳〵、下郞めは、他家の中間ではござりますれど、元よりお槍を折りました、覺えは少しもござりませぬ。

小谷　覺えないとは申されまい。そちが主人は何人なるぞ。

畑助　その主人は。

中間　稻木新之丞殿の、中間めでござります。

澁川　すりや新之丞が下郞とな。こりややい下郞よ、何故あつて武士たる者の表道具へ手をかけた。

畑助　どういたしまして、御大切なるお持槍へ、手をかけます謂れがござりませぬ。

權平　今となつて口賢くしらをきつても、おれが方にやあ大勢の眼玉が確な證據だわ。うぬが折つたと、白狀しろえ。

四人　白狀しろえ。(ト立ちかゝる。)

澁川　こりや待て、者ども。

四人　はツ。(ト平伏する、澁川畑助をとつくと見て、)

澁川　こりや親仁、おのれ何程僞るとも、十目の見るところ重罪脫れぬ不屆奴。こりや、大方われが一存とも覺えず、何者にか賴まれて、身共が武威を挫かんと、それ故槍を穢せしか、憎き匹夫が振舞かな、首打ツ放せ。

トきつとなる、畑助びつくりして震へる。小谷澁川をへだてゝ、

小谷　澁川氏暫く、彼が罪と極らばお手おろさるゝまでもなく、附添ふ拙者が成敗なさん。

澁川　然らば彼を眼の前で、貴殿が成敗いたすとや。

小谷　お言葉背くに似たれども、當社八幡の境内にて、血汐の穢れある時は、弓矢神の恐れもあれば、彼はこのまゝ繩打つて引立て申さん。

山脇　小谷氏の御計ひ、その意にあたれば、お用ひあつて後してのこと。

澁川　然らば繩打ち引立てん。誰かある縛めい。

中間　心得ました。

　　　ト畑助を下手へ引きすゑる。此時花道揚幕の内にて、「その御成敗、暫くお待ち下されませう。」と稻木新之丞の呼ぶ聲して、花道より小身の旗本の打扮にて、稻木つか〳〵と出來る。

小谷　誰かと思へば、稻木新之丞殿。

四人　待てと留めさつしやるは。

稻木　はッ、唯今物蔭より始終の樣子を窺ふところ、拙者が家來畑助と申す者、不調法なる振舞ありしと、何は兎もあれお頭へ、お詫び申さんその爲めに、馳せ附けましてござりまする。

澁川　家來の業と存ずる故、お身が引受け詫びめさるか。

稻木　如何にも、お詫び願ひ上げまする。

畑助　（思入あつて、）あなたは御主人樣。あゝ面目ない、この災難。申譯いたさうにも相手は五人下郎は一人、多勢に親仁も言ひまかされ、理も非になつてお取上げはござりませぬ。

稻木　さこそあらん、過つて改むるに憚ることなし、汝に替つて某が澁川樣へお詫びいたさん。さはさりながら存外無道のこの場の失禮、憎い下郎め。（ト畑助を叱りつけ思入あつて、）御代參の途中に於て

御持槍に凶事ありしは不吉の第一、定めし彼れを御成敗遊ばさねば、御一分も立たざる仕儀、お怒りの段恐入り奉れど、配下の某御仁情をめぐらされ、且は老耄なしたる下郎めが命乞ひ仕るは、類屬の歎きいたはしく、何卒御仁惠遊ばされ御高免下されうなれば、拙者は安心、廣大無邊の御慈悲と存じ奉ります。

澁川　其許の歎かるゝも不便とは思へども、私ならぬ御代參、役目終らぬ途中に於て、持槍を折られては、將軍家へ申譯が立つべきや。

稻木　さゝ、その儀も只管穩便の御沙汰を以てこの場の納り、元をたゞせば貴殿の御家來に不調法の儀もあれば、双方穿鑿仕らば一人ならず不便の者共。この儀あらはに申さねば、唯一人の罪に引受け、下郎に替る拙者がお詫、お聞屆け下さるやう、御近習の方々にもお執成し願ひ上げ奉りまする。

澁川　だまらつしやい新之丞、元來お身は詞を賴みに遠慮もなく、ずわら／＼と出過ぎるから、上を學ぶ下郎が粗忽、擧句の果にやあこの槍を、（ト折れたる槍を取つて、）まツこのやうに踏折つたわ。（ト稻木を打つ、これにて稻木むつとする。）何と見たか、ほつきと二つに折りました氏も素性も賤しい貴殿、百姓業は御存じでも武士の作法は御存じないか、鋤鍬の柄と違ひ折つたとばかりで事は濟むまい。大小たばさむ身を以て、大地へ頭をうなだれて、兩手を突いてあやまるは。

稻木　家來の越度とある故に。
澁川　犬つくばひにあやまるか。
稻木　下郎をいたはる仁の道。
澁川　仁も過ぐれば愚鈍の嘲り、智勇なければ柔弱卑劣、それでも武士か侍か。
稻木　すりや、如何してこの詫を。
澁川　身が面前にあやまるなら、下郎が首をぶッぱなし、趣意を立てたるその上で。
稻木　御了簡下さるか。
澁川　言はずと知れたこの恥辱、詫びたばかりで濟まうとは盲人蛇に劣りし大膽、その横道な了簡が常平生鼻の先へぶら下り、重役の某を何でもないと思はつしやるか。（ト詰寄る。稻木ぢつと怺へる思入）知らさぬ序だ、聞かつせえ、當時足利譜代の内にも諸組を預かる澁川だ、忝なくもお覺え目出度く日毎の御加增、小身者のお身達は我が舌頭で押へようと世に出さうと、心のまゝだ。それとも知らずに、先祖の威光の何のかのとぎしやばつて、重役の前をも思はず利口ばつてござるのは失敬と申すものだ、知らにやあ人に聞かつせえ。なう傳八。
山脇　いやもう、お頭の御意なさるゝは御尤も、大小をたばさんでも武士道を辨へねば刀の番人、大和

萬歳にひとしき侍。

峰岡　人おどしならまだしもなれど、鳥おどしの案山子同然。

森下　左樣な輩はあつて益なし、無うて事缺けいたさぬものさ。

岩淵　氏育ちとは言ひながら、蛙の子は蛙とやら、禮儀を知らぬ無骨者、大小が鋤鍬か手斧で丁度分相應。

稻木　お手前達まで某へ、こりや異なことの御教訓。

小谷　いや〳〵それはほんの雜談ごと、日頃篤實堅固の貴殿、我もとも〳〵澁川氏へ、

澁川　餘人の知らぬこの場の落着、槍を折つたる返報に、小身者の扶持方棒折つてくれうわ。

稻木　一分たゝざる出頭の、御意を背かば猶もつて、お憎しみの恐れあり、

小谷　立てねばならぬ槍の柄は、

澁川　つがれぬ下郎がしほくひを、

稻木　討てと御所望なさるゝも、

小谷　今一時が生死の返答。

四人　左樣ござらば殿樣には、

澁川　別當方にて、

稲木　やがて身共が、

皆々　詫の手段を、

澁川　相待ち申さう。（ト先に立ち、小谷の他澁川方の者皆々鳥居の内へはひる。）

稲木　お頭とは言ひながら、日頃の我儘十倍增して我への難題、返す〳〵も捨ておかれず、こりや所存の臍を固めねばならぬわえ。（トきつと思入。）

小谷　澁川氏が言葉のはし〴〵、何か宿意のあること〻思ひ出せばその以前、貴殿の內室お民どのを所望なしたる軍十郎、叶はぬ緣談根に持つて、それと言はねど今の難題、仔細と申すは、これ。

ト四邊へこなしあつて、稲木へ囁く。

稲木　すりや、それ故に澁川が、役儀を笠に身共へ難題。

小谷　總て役柄、何事も賄賂をとつて取扱ひ、配下をなやます吝嗇者、それを知りつ〻逆らふは、石を抱いて淵に臨む道理。短慮功なし、急くところではござらぬぞ。

稲木　その御教訓忝なし、やがて詫する手段もあれば。

小谷　それ聞いて身も安堵。然らば後刻、稲木氏。

稻木　小谷殿。

小谷　篤と御思案なされてよからう。（ト鳥居の内へはひる。兩人殘りて）

畑助　殿樣へひよんな御難儀かけましたこの親仁、長生きするは恥多しと、生き甲斐もない私の命、取ると言はるゝをお庇ひなさるゝお心を、思へば〳〵切らるゝ辛さ、何で死ぬるも皆約束、下郎を切つて侍の、意地を立てゝ下さりませ。

稻木　輕からぬ人の命、元の起りはそちにもせよ、譜代の家來といふではなし、今日一日雇ひし其方をどうして討たれうぞ、思案のほどは身共が胸中。

畑助　そりや御未練と申すもの、一日でも主家來、今日につゞまる禍も皆前生の定りごと、虎狼に見込まれし命は果敢ない白髮の老爺、御不承ならんが討つて養父の御家名を、大切になさらねば、又何事か出來るは必定、御介錯下さらばあなたのお腰物を借受けて。

ト稻木の差添へ手をかけるを留めて、

稻木　こりや早まるまい。

畑助　早まりはいたさねども、あなたの素性は農家のお生れ、それを蔑する諸士中間小者に至るまで、口善惡なく申せしを、聞けば聞腹互ひに爭ふ唯中へ、喧嘩仕かけに槍を出し、時の機でほつきと

折り、それを越度にあなたまで御家にかゝはる御難儀と、知りつゝ生きてゐられうか。せめて腹なと切つたなら後の世まで名を殘し、あなたの恥辱もござりませぬ、それぢやによつて。

ト又差添へ手をかけるを、稻木押へて、

稻木　すりやその方が死をもつて、我を思ひ身を思ひ覺悟極めし汝が命、武士も及ばぬ健氣な魂、然ある上は辭退いたさず、汝が首級を申受ける。

畑助　すりや御得心あつて、私の首を討つて下さりますか。

稻木　そちが諫めは我爲めには、弓矢正八幡の御宣託、汝を庇ふその時には、稻木の家に仇なす澁川、我も養家のことなれば、假令家名を捨てるとも武士の意地、何を言ふにも養子の悲しさ、家に拘はる事あらば、養父へ對して不孝の罪、そちも覺悟の上からは、未練に變ずる性根はあるまい、しかと申し渡せしぞ。

畑助　あゝ、御若年には珍らしい、御念の入つたるそのお尋ね、今死するとも心殘りはござりませねど、申し殘しておきたいは、たつた一人の娘が事。

稻木　命を貰ふ上からは、我が身命を擲つても、末々まで力となり、この身に引受け恩義を惠まん。

畑助　えゝ有難い情のお言葉、元私は相模國厚木村の百姓、つゞく不幸に八歳になる實の娘を江戸吉

廓なる中萬字屋へ遊女奉公、今では立派な君傾城玉菊とやら申します。忘れもせぬ三年後、廓へ尋ねて參りましたら、互ひに涙の物語り、どのやうにも世話する故江戸へ世帯をさつしやれと、勤めする氣に珍らしい孝行な心ばえ、それに引替へ邪慳にも八歳の年に廓へ賣つた娘の玉菊、今更かゝる面目なく、親と申すも出世の邪魔と、私が方から娘へ義理立て、死んだ婆アが菩提の爲めと廻國修行に生別れ、月日も經つて三年目、達者で戻りましたから、三川町の三五郎といふ人宿頼み中間奉公、どうした御縁かあなたへ雇はれ、今日につゞまるこの世の別れ、娘にお逢ひなされたら、死んだことは必ず沙汰なし、後はあなたのお情で、娘が身の末一通りお頼み申すはそればかり、これで心は殘りませぬ。

稻木　現在娘がありながら、親の最期を知らずして、浮き川竹の苦界の勤め、我も武士たる身の勤め、重役の我儘をぢつとこらゆる心の内、切らるゝそちより某が、身を切りきざむ心の苦しさ、一日なりとも主從の緣は前世の敵同志。

畑助　人間僅五十年、六十の坂へ手をかけて樂しみもないこの親仁、娘がことを言ひおくからは、この文月を一期として、未來を急ぐ老の旅。

稻木　死出の山路を迎へ火の、新盆かけて西方の、

畑助　彌陀の淨土へ行く空の、
稻木　定めなき世やしら露の、
畑助　その玉の緒か玉菊に、
稻木　心殘さず成佛せよ。
畑助　覺悟はとうから、（ト合掌して眼を閉ぢる。稻木刀を拔いて、）
稻木　南無阿彌陀佛。

ト首を打落し、首を取上げ愁ひのこなしあつて、下手の流れにて洗ひ、袖を切放つて首を包み身繕ひして上の方へ行きかける。と、上手より以前の人々皆出來る。

山脇　稻木氏、出頭への返答、
あなたは澁川軍十郎樣。
峰岡　時刻が過ぐるに、
皆々　今以て。
稻木　いかにも、別當方までお詫の次第、罷り越さんと存ぜしに、
澁川　言譯なさに、それなりか。

稻木　御所望なさるゝ下郎が首級、お氣にかなひましたか。（ト首を出すを權平窺ひゐて）
權平　こりやこれ贋首。（ト首へ手をかけるを稻木引廻して引附け）
稻木　善惡なき下郎が口の端に、かゝる大事を仕出かす不屆き、相手のその方。
權平　何を。（ト振ほどく、稻木刀を拔きかけるを小谷へだてゝ）
小谷　あつぱれ貴殿の御計らひ、澁川殿の趣意も相立ち、これで遺恨もこの座ぎり、首級はこのまゝ鈴ケ森常念佛の傍へ、奴の首塚追善供養、末世に殘る義の譽れ。
澁川　それも無益の下郎が屍、浪打際へ取捨てゝ犬や烏の餌食が相應。
山脇　稻木殿の手の內で、切られた下郎が首ならば、鋸引きかずたく〳〵に。
峰岡　その手の內を我々が、
森下　拜見いたすも時の一興。
岩淵　こりや一入のお慰み。
澁川　いかさま、稻木氏が御手練を試すは丁度よい折柄、元來お身は農家の出生、さすれば相手になるべきものは、幸ひこれなる下郎權平、彼れを相手に武藝の試み、手始めなれば立合つて見せさつせえ。

稲木　武藝未熟の某を出頭の御所望、この期に及んで辭退もならず、いかにも相手になり申さん。

澁川　こりや權平。

權平　はッ。

澁川　この方が面前にて新之丞殿と劍法の立合許す上からは、遠慮に及ばず打つて〳〵打ちすゆれば汝が手柄、侍分に取立てくれうわ。

權平　すりや、下郎めへ立合の儀仰せ付けられ、大慶至極に存じまする。

岩淵　君の御諚、怯めず臆せず、

皆々　用意いたしやれ。

權平　畏まつてござります。（ト思入あつて、稲木の前へ立ちはだかり）稲木の御養子、いやさ、戀聟の新之丞樣、おらが旦那の御意なれば、まづ花聟の水祝ひ、奴が手料理お望みなら、拳も堅い炒豆腐茶飯餡かけ、ぴり〳〵と利いた芥子より、ふつかけのりかけ乘出して、手柄のほどを見せますぞや。

稲木　元より非力の新之丞、恥辱を取らば某が、家を投出す分のこと。

權平　その一言を聞くからは、腕に覺えの鐵拳、あたら花聟散らさうと、この馬柄杓の水祝ひ、ちよつとかうして、（ト馬柄杓にて打つてかゝるを、立廻つてぐつと引附け）

稻木　下郎のそちを相手になすも、身共が家來の追善供養。

權平　何を。

ト立つてかゝる眉間を打ちすゑ、眼のくらむ所を裾を拂ひ、扇にてきびしく打ちすゑる。これを見て澁川始め四人の侍等きつとなつて鞭にて打つてかゝるを、立廻つてきつと留め、

稻木　こりや各々には、何となさるゝ。

山脇　やあ、生兵法の分として、

森下　小ざかしい今の振舞。

岩淵　憎さも憎し我々が、

峰岡　相手になるは不承なれど、あまり卑怯な、

四人　其許故。

稻木　武士の情にお立合下さるか。

澁川　おゝさ、下郎を相手によいと心得、手柄自慢しめさるは傍痛い。まこと覺えの手の内なら、見事相手をあしらふか、及ばぬことなら詫びさつせえ。

稻木　父が教への神影流、少しばかりの太刀筋は、見やう見眞似の新之丞。

澁川　その高言は後でのこと。かた〴〵それ。

四人　はッ。

ト四人かゝり立廻りあつて、トゞ稲木四人を一度に遠當にする、澁川むつとして直に鞭にて打つてかかるを、ちよつとあしらひ、稲木澁川を打たうとするを小谷分け入りて、

小谷　勝負は後して、先づ〳〵御兩所。

稲木　はッ。（ト控へるを、その隙に澁川鞭にて稲木をしたゝかに打つ。）

澁川　神影流とお言やれども、未熟の手の内、何と骨身にこたへたか。

稲木　こりや又あんまり。

小谷　これ。

トへだてる。四人ウムと立ちかゝり、澁川も刀へ手をかけおこつく。稲木身を開き、小谷澁川を宥める双方よろしくきつと見得。三味線入り大拍子にて、

ひやうし幕

二幕目

仲之町近江屋の場

〔役名――稻木新之丞、稻木治左衞門、澁川軍十郎、小谷佐五郎、岩淵伴吾、峰岡慶藏、山脇傳八、森下新平、近江屋喜兵衞、近江屋半四郎、櫻川善孝、中萬字屋玉菊、新造玉萩、玉蔦、玉葛等。〕

(近江屋の場)――本舞臺四間通し常足の二重屋體、正面は襖、下手青簾、近江屋と記せし柿色の暖簾上の方黑塀、下の方に半格子、近江屋と記せし掛行燈、用水桶、屋體に朝顏附の燭臺を灯し、喜兵衞亭主の裝にて硯箱をおき手紙を書いてをり、下女お花、お由の兩人煙草盆を拭いてゐる。總て仲之町近江屋の體。賑やかなる唄にて幕明く。

喜兵　お花や、奧の客人のお燗を氣を附けなよ。

お花　はい〳〵、畏まりました。

喜兵　おッつけお屋敷の旦那方がいらつしやるから、煙草盆の火をよくいけておきなよ。

お由　はい、もうちやんとよろしうございます。

ト此時花道より、近江屋の悴半四郎羽織着流しにて出來りて、

半四　お父さん、唯今歸りました。

お花　若旦那、お歸りなさいまし。

喜兵　おゝ歸つたか、御苦勞々々、さうして旦那方はいらつしやるか。

半四　藏前で大きに手間をとりまして、足利のお屋敷まで行かうと思ひ、兩國の藤岡で聞きましたら、お組頭の澁川樣にお相役樣がお一方、稻木樣に他にお四人樣が今お船で堀へいらつしやいましたと、お徳さんに聞きましたから、直に歸りました。

喜兵　そりやあ御苦勞であつた、そんなら喜助を堀へお迎ひにやらう。喜助を呼びな。

お由　はいはい。喜助どんどん。

喜助　はいはい。（ト奥より若い者の裝にて出來り）若旦那お歸りなさいましたか、大そうお早うございました。

半四　これ喜助公や、足利樣の旦那方が、堀までいらつしやるから、貴樣お迎ひに行つて下せえ。

喜助　はいはい畏まりました。そんなら私やあ堀へ行くから、お花どん、奥のお座敷を氣を附けておくれ。

お花　あいあい、合點ぢやわいな。（ト箱提灯を出して渡す。）

喜助　どれ、お迎ひに行つてまゐりませう。

ト喜助は花道へ、お花は奥へはひる。

喜兵　扨、それでは今夜は忙しいわえ、澁川樣、稻木樣御連中の大一座。これお竹、番公にお肴の用意

をさせて、吸物の膳椀なんぞも出しておきな。

お由　はい〳〵、畏まりました。(ト奥へはひる。)

半四　何にしろ困つたことは、澁川様も玉菊さん、稲木様も玉菊さん、だから、御一座になると困るだやありませんか。

喜兵　おれもさつきから考へてゐたが、こりや、どう裁きをつけたらばよからうしらん。

トこの時奥より、櫻川善孝男藝者の裝にて出て來て、

善孝　その思案貸してやらう。(ト眞中へ出る。)

喜兵　誰だと思つたら櫻川か、何を馬鹿をいふのだ。

半四　さうして木場の隱居だらうが、お前の聲色もちと黴が生えたね。

善孝　いや黴が生えたは嬉しい、實に黴が生えました。

半四　ごみくた八百屋へはひつちやゐないかえ。

善孝　嬉しい〳〵。いやねつから嬉しくない。まあそんなことを言はないで、私の思案をお借りなせえ、

喜兵　どうでお前の思案なら、ろくな思案ではあるまい。

善孝　さう安くなさいますな。

半四　然し人の死ぬ時、言ふ事がいゝと言ひますからいゝかも知れませぬ。

喜兵　さうさ、櫻川も長いことはないから、

善孝　又そんなことを、七十三までは大丈夫さ。

半四　お前の七十三も聞き飽きた。

ト花道より、武藏屋の箱提灯を持ちたる若い者先に立ち、お三、品川藝者の裝にて出來りて、

お三　へい、旦那さん、この間は。

喜兵　おや品川のお三ばうか、よく來なすつた、さあ上んな。

半四　まことに久しぶりだ、さあお上りな。

お三　はい。有難う。もし、お前よいから先へお歸り。

若者　はい、左樣ならお賴み申します。（ト若い者下手へはひる。）

善孝　お三さん、この間は。

お三　おや善孝さん、お前生きておいでか。

善孝　何だな、來い〳〵早々生きてゐるかの何のと、七十三までは大丈夫だ。さうしてお前お客で來たのか。

お三　いゝえ、ちつとお前に上げたいものがあつて。
善孝　そりやあお安い御用だ、何だか知らねえが嬉しい嬉しい。
お三　お前ほんたうに嬉しいかえ。
善孝　嬉しいな。（ト嬉しき思入、お三懐より紙包を出し、）
お三　これは心ばかりでありますが、お供へなすつて下さいまし。
善孝　こりやあ何だ。
お三　香奠でありますよ。
善孝　鶴龜々々。（ト身體を慄はせて、）何でこんなものを持つて來たのだ。
お三　お前が昨夜頓死をしなすつたと、小三さんが觸れて歩いた故、それでわざ〳〵品川からお悔みに來ましたのさ、嘸お力落しでありませうね。
善孝　なに、おらあ七十三までは、死にやあしねえといふに。
喜兵　これは〳〵、（お三に、）遠方の所を、よく來てくんなすつた。
半四　嘸佛も悦びませう。
善孝　これさ若旦那、お前さんまで同じやうに、何をおつしやるのだ。

ト奥より下女お浪、土瓶と茶碗を盆に載せ出來りて、

お浪　はい、お茶をお上りなさりませ。

お三　お構ひなさいますな。

半四　これさ、饅頭を早く上げないか。

お浪　畏まりました、ほゝゝゝ。（ト奥へはひる。）

お三　ほんに死んだとはいふものゝ、そこらに善孝さんがゐるやうでありますね。

善孝　ゐなくつてどうするものだ、七十三までは達者でゐるのだ。

半四　（善孝の言ふに構はず）不斷七十三まで生きる〳〵と言つてゐたが、壽命づくばかりは爭はれないものだ。

お三　嘸お上さんが、お力落しでござりませうね、

喜兵　夫婦の情合といふものは別なものだ、死んだ櫻川より、お上さんの方が青くなつた。

善孝　青くなつたは嬉しいな。

お三　うるしい〳〵といふせりふも、もう形見になりましたね。

善孝　これさ、常談もいゝ加減にしねえか、おらあぴん〳〵してゐるよ。

半四　お前はぴん／＼してゐる積りでも、疾うに死んだのだ。

善孝　何だかそんな事を言はれると、をかしな心持になる。（ト立上り、）大丈夫、幽靈でない證據は足がある。（ト足を出して見せる。）

お三　おや、今時の幽靈はしやれて足がありますよ。然し足がなくつては、死出の三途の川が越されますまいね。

善孝　どう言へばかういふと、こりやあ何でも作者があるに違ひねえ。

お浪（奥より出來り、）もし善孝さん、奥のお客様が禿頭に生きてゐるならちよつと來いと、おつしやつてゞございます。

善孝　生きてゐるどころか、ぴん／＼してゐる。お浪どん、何ぞ御用か。

お浪　お前さんに、煙草入を上げるとおつしやつてゞございます。

善孝　なに、七十三まで死にやあしねえ。

お浪　さあ、お三さんも御一緒に

お三　左樣なら旦那樣。

喜兵　後にゆつくり話しやせう。

善孝　さ、おれと一緒に。（ト聲色のやうに言ふ。）
お三　おや、冥土へかえ。
善孝　うるせえ、さあ來なせえ。

賑やかなる鳴物になり、善孝、お三奥へはひる。花道より箱提灯を持ちし若い者先に立ち、澁川軍八郎、小谷左五郎を始め岩淵作吾、山脇傳八、峰岡慶藏、森下新平、その後より稻木新之丞何れも侍裝にて、三人の草履取りを從へ出來る。

若者　いらつしやいました。
喜兵　これは〳〵澁川樣、あなた樣何れも樣、稻木樣、ようゐらつしやいました。
半四　さあ〳〵お上り遊ばしませ。
澁川　さ、小谷氏。
小谷　まづ〳〵。
澁川　稻木氏、おの〳〵方。
稻木　まづ〳〵お先へ。
澁川　然らば御免下され。

若者　さあ、あなた方は此方へ。

ト皆々上へ上り、澁川上手に皆々よろしく座に着く、半四郎煙草盆を出して、

半四　先刻お屋敷へ、お迎ひに上りませうと存じましたれば、もはやお船でいらつしやりました御樣子と、藤岡にて承りまして、延引の段恐入りましてござります。

喜兵　澁川樣には、毎度有難い仕合せにござります。(ト小谷に向ひ、)あなた樣には、恐れながら始めましてお目通り仕ります。即ち近江屋喜兵衞、又これにをりまするは悴にござります。何卒お目かけられて下さりませ。

澁川　このお方は身共が同役、小谷左五郎殿ぢや、小谷氏これが當家の主人でござる。近附におなり下されい。

小谷　これは御亭主でござるか、手前甚だ無骨者でござる。以來別懇に頼みまするぞ。

喜兵　恐れいりましたる御意、有難う存じまする。(ト四人に向ひ)何れも樣方、今晩はようこそ、毎度有難う存じまする。(ト稻木に向ひ)扨稻木樣、まことにお久しぶり、御機嫌よろしう、よういらつしやりました。

稻木　その後は久々打絶え申した。皆々變ることもなく重疊々々。今晩は澁川氏のお供で、思ひがけな

く鬱散をいたすて。

喜兵　まことに、お珍らしい御一座でござりまする。

半四　これ、お盃を、吸物を持つて來いよ。

女中　はい〳〵、畏まりました。

ト奥より女中盃洗吸物を持ち出る。喜兵衛、半四郎めい〳〵へ据ゑる、若い者硯蓋、銚子、鉢肴を持ち出る、喜兵衛盃を澁川の前へ出す、澁川盃を取り半四郎酌をし、皆々よろしく酒宴になる。

岩淵　ときに亭主、澁川氏の相方、小谷氏の相方は何故參らぬ。

山脇　御兩所ばかりではござらぬ、なう何れも。

峰岡　左樣々々、我々どもは格別。

森下　まだ稻木氏の相方もまるらぬ。

四人　呼びにやらつせえ〳〵。

喜兵　へい〳〵、外樣はお後から、玉菊さん。

半四　(向ふを見て)もし、向うから玉菊さんが、

皆々　お見えなされまするぞえ。

ト傾城出の鳴物になり、花道より菊の紋附の着附の若い者、玉菊の紋の附きし大箱の提灯を持ち出で、玉菊洗髪、傾城の打扮にて、少し酒に醉つたる思入、しげみ、しのぶ禿にて煙草盆煙管を持ちて左右に附き、菊の紋附の着附の若い者長柄の傘をさしかけ、玉蔦、玉葛振袖新造にて、玉萩番頭新造にて、おさき遣手の装にて皆々從ひ出で來る。

喜兵　もし花魁、見ますれば御機嫌の御樣子。

半四　最前から澁川樣の。

皆々　お待兼でござりまする

玉菊　何おやえ、澁川さんが私を待つておいでなさんすとえ。そりやお嬉しうござんすが、今聞けば酒に醉つたと言はしやんすが、なるほど酒は呑んだけれど、これ見なさんせ醉やせぬぞえ。私や醉ひもせぬもの、ほゝゝゝ、そんな弱い玉菊ぢやありんせんよ。（トよろ〳〵して禿の肩へ縋る。）

禿　もうし花魁、あぶないぞえ。

玉萩　ほんに、いつに變らぬ花魁の酒機嫌。

玉蔦　仲の町の兩側から、

玉葛　思ひざしの玉の盃。

さき　底ぬけ上戸の玉菊さん。

玉菊　えゝおいて下さんせ、私や醉やせぬ〱、醉やせぬぞえ。醉はぬによつて、子供來や。

兩人　あい――。（ト皆々舞臺へ來る、玉菊喜兵衞を見て、）

玉菊　御亭主さん、お許しなんしえ。

ト稻木を見て思入あつてつか〱と上へ上る。玉荻手を取眞中へ坐らせる、附て來りし皆々後へ住ふ。

澁川　こりや玉菊、最前から待兼ねをつた。小谷氏、かれめが身共の相方玉菊でござる。

小谷　すりや、この君が噂ある玉菊でござるか。いかさま名に響いたる遊君ほどあつて、ハテあでやかなもの、それを手折つて、手活の花と眺めらるゝ澁川殿、お羨しう存ずる。（ト澁川を扇にてあふぐ。）

澁川　小谷氏、その樣におなぶりなされるな、脇の下から玉のやうな汗が出ます、はゝゝゝゝ。

岩淵　小谷氏の仰せの如く、當時吉原で、一と言つて二と下らぬ萬字屋の玉菊、

山脇　昔の高尾、薄雲、小紫にもをさ〱劣らぬ手取り者。

峰岡　その張の強い傾城を、自由自在になさる澁川殿。

森下　承はれば、近々根引なさるゝとのこと、さうなる時は、まことに玉菊の玉の輿、

四人　こゝな、あやかり者め〱。

ト此中玉菊煙管を枕に居睡りゐる。おさき玉菊の袖を引いて、

さき　もし／＼、花魁、澁川樣始め皆樣が、最前からいろ／＼とおつしやるに、御挨拶なさんせいな。

玉菊　おさきどん、堪忍して下さんせ。澁川さん、皆さんようおいでなさんしたな。（ト稻木を見て、）どなたかと思うたれば稻木さん、御一座でござんすか、よう來て下さんしたな。

ト嬉しき思入、稻木これとおさへ思入あつて、

稻木　はゝゝゝ、玉菊には例の酒機嫌ぢやな。これ／＼、あれに初めての御方もおいでなされば、めつたなことを言ふまいぞ、お酒といふものは、心を狂はすものぢやなあ。（ト心遣ひの思入。）

玉菊　それほど私が醉つたかいな、お前が醉つたと言はしやんすことなら、まあ醉つたにしやんせう。これ、誰ぞ水を一つおくんなんしえ。

下女　はい／＼畏りました。

ト下女奧より、錫の水呑へ水を汲み持つて來る、玉蔦取つて玉菊へ呑ませる。

澁川　こりや玉菊、醉つてか醉はぬか知らぬが、身共が言ふことよく聞きやれ、此間より度々口說けどとかく蛇の生殺し、小谷氏の前では面目ないが、來る度毎に今度は／＼と、際どい所で一寸脫れ心任せとしておくも、ぞつこん惚れたおぬし故、今宵は小谷氏も同道のことなり、是非とも色よ

い返事を聞かしやれ。どうぢや〳〵。（ト思入、玉菊も思入あつて）

玉菊　澁川さん、その返事なら厭でござんす。

澁川　何と申す。

玉菊　私が心にすまぬことならそこが生醉本性違はず、賤しいこの身を兎や角と親切に言つて下さんすを、情なう言ふも氣の毒故、聞き流してゐやんしたが、今宵新之丞さんと御一座で、返事をせいと言はしやんすなら、私や今からふツつりと、お前の座敷へは出られぬほどに、さう思うて下さんせ。

澁川　そりや又何故。

玉菊　私や新之丞さんと、疾うから言交してゐる故に、お前には逢はれぬわいな。

トきつと言ふ。澁川びつくりして、

澁川　やあ〳〵。（ト呆れる、稻木思入あつて）

稻木　これ玉菊、めつたな事を。

玉菊　はて、言つても大事ござんせぬわいな。

新造　もし花魁、それでは。（ト思入）

玉菊　お前方まで同じやうに、捨てゝおいたがよいわいな。
さき　ほんに困つた生醉さん、皆さんの手前も、お氣の毒でござりまする。
　　ト新造等喜兵衛半四郎と顔見合せ、思入。
小谷　澁川氏の、最前の言葉とは、打つて替つて。なう何れも。
四人　左樣々々、風が替つたやうでござる。
澁川　（むつとして、）こりや玉菊何と申す、これにをられる新之丞殿と、疾より馴染を重ねたと申すか。
玉菊　あい、秋葉さんを誓ひにかけ、何の嘘を言はうぞいな。
澁川　あの、いよ〳〵言交したか。
玉菊　おゝ、くど。
　　ト煙管にて澁川の額を突く、澁川ムゝ、と立ちかゝるを新造留める。おさき出て、
さき　もし花魁、最前から例の酒機嫌ぢやと思うてゐたれば、新之丞樣と深い仲ぢやなどゝ、そりや樂しみなうては勤まらぬ苦界なれど、澁川樣へそんなこと言つて、濟まぬぞえ。
玉菊　濟むも濟まぬも私が心、氣儘にさせて下さんせいな。
さき　ほんに、呆れたものぢやわいな。（ト連の四人稻木へ詰めかけて、）

岩淵　これ稻木氏、唯今始めて承はり、まことに驚き入つてござる。
山脇　日頃我々どもへ唐大和の引事にて、敎訓めされたお手前が、
峰岡　現在玉菊が口から、新之丞殿と言交したと申すが、
森下　一圓合點がまゐらぬが、しかとこれなる玉菊がところへ、
四人　通ひ詰めたと言はつしやるか。
稻木　これまで深く包みたれど、斯く現はれし上は、隱すに及ばず。いかにも、かれめと言交してござる。
四人　すりや、堅ざうと言はれる貴殿が、
稻木　面目次第もござらぬ。（ト扇を開き面を隱す。）
岩淵　いや呆れたものだ。いかに口は調法なものなればとて、
山脇　今日も船中で、手前吉原へは兩三度參つたなれど、
峰岡　篤と勝手は知らぬなど〻、僞る表裏の二股侍、
森下　武士の口から自慢らしく、女郎と言交してゐるとは、
四人　いや、お手柄なことでござる。

稻木　これは各の言葉とも覺えず、身共ぢやと申して、木石ではござるまいし、非番の徒然折節の廓通ひ、お咎めにも及ぶまいかと存じまする。

小谷　いかさま、この人にしてこの病ひありと、日頃物堅き稻木氏、廓の女子に馴染しなどゝは、上邊に見えぬ人心、澁川氏の心中も何とやら、はて、思ひよらざる事どもぢやなあ。

澁川　これ新之丞殿、いやさ、玉菊の情人殿、かく滿座の中で、玉菊と言交したと、よくぞ立派に言はれた。澁川軍十郎驚き入つた、あつぱれ〱。あやかる爲めに盃をさしませう。（ト大平の蓋を取つて、）さあ、これで一つ呑まッせえ。

稻木　これは忝うは存じますが、手前下戸でござりますれば、斯樣な盃では。

澁川　呑まれぬと言はつしやるか。いやさ、厭だと言ふのか、身共が盃は氣に入らぬか、大方穢れでもすると思ふのであらう。

稻木　いや、まつたく左樣な。

澁川　いや、さうだ〱、こりや止しにしよう。身共が盃を受けぬからは、今日から貴殿とは附合ぬから、さう心得さつせえ。

ト焦れてきつと言ふ。小谷宥めて、

小谷　あいや澁川殿お待ちなされ。これは新之丞殿、如何いたしたものでござる、折角澁川殿のお盃、辭退は失禮、一つならずば半分、な、それ、少しなりとも、頂戴めさるがようござらうがや。

ト澁川の持つたる平の蓋を取り、稻木へ吞みこませ前へおく、喜兵衛思入あつて、

喜兵　小谷樣の御意の通り、澁川樣のお言葉でござりますれば、半杯召上りませ、私がお酌をいたしませう。（ト銚子を取上げる。）

岩淵　いや〳〵、その酌は身共がいたす。

ト無理に銚子を取る、稻木平の蓋をとつて、

稻木　然らば半杯下されい。（ト言ふを岩淵押へてゐてつぐ。）これはいかなこと、どうして拙者が。

山脇　いや〳〵、常はならずとも、是非とも一つ、

四人　お過しなさい〳〵。

稻木　各のお勸め、是非に及ばぬ。

ト稻木吞まうとするを玉菊留めて、

玉菊　あゝ、もし、常から下戶の稻木さん、吞めぬといふを意地惡な、後引上戶の玉菊が、この盃は助けるわいな。（ト取つてぐつと吞む。）

四人　やあ〳〵、見事々々。

澁川　(むつとして、)やあ玉菊、よく情人を庇つたな、出來す出來す。然し情人があらうが間夫があらうが、千萬人に肌を觸れるは遊女の習ひ、一旦身共が心をかけた上からは、刀の手前武士の意地、今宵中に身請をなすぞ。

玉菊　こりやをかしい。假令黄金の山を積み、身請すると言はしやんしても、外のお方は兎も角も、お前の方へは行きやんせぬ。

澁川　そりや又何故。

玉菊　さあ、お前が小身のお方ならばよけれども、新之丞さんよりお前が立派なお方故、萬字屋の玉菊が、襟についたと廓中の人に言はれては、勤めの意氣地が立ちやんせぬ。まあ、さう思うて下さんせいな。

さき　もし〳〵花魁、名を取らうより德の世の中、身請されるは主人の爲めなりお前さんの爲め、新之丞樣のことは思ひ切り、澁川樣のお心に隨ふのが、當世でござりまするぞえ。

澁川　おさきが言ふ通り、假令厭と言はうとも、そちが身體は抱への身なれば、主人彌兵衛が得心の上は、身請されずばなるまいが。

小谷　殊更そちが主人萬字屋彌兵衞は、澁川氏の御實父城賀殿の茶道の弟子、今廓中に並ぶ者なく、娼家といへども風雅の道、御大身の前へ出るも、皆城賀殿の恩ならずや。その大恩ある師匠の御子息、よもや違背はなるまいが。
玉菊　いえ〳〵、假令主人が得心でも、私が得心せぬからは、主人の儘にもなりやんすまい。氣を揉ましやんすは、氣の毒ぢやわいな。
さき　もし玉菊さん、さうお前に我儘を言はれて、默つてはゐられませぬ。是非得心させねば、二階を預かる、私が役目が立ちませぬわいな。
澁川　おさき出來した、もうよい〳〵。玉菊に言ふのは馬の耳に風、それより直々萬字屋へ行つて、何かの談合。其方はこの由を、主人彌兵衞に言ひ聞かせい。
さき　畏まりましてござります。
澁川　最前より小谷氏には何かと失禮、萬字屋へ參り、相方をお見立の上、御馳走申すでござらう。
小谷　御心配必ず御無用。然らばこれより、
四人　我々どもゝ御同伴。
喜兵　それ、伜、御案內いたせ。

澁川　いや、その履物をなほすものは、此方にある。こりや稲木氏、身共を始め各方の、履物をなほさつせえ。

牟四　畏りました。澁川様の御履物。

稲木　すりや、拙者めに。

澁川　きり／＼となほさつせえ。（トきつと言ふ。）

玉菊　あ、もし。（ト思入。稲木これを目で押へて、）

稲木　畏つてござります。（ト思入あつて、皆々の履物をなほす。）

岩淵　何れも御覧なされ。當時廓で名の高い、

山脇　萬字屋の玉菊の情人が、

峰岡　いかに女に惚れられたればとて、

森下　大小たばさみ、履物をなほすとは、

四人　みじめなことではござらぬか。

澁川　いざ、小谷氏、

小谷　先づ其許から、

瀧川　御免下され。（ト履物を穿く。）

小谷　これは憚り。

ト稲木へ會釋して穿き、四人も下へおりる。若い者提灯を持つて先へ立つ。

瀧川　こりや若い者、この提灯も、新之丞殿に持たせさつしやれ。

若者　あの、この提灯を。

半四　それでは失禮、私が持ちまして。

稲木　あいや、やはり拙者が。（ト提灯を持つ。）

四人　いよ、提灯持樣々々。

ト玉菊はこれを見て俯向く。新造皆々氣の毒なる思入。

瀧川　やい玉菊、これから彌兵衞にかけ合つて、今夜中に身請の相談、その時ほえづらかはくなよ。

玉菊　身請々々とあたうるさい、小田原相談しなさんせいな。

瀧川　うぬ、その口。（ト立ちかゝる。）

小谷　はて、野暮は禁物、このまゝに。

瀧川　それだと言つて。

稻木　あいや、先づお越しなされませう。

　ト思入にて辭儀をする。澁川見て、

澁川　むゝはゝゝゝゝ。

　ト嘲笑ひ玉菊と顏見合せ、皆々氣味合の見得。唄になり、稻木先に皆々におさき、半四郎附いて上手へはひろ。下女二人は奧へはひろ。玉菊、喜兵衞等殘り見送りゐて、

玉菊　もし、御亭主さん。

喜兵　花魁先刻からお前さんの心の内、推量申してをります。

玉菊　日頃からうろさうてならぬけれど、怺へてをつた澁川づら、愛想盡しを言うたれば、私への面當に新之丞さんに無理難題、どうも濟まぬわいなく。

玉荻　道理でござんす、いかに言ひたいがいぢやとて、寄つてかゝつて憎らしい。

玉蔦　呑めぬといふを知りながら、大きな物で酒を呑めの。

玉葛　まだその上に草履までなほさせるを、傍で見てゐる私等さへ、

三人　笑止なことでござんしたわいな。

玉菊　これから今日の意趣返しに、二階中の見るところで、恥をかゝしてやりやんせう。

玉菊　お前さんの腹の立つは、尤もではござんすが、内證へ聞えては惡うござんせうから、よい加減にしておきなさんせいな。

喜兵　もし花魁、お氣の揉める所へ、あまり氣のないやうでござりますが、又一つお願ひがございます。

玉菊　願ひの何のと改まつて、何でありんすえ。

喜兵　外のことぢやありませんが、新之丞樣の御養父、治左衛門樣とおつしやるお方が、お前さんに内内に逢はせてくれろとおつしやつて、宵から二階においでゝござります。ちよつとお目におかゝんなすつて下さりませぬか。

玉菊　ぬしさんの親御さんが、何で私に。

喜兵　御用は何か存じませぬが、密々で話したいことがある、是非逢はせてくれろとの、お賴みでござります。

玉菊　何でもこれには、深い樣子が。

喜兵　決してお案じなさいますな、至極柔らかな、結構さうなお方でござります。

玉菊　どうでも、お目にかゝらにや惡いのかいな。

玉菸　旦那さんがあのやうに、頼ましやんすことなれば。

玉蔦　お氣に入らずと、もし、花魁。

喜兵　お手間はとらせませぬから、ちよつと二階へ。

玉菊　さう言はしやんすことならば。

喜兵　私と御一緒に。

玉菊　もしや、この身の。

喜兵　え、

玉菊　さあ、參りませう。

ト皆々奥へはひる。ところにて道具廻る。

（近江屋表二階の場）——本舞臺平舞臺にて正面は千本格子の手摺、軒に團子提灯、葭簀を掛けあり、上下は襖、下の方に上り口の手摺、總て表二階の體。燭臺を照しある。禿のしげみ、しのぶ手習双紙を見てゐる。

しげ　しのぶどん見なさんせ、櫻の花が段々散つてしまふぞえ。

しの　花が散つて押付になると、櫻んぼゝができるぞえ。

しげ　櫻んぼうを貰つて、雛樣を拵へると面白いぞえ。

ト上手より玉菊先に玉萩、玉蔦、玉葛出來り、

玉蔦　これさ、二人ながら表ばかり見てゐずに、花魁を氣に附けなんしよ。

兩人　はあい――。

ト此時下手より喜兵衛先に、稻木治左衛門更けし侍裝にて出來りて、

喜兵　さあ旦那樣、こちらへいらつしやりませ。

治左　これはどなたも、許さつしやれ。

ト治左衛門上手へ住ふ、玉葛煙草盆を出す。

喜兵　もし花魁、彼方樣が稻木治左衛門樣、卽ち新之丞の親御樣でござります。

玉菊　そんならあなた樣が新之丞樣のお父樣でござんすか、始めてお目にかゝりました、不束な私お
目かけられて下さりませえ。

治左　これは玉菊どのでござるか、聞きしにまさる良い器量、身共は治左衛門といふ無骨者、以後は別
懇に賴みまする。

玉荻　新之丞さんの親御さんとて、お情も深さうな。

玉蔦　物腰恰好風俗まで、

玉蔦　ほんに、粋なお言葉つき。

三人　ようおいでなさんしたなあ。

治左　どれもどれもよく優しく言うてくれた。忝ない〱。いつもながら悴めが來て、厄介になるであらう。（ト懐中より紙入を出し小判五兩を紙に包み、）これは亭主、少いが皆の者に、土産にやつて下され。（ト喜兵衞に渡す。）

喜兵　これは有難う存じます。皆さん、旦那樣からお土産を下さりました、お禮を言はつしやりませ。

玉荻　もし花魁、私等へお土産でござんす。

玉菊　ほんに、お氣の届いたなされやう。

三人　お有難うござりますぞえ。

治左　禮を言はれて痛み入ります。これ御亭主、玉菊どのに内々の用事もあれば、暫らくこの座を遠慮して下され。

喜兵　畏りました。さあ皆さん、一緒に下へ。

玉荻　そんなら花魁。

三人　あなた、是にて。

ト皆々階子の口へ下りる、治左衞門見送り思入あつて、

治左　扨玉菊どの、今日この親がわざ〳〵來たは、忰新之丞を親切にして下さる、その禮も言ひたし、又こなさんに頼まねばならぬ事があつて、年寄の來ずともよい、吉原まではる〴〵來たその譯を話さぬ内、こなたに近附にする皆がある。暫待たつしやれ。(ト下手へ來りて、)娘、嘸窮屈であらう、さ、これへ來やれ、來やれ。

ト下手障子の中にて、「唯今それへ參りまする」と答へて、下手より新之丞妻お民屋敷女房の打扮にて出來り。

お民　お父さま、嘸御苦勞樣でござりませう。

治左　さゝ、これへ來やれ〳〵。(ト玉菊の傍へ連來り、)玉菊どの、この娘に近附になつて下され。

玉菊　さうして、あなたはえ。

治左　これが新之丞の女房、お民でござる。

玉菊　そんならあなたが、ぬしの奥樣でござんすか、初めてお目にかゝりました、ようおいでなさんし

たな。

お民　お噂に承りました玉菊どの、新之丞樣をお大切にして下さんす、お禮を申しに參りました、この末ともいつまでも、お世話なされて下さりませ。

玉菊　勤めの習ひで大切な、あなたの殿御の新之丞樣を、無理に留めたり居續けの、そのお恨みもおつしやらず、お優しいそのお言葉、私や切なうござんすわいな。

治左　何の〳〵、その御心配には及ばぬが、ちとこなたに折入つて、賴まねばならぬことがござる。

玉菊　賤しい私へ改めて、お賴みとおつしやるは。

治左　賴みの仔細玉菊どの、一通り聞いて下され。話せば長い物語り、元身共は一子なき故、領分の百姓の悴を幼年の折から貰ひ受け、養子となしたる新之丞。これなる嫁お民ことは、相役波多野沖之進殿の娘、新之丞が五歳の時許嫁せしところ、星霜積り年頃になりし故、組頭澁川軍十郎殿より妻に申し受け度き由言入れたれども、物堅き沖之進殿一旦許嫁せし約を變ぜず、大家を斷り小身の、私方へ嫁にくれたる武士の魂、又嫁を褒むるではござらぬが、夫大事親孝行何一つ疵のなき女房を袖にして、去年此方廓通ひ、女子のたしなみ悋氣もせず、今日はこの召物、御腰の物はどれに遊ばせと、夜泊りに行く我夫に、花を飾らす實心貞女、傍で見てゐる身共が切なさ、

實子なれば勘當を致すべきなれど、養子のこと故世間の口の端、繼子憎みと言はれんと、怺へてをれど嫁の親、沖之進殿へ義理濟まず、あれほどの放埒を打捨ておく所存かと、思はるゝが面目なく、賴みといふは玉菊どの、決してこれから呼んで下されるなどゝ、そんな無理は言ひはせぬが、三度のところを一度になるやう、此方がどうぞ異見して、せめて半月屋敷の內へ寐るやうに、何分こなさんを賴みます。これ娘、そちもとも〴〵賴んでくれいやい。（ト淚ながらに言ふ。）

お民　唯今お父樣のおつしやる通り、悋氣などいたすのではござりませぬが、世間の思はく一つには、お物堅い私の父さまの手前、少しはお家におよりまするやう、玉菊どの、お取りなし、斯樣に申したとて、もし今宵限り新之丞樣へ、お斷りなどなされたら、殿御の高下にお心でも外られまして、ひよつとお家出をなされたらば、何程悲しうござりませう。そのやうな事のなきやうに、お父樣のお心安め、お賴み申す玉菊どの、どうぞ聞分けて下さりませいなあ。

トひれ伏して泣く。玉菊思入あつて、

玉菊　あゝ申し、そのやうに結構におつしやつては、私に罰があたります。新之丞樣が海山ほどいかに愛しう思へばとて、さうした義理のあるお方を、お呼び申すは道ならず、賤しい勤めはしてゐても、義理といふ字は捨てられぬ。浪風立たずよいやうに、私がお斷り申しますほどに、必ず〳〵

治左　お二人様、お案じなされて下さりますな。
おゝよく聞き分けて下された。さすが全盛の玉菊どの、未練がなくてあつぱれ〳〵。忝ない〳〵。
これ娘、よう禮を言やれ〳〵。

お民　よう言うて下されました、お嬉しうございます。そのお前のお言葉で落着いて歸ります。唯今も申します通り、新之丞様のお心に障らぬやう、又折々はお前の方へ、お呼び申して下さりませ。

玉菊　そりや私が、よう得心してゐますわいな。

ト此時喜兵衛階子の口より上り、おづ〳〵前へ出て、

喜兵　もうし旦那様。失禮ながら最前から、あれにゐまして委細の様子を伺ひまして、お二人様の御心中、また玉菊さんの御心底、熱い涙をこぼしました。

治左　御亭主か面目ない、頼みの仔細愚痴な親仁と、必ず笑うて下さるな。ときに夜の更けぬ内、もう私等は歸りませう。

喜兵　お歸りでござりますか。先程お駕籠を申しつけておきました。

お民　これ玉菊どの、これを御縁に折々は、訪ひおとづれをいたしませう。

玉菊　有難うございます、隨分ともに御機嫌よう。

治左　こなたも必ず、その身を大事に、

お民　隨分時候をお厭ひなさんせ。

玉菊　左樣ならばお二人樣、

治左
お民　玉菊どの、

玉菊　お靜かにおいでなされませ。

治左　さらばでござる。さ、娘行きませう。

ト唄になり、喜兵衞案内して、治左衞門お民階子の口へ下りる。玉菊後を見送り、こなしあつて、

玉菊　思ひがけなき新之丞さんの、親御さんとお内方さんの今の言葉、新之丞さんを呼んでくれなと、眞綿で針のお賴みは、この體にひしと打たれるほど、切ない思ひでござんした。厭と言はれぬ義理詰に、呼ぶまいとは言うたれど、思ひ切られぬ新之丞樣、こりや又癪が起るわいな。

ト煙管にて癪を押へる、階子の下よりお三上り來て、玉菊を見て、

お三　もし花魁、この間は久しくお目にかゝりません、まことに御機嫌よう。

玉菊　おや、お前は品川のお三さん、よく遊びに來なんした。一服お上りなんし。

ト櫻川善孝階子の口より上つて來て、

善孝　花魁こゝにおいでなさいましたか、お三さん、お前まだゐたのか。

お三　善孝さん、お前もまだ生きておいでか。

善孝　又そんなことを言ふか、おいらは七十三まで生きると、人相見がさう言つたよ。

お三　さうお言ひだけれど、何だか影が薄いやうであります、ねえ花魁。

　　ト玉菊それを聞き思入あつて、

玉菊　いつそ死んだら、この苦勞が。

お三　え。

玉菊　善孝さん、あやかりたいよ。

　　ト善孝の背中をたゝく、これを木の頭。

善孝　あゝ、鶴龜々々。（ト耳を塞ぐ。）

玉菊　ほゝゝゝ。

　　ト淋しく笑ふ。お三簪にて蠟燭の心を切る。この模樣よろしく、

ひやうし幕

三幕目

中萬字屋の場
日本堤の場

〔役名――中萬字屋彌兵衞、稻木新之丞、稻木治左衞門、近江屋半四郎、岩淵伴吾、皆岡慶藏、山脇傳八、森下新平。玉菊、玉萩、玉蔦、玉露、しげみ、しのぶ、お民、おさき等〕

（玉菊部屋の場）――本舞臺平舞臺、正面は床の間違ひ棚にて掛物、茶道具、琴などよろしく飾り、この下夜具棚、黑塗簞笥、衣桁、六枚屏風、上下折廻して塗骨障子屋體の下の方に階子の上り口、總て中萬字屋二階玉菊部屋の體。こゝに新造禿等行燈の側にて草草紙を取散し見てゐる模樣、端唄にて幕明く。

玉蔦　もし玉菊さん、ちよつとお見、この本は家へ來なんす、魯文さんの作でありますよ。

玉菊　どれ、お見せ。（ト本を見て、）こりやあお前評判の、西洋膝栗毛の本でありますよ。

玉露　それでは、いつか二丁目の芝居で、淨瑠璃でしたものかえ。

玉蔦　家のお上さんが見物なさんした時、繪草紙をお借り申して見たぢやないか。

玉露　ほんに、さうでありんしたよ。

玉菊　どういふものだか、どの本でも面白いところといふとお終ひだね。

しげ　おや〳〵。それでもこの本は、海が畫いてありますよ。

玉蔦　そりやあロンドンの港だよ。
玉露　とんだつんぼう話しだねえ。
玉蔦　それはさうとあの魯文さんは、ほどのいゝお人だが、この頃はさつぱり來なさんせぬな。
　　ト此時若い衆友吉上つて來て、
友吉　もし、そんなにお褒めなすつても、もう無駄だ。魯文さんも柳橋の方に、深い情人があるさうだ。
玉蔦　おや、さうでありますかえ。
玉蔦　道理で、さつぱり來なさんせぬわいな。
友吉　それはさうと、玉荻さんわえ。
玉蔦　今こゝにゐなさんしたが、
玉荻　（上手より出來りて、）友吉どん、何ぞ用かえ。
友吉　ちつとお話があります。
玉荻　なんでありますえ。
友吉　外でもない、花魁のことでありますが、先刻近江屋での話に、新之丞樣も軍十郎樣もどつちも家のお客故、まことに裁きがし難いから、どうか花魁の思召しで、お二人樣の顏の立つやう、楠

孔明そこのけといふ、番頭新造の親玉玉荻さんのさしがねで、よろしくお頼み申すと、半四郎さんからお言傳がございました。

玉荻　又お株でそんなことを、なんぼ自分の頭が胡麻だとて、あんまりな胡麻だねえ。

友吉　然し常談は常談、半四郎さんも困りなさいませうよ。

ト階子の口より、久七染物屋上總屋の若い者にて上り來りて、

久七　へい、御免なさいまし、上總屋でございます。

玉荻　おや久七さんかえ、此間から待つてをりましたよ。

久七　大きにおそなはりました。これは友吉さん、毎度御用を有難うござります。

友吉　ときにこの間の羽織は、まだ出來ませぬか。

久七　もう上繪へ廻つてをりますから、一兩日中にをさめます。

友吉　上りはようございますか。

久七　至極よろしうござります。

玉葛　そんなに吟じずとも、いゝぢやありませんか。

友吉　これでも、見せる者がありますわな。

玉蔦　川岸のにかえ。

友吉　又そんなことを言ひなさるか。（ト玉蔦の背中をたゝく。）

久七　玉萩はん、御註文は何でござります。

玉萩　八朔の裲襠でござんすが、どうしても染物は京の方がよい故、今から誂へたら間に合ひませうから、何ぞ下繪を描かせて見せて下さんせいなあ。

久七　畏まりました、昨年はたしかお描畫でございましたが、どのやうな模樣でございます。

玉萩　去年のは、これでござんす。（ト簞笥の抽出より秋草の模樣の裲襠を出し衣桁へかける。）

久七　これはさらりとして、よろしうござります。

友吉　とんだ評判がようござりました。

玉萩　これが描畫であつた故、今年は京染にして、縫ひさんに縫はせる積りでござんすから、何ぞ雛形を見せて下さんせ。

久七　畏まりました、早速認めて御覽に入れます。

友吉　私の羽織も頼みますよ。

久七　へい、明後日持つて上ります。

友吉　紺屋ぢやあないかえ。

久七　いえ、間違ひはござりませぬ。

玉荻　そんなら久七さん、

久七　毎度有難うござりまする。

友吉　どれ、近江屋へ行つて來ようか。

ト友吉、久七階子の口へはひる。しげみ階子の口を覗いて見て、

しげ　もし玉荻さん、新之丞さんがおいでなさんしたぞえ。

玉荻　なに、新之丞さんがおいでなさんしたえ。そこらを片附けて下さんせ。

皆々　あいく。

ト唄になり、皆々あたりを片附けてゐる。階子の口にてしのぶの聲にて「早うござんせいな」といふに答へて、稲木新之丞の聲にて「忙しない、行くといふに」と聲して、禿しのぶ先に、稲木は酒に醉つたる思入にて出來る。

しの　あぶなうござんすぞえ。

稲木　なに。大丈夫ぢやや。（トひよろくして眞中へ坐る。）

玉荻　新之丞さん。

三人　ようおいでなさんしたな。

稻木　いやこれは玉荻始め新造達、いつもながら見事々々。

玉蔦　きつう醉つておいでなさんすが、

三人　どこでお上りなんしたえ。

稻木　今日は朋友どもと連立ちて、金龍山へ參詣なし、ちよつと一口八百善で呑んだのが始めにて、それから段々後をひき、トゞのしまひが青樓と皆相談が行きとゞき、唯今近江屋にて一口呑んでるたなれど、どこで呑んでも、玉菊が部屋で呑むほど旨くない故、ちよつと其場を拔いて來て、呑みなほしに寄つたのぢや。足を近く來るなといふ、玉菊の意見故今日は酒を呑みに來たのぢや。必らず叱つてくれるなよ。これ大きいもので水を一つくりやれ。

しげ
しの　あい〳〵。

ト上手屋體の内にて、

玉菊　醉ひざましの水ならば、私が汲んで上げませうわいな。

稻木　なに、玉菊が汲んでくれる。それは忝けない〳〵。

ト玉菊蒔繪の小盆へ、銀の水呑を載せて持ち出來りて、

玉菊　さあ新之丞樣、お上りなさんせいな。

ト稻木の前へ出す、稻木醉つたる思入にて手を突き、

稻木　これは〳〵、お手づから恐入る〳〵、どれ頂戴いたさうか。

ト茶碗へ手をかけるを玉菊留めて、

玉菊　ちよつと待つて下さんせいな。

ト玉菊玉荻に行けといふ思入をする。玉荻呑込みて皆々に、

玉荻　さあ、みんな次の間へ行きなさんせ。

皆々　あい〳〵。

ト玉荻先に、皆々下手階子の口へはひる。稻木思入あつて、

稻木　玉菊、何故この水を留めたのぢや。

玉菊　その水をあがるなら、牛王を飲んで下さんせ。

稻木　そりや、何故。

玉菊　お前の心の誓言に。

稻木　何と言やる。

玉菊　昨日もあれほど御異見申し、せつ〲おいでなさんすなと申した舌も乾ぬ中、またもやおいでなさんすは、嬉しいやうなが恨めしい、何故私のいふことを、聞入れては下さんせぬ。改め言ふには及ばねど、お前様は御養子にて奥樣のあるお身の上、それにその樣に御酒を過し、お足を近うこの廓へおいでなさるは、お身の詰り、それを御異見遊ばさぬ義理ある仲の親御樣、また奥樣も御悋氣を遊ばさぬとのことなれど、かうしてお目にかゝる度、私が嬉しう思ふにつけ、嘸やその夜は親御樣、また奥樣が怨めしう思召さうとお察し申し、三度おいでのところをば、一度になされて下されと、戀しいお方をこつちから、遠ざけるのもお身のお爲め。どうぞお勤め大切に親御樣へ御孝行、奥樣とも睦じう、申すまではなけれども、武藝のお稽古怠りなく、其の内お閑な日があらば、その時こそは御保養に、おいでなされて下さんせ。さうさへなればお首尾もよく、お家も無事に納まれば、やつぱりあなたのお身の爲め。僞りいうても足を近う、客を呼ぶのが遊女の慣ひ、それを呼ばぬが眞實の眞實、晦日の月と思召し、戀路の闇にお迷ひなされず、思ひとまつて下さるやう、牛王を飲んで下さんせいなあ。

トよろしく思入にていふ、稻木感心せし思入にて、

稲木　後世遊女の龜鑑といふ、虎少將も及びなき眞實を盡す心根に、あきらめようと思ふほど、猶々そなたに思ひが増し、今日は來まいと稽古に出で、弓矢取れども手に附かず、素讀をなせばうはの空、たゞこの廓がなつかしく、眼前にちらつくそなたの面差、逢ひたく思へど昨日今日、素面でも來られず仕方なく、深く飲まぬ酒を飲み、醉つたを力に格子先覗く所をしのぶが見つけ、袖引かるゝを幸ひに顏を見に來た新之丞、この身を思うて段々の異見は涙のこぼるゝほど、嬉しく思へど思ひきられぬ。そなた故なら親を捨て妻をも捨てゝ家を出で、假令町人百姓になり下らうと、いッかな厭はぬ。貧しき暮し致すとも、三度來るものなら五度來たい我が望み、これも深き因縁と、あきらめてくれ、これ玉菊、どうも思ひきれぬわいの。

ト始終醉ひたる思入にていふ。玉菊ぢつと思入あつて、

玉菊　すりやこれほどに事を分け、御異見してもお前様は、身を愼んでは下さりませぬか。

稲木　はて今もいふ通り、家をも捨てる心故、愼しむことはできぬわいの。

玉菊　（是非なき思入にて、）あ、數ならぬ身をそれほどまでに、思うて下さるお志し、浮世の義理がないならば。（ト稲木の顏を見て、ホロリと思入。）

稲木　や。

玉菊　義理ほど辛いものは、ござんせぬわいな。

　ト玉菊泣伏す。稲木も玉菊を見て術なき思入にて、有合ふ水呑の水を飲み、

稲木　あ、甘露々々、この味ばかりは下戸は知らぬ。

　ト酒に醉ひし思入、下手より玉荻出來りて、

玉荻　新之丞樣、何かの樣子は次の間で聞いてをりました。お家を捨てゝも花魁を思うて下さるお志し、私までもとも〴〵に嬉しうござんすが、それがよいからとお足を近う、お呼び申せばお爲にならず、それ故御異見申したれば、明日はともあれ今宵はこのまゝ、早うお歸りなさんして、親御樣や奥樣のお心をお休めなされませ。後でとつくり花魁に、及ばずながら私がまた、申すこともござりますれば、どうぞさうなされて下さんせいな。

稲木　そんならどうでも、歸れといふのか。

玉荻　お歸し申したうはござんせぬが、あなたのお爲めを存じます故。

稲木　（思入あつて）あゝ麻につるゝ蓬とやら、玉菊といひそなたの親切。こりや歸らずばなるまいわいの、

玉荻　さあ、留めておきたいお方をば、お歸し申すも、これには譯が。

稲木　や。

玉荻　いえさ、私が胸にござんす故、まあお歸りなさんせいな。

稻木　や、あの鐘は、

玉荻　觀音樣の四つでござんす。

稻木　更けぬその內。

　ト稻木思ひきつて立上る。玉菊名殘りをしき思入にて、

玉菊　そんなら今宵はこのまゝに、

稻木　そなたの異見を聞きとゞけ、

玉荻　お歸りなされて下さんすか。

玉菊　思へばこれまで雪の夜や、

稻木　雨の降る夜は言ふも更、

玉荻　日和の時も無理留めに、

玉菊　つい居續けとなるは常、

稻木　それに替つて今日はまた、

玉荻　情なう無理にお歸し申すも、

玉菊　僞りならぬ心のまこと。

稻木　そんなら玉菊。

玉菊　新之丞樣。

ト兩人顏を見合せ、名殘りをしき思入、玉荻中へ割つて入り、

玉荻　またお近い中に。

玉菊　あ、これ。

玉荻　いえ、お近くないうち。

稻木　逢ひに來るぞよ。

ト唄になり、稻木した〱と階子の口へおりる。玉荻後より送り行く。玉菊後を見送り、殘り多き思入。この時下手よりおさき出來りて、

さき　花魁感心いたしました。

玉菊　誰かと思へばおさきどん、感心したとは、そりや何を。

さき　軍十郎樣の邪魔になる、新之丞樣を遠ざけようと、親切ごかしの今の異見、あんまり新手な御趣向だから、それでお褒め申したのさ。イヨ、こちの花魁々々、ほゝゝゝ。

ト空笑ひをする。玉菊思入あつて、

玉菊　そりやお忝けないが聞違へ、私や新之丞様が大事故、眞實御異見申したのぢやわいな。

さき　え、すりや軍十郎様を、お呼び申す邪魔を拂うたのではござんせぬか。

玉菊　知れたことでござんすわいな。

さき　ねつから知れたことではない。軍十郎様は御大身、私も以前勤めてゐたが、親代々の御内福、すでに身請をしようといふこつちの家の大事のお客、その邪魔になる新之丞様、高の知れた小身者、突出しておしまひなさい。

玉菊　そりやおさきどん、世間にはそんな女郎衆があるかは知らぬが、御大身でも御小身でも、お客にすれば同じこと、假令御出頭であらうとも私のところへは昨日今日、二年この方馴染のお方を、見返る心はござんせぬ。痩せても枯れても内でのお職、中萬字屋の玉菊と少しは人にも知られた身體、襟についたと言はれては、私ばかりか廓の恥、義理堅いと大酒を、するのが私の、疵でござんすわいな。

さき　お前のやうに言ひなさると、理窟らしいが私は聞かぬ。これが素人といふではなし、金で買はれる勤めの身、襟につかうが裾につかうが、身請をされるは廓の譽れ、お前が義理ばつても、金を

積まれたら仕方があるまい。いゝ加減にしなさんせ、義理堅いも馬鹿の內だ。

玉菊　あい、私や野暮故義理が堅い。假令お金を山ほど積んでも、厭なところへ行かうかいな。

さき　行かぬと言つてもやらねばならぬ、たゞでも使ふ身體かえ、大金出した奉公人、そんな我儘なことは言はせませぬ。達つて強情張りなされば私もお前を見習うて、小身者の新造や禿ばかりを折檻はせぬ、御大身の花魁でも、折檻するが遣手の役、覺悟をしておいでなさいよ。

ト煙管にて舞臺をたゝき、憎くいふ。

玉菊　こりやお前は、今言うた言葉質を取りなすつて、私を折檻しなさんすとか。

さき　身請を承知しなさんせずば、花魁だとは言はせませぬよ。

トこれにて玉菊むつとせし思入にて、

玉菊　好かぬ身請は厭ぢや故、折檻するが遣手の役なら、お前の自由にしなさんせいなあ。

トおさきに身體を寄せる。

さき　むゝ、いゝふて勝手を言ひなさりやあ、お職だつて夜食だつて打つちやつてはおかねえ。いゝ了簡だ、覺悟しなせえ。

トおさき煙管を持つて立かゝる。上手より玉萩始め新造禿も走り出て、おさきを留め、

玉荻　あもしおさきどん、お前花魁をどうしなさんすのだ、悪いことがあるならば、何故私に言ひなさんせぬ。

さき　お前に言つたとて分からねえ。

玉蔦　まあおさきどん、お待ちといつたら、

玉露　お待ちなさんせいな。

さき　えゝ、この子達は放さねえのか。

ト留める三人をかきのけて、玉菊を打たうとする、と階子の口より中萬字屋の亭主彌兵衞出來りて、

彌兵　何だ騒々しい、靜にしねえか。

玉荻　これは旦那さん、よいところへ來て下さんした。

三人　どうぞ、お留めなすつて下さいまし。

さき　いえ〳〵旦那さん、うつちやつておいて下さいまし、こんなふてい〳〵勝手を言はれては、二階のしめしができませぬ。

彌兵　さうでもあらうが見ッともねえ、何故言ふことがあるならば、下座敷へでもこつそり呼んで、靜に物を言はねえのだ。

さき　靜に言つて聞く位なら、大きな聲はいたしませぬ。
彌兵　大概樣子は聞いてゐる、野暮な大きな聲をせずと、まあ靜にしたがよい。
さき　假令旦那さんの御挨拶でも、身請を厭だと言はれては、遣手の役が勤まりませぬ、それとも全盛な花魁故折檻をして惡いなら、二階のしめしが出來ませぬから、私にお暇を下さいまし。
彌兵　そりやあ事と品によつたら、暇がほしいならやりもせうが、まあ、おれが言ふことを聞いたがいい。玉菊せえ身請を、得心したらいゝぢやあねえか。
さき　そりやあようございますのさ。
彌兵　よけりやあそんなに立ちはだかつて、大きな聲をするにやあ及ばぬ、まあおれに任しておきやれ。
さき　お前さんがさうおつしやるなら、主と病で仕方がない、へこんでこのまゝ引込みませう、全盛な花魁にやあ、所詮私なぞは齒がたゝねえ、思入我儘をしなさるがいゝ。（ト立上る、この內禿しのぶ居睡りなしてゐるのを見てこえゝ、又居睡りをするか。（トしのぶの頭を打つ。）
しの　あいたゝゝゝ。
彌兵　あゝ可哀さうに、ひどいことをするな。
さき　居睡りをしますから、打ちましたのだ。お前さんのやうなことをおつしやつては、遣手は勤まり

ませぬ。(ト言ひながら玉蔦、玉露、玉葛の顔を見て、)これ、何を笑ふのだ。

三人　何も笑やあいたしませせぬよ。

さき　笑やあがると聞かねえぞ。(ト下の方へ行きかけ、思入あつて、)えゝ入齒をどこへかおつことした。

ト邊りを搜し下手へはひる。

彌兵　彼女もいゝ年をしながら、さつぱり目先の見えねえ奴だ。これが鞍替者かなんぞなら、白い齒は見せられねえが、子飼の中から育てた花魁、事を分けて言ひさへすりやあ、分からぬことがあるものか、あいつもよつぽど來つたわえ。

玉菊　お前さんのお耳に入り、面目なうござんすわいな。

彌兵　何の面目ねえことがあるものか。

トこの内階子の口より禿しげみ、狀差のある煙草盆と壺の煙草入を持ちて出來り、

しげ　旦那さん、お煙草盆を持つてまゐりました。

彌兵　おゝ、こりやあ氣が利いてゐる、どうでも、花魁の仕込だけあつて違つたものだ。

ト玉蔦茶を入れ湯呑へ注いで、

玉蔦　お茶がはひりました。

彌兵　おゝさうか。（ト取つて呑みながら）拘杞だの。
玉葛　あい、根氣の藥だと申しますから、花魁に上げます。
彌兵　そりやいゝ事だ、なんでもみんなの身體が丈夫でなくつちやいけねえ。ときに花魁、ちと勝れねえさうだが、氣分はどうだえ。
玉菊　大きによろしうございます。
彌兵　ちつとよくば、灸をすゑなせえ、煎藥より利きやうが早い。
玉萩　この間もさうおつしやりましたから、花魁の思ひ附で、間をへだてゝ、河東節の灸すゑを聞きながら、すゑようといふてゞございます。
彌兵　さすが花魁だ、灸すゑを聞きながらすゑようとは新しい。
玉葛　あの、お上さんはまだお歸りなさんせぬか。
彌兵　江ノ島から金澤へ廻つて、神奈川で逗留すると言つたから、明後日でなくつちやあ歸るまいよ。
玉葛　さぞお淋しうございませう。
彌兵　淋しいから、花魁のとこへ遊びに來たのだ。
玉萩　それでは、こゝにゐては惡うございますね。

彌兵 さうよなあ、ちつと花魁に話しもあれば、みんなどこぞへ行つてくれ。

玉萩 行くことは行きますが、旦那さん。

彌兵 なんだ。

玉萩 浮氣はなりませんよ。

ト端唄になり、皆々下手へはひる。兩人殘り彌兵衞思入あつて、

彌兵 花魁、氣分の惡いところへ鬱陶しからうが、ちつと話がある、聞いてくんなせえ。

玉菊 はい、何でござんすえ。

彌兵 まあ氣を詰めずにゐなせえ。(ト煙草を喫みながら)話といふは外でもねえ、今もおさきが言ひだした軍十郎樣の身請のこと、おれまでが同じやうに、分からぬことを言ふものと、定めて思ふであらうけれど、これも餘儀ない義理づく故。その又義理といふ譯は、軍十郎樣の親御軍次兵衞樣とおつしやるお方は、丈賀と申して茶の湯の師匠、おれが子供の時分から、御指南受けし茶の師匠、輕い身分で有難い高位の御前に交はるも、師匠のお蔭と風雅の德、その御恩ある丈賀樣の軍十郎樣は御子息故、おぬしが身請をおれへの頼み、のつぴきならぬ義理合に、どうしたものと實に當惑、新之丞樣とおぬしが仲を、知つてゐながら仲を割き、心に濟まぬ軍十郎樣へ身請をされて行つて

くれと、言はれぬ所を言ふ切なさ。まして外の者とは違ひ、八歳の年から手しほにかけ、家の娘と同じやうに、琴三味線は言ふに及ばず、香花茶の湯俳句、踊りまでも花柳の師匠を頼んで仕込んだおぬし、殊には見世へ出してより、客を大事に勤めを精出し、中萬字屋の金函と世間で言はるゝほどあつて、おれが爲めにもなつたれば、假令十千萬兩積んだればとて、慾に迷つて氣の濟まぬ所へ行けとは言はぬ心、たゞ義理故に餘儀ない賴み、おれが師匠が居さつしやれば、かういふ譯で難儀しますと話もなれど、今そのお方がござらねば、親御に恩になりながら、息子殿の賴みをば聞かぬは不實と言はるゝが、やつぱりおぬしと同じことで、義理堅い氣におれが苦しさ。こゝの道理を聞分けて、假令三日の内なりとも、身請をされて行つてくれ。一旦師弟の義理さへ濟めば、直に駈出し逃げて來い、その時こそは引受けて、おぬしが難儀にならぬやう、身請の金を倍にしても、再び返すことではねえ。ひよんな主人に抱へられたも、皆前生の因緣づくと思ひあきらめ、これ玉菊、無理なことだがこのおれの、どうぞ顏を立つてくりやれ、手を合してをがむぞよ。

トよろしく思入にて言ふ。玉菊も術なき思入にて、彌兵衞が手を拂ひのけ、

玉菊　あゝ、勿體ない旦那さん、あなたに手をば合はされては、私に罰があたります。八歳の時からこの

年まで、御恩になつた御主人の、事を分けての今のお頼み、假令どの樣な義理があつても、何で厭と言はれませう。また考へて見る時は、新之丞樣とても御養子のその上に、奧樣のある御身分なれば、私と切れてしまふのが、落つるところは彼方のお爲め、たゞ何事もこれまでの、約束事とあきらめて、あなたのお顏の立つやうに、否と言はずに澁川樣へ、身請をされて參りませうわいなア。

ト覺悟せし思入にていふ。

彌兵　そんならおれが頼みを聞分け、得心してくれるとか、何にも言はぬ忝ない。然しそれも三日でいゝから、直に行つて歸つて來い、惡いやうにはしねえから、必ず狹い女氣に無分別なことをしてくれるなよ。

玉菊　得心いたして參るからは、何で御苦勞かけませうぞいな。

トしめ泣に泣く。下手の障子を明けて玉荻出來りて、

玉荻　花魁よく得心をなさんした。お慈悲深い旦那さん故、酷いことはなさんすまいが、もしもの時は留めようと、襖の蔭に忍んでゐて、事を分けてのお頼みを、聞けば聞くほどお二人の、胸の内が思ひやられ、身につまされて先刻から、泣いてばかりをりましたわいな。（ト泪を拭ふ。）

彌兵　なに、おれだつて同じ人、三莊太夫の末孫ではなし、無慈悲なことができるものか。

玉荻　ほんに、旦那さんといひお上さんといひ、お情深いこちの内、勤めをする身の仕合せでござんす。
彌兵　然し今夜は花魁も、辛い話でほつとしたらう、丁度幸ひ新川から、おぬしの好きな正宗が來た、今に持たしてよこすから、今夜は憂を忘れるがいゝ。
玉菊　あ、何から何まで、お心附いた旦那さん。
彌兵　それぢやあ花魁、大事にしなよ。
玉菊　有難うござんす。
彌兵　玉荻、引を打つたかの。
玉荻　いえ、まだでござんす。
彌兵　夜は長くなつたなあ。
　卜唄になり、彌兵衞玉菊を不便だといふ思入あつて、階子の口へはひる。
玉荻　花魁、嘸術なうござんしたらう。
玉菊　旦那さんの義理詰に、否と言はれぬ私の身請、推量して下さんせいな。
玉荻　尤もでござんすが、身請というても間のあること、一寸延びれば尋とやら、どう變るまいものでもない。きなく思うて又持病の、癪を起して下さんすな。

玉菊　必ず案じて下さんすな、行くと心を定めたからは、何のきな〳〵思はうぞいなあ。

ト言ひながら、死なうと覺悟をせし思入。と階子の上り口より若い者太吉、臺の物へ德利を載せて持ち出來り、

太吉　もし花魁、旦那が上げてくれと、これをおよこしなさいました。

玉菊　さうでござんしたか。

玉蔦　旦那さんのお志し、上つてはどうでござんす。

玉菊　一つ喰べて見ようかね。

玉荻　もし、誰でもよいから、お燗の支度をして下さんせ。

ト下手障子の中にて「あい〳〵」と返事して、新造三人出來る。

太吉　おつと、さうあらうと思つたから、一銚子つけてまゐりました。

玉荻　さすがは太吉どん、氣の附いたものだね。

太吉　そりやあお酒には大孝行、始終は御褒美を貰ふ積りさ。

玉露　太吉どんも、慾ばり過ぎるわいなあ、ほゝゝゝ。

玉菊　お前も一つおあがりな。

太吉　有難うござりまするが、見世が忙しうござります。花魁たんとお上んなさいまし。

ト階子の口へはひる。

玉蔦　さあ花魁、お一つお上りなさんせ。

ト玉菊へ猪口をさす、玉蔦酌をなし、玉菊これが別れの盃といふ思入にて、

玉菊　あゝ、いゝ心持でござんす。玉荻さん、お前へ。（ト玉荻へさす。）

玉荻　あい、有難うござんす。（ト猪口を受け、よろしく飲んで、）花魁上げませうか。

玉菊　あい、（ト又飲み玉蔦にさし、）玉蔦さん、お前は嫌ひぢやけれど、今日は一つ飲みなんせ。

玉蔦　あい、思ひきつて喰べませう。（ト飲んで、）花魁もう一つ。

玉菊　あい、（ト又受け飲んで、）玉露さん。（トさす。）

玉露　あい、（ト飲んで、）花魁、どういたしませう。

玉菊　あい、もう一つ喰べませう。（ト飲んで、）玉葛さん、これが別れの盃でござんす（とさす。）

玉葛　これはしたり、花魁、なんでこれが別れでござんす。

玉菊　さあ、軍十郎様に身請をされ、明日にも廓を出る時は、いつ逢はれるか知れぬ身の上、私が無いその後は、お前方も精出して、よい花魁になつて下さんせ、出世するのを草葉の蔭から、

皆々　え。
玉菊　さあ、苦界は辛いものとあきらめ、お客を大事にしなさんせいな。
玉荻　これはしたり、花魁、厭な客でも身請をされ、廓を出るは目出度いこと。
玉蔦　それに別れの、無い後のと、忌はしいことばかり。
玉葛　死にわかれでもするやうに、
玉露　何だか悲しう、
四人　ござんすわいなあ。
玉菊　(氣を替へて)ほんに私としたことが、僅かな酒に醉うたかして、思はぬ愚痴なことばかり、もうもうこんな話は止しにしませう。
玉荻　花魁、もう一つどうでござんす。
玉菊　いえ〳〵、それも止しにしませうわいな。
玉荻　それでは私でお納盃にしませう。(トついで飲み、玉蔦、玉露に、)ほんに、お前はお客ぢやないかえ。
二人　あい、三人ながら初會でござんす。
玉菊　お客があるなら、早う行きなさんせ。

玉蔦　そんなら、花魁、

三人　おやすみなさんせ。

ト三人は下手へはひる。階子の口より近江屋の若い者喜助出來りて、

喜助　へい、御免なさいまし、近江屋でござります。

玉荻　喜助どん、何でござんす。

喜助　軍十郎様がおいでなされましたが、花魁の御名代に玉荻さんちよつとおいでなすつて下さりませ。

玉荻　花魁、どうしませうね。

玉菊　大方身請のことでござんせう。大儀ながら行て下さんせ。

喜助　どうぞ御一緒にお願ひ申しまする。

玉荻　そんなら花魁、行てまゐります。（ト行きかけ、思入あつて）あ、なんだか心に。

ト後へ歸らうとするを喜助留めて、

喜助　もし。お早くおいでなされて下さりませ。

玉荻　えゝ忙しない、今行くといふに。

ト端唄になり、階子の口へはひる。時の鐘、引の拍子木鳴り、これより床の淨瑠璃になる。

〽後見送りて玉菊が、花の姿も打ちしほれ、袖に露おくかこち言、

ト玉菊玉荻の後を見送り、思入あつて、

玉菊 浮川竹の勤めの身は、誰しも辛いその中にも、分けて重なる私が難儀、このほど新之丞樣の親御樣治左衞門樣が、お嫁御のお民樣をお連れなされ、賤しい此身に手を下げて、新之丞樣の廓通ひ世間の聞えある故に、三度のものは一度になるやう異見をしてと粹なお頼み、お恨み聞くより却つて辛く、昨日も今日も御異見を申す甲斐ない新之丞樣、假令養父の家を捨ても、思ひ切れぬとおつしやるは、嬉しいけれどそれにては、治左衞門樣へ義理が濟まず、どうしたものと思ふところへ、八歳の年より御恩になつた旦那樣が身請のお頼み、厭と言はれぬもこれも義理、彼方を立てれば此方が立たず、いつそこの身がないならば、新之丞樣のお身も全う、お家にあらば親御樣お民樣のお悦び、また軍十郎樣へよしない義理を立てるに及ばず、思ひがけない八朔の白の小袖が掛けてありしも、これを冥土の晴着となし、死んで言譯せよとの知せか。これにつけても十年後、廻り逢うたる父さんが、その後便りのないのが氣がゝり、又二つには八歳の年より、お世話になりし旦那樣お上樣へお歎きを、かけるがこの身の黄泉の障り、申譯はこま〴〵と書殘しておきますから、後にて篤と御覽なされ、先立つ不孝の罪科を、お許しなされて下さりませ。

〽わつとばかりに泣きたさを、四邊憚りしめ泣きに涙呑みこむ玉菊が、心の中ぞいぢらしゝ、

ト玉菊わつと泣伏し、あたりへ思入あつて口へ袖をあてゝ泣き伏す。

〽折から何の氣もつかず、禿は一間立ち出でゝ、

ト下手の障子よりしげみ、しのぶ出で、

しげ　もし花魁、まだお休みなさんせぬか。

しの　お肩でもたゝきませうかいな。

〽玉菊涙を押し拭ひ、

玉菊　おゝ私よりそなた達、引をうつたにまだ寐やらぬか。

しげ　まだ睡たうござんせぬ。

しの　少しばかりたゝきませう。（ト玉菊の肩へ取りつく）

玉菊　いや／＼、今夜は止しにしようわいの。

しの　そんなら、明日、

兩人　たゝいて上げませう。

〽言ふ顏つく／＼打ちまもり、

玉菊　他人の私をそのやうに、ても優しい心ぢやなあ。これしげみもしのぶもよう聞きや、もとこの玉菊も、二人のやうに禿から勤めてゐたもの、今に二人も出世して、よい花魁になるであらうが、それとてもまだ十年、私が傍にゐるならば頼りにもならうのに、何を言ふにも今宵限りの、いやさ今宵にも身請けされ廓を出れば明日から、氣心知れぬ外の者に遣はれねばならぬ二人、何でもすなほに言ふこと聞き、私の名の出ぬ樣におとなしうしてくりや、や、玉葛さんや玉蔦さんはもう一人前の身の上故、さのみ苦勞にもならぬけれど、不便なはそち達二人、嘸や私がない後は、外の禿にいぢめられ、肩身の狹いことであらうと、可哀さうでならぬわいなう。

〽右と左に抱きしめて、我子ならねど恩愛に、泣く玉菊が顏を見て禿もともに貰ひ泣き、

ト玉菊兩人を右と左に抱き、わつと泣く、兩人も泣出して、

しげ　もし花魁、何でその樣に泣かしやんす。

しの　お前が泣くと私等も、何だか悲しう、

兩人　なりますわいな。

〽縋る禿の脊撫でさすり、

玉菊　もう／＼決して泣かぬから、そち達も泣顏せずと、早う行て寐たがよい。

しげ　私等も寐ますから、
しの　お前も泣かずに、
兩人　おやすみなさんせ。
玉菊　おゝ、私も直に寐ようわいの。
兩人　そんなら花魁、
玉菊　早う寐や。
兩人　あい――。
〽さすが子供の氣も附かず、涙拭うて行く影も、これが名殘りと見送りて、
ト兩人連れだち下手へはひる。
玉菊　何にも知らず寐に行たが、私が替る姿をば、明日見たらば泣くであらう。我子でなくてもこのやうに、名殘りをしく思ふもの、これが眞實の我子なら、どのやうにあらうぞいの。よしない愚痴に思はぬ暇入り、玉荻さんの歸らぬ中、身の言譯の書置を、少しも早う、さうぢや。
ト床の間の硯箱卷紙を出し、書置を書きかけ、思入あつて書損ひし思入にて卷紙を引裂き、丸めて打ちつけ考へる思入にて、この道具廻る。

（日本堤の場）＝＝本舞臺三間の間高き草土手。後方黒幕、柳の立木、開帳札、總て吉原堤田中下り口の體、時の鐘にて道具留る。と、上手より前幕の岩淵、峰岡、山脇、森下等頬冠り尻端折にて出來りて、

岩淵　今中萬字屋から新之丞が、歸る姿をちらと見た故、先へ廻つてこゝで待伏せ、

峰岡　軍十郎樣の戀の敵、ばらしてしまへば大きな手柄、

山脇　然し彼奴は、女の惚れる男に似合はず、力もあり、

森下　また劍術も我々どもより、遙かに勝れし腕前なれば、

岩淵　所詮立合うてはかなふまい。

峰岡　こゝやかしこに姿をかくし、

山脇　聲をもかけず前後より、

森下　不意を討つが上分別。

岩淵　必ずともにぬかりめさるな。

三人　心得てござる。

岩淵　忍ばつせえ。

ト左右へ別れはひろ。獨吟になり、土手の上へ稻木腕を組み、思案の思入にて出來り、

稻木　あゝ世の中といふものは、明けて言はれぬ義理故に心苦しき事のみ多く、去年鈴ヶ森八幡にて軍十郎が難題に、僅か一日雇うたる畑助といふ中間を、家の爲め故是非なくも、命を乞ひしその折に、八歳の年に賣つたる娘中萬字屋の玉菊が行末賴むと我への遺言、彼れが一命捨てたるばかり、その場も故なく家も安泰、その恩返しに去年より、せめて一夜の中なりとも、苦界を樂にいたさせんと、中萬字屋へ通へども、死したる事を隱してくれよと、くれ〴〵今際の賴み故、仔細明かさず玉菊に假の契りも二年越し、それを眞實と心得て親身も及ばぬ今日の異見、定めてかれが申す如く、養父を始め我妻も、家の爲めにせしことゝ、明かさぬ故にこれもまた、嘸や我を恨みつらん。今宵は未だ九つ前、少しも早う宿所へ歸り、養父や妻の心を休めん。

ト土手を下りて行きかける所を、左右より岩淵、山脇、唐突に拔身にて討つてかゝる。稻木身を躱し扇にてあしらひ、ちよつと立廻りかなはずなりて藪の蔭へかくれる。稻木塵打ち拂ひ悠々と花道へ行く、と後より峰岡、森下窺ひ行く、稻木振返りきつと見ると、兩人びつくりして下にゐる、稻木扨は軍十郎に荷擔の者と頷き、何程の事あらんとのこなしにて、これに構はず花道にて、

もしや軍十郎に身請されるを、この身に義理が濟まぬなどゝ、よしなき苦勞を致しはせぬか、あ

あ何とやら心がゝり。

ト思案の思入、この時峰岡、森下後ろからうぬと刀を振上げるを、稲木きりゝと廻つて扇をさしつける。兩人これに恐れて躊躇する。

こりやいつそのこと取つて返し、一部始終を物語り、かれが心を休めてやらん。

ト稲木つか〳〵と戻らうとする、兩人打つてかゝり、稲木烈しき立廻りあつて、稲木土手の上へ行き思入あつて、

いや〳〵、この事明かせば畑助が、死したることを言はねばならぬ。さある時には歎きの歎き、やはり言はずに立歸らん。

ト又土手より下りる、と四人一時にかゝり、烈しき立廻りあつて、稲木花道へ行き、

あ、何とやら廓の方へ、後ろ髮を引かるゝ心地、もしも變のあらんも知れず、何はともあれ取つて返して、歸るも未練行くも氣がゝり。こりやどうしたら、（トぢつと思入あつて、）こりやどう思ひなほしても、取つて返して玉菊に、始終の樣子を物語り、親が最期も知せてやらん。さうだ。

ト戻りかける。此間よろしく四人と立廻ることありて、峰岡一人になりて組附くを、土手の上より平舞臺へ投げのけ、きつと見得、これにて道具元へ戻る。

（玉菊部屋の場）——本舞臺元の玉菊の部屋。正面に六枚屏風を立廻しある、獨吟にて道具留る。と本釣鐘を打込み正面の屏風を明ける、內に結構なる本夜具あり、この上に玉菊八朔の白の裝に着替へてをり、前には机をすゑ、この上に書置、香爐、香合あり、一輪活へ活花をいけ、この傍に銀の藥罐茶碗など飾りつけ、玉菊香を焚き、白紙にて卷きたる剃刀を持ちよろしく思入あつて、

玉菊　明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半の嵐にはかなくも、散り行く今日ぞ春の末、花の名殘りのをしまれて、別れともなき別れ霜、消えしあとにて嘸や嘸、旦那樣がお恨みなさらう。これも浮世の義理故と、お許しなされて下さりませ。（ト伏しをがむ。時の鐘。）今鳴る鐘は丁度丑三つ、心しづかに生害せん。

ト淨瑠璃になる。

〽覺悟を死出の死支度、浮世の夢は蝶番、六つの街や六つ折りの屏風の內に玉菊が、二十五歲の曉も、待たではかなく消えて行く、最期のほどぞ哀れなる。

ト此中玉菊　紫の扱帶にて膝を結へ、白の手拭にて口を結び、剃刀を持ち屏風を立廻し、「最期のほど」といふ文句にて、ばつたりと音して自殺せし心よろしく、

〽折からこゝへ玉荻が、とつかは茶屋より歸り來て、

ト ばた〳〵になり、玉荻階子の口より出來り、

玉荻 さつきにからの胸騷ぎ、どうも心にかゝる故、軍十郎樣の無理酒をやう〳〵脫けて逃げて來たが、花魁はどうなさんしたか。(ト屛風の外へ來て、)もし花魁大きに遲くなりました、堪忍して下さんせ。

〽言ひつゝはひる屛風の內、朱にそみたる姿にびつくり、

や、こりや花魁が、えゝゝゝ。

〽膝もわなゝく齒の根も合はず、

もし、旦那さん〳〵。

〽呼ぶ聲さへも常ならねば、仔細あらんと主人の彌兵衞、直に二階へ上り來て、

ト階子の口より彌兵衞出來りて、

彌兵 これ玉荻、けたゝましい何事だ。

玉荻 もし、花魁が自害を。(ト言ひかける。)

彌兵 これ。(ト四邊へ思入あつて、)ことはきれたか。

玉荻 あい、冷たくなつてゞござんすわいなあ。

彌兵 あゝ、早まつたことをしてくれた。

〽言ふ聲洩れて此方より、新造禿は走りいで、

玉蔦　もし旦那さん、どうしたら、

皆々　ようござんせうぞいな。（ト泣き伏す。）

彌兵　どうと言つて仕方がねえ、人に知らさねえやうに、靜にしろ。

皆々　あい／＼。

彌兵　必ず誰が來ようとも、屏風の内へ入れるなよ。

皆々　はい／＼。

彌兵　どれ、死顔なりと。

〽明くる屏風にふさがる胸、涙ながらに入りける。

〽斯くとは知らず新之丞、心の内を明かさんと、上る二階も更くる夜に、燈火暗き部屋の口、

ト彌兵衛は情ないといふ思入にて、屏風の内へはいる。階子の口より新之丞友吉と共に出來りて、

友吉　もし玉荻さん、新之丞樣がおいでなされました。

玉荻　え、新之丞樣が。

稻木　玉菊に、ちよつと逢はしてくりやれ。

玉荻　いえ、お逢はせ申すことは、

皆々　なりませぬわいな。

〽圍ふ屛風に合點行かず。

稻木　何故玉菊に逢はされぬのぢや。

玉荻　さあ、どうも花魁には、

皆々　お逢はせ申されぬわいな。

友吉　もし、花魁はどうなされました、何故お逢はせ申されないのだ。

稻木　あこれ、友吉こりや分かつた、最前我へ親切らしく異見なせしも皆僞り、我を遠ざけ大身故に身請され、廓を出る所存であらう。さすがは遊里に育ちしものは、見下げ果てた性根ぢやなあ。

玉荻　いえ／＼、さうではござんせぬ。

稻木　さうでなくば、何故逢はせぬ。

皆々　さあ、それは。

稻木　但しほかに仔細あつてか。

皆々　さあ。

稲木　仔細があらばとく申せ。
彌兵　あいや、その仔細は唯今申上げませう。
稲木　なんと、
〽屛風の内よりしを〳〵と、立出る彌兵衞を見るより、
誰かと思へば、亭主の彌兵衞。
彌兵　新之丞樣、仔細を申上げますから、まづお下においで下さりませ。
稲木　おゝ。して玉菊は如何せしぞ。
彌兵　申す甲斐もござりませぬが、最早この世にはをりませぬ。
稲木　なに、この世にないとは。
彌兵　自殺いたしてござりまする。
稲木　やゝゝゝ。
〽思ひがけなき言葉にびつくり、おどろくこなたの一間より、立出る治左衞門嫁お民、
卜上手より治左衞門とお民出來りて、
治左　なに、玉菊どのが自殺せしとか。

お民　てもまあ、おいとしい。
治左　不便なことを。
兩人　致せしよなあ。
〽涙先だつ老の癖、新之丞は見るよりも、
稻木　や、思ひがけない親人樣、お民もともに、どうしてこれへ。
治左　仔細あつてそちに隱れ、
お民　さつきからこの二階に。
彌兵　すりや新之丞樣の親御樣に、奧樣でござりましたか。
治左　何はともあれ自殺なせしは。
お民　これには定めて深い樣子が。
稻木　いかなる譯か彌兵衞殿。
治左　仔細を言うて、
兩人　聞かせて下され。
〽言ふに彌兵衞は懷より書置一通取りいだし、

彌兵　仔細と申すはこの書置、

治左　すりやそれなる一通が、

稲木　書置とな。

彌兵　これを讀んだら玉菊が、自殺の仔細が分かりませう。お聞きなされて下さりませ。（ト新造達に向ひ）玉荻始めそち達も、とつくりと聞くがよい、どれお聞かせ申しませう。

ト彌兵衛は書置繰りひろげ、見れば文字さへ薄墨に、先立つ涙押拭ひ、

「書置の事。花も名残りに春の夜の短になりし折柄に、この曉を一期ぞと覺悟に猶も心急かれ、海山思ふ數々も、越路へ歸る雁ならねど、後や前なる事のみにて、分かり兼候へ共、よしなにお察しお讀分のほど願上まゐらせ候。さ候へば私事八歳の年にお家へまゐり、二十五の今年まで産の親に勝りたる御恩になりし身の上にて、御恩返しもいたさずに、又々御苦勞をかけ候故、嘸々あとにて私を御憎しみと存じ候へども、切なき義理の重なりて是非なく相果てまゐらせ候。その譯と申し候は、去年の秋より新之丞樣にお馴染を重ね、一方ならぬ御親切に、行末お世話になり候お約束いたしまゐらせ候。さ候所、このほど新之丞樣の親御樣お嫁御樣をお連れなされ、わざ〳〵廓へおいでにて私へ御申し候は、新之丞樣の廓通ひ、若き者の習ひと存じこれまでは打捨ておき候へども、このほ

とは世間の聞え悪しく、役向にもかゝり候まゝ、三度通ふところをば一度になり候やうにと、お二人様とも美しうお恨みがましきお言葉なくくれ〴〵とのお頼みに、一しほ心苦しく存じまゐらせ候。今日しも新之丞様に御異見申上げ候へども、家を捨てゝもとのお言葉に、末始終は御爲あしく、此の身がなくば御身も全う御親子樣も御悦び、とやせんかくと思ふところへ、又々旦那の事を分けたる身請のお頼み、いやと言はれぬ仕儀なれど、軍十郎樣の方へまゐり候ては、御同席の御仲故新之丞樣へ義理立たず、殊には御大身の御身に候へば、慾に迷うて行きしなどゝ、廓中の口の端に掛り候事口惜しく、御斷り申し候はんと存じ候へば、御恩になりし旦那樣のお頼み、口までは出しかど、涙と共に呑込みて快く御請合ひ申し候は、三方四方の義理故に、死ぬる覺悟を極めまゐらせ候。」

〽半分讀まず主人の彌兵衛、涙に文も見え分かで、

これ玉菊、かういふ切ない譯ならば、何故おれに言つてくれぬ。假令又おれに言ひにくゝば、その爲めの番頭新造、玉荻に言はねえのだ。

玉荻　え、花魁、きこえぬわいな〳〵。何故死ぬほどのことならば、私に言うては下さんせぬ。

〽返らぬ愚痴と知りながら、悔み歎くぞ道理なる。稻木親子も身につまされ、義理故に自殺な

せしか不便やと、共に袖をぞしぼりける、治左衞門は涙を拂ひ、

治左　あゝその歎きは尤もながら、いまだ半ばのその書置、後をば讀んで聞かせて下さい。

〽言ふに是非なく、また繰りひろげ、

彌兵　なに〳〵、「いまだ年季も御座候身にて、死を遂げ候申譯には、三年あと廻り逢ひし私の父親亡き母の菩提の爲め、西國順禮にまゐり候とて別れ候故、歸り候はゞ行末樂に暮らさせ度く、その用意に調へおき候金子、手箱の中に三百兩御座候まゝ、私の身の代と思召し、先だつ罪はお許し下され、自害いたし候事は世間へは内々に、明日よりは病氣と御申し下され候て、六月二十五日は母の命日に候まゝ、その日に病死いたし候趣に御取計らひ願上り〻」（ト讀みかけ、）えゝこんな事を書きをつて、鬼のやうな主人なら知らず、この金がとられるものか。

ト思入あつて又讀む。

「行末長く樂に暮させたく、その用意に調へおき候金子」えゝ、こゝは讀んだとこだ。なに〳〵、「又新之丞樣始め御親子樣へは、別に御文差上げ不申候まゝ、その樣子詳しく御傳へ下され候やう願上り〻。又々父親こと三年この方何の便りも御座無候故、まさしく旅の空にて相果て候ことゝ存じり〻、もし又歸り候へば、便りなき身に候まゝ御世話願上り〻。」おゝ案じるな〳〵、

親父が歸つて來たことなら、三百兩で行末樂に暮らさせるから、案じるな。（ト又泣出して、）暮らさせるから案じるな、ハテコリやあどこだつたか、えゝこりや文句ぢやあなかつた。くれ〴〵もお名殘り惜しきは、幼き時より御不便かけて、お前樣同樣に御世話下され候お上樣、お友達の如くお心安くいたし候お上樣に、御目にかゝらずに別れ申候のみ心にかゝり參らせ候。私亡き後は菱川の描きし畫像をば私と思召し、後訪ふものも候はねば一遍の御回向を、逆ながら願上參らせ候。まだ〳〵申上度き事數々御座候へども、さすが女の悲しさ、覺悟は極め候へども、曉待たぬ身の上に筆も慄へ、涙にて磨る墨さへもにじみ勝ち、やう〳〵これまで書き殘し參らせ候。猶又返す書に筐分の品記しおき候まゝ、それ〴〵へ御贈り下され候やう願上參らせ候。先づは申譯まで、あらあらかしく、旦那樣へ玉菊。」あゝ、可愛さうなことをしたなあ

〽涙ながらに讀終れば、一度にわつと聞きゐる人々、今日を名殘りの春雨に、田中の蛙音を啼く如く、聲を上げてぞ啼きにける。

ト彌兵衛書置を讀んでしまふ。新造等皆々ワツと泣伏す、稻木も涙を拭ふ。

〽やゝあつて、新之丞は涙を拂ひ後悔なし、

稻木　むゝしなしたり、殘念や。あまりに事を包み過ぎ、親人に御苦勞かけ、あまつさへ玉菊に自殺さ

せたも皆我故。

治左　すりや又、いかなる仔細にて。

稻木　唯今これにて申上げん、彌兵衛殿も聞いて下され、その書置に記しある、玉菊が親畑助が札所を打つと言ひしは僞り、八歳の年に賣つたる娘の世話になるのが心苦しく、三河町にて雇中間、去年七月十三日我供をせしその時に、軍十郎殿の中間と口論なして持槍へ、疵を附けしを言立に首を討てよと瀧川殿が、日頃の遺恨に我への難題、否と言はゞ養父の家へ疵を附けねばならぬ仕儀、見兼ねてその時畑助が、首を討つてくれとの頼み、不便ながら家の爲め彼が一命貰ふ時、死したることを内々にて娘が身の上頼むの遺言、それ故去年より客となり、せめてその夜一夜でも苦界の勤めを樂にさせんと、通ふを眞實と心得て今日我へ切なる異見、かゝる事のあるはしか歸る途中も心にかゝり、此の事打明け話せし上、かれが心を休めんと取つて返せし甲斐もなく、自殺させたる殘念さよ。親人樣、お民どの、これまで長の御苦勞かけしも、家にもかゝはるところをば、助けくれたる畑助が恩返しの廓通ひ、お許しなされて下さりませ。

〽初めて明かす本心に、扨はさうかと治左衛門、小膝を打つて進み寄り、

治左　ほゝお、さすがは我聟新之丞、常に替つて去年より廓通ひの身持放埒、合點行かずと思ひしかど、

戀は思案のほか故に、眞實と心得先達て、お民を伴ひ玉菊に逢さけくれよと頼みしか、害となつての此の自害、そちが魂見違へしは、この治左衞門が老耄故。あ、面目ないく。

お民　〽下手傍から嫁お民、

父樣はかりか私とても、廓通ひを眞實と思ひ、悋氣は女子の愼しみ故面に出さねど心には、玉菊どのが恨めしく、思うてこのほど來て見れば、武家恥しきとりなりに、殊に優しき心ばえ、恨みも晴れて夫をば讓る心の尼法師、

〽髷を留めたる笄を、拔けば哀れや切髮に、肌着にかけし墨の袈裟、

トお民簪を拔くと、髷落ちて切髮となり、肌を脫ぐと白裝に、墨の袈裟を掛けてゐる。

この姿をば見せようと、思ひし甲斐も情ない、跡訪ふよすがとなつたるか。

〽かつぱと伏して泣き沈む、娘心ぞいぢらしく、見るに不便と治左衞門、

治左　すりや嫁女には義理を立て、玉菊どのに夫を讓り、尼となる氣であつたるか。

稻木　それといふのもその元は、この新之丞が畑助へ義理を思うて廓通ひ、包み隱せし故のこと。

治左　それを眞實と心得て、異見賴むも嫁への義理。

彌兵　（思入あつて）何れもさまのお心を聞けば聞くほどみんな義理づく、私とても同じこと、師匠の義

理に玉菊へ、身請を頼みしばつかりに、又義理故にこの最期。

治左　今更いうて返らねど、新之丞が義理を捨て、

お民　玉菊どのも義理を思はず、

稲木　お民も義理を立てぬなら、

彌兵　かうした義理にもなるまいに、

治左　嫁への義理や、

お民　夫へ義理、

稲木　互に義理を立て通し、

彌兵　後の歎きとなつたるか。

治左　これを思へば、

稲木　世の中に、

彌兵　義理ほど辛い、

四人　ものはない。

〽返らぬことの後悔に、又も涙に暮れければ、傍に泣伏す玉菊が、

ト四人は顔見合せて泣く、玉荻思入あつて、

玉荻　もし旦那さん、とてものことの念晴らしに。

玉蔦　その書置の返す書。

玉蔦　讀んで聞かせて、

三人　下さんせいな。

彌兵　お丶讀んで聞かさうとも〳〵。

〽又もや書置繰りひろげ、返す書を打見やり、返す書は形見分け、そち達始め朋輩や若い者までそれ〴〵に、品を分けたるその中に、感に絕えたは遣手へ形見。

玉荻　すりや、おさきどのまで。

彌兵　「一金十兩これは遣手のおさきどのへ、長々世話になりし形見の印に遣はし下され候やう、願ひ上げ參らせ候。」何と先刻あのやうに、言爭つた遣手にまで。

玉荻　形見分けをなさんすとは、かうも心の素直なものか。

彌兵　あつぱれ遊女の鑑だなあ。

〽褒むるこなたの障子の内、わつとばかりに泣き出す遣手、

ト下手障子の内にて、おさきわつと大きな聲して泣き、轉び出る。

誰かと思つたら、おさきか。

玉萩　そんなら、今の樣子をば。

さき　障子の蔭で聞きました。役目故とは言ひながら、さつきにあれほど愛敬こぼし、憎まれ口を利いたのに、憎いとも思はずに、形見を下さるお志、つひに泣いたことはないが、今日ばかりは怺へられぬ。必ず笑つて下さんすな。

〽わつとばかりに聲を上げ、泣かぬ眼に泣く涙こそ、いとゞ哀れに見えにけれ。

トおさきおい〳〵と泣く。

彌兵　お、尤もだ〳〵、讀めば讀むほど涙の種、然し自殺は世間へ内々、明日よりは病氣の體になし、賴みの通り母の命日、六月二十五日をば忌日となして弔はん。

〽扨こそ今は水無月の、二十五日を命日に、追善なすはこの故なり。

ト皆々思入あつて、

治左　あゝ、いつまで言うても返らぬ繰言。

お民　せめて名殘りにたゞ一目、

稻木　死顏なりと玉菊に、

彌兵　いかにもお逢はせ申しませう。

〽かたへの屛風取り除くれば、内に哀れや玉菊が朱に染みたる白小袖、自殺の體を見るよりも、淚先だつ人々に彌兵衞は亡骸かき抱き、

ト彌兵衞屛風を取除ける、内に以前の机に香を焚き、床の上に玉菊俯伏しになり居るを、彌兵衞抱起す。玉菊朱紅に染み合掌してゐる、新造達皆々ワツと泣く。

もし治左衞門樣、新之丞樣、御覽なされて下さりませ。衣類も白に改めて、姿の亂れぬやう、扱帶を以て膝を結へ、合掌なしてのこの最期。

治左　ほゝお、女に稀な自殺の體。

稻木　武士も及ばぬよい覺悟。

お民　末の世までも名の譽れ。

彌兵　皆も名殘りにとつくり逢やれ。

玉蔦　見るも哀れなこのお姿。

治左　死なずにしやうもあらうのに。
玉蔦　これがこの世の、
玉蔦 玉露　お顔の見納め。
しげ　もし、花魁、
しの　何故に死んでは、
兩人　下さんしたなあ。
〽すがる禿のいぢらしさ、
ト しげみ、しのぶ玉菊に縋る。
彌兵　あゝ、わい等が不便だな。
皆々　はあゝ。(ト泣き伏す。)
彌兵　お二人樣。
治左 稻木　彌兵衛殿。
彌兵　あゝ、をしいことをしましたなあ。
ト本釣鐘。

〽無常を告ぐる鐘の音と、ともに散り行く、

ト彌兵衛玉菊の口の手拭を取り、玉菊の顔を見せる。治左衛門、新之丞手を合せる。お民始め女達皆々泣き伏す。

〽朝櫻、

ト本釣鐘にて、よろしく、

幕

傾城玉菊（終り）

網模様燈籠菊桐

扨世話物は御贔屓より結題にと御好みは島崎の見はらしにお杉吉三が戀の網七五郎が打込だ其汐先へ與四郎がかゝるもやひは水死の怨惡を見眞似と成瓢小猿の七が宵の間に矢はぎの橋の夢覺めし御守殿の初戀は於熊と名打の三日月長家に拾ひ當てたる簪をかせに上つた身突安藏其の貰ひ引鐵棒でまはる因果の勸化帳願主は敎心西念が邪正一如をまた繰りかへす世がたりの耳嚢

「小猿七之助」は安政四年七月、市村座に書卸された、作者四十二歳の時である。「玉菊燈籠」と共に上場せられたから、「網模樣燈籠菊桐」なる名題を生じたのである。此年作者は此の作の外に「鼠小僧」「正直清兵衞」等の代表的世話物をも作し、小團次との結託時代の基礎を固めたことになつてゐる。此の作に於ける洲崎の堤のクドキ、三日月長屋の活寫等は著名である。洲崎の堤の場は、濡れの場として種々に取沙汰されてゐるが、此處には普通興行の際よりもずつと原作に近いものとして收めておいた。此作に點出されたお坊吉三は後に三人吉三中に現はれて、「小猿の拾遺」といふ標題の意味を形ちづくるのである。

書卸しの時の役割は市川小團次(小猿七之助、竹阿彌悴猿之助、)坂東龜藏(網打七五郎、與四郎親西念)、尾上菊五郎(千葉の奥女中瀧川後に七之助女房御守殿お熊)、坂東彥三郎(手代與四郎)、河原崎權十郎(お坊吉三)、善導寺の所化敎眞)、淺尾與六(倉ヶ野屋儀兵衞)、中村歌女之丞(島崎の抱へお杉)、松本國五郎(所化海典)、中村鴻藏(切見世女郎おさめ)、市川米五郎(路地番いなせの市)、坂東村右衞門(奥用人横目助平)等であつた。

口繪にしたのは、龜井戸豐國筆の錦繪で大川端の敎眞殺しの後。挿繪にしたのは、同筆の三日月長屋の景である。

大正十三年九月　　　　編者誌す

網模様燈籠菊桐（小猿七之助——五幕）

序幕

品川島崎屋の場
永代橋川岸の場

〔役名〕——網打七五郎、酒屋の手代與四郎、お坊吉三、狸穴の金太　島崎の抱へお杉、藝者おさん、其他」

（島崎屋見世先の場）——本舞臺四間中足の通し屋體、上手板塀、用水桶、是れへ手桶を重ね、向う三間腰、棧附の大襖、紺青にて誂への紋散らし、是れへ續いて一間の紺暖簾、島崎といふ印、下の方黑の冠木門、蹴込み通し二段附の上り口、二階家の釣物、總て品川宿島崎見世の掛り、爰に與助若い者のこしらへにて大帳を調べ居る、流行唄にて幕明くッと花道よりおさん藝者のこしらへ、吾妻下駄、箱廻し二つ折りの三味線箱を抱へ、跡より狸穴の金太、御家人浴衣湯上りのこしらへにて出來り、

金太　コウおさんや、さッきから呼ぶに、待ってもいゝぢやあねえか。

さん　おや、どなたかと思ひましたら金さん、堪忍しておくんなさい。

金太　そりやあいゝが、きつい逆上せやうだの。

さん　止しておくんなさいよ、お前さんとは違ひますよ。

金太　おらあ逆上せる筈よ、今湯へはひつて出たばかりだ、極りが惡いからお增の所へ寄つて來たのさ。

さん　浮氣をなさいますと、思ひれ言附けてあげますから、たんとなさいまし。

金太　うまく言ふぜ、おれより手前が浮氣をして又札でも削られねえやうにするがいゝ。

さん　あれさ、緣起でもありませんよ。

ト言ひながら舞臺へ來る、金太も手拭をしぼりながら來る、與助思入あつて、

與助　金さん、お湯でござりましたか、道理で水際が立つてぴか／＼光りますぜ。

金太　水際が立つの光るのと、六夜さまぢやァあるめえし、おらあ何時でも烏の行水だ。

與助　嘘ばつかり、削るやうに洗ひながら。

金太　削るといふは、爰に居るおさんのことよ。

さん　あれさ、わたしばかり目の敵に、いやだねえ。

與助　いやでもお前さんに限るとおつしやる客人が、さつきから待つておいでなさるから、早く顏をお出しなせえ。

さん　おや嬉しいね、どなたでありますえ。
與助　茅場町の與四郎さんが、お待兼ねさ。
さん　おや、そんなら早く來ればよかつたに、今日川岸の旦那がおいでなすつて、それで遲くなりました。
金太　コウおさん、何ぞ奢らッし、拾つたものがあるぜ。
さん　おや、何でもありますえ。
金太　それ、草履札よ。（ト出す。）
さん　これは有難う。（ト取らうとするを、）
金太　どつこい、たゞはならねえよ。
さん　又じらすのかえ。
金太　是れがなけりやあ、引過ぎに茶飯は喰えめえ。
さん　おや、いやですよ。
與助　茶飯の切手を見ッかッちやあ、面目次第もねえわけさ。
さん　憎らしい金さんでありますよ。
ト流行唄になり、おさん奧へはひる。金太見世へ腰を掛け涼み居る。上手より七五郎辨慶縞の單衣、

博多の帶、白足袋、ツッかけの草履菅笠を持ち出で、花道へ行きかゝる、金太見て、

金太　おい〳〵、そこへ行くのは、深川の七五郎ぢやあねえかえ。（ト七五郎立歸り）

七五　狸穴の金さん、居續けかえ。

金太　お坊吉とぶん流しとの。

七五　いゝ顏だね。

ト此時暖簾の內より、お坊吉三浴衣平ぐけ、團扇を持つて出で、

吉三　七五郎、暑いのにどこへ行くのだ。

七五　こりやあ若旦那、今日の暑さは又格別ひどうござりますから、私も內に居た所、わつちの友達から、元舟にいゝのが出來るから來いといつて、迎ひが來ましたから、直にやつてくると、肝腎の囮が來ねえので、すご〳〵歸りますのさ。

吉三　そいつは詰らねえの、話しがあるから、いつそ今夜は泊つて行つちやあどうだ。

七五　どうして、今夜は早く歸つて、お迎ひ火を焚かにやあならねえ。

吉三　それぢやあ、かうしねえ、夕方まで呑んで行かッし。

七五　そりやあ有難うござりますが、遲くなりやあしめえか。ときに、もう久しいことゐなさるのかえ。

金太　何さ、四五日あと、大師からぶん流したのよ。
吉三　餘所と違つて海端だから沖は見晴らすし、風は通すし、歸る氣にやあなれめえぢやあねえか。
七五　涼しいか知らねえが、わつちやあ素敵に暑いのさ。
吉三　團扇を貸さう、違ひねえ。（ト あふぎながら出す。）
七五　どうして〳〵刎體ねえ、お前さんにあふがれちやあ罰が當りやさあ。
吉三　常談言ひなさんな。
七五　常談ぢやあござりません、ほんに人といふものは替り易いもので、其の以前は御昵近の澁川軍十郎樣の弟御吉三郎樣、身性が惡いばかりで、お坊さん〳〵といはれた者が、お坊吉三と渾名に呼ばれ、今ぢやあ若手の惡顏仲間。（ト 言ひかけるを、）
吉三　コウ〳〵、そんなことをいつて、父觀がせるぜ。
七五　違えねえ、見世先きでこんな野暮を、わつちもちつときたつたかね。
金太　何しろ呑みながら話しやせう。
七五　長かァいけねえ、片影の出來るまで。
吉三　見通しがいゝな。

金太　お附け申さうかね。

吉三　コウ渡りがねえよ。

七五　惡い顏だ。（ト流行唄、かすめた浪の音にて、此道具廻る。）

（島崎屋女郎部屋の場）――本舞臺向う床の間、塗簟笥、袋戸棚、下の方夜具棚、上手折廻しの葭簾、下手同じく藍心に飾り附け、衣桁蝿帳など並べ、總て島崎屋女郎部屋の體。爰に與四郎酒屋手代のこしらへにて、側に帳面入りの小風呂敷羽織を載せ、以前のおさん三味線を直し大野屋の下女おあさ、若い者粂吉、揚新造おてつ烟草を附けて居る、臺の物、酒肴、鯉の岡持、徳利盃洗を並べ、騷ぎ唄にて道具納まる。とおさん若い者と拳を打つて、

さん　もし與四郎さん、粂どんを四五の折で負しましたら、わたしの願ひを叶へておくんなさいな。

與四　おらあお前が贔屓だから、勝たしてえけれども、よつぽど粂公には苦手かして、刎ねちやあしめられる。

粂吉　與四さんのおつしやる通り、おさんさんの刎ねて居るのは、地でござります。

あさ
下女　おさんさん、あんなことを聞いちやあ、どうかしてお遣りなねえ。

さん　粂吉どんは利口さ、それだからづゝ拳ばッかり、悔しけりやあ眞劍でおいでといふに。

粂吉　もう／＼眞平、大先生は先づ一服いたしませう。

ト此時下手の襖を明け、以前の與助、およし茶屋女にて白丁の徳利を提げて出來り、

與助　先生がお休みなら、差替つて申し上げませう。

與四　與助どん、お前の顔が見えねえから、御定連が御退屈だ、さあ、こつちへ來ねえ。

與助　へい／＼、惡狐傳の讀切か、義士銘々傳、玉輔の出席。

よし　與助どんの講釋より、手酌で吞むのが勝手かえ。

さん　大野屋のおよしどん、お前も惡口が上つたねえ。

與四　おい與ス公、席料を渡りやせう。（ト金を包んでやる。）

與助　有難うございます、どうして御定連は違つたものだ。

粂吉　與助どん、おさんさんの端唄を聞いたかえ、もう一足のとこだ。

與助　そりやあ惜しいことでございました、私も天狗連をやあ勘當まで受けた男でございますさあ、もし同じ文句でも斯ういきまさあ、ハヽハア、ずいと／＼。（ト浮れ出す。）

さん　まあお待ちよ、三味線も持たないうちに。

與四　そんなに急ッこむから、勘當を受けるのだ、まあ喉でも濡らしねえ。

ト猪口をさす、與助猪口を取る、およし酌をする。

與助　淨瑠璃と違つて、端唄は早いがいゝ、長いと黴が生える。

粂吉　黴が生えちやあ鼻摘みだ、もうよせばいゝ。

さん　さあ、靜におやり、

與助　よく交ッけへすぜ。

粂吉　まぜやあしねえが、與四さんが御迷惑で、側がたまらねえ。

下女　もし〳〵、長いといへば、お杉さんは何をしてお出でか、見申しておくれな。

さん　めつたに座敷をお明けでないが、

新造　今わたしがお呼び申して。（ト立たうとするを、）

與四　何さ、いゝからよしたよ、今の鐘は増上寺の七つだらう、そろ〳〵支度をしにやあならねえ。

下女　あれさ、それぢやあ惡うございますよ、お杉さんも大概だね。お花さんお酌を、どれ、お呼び申しませう。

ト合方にて奥へはひる。

新造　もし與四さん、お燗が替りましたぞえ。

與四　又おれか、粂公お前ぢやあねえか。

粂吉　左樣さ、私のやうでもござりましたが、まご附きましたお猪口なら、一二さんのお捌きを願ひませうか。

さん　又拳かえ、しつこい粂どんだよ。

粂吉　それ言はさうばかり、一二さんと申しますは、あなたのことにて候。

さん　なぜわたしが一二さんだえ。

與四　おつと分りやした、皆までいふまい。（トおさん考へて、）

さん　あゝ、分つたく。

與四　本當に分つたのかえ。

さん　あゝ一と二と三だから、三味線のことでござんせう。

與四　こりやあいゝ、大笑ひだ、あはゝゝゝ、一と二だから三よ、それに三だからおさんさんといふのはお前よ。

さん　あゝさうかえ、いやだねえ。（ト大きな聲にていふ、與四郎びつくりして、）

與四　びつくりさせらあ。
與助　そのびつくりといやあ、今の話しでござりますが、鈴ケ森の八幡樣で、大間違ひがござりましたぜ。
與四　そりやあどこの人だ。
與助　昵近侍衆で、お名は稻木新之丞樣と申す殿樣が、どういふ譯か御家來を切殺したとか、首を刎ねたといふことで、今しがた問屋から宿老が行くやら、御代官へ屆けるやら、大層な騷ぎでござりました。
與四　そりやあ實說のことかえ。
與助　噓ぢやあござりませぬ、見た人がござります。
粂吉　そんならさつき問屋から、行事と組合衆が、急いで行つたが、それで分つた。（ト與四郎ふむと思入。）さん粂吉どん、いつのことだえ。
粂吉　今のことさ。（ト與四郎氣にかゝる思入にて。）
與四　その稻木新之丞といふは、幼少の時養子に行かれし、わしが兄。
四人　え。
與四　いやさ、わしが兄の出入屋敷、其の人なら日頃から慈悲深い堅氣な侍、家來を斬るといふこと

は、何ぞ樣子があることだらう。

ト此時合方にて上手の障子屋體より、お杉女郎のこしらへにて出來り、

お杉　與四さん、堪忍しておくんなさい、濟まないけどね。

さん　もしお杉さん、與四さんへお禮を、

粂吉
與助　私もよろしく。

お杉　さうかえ。もし與四さん、今日は是非ともお歸りかえ、引けまでわたしや歸さないよ。

與四　いつもならよけれども、節句前、今日は掛取り、どうしてまごついて居られるものか、どうしても歸らにやあ不都合よ。

お杉　そんなら何日來なさんす。

與四　節句にやあ來ようと思ふが、お前の都合で忙しきやあ、餘所の内へ行く分のことさ。

お杉　賴もしい與四さん、實がありますよ。（トつんとして煙草箱を引寄せる。）

粂吉　もし〳〵お杉さん、與四さんはお氣が短いから、盆も暮も一緒におつしやるのでござります、何でもかでも節句にやあ、きつとお待ち申して居ります。

さん　餘所へでも上らつしやると、人橋をかけても引戻して、めつたにやあ濟まされませんよ。

與助　もし與四さん、外へ浮氣をなさるとお杉さんが、ひうどろ／＼と化けて出る、あはゝゝゝゝ。

お杉　與助どん、冗談ぢやあないよ、わたしや與四さんを呼び申すほどな力がないからさ。

ト鬱ぐこなし、與四郎思入あつて、

與四　これさお杉、どうしたのだ、お前にも似合ねえ、按摩でもしやあしめえし、女郎に力がいるものか。

お杉　あい、わたしやちつと。（トじれ込む思入、四人顏見合せ。）

さん　粂吉どん、覺えておいでよ、お前のづる拳で逆上せかへつた、水でもおくれ、といふのは嘘、どれお冷水を一つ。

粂吉　汲みたて奇妙。

てつ
あさ　そんなら、私も、

與助　冷ツこい／＼。（ト天窓を掻きながら、四人思入あつて下の方へはひる。跡媚めいたる合方。）

與四　お杉さん、お前喧嘩でもしやあしねえか、八つ當りならあやまるの。

お杉　與四さん、わたしに限つて人さんと、爭ふほどの働きはないけれど、紋日節句の張合も出來ないながら人並に、表を張つても內證はいふに言はれぬ實のかゝさん、長々の煩ひに其の仕送りもし

がない貢ぎ、襟袖口のかけ替へも心にかけて人頼み、持たせてやれば內の樣子、聞く度々に兎やかうと思へど甲斐ない意氣地なし、取り留めて來る客はなし、三度に一度の身上りも、積り〳〵て借金ばかり、住替に出ればかゝさんに、又此上の苦勞を掛け、いつそのことに死にたいと迫るわたしの心の內、それに附けてもかゝさんへ、歎きを掛ける不孝のわたし、どうした因果の生れかと、つく〴〵悲しうありますわいな。（ト愁ひのこなし、與四郎推量したる思入あつて、）

與四　聞きやア聞く程氣の毒なお前の身の上、こんな生業する人は、色や浮氣で泥水へ流れ込むかと思ひの外、親の病氣や兄弟の難儀に迫つて勤め奉公、取分けお前は孝行な歎きに嘘もあるめえが、斯ういふおれも主人持ち、自由にならねえ金づくなれど、當時の所でどの位なけにやあならぬか、金高は。

お杉　かゝさんにも悅ばせ、こざ〳〵借りの小間物屋、ちよつと〳〵の立替で、二三十兩もあれば、どうか繰廻しが出來ようわいな。

與四　それで目鼻が附くことなら、どうとも手段も附くであらうが、丁度こゝに七十兩拂ひを取つた金はあれど、生憎今日は二季の折目是非とも旦那に納めにやあ、勘定が立たねえから、今日此の金を帳場へ入れて、先きの長い大晦日、明日から金の遣り繰りで二三十は出來るから、狹い了簡出

さねえで、鬼になつても喰ひしばり、今日の所を凌ぎなせえ。

ト此内上手より七五郎出掛りゐて、始終を窺ひ、うなづいて障子をしめる、與四郎懷より金を出して、

たんともねえが三兩ばかり、爰にあるから、どうでもして小遣ひにするがいゝ。

トお杉へ遣る、お杉氣の毒なる思入。

お杉　しがないことをお聞かせ申し、お氣の毒でありますが、お貰ひ申して置きませう。（ト金を取る。）

與四　僅かばかりの端た金、疾うからそれと知つたなら、手支へもさせめえもの、內證を聞くは今日が初めて。

お杉　よいことなら兎も角も、惡いことゆゑなるたけは、言ふまいと思へども、詮方盡きて恥かしい身の上話しもお前ゆゑ。

與四　その了簡を打明けて言ふほど深くなれ馴染、見得も飾りもねえことにやあ、さんばら髮でも構はずに、繁々來てもきはどい遊び。

お杉　無理留めせぬもお前の爲め、人も見やうについ髮を、撫附けて上げようかえ。

與四　何の吳服屋者だ、見えばうは大嫌ひよ。

お杉　それでもちよいと。（ト言ひながら水櫛で與四郎の髮を撫附ける。爰へ以前のおさん下女粂吉出で、）

さん　お杉さん、此櫛をお遣ひ、よく通りますよ。
お杉　さうかえ、與四さんはわたしがよいとさ。（トにつこり思入。）
さん　おや、御挨拶だねえ。
粂吉　是れだからお天氣がむづかしい。
あさ　道理で空がもめますぞえ。
與四　こつちやあ忙しいから、氣が揉めらあ。もう行かうよ、すてきに遲くなつた。
お杉　じれッたいね。（ト櫛を紙にてふいてさす、與四郎立ちかゝり。）
粂吉　もし、お駕籠を入れませうか。
與四　いや、今夜は月夜だから、雁木から舟で、涼みながら歸る積りよ。
粂吉　左樣なら、高輪までお送り申しませう。
あさ
與四　まだ外へ寄るから、送らずもいゝ。
お杉　もし寄るとはえ。
與四　どこへ行くものか、得意場へ行くのよ。
お杉　さうかえ、節句には來ておくれかえ。

與四　よし〳〵。
お杉　きつとかえ。（ト言ひながら、與四郎に寄り添ふ。おさん思入あつて、櫺子を見る心にて）
さん　おや〳〵、あの雲は降りさうだねえ。
粂吉　降りさうどころかえ、おしめりたつぷり、あゝ氣が惡い。
あさ　ひどく蒸すね。（ト三人紛らす。）
與四　其の筈よ、あつたかくなつたもの。
ト流行唄になる。與四郎お杉は重ね草履、おさん、おあさ、粂吉、廊下の心にて花道へはひる。上手より七五郎、お坊吉三、金太出で、
七五　それおやあ若旦那、わつちやあ歸りますよ。
吉三　其の内逢はうが、手紙を遣つたら來て下ツし。
七五　そりやあ承知さ。
吉三　時に七之助はどうだえ。
七五　あの野郎は、どこへ行つて居ますか、恩知らずの不孝者さ。
金太　ちやん、お前は孝行だの。

七五　えゝ、いゝ年をしたものを、へこましやあがる。

吉三　氣樂をいふな、遠道を抱へて居らあ、駕籠でも奢らう。

七五　何さ、雁木から乘合船さ。

金太　永代まで寐て行くのも、洒落て居るの。

七五　此の船にやあ、乘らねえのは損だ。

吉三　それもさうだ、内へよく言つて下ッし。

七五　そんなら旦那、金太も來さッし。

吉三
金太　尋ねて行くから。

七五　どれ、お暇と出掛けよう。

ト波の音、流行唄になり、七五郎與四郎の跡を追掛ける心にて花道へはひる。吉三、金太は花道から引つ返し、直に舞臺の臺の物、岡持を見て、

金太　コウ爰に鰻があらあ、茶漬らうぢやあねえか。

吉三　下司張つたことをいふねえ、喰ひたきやあ喰はせらあ。

金太　錢もねえくせに、いゝたくを言ふぜ。

吉三　安くするな、澁川の若旦那だ。（ト合方にて以前のお杉花道より引返して來る。）お杉、今の客は店者に似合はねえ、小利口な男だが、是れらしいなあ。（ト握り拳を出して言ふ。）

お杉　そんなに分らねえ人でもねえが、どうでも商人だから。

吉三　幾ら取つた。

お杉　たつた三兩よ。

吉三　三兩でもいゝ、それで鰻でも喰はう。

お杉　およしな、是れは内の勘定へ入れてお置きよ。

金太　それ見たことか、やつぱり金は取揚げばゞアだ、喰ひ殘した鰻があるから、是れで鰻酒でも呑まう。

吉三　爰でやらッし。（ト此時上手より新造おてつ出來り、）

てつ　さあ金さん、早く座敷へおいでよ。

吉三　此處でやらッし。

金太　邪魔にならう。

吉三　いゝぢやあねえか。

金太　おらあ喰氣だ。

吉三　女は嫌ひか。

金太　それもい〻の。

てつ　さ、早くお出でよ。

金太　え〻、今行くといふに。

ト岡持を提げておてつ附添ひ上手へはひる。跡兩人殘り、吉三思入あつて、

吉三　ちやんころなしの大盡が、贅澤をいつちやあ極りが惡いが、餓鬼の時から持つた癖、手前はおれが乳母の娘、その緣で斯うした深い仲になり、おれゆゑ手前に苦勞を掛け、何の中でも氣の毒だ。

トちよつとふさぐこなし。

お杉　か〻さんの御恩報じ、お前に不自由させまいと足の近い客人や、馴染になればか〻さんによそへて賴む無心文、二三枚から四五枚と、お金の高も客次第お前へ貢ぐわたしの心、それをさうとも思はずに、幾ら上げても取る側から、岩附の松岡のと浮氣ばかりしなさんすから、悔しいのも人一倍、邪慳なお方にしみ〴〵と、こつちで惚れたがわたしの誤り、何ぼ男の氣強でも少しは察すお前なら、こんな愚痴も言ふまいに、お坊吉三といはれるとて、何時が何時まで此のやうに、お坊さんぢやあいけないぞえ。

吉三　さう疊みかけて言はれちやあ、おらあ生れ附いて無口だから、手前にはかなはねえが、人の噂や小じやくりを實に受けて怒るのか、何の松岡だの岩附だのと附合ひで行つたこともねえ、そりやあ手前の邪推といふものだ。
お杉　邪推か何だか知らないが、其腕守りの金物の、比翼の紋を見せておくれ。（ト懐へ思入。）
吉三　いや、こりやあ、手前にやあ見せられねえ。
お杉　見せられぬは、大方何所ぞの。
吉三　おゝ、馴染も馴染、命まで遣らうといふ女の紋だ。
お杉　して其の女は何所の誰だえ。
吉三　誰でもねえ、島崎のお杉よ。（ト腕守を見せる、お杉見て。）
お杉　ほんに、是れはわたしの紋所。
吉三　こつちア是れほど友達に、きざな女だと言はれるのも承知で彫つた比翼紋、手前は又口ばかりで、おれ程思つちやあ居めえがな。
お杉　思はないことがあるものかね。
吉三　なけりやあ、何ぞ證據があるか。

お杉　その證據は、もし。（ト囁く。吉三うなづき、）
吉三　そんなら、今の與四郎が、十や二十は。
お杉　貸して遣らうと約束で、船で歸ると言ひなすつたが、もう今頃はどこらあたりへ行つたらうね。
吉三　風がいゝから今頃は、永代へ着いたらう。
お杉　早いものだねえ。（ト此の時下手にて、）
若衆　お客だよ。（ト呼ぶ。）
大勢　あい――。
吉三　客が上つたな。
お杉　寐ようと思ふに、誰ぞ來なけりやあいゝが。（ト與助出來り、）
與助　お杉さん、ちよつと。
吉三　そりや來た。
お杉　與助どん、誰だえ。
與助　七曲の佐太夫樣でござります。
お杉　いやだなう。

與助　それぢやあ、お早く。（ト下手へはひる。）

お杉　えゝ、じれッたいねえ。

吉三　ちよつと顔を出して來ねえ。

お杉　直に來るから待つてゝおくれ。

トお杉立上り、卷帶をしめる、此模樣流行唄にて道具廻る。

（深川向ふ川岸の場）――本舞臺、向う石垣、川岸附の土藏、材木、炭、薪、石の置場、總て深川向う川岸の體。揚幕より花道の中程まで打寄せの浪除、波の音にて道具納る。と花道より品川の乘合船一艘、それへ山歸りの仕出し○△□其の他、土産の槍を立て、大師參り商人のこしらへ、思ひ〱の仕出し、以前の七五郎與四郎も乘合せ、船頭竹笠を冠り水棹をさして川岸へ附ける。

船頭　お客さん、靜に上つて下せえ、危ねえよ。

○　よし〱、合點だ。

△　もし、どなたもお世話になりました。

□　いゝ追手だから、思つたより早かつた。

○　然し、さつきのばら〱にやあ恐れた。

□ おい船頭さん、酒があるから呑んでくんねえ。

船頭 そりやあ有難い。

○ そんなら久さん、足元を氣を附けねえ。

皆々 さあ〳〵行きやせう。

ト波の音にて皆々上手へはひる。七五郎此の内風呂敷を背負ひ、笠を提げて、

七五 とッさん、お世話でござりました。

船頭 氣を附けて行きなせえ。

七五 どつこいしよ。（ト足早に出る、跡より與四郎足早に追掛け來る。船は下手揚幕へはひる。）

與四 もし〳〵、旦那、ちよつと待つて下さりませ。

七五 わしがことかえ。

與四 左樣でござります。

七五 何ぞ用でもござりますかえ。（ト合方。）

與四 外のことでもござりませぬが、雁木から爰まで乘る内、品川で呑過ぎたせるか風に吹かれて心よく、お濱沖からぐつすりと寐ましたが、船の附いたので目が覺めて、ちとお尋ね申したいことが

ございますから、それでお足を留めました。

七五　わしに尋ねてえことがあるとは、どんなことだえ。

與四　御同然に狹い船、押合つて居ましたが、ついとろ〳〵とやる内に、財布の中へ入れてあつた金が見えませぬが、二分や三分のことならどうでもしますが、七十兩の金高、異なことを申すやうでございますが、わしが側に居なすつたはお前さまばかり、もし、ひよつとお包の内へでも紛れ込みやあいたしませぬか、實にお氣の毒ではございまするが、私の念晴らし、ちよつと御覽なすつて下さいませんか。

ト此内七五郎内懐から金を出して、笠當の間へ金を隱す。

七五　それぢやあ何と言ひなさる、大勢の乘合船、外の人に目も掛けず、わしがお前の側に居たゆゑ、其金を盜んだと言ひなさるのだね。（ト思入。）

與四　どうしてめつさうな、さういふ譯では。

七五　ねえことがあるものか、側に居たのが不承だから疑ひ受けるもわしが災難、大勢乘合ふ其の中で認めたことがあるならば、船を附けねえ前方に金がねえと言ひ出しやあ、何人居ても掛り合ひ、洗つて見りやあ目の前で盜んだ奴が出るだらう、外の手合を追ひ上げて、おれを目差していふか

らは、おれも世間へ面が立たねえ。存分に改めねえ。それ、風呂敷だ。

ト七五郎帶を解いて丸裸になつて、風呂敷を投出す。

與四　こんなことを申し度くもなけれども、實に私も主人の手前背に腹はかへられず、氣の毒らしい譯ながら、念晴らしがしたいばつかり。

ト風呂敷包みを廣げる、内より羽織と汗襦袢出る、與四郎脱ぎ捨てたる着物を取つてふるひ、怪しみのない思入、元の通り風呂敷を直して人違ひといふ思入あつて、

もし、大きに麁相を申し掛けました、眞平御免なされませ。

七五　それぢやあ盗んだといふ、疑ひはねえのかい。

與四　どういたして、此通り改めて、是れで疑念はござりませぬ、お腹も立ちませうが、了簡して下さりませ。

七五　コウ了簡しろ、御免なせえと言やあ濟むだらうが、おらあそれぢやあ濟まされねえ。何所の馬の骨か知らねえが大それたのだわ言、人參だましでいたぶり掛け、金でもあつたらぶつたくる仕事に掛けた追落しか、うぬがやうな太えやつァ、(ト七五郎與四郎を引附け、)おれが子にしてもいゝやうな奴を、大人氣ねえと知りながら盗人と言はれたからは、此の腹癒せをしにやあならねえ。野

郎め、覺悟をしやあがれ。

ト與四郎を薪にてくらはす。捨ぜりふにて言ふ詫びを聞かず、トヾ額へ疵附く、與四郎血潮の流るを見て、

與四　や、眉間を、

七五　打つたがどうした。(ト與四郎チエヽと口惜しき思入にて、額を押へ)

與四　金は奪はれ剩へ、打ち敲かるゝもこつちのあやまり、手出しもならない今日の災難、何の因果でこのやうな、情ない身になつたよなあ。

七五　吼えるか泣くか、是れで濟みやあ安いものだ。(ト笠を取つて)不足な面をしやあがるな。

ト與四郎を足蹴にする。

與四　こりや又あんまり、

ト縋るを七五郎突倒す、此時笠當の間より金包みばつたり落ちる、與四郎心附き、

さてこそ、おのれが。

ト取りにかゝるを、七五郎手早く引つたくり逃出す。與四郎引留めながら體の痛む思入にて取合ひ、波の音、佃にて兩人金を挖にくらがり模様の立廻り、トヾ七五郎の袖を捉へる、七五郎振切るはずみ

に片袖を引つ切る、與四郎どうとなり、

七五　泥坊々々。（ト言ひながら、施餓鬼の双盤にて逸散に上手へはひる。）

與四　うぬ泥坊め。（ト立たうとして體の痛む思入、どうとなるを木の頭）ちえゝ。

ト口惜しき思入、波の音双盤にてよろしく、

幕

ト波の音にてつなぎ引返す。

二幕目

矢矧橋の場
永代橋の場

〔役名〕――蓮葉與六、彌助忰猿之助、小猿七之助、酒屋の手代與四郎、奥家老横目助平、中間可助、蓮葉の郎黨。千葉の奥女中瀧川等。〕

〔淺葱幕の場〕――本舞臺一面の淺葱幕、馬子唄にて幕明く。とやはり馬士唄にて、花道より○△□の三人、脚袢、草鞋、菅笠、旅裝にて、長松茶碗屋といふ弓張提灯を持ち出來り、本舞臺へ來て、

○　これ太郎助、あの猿之助には、明神町の源左衛門も困るであらうな。

△こちの内へも、大工の棟梁青木甚兵衛が口入で、まだまあ來てから一月に、なるやならずにもう駈落。

□形に似合はぬ賢い奴ぢやが、その代り又あのやうな、惡戯な奴もないものだ。

○請人は源左衛門だが、あれが實の親といふは、愛知郡の中村で、彌助といふ浪人者、親に似ぬ猿之助、六つの年から今年まで、三十八度奉公に出したさうだが、惡戯ゆゑ、何處も長く置かぬさうだ。

△こちの内へ來る前に、光明寺の弟子になつたさうだが、毎日師匠へ膳を出す時、壺皿の蓋を明けて摘み喰ひをするゆゑ、なぜ師匠へ上げるものを、摘み喰ひを仕居るといふたら、大事の師匠へ上げるものゆゑ、毒味をしたといふたさうな。

□口賢いやつだ。

○然し利口かと思へば馬鹿でもあり、顏が猿に似て居るゆゑ、やつぱり猿利口と見えるわえ。

△何にしろ今日で五日、もうよい加減に歸らうではないか。

□それ〳〵、探し當て猿之助を、内へ進れて歸つた所が、どうで辛抱の出來ぬ奴。

○今夜はこれから岡崎で、よい女郎衆でも買はうではないか。

△それがよい〳〵。

□ 女郎と聞いては、早いが德だ。

○ さあ〳〵、行きませう〳〵。

トやはり右の鳴物にて、三人幕の引附へはひる。知らせに附き、淺葱幕を切つて落す。

（矢矧の橋の場）――本舞臺正面、眞向奥深に誂への矢矧の橋。欄干に矢矧橋といふ木札。上下埒を結びし石垣の上手、下手高札場岡崎宿といふ傍示杭、誂への柳の立木、同じく釣枝、後奥に池鯉鮒の方を見たる宿場の遠見、日覆より月を下し、上の方出語り臺、竹本連中居並び、よろしく波の音にて道具納る。と波の音打上げ、淨瑠璃になる。

〽東路に其名も高き岡崎や、流れも早き矢矧川、水に影浮く弓張の月の光に日吉丸、故郷へ跡に道連れは、伊勢の戻りの斑犬。

ト誂への出の鳴物になり、花道より日吉丸畫面の好みのこしらへ、樽の輪に手頃の竹を持ち走り出て來り、跡より首に木札、錢を結附けし伊勢參りの縫包みのぶち犬走り來て、飛びかゝる、ちよつと立廻りあつて棒にて打つ、犬逸散に揚幕の方へ逃げ行く。

日吉　ぶちよ來い〳〵、來い〳〵〳〵。

小猿七之助

〽ぶちよ來い〳〵小褄も高く、追ひつ追はれつ餘念なく、

ト又犬追掛け本舞臺へ來り、誂への合方、鳴物になり、犬の首へ輪をかけ上へ乘り手綱のやうに持ち、馬に乘りし思入、犬飛びかゝるゆゑ手摺へ登り渡る、跡より追ひかけることなどあつて、犬を相手に狂ひ遊ぶ立廻りよろしくあつて、草臥し思入にて、

〽犬を相手に日吉丸、狂ひ狂うてがつかりと、橋の袂に一休み、

ト日吉丸よき所へ下に居る。犬も側に息をつき居る。

あゝがつかりと草臥れた、もう〳〵休めく〳〵。（ト思入あつて、）長松の燒物屋を驅落してから今日で五日、くすねた錢も遣ひなくし、どうせうかと思つた所お伊勢さまのお助けで、ぶちが路銀で昨日からひだるい目もせずにしまつた、その代り今朝ッからとち狂ふのでがつかりした、今夜はこゝの橋に寐よう、われもそこらへころりとせい。

〽どれもう寐よと橋の上、一重が玉の床、臂を枕に岸に鳴く河鹿にまじる高鼾、

ト橋の欄干に掛けてありし誂への筵を橋の上へひろげ、日吉丸其の儘寐る、犬も下手欄干の蔭へ寐る、時の鐘。

〽往來も途絶え更くる夜に、忍び松明しと〳〵と、東の方より越え來るは、今海道に噂ある

野武士の棟梁蓮葉與六、先きに進みし郎黨が、日吉丸を打見やり、
ト これへ波の音を冠せ、橋の上より郎黨、一、二、胸當、渋附、大小、草鞋、强盜を持ち出で來り、
寐て居る日吉丸を見て、

郎一　えゝ、橋の上に悠々と、大の字形に高鼾、往來の邪魔だ、起きろ〳〵。

郎二　いや、見ればまだ年もゆかず、伊勢參りの野宿だらう、それなりに寐かしてやれ。

郎一　如何さま、こいつは拔參り、起さずと置いてやらうか。

郎二　それがいゝ〳〵。
へ見脫し過ぐる兩人の、跡に續いて數多の郎黨、橋上狹しと居並べば、棟梁與六くわん〳〵と月の明りに四方を眺め、
ト 郎黨の一、二橋の袂に控へる、又奧より郎黨三、四郎黨のこしらへにて出來り、左右に分れ控へる。眞中へ與六誂への頭巾、腹卷、籠手、臑當、附太刀好みのこしらへ、誂への槍を持ち出て來り、後に郎黨の五、六得物を持ち附添ふ、與六向ふを見て思入。

與六　雨氣附きたる雲晴れて、月の光りにあり〳〵と、矢矧の橋のたゞ中より、一目に見下す岡崎宿、

郎五　南は宮地中の鄕、

郎六　辰巳に當りて羽根、針崎、
郎三　北は大門、江田、岩津、
郎四　又丑寅は瀧、駒立、
郎一　見渡す所に火影もなく、
郎二　丁度時刻も子の上刻、
郎三　岡崎宿へ亂入なす、
郎四　丑三までは今一時、
郎五　徒黨の人數集まるまで、
郎六　時刻を松の下陰にて、
與六　牒じ合さん。者共來やれ。
皆々　はあゝ。

へ郎黨引連れ打過ぎる、路次に伏したる日吉丸、はつたと蹈めば起上り、裾を捉へて伸びあくび、

ト與六日吉丸の足を踏む、日吉丸起上り與六をとゞめる。

與六　何奴なるか道の妨げ、片寄つて通し居らう。

日吉　いや、通すことはならぬ。

　〽槍の柄とつて留むれば、（ト日吉丸與六の槍の柄をとつて畫面の見得、）

與六　なに、通すことならぬとは。

日吉　此の橋は通さぬから、通りたくば此の下の、川を越して行かつしやい。

　〽恐れ氣もなき一言に、憎きわツぱと郎黨共、

郎三　やあ、こいつがく、わツぱしの身を以て、大それたことぬかし居るな。

郎四　人もあらうに棟梁へ、詞を返すはのぶといやつ。

郎五　橋の上に寐て居るからは、大方宿なし乞食ならん。

郎六　踏殺して通るとも、何の構ひもない奴だ。

郎一　言はゞおのれは犬猫同然。

郎二　踏殺されぬを仕合せと、道を開いて、

六人　通し居らう。

　〽笠にかゝつて罵るを、耳にもかけぬ大膽不敵、（ト六人立掛ろ、日吉丸思入あつて）

日吉　いや、お前方のやうな禮儀を知らぬ人達は、通すことはならぬわい。

郎三　やあ、返す〳〵も憎きわッぱめ。

郎四　その息の根を、

六人　留めてくれん。

〽得もの振上げ立掛るを、蓮葉見るより聲を掛け。

與六　やあ、者共控へい。

六人　でも、憎きわッぱめゆゑ。

與六　はて、見所のある奴なれば、待てと申さば、まあ〳〵待ちやれ。

六人　へい。

〽鶴の一聲はゝはッと控へる郎黨、蓮葉莞爾と打笑みて、

ト是れにて郎黨一、二は橋の袂、外四人は與六の後へ控へる。與六思入あつて日吉丸に向ひ、

與六　こりやわッぱよ。

日吉　小父さん、何だ。（ト誂への合方になり、）

與六　今承ればわれ〳〵を、禮儀を知らぬ者といふが、此の往來の橋上に人もなげに倒れ伏し、往來

の妨げなすを言はず、却つて人を無禮者とは、如何なる仔細あつてのことぞ。

日吉　小父さん、お前それを知らぬか。

郎六　なに、知らぬかとは。

日吉　凡そ日本國中は皆おれが家同然、元より天下の往來なれば爰に寐れば爰が家、誰が主といふもなければ、今夜はおれが橋の主人、その主人の寐て居るを、後から來て踏み躙り、たゞ一聲の挨拶なく、通るは無禮であるまいか。

與六　何と。

日吉　假令大人であらうが子供であらうが、人間は同じ人間、何で挨拶をしないのだ。

與六　さあ、それは。

日吉　まだ其上に乞食の何のと、橋の上に寐て居れば、皆乞食と言はつしやるか。

與六　さあ。

日吉　何でおれを乞食といふのだ。

與六　さあ。

日吉　さあ。

兩人　さあ〳〵。
日吉　橋の主人を乞食といふなら、一飯たりとも振舞うた上で乞食と言はつしやい、隨分乞食になつてやらう。
與六　むゝ。
日吉　何と小父さん、そんなものではあるまいか。
〽只一言に言ひ伏せれば、理の當然に蓮葉も返す詞ぞなかりける、郎黨は齒嚙みをなし、
ト日吉丸胡坐をかき與六を見上げる、與六ぎつくり思入、皆々口惜しき思入にて、
郎五　やあ、こまツちやくれた理窟詰め。
郎六　假令棟梁の詞でも、
郎一　もう了簡がならぬわえ。
郎二　いで、息の根を、
六人　留めてくれん。
〽息の根留めてくれんずと、又立ち掛るを押しとゞめ。（ト六人立ち掛る。）
與六　やあ、皆の者逸まるな、わツぱが詞一理あり、殊に日本國中を我が宿なりとの一言は、大膽不敵

見所あり、殊に一飯を振舞はゞ乞食になるべしと、恥辱を厭はず今の理詰め、大丈夫の所爲といふべし、凡そ軍をなす者も斯く不敵なる心なくては、拔群の勝利は得難し、我れ思ふ仔細あれば聊爾いたさず控へ居よ。こりやわッぱよ、橋の主人に一言の禮をなさぬは我があやまり、許してくれよ。

〽頭を下げて打ちわぶれば、

日吉　そんならお前が、あやまつてか。

與六　如何にも。斯くあやまりし其の上にて、尋ね問ふべきことこそあれ。

日吉　何の事だか知らぬけれど、無禮を詫びた上からは、橋を越えて言はつしやれ。

與六　如何さま、爰は橋の上、平地へ行つて物語らん。

日吉　そんなら、小父さん。

與六　主人、許せよ。

〽一禮なして棟梁が橋を渡れば郎黨も、是非なく後に引續き、頭を下げてぞ通りける。

ト波の音を冠せ、與六日吉丸に辭儀をなし上手へ行く。後に續いて以前の六人跡より郎黨の七、八、九、十、十一、十二、十三、何れも郎黨のこしらへ、思ひ〳〵の得物を持ち出で來り、一々日吉丸に

辭儀なして舞臺の上下へ別れ住ふ。此内與六上手よき所へ床几にかゝる。

〽日吉丸は蓮葉が、床几の前にどつかと坐し、（ト日吉丸後より與六の前に住ひ）

日吉　して小父さん、尋ねたいことゝは。
與六　おゝ、外でもない、其方が產れ故鄕はいづくなるぞ。
日吉　おれが產れ故鄕かえ。
與六　包み隱さず、言うて聞かしやれ。
日吉　あい、おれは尾張の愛知郡中村の產れにて、彌助といふものゝ悴、日吉權現の申し兒ゆゑ日吉丸といひたれど、顏が猿に似て居る所から、誰いふとなくおれが事を、猿之助々々と人がいへば、親達も猿よ〳〵といふゆゑに、とう〳〵今では名になつて、猿之助といひこそする。

〽言ふに郞黨顏打ち見やり、

郞三　成程、無い名は附けぬものだ。
郞四　まことに猿に生寫し。
郞五　さうして爰に寐て居るは、
郞六　親の家を追出されたか。

日吉　いや〳〵親ではない、主の家だが、追出されはせぬ、追出たのだ。

郎一　して、其先は、

郎二　どこに行たぞ。

日吉　何所といふことはないが、先づ始りが光明寺、そこをしくじり坊主から思ひ附いて醫者の家、藥種が知れて生藥屋、

〽盗んで嘗めた砂糖の味、忘られぬので餅屋と出掛け、

そこも三日で追出され、それから煮賣屋、桶の輪屋、

〽銘酒屋昆布や地黄煎、とゞの仕舞が燒物屋。（ト此内日吉丸ちよつと振事あつて、）

是れまで出て來た奉公先き、凡そ其數三十八度、どんな家でも一月と、辛抱ならぬおれが病。

〽口から出任せ出放題、皆々呆れて口あんぐり、蓮葉始終をとつくと聞き、

與六　すりや尾張の愛知郡中村の產れにて、日吉丸とも又猿之助とも申すとな。

日吉　さうして小父さん、お前達は夜る夜半拔身にて、盗人でござるかい。

郎三　やあ、盗人とは何のたにこと、われ〳〵共は則ち野武士。

郎四　今戰國の亂りゆゑ、徒黨を集め旗揚げなし、

五郎 一國一城の主人とならん、
六郎 かねて望みのわれ〳〵ども。
吉日 して小父さん、お前の家は。
〽問ふに蓮葉打ちうなづき、
六與 我れも同國海東郡蓮葉村の住人にて、蓮葉與六將員と申す者。
三郎 まつた隨ふわれ〳〵は、伊勢森左衛門。
四郎 沖島七郎。
五郎 蟹江穴丸。
六郎 夏森繁藏。
一郎 東條珠數八。
二郎 犬井辨太郎。
七郎 牛立毛藏。
八郎 鰐市鐵太郎。
九郎 光正寺の入道一國。

郎十 鎌塚戸木六。
十一 汐入九郎。
十二 落合橋藏。
十三 三木本丸太郎。
郎三 何れも一味、
皆々 徒黨の者。
日吉 さうして今夜このやうに、大勢連れてどこへ行くのだ。
〽言ふに蓮葉威儀を正し、（ト小鼓の合方になり、與六思入あつて、）
與六 今日本六十餘州天下を望む者多く、既に當國三州は今川義元に屬し、隣國尾州は小田春秀に隨ふ、春秀屢々三州を襲ひ、嫡子春永兵を率ゐて吉良大濱に放火なし、やがて岡崎の一城を攻取らんことを謀る、かゝる時節のことなれば竊に岡崎の驛へ赴き、敵地の有樣窺ひて計略を施さんと徒黨の者を語らひて、今宵岡崎へ赴く途中、計らず我と同國のそちに出逢ふは値遇の縁、斯く橋上に伏さんより、今より我に隨うて野武士の列に加はらば、一飯の食を乞ふに及ばず、榮耀榮華は心の儘、何と隨ふ心はないか。

〽味方に附けんと蓮葉が、詞優しく打ちすかせば、有無をも言はずうなづきて、
ト與六よろしく思入にていふ。日吉丸うなづきて、

日吉　おゝ、どうで駈落したからは、國へ歸ることは出來ず、又どこへ行く當もなければ、お前の仲間へ入れて下され。

與六　すりや我が旗下に隨ふとか、おゝ出來したく。これ皆も悦べ、よい得物をしたではないか。

郎三　そんなら今日から、

皆々　わしらが仲間。

日吉　可愛がつて下されや。

〽言ふは流石にまだ子供、殊勝にこそは見えにけれ、與六は始終顏打ち守り、
ト此内日吉丸皆々へ手を突き頼む、與六思入あつて、

與六　最前から見る所、世の常ならぬ彼が面體、年に似合はぬ氣轉といひ、成人なさば一方の大將たらんは目のあたり、今宵岡崎に遺恨ある代官方へ亂入なし、不義の富貴を奪ひ取り、貧しき者に施さんと、思ふ折柄よき幸ひ、猿之助を伴うて、萬事の手筈を見物させん。

日吉　おゝ、其岡崎の代官なら、おれも遺恨のある奴だ。

與六　して又そちが遺恨とは。

日吉　この二三日此宿に遊んで居れど錢はなし、おすこや爰で三度の飯貰つて居るうち代官では、遂に一度施しをしたことのない强慾者。

郎九　そんなら家内の様子をば、

郎十　大方そちは知つて居やうな。

日吉　おゝ知つて居るとも〳〵、施しせぬゆゑ、日には幾度行つたか知れぬ。

十二　然らば今夜代官方へ、

十三　手柄始めに、

皆々　案内いたせ。

日吉　それは何より易いこと。委しく知つた家内の様子、おれが案内して遣りませう。

與六　それぞ幸ひ味方の强み、これにてあらまし家内の様子。

〽承はらんと進み寄り、（ト大小入りになり、）して、代官の表口は、南か北か如何なるぞ。

〽問ひ掛けられて日吉丸、しかつめらしく居直りて、

日吉　先づ代官の表口は東南の角屋敷、折廻しての高塀に、門口黒塗り冠木門。
郎三　して玄關の右の方は。
日吉　內玄關に主人の居間、廊下を隔てゝ圍ひの茶座敷。
郎四　して又左りに當つては。
日吉　土藏續きに貴座敷、庭は築山泉水に、橋を越えれば稻荷の社。
郎五　して〳〵裏手の樣子は如何に。
日吉　雜物藏に臺所、男女の部屋は右左。
郎六　して其次はいづくなるぞ。
日吉　湯殿の後が則ち馬部屋、前に車の井筒あり。
郎一　定めて豪家に用心嚴しく、
郎二　門を固めてあるは必定。
郎七　物音させず、
郎八　忍び入るには、
日吉　塀の內より差出し、柿の大樹を足代に、

〽傍に垂れし柳を傳ひ、ましらの如く梢へ登り、
ト日吉丸下手に垂れし柳の枝をぐつと引き、身をはずませ仕掛にて上へ登り、
枝を傳はり忍び入り、
〽難なく下へ飛び下りて、（ト日吉丸飛び下りて、）
門の閂内より明け、物音させず手引きをなさん。
〽さそくの頓智に蓮葉も、横手を打つて感心なし。（ト與六陣扇にて手を打ち、）

與六　ほゝお、天晴なる汝が手段、必定勝利に疑ひなけれど、若し又敵にも用意ありて、
〽前後左右を取り圍まば、
その時汝は、如何なすや。（ト與六ちよつと軍扇を使ひ思入、日吉丸思入あつて、）

日吉　おゝ、其の儀は氣遣ひしたまふな、木竹を相手に叩き合ひ、少しは覺えの此小腕。

郎一　なれども多數の人數にて、

郎二　まツこの如く、

八人　打ち掛らば。

ト郎黨の二、七、八、九、十、十一、十二、十三、思ひ〳〵の得物を持つて打つて掛る。日吉丸ちよ

つと立廻つて、

日吉　其の時こそは、子供の一德、

〽抜けつ潜りつあしらうて、叶はぬ時は厩より馬を引出し丁と打ち、驚き跳ぬる其の隙に、

トこれへ合方鳴物を冠せ、日吉丸以前の竹を折つて立廻り、よき程に伊勢參りの犬出る。これを馬にして竹にて打つ、犬驚いて皆々に飛びかゝる立廻りあつて、犬の後へ隱れ、

後へちよツぽり、隱れんぼ。

ト是れより誂への鳴物になり、犬の後へ附き「子をとろ〳〵」の思入あつて、棒にて四人打つてかゝり、よろしく立廻つて、トゞ井筒の形に棒を組む、日吉丸思入あつて、

もし又、あやふき其の時は、

〽手ごろの石を井筒へ打ち込み、落ちたる體にあざむきて、その場を逃げる我心、

ト此内日吉丸一人なふまへて有合ふ強盗を石の思入にて井筒の形の中へ打込み、つか〳〵と上へ上り、

お山の大將おれ一人。

〽子供遊びも前表に、實に當獨樂の乞食より天下を取るといふことは、後にぞ思ひ知られける。

ト日吉丸きつと見得、此内與六始終思入よろしく。

〽こなたに見惚れし蓮葉が、猶も豪臆試さんと、槍引ッ提げて立向ひ、

ト與六誂への槍を持つて立掛り、

與六 天晴さそくの汝の働き、感ずるに餘りあれど、如何に小冠者、雜人ばらはそれにても欺かれんが其の内に、衆に勝れし者あつて、まつかうなさば如何なすや。

〽とう〳〵はツしと打ち拔き、目先きへ突出す大身槍、恐れげもなく身を沈め手元へ附入る早業さそく、實に電の光りに均しく、前を覘へば後へ廻り右かと見れば左りへ逃げ、流石の蓮葉目當に迷ひ、如何はせんとためらへば、爰を〳〵とどつかと坐し、胸くつろげて教ゆるにぞ、憎き小冠者と突き掛くれば、日吉丸が眼中より赫々たる光り顯はれ、五體もすくむばかりにぞ、蓮葉おどろき槍投げ捨て、

ト此内大小入り鳴物にて槍の立廻り、日吉丸無手にて立廻りよろしくあつて、トゞ胸を開き突けといふ思入、與六突かうとする、此時ドロ〳〵になり、日覆より絹張の雲、一つ星現はれ、日吉丸與六をきつと見る、目より光りの顯はれし心にて、與六たぢ〳〵となりびつくり思入、此の時星を引いて取ること、與六槍を投げ捨て、

ほゝお、驚き入つたる手練の働き、殊に汝の眼中より鋭き光り顯はれて、五體もすくむばかりなり、よも凡人とは思はれず、如何なる人の再來なるか、汝が味方になつたるは此將員へ天の賜、本望成就疑ひなし、あら嬉しや悦ばしやなあ。

〽天地を拜し打悦ぶ、時しも告ぐる八つの鐘。

ト與六よろしく悦ぶ思入、此時本釣鐘の八つの鐘鳴る。

最早時刻も、丑三頃。

日吉　そんなら、是れより、

皆々　岡崎宿へ、

與六　案内いたせ。

日吉　はツ。

〽勇み進んで、

ト日吉丸花道へ行く、與六附添ひ、郎黨皆々は順よく舞臺へ棹に並び。

與六　いそふれ小冠者。

日吉　合點だ。

トきつゝ見得、誂へ華やかなる鳴物にて、日吉丸振つて花道へはひろ。是れを與六見て居てにつたり
と思入あつて、

與六 はて、勇ましい、わッぱだなあ。

ト又鳴物替つて、與六振つて花道へはひろ。引下つて郎黨皆々ゆつくりと、一人々々花道へはひろ。
鳴物打上げ、ドロ／＼になり、正面の遠見替つて、佐賀町川岸を見たる永代橋東の方の遠見。上手
の土手打返し黒塗りの駒寄せ、下手の高札場替つて葭簀の講釋場になり、正面に高座、後に「太閤記
矢矧の橋、讀切」といふビラ、よき所に床几を積上げ、此蔭に頰冠りして寐て居るものあり、橋の
欄干、矢矧の橋といふ札打返して永代橋となる。日覆より十三日の月を下し、よろしく道具納ると、や
はりドロ／＼にて日覆より、心といふ字を寐て居るものゝ後へ引いて取る。ドロ／＼打上げ、本釣鐘
誂への合方になり、寐て居るもの起上り、頰冠りを取る。と小猿七之助にて單衣、二重廻りの三尺
帶、草履好みのこしらへにて、伸びをしながら四邊を見て、

七之 あゝ、そんなら今のは夢だつたか。呑附けねえ燒酎でぐつすり醉つて切ないから、ちつと醉の覺め
るうちと煙草盆を枕にして、矢矧の橋の讀切りを二くさり聞くうちに、いつの間にか寐てしまひ、
夢に見たのは講釋で聞いた通りの矢矧の橋、成程知らねえことは夢にやあ見ねえものだ。又考へ

て見ると可笑いのは、矢矧に似寄りの永代橋、とつちりとんにもある通り、親は筑阿彌彌助といふ漁夫の悴の猿之助、おれも亦網打の七五郎といふ漁夫の餓鬼で、生れ立ちから手が長く、小猿と渾名の七之助、盗み心のある所まで、萬更緣のねえこともねえ、どうぞおれも末始終關白にでもなりてえものだ。ヘン、肴板着が聞いて呆れらア、（ト蚊を叩きゝえゝ、滅法蚊に喰はれた。

ト七之助體を掻きゐる、やはり右の合方にて橋の上より可助、中間紺看板にて、月星の紋附の箱提灯を持ち出來る、跡より瀧川模様物奧女中好みのこしらへ、是れへ横目助平羽織袴、大小奧役人のこしらへにて附添ひ出來る、橋の上にて、

助平　瀧川どの御覽じろ、佃島から鐵砲洲之浦まで見え渡る海上の夜の景色、よい眺めではござらぬか。

瀧川　助平さまのおつしやる通り、晝と違うて又夜るは景色も皆つて見えまするに、取分け冴えし盆の月、一入見事にござりますわいな。

助平　左樣々々、月夜には又格別美しう見えまする。（ト助平瀧川の顏を見て居る。）

可助　もし助平さま、佃島は向うでござります。

助平　入らぬ差圖をいたすな、身共向うを見て居るわえ。

可助　それでも瀧川さまのお顏ばかり、見ておいでなさるゆゑ。

助平　いや、是れは何だて、身共疳のせゐで目が引釣るゆゑ、其方などには瀧川どのゝ顏ばかり、見て居るやうに見えるであらうが、是れで丁度向ふを見て居るのだ。

可助　はあ、それでは藪醫者の古朴さまと、同じことでござりますな。

瀧川　いや、いかう夜も更けました樣子、急きませうではござりませぬか。

助平　それが宜しうござる。

可助　此のやうに更けるなら、お駕籠にいたせばようござりました。

瀧川　いや〳〵、暑い折は駕籠よりも、歩く方が氣が晴れてよろしうござります。

助平　左樣々々、駕籠ではとんと此顏が。

瀧川　え。

助平　いやさ、川風は涼しうござるて。

瀧川　さ、參りませうか。

ト橋を下り平舞臺へ來る。此の内七之助見て簪を拔かうといふ思入、瀧川の顏を見ていゝ女だといふこなし、よき所にて瀧川の草履の前鼻緒切れる。

これはしたり、草履の鼻緒が切れました。

可助　左樣でござりますか。どれ、すげて上げませう。
　　ト提灯を下へ置き、草履を取りにかゝるを、助平留めて、
助平　これ〳〵そちが構ふに及ばぬ、草履の鼻緒は身共が立てる。
可助　いえ〳〵草履の鼻緒を立てるは、こりや中間の役でござります。
助平　役であらうが何であらうか、是非とも身共が立てねばならぬ。
　　ト可助を突きのけ、瀧川の草履を取りにかゝる。
瀧川　これはしたり助平さま、勿體ない。あなたさまに、どうしてお頼み申されませう。
助平　いや〳〵それは入らぬ御遠慮、なぜというて御覽じろ、砂村のお下屋敷にお出で遊ばす、御隱居樣が御不例によつて、お上屋敷から奧樣の御名代にござつたこなた、卽ち今日一日は奧樣も同じこと、御主さまの草履なら、家來が直すが當り前、こりや主従の禮儀でござる。
瀧川　それぢやと申して、草履をば。
助平　はて、苦しうござらぬ、お出しなされい。
　　ト瀧川の穿いて居る草履を無理に引取る、是れにて瀧川、あれとよろめくを助平抱き留め、
あゝ危ないことでござつた。いや、身共草履を直す間肩へ取り附いてござりませ。

瀧川　いえ〳〵、それには及ひませぬわいな。

助平　はてさて、それはいらぬ御遠慮。

瀧川　左様なら、御免なされませ。

ト助平下に居る、瀧川肩へ手を掛け立ちかゝり居る、助平鼻紙を捻り小柄にて草履へ穴をあけ鼻緒を立てる、七之助欄干にもたれ、瀧川に見惚れ居る。

助平　瀧川どの、此の模様はよい模様でござるな。定めて京染めでござらう、なか〳〵江戸などでは斯うは参らぬ。（ト裾模様をぢろ〳〵見て褒める。）

瀧川　もう鼻緒は、よろしいではござりませぬか。

助平　よろしいとも〳〵。さゝ、はいて御覧じろ。直抜けるかも知れぬ、抜けたら又々直して進ぜます。

ト草履を直す。

瀧川　これは憚り、有難うござりまする。

トちよつと草履を戴く、此の隙を窺ひ七之助瀧川の銀簪を引抜き、講釋場の蔭へ隠れる。瀧川天窓を探り見て、

や、こりや簪を。

可助　さては、今の奴が。
助平　泥坊々々。（ト大きな聲をする。）
瀧川　あもし、お靜になされませいな。
助平　これ可助、盜人はどつちへ行つた。
可助　どつちへ行つたか存じませぬ。
助平　えゝ、氣を附けて居ればよいのに、何の爲めに供をいたすのぢや。
可助　わしよりはお前さまが、氣を附けて居さつしやればよいに。
助平　大きにお世話た、早く追掛けろ。
瀧川　あれ、可助どの、それには及ばぬわいの。
可助　はゝツ。（ト下に居る。）
助平　それだといつて、大枚の簪を。
瀧川　いえ〳〵、些細な品でござりますれば、其儘になされて下さりませいな。
助平　えゝ、可助をまかうと思うたに。
可助　あゝ、いゝ氣味だ。（ト此内瀧川思入あつて、）

瀧川　杏葉菊の紋所に、瀧川といふ我が名を彫入れさせしあの簪、もしや後日に何ぞの證據に。あゝ、よしないことにて思はぬ暇入り、嘸御上にてお待兼ね、少しも早う參りませう。

助平　左樣なれば瀧川どの。

可助　どれ、お供いたしませう。（ト合方になり花道へ行きかけ思入あつて、）

瀧川　あ、心にかゝるは。（ト簪へ心のかゝる思入。）

助平　え。

瀧川　かゝるは雨雲、（ト空へ思入。）

助平　大事の月を、

可助　隱さぬ内に、

瀧川　さあ、參りませう。

ト唄になり、可助先きに提灯を持ち、瀧川氣になる思入にて助平後より見とれながら花道へはひる。時の鐘誂への合方、葭簀張の蔭より七之助簪を持出で、瀧川の跡を見送り、思入あつて、

七之　年の頃は二十二三、女盛りの御守殿風、どんな奴が女房にするか、氣の惡い話しだなあ。

ト伸び上り見送つて居る、やはり時の鐘、右の合方にて花道より前幕の與四郎、辨慶縞の片袖を持ち、

死なうといふ思入にて出來り、花道へ留り、

與四　幾度思ひ直しても、七十兩といふ金を、おのが麁相で取られた上は、お主さまへの言譯に、この與四郎が命をば、捨てるより外思案はない。

七之　愚痴なことをいふやうだが、男に生れた上からは、あんな女を自由にしたら、人は知らぬが死んでもいゝ。

與四　どうで死なねばならぬゆゑ、此の身に覺悟はしながらも、お年寄られた親仁さまに、たゞ一日の御恩も送らず、先立つ不孝が黃泉の障り。

七之　迷ふ心にうつかりと、顏に見惚れて提灯の、紋に心が附かぬゆゑ。

與四　盜んだ者の名は知らねど、引きちぎつたる此の片袖。

七之　瀧川といふ簪に、彫のあるのが後日の便り。

與四　死んだ跡でも、是れを證據に、

七之　跡から附けて屋敷を見屆け、

與四　此の身の恨み、

七之　惚れた思ひを、

與四　男の一念、
七之　いつか一度は、
兩人　晴らさにや置かぬ。
　ト七之助は簪、與四郎は片袖を持ち心々の思入。知せに附き月隱れる。思入あつて、
七之　又雨雲に隱れし月。
與四　死ぬるに幸ひ、暫しの闇。
七之　火影を目當に、
與四　少しも早く、
七之　跡追掛けて、
兩人　おゝ、さうだ。
　ト七之助は花道、與四郎は舞臺へ來る、花道附際にて行き合ひ、あちこちとよけ合ひ、與四郎橋の上を行くを、七之助行き掛け、振返り見て、
七之　をかしな風だが。（ト橋の上を見る。與四郎橋の上にて）
與四　南無阿彌陀佛。

ト袖を持つた儘欄干より川の中へ飛込む。ドンと水音、水煙パットト立つ、七之助思入あつて、

七之　あゝ、身投か。（ト手拭をパラリと廣げるを木の頭、花道を見て、）南無三、一丁おくれた。

ト手拭を冠り佃になり、七之助逸散に花道へ走りはひる。これを一緒にキザミ、

ひやうし幕

三幕目

深川洲崎堤の場

同堤下漁船の場

〔役名――綱打七五郎、小猿七之助、與四郎の亡靈、船頭水掉の竹、お坊吉三、横目助平、船頭風雲源次、島崎の若い者與助、大野屋の若い者条吉。奥女中瀧川後に七之助女房御守殿お熊、島崎の抱へお杉等。〕

（洲崎土手の場）――本舞臺五間通しの高二重、棕櫚伏せの土手、後奥深に洲崎の沖夜るの遠見。平舞臺上手に一間の番小屋、本家根本緣附、此の屋體畫心に飾り。是れより上へ竹矢來の普請小屋、下手藪疊　舞臺前柵附の浪板、總て深川洲崎土手の體。雨車雷の音、佃にて幕明く。とばたくになり、上手より土手の上へ島崎の若い者與助、大野屋の若い者条吉の二人腰へ草履を挾み、尻端折りに

て安傘を相合にさして出來り、

與助　コウ大野屋の粂公、べらぼうに辷るから、もうちつと靜に歩いてくれ。

粂吉　それだつて降るばかりならいゝけれど、ごろつかれるのでたまらねえ。

與助　福山へ行つて休むから、もうちつとだ辛抱しろ。

粂吉　何しろとんだお客を送つて掛り合ひだ、又お杉さんも逃げるなら逃げるやうに、降らねえ日にしてくれりやあいゝに、追手の者がめつぽふ難儀だ。

與助　それに相手が名うての惡者お坊吉三と來てゐるから、假令居所を突當ても取戾すがむづかしい。

粂吉　然し惡者だといつた所が、まだ小僧ッ子のことだから、こつちから高飛車に脅して掛つたら返すだらうよ。

與助　どうして〳〵、小僧ッ子だと思ふと當が違ふ、何といつても親讓り、年に合しちやあ肚胸がいゝ。

粂吉　お杉さんも目先の見えねえ、あんな者と逃げた日にやあ、どうで終ひは二年と三年、又年期を增す仕事だ。

與助　跡の所は兎も角も、どうぞ砂村の伯母の所に隱れて居てくれりやあいゝが。

粂吉　高輪から仕立て船で、永代まで乘つたといふから、こつちへ來たに違ひねえ。

與助　何にしろ洲崎へ行つて、ちつとの内雨止みをしよう。
粂吉　ほんに、色氣もなく降るぢやあねえか。
與助　それ、光つたぜ。
兩人　桑原々々。

トやはり右の鳴物にて、雷の音きびしく、兩人下手へはひる。雨車、雷の音にて、引違へて下手より鋲打の乘物、○△の二人赤合羽饅頭笠にて是れを擔ぎ、同じこしらへの中間笠にて顏を隱し、箱提灯を持ち、前幕の横目助平青漆の合羽、一文字の笠、袴股立大小、何れも草鞋にて出來り、

助平　こりや〳〵中間ども、瀧川殿は殊の外雷鳴がお嫌ひゆゑ、早く土手を通り越すやう、肩を替へずに急げ〳〵。
○　急げ〳〵とおつしやつたとて、ごろ〳〵いはれては急がれませせぬ。
助平　えゝ氣の弱い奴等だ、雷鳴位に恐れをなし、武家奉公がならうと思ふか。（ト言ひながら助平顫へる。）
△　さうおつしやるお前樣が、先きへ顫へてござるくせに。
助平　身共が足の顫へるのは、こりや雷鳴ゆゑではない、砂村のお下屋敷で唐茄子を喰過ぎたせるだ。なに、これしきに恐れるものか。（トこは〳〵顫へる足をきつと踏む、此の時雷きびしく鳴る。）あゝ、

皆々　恐れます〳〵。

桑原々々。

ト好き所へ乗物を下し耳を塞ぎ顫へ居る。ドンと本鐵砲の音して落ちたる心、助平先に、駕籠の中間二人逸散に下手へ逃げてはひる、提灯持の中間俯伏せに倒れ居る、雷の音雨車段々薄くなる、よき程に倒れたる中間起き上る。と、小猿七之助にて、

七之　今の一つは強かつたが近所へ落ちたに違えねえ。（ト波の音誂への合方になり、七之助竹笠を取り、空を見て、）成ほど、馬の背を分けるといふが、もう西から切れ上つて星がちら〳〵見えて來た、そりやあいゝが助平樣を始め、駕籠の者は何所へ行つたか。（ト四邊へ思入あつて、）男でせえびつくりしたから、嘸駕籠の中の女中衆が、怖かつたことであらう。（ト乗物の戸を明ける、内に前幕の奥女中瀧川氣絶して居る）もし瀧川樣、強い雷でござりました。嘸びつくりなされましたらう。もし瀧川樣々々。（ト呼べども瀧川だまつて居る。）こりや大變だ、雷の音で目を廻したのだ。もし瀧川樣々々。（ト乗物の戸を取り、瀧川を介抱なし、）何しろ水を一口上げたいものだ。（ト舞臺前の流れを見て、）幸ひあすこに水がある。（ト土手より平舞臺へ下りて、）何ぞ入物がほしいものだ、手で掬やあ漏つてしまふし、えゝ仕方がねえ。

ト七之助口へ水を含みて土手へ上り、瀧川を起し、水を口移しに呑ませ、胸先を押し介抱する。此の時雲晴れし心にて月をおろす。七之助顔を見て、

あゝ、いゝ女だなあ。（トなまめいた合方になり思入あつて、ぐつと胸を押す、瀧川うんと心附く。もし、お氣が附きましたか、瀧川樣々々。（ト呼はる　瀧川眼をあき、ほつと思入あつて、）

瀧川　そんなら私は、今の響きに、はツと思うて氣を失ひしか。

七之　へい、どうなされしかと駕籠の戸を、明けてびつくり氣絶の御樣子、何をいふにも私一人、どういたさうかと存じました。

瀧川　それは嘸かし、いかいお世話。さうして横目助平樣や、駕籠の者はどうしましたな。

七之　今の一つにびつくりして、何處へ迯げてござつたか、茲に居たのは私ばかり。いやもう、いくらお名をお呼び申しても、さつぱりお氣の附かぬので、まことに困り切りました。

瀧川　其の代り、禮は屋敷へ歸つた上、きつとそなたにしますぞや。（ト是れにて七之助思入あつて、）

七之　へい、左樣なら私へ、お禮を下さるとおつしやりまするか。

瀧川　おゝ、禮をせいで何とせうぞいの。

七之　下さりまするなら、自由ながら、今お貰ひ申したうござりまする。

瀧川　さういふことなら今遣りませうわいの。（ト瀧川箱せこより金を出し、紙に包み、）又屋敷へ歸つてから、改めて禮はしますが、まあ、是れを取つてたもいの。（ト金包みを出す。七之助思入あつて、）

七之　へい、有難うはござりますが、金錢はほしくござりませぬ。（ト瀧川思入あつて、）

瀧川　なに、お金がほしうないと言やるは。

七之　私へのお禮なら、外に望みがござりまする。

瀧川　して、其の望みとは。

七之　へい、お情にあづかりたうござりまする。

瀧川　えゝ。（トびつくりなす。蟲笛誂への合方になり、）

七之　いや、何もびつくりなさることはねえ、命の親の私へお禮ならば瀧川樣、どうぞ叶へて下さいまし。

瀧川　下部の身にて大それた奥を勤める瀧川に、戯謔かは知らねども、其の樣なこと言やつては、そなたの爲めにならぬぞよ、横目樣や駕籠の者が茲に居らぬが何より仕合せ、此の場のことは此場ぎり、一旦恩あるこなたゆゑ、決して人には言はぬほどに、以後をきつと嗜みやいの。

七之　いや、嗜むことは出來ませぬ、是れが座興や戯謔で言つたことなら此儘に、指を啣へて引込みま

せうが、疾うから思つた瀧川樣、お側勤めの女中衆に不釣合も合點で、言ひ出すからは命がけ、どうぞ只今御返事を、お聞かせなされて下さりませ。

ト七之助赤合羽の儘手を突き賴む、瀧川思入あつて、

瀧川　そんならそなたは瀧川に、疾うから心を掛けしとか。

七之　お前の方ぢやお知るめえが、忘れもしねえ見掛けたのは、しかも盆の十三日。

瀧川　何と言やる。

ト誂への合方、蟲の音になり、七之助赤合羽を取り、紺看板にて坐り、思入あつて、

七之　所は名におふ永代橋、晝にもまさる月の夜にふッと見たのが緣の端、佃を越して來る風より身にしみ〴〵と思ひ込み、其の時拔いた此の簪、（ト叺煙草入より前幕の簪を出して、）杏葉菊へ文字入りに、瀧川といふ名前が知れ、雲間の月の見え隱れ跡から附けて屋敷を見屆け、それから直に足を附け、手廻り部屋や大部屋で、承知で負けて部屋子となり、ごろ附いて居た甲斐あつて、瀧川樣が砂村へお見舞に行くお供が足らず、困ると聞いて幸ひと、紺の看板に饅頭笠、提灯持ちに雇はれて來たのもこつちの一六勝負、どうかしたならこれまでの無い目も一番出ようかと、思つたつぼに目が立つて、丁と半とのさし向ひ、四の五の言はずと瀧川さん、一番受けさしてくんなせえ。

ト七之助片肌脫ぎ、尻を捲りきつと思入。是れにて緋縮緬の褌、銀鎖の掛守り見ゆること。瀧川ぞつ
としたる思入あつて、

瀧川　そんならいつぞや永代橋で、其の簪を拔き取りし、盜人にてあつたるか、え丶丶丶。（ト瀧川怖き思入、四邊を見て）この助平樣や駕籠の者は、何處へ行つた事ぢややら早う歸つてくれぬかいの。

七之　さあ、その邪魔の歸らぬ内、日頃の思ひを晴らさにやならねえ。（ト七之助瀧川の手を取り引寄せる）

瀧川　あこれ、それほどまでに此の身をば、思うてくれるは嬉しいけれど。

七之　いくら堪忍してくれといつたとて、中間にまで身をやつし、待ちに待つたる時が來たのに、どう堪忍がなるものか。

瀧川　さうでもあらうが私には、何を隱さう夫のある身、然も幼い其の宿入に、私が兄さん五郎どのが、今新川の酒店に奉公勤めてゐる、伯父の息子の與四郎どのと、互ひに家へ歸つた上、女夫にせうと言ひなづけ、それ故此の身をけがしては、どうも夫へ濟まぬわいの。

七之　そりや汚れぬ先ならば、亭主があれば止しにせうが、疾うにおぬしやァ汚れてゐるぜ。

瀧川　え丶、そりやまあ覺えもないことを、疾うに此の身を汚せしとは。

七之　ほかでもねえたつた今、氣を失つてゐる内に、おれが肌にて身體も溫め、呑ませる水も口移しに

した上からは、介抱なした恩返し、どうで汚れた上からは、命の禮とあきらめて、うんと言つたがいゝぢやあねえか。（トこれを聞き瀧川びつくりせし思入にて、）
瀧川　えゝ、そんなら私が氣を失ひ、知らぬを幸ひ。（ト瀧川泣伏す。七之助思入あつて、）
七之　さあ、濡れぬ先こそ露をも厭へ、もうかうなつたら往生しねえ。
　ト七之助瀧川の帶を捉へようとする手を押へて、
瀧川　知らぬさきは兎も角も、知つて此の身が汚されうか。
七之　まだ、未練なことを言ふか。（ト無理に帶へ手をかけるを、瀧川解かせまいとしながら、）
瀧川　あれ、誰ぞ來て下されいの〳〵。
　トあせる、七之助解けかゝりし帶の端へどつかと乘り、きつと思入、誂への合方、蟲の音になり、
七之　幾ら泣いても喚いても、町を離れた洲崎の土手、晝でもあるか更ける夜に往來稀な雨上り、濕り勝なる汐風に途切れた雲間の星明り、微に聞える辨天の茶屋の端唄や中木場の木遣の聲を寐耳に聞き、蝗やばつたと割床に、露のなさけの草枕、うんと言つてもいゝぢやあねえか。
瀧川　すりや、どうあつてもわたしをば。
七之　いやだと言やあ手籠めにして、ふんじばつても自由にする。

瀧川　そりや又あんまり、

七之　そんなら素直に自由になるか。

瀧川　さあ。

兩人　さあ〳〵。

七之　瀧川さん、はつきり返事をしなさらねえか。
　　ト是れにて瀧川、もう是れまでといふ思入あつて、

瀧川　假令死んでも女子の操、肌けがしては濟まねども、こゝで殺され死ぬ時は、御恩になりしお屋敷のお名の出るその上に、兄や夫に恥の恥、そこを思うてそなたの心に從ふほどに、今宵限りに此の後はふッつり思ひとまつて下され、死ぬる替りに病氣と言うて、お暇願ひ尼となり、夫に言譯する心、こゝの道理を聞分けて、此の場限りで許して下さりませいな。

七之　そりやあおれも男のこと、一旦思つた念が晴れりやあ、今夜のことは今夜限り、口を拭いて後ちやあ言はねえ。

瀧川　今宵限りを承知なら、そなたに任する此の身體。

七之　そんならおれに隨ふか。（ト瀧川涙ながらに、）

瀧川　あいなあ。
七之　得心したなら、更けねえ内に。
ト七之助上手の番小屋へ思入あつて、瀧川の手を取り兩人立上る。瀧川誰ぞ來ればよいといふ思入。
此の時上手より序幕の吉三、お杉出來り思はず行き當り、入替つて、
吉三　えゝ、目を明いて歩け。（ト七之助是れを聞き、）
七之　や、さういふ聲は。（ト覗き込む、兩人顏見合せ、）
吉三　おゝ、小猿の七か。
七之　誰だと思つたら、お坊吉三か。
吉三　お厩で別れたきり、手前にやあ逢はなんだ。
七之　見りやあ女と二人連れ、どこから引張つて來たのだ。
吉三　手前も知つての伯母の娘、品川のお杉よ。
お杉　おや七さん、よくおいでだね。
七之　なに、よく來た。
吉三　まだ、品川に居る氣のやつさ。

お杉　おや、どうせうね。
七之　はゝあ、それぢやあお杉坊を引ツ攫つて來たのか。
吉三　どうでおれがことだから、年拔けといふ仕事にやあいかねえゆゑ、宵に裏から連れ出して、砂村の伯母御の所へ餘焔の冷める內、留めて置かうと來る途中、俄雨に木小屋へ飛込み、こいつが雷を怖がるのを相伴して居る內、やう〳〵雨が上つたから、今砂村へ行く所だ。
七之　道が惡くて困るだらう。
お杉　七さん、お連は女中さんかえ。
七之　連れと何所かへ行かうといふのだ。
吉三　さういふことなら此の先きに、雨宿りをした木小屋がある、そこで凌ぐがいゝ。
七之　そりやあ妙だ。さあ、こつちへ來ねえ。（ト此內瀧川後に泣き居て淚を拭ひながら、）
瀧川　はい。（ト顏を背け、）どなた樣も、御免なされませいなあ。（ト兩人へ辭儀をする。吉三見て、）
吉三　七や、渡りはしつかりだらうな。
七之　默つて居ろえ、胸にあらあ。
吉三　へん、溜飲ぢやアあるめえし。

七之　豪氣に洒落があがつたな。（ト七之助瀧川上手へはひる。お杉跡を見送り）

お杉　吉さん、いゝ御守殿だねえ。

吉三　さうよ、まるで梅幸だな。

お杉　幾歳ばかりだらうね。

吉三　まだ廿五にやあならねえやうだ、始終は七の喰物らしいな。

お杉　さういふお前も、七さんと同じ惡仲間、隨分邪慳なはうだから、是れから二度の勤めをするのは、わたしや覺悟して居ますよ。

吉三　そりやあ何よりいゝ覺悟だ、なるたけ勤めはさせねえ氣だが、元より金のねえおれだから、切羽詰りやあ二年ばかり、勤めて貰はにやなるめえよ。

お杉　何にしろ砂村へ、更けない内に早く行きたいね。

吉三　違えねえ、早く行つて足でも伸ばさう。（ト吉三お杉上手へ行く。此時下手より以前の與助粂吉出で、）

與助粂吉　うぬ吉三め、見附けたぞ。

吉三　や、わりやあ島崎の若い者。（トお杉を圍つて、）こりやあおれを何とするのだ。

與助　何とするものだ、連れて逃げたお杉さんを、引戻しに追掛けて來たのだ。

粂吉　お前を內から送つたばかり、掛り合ひで一緒に來た、見附けられたが百年目と、野暮なことを言はねえて、

兩人　早く女を渡しなせえ。

吉三　やかましいわえ猿松め、勾引してゞも少やあしめえし、得心づくで迯げた女を、素直に返すものかえ。

與助　なに、すぐ素直に返さねえ。これ岡場所とは譯が違ふぞ。東海道の御川宿飯盛女を引張りやあ、言はずと知れた勾引。

粂吉　淸く女を渡しやあよし、惡く脅しをぬかしやあがると、代官所へそびいて行くぞ。

吉三　むゝ、連れて行くなら連れて行け、吉原なら知らねえが、御川宿でも飯盛を賣つたといつちやあ濟むめえが、得心づくで迯げたのを、勾引だと名を附けりやあ金輪奈落返しやあしねえぞ。昨日今日までお手車、お乳母育ちのお坊吉三、見掛けはけちな小二才でも、いざと言やあ足利眤近命が入らざあ連れていけ、慮外をしたと名を附けりやあ、切捨てにして濟む御身分だ。

與助　金で抱へた飯盛を、勾引した其上に、切つて濟むなら切つて見ろ。

粂吉　年が年中侍の、お客を相手にする品川、そんな脅しを恐れるものか。

與助　四の五のと面倒だ、代官所へそびいて行け。
粂吉　合點だ。
吉三　さう吐かしやお命がねえぞ。
兩人　何を小癪な。

ト波の音、佃になり吉三一腰を拔き切つて掛る。兩人有合ふ縫包みにて立廻り、よき程に下手より以前の駕籠の中間出來り、びつくりなし、件の駕籠を擔ぎ上手へはひる。吉三追掛け行かうとするを、兩人支へる立廻り、トゞ兩人叶はず下手へ逃げてはひる。吉三追掛けんとするをお杉留めて、

お杉　逃げて行つたはこつちの幸ひ、取つて返さぬ其の内に。
吉三　少しも早く、さあ、來い。

ト時の鐘誂への合方、吉三お杉の手を取り上手へはひる。右の合方にて、上手より以前の七之助。瀧川出來り、四邊へ思入あつて、

七之　思ひの外に更けたやうだ、少しも早く出掛けよう。（ト瀧川思入あつて、）
瀧川　わたしや屋敷へは、歸らぬわいな。
七之　なに、屋敷へは歸らねえ。（ト思入、）

瀧川　さあ、どうで屋敷へ歸つたとて、御奉公が勤まらねば、此の儘直に何所へなりと、連れて行つて下さんせいな。

七之　え、何だと。（ト合方きつぱりとなり、兩人思入。）

瀧川　言ひなづけせし夫のある身で、外の男に從うては、假令一度のことにもせよ、女子の操が立たざれば、此のまゝ直に尼法師、一生男は持つまいと覺悟をなした小屋の内、初めてお前に身を任した、今となつては心の迷ひ、此の黑髮が切り惜しく、どうで濡れたる袖なれば、言ひなづけせし夫を捨て、浮名厭はず此の身をば、お前に任して末始終、女夫になりたいわたしが願ひ、どうぞ叶へて下さんせいな。

七之　むゝ、その身に疵が附いた故、言ひなづけした男を捨て、おれが女房にならうとか。

瀧川　それも下部と思ひのほか、見れば見るほど床しさに、初手の憎さも何處へやら、とても女子と生れたならばと、義理も操も打捨てゝ、しみ〴〵わたしや思ひ附きましたわいなあ。

七之　そりやあほんとかいゝ知らねえが、これまでおらアこんなことを、女に言はれたことがねえから、何だか胸がどきつくやうだ。

瀧川　何の噓を申しませう。かうなつたらば親兄弟の恩も仇、供の者の返らぬ内、連れて退いて下さり

ませいな。

七之　連れて行けといはれても、行先のねえおれが體、今日は淺草明日は芝、人立ち多き盛り場で顔を知られた巾着切、鼠のあとの小猿の七、兇狀持と聞いたなら、よもや女房になる氣はあるめい。

瀧川　いえ〳〵、一旦斯うと思つたら、假令どんな世渡りでも、夫に附くが女房の役。

七之　さう又肚胸がすわつたなら、是れから直に隨德寺、

瀧川　何處の浦へか身を落附け、

七之　おれが女房にするからにやあ、椎茸髱も水髪に、

瀧川　似合ぬながら横櫛に、楊黄の木櫛の附燒刄、

七之　矢の字に結んだ天鵞絨も、六寸幅の腹合せ、

瀧川　御殿模樣も搔卷に、

七之　化けて是れから山の神、

瀧川　芝居で見たる惡婆のやうに、

七之　湯屋でも拵ぎやあ夫婦の働き、

瀧川　物見遊山は心のまゝ、

七之　萬更でもねえ生業よ。
瀧川　善は急げといふからは、
七之　そんなら是れから、
瀧川　少しも早く、
七之　どれ、道行きと出掛けようか。
ト時の鐘、合方かすめて波の音、兩人身拵へする。此時花道より、以前の助平沼へ落ちたる思入にて、顔も手足も眞黒になり、
助平　やれ〳〵、今の雷で沼の中へおつこちて、泥水を呑んだ上、鼻の穴の中へ鰌がはひつて、むづむづと惡い心持ちだ。（ト是れにて瀧川びつくりして七之助に囁く、兩人うなづき、藪の蔭へ小隱れする）それはさうと瀧川どのは、何所へ逃げてござつたか、もしも行方の知れぬ時は、此の横目が扶持の喰上げ、あゝ鼻の穴がむづ〳〵してならぬ。（ト助平舞臺へ來る、七之助瀧川花道へ行かうとするを透し見て）や、瀧川どのが。
瀧川　え。
助平　よく爰に待つてござつた。（ト瀧川を引き留めるを）

七之　えゝ、寄りやあがるな。（ト突き退ける。）
助平　や、わりやあ新参の中間め、さてはおのれが瀧川どのを。
七之　おゝ、引ッ攫つて女房にするのだ。
助平　えゝ、身共が心を掛けたるに。（ト留めるを、）
七之　無駄なことだ、放しやあがれ。
　ト振拂ふ、助平又留めるを立廻つて蹴倒す、是れにて助平ウンと倒れる。
瀧川　此間に早う。（ト七之助、助平を見て、）
七之　むゝ、大べらぼうめ。
　ト時の鐘、三重模様の合方にて、七之助瀧川の手を引き足早に花道へ走りはひる。助平心附き、起上り、まじめに坐つて、
助平　さては二人は逃げ失せたか。（ト伸び上り向うを見て、）ハックショ、（ト嚔をする、是れを道具替りの知らせ、）鼻から鰌が飛び出した。
　トよろしく思入、時の鐘、波の音にて助平鰌を押へる思入。よろしく道具廻る。
（土手下網打の場）——本舞臺右の土手の後の心、一面に棕櫚伏せの土手、上の方切破りの藪疊、下

の方平舞臺、岸の心にて切破りの蘆原、舞臺前土手の際とも一面の波手摺、後黑幕、總て洲崎土手海手の道具、よろしく留る。と誂への合方、波の音になり、下手より丸物の漁船舳先の方に七五郎筒ッぽの長半纒、紺の腹掛け、腰簑、網打好みのこしらへ、誂への打網を持ちて立身、艫の方に源次、刺子の長半纒、三尺帶、同じく船頭のこしらへにて、櫓を押しながら出來り、

源次　親分、べらぼうに闇くなつたぢやあねえか。

七五　今の間に月が隱れて、手許が見えねえ程眞闇だ、何しろ一服やつて行かうぢやあねえか。

源次　それがいゝね、一息吐いて行きやせう。

ト源次櫓を上げ、櫂を立つてもやふ、七五郎摺火打にて煙草を吞みながら、空を見て、

七五　またこれは、降つて來るわ。

源次　どうか時化に廻りさうだね、此間から日並が悪いので、河岸にも新場にも鰯ッ子一尾ねえ、時化も時化も、めつぽふけえな時化だ。

七五　何でも南が吹きこまにやあ、川岸へ魚は出て來ねえ。

源次　親分聞いてくんねえ、昨夜も裏の助野郎が永代の下で、赤目魚を三本取つて來たが、今朝平清へ二分二朱に賣りやあがつた、あいつらに長い錢を儲けられるのが癪に障るから、それで親分を引

出したのさ、何でも今夜は二三兩の、仕事をしにやならねえ。
七五　いや、此の頃のやうに目が立たなくなつちや、漁に出ても旨え仕事はねえわえ。
源次　ほんに、めつぽふ取られなすつたさうだね。
七五　僅十日ばかりの内に七十兩、いやさ、七兩ばかり取られた。
源次　さうかえ、わつちやアもつと耗んなすつたと思つた。（ト七五郎四邊へ思入あつて、）
七五　源次や眞闇で知れねえが、爰は洲崎の土堤下だぜ。
源次　なに、お前芝浦へ行く積りで、出掛けたのだから、丁度爰らは鐵砲洲だらう。
　　ト七五郎向うを透し見て、
七五　成程、こいつアけぶだわえ、汐はずん／＼下げて居るに、何でこつちへ上つたらう。何しろあんまり闇え、切上げて歸らうぢやあねえか。
源次　歸るなら歸つてもいゝが、何ぞ一本大きなものを、引きあけて歸りてえものだ。
七五　ちつと雲が切れたやうだ、爰で二三番遣ッ附けようか。
源次　もし親分、そこで何か跳ねやしたぜ。
七五　えゝ、靜にしねえ。

ト時の鐘、ドロ／＼のやうな波の音、凄き合方になり、源次櫓を押す。七五郎網こしらへをしてよき所へ網を打つ、是れにて兩窓を下し眞闇になる、七五郎網を引寄せる思入あつて、

源次、大きなものがかゝつたぜ。

源次　なに大きなものが掛つたえ。そいつア占めた、大方鱸だらう。網を切られねえやうにしねえよ。

七五　そりやあ網打の七五郎だ、鯨でも上げて見せらあ。

ト七五郎段々網を寄せながら引き上げる。源次覗き込み、

源次　親分、何だ／＼。

七五　何だか眞闇で知れねえが、すてきに重い。

ト言ひながら網を引き上げる、此の時波の音ドロ／＼のやうに烈しく、網に掛りしは序幕の與四郎の亡靈にて片袖を持つた儘、ずつぷり濡れて裏向きに出る。此の時上手より川施餓鬼の板へ附けし蠟燭流れ來る。

源次　しめた／＼、川施餓鬼の蠟燭が來た。

七五　何だか知らねえが、すてきに重い。

ト七五郎きつと見込み、件の蠟燭眞中へ來る。與四郎正面を向く、やはり頬に血汐の流れし疵あり、

七五郎をきつと見る。

や、われは。

トぎよつと思入、源次是れを覗き見て、びつくりしてどうとなる。七五郎振放さうと網をふるへど放れぬゆゑ、網の儘手を放す、是れにて與四郎切穴へはひる。源次顫へながら、

源次　親分、氣味が惡いね。

七五　えゝ、此野郎は意氣地がねえ、水の上の生業をしながら、土左衞門が怖いのか。

源次　なに、たゞの土左衞門なら怖いことはねえが、あの土左衞門ばかりは氣味が惡い。

七五　手前あの土左衞門を知つて居るか。

源次　あい、よく知つて居ります。

七五　え、どうして手前知つて居る。

源次　もし親分、斯ういふ譯だ、忘れもしねえ十三日の晩、あんまり暑くて寐られねえから、永代の下へ船を繋つてとろ〳〵とやつた所、それ身投げだといふ聲に、びつくりして起上り、川の中を見た時に丁度死骸が浮き揚り、しつかりと見た顏の疵、今日でもう十日ばかり、此の暑いのに腐りもせず、生々しいあの死骸、何でもありやあたゞ事ぢやあねえ。

ト源次不氣味に言ふ、此時浪の音烈しく、びくの中の鯉跳ね上る、源次びつくりして「それ出た、」と逃げる拍子に源次は海の中へ飛び込む。ドンと水の音、水の花パッと立つ、七五郎びつくりして、

七五　え〻、びくの中の鯉がはねだしたのだ、臆病な奴だやあねえか。（ト鯉をびくの中に入れ、）こぐらでも返りやあしねえか。まだ浮いて出やアがらねえ。（ト櫂を取つて海の中を捜す思入あつて、）源次か源次か、しつかりとしろ。意氣地のねえ奴だなあ

ト櫂を引上げる、やはり凄き合方、ドロ〳〵にて此の櫂へ與四郎縋り上る、七五郎見て、

や、こりや源次と思ひの外。

ト與四郎片袖をさし附け、七五郎を恨めしさうにきつと見て、

與四　七十兩を返して下さい。（ト七五郎思入あつて、）

七五　さてはおのれは、迷つて居るな。

與四　われに恨みを晴らさうと、中有に迷ふ我が魂魄。

七五　何を小癪な。

ト櫂を振り放さうとするを、與四郎放さぬゆゑ、其儘海へ突込む思入あつて、櫂を引き上げる。與四郎又櫂へ縋り出で、きつと見る、

え丶又してもしみしつこい、七十兩のあの金は、僅十日たゝねえ内に、みんな耗つてしまつたわ。言はゞおれが菩提の爲め施行に出したも同じこと、何も恨まれる覺えはねえ、きり〳〵往生してしまへ。

ト櫂を引ッたくり吹替を打つ、是れにて吹替切穴へ消える。ドロ〳〵烈しく、七五郎の前へ燒酎火を引上げる、七五郎見て、

執念深い。（ト櫂を突き立てるを木の頭）奴だなあ。

ト燒酎火を見上げる。ドロ〳〵、双盤のセメにてよろしく。

ひやうし幕

四幕目

三日月長家の場
大川端石場の場

（淨瑠璃）

藤かづらの文句を借りて、
憂きを身に知る袖の雨、
星逢瀨戀柵（吾妻路連中）

〔役名〕――道中師一時三五郎、小猿七之助、倉ヶ野屋儀兵衞、葛飾善導寺の所化教眞、横目助平、

善導寺の所化海典、料理人赤吉、中間强情傳內、枝豆賣ぽん太。切見世女郞おさめ、同おなほ、路地番いなせの市、切見世の賄ひお捨、七之助女房御守殿お熊、七五郞娘お波、善導寺小坊主眞海等〕

（三日月長屋の場）——本舞臺三間常足の二重、本戶を立てたる三つ見世の長家、向ふ後尻桝組の腰障子、火の用心の掛行燈、上下共板塀、眞中の見世におさめ浴衣平ぐけ、島田鬘更けたる女郞の裝、下手見世におなほ髮の毛の拔けたる島田鬘女郞の裝、いなせの市半纒三尺帶路地番の裝にて鐵棒を持ち、仕出し○△□◎等立掛り、總て吉原三日月長家の體。さんげ〳〵鐵棒の音にて幕明く。

市　廻らう〳〵。（ト鐵棒を引き上手へはひる。）

○　八や見や、同じ長屋だけれど、假宅より本宅の方が、どうでも極りがいゝなあ。

△　さうよ、べらぼうに普請が立派に出來た、どうしても此の長家が一番賑かだぜ。

□　そりやあ知れたこと、此の長家にやあ御守殿お熊といふ、評判の女郞が居るから流行る筈だ。

◎　あれ見や、叉戶が締つて居らあ、何時來ても、ほんに宵にちらりと顏を見るばかり、三日月長家とはよく附けたなあ。

さめ　これさ町人さん、お熊さんの噂ばかりしないで、外にも女郞が幾らも居るよ、遊んでおいでな。

なほ　これさ、緣起だよ、一服呑んでおいでよ。（ト鼻聲にて煙草を吸ひ附けて出す。）

○　あいおかたじけ、吉や見や、どうでも色男は違つたものだぜ。コゥべらぼうに呑みがいゝ煙草だぜ。
△　たゞ呑む煙草だと思つて、おつゥ言やあがるぜ。然しこんな毛の脱けた女郎に、吸ひ付けて貰ひたくねえ。
なほ　何だ毛が脱けて居る。おや、聞いた風な容だよ。
□　また中の長屋の女郎は、背丈高な女だな。
さめ　あい、わつちは背丈が高いから、蒟蒻屋の上さんになるのだよ。うつちやつて置いておくれ。好かねえよ。
◎　好かれなくつて丁度いゝ、さあ一遍廻つて行かう。
四人　廻らう〳〵。（ト右の鳴物にて四人上手へはひる。）
さめ　どいつもこいつも聞いた風だよ。
なほ　ほんに好かねえ奴だよ。
ト兩人鹽花を蒔く、いなせの市捨ぜりふにて煙草を呑み居る。右の鳴物にて、花道より久助町人裝、つん内中間裝にて出來り、舞臺へ來る。
さめ　これさ町人さん、遊んでおいでよ。（ト久助を引張る。）

久助 そんなに野暮に引張んなさんな、おらあ遊ぶのぢやあねえ。
さめ 遊ばねえものが、なぜ長屋へはひりなすつた。そんなことを言はねえで、上つておくれよ。
なほ これさお屋敷さん、上つておくれよ。おや、お前は田圃のつん内さんぢやあねえか、豪氣に醉ひなすつた。
つん おゝお八重か、おらあすてきに醉つた。ようた（八日）は藥師の御緣日か。
なほ おや、古い洒落だの、そして何ぞいふとお八重〳〵と、わつちやあお八重ぢやねえよ。
つん そりやあ何といふ名だか知らねえが、お八重だからお八重だといふのだ。
なほ 緣起でもねえ、そんなことを言つておくれでないよ。
市 どなたかと思つたら、田圃のお屋敷のつん内さんに、伊勢五の久助さんか、お早うございます。
久助 路地番の市公か、本宅で大層人が出るの。
市 まことにいそがしうございます、どなたもお早くお上んなさい。
さめ 夜が短かくなつたから、早く上つておくれよ。
久助 上りたいが、勤めがない。
さめ なに、ないことがあるものか、ちよつと懷をお見せ。（ト久助の懷へ手を入れる。）

久助　これさ、何をするのだ。（トおさめ久助の懐から文と見える淨瑠璃觸れを引出し）
さめ　おや、こりやあ何だえ。
つん　そりやあ女の文だらう。
久助　なに、今道で拾つたのだ。
なほ　なに、拾つたもないものだ。
さめ　市さん、そこで讀んで見ておくれ。
市　合點だ。（トいなせの市受取り開き見て）「淫瑠璃名題――」（ト淨瑠璃名題、太夫連名、役人替名を讀み）
　こりやあ吾妻路の淨瑠璃觸れだ。
久助　何と、女の文ぢやァあるめえが。
つん　どこでこんなものを拾ひなすつた。
久助　今そこで拾つたのだ。
市　今夜隣の店頭に、吾妻路の淨瑠璃があるといつたが、慥にそれに違ひない。
なほ　それぢやあ今夜は、淨瑠璃が聞かれるね。
さめ　早く泊りを取つて聞きたいものだ。

なほ　さあ、ぐづ〳〵せずと早くお上りよ。
つん　それぢやあお八重上らうか。
なほ　又お八重か、氣になるよ。
市　さあ〳〵、早くお上んなせえ〳〵。
　ト右の鳴物にて、おさめ、おなほは久助、つん内を連れて見世へ這入り戸を締める。いなせの市は上手へはひろ、右の鳴物にて上手見世の戸を明け、お熊切見世女郎、結び髪好みの裝にて、一人の町人頰冠りをして出る。
お熊　お前明日の晩待つて居るから、きつとお出でよ。（ト若い衆うなづいて下手へはひろ。）欺すときかないよ、取り附くよ。
　トお熊見世へ腰を掛け煙草を呑居る。名古屋名物になり、花道より横目助平、三幕目の侍にて着流し羽織大小手拭を吉原冠りにして、國節を唄ひながら出て、
助平「お前元服なさるならば、よ、さいの〳〵、わしも留めましよ振りの袖、さいの〳〵、した事内證內證。」（トうたひながら舞臺へ來る、お熊見て、）
お熊　もしお屋敷さん、上つておくれ〳〵。（ト袖を引く、助平お熊を見て、）

助平　いや、あでやか〳〵、かゝる賤しき遊女にしては美しいもの。（お熊の顔をよく〳〵見て、）や、そなたはどうやら見たやうな女子ぢや。おゝ見た筈だ〳〵、お手前は千葉家の奥女中、瀧川どのではないか。

お熊　ほんに、さうおつしやるは、横目助平さまか。

助平　おゝ、助平でござる〳〵。やれ〳〵思ひがけない。

お熊　こりやもう、爰には。（ト逃げようとするを、）

助平　どつこい、逃がさぬ〳〵、まあ待たつしやれ〳〵。

お熊　お恥しい裝で、お目にかゝります。

助平　大事ない〳〵、まあ〳〵爰へ〳〵。（ト靜なる騷ぎ唄の合方、兩人床几へ腰を掛け、）あまり思ひがけない姿ゆゑ、身共もびつくりいたしたつ。然し又奥女中の時と事替り、洗ひ髮の切見世姿、いや美しいもの〳〵。（ト見惚れる思入。）

お熊　何を言はしやんすやら、わたしや面目ないわいな。

助平　いや、ちと面目ござるまい、此間のやうなれど最早三年跡、深川で砂村の御下屋敷の歸り道、洲崎の土手で大雷、供も身共もちり〴〵に逃走つた其時に、雇ひ中間の七之助とこなたと二人の行

方が知れず、身共が附添ひ居つたゆゑ、上より重きお咎め受け長々の窮命、二人が行方を詮議いたし居つたに、よい所で出會した。さあ直さま屋敷へ引立て參る、身共と一緒に歩ばつしやい。

ト引立てようとする。お熊思入あつて、

お熊 何だな、外聞の惡い、野暮に大きな聲をして、まあ靜におしな。

助平 いや〳〵靜にはならぬ、聲の大きいは身共が持前、さあ、きり〳〵歩ばつしやい。

お熊 これさ助平さん、靜に言つても譯は分るわな、わたしがお前にいろ〳〵話しがあるからネ、今夜はわたしの所へ泊つておくれ、寐ながらゆつくり話しをするからサ。

ト助平の手を取る、助平びつくりして、

助平 そんなら瀧川どのは、當時勤めのそもじゆゑ、身共を客にするといふのか。

お熊 わたしや嬉しくつてならないよ。

助平 そりやまあ、こなた、本當か〳〵。

お熊 嘘にこんなことが言はれるものかね、さあ、早く上つておくれよ。

助平 こりや、夢ぢやあないか。

お熊 何を常談ばかり。

助平　夢なら覺めるな。
お熊　助平さん。
助平　瀧川どの。
お熊　えゝもう野暮な、さあおいでよ。
ト流行唄にて、お熊助平の手を引き上手の見世へはひる。兩方の見世よりおさめは久助、おなほはつ
ん内を連れて出て、
さめ　お前、またいつお出でだ。
久助　明日の晩出て來よう。
さめ　當にせずに、待つて居ようね。
久助　おいらは嘘をつくことは嫌ひだ。
さめ　賴もしいね。
なほ　つんさん、明日又おいでよ。
つん　來なくつてどうするものか。
なほ　實があるよ。

つん　なほや、あばよ。

なほ　おや、好かないよ。

ト流行唄にて兩人下手へはひる。おさめ、おなほ捨ぜりふにて鹽を蒔き居る、花道の揚幕にて。

海典
眞海　「葛飾善導寺本堂建立。」

ト名古屋名物になり、花道より海典更けたる坊主白の單衣麻の衣白の脚袢、酒に醉ひたる體、敎眞青坊主鬘同じ裝、偈箱を首へ掛け、是れを引張つて出る。跡より眞海小坊主同じ裝、本堂建立の幟を擔ぎ出で、

敎眞　これ〱海典どの、わしを何所へ引張つて行くのだ。

海典　どこへ行くものか、向ふの三日月長屋に、おれが馴染があるから、ちよつと一切遊んで行くのだ、貴様も附合つせえ〱。（ト醉ふたる思入にて引張る。）

敎眞　これはしたり、そんな所へ寄つては歸りが遲くなる、遊ぶならこなた一人遊んで、どうぞわしは堪忍して下され。

海典　それぢやあ附合が惡いといふものだ。まあ一緒に來さつしやい。これ小僧、後から押してくれ。

眞海　あい〱。

敎眞　是れは又迷惑千萬なことぢや。(ト右鳴物にて、三人舞臺へ來る、おさめおなほ是れを見て、)

さめ　おや海典さん、幟をかつがせて建立の歸りかえ。嘸暑かつたらう、早く上つてお涼みな。

海典　何だ、上つて涼めといふたとて、狹い所、外に居る方がよつぽどましだらう。

なほ　海典さん、何ぼ暑くつても、おさめさんがゐるのだから惡くはあるまいね。

海典　違ひねえ。かうおなほ坊、おれよりは其の連を早く上げてくんな。

なほ　あいよ。もし坊さん、よくお出でだ、わつちが所へ上つておくれ。(ト敎眞を捉へる。)

敎眞　あゝこれ／＼、わしは上るの遊ぶのと、そんなことは知りませぬ、止さつしやれ／＼。

さめ　おや、此坊さんは知らないと言ひなさるから、おなほさん、お前おせえてお上げよ。

なほ　あいさ、それだから早くお上りよ。

敎眞　あゝ、そこ放して下され、此のやうな所へ來て、ひよつと人目に掛り、お師匠樣に知れては互ひの身の上。これ／＼海典どの、用があらば早う足して、眞海も可愛さうに一日草臥れて、早く歸りたがつて居るわいの。(トいなせの市出で、)

市　どなたかと思つたら、海典さん、よくお出でなさいました。

海典　市公、何だか暑いぢやあねえか。

市　もしお連さまでござりますか、早くお上りなさいまし。

教眞　いや〳〵わしは上るのではござらぬ、歸るのでござる。

市　それだといつて、此の長家へおはひなすつたからは、どうしてたゞは歸られませぬ、長屋の法でござりますわな。

教眞　そんなら爰へ來れば、どうあつてもたゞは歸られませぬか。

眞海　教眞どの、又お師匠樣に叱られぬ内、早く歸りたいわいの。

教眞　わしも又早う歸りたいけれど、長屋の法でたゞは歸られぬといの。

さめ　さあ坊さん、文句を言はずに早くお上りよ。

市　何もたんとのことは入りませぬ。お手輕に、ねえもし、海典さん。

海典　おれが惡いやうには捌かぬといふに、其の上貴樣は小さい時に劍難の相があるゆゑ、坊主になつたのだ、木の股からでも出はしまいし、かたくなことは言はないものだ。

なほ　さあ坊さん、とても多勢に無勢だよ、往生して早くお上りよ。

さめ　そんなら、海典さん。

海　教眞坊。

市　一緒に二階へ。

教眞　それぢやというて迷惑な。

なほ　はてまあ、お出でといふに。

ト騷ぎ唄にておなほは無理に教眞の手を引き、眞海附いて下の見世、おさめ海典を連れ中の見世へ這入る。いなせの市下手へはひる。名古屋名物になり、花道より、七之助中月代單衣尻端折り、頰冠り、草履をはき出來り、

七之　三年越し上方の方へ行つて、久し振りで歸つて見りやあ、普請が出來て長屋の勝手が違つたから、倉ヶ野屋はどこだと聞くのも智慧がねえから、まあ一遍廻つて見よう。

ト七之助舞臺へ來る、此の時上手の見世よりお熊出て、捨ぜりふにて鹽花をふり、七之助を見て、

お熊　モシ町人さん、一服呑んでお出でよ。（ト袖を引く、七之助お熊を見て、）

七之　手前お熊ぢやあねえか。

お熊　さういふお前は、七さんか。（ト大きく言ふ。）

七之　これ、靜に言へ。（ト四邊へ思入、靜な騷ぎ唄の合方、兩人床几へ腰を掛け、）まあ、何から聞かうか、手前も變ることもなくツて、こんな目出度いことはないな。

お熊　お前も無事で、こんな嬉しいことはござんせぬ、久しく便りも聞かぬゆゑ、何所にどうして居さんすかと案じる心に引替へて、お前は方々面白さうに、遊び歩いて居さんすとは、男心といふものは羨ましうござんすなあ。

七之　おれだとッて、上方くンだり歩きてえこともないが、種々の悪事で喰ひ詰めて、江戸に居るのが危ねえから、遠ッ走りも身のしがを、やうやう隠して三年越し、手前のことや親兄弟のことが心に掛り、久し振りで歸り早々、其の愚痴を聞くのは大儀ぢやあねえか。

お熊　それぢやというて爰の家へ、わたしを勤めに入れたまゝ、三年餘り問ひ音信もして下さんせぬもの、久し振りで顔を見たら、愚痴の出るも無理ぢやあござんすまいぞえ。

七之　言はれて見りやあそんなもの、思ひ出せば三年跡、忘れもしない永代の橋の袂にとろとろと、ごろ寐の夢の覺め際に通りかゝつた御守殿風、こんな女を一度でも自由にしたいと後から、袖を引いたを振り拂はれ、逃げるはずみに簪を抜いたが足で跡を附け、千葉の屋敷の大部屋に、法被一つで居候。

お熊　神ならぬ身は氣も附かず、御隠居樣へ御見舞の御役に指され砂村の、お下屋敷の歸り道、洲崎の土手でおそろしい常から嫌ふ雷に、はッと氣絶の駕籠の內。

七之　供の奴等が臆病で逃げて行つたを幸ひに、そつと駕籠から引出して氣附けの水に氣が附いて、びつくりするを往生づくめ。

お熊　命代りと覺悟して、無理に解かれた下紐の、濡れぬ先きこそ厭ふ身の、殿御の肌を覺え初め、怖いお前が愛しくなり、操を破つて夫婦の約束。

七之　直にそれから引ッ拂ひ、あつちこつちに居候、惡者仲間の附合に錢がなけりやあ誰一人、構ひ手のない曉は、せうことなしに此家へ、年季に沈めた手前の體。

お熊　惡い事には染み易く、いつしか慣れる勤の内、屋敷の癖が止まないゆゑ、御守殿お熊と異名を取り、今ぢやあ長屋の姉え株、おだてに乘つて酒の上、ごたつく客の引け過ぎに、いゝこつぱ喧嘩の濟みすまし、ちつとは口もきくものゝ、灰汁の脱けない水髮に結び流れの末始終、必ず見捨てゝおくれでないよ。

七之　馬鹿を言へ、なに見捨てるものか、以前の屋敷ものに引替へて、斯う泥水を呑んだ所は、格別美しくなつたやうだ。

お熊　おや、止してもおくれよ。そりやさうと、お前に言つて置かにやあならないことは、此の家の親指は元上州の人ださうだが、此の頃は小指がなくなつて、わたしに何のかのといふのを、いゝ加

減にあしらつて居るが、お前が亭主といふことを、知れねえやうにしておくれよ。

七之　そいつあ怪しい、おれが久しく來ねえを幸ひに、女房約束をしやあしねえか。

お熊　何をそんな、浮氣所かいな、まだいろ／＼話したいこと聞きたいこともあれば、田舎者の客のつもりで、今夜は爰へ。

七之　泊つて行つたら親指が、やかましく言ふだらうぜ。

お熊　あれまた、そんな憎い口、さあ、ちつとも早く上つておくれよ。（ト七之助田舎者の思入にて）

七之　何だ、上れ、それでもおらア錢がねえもの。

お熊　はて、勤めがなけりやあ、わつちが達引かアね。

七之　そんなら、必ず。

お熊　あこれ。

七之　上るべいかな。（ト田舎者の思入にて手拭を冠る。）

お熊　はて、まあ、おいでといふに。

ト流行唄になり、お熊七之助の手を引き、上の見世へ這入る。右の流行唄にて道具廻る。

（長屋内の場）――本舞臺四間平舞臺通しの二階屋、向う赤壁三つ割床に屛風を立廻し、丸行燈を置く、比翼蓙夏夜着にて客寐かしある體。下の正面後尻襖障子、上手三尺椽起棚、此下間平戸、錠前をおろし。下手階子をかけ、いつもの所門口、此の外一間、倉儀といふ大文字の腰高油障子、よき所に三つ割の錢箱、角行燈を照し、眞中に長火鉢を据ゑ、上手に儀兵衞大縞の浴衣、平ぐけ、小蒲團の上に帳面を附けて居る、下手にお捨結び髮の鬘、まかなひの裝、茶を焙じて居る、さんげ〳〵にて道具納る。

儀兵　これお捨や、肩が張つてならねえ、按摩が來たら呼んでくれろ。

お捨　はい〳〵、煮花が出來ました、お上んなさいまし。（ト湯呑へ汲んで出す。）

儀兵　今さういつた臺は、お熊が客か、種は何だ。

お捨　田舍衆だと言ひなさいましたが、しつかり顏を見ません。

儀兵　本宅になつていそがしいから、氣を附けてくれろ。

お捨　はい〳〵、畏まりました。

ト右の鳴物にて、花道よりお波、島田鬘半襟のかゝりし古き浴衣、眼病みにて杖を突き笛を吹き出で、舞臺へ來る、お捨聞附け、

儀兵　旦那さん、いつもの小娘の按摩が來ましたが、呼びませうか。
お捨　あいつぢや利かないが、揉まねえにはましだ、呼んでくれ。
お波　はい〳〵。おい、按摩の子〳〵。
お捨　あい〳〵、お呼びなされましたかえ。
お波　あい、こつちだよ、さあおはひり。(ト お捨門口を明けて、お波の手を取り内へ入れる。)
お捨　はい〳〵、憚りでござります。
お波　危ないよ、靜に上んなさいよ。
お捨　有難うござります。(ト 杖へ草履下駄を通し、こちらへ來る、お捨手を引き、)
お波　さあ、こつちへお出で。旦那さん、直に御療治をなさいますか。(ト 儀兵衞見て、)
儀兵　此間の娘の按摩か、さあ、やつてくれ。
お捨　はい〳〵、畏りました。(ト 探り〳〵お波儀兵衞の後へ廻り、肩を揉む、)旦那さま、今晩は、お暑うございますなあ。
儀兵　さうよ、療治も暑からうが、力一杯しつかり遣つてくれ。
お波　はい〳〵、畏りました。(ト 此時下手二階の後にて、)

△ さあ〳〵家元さん、藤かづらをお賴み申します。
　ト聲する、知らせに附き下手二階の伊豫簀を捲上げる、吾妻路連中居並び淨瑠璃になる。
　〽夏の夜の蚊遣りの後のうたゝ寐に、座敷々々も靜まりて、
　ト此時下手より〇の臺屋の男、ぶら提灯を持ち、臺を頭へ載せて出て、
〇 海老長でございます、お誂へ。（ト門口を明けてはひる。）
お捨 大層遲かつたね。
〇 込合つて居ますから、御不承なさいまし。（ト〇下手へはいる。）
お捨 株を言つて居るよ。
　〽寢卷の儘に喜之助が、身は空蟬の心地して、
　ト此内お捨白丁の德利より、燗德利へ酒を入れ、燗をつけて臺へ載せ二階へ持つて上り、
お熊さん、お誂へが來ましたが、明けてもようございますか。（ト障子のうちにて、）
お熊 あい、今起きるよ。
　〽顏つく〴〵と打守り、
　ト正面の伊豫簀を上げる、眞中の床に七之助お熊寐て居る、此側にお捨臺の物を置いて居る。

もし、酒が來たからお起きなよ。

七之　そんなら起きますべい。（ト七之助手拭をだらりと冠り、帶を前へ不器用に締めて起きろ、）

お捨　さあお熊さん、お初めなさいな。

お熊　あいよ、ついでおくれ、（ト猪口を取ろ、お捨注ぎお熊呑んで、）もし、お前さん、上げますよ。

ト七之助へさす。

七之　久し振りだ、いや、田舍者は酒は久し振りだといふことだ。（ト紛らす。）

〽綾衣涙にくれながら、

お熊　お捨どん、一つお呑みよ。

お捨　何だとえ、お燗がぬるいかえ。

お熊　いえさ、一つ呑みなといふことさ。（ト大きく言ふ。）

お捨　有難うございますよ。

お熊　お前また耳がおこつたの。

お捨　あいさ、此頃は逆上せて、左りの方はさつぱり聞えませんよ。

七之　そんなら此盃は、順盃にしますべい。（トお捨へさす。）

お捨　まことにお前さんはお堅いよ。（ト　お捨猪口を取りお熊ついでやる、お捨酒を呑みながら）おやお熊さん、隣りで富士太夫の新内が始まりましたよ。
お熊　さうさ、ありやあ綾衣喜之助、藤かづらはとんだ人柄がよくッて意氣だね。
七之　何だか田舍者にやあ、分りましねえ。
ト此内お熊たばこ箱より額銀を出し、紙に包み七之助へそつと渡しながらお捨へ思入。
お熊　片耳聞えないから、大概なことはよいよ。（ト七之助へ囁く、七之助呑み込み、）
七之　女中さん、お肴でござります。（トお捨へ渡す。）
お捨　ほゝゝゝ、およしなさればいゝに、有難う。お熊さん、よろしく。
ト帶の間へ入れる、七之助酒を呑み居る。
七之　そりやさうと、仲の町へ豪氣な燈籠が出來たの。
お熊　ありやあ萬字屋の、玉菊さんの追善に出來た燈籠さ。
お捨　是れから毎年燈籠が、出來るといふことでござりますよ。
ト酒宴よろしく。階下にては儀兵衞思入あつて、
儀兵　これ按摩、手前隣の新内へ聞耳ばかり立てゝ居るな。

お波　あい、面白さうな淨瑠璃のゑ

儀兵　さあ、ちつとトを揉んでくれゑ。

お波　あい〳〵。

　　ト儀兵衞枕を取りて寐轉び、お波足を揉む。二階にては此内酒宴あつて、七之助小聲にて。

七之　お熊、さつきも言ふ通り、おれが久しく來ねえうち、何かおつな者が出來やあしねえか。

お熊　なに、わちきが、そんな浮氣なことをするものか、よく考へて見ておくれな。

七之　あんまり仕ないこともあるまいぜ。

お熊　七さん、ふざけたことをいふと聞かないよ。（ト七之助を抓る。）

七之　あいたゝゝゝ。

　　〽さし込む癪を押し下げて、

お熊　無理なことばかり言ひなさるよ。

　　〽逢初めてから片時も、忘るゝ日とてはないわいな、お顏のやつれを見るにつけ、お宿の首尾は如何やと案じ暮せし甲斐もなく、無理は男の常なれど言譯するは女子だけ、言うて返らぬことながら、お前に別れてさがらすの鳴く間も生きて居らりようぞ。

ト此文句を借り、七之助お熊いろ／＼思入、お捨氣の惡くなりし思入。

お捨　お熊さん、何ぼわちきが片耳聾だつて、見せて置いて大概でありますよ。

お熊　お前も市さんの泊つた晩には、あつかましいこともあるよ。

お熊　左樣さ、市さんもまことに浮氣でありますが、わつちやあ可愛くツてなりませんよ。

ト此時下手の屛風を明け、おさめ出掛り、

さめ　コウお捨どん、人が聞いて居るに大概にのろけなよ。お熊さん、お樂しみだね、一つ呑ませてお
くれな。

お熊　あいよ、いゝから爰へおいでよ。

トおさめこちらへ來ようとする、屛風の内に、以前の海典寐て居て、

海典　これおさめ、手前どこへ行くのだ。

さめ　隣へ行つて、一つ呑んで來るから、待つておいでよ。（トおさめ前へ出て、）お前さん、御免なさい
まし。（ト七之助見て、）

七之　こりや、お熊どのゝ御朋輩衆かな。

お熊　わたしが姉妹分さ、一つ呑ませておくれよ。

七之　そんなら憚りを申します。（ト猪口を取っておさめへさす。）

さめ　有難う、お捨どん、受賃についでくんな。

お捨　おさめさん、お株で附込みだね。

さめ　あいさ、お定りの駈附け三杯としようね。（ト酒を呑む、海典おさめの袖を引いて、）

海典　これ、手前ばかり呑まねえで、おれにも呑ませてくれろ。

さあ　まあ、蟲のいゝことばかり。（ト此時階下にてはお波足を揉みながら、居睡りをする。）

儀兵　これ按摩、手前居睡りばかりせずと、しっかり揉め。

お波　いえ〳〵、睡りはいたしませぬ。

儀兵　そんなら、しっかり揉めといふに。（ときつと言ふ。）

〽押して止めたき朝旬に、別れの無理なお詞に、わたしが強く逆らはゞ粋なお前のお心も、替らしやんすであらうかと、あのゝものゝに紛らして、歸す思ひは色絲の、結んで解けぬ悲しさは、人に知らせぬ胸の内、泣いて明かせし戀の闇、焦るゝ胸は淺間山。

ト此内七之助お熊思入、お波肩を揉みながらそこらを探り、思はず火鉢の上にある金包み手にさはるゆゑ、思入あつてそつと取り袂へ入れること、下手にてはおさめそつと海典へ酒を呑ませること、お

捨邪魔をするをかしみあつて、

お捨　コウお客さん、大分お眞面目でござります、もう一つお上んなさいまし。

七之　何だかわしやあ、さつきから矢鱈に呑んで、大きに酩酊しましたよ。

お熊　そんなことを言はないで、もう一つお上りよ。

ト酒を呑む。此内海典篩つて寐ること、階下にては儀兵衞思入あつて、

儀兵　あゝ、何だか蒸し暑い晩だ。これ按摩、手前の療治はさつぱりきかないから、猶暑くなつた。

お波　そんなら、もつと強く揉みませう。

儀兵　いや、もう〳〵いゝとしよう、御大儀々々。

お波　それでもまだ、半分いたしませぬもの。

儀兵　よし〳〵、錢は遣るから、もう歸らツし、（ト言ひながら火鉢の引出しより錢を出し、お波へ渡し、）

さあ、按摩、錢を取らツし。

お波　はい、有難うござります。

とお波以前の金の包をそつと袂より出し、件の錢と一つに巾着へ入れるを儀兵衞見附け、四邊を捜し金包なき思入にてお波を捉へる、お波びつくりして巾着を帶の間へ隱す。

儀兵　やい按摩、うぬ盲目のくせに、何か盗み居つたな。
お波　いえ〳〵、何も取りはいたしませぬ。
儀兵　なに、取らない、盗人猛々しいと、年もいかぬにいけ太え奴だ。今爰にあつた、紙に包んだ金を盗みやあがつたな。
お波　え。
儀兵　うぬ、盲目のくせに、太え奴だ。（ト お波をくらはす。）
お波　あれ、御免なされませ。（ト此聲を聞付け、二階のおさめ、お捨、おなほ下りて來り、儀兵衛を留め）
三人。旦那さん、まあ〳〵お待ちなされませ。
儀兵　いや、うつちやつて置け〳〵。
さめ　おや、お前はいつもの按摩の小娘。
お捨　療治の仕様でも悪いのか。
兩人　どういふ譯でございますえ。
儀兵　どういふ譯どころか、此の阿魔ツちよが、爰に置いた金を盗みやあがつた。
なほ　え、そりやまあ本當でござりますか。

儀兵　さつき米屋が内借りに、貸してくれろといふから、遣らうと思つて金を二兩、紙へ包んで置いたのを盜みやあがつた。

お捨　これ按摩さん、お前とんだことだの、取つたら早う出してあやまんなよ。

お波　いえ〳〵、何も取りはしませぬものを。（ト懷を押へ居る。）

儀兵　なに取らねえことがあるものか。お捨、懷の巾着を改めて見ろ。

お捨　はい〳〵。懷の巾着をお出しな。

さめ　これさ、泣いて居ちやあ分からない、取つたものなら早く出しな。

お波　いえ〳〵、それでもこりやあ。（トやはり懷を押へて居る。）

お捨　えゝ此子は、きり〳〵出しなといふに。（トお捨無理にお波の懷より巾着を引き出し明ける、中より件の金出る。）ほんに、中から此金が。もし、是れでござりますかえ。

ト金包を儀兵衞へ渡す。此の内二階の兩人のぞき見て思入。

儀兵　是れだ〳〵、此の金をすんでに阿魔めにちよろまかされる所だ、是れだから、お捨氣を附けろといふのだ。

なほ　ほんに、見掛けに寄らねえ太え子だの。

儀兵　やい阿魔め、うぬは〳〵太え餓鬼だ、大方按摩をかこつけに、方々泥坊して歩きやあがるのだらう、太えどう盲目めだ。（トお波の横額をくらはす。）

お波　あれ、御免なされませ〳〵、どうして其のやうな悪い心はござりませねど、父さんが長々の病氣で、人參とやらを呑ませねば直らぬと、お醫者さまが言はしやんすけれど、其のお金がないゆゑ、どうぞして父さんに呑ませたいと思ふので、つい今のお金を取りました。もう〳〵此の後きつと悪いことはいたしませぬ程に、どうぞ御免なされて下さりませ。

ト是れを聞き、二階の七之助、お波をすかし見てびつくりする。

七之　や、ありや慥におれが妹、どうして目が潰れたか。これ、お熊。

トお熊に囁き、詫びをして遣つてくれろといふ思入。儀兵衞思入あつて、

儀兵　何だ、親の病氣で人參の金が入るから盗んだのだ。太えことを吐かしやがる、それぢやあ世界に病人の親を持つ奴は、みんな泥坊をするわえ。こんな太え奴は、重ねて長屋へはひらねえやうに、路地番へ斷つてやらう。さあ、うしやあがれ。（トお波の手を取り、引摺り出さうとする。）

お波　あれ、御免なされませ〳〵。

ト詫びる、儀兵衞引摺り出さうとする。此の内二階よりお熊下りて儀兵衞を留め、

お熊　まあ旦那さん、お待ちなさい〱。
儀兵　お熊留めるな、うつちやつておけ〱。
お熊　御尤もでござりますが、さつきから樣子は二階で聞いて居ました、金を取つたは此子が惡うござんすが、惡い心で盜んだのでもなし、金は戾つたことなれば、もう此儘に堪忍して遣つて下さんせいなあ。
儀兵　お熊、手前大分此の阿魔の最屓をするな。こんな奴は癖になる。留めるな〱。
お熊　あれさ旦那、癖になるといつて內の者ぢやあなし、是れから呼びさへしなければよいぢやござんせぬか、今日の所はわしが詫びます程に、堪忍してやらしやんせ。もし、お前も共々詫びてやつて下さんせいな。
さめ　お熊さんが、あんなに言ひなさいますから、
お捨　お腹も立たうが旦那さん、堪忍して、
兩人　お遣りなさんせいな。
儀兵　了簡の出來ねえ奴だが、お熊手前がそんなに詫びることだから、今日は了簡してやるぞ。
お熊　そんなら堪忍して下さんすか。これ、あの子や、旦那さんが堪忍してやるとおつしやるから、早

くお禮をいうたがよいわいな。

お波　あい〳〵。申し旦那さん、有難うございます。

儀兵　憎い阿魔め、許してやるから、きり〳〵歸りやあがれ。(ト足蹴にする。)

お熊　あ。いえ〳〵わたしの客人が、足を叩いて貰ひたい、按摩を呼んでくれと言つて居ます。あの子や、わたしと一緒に二階へ來な。

儀兵　いや〳〵、そんな泥坊根性のある奴を、二階へはやらない〳〵。

お熊　はて、わたしが附いて居れば、よいぢやござんせぬか。

儀兵　えゝ、そんならどうとも勝手にしろ。これお捨、あんな小阿魔でない、滿足な按摩を呼んでくれ。

お捨　按摩の來るまで、わたしが叩いてあげませう。

お熊　これ、あの子、わたしと一緒に二階へお出で。

お波　あい〳〵。

お熊　どれ、連れて行つてやらうかいな。

〽逢ひ度い見たい妹脊山、いつか女夫と待乳山、聖天さまのお守や、くらうを掛けし九郎助の稲荷さまや其外の、廣い世界の神さんの願が叶うて嬉しやと、

ト此内お熊お波の手を引き、おさめ附いて二階へ上る。おなほは見世へはひる。お捨は葭の衝立を立て、儀兵衛此の蔭へ寐轉びお捨足を揉む。おなほ見世へ出る。おさめ二階下手障子へはひる。お熊此の内お波を七之助の側へ連れて來り、

やう〳〵、連れて來たぞえ。（ト七之助お波を見て。）

七之　お〻妹、（ト言はうとして思入）これ按摩の姉え、さつきから聞いて居たが、こんたの父さんは、病氣と言ひめすか。

お波　あい。

〽思うて居たに今更に、添はれぬやうになつたとは、どうした薄い緣ぢやら、わし程因果なものはない。（トお波思入あつて、）

よう問うて下さんした、わたしが家は深川の大島町、父さんは網打生業なれど、久しい病氣ゆゑやう〳〵わたしが按摩を習うて、毎晩々々此の吉原まで參ります、父さんの病氣に人參とやらを呑ませねば直らぬと、お醫者樣が言はしやんしたゆゑ、其のお金がほしいばッかり。

〽五つや六つで兩親には死に別れ、兄さん一人を便りぞや。

か〻さんには早う死に別れ、便りに思ふ兄さんの行方は知れず、わたしは此のやうに目がつぶれ

て、誰も構ひ手がないゆゑ、按摩を覺えて療治に出、僅のお錢でお米を買ひ、父さんとたつた二人。

〽朝な夕なの艱難を、泣き明かしたる月や日の、惠みも盡きて此廓へ賣られて來たは身の因果。

父さんが死なしやんしたら、

〽西も東も知らばこそ、遣手に叱られ名代の、客衆に夜すがらいびられて、淚をしぼる袖留てお前一人を便りぞや。

わたしや悲しうござんすわいな。（トお波よろしく思入。七之助お熊も思入あつて、）

七之　おゝ尤もだく、嘸悲しからう、いや、嘸悲しかんべい。然しこんたの其の孝行が、天道樣へ通じれば、やがて父さんの病氣も直るから、それを樂しみに、隨分親を大事にしたがよかんべい。

お熊　あゝ、可愛さうなことぢやなう。

〽假令野の末山の奧、どんな貧苦も厭やせぬ。

聞けば聞くほど不便な此子、緣につれゝばわたしが妹、さあ、こんな妹があつたらばと、身につまされて悲しいわいな。

七之　〽手づからわたしが飯たいて、樂しむも戀苦しむも戀、戀といふ字がさすわいな。

七之　これ按摩の姉え、深川までは道も遠い、今夜はもう療治をせず、僅なれども此の金を遣る程に、持つて歸つて父さんに、好きな物でも買つて喰はせるがよかんべい。必ず短氣を出すまいぞよ。

〽まことは幸せ一つぞや、可愛うて〳〵、粹になるほど愚痴になる。

お波　有難うござります、療治もせずに此のお金を、貰うてもようござりますか。

お熊　お〻、よくなくつてかいな、現在兄さん。いえ、兄さんがござつたならば。

七之　こんなことにはなるまいもの。

〽起請を守る約束の、神さん方も聞えませぬ、とても添はれぬ中ならば、一緒に殺して下さんせと、袖に涙の庭潦、

と此内七之助は名殘惜しき思入、お波の帶など直すこと、お熊思入あつて、

お熊　ほんに、愛しい此の子の身の上。

七之　便りに思ふ兄弟の、行方は知れず目は見えず。

お波　たつた一人の父さんは、

七之　永の病氣に朝夕の、

お熊　煙の代に、
お波　按摩の世渡り。
七之　思へば因果な、
三人　身の上ぢやなあ。
〽涙の雨の晴れやらぬ、早や東雲の亂れ鳥、血汐に染まる三つ蒲團、後の噂となりにけり。
ト文句にて、お熊、お波の手を引き二階より下り、門口へ連れて出て、履物をはかせる。お波思入あつて袂より笛を出し、吹きながら杖を突き花道へはひる。七之助見送り、障子の内へはひる。お熊門口に跡を見送り居る。奥にて、
大勢　やん／＼。（ト知らせに附き、伊豫簾を下し、淨瑠璃連中を消す、葭の衝立の内の儀兵衛起返り。）
儀兵　これお熊や、今夜跡から上つた客は、だいぶ靜だが、種は何だ。
お熊　さあ、あの客人は。（ト思入。）
儀兵　客は何だよ。
お熊　たしか田舍者でありますよ。
ト流行唄にてお熊ついと二階へ上り、上手の障子の内へはひる。さんげ／＼になり、下手より△の路

地番半纒裝にて出で、

△　もし親方、店頭に寄合がありますちよつとおいでなせえ。
儀兵　おい〳〵、直に行くとさう言へ。
△　早くお出でなさいまし。（ト△下手へはひる。儀兵衞起上り、）
儀兵　お捨や、浴衣を出してくれ。
お捨　はい〳〵、羽織も出しませうか。
儀兵　いや羽織は入らねえ。（トお捨浴衣帶を出す、儀兵衞浴衣に着替へて、）これお捨、田舍者だといふお熊の客、どうも怪しい。これ。（トお捨へ囁く。）
お捨　呑み込みました。
儀兵　氣を附けろよ。（ト唄になり、儀兵衞下駄をはき下手へはひる。此の時二階眞中の障子の内にて、）
教眞　もし、誰ぞ來て下され〳〵。（ト手を打つ。お捨聞いて、）
お捨　はい〳〵、今參りますよ。もしおなほさん、お前の客人が呼んで居なさいます。
なほ　あい、今行くよ。
ト騷ぎの合方、上手の襖よりおなほ出て二階へ上る。お捨は上手の見世へ出る。おなほ眞中の障子を

明ける、床の上に教眞、眞海居る。

なほ　お呼びなすつたは、何ぞ用かえ。

教眞　用所ではない、最前から寐るにも寐られず、まじ／＼として、わしも此子も大層蚤に喰れました。もう五ツでもあらう、早く歸らねばお住持樣へ濟まぬ、どうぞ連の者を呼んで下され。

なほ　あれさ、そんなことを言はないで、今夜は泊つてお出でよ。

教眞　どうして滅法界な、そんなことが出來るものか。どうぞ海典どのを呼んで下され。海典どのは何處にござる、海典どの／＼。

海典　おい／＼、今行く／＼。（ト後の障子を明け、海典寐卷の浴衣、帶ひろどけ、おさめ跡より附き出で）

さめ　何だね、騷々しい、靜におしな。

海典　教眞坊、まだ寐ないのか。

教眞　海典どのとしたことが、どうして此のやうな所へ寐られるものでござるか、さあ遲くなつては師匠樣へ言譯がない、さあ、早く歸りませう／＼。

海典　お坊も野暮なことばかり、まあ引けまで居るがいゝぢやあないか。

教眞　いや／＼、いゝ、ひけやら池やら知らぬけれど、早う歸らねば濟まぬわいな。

眞海　これ教眞どの、早く歸つて寐たいわいの。
教眞　おゝ尤もだ〳〵。今直に連れて歸ります。海典どの、こなた歸らしやらずば、わしと此子を先きへ歸して下され。
さめ　馬鹿らしい、かへせ〳〵と鳥屋に附いた鷄ぢやアあるまいし、どうしたのだの。
なほ　それぢやあ附合が惡いから、引けまで居て、みんな一緒にお歸りよ。
教眞　いや〳〵、葛西まで遠道を抱へて居ます、どうあつても歸らねばなりませぬ〳〵。
ト皆々捨ぜりふにて留める、お熊障子を明け聞いて居て、
お熊　これさ、おさめさんもおなほさんも、あの坊さんが是非歸らにやあ惡いと言ひなさるから、無理なことを言はないで、早く歸し申してお上げよ。
さめ　それでも海典さんが、留めろと言ひなさるわな。
お熊　可愛さうに、さつきから困り切つて居なさる樣子、小さい子が睡がつて居るわな。こう七さん、あの子に何ぞ喰べる物でもやつておくれな。
七之　よし〳〵、爰にいゝものがある。（ト七之助起上り、臺の物の玉子燒を紙に包み、）これ〳〵坊さん、爰へ來な〳〵。（ト眞海七之助の側へ來る、）それ、いゝ物を遣る、こりやあ玉子燒だ、喰べな〳〵。

卜眞海へやる。

眞海　有難うござります。（卜眞海頂き教眞の側へ持ち來り、）あそこの伯父樣が、此のやうな物を下さりました。（と教眞見て、）

教眞　ようお禮を言うたか、然し出家が其のやうな物喰べる物ではない。戴いて袂へ入れて置きませうぞ。

眞海　あいく。

教眞　海典どの、そんならわしは先きへ歸ります、こなたも跡から早う歸らつしやれ。

海典　どうでも歸るのか、あゝ緣なき衆生は度し難しぢやなあ。

教眞　是れは大きに、どなたも御厄介になりました。（卜お熊へ思入あつて、）そちらのお女中樣、お前さまのお蔭で歸られます。葛西までは餘程の道、急がねばなりませぬ、大きに有難うござります。

お熊　何のお禮に及ぶこと、ちつとも早う行かしやんせ。

なほ　さあく、送つて上げるわいな。

教眞　どれ、お暇いたしませう。

卜唄になり、教眞眞海を連れておなほ附き二階を下り、捨ぜりふにて上手の見世へ出る。

海典　やれ〳〵、大骨を折らせて、とう〳〵歸り居つた。
さめ　お前が留めろ〳〵と言ひなすつたけれど、お熊さんが歸せといひなすつて、とう〳〵逃してしまつたね。
お熊　それだつて、可愛さうに罪になるわな。
海典　あの坊主は、おれと違つて若いくせに辛抱人ゆゑ、金を拵へて胴卷に入れて持つて居るから、使はせて遣らうと思つたに、忌えましいことをしたわえ。（ト七之助此の話しを聞き思入。）
さめ　これさ、詰らねえ愚痴をこぼさずに、今夜は泊つてお出でな。
海典　どうして、引けを打つと歸らにやあ、しくじり道具だ。
さめ　しくじつたらば、わつちが過すわな。
海典　そいつあ有難い、其の氣で寐ようか。
さめ　さあ、おいで。（ト唄になり。おさめ海典を連れて障子の內へはひる。合方になり、七之助お熊思入あつて、）
七之　さつき初めて妹の、話しで聞いた親父の病氣、人參を呑ませるには金がなけりやあならないとのこと、久しく便りをしない親父、どうぞして其金をこしらへて遣りたいものだな。（ト色々思入、此時教眞が落し置きたる珠數を見付けて、）お熊、あすこに落ちてるるのは何だ。

お熊　あい、どれでござんす。（トお熊落ちたる珠數を取つて、）こりや珠數でござんす、そんなら今の坊さんが、忘れて行つたのであらうわいな。

七之　どれ、見せろ。（ト七之助珠數を取つて見て、）こりや立派な珠數、てつきり今の若い坊主が、落して行つたに違ひない。辛抱人で胴巻に金を入れて持つて居ると、海典とやらの今の話し、葛西へ歸るといつたからは、行く道筋は大川端、跡追つかけて此の珠數を、種に遣つてあの金を。

お熊　そんならお前はあの出家の。肌に附けたる其の金を。

七之　大事の親の命の瀬戸、事に寄つたら。

お熊　え。

七之　これ、靜にしろ。（ト七之助珠數を懷へ入れ、身拵へする。此時障子の内にて、）

助平　あゝ醉つてぐつすり寐た、お熊は何處へ行つた。

ト是れを聞き七之助お熊に囁き、上手の有合ふ二枚折屏風の蔭へ小隱れする。助平前へ出て、

水が呑みたいが、手を叩いたらやかましからう。どれ、呑んで來よう。（ト助平階子より下り手桶の水を呑んで、）あゝ、甘露々々。

ト此内七之助身拵へして下りようとする。助平階子の方へ來る。七之助びつくりなし土瓶を取り疊を

上げ水をこぼす、階下へ流れる體。行燈の明り消ゆる。時の鐘。

南無三、行燈が消えた。

ト時の鐘合方、助平探り〳〵二階へ上ろ、此の時七之助窺ひながら階子を下りろ、上り口にて摺れ違ひ、助平七之助を透し見て、

何だか、をかしな形風俗。(ト捉へようとする、お熊びつくりして、)

お熊　あれさ、田舍の客人だよ。(ト助平を留める。)

助平　これ、お熊どこに居た。

お熊　田舍の客人の所にさ。(ト此時落ちてある守袋を拾ふ、助平見て、)

助平　何だ、そりや。(ト手を掛ける、)

お熊　何でもないよ、さあおいでよ。

ト、お熊守を懷へ入れ、助平の手を引き後の障子の內へ連れてはひろ。此の內七之助は下にある出刄庖刀を取り、手拭に包み腰にさし、頰冠りをして門口を明ける、此の音を聞き、

お捨　そこを明けたのは、誰だえ。(ト七之助思入あつて、作り聲をして、)

七之　按摩は入りませんか。(ト言ひながら門口へ出る。)

お捨　按摩さんか、今親方が留守だ。（ト言ひながら見世より出て、）おや、行燈が消えたよ。

トやはり右の合方、下手よりいなせの市出る。七之助すれ違ひ舌を出し足早に花道へはひる。此の内お捨行燈をつける、いなせの市内へはひりながら、

市　今のは慥に、七ぢやあねえか。

お捨　こう〳〵市さん、七とは誰のことだえ。

市　今歸つた客のことよ、小猿の七といふ巾着切で、聞けば慥お熊さんの、亭主だといふことだぜ。

お捨　それぢやあさつきの客のことか、道理で言ふこと、裝と違つて居ると思つたよ。

市　お熊さんの所へ化けて上つたのか。

お捨　田舎者だといつて、宵から上つたわな。よし〳〵、今度來たらば親指に斷らにやあならねえ。

トいなせの市半纏を脱ぐこと。

市　お捨、見世が明いて居るなら、ちよつと來な。

お捨　あれさ、親指が歸ると惡いわな。

市　べらぼうめ、そんなことぢやあねえ、用があるのだ。

お捨　用なら爰でもいゝぢやあないかね。

市　はて、まあ來いといふに。

ト唄になり、いなせの市お捨を引張り、中の見世へ出て襖を締める。お熊二階の障子を明け、

お熊　今直に、手水に行つて來るから、ちよつと待つておいでよ。

ト合方になり、お熊二階より下りて四邊を窺ひ、以前拾ひし守を出し、八間の明りに透し見て、

此守が落ちてあつたが、さつきの坊さんが落したに違ひない、明けて見たらば定めて様子が。（ト守袋を出し讀んで、）「神田三河町三郎兵衛倅三之助」三郎兵衛倅三之助とあるからは水子で別れた末の弟、そんならさつきのあの出家は、弟であつたか、やゝゝゝ、知らぬことゝて七さんが、金がほしさに追掛けて行かしやんしたが、若しやあの子の身の上に怪我過ち、こりや斯うしては居られぬわい。殊にあの助平が、此の身の居所知つたからは、とても此の家に居られぬ體。（ト懐より紙入を出し、）こりや助平が紙入。（ト中を改め見て、）思ひがけない一兩二分。（ト此時襖の外にて、）

お捨　そんなら市さん、十四日にやあ、きつと返しておくれよ。（ト聲する、お熊びつくりする。）

市　是ればかりの金を、返さねえでどうするものか。

トお熊手早く懐の女夫巾着へ件の金を入れ、懐中して、

お熊　是れから直に七さんの、跡追掛けてあの子の身の上、ちつとも早く。

ト行うとしていなせの市の脱いだる半纏を見附け、幸ひといふ思入にて是れを抱へ、お熊抜足して門口へ出る。端唄の合方にて下手より儀兵衛、少し酒に醉ひたる體にて出る、お熊見てびつくりなし、下手の障子を明け隱れる、儀兵衛是れを知らず。

儀兵　お捨、今歸つたよ。(ト儀兵衛内へはひる。襖を明けて、お捨いなせの市出て、)

市　親方、お歸りなすつたか。

お捨　大分御機嫌でござりますね。

儀兵　呑めないものを無理無體に、大きに醉つた。

お捨　もし旦那、さつきお熊さんの所へ來た客は、小猿の七といふ巾着切でござりますとさ。

市　あいつは慥に、お熊さんの亭主だといふ噂。

儀兵　なに、あの客がお熊が亭主だ、太え奴だ。お熊を呼べ〳〵。

ト急いで言ふ。此時二階の助平障子を明け、

助平　お熊は何所へ行つた。お熊々々。(ト此内いなせの市お捨見世を捜して、)

市
お捨　もし、お熊さんは見えません〳〵。

儀兵　そんならあいつに連れ出されたか、むゝ。(ト無念の思入、助平二階より下りて、)

助平　これ、一兩二分はひつた身共が紙入が見えぬ。搜してくれ〳〵。(ト言ひながら儀兵衛に行當る。)

儀兵　えゝ、そこ所かえ。

ト助平を下手へ突飛す、助平ひよろ〳〵としてどうとなる。是れと一時に、下手に釣せし八間助平の上へばつたり落ちて明り消える。是れにて暗くなりし心、下手の障手を明け、お熊手拭を冠り半纏を着て窺ふ。

遠くは行くまい、追掛けてくれ。

市　合點だ。(トいなせの市門口へ出ようとする。助平油煙にて顏眞黑になり、起上り、)

助平　紙入を返してくれろ。

トいなせの市の胸倉を取る、お熊そろ〳〵花道へ行きかける。いなせの市助平を見て、

市　や、熊の化物め。(ト上手へ突きやる。助平ひよろ〳〵となり儀兵衛の側へどうと倒れる。)

お熊　え。(トびつくり思入。)

儀兵　湯を一杯くれ。(トいなせの市門口へ出て花道を見て、)

市　たしかにお熊。

ト是れにて儀兵衛門口を見ようとする。お捨湯呑へ湯を汲み儀兵衛へ出す、お熊花道下に居て、件の

お捨　えい。

　　　　　巾着を、

トいなせの市へ打附ける。いなせの市額を押へる。儀兵衛湯をぐつと打ち明ける、と此の湯助平へかかり、

助平　あつゝゝゝ。

ト體を掻きむしる。花道のお熊シャンと立つ。是れにていなせの市ぽんと轉るを道具替りの知せ、

儀兵　すてきに醉つた。

ト儀兵衛手拭を廻す、お熊逸散に花道へはひる。お捨團扇にて儀兵衛をあふぐ、あれ又憎やの唄、時の鐘にて道具廻る。

(大川端藥師前の場)――本舞臺三間向ふ浪幕、二段の浪手摺、石垣の蹴込み、上手に物揚場といふ榜示杭、上手へ石を積上げたる石置場、日覆より樟の木の釣枝、總て大川端多田の藥師前の體、浪の音にて道具留る。と上手より仕出出て、捨ぜりふにて行違ひ上下へはひる。三味線入り禪の勤めになり花道より以前の教眞、跡より眞海幟を擔ぎ出て、

眞海　これ教眞どの、草臥れて睡たうなつた、早うお寺へ歸りたいわいの。
教眞　おゝさうであらう、尤もぢや〳〵、海典どのに引張られ、とんだ所へ行つたゆゑ、大きに遲うなつた。向ふの藥師前へ行つて休んで、それから又行かう。
眞海　休んだなら、最前貰うた、玉子とやらを喰べてもよいかの。
教眞　おゝ、嘸ひもじからう、あれを喰べてもお寺へ歸つて、お師匠樣に言ふではないぞや。
眞海　喰べてもよいか。嬉しい〳〵。
教眞　さあ、そろ〳〵行かうわいの。
眞海　あい〳〵。（ト此時花道の揚幕にて、）
七之　おゝい〳〵。（ト右鳴物にて、花道より七之助以前の裝にて追掛け出る。）
教眞　はい〳〵、呼び掛けさつしやれたは、わしがことでござりますか。
七之　おゝこなさんのことぢや、思ひの外早い足で、やう〳〵追附きました。
教眞　おゝ、最前のお客か。まあ〳〵何の用か知らぬが、向うの藥師前まで行きませう。
七之　やれ〳〵可愛さうに、此の子が睡さうだ。さあ、向うへ行きませう。
ト右の鳴物にて三人舞臺へ來て、

教眞　さあ眞海坊、爰に石がある、爰へ掛けて、ちと休んだがよい。

眞海　あいく。（ト捨ぜりふにて三人捨石へ腰を掛け、）

教眞　さうしてわしを呼び掛けさつしやつた。其の用といふは、何の用でござりますな。

七之　最前吉原でお目に掛つた御出家、お忘れものがござりましたから、お届け申さうと、態々爰まで参りましたのさ。

教眞　それは御親切に忝うござる。忘れました品は、何でござりましたな。

七之　生業物を忘れるとは、そゝッかしい御出家様だ。

ト此内眞海玉子燒を出して喰ひ、こくり〳〵居睡り居る。

教眞　いやも、行き附けぬとこへ連れて行かれ。歸りたいと急いだゆゑ、つい忘れました。して其の品は何でござるな。

七之　お忘れ物は、此の珠數でござります。（ト七之助懐より以前の珠數を出す、教眞見て、）

教眞　ほんに、是れはわしが珠數、どうして忘れましたか。やれく忝ない、此の珠數は師匠より貰ひ受けた大事の珠數、御親切に有難うござります。（ト珠數を取つて、）道を急ぎますれば、御縁もあらば、又お目に掛りませう。（ト珠數を持ち、眞海の手を取らうとする、）

七之　あゝこれ、御出家待たつしやれ、こなた、たゞ其の珠數を持つて行かつしやる氣か。

教眞　え。

七之　珠數は出家の第一の道具、其の珠數を持つて出る所へ出れば、こなさんの身の上、三日曝しにならねばならぬ。

教眞　そりや又何ゆゑ。

七之　何ゆゑとはとぼけまい、落ちてあつたは吉原の三日月長家、いはずと知れたこなたは女犯。

教眞　え。（トびつくり思入。）

七之　それゆゑわしが親切に、內證で屆ける其の珠數、たゞ一言の禮ばかりで御緣があらばと行かうとは、顏に似合はぬ大それた御出家、それゆゑ留めたが、何と無理ではござるまいが。

ト思入にて言ふ。敎眞思入あつて、

教眞　成程一途に道を急ぐゆゑ、後先の辨へなく珠數の手に入つたが嬉しさに、ろく〳〵お前さまに禮も言はず、行かうとしたはわしが不調法、許さつしやりませ〳〵。（ト眞海の居睡りゐるを見て、）やれやれ、此の小僧が寐こけて居ますれば、少しの間此の石の上へ、もしちよつと待つて下さりませ。（ト積みたる石の上へ眞海が背負ひし包を、枕にして眞海を寐かし、）川風で蚊も居まい、少しの間さ

うして居や。（七之助の前へ手を突き、）いづくのお方か存じませねど、私が大事の珠數を持つて來て下された御親切、お禮のいたしやうもござりますれど、何を申すも爰は途中、わしは葛西の善導寺の教眞といふ者、明日にも其許樣のお宅を尋ね、お禮に上りませうほどに、どうぞお前樣の御住所をおつしやつて下さりませ。

七之　いや／＼、わしは住所も定めぬ天竺浪人、尋ねてござるには及ばないが、今わしが親切を忝けないと思はつしやるなら、ちと、こなさんに無心がござる。

教眞　何事かは存じませねど、見る影もない青坊主、私が身に叶ひましたことならば、

七之　聞いて下さるか。

教眞　御親切なあなたぢやもの。聞かいで何といたしませう。

七之　早速の承知忝ない、いよ／＼聞いて下さるか。

教眞　して、其の無心とおつしやるは。

七之　こなたの肌に附いて居る、胴卷の金を貸して貰ひたい。

教眞　え、ゝゝゝ、それをどうして。（トびつくりなす、木魚入りの合方。）

七之　さあ、びつくりであらう、其の驚きは尤だが今夜の内にたつて無くてならぬ金、こなたが金を持

つて居ること、最前吉原で海典どのとやらいふ、連の坊主の問はず語り、思はず聞いてほしくなり、どうぞしてと思ふ矢先き、こなたが忘れた珠數を届け、恩を着せて借りようと追掛けて來た大川端、斯う言ひ出す上からは、否と言はうと應と言はうが、是非ともこつちへ借りねばならぬ、惡い者に見込まれたと、思ひあきらめ其の金を、どうぞわしに貸して下され。

敎眞　成程恩になつたお前のこと、貸せと言はつしやる此の金を貸さねばならぬ義理の金、それを厭ぢやと貸さぬのは、恩知らずとも邪慳者とも、言ふにいはれぬこつちにも悲しい譯を一通り、どうぞ聞いて下さりませ。（ト誂への合方、）元わしが親父さまは、神田三河町で生業は道中師、三人の末の忰で、お袋はわしを産み七夜の内に死なれ、乳がないので詮方なく、葛西の二の江村百姓甚兵衛といふ人の所へ里にやられ、七つの年まで育てられ、此の敎眞、連れて來たあの小坊主も、其里親の末の忰。わしは又七つの年に親父さまに死に別れた幼い時から病身ゆゑ、里親の世話で同じ葛西の善導寺へ弟子になり、成人するに隨ひ學問修業の其の爲めに、京都の本寺へ登り七年跡に江戸へ歸り、又善導寺に居る内、どうぞよい出家になりたいと思ひ詰めたる一心に、多くの檀家の葬や年忌法事の其の時に貰うた布施は僅でも、微塵積つて山吹の小判に替へて十兩餘り、大事にかけて樂しむ内、久し振りで總領の兄貴に逢うて樣子を聞けば、幼い時別れた姉さんが、

今では貧乏人の女房になり、難儀して居ると聞き、此の身の出世は跡へ廻し、姉さんの行方を尋ね、僅なれども此の金で、難儀を救うて進ぜようと明暮思うて居る此の金。今お前に借りられては姉の難儀が救はれぬ、切ない譯を聞き分けて、どうぞ許して下さりませ。拜みます〳〵わいの。

ト手を合せ思入にていふ、七之助思入あつて、

七之　そりや誰しも入らない金といふものはなければ、其の言譯は尤だが、おれが爲めにも大事の親、命に拘はることゆゑに、據なく無理いうて借りねばならぬ今宵の切羽、割つ口說いつ賴んでも聞入れなけりやあ仕方がない、殺してなりとも借りにやあならぬ。（ト腰にさしたる庖刀を出し）これ見さッせえ、よく研ぎすましてあるぜ。痛い目をしないうち、思ひあきらめ其の金を、きり〳〵おれに貸して下せえ。（ト庖刀を出して脅す。）

敎眞　あれ。まあ〳〵待つて下さりませ、そんならどうでも此の金を、貸さぬといへばこなさんは、わしを殺して取らつしやるか。

七之　知れたことさ、病犬に喰附かれたとあきらめて、貸して下せえ。

敎眞　えゝ情ない、何たる因果か前世の業か、是れといふのも淺ましい出家の身として吉原の、女郎屋へ行つた其の報い、お師匠さまや佛の御罰。こりやまあ、どうせう、どうせうぞいの。

七之　さあ坊さん、痛い目をしねえうち、早く金を貸して下せえ。
教眞　いやぢや〳〵、假令殺されても、此の金ばかりは貸されぬ〳〵。
七之　强情言やあ是非がねえ、覺悟して往生さつせえ。（ト脅しに切つて行く、其の手に縋り、）
教眞　人殺し、誰ぞ來て下されいなう。
七之　えゝ、やかましい。
ト波の音になり、七之助出刄にて脅しに突いてかゝる、教眞あちこちと逃げ廻り、小石を取つて打ち附ける、此の內眞海目を覺し、石より轉げ落ちて、
眞海　あれ、怖いわいなう、アレエ。
ト教眞に縋り邪魔になること、立廻りの內眞海は逃げて石の後へ隱れる、此の內兩人立廻り、七之助過つて教眞を一かせ切る、教眞わつと苦しみ、其の手に縋り、
教眞　えゝ情ない、どうでもわしを殺すのぢやの。
七之　許して下せえ、これ御出家、非道の者と思はうが、なくて叶はぬ親の爲め、脅して取らうと振廻した出刄庖刀で思はずも、怪我とはいへど此の深手、どうで助からぬこなたの命、坊主を殺して逆さまな問ひ弔ひはする程に、どうぞ往生して下せえ。

教眞　あれ、人殺し〳〵。(ト聲を立てる。)

七之　南無阿彌陀佛。

ト教眞の肩先を切り下げ、教眞苦しみ七之助へ摑み附き兩人立廻り、よき見得にて、知らせに附き月出で、浪幕を切つて落す、向う駒形、灯入りの遠見、手摺へ屋根船を大分引出し、船の鳴物賑かなる唄にて、七之助教眞の懷より胴卷を引出し、是れを楯に兩人立廻りよろしく、トヾ教眞を切下げ止めを刺す。時の鐘。出刃を拭ひ、思入あつて、

初めて逢うた此の出家、なければならぬ此の金を、持つて居たのがこなたの因果、許して成佛して下せえ。南無阿彌陀佛〳〵。

ト胴卷を懷へ入れ、教眞の死骸の袂へ石を入れ、後の浪手摺の蔭へ打込む。ドンと浪の音烈しく、浪煙ぱつと立つ、此の音に驚き、石の蔭より眞海出て、

眞海　伯父さま、怖いわいの。(ト七之助へ縋る、じつと眞海を見て、)

七之　これ小僧、手前はおれを知つて居るか。

眞海　あい、さつき玉子を下された、七さまといふ伯父さま。

七之　え、おれが顏といひ、名まで知られた上からは、後日の憂ひ、不便ながらも。

トぐつと眞海の胸倉をとる。

眞海　怖いわいなう。

ト七之助庖刀で突かうとして、可愛さうだといふ思入、助けようかどうしようと、色々思入あつて手を放す、眞海仰向にばつたり倒れる。七之助口の内に念佛を唱へながら、庖刀にて眞海の喉をぐつと突く、眞海苦しみ落入る。此の時知らせに付き月隱れる、時の鐘、波の音、佃になり、花道より四つ手駕籠の垂を下し、駕籠舁かつぎ出で舞臺へ來て、七之助へ行當る。七之助庖刀を振廻す、駕籠舁ワツと逃げて下手へはひる。やはり佃、ばた／＼にて、花道より以前のお熊走り出で舞臺へ來る、此の内七之助眞海の死骸へ石を附け、又後へ投り込む、ドンと浪の音、お熊思はず七之助に行當り、兩人透し見て、

お熊　七さんか。

七之　お熊か。

お熊　今の水音。

七之　靜かにしろ。（トお熊に囁く。）

お熊　そんなら、あの子を、えゝゝゝゝ。

七之　これ。

ト押へる。時の鐘、浪の音、忍び三重、駕籠の垂をばらりと上げる、内に三五郎、道中師好みの装にて乘つて居て、兩人の樣子を聞き、脇差を取つて差し蒲團の間の草履を出し履いて、そろ〳〵と出で窺ひながら兩人の中へはひる。七之助庖刀にて突いて行く、三五郎脇差にて留める、お熊此の中へ探りてはひり、三人ちよつと立廻りの內、三五郎下手へ行く、お熊探り合羽を提へる、三五郎お熊を振切る、是れにてお熊たぢ〳〵となり、癪の痛む思入にて、眞中へどうと倒れる、七之助この音を聞いて驚き、お熊を探り見て、

お熊、どうした。

トいへど返事なきゆゑ、七之助びつくりしてお熊を引起す、此の内三五郎つか〳〵と花道へ行きかける、七之助透し見て、

慥に人影、(ト是れにて花道の三五郎ぺつたりと下に居る、七之助お熊を介抱して、)これお熊、心を慥に。

トお熊むゝと反るゆゑ、七之助背中へ膝を掛ける、花道の三五郎シヤンと立つを一時に、木の頭。

三五　あゝ、女の癪か。(ト思入。お熊うんと心の附きたる思入。)

七之　お熊やアい。

ト七之助お熊の耳の側にて呼ぶ、お熊段々と氣の附く思入、浪の音、佃にてよろしく、

ひやうし幕

ト幕を引附けると一緒に三五郎花道へはひる。鳴物打上げ、留めの木にて、シヤギリ。

五幕目

深川大島町の場
同　路地外の場
西方村庵室の場

〔役名――網打七五郎、地藏堂庵主西念、小猿七之助、倉ヶ野屋儀兵衛、お坊吉三、善導寺所化海典、三日月長屋路地番いなせの市、船頭源次。七五郎娘お波、吉三女房お杉、其他。〕

（網打七五郎内の場）――本舞臺一面の平舞臺、向う暖簾口、上手押入戸棚、三尺の佛檀、此前へ切子燈籠をさげ、下手崩れたる鼠壁、掛竿、是れに誂への單衣掛けてある。上の方一間古びたる障子屋體仕掛あり。いつもの所門口。下の方路地口、破れし垣根、此前に丸井戸、水を汲む事あり、總て深川大島町七五郎内の體。爰に源次、三幕目の船頭にて店行事の札を持ち、○△の合長屋二人、弓張提灯を持ち立ちかゝり居る。此の見得四つ竹節にて幕明く。

△　こう源次や、今月の店行事は誰だな。
源次　誰でもねえ、爰の内の七五郎だが、三年此方長煩ひ、それに娘のお波坊が、盲目と來て居るから、それでおれが行事の集めッこをして歩くのだ。
○　何でも長屋に事なかれだ、あの彌吉の禿ッちよも、死なねえ〳〵といつたが、とう〳〵ごねてしまつたな。
△　寺へ知らせざあなるめえが、近い方に仕ようぢやあねえか。
源次　どつちも同じ寺だから、慥深川の善導寺と下谷の妙恩寺だが、どつちへ知らせに行かうな。
○　それぢやあ善導寺の方に仕よう、こつとらもよつぽど助かる。
源次　もし又それで悪いと言つたら、埋め直す分のことさ。
△　何の造作もねえ、行つて來よう。（ト○△門口へ出て、）
○　又此の後釜は七五郎だな。
源次　さうよ、どうで長いことはあるめえ。
△　序に寺へ廻つて來ようか。
源次　まだ死にやあしねえわ。

源次　お波坊や〳〵、ちやんはどうだ。

○　早く死ねばいゝに。（トやはり右の鳴物にて、○△は花道へはひる。源次は上手屋體へ向ひ）

ト是れにて上手障子を明ける。内に汚なき蒲團の上に七五郎、病みほうけたる好みのこしらへにて寐て居る、お波前幕の娘にて擦り居る、裾に搔卷、二枚折りの屛風あり。

お波　あい、今日は大きにようござんす。

源次　そりやアいゝ。親分、どうだえ。（ト七五郎天窓をあげ）

七五　おゝ源次か、よく世話をしてくれるさうだ、忝けない〳〵。

源次　何の御前、一つ長屋の其の上に世話になつた親分のこと、どんなにも仕にやあならねえが、何といつてもひつてんてれつく、ほんの手足ばかりのお世話だ。

七五　何だか長屋が騒々しいが、何ぞあつたのか。

源次　もし、聞きなせえ、人といふものは知れねえものだ、裏の隅の禿ツちよが暮れ方頓死さ、ところが今月はお前が行事だから、わつちが代りに長屋中を、集めツこをして來やした。

七五　そりや大きに御苦勞だ、あゝおれが代つて死んで遣りたかつた。

源次　つまらねえことを言ひねえな、今お前が死んで見ねえ、七兄ィの行方は知れず、跡に殘つたお波

坊が、どんなに困るか知れやあしねえ。

お波　そんな心細いことを言はずと、早くよくなつて下さんせいな。

七五　役に立たずとも親は親、おれが死んだら頼りがなからう。

源次　必ず死なうなどゝいふことは言ひなさんな。そりやさうと親分、なけなしな中を氣の毒だが、集めツこを五十貰はにやあならねえ。

七五　おゝさうか。お波や、そこに五十あるか。

お波　あい、あればよいが。（ト懐の巾着より錢を出して算へ）十二文足らぬわいな。

七五　あゝ、足らねえか。（ト七五郎思入）

源次　おツとよし、十二文は爰にある。（ト源次腹掛の隱しより十二文出し、一つになし思入あつて）五十や百の端た錢にやあ、目も掛けなんだ親分だが、僅十二文に困るといふは、世が世だ、なア親分。

七五　それを考へると、愚痴ばかり起つて、しみツたれたことだが、涙が出てならねえ。

源次　尤もだ、わつちでせえ涙が出る。（ト源次涙を手拭でふく。）

七五　ほんに、そんなことを言つてくれる者は、源次、手前ばかりだ。

源次　なに、さうでもあるめえ。（ト立上り）それぢやあ親分、大事にしねえよ。

七五　あれ。
源次　お波坊、今夜は休みか。
お波　あい、降りさうだから休んだわいな。
源次　そりやあいゝ、後には掛るだらう。（ト言ひながら門口へ出て）どれ、お通夜でもしてやらうか。
　　ト四つ竹節にて源次下手へはひる。引違へて、奥より三幕目のお杉浴衣がけ巻帯にて出來り、
お杉　おや、七さん起きておいでか。
七五　お杉さんか、折角尋ねて來なすつても、何をしたくツても此の中だから、堪忍してくんねえよ。
お杉　何のお前、そんな義理が入るものかね。お波さん、お米は疾いでおいたよ。
お波　そりや有難うござります。
七五　打捨つて置きなさればいゝに。（トお杉七五郎の顔をじつと見て）
お杉　もし七さん、長いことゝはいひながら、大層お前おやつれだね。
七五　いや、おれも大層やつれたらうが、お前も苦勞をしたと見えて、三年跡とは大違ひだぞ。
お杉　あい、どんなに苦勞をしましたらう、三年跡品川を駈落した其の時に、とんだ駕籠へ乘つたので、
　千葉の屋敷へ連れて行かれ、どうせうかと思つた所、部屋頭に貰つてもらひ、それから吉さんと

連れ立つて京大阪と思つたのも、途中で路用をなくしてしまひ、自前稼ぎに宿場へ出て、しがない暮しをして居たも、俺も果てきつて三年振り、やう／＼江戸へ歸つて見ると、そこら爰らが前とは替り、あすこに三日爰に二日と泊つて歩く其の内に、持つて居たものはみんな失し、寐る所にも困つたところから、ふつと昨夜思ひ出してお前の所へ來て見れば、三年越しの長煩ひ、ほんに七さん世の中に、よい事はないものだね。

七五　人も落目になつて來ると、惡いことばかりある、さうして若旦那はどうなすつた。

お杉　算段をして來ると、さつき出て行つたがね、まだ歸つて來ないよ。

七五　若旦那も惡い顏だから、大概どこも塞がつて居よう。

お杉　ほんに我が身の困るにつけ、嘸お前がお困りだらうね。

七五　それでもまだ天道樣に見放されねえ所があるか、お波が毎日按摩に出て、二百と三百取つて來るので、まあ喰ふにも困らねえ。

お杉　ほんに、そりやあ孝行なことでありますね。（ト七五郎苦しき思入）

七五　あゝ、又胸へ差込んで來た。

お波　ちつと横になんなさんせ、わたしが擦つて上げようわいな。

七五　そんなら大儀ながら擦つてくれ。（ト七五郎寐る、お波胸を擦る。）

お杉　風が當つては惡からう。お波さん障子をしめて置くよ。（トお杉障子を締める。）

七五　あゝ苦しい〳〵。

お杉　ほんに困つたものだね。（トお杉下手へ來て掛竿の單衣を見て、）此の浴衣はお波さんの浴衣だが、大層汚れて居る、ちよつと振出しておいて上げよう。夜干しにして置いたなら、明日の朝までに乾くだらう。（トお杉單衣を取つて門口にある酒樽の半切へ入れ、水を汲み入れ洗はうとして、）おや、此浴衣は見たやうだよ。おゝ見た筈だ、こりやあ茅場町の與四郎さんが、三年跡品川へ來なさる時分着て居た浴衣、似た縞もあるものだが。（ト袖を見て、）おゝ、さうだ〳〵、藝者のおさんさんがからかつて、袖口を破つたを、お針さんに縫つて貰つた此の疵が慥な證據、聞けばあの後身を投げて死んだとやらいふ噂、どうして爰にあつたか。（トぞつとする、此時木魚の音する。）えゝ、何だか氣味の惡い所へ、枕念佛が始まつたさうだ。

トお杉洗濯なして居る。さんげ〳〵になり、花道よりいなせの市黒の頭巾、輪袈裟、着流し、錫杖を持ち法印のこしらへにて出て來る、門口へ來て、

市　さんげ〳〵六根清淨。

お杉　もし、手が寒かつて居ますよ。

市　そも〳〵當所深川の鎭守、富ヶ岡八幡と申し奉るは、

お杉　御無用でございますよ。

市　なに、お志には及びませぬ、さんげ〳〵六根淸淨、緣起を委しく尋ね奉るに、

お杉　もし、病人があるから、靜にしておくれよ。

市　へゝえ、病人がございますか、それならば猶のこと御祈禱をして進ぜませう。さんげ〳〵六根淸淨——。

トいなせの市錫杖を振りながら内へはひり、あちこち内の樣子を見る。

お杉　えゝ、此の人は無遠慮な、人の内へつか〳〵と、（トお杉留める。）

市　なに、病人があるといふから、祈禱をしてやるのだ。さんげ〳〵六根淸淨。

お杉　頼みもせぬに騷々しい、早く外へ出ておくれよ。

市　人が折角親切に、祈禱をしてやらうといふに、出て行けとは何のことだ、物貰ひとは譯が違ふぞ、一旦仕ようと言つたからにやあ、何でもかでも奥へ踏込み、（ト行きかける。）

お杉　え。（ト支へる。）

市　是非とも祈禱をしにやあならねえ。

トやはりさんげ〳〵にて、いなせの市奧へはひり家搜しをする心、お杉これを留める。此の内花道よりお坊吉三、三幕目の役にて、單衣二重廻りの三尺、ばら緒の雪駄頰冠り、歩き附いて出來り、直に舞臺へ來り、內へはひり、いなせの市を張り倒す、

あいたゝゝゝ。

お杉　や、吉さんか。

市　こいつはたまらぬ。（ト逃げようとするを、お坊吉三引捉へ）

吉三　お杉、こいつは何だ。

お杉　何だか知らぬが馴れ〳〵しく、病人があるなら祈禱をして遣らうの何のと、家の內を見廻して、何だか怪しい人でありますよ。

市　いや、何も怪しい者ではない、御病人があるといふゆゑ、御祈禱をして進ぜる積りだ。

吉三　御祈禱もすさまじい、うぬらが祈禱がきくものか。（トいなせの市を突倒し）掛り合ひを附けた所が、錢になりさうな奴でもねえ、きり〳〵出てうしやあがれ。

市　いやもう、お祭しの通り、錢といつては。

吉三　どうしたと、
市　内外清淨、六根清淨。（トいなせの市花道へ逃げてはひる。）
吉三　おきやあがれ。
お杉　ほんに、忌々しい奴だね。
吉三　そりやあさうとお杉や、何ぞ着る物を貸してくれ。
お杉　何もありやあしないよ。
吉三　七が單衣があつたぢやあねえか。
お杉　なに浴衣ぢやあない、長半纏だよ。（ト下手にある長半纏を出す。）
吉三　それでもいゝから貸してくれ。（ト吉三長半纏を着替へ、單衣を取つて、）おい金公、兄貴によく言つて下ッし。（ト歩き單衣を渡す。）
ある　はいく、そんなら吉さん、又お出でなさい。
吉三　大きに御苦勞だつた。（ト歩き單衣を持つて花道へはいる。お杉思入あつて、）
お杉　お前、また裸になつてお歸りか。
吉三　裸になりてえことはねえが、七五郎も煩つて居るから、鹽噌の錢も入れて遣りたし、手前にも新

らしい浴衣の一枚も着せてやらうと、思つた壺が裏目と出て、僅な種をすつてしまひ、二兩足を出して來た。

お杉　手柄さうに負話し、わたしは新らしい浴衣を着せて貰はずともよいから、脱がせられないやうにしたいよ。

吉三　よく當つた、其の浴衣を借りにやあならねえ。

お杉　わたしやァいやだよ、これを脱ぐと着るものがないわね。

吉三　此の長半纏を着て居やな。

お杉　外聞の惡い、そんなものが着て居られるものかね。

吉三　居られねえことがあるものか、ちよつと兄貴の所へ行つて、二三兩借りて來るうちだ。

お杉　それだといつて是れを脱ぐと、湯へ行くことも出來はしない。

吉三　何でもいゝから、貸してくれ。

お杉　是ればかりは堪忍しておくれ。

吉三　えゝ、往生際の惡い、脱げといつたら脱げ。（ト吉三お杉の帶を解きに掛かる、其の手に縋り、）

お杉　吉さんそりやあお前あんまりだよ、首ッたけ惚れて居るゆゑ、どうしてもいゝと思ふだらうが、

それぢやあ夫婦の情がないよ。品川を逃げてから三年此方、旅先きでお前を遊ばして置いたのは、恩に掛けるのぢやないけれど、みんなわたしが身の苦しみ、少しは女房と思ふなら、邪慳にせずともいゝぢやアないかね。

吉三　そりやあ手前が自前を稼いで、喰して置いたといふだらうが、おれだつて丸ツきり女房の臑ばかり嚙つちやあ居ねえ、夜盗こそしねえけれど、ゆすり衒りでたんまりと包み金でも取つた時ア、言ふなり次第ぐツしりと着せて置いたこともあらあ、言やあそりやあ五分々々だ、恩に被せる譯はねえ。さあ、貸せといつたら貸しやあがれ。

ト無理に脱がせうとする、上手の屋體より七五郎よろぼひ出て、

七五　これ／＼若旦那、まあお待ちなさい。

吉三　七五郎、打捨つて置いてくれ。

七五　打捨つて置けとおつしやつたとて、どう打捨つて置けますものかな、まあ／＼お待ちなされませ。(ト吉三を留めて、)様子は聞いて居りました、可愛さうに若い者に、それが着て居られますものか、どんな用か知らねえが、まあ今夜は中直りに、内に寐ることになさいまし。

吉三　内に居られる位なら、無理なことも言はねえが、三キの所へ二兩といふ足を出した其の上に、小

遣錢に困るから兄貴の所へ無心に行つて、二三兩借りて來るのだが、此の裝ぢやあ行けねえから、行つて來るまで貸せといふのだ。何と分つた譯ぢやあねえか。

七五　さう聞いて見ると、行かずにも居られめえ、何ぞ貸して上げたいものだが。

　ト思入、此時上手の屋體よりお波、序幕の辨慶縞の單衣を持ちて、探り〳〵出來り、

お波　もし父さん、葛籠の中に是れがあつたが、是れを貸してお上げなさいな。

　ト件の浴衣を出す、七五郎見て、

七五　や、是れは。（トびつくり思入、吉三見て。）

吉三　そりやあいつか手前が着て居た、辨慶縞の單衣か、丁度いゝ、貸して下ツし。

七五　さあ、ちつと是れは。

吉三　ちよつと行つて來るうちだ、貸して下ツしな。

七五　さあ、是れは。（トじゆつなき思入。）

お杉　もし、七さんも此の浴衣は何か貸しにくいことがある樣子、仕方がない、是れを着てお出でよ。

　トお杉帶を解きに掛るを留めて、

七五　あゝこれ、お前が脫ぐにやあ及ばねえ。貸されぬといふ其の譯は、此の浴衣には片袖がござりま

せぬ。(ト廣げて見せる。)

吉三 むゝ、此の片袖はどうしたのだ。

七五 いつか品川から歸りがけ、詰らぬことから喧嘩して、片袖を引き切られ、着ることが出來ねえゆゑ、葛籠の底へぶち込んで、忘れてしまつた此の浴衣、もう三年たつたから。(トよもや知れまいといふ思入にて)是れでよくば、着ておいでなせえ。

吉三 いゝどころか。結構だ、(ト言ひながら吉三着て)腕まくりをして居りやあ、ちつとも知れねえ。それぢやあ行つて來るよ。

七五 早く歸つておいでなせえ。

吉三 四つ過ぎにやあ歸つて來る。

七五 路地がしまつたら。お叩きなせえよ。

吉三 承知だ。(ト吉三門口へ出る、お杉送り出て)

お杉 きつと歸つておいでよ。

吉三 歸らねえでどうするものだ。(トやはり四つ竹節には花道へはひる。お杉跡を見送り)

お杉 七さん。まことにお氣の毒だね。

七五　なに、こつちが氣の毒だ、若旦那の親御さまには、どんなに御恩になつたか知らねえ、其の御恩送りだから、どのやうにもしなけりやあならねえが、何をいふにも此の仕儀だから、堪忍してくんなせえ。

お杉　なに、詰らないことを。おや、わたしとしたことが、洗濯物をさつぱり忘れた。

トお杉門口へ出て單衣を棹へ通し、よき所へ掛ける。此の内お波四邊を片附け、吉三の守袋を取りあげ、

お波　もし父さん、此の守は誰のでござんす。

七五　おゝ、こりや若旦那の守だが、今着物を着替へるとき、大方忘れて行きなすつたのだらう。

トお杉門口から。

お杉　守を忘れて行つたとえ、そゝツかしいことだねえ。

七五　あゝ、氣の早いお人だから、何ぞ間違ひでもなけりやあいゝが。

お杉　爰へおだし、追掛けてゆかう。

七五　お杉を遣りたくツても、御存じの通りだから、御苦勞ながらお頼み申します。（ト守を渡す。）

お杉　まだ、そんなに行きはしなさんすまい。（ト帶をしめ支度をする。）

七五　あゝ、提灯を上げてえにも、
お杉　なに、盆燈籠で明るいわな。
お波　そんなら、お杉さん。
お杉　お波さん、氣を附けておくれよ。（トやはり四つ竹節にてお杉足早に花道へはひる。七五郎思入。）
七五　お波大層蚊が出て來たから、床を爰へ敷いてくれ。
お波　あい〳〵。

トやはり右の合方にて、お波探り〳〵、上手の屋體より寐道具を出す。七五郎は共々に手傳ひ、蒲團を敷く、後へ二枚折を立て、七五郎此の上へ住ひ、

七五　お波、もう藥はしまひか。
お波　あい、みんなでござんす。
七五　あゝ、醫者樣にも藥禮を、ちつとばかり入れてえものだ。
お波　父さん案じなさんすな。昨夜吉原で女郎衆に貰つたお金を今朝くづし、お醫者さまへ二朱に、大家さまへ一朱上げ、殘りのお錢でお米と薪を買つて置きましたわいな。
七五　お袋がねえばかりに、年も行かねえ手前に、そんな所帶の苦勞を掛けるのが、可愛さうでならね

えわえ。（ト七五郎泣く。）
お波　何の苦勞でござんせう、そんなことを思はずと、早うよくなつて下さんせいな。
七五　どうぞもう一遍よくなつて、手前に樂をさせてえもんだ。
お波　さあ、早うよくなるやう、もうちつと揉んで上げようわいな。
七五　いや〳〵、もう今夜はいゝから、草臥れたらう早く寐ろ。
お波　あい〳〵、お前も寐なさんすか。
七五　拜みを上げて直寐るから、まあ手前先へ寐ろ。
お波　そんなら父さん、用があつたら起して下さんせ。
七五　あい〳〵。（トお波上手へ莫座を敷き、括り枕をして寐る、これを七五郎見て、）あゝ、蚊帳がねえから嘸蚊に喰はれるだらう。
お波　寐てしまふと、知らぬわいな。
七五　寐冷をするから踏みぬくなよ。
ト七五郎以前の長半纏をお波へ掛けてやる。時の鐘。下手より以前の源次、錠を振りながら出來り、花道にて、

源次　此の頃は物騷だといつて、べらぼうに大家めが路地をやかましくいふものだから、四つカツキリに路地をしめると、鬱陶しく叩きアがる、路地番はこつぱいだ。

ト言ひながら花道揚地の路地へ錠を下し歸り來る、此の時下座にて枕念佛の木魚の音、源次氣味の惡き思入。

成程枕念佛といふものは、幾歳になつても氣味の惡いものだ、何だか跡から追掛けられるやうだ。

ト源次足早に下手へはひる。此の内七五郎火鉢へ蚊燻しを仕掛け、團扇にて煽ぎ居ろ、時の鐘を打上げ、床の淨瑠璃になる。

〽いとゞさへ秋は哀れに鳴る鐘の、音もかすかに消え殘る燈籠の影にしよんぼりと、病み疲れたる七五郎娘の寐顏打ち見やり、（ト七五郎寐て居るお波を見て、）

七五　晝の疲れにすや〳〵と、横になると他愛はない。まだ、まあこいらは佛だなあ。

〽寐息を考へかたへなる、佛間へ向ひ合掌なし、

南無、俗名與四郎頓生菩提、南無阿彌陀佛々々。

〽なまいだ〳〵、南無阿彌陀。（ト七五郎佛檀へ向ひ合掌なし、よろしく思入、床の合方。）

定めて悔しい一念で、中有に迷つて居るであらう、其の報いにて三年この方、晝夜わかたぬおれ

が苦しみ、其の上娘の目が潰れ、みじめを見るも身から出た錆、おれは觀念して居るから、取り殺すなら與四郎殿、おればかり取り殺して、娘はどうぞ助けて下せえ。無理なことだが頼みます頼みます。あゝ是れに附けても、總領の七之助はどうしたか、三年こつちへ噂も聞かぬが、達者で娑婆に居ることか、どこぞで切られてしまやあしねえか。あゝ子を持つて知る親の恩とは、よくいつた譬だなあ。

〽子ゆゑに迷ふ涙さへ、目に一杯の滿潮や、磯馴の松を打越して、岸に寄る邊の波ならで、人目を忍ぶ裏傳ひ、七之助は内さしのぞき、

ト此内時の鐘、七五郎愁ひの思入、花道揚幕の路地を乘り越え、七之助辨慶縞の着附、好みのこしらへにて出來り、門口へ來て、内をのぞき思入あつて、

七之　父さん〳〵。

七五　誰だ。

七之　わつちでござります。

〽いふ顏火影にすかし見て、(ト七五郎門口へ思入あつて)

七五　さういふ聲は、七ぢやあねえか。

七之　あい、七之助でござります。

七五　おゝ、よく尋ねて來てくれた、さあ上れ〳〵。

七之　あい、今上ります。

〽外を窺ひ門の戸を、さすが小猿は油斷せず、上るをおそしと七五郎。

ト七之助門の外を窺ひ、門口をしめ七五郎の側へ來る。

七五　おれも煩つて心細いので、どこにどうして居ることだと、今も噂をして居た所だ。

七之　斯ういふことゝ知つたなら、疾うから尋ねて來るのだが、久しい間旅へ出て、江戸へ歸つてまだ四五日、昨夜吉原の三日月長屋で、お前が長く煩つて、居なさることを聞いたから、直に來ようと出掛けた途中、ちつと手間の取れることが出來て、ついそれなりに今日も又、晝の内は歩き難く、それで今夜來ましたよ。

七五　よく尋ねて來てくれた、三年越しの長煩ひに、重荷に小附けお波の目が、兩方ともに潰れてしまひ、落目になつてはいかねえものだ、まだしも今日までひくら〳〵と、生きて居たのが不思議なことだ。

七之　そりや、お前ばかりぢやあねえ、わつちも三年この方はする事なすこと鵤になり、これぢやあ何

處かで喰ひ込み、切られるだらうと思つたも、二十五の曉を越し赤の飯をたいて祝つたが、こればかりが儲けものさ。

七五　ほんに手前は二十五までは、生きられめえと思つて居たが、

七之　互ひに生きて居りやあこそ、明日にも知れねえ命でも、

七五　親は泣き寄り、此の樣に、

七之　夜でも忍んで逢はれるのだ。

七五　まあ何にしろ、手前も達者で、

七之　お前も生きて居てくれて、

七五　こんな嬉しい、

兩人　ことはねえ。

〽鬼のやうなる心にも、流石親子の恩愛に、地獄で佛に逢ふたる如く、悅び合ふぞ道理なる。

ト兩人よろしく思入、跡合方になり、

七之　嘸お前も長煩ひで、何やかやに困るだらう、それに又人參とか犀角とかいふ、直の高い藥の入ることだらう、たんともねえが此の金を、そんな用に遣つてくんねえ。

此内七之助懐より前幕の包金を出し、七五郎の前へ置く。

七五　こりあよつぽどありさうだな。

七之　なに、たつた十四五兩だ。

七五　それぢやあ是れをくれようと、思つて今夜尋ねて來たのか。

七之　晝は世間を憚るから、路地を乘越えこつそりと、夜更けてお前に逢ひに來たのだ。

トこれを聞き七五郎思入あつて、

七五　晝間晴れて歩けぬ程、惡事があるといふからにやあ、定めて今夜の此の金も。

七之　どうでわつちが持つて來たから、淸い金ぢやあねえけれど、お前だつて堅氣ぢやあなし、通用せえすりやあいゝぢやあねえか。（ト七五郎思入あつて。）

七五　志しは忝けないが、長煩ひで氣が折れて是れまで人の目を掠め、多くの金を取つたゆゑ、報いで悴に先きへ行かれ、跡の娘は目が潰れ、おれがみじめを見ることかと、ふつと心が附いてから、惡いことをする氣はねえ、手前もどうか心を入れ替へ、是れを路用に逃げてくれ、江戸にごろ／＼して居たら、深川無宿と捨札に名を殘さにやあなるめえぜ、おれが手本だ、思ひ切れよ。

〽涙ながらの異見さへ、身の舊惡に七之助。（ト七五郎思入にていふ、七之助も思入あつて、）

七之　詰らねえことを言ひねえな。今おれが切り上げたつて、どう此の首が繼がれるものだ、又お前だつて同じこと、長生きをする氣か知らねえが、おれが目で見る時は、どうで長いことはねえぜ、十日のものなら三十日生き延びるのは藥の力だ、惡いことはいはねえから是れで高い藥を呑み、一日でも生延びてうめえ物でも喰ふのが德。父さん、お前も父のせゐか、けちな心になつたなあ。

〽道に缺けたることながら、親をば思ふ孝心は、別に替りはなかりけり。

ト七五郎も打ちうなづき、

七五　折角手前の親切を無にせうとしたは惡かつた、それぢやあおれも此の金で直の高い藥を呑み、生延るから手前も又生先きのある體ゆゑ、逃げられるだけ逃げ延びて、長生きをしてくれろよ。

七之　なあに、そりやあ案じなさんな、まだ〳〵一度や二度行つて切られるやうな口は利かねえ。

七五　おらあ先きのねえ體だが、どうぞ手前は生かして置きてえ。（ト寐てゐるお波へ思入あつて、）これ七や見てくれ、お波は、こんなに大きくなつた。

七之　僅三年見ねえうち、見違へるやうな娘になつたね。

七五　目が潰れてから按摩を覺え、今ぢやあおれを過して居るが、何と孝行な奴ぢやあねえか。

七之　いや、お兄いさんは面目ねえね。

七五 これお波や、兄いが來た、起きろ。
七之 あゝ父さん、寐かして置きねえ、妹にやあ逢つたよ。
七五 そりやあ何處で。
七之 昨夜吉原の三日月長屋で。
七五 あゝさうか、内へ歸つて何とも言はなんだ。
七之 ちつと差しがあつたから、餘所ながら逢つたのさ。(ト此時枕念佛の一つ鉦鳴ろ、七之助これを聞き)
父さん、裏で誰ぞ死んだかえ。
七五 奥の彌吉が、頓死をした。
七之 それぢやあ今夜お通夜だな、いや、附かねえことを聞くやうだが、三年越しのお前の病氣、父妹の目がつぶれたのは、たゞ事とは思はれねえが、何ぞ人に怨みでも受ける事はありやあしねえかえ。
〽思ひがけなき七之助に、星を指されてぎつくりと、(ト七五郎ぎつくり思入あつて、)
七五 さあ、ないでもねえが。
七之 そんなら、覺えがあるのかえ。

七五　さあ、それは、

〽いふに言はれず、差込む胸先き。

あゝ、又胸へ差込んで來た。

〽苦しむ親を介抱なし。

ト此内七五郎苦しむ、七之助介抱なし、

七之　して、その譯はどういふ譯だ。

〽問へばこなたに聲あつて、（トお波寐て居て）

お波　其の譯言うて聞かさうか。

七之　何と。

七五　あゝ、苦しい〳〵。

〽虚空を掴む苦しみも、死靈の祟り打ち伏せば、娘お波に與四郎の、恨みの一念乘り移り、

むつくと起きて兩眼見開き、

ト七五郎苦しむを七之助介抱なす、ドロ〳〵凄き合方、寐鳥、一つ鉦になり、お波すつくと起き目を
あき、死靈の乘移りし思入にて、七五郎を恨めしさうに見て、

お波　忘れもせぬ三年跡、然も七月十三日品川よりの歸りがけ、乘合船の其中で我が所持なせし七十兩、盜み取つたる七五郎、主人へ金の言譯なく、永代橋より身を投げて非業に死したる此の與四郎、浮みもやらず中有に迷ひ、憂き目を見するは我がなす業、思へば〳〵恨めしい。

〽さも恨めしげに齒がみをなし、妹ながら物凄く、流石の小猿もびつくりなし、

ト　お波へ乘移りて男の思入、七之助びつくりなし、

七之　さては死靈が乘移り、親の惡事を喋べりしか、祟りを拂ふ此の守。

〽守を取つて差附くれば、不思議や妹に乘移りし死靈は放れ其儘に、お波は倒れ伏しにけり。

ト　七之助掛守を取つて差附ける、ドロ〳〵になり、お波よろしく思入あつて倒れ伏す、七之助思入あつて、

今の詞で思ひ出したは、女房お熊が其の以前、まだ瀧川といつた時、永代橋で見初めた晩、掏れ違つた店者が、父さんに金を取られた奴か、こいつあ恨むのも尤もだ。

ト　此時七五郎心附きし思入にて、

七五　あゝ苦しい〳〵、何ぞ一口呑ましてくれ。

七之　おつと合點だ。（ト土瓶を取つて）さあ父さん、口から呑みねえ。（ト七五郎ぐつと呑んで）

七五　あゝ、ちつと落附いた。
〽苦痛に弱る七五郎、小猿は側で介抱なし、
七之　これ父さん、お前は信心嫌ひだが、あゝいふ死靈の祟りがあつちやあ、藥よりか神佛の力を借りにやあいけねえぜ。
七五　その信心もする氣だが、何をいつても長煩ひ、面倒になつて出來やあしねえ。
七之　出來ねえのも尤もだが、そこを强情に信心しねえ、おれが側に居られるなら共に信心も進めるけれど、長く居りやあ厄介を、餘計に掛けねばならねえ體。
七五　どうで仕舞は死靈の爲めに、取り殺されて死ぬつもり、おれに構はず手前は早く、何所へなりとも逃げてくれろ。
七之　それだといつて死目をば、見捨てゝ行くもそでねえ譯、あゝどうしたらよからうな。
〽塒に迷ふ鳥ならで、思案に暮るゝ聲聞きて、起きる妹は目なし鳥。
ト七之助よろしく思入、お波目の覺めし思入にて、起上り、
お波　もし父さん、誰ぞ來なさんしたかえ。
七五　おゝ、手前が不斷逢ひたがつて居る、兄いが今夜尋ねて來た。

お波　なに、兄さんがござんしたとえ、そりやあ何處に。
〽聞くにうれしく、
七之　これ、爰だ〳〵。（ト七之助お波の手を取り、引寄せる、）
〽探る手先きを兄はとらへ、
お波　もし兄さん、逢ひたかつた〳〵わいな。
〽逢ひたかつたと取り縋れば、（トこれより「絶えてねえ」の合方。）
七之　おれも疾うから逢ひたかつたが、久しく田舍へ行つて居て、やつとのことで歸つて來た、今父さんに話しを聞きやあ、よく孝行にするさうだ、兄さんなざア叶はねえ、感心なことだなあ。
お波　わたし一人で便り少なく、朝夕お前が居たならばと、思つた心が屆いてか、よう歸つて下さんした、こんな嬉しいことはない。
〽悦ぶ顏を見るに附け、いとゞ不便も七之助、お波が背を撫でさすり。
ト お波七之助に縋り悦ぶ、七之助背中をさすり、
七之　おゝ尤もだ〳〵、目の見えねえ其の上に父さんの長煩ひ、嘸困つたことだらう、おれも共々内に居て力になつて遣りてえが、おれが居ちやあ手前にまで難儀を掛けにやあならねえから、本意ね

え譯だが又今夜、直に別れて行かにやあならねえ、心細くも父さんの、よく世話をして上げてくれろよ。

お波　そんならお前は此の儘に、内に居ては下さんせぬのか。

七之　内に居てえが、居られぬ譯は、後で父さんに聞いてくれ。

七五　〽いふに側から七五郎、これが別れと涙ながらに、（ト七五郎此の內思入あつて、）これお波、人間は老少不定といつてな、年取つたおれが先きへ死ぬか、又若い兄が先きへ死ぬか、命ばかりは知れねえから、是れが別れになるかも知れねえ、とつくり顏を見て置きやれ。

お波　父さん、わたしや見たうても、見ることが出來ぬわいな。

〽わツとばかりに泣き伏せば、（ト お波わツと泣き伏す。）

七五　あゝ、一目見せて遣りてえな。

〽親子は顏を見合せて、お波が心不便やと暫し涙に暮れけるが、七之助は泣く目を拭ひ、

ト七五郎、七之助兩人お波へ思入あつて、愁ひのこなし、

七之　これお波、人に人鬼はねえものだから、もしおれが居ねえ內に、父さんが死んでも、身を投げて死なうなぞと思ふなよ。

お波　あい。（トお波泣いて居る。）

七之　誰かしら手前の世話を、して下さる人があらう、又其の内にやあおれが來るから、必ず死なずに待つて居ろよ。

お波　あい。（トやはり泣き居る、七之助思入あつて、）

七之　それぢやあ父さん、わつちアもう行きますよ。

七五　おゝ何時まで居ても名殘りは盡きねえ、もう七つに近いから、明けねえ内に江戸を放れろ。

ト七之助思入あつて、

七之　とはいふものゝ三年越し、病みほうけた父さんや、目の見えねえ妹を殘し、おのが命の惜しいやうに、此儘見捨てゝ行くのも氣掛り。

お波　内に居てよいことなら、どうぞ居て下さんせいな。

〽すがる妹に七之助、行くに行かれず氣もおくれ。

七之　えゝ、いつそのこと内に居て、假令一日半日でも、足の附くまで妹と共に。

七五　あゝ、それは入らぬこと、おれを大事に思ふなら、少しも早う。

七之　それだといつて。

七五　えゝ、そんな未練な根性ぢやあ、石を抱くことは出來ねえぞ。

七之　そんなら父さん。

七五　七之助。

七之　妹。

お波　兄さん。

七之　所詮娑婆ぢやあ。

七五　逢はれめえな。

〽勵ます詞に是非なく〳〵、涙拭うて七之助。（ト七之助思ひ切つたるこなしにて）

〽これが名殘りと親と子が、心消え〳〵燈籠の、火影に見合す顏と顏、夜半の嵐の燈火の消えてあとなき子ゆゑの闇、別れてこそは。

ト此内七之助門口へ出る、七五郎燈籠を持ちて見送り、兩人顏見合せ、愁ひの思入よろしくあつて、七五郎燈籠をばつたり落す。時の鐘。お波さぐり行き、

お波　もし、

ト留めようとするを、七之助外より門口をしやんとしめる。お波ハアヽと泣き伏す。七五郎、七之助

顔を背けて泣く。此見得、三重、時の鐘にて、道具廻る。

(路地外の場)――本舞臺平舞臺、正面路地口、上の方土藏、此の間黒塀見越しの松、此の下に四斗樽の用水誂への蓋、下の方雨戸を下せし貸長屋、總て七五郎内路地外、夜更の體、時の鐘、合方にて道具留る。とばた〳〵になり、上手より前幕の儀兵衞頬冠り尻端折り、一本差し、以前のいなせの市同じく頬冠り尻端折りにて出來り、

市　もし、親分。

儀兵　これ、(ト時の鐘合方きつばりとなり、四邊へ思入あつて、)それぢやあ小猿の七の家は、こゝの裏か。

市　なに、この裏はあいつが親仁の、網打の七五郎の內さ、もし爰へでも來て居るかと、さんげ〳〵に化けて來て、內の樣子を窺つたが、小猿もお熊も居ねえ樣子さ。

儀兵　それぢやあ高飛びをしやあがつたか。

市　わつちもさうと勘附いて、すごく〳〵歸つて行く途中、摺れ違つたは小猿の七、何所へ行くかと附けて來たら、此の路地を乘り越えて親仁の所へ行つた樣子、そこでお前さんに知らせようと、どんなに方々尋ねましたらう。

儀兵　いやあ大きに御苦勞だつた。聞けばあいつも兇狀持ち、晝日中は歩けねえ奴だ、今に歸るに違えねえ。爰らあたりに待ち伏せして、野郎をしめたら玉も知れよう。

市　然し裏町にも路地があるから、わつちやあ後へ廻つて居よう。

儀兵　もし裏町へ出たならば、跡からそつと附けて來い。

市　合點だ。(ト大きく言ふ。)

儀兵　えゝ靜にしろ、(トやはり右の鳴物にていなせの市下手へはひる。儀兵衛路地口に思入あつて、)野郎め、今に見やあがれ。

ト身拵へしてきつと見得、時の鐘、誂への合方になり、儀兵衛上手へ忍ぶ。と松を傳はり、七之助路地を乘越え飛び下り、行かうとする。此の時儀兵衛つか／＼と出て、七之助の腰を捉へ、

ちよつと待ちやれ。(ト七之助思入あつて、)

七之　むゝ。おれを留めたは誰だ。

儀兵　誰でもねえ、倉ヶ野屋の儀兵衛だ。

七之　え。(トぎつくり思入。)

儀兵　おれと聞いたらびつくりするだらう。われが昨夜連れ出した、御守殿お熊をおれに渡せ。

七之　なに、お熊をおれに渡せとは。

儀兵　とぼけたことを吐かすなえ、うぬは小猿七之助といふ、盛場稼ぎの巾着切り、お熊が年増といふことは、當りを取つて置いたのだ。

七之　さう知られた上からは、何を隠さうお熊は女房、ちつと込み入つたことがあつて、昨夜ちよつと逢ひに行つたが、連れ出した覺えはねえ。大方そりやあ情人でもあつて、駆出したに違えねえ、足を近く來る客を、尋ねて見たら知れやせう。

儀兵　やかましいや、默りやあがれ。（ト大きくいふ。）

七之　えゝ、びつくりする大きな聲だ。

儀兵　これ、手前達にそんなことを言はれて、そんならさうかと引込むやうな、倉ヶ野屋の儀兵衛だと思つて居るか、御大層なことを言ふやうだが、鴻の巣から倉ヶ野切つて、長脇差の仲間ぢやあ五本の指へはひる顔だ、鎮守祭の丁半場で宿役人に疵を附け、土地を構はれ江戸へ來て、水道の水ももう三年、ちつと味を覺えたからにやあ白癡にばかりはされねえぞ、訛りだらけな江戸ッ子も地金を出しやあ上州者、言ひ出すからは命がけ、野郎めびくしやくしやあがるな。

　　トきつと言ふ、七之助態と下から出て、

七之　もし親分、堪忍しておくんなせえ。お前がさういふいゝ男とおらアさつぱり知らなんだ。お前は嘘だと思ひなさらうが、お熊はおれが女房だが、連れて逃げた覺えはねえ、どうぞ堪忍しておくんなせえ。

儀兵　なに、堪忍してくれ、大べらぼうめ。金で抱へた女郎をば、引張られた度毎に堪忍して遣つて見ろ、遊女屋生業する者は、顎を釣さにやあならねえ。うぬがやうな太え奴にやあ、上州者の魂を見せて遣らにあならねえわえ。

七之　あゝもし、見ずとも知れて居やすから、どうぞ堪忍しておくんなせえ。

儀兵　いや堪忍することはならねえ。念佛でも題目でも勝手にほざいて覺悟しろ。

七之　そんならどうでも、許さねえとか。

儀兵　知れたことだ。

七之　むゝ、さうぬかしやあ江戸ッ兒の、魂もまた又見せてやらうか。

儀兵　何を小癪な。

ト儀兵衞七之助を引附けようとするを振拂ひ、儀兵衞の脇差を引拔き、一刀切附ける、儀兵衞たぢ〳〵として、

こりやあうぬ、切りやあがつたな。

七之　やかましいわえ。

ト又切つてかゝる、儀兵衛用水桶の蓋にて受留め、立廻り、葛西念佛になり、兩人立廻りよろしく、儀兵衛段々手を負ふ、よき程にばた／＼になる。

南無三、人が。

ト七之助人が來るといふ思入にて逃げようとする、儀兵衛よろぼひながら、七之助の片袖を捉へる、七之助振拂ふはづみに片袖切れて、儀兵衛どうと袖を持つたまゝ倒れ、起上らうとする所を、七之助は一腰を打ち附け、逸散に花道へ逃げてはひる。儀兵衛へ打ち附けし刀仕掛にて儀兵衛の喉へ立ち、よろしく苦しみばつたりと落入る。時の鐘ばた／＼にて、下手より以前のいなせの市走り出來り、儀兵衛を見て、

市　や、こりや親分を、やゝゝゝ、（トびつくりし）さては小猿が殺したるか、後の證據は此の片袖。

トいなせの市片袖を取つて懷へ入れる、時の鐘、合方にて下手より吉三出來り、直に路地口へ來て明けようとして、

吉三　もうしめたか、忌えましい。

ト路地を明けようといふ思入、いなせの市吉三の袖のないのに心附き、扨はといふ思入にて、

市　うぬ、人殺しめ。

ト吉三に組附くを、振解いて立廻りちよつとあつて、いなせの市を投げのける、いなせの市又起き上つて組附くを引附け見て、

吉三　や、わりやさつきの法印め。（トいなせの市振拂ひ、逸散に花道へ行く、）

市　うぬ、訴人をするぞ。待つて居ろ。

トばた〳〵になり、いなせの市花道へ走りはひる。吉三跡を見送り、

吉三　何だ狐附を見たやうな奴だ。（ト吉三舞臺を見て、）や、こりや夥しい此の血汐、そんなら人が切られたか。

ト儀兵衞が死骸を見てびつくり思入、時の鐘、やはり合方にて下手より以前のお杉走り出で來り、吉三と行當り顏を見合せ、

お杉か。

お杉　吉さんか。

吉三　路地がしまつた、裏へ來い。（トお杉の手を取る、お杉舞臺を見て、）

お杉　もし、此の血汐は。

吉三　人殺しがあつた。

お杉　えゝ。（トお杉びつくりする。）

吉三　靜にしろえ。

ト時の鐘合方にて、吉三お杉を圍ふ。此見得よろしく、道具廻る。

（元の七五郎内の場）――本舞臺元の世話場・眞中に二枚折の屛風を立て、七五郎お波寢て居る體。やはり左の鳴物にて道具留る。と下手より源次ぶら提灯を提げ出來り、

源次　何だか今夜のやうに犬の吠える晩はねえ、それに又枕念佛で、何だか不氣味で堪えられねえ。（ト言ひながら干してある單衣を提灯で見て、）おや、此の單衣はお波坊の單衣だが、誰が洗濯をして夜干にしたか、ほんに湯灌場ものといふものは、滅法に安いものだ。此の間もお波坊に着せるから、安いものを買つてくれと賴みなさるから、四百でおれが買つて來たが、大分これも死人のだらう。（トよく／＼見て。）三年跡洲崎で見た土左が、こんなのを着て居たつけ。

ト此時一つ鉦、どろ／＼、よき所へ燒酎火出る、源次びつくりして顫へ居る　幽靈の合方になり、右

の干してある浴衣より、與四郎幽靈のこしらへにて出る、源次見てびつくりなし、是れにて七五郎
ワアヽ、そりやこそいつかの土左衛門、さま〳〵。
ト顫へたがら下手へ逃げてはひろ、與四郎內へはひり、屛風の側へすつくりと立つ、
起上り、苦しき思入にて、
七五　あゝ、おれが惡い、許してくれ〳〵。（ト苦しむ、お波探り寄り）
お波　父さん、どうしなさんしたぞいな。
七五　あゝ、此の苦しみをするよりか、どうぞ一思ひに殺して下せえ。
與四　一思ひに殺しては、此の身の恨みが晴れぬゆゑ、長く憂き目を見せねばならぬ。
お波　えゝ父さん、あの聲は。
七五　與四郎どのゝ幽靈だ。
お波　アレエ。（トお波うつ伏せになる、與四郎七五郎の胸を取る、）
七五　あゝこれ、どうぞ許してくれ〳〵。（ト七五郎苦しむ、此時下手より吉三お杉を連れ出て、）
吉三　七五郎、今歸つた。（ト門口を明ける、與四郎上手へ行く、七五郎ほつと思入）
七五　若旦那か。

お波　よい所へ。（ト兩人內へはひり、お杉與四郎を見て、）

お杉　あれ、與四郎さんが、（ト吉三に縋る。）

吉三　なに與四郎が、（トきつと見る、是れにてドロ〳〵烈しく、掛煙硝にて與四郎上手障子屋體へ消える。）

　さては、あいつが。

七五　此の身の病。

ト此時上手の屋體にて燒酎火燃える、お杉アレと吉三に縋るを、引廻してきつと見る。お波七五郎の膝へ探り寄る、七五郎苦しみ、

　あゝ許して下せえ〳〵。（ト吉三七五郎の惱むを見て、）

吉三　はて、恐ろしい、（ト道具替りの知らせ、）執念だなあ。

ト大ドロ〳〵にて、燒酎火を段々に引上げる、是れにて道具廻る。

（地藏堂庵室の場）――本舞臺三間の間常足の二重、藁葺の屋根、竹の本緣附、向う一間佛檀、暖簾口、鼠壁、上の方一間の地藏堂軒口に額、內に石地藏、此の前に線香立、手水鉢、賽錢箱、いつもの所竹簀戸、下の方藪疊、越ヶ谷西方村といふ傍示杭、道具半程より、時の鐘、烏笛、臼挽唄にて道具留る。

と合方引流しにて、奥より前幕の海典の坊主出來り、

海典　夜は長くなつたやうだが、一昨日からの疲れが出て、ぐつすり寐たら直夜が明けた、何にしろ考へて見ると詰らねえのはおれが身の上、一所に出た教眞と眞海が殺されたので、びつくりして其の場から、寺へ歸らず隨德寺、當途もなしに出掛けた所、修行の錢は遣つてしまひ、昨夜爰の庵主を頼み、一晩泊めて貰つたが、是れから直に逃げたなら、おれに疑ひがかゝるだらう。こいつ何でもねえ、旅へ出るより一先づ江戸へ立歸らう、それがいゝ〳〵。（ト暖簾口より奥を見て、）今庵主が畑へ出て瓜や茄子に水をやるうち、江戸まで歸る路用をくすね、朝涼の内出掛けよう、まづ目當は地藏の賽錢箱。（ト海典本舞臺へ下り、賽錢箱を打返し、中より錢を出して緡へさし、）もうちつとあらうと思つたが、たつた二百四五十だ、是れで晝飯にあり附ける。（ト向うを見て、）南無三、爰へ人が來るわえ、どれ見附けられぬうち、ちつとも早く。（ト草鞋をはき、）地藏の顔も三度とやら、もう何ともないか知らぬ、おゝ、ある〳〵線香の錢が三十六文、（ト線香立ての錢を取つて、）これで一合飲める仕事だ、奇妙頂來地藏尊、どれ惡酒を一ぺえ引ツ掛けようか。

ト右の合方にて海典網代笠を冠り、花道へ足早にはひり、引違へて、花道より以前の七之助、頰冠り尻端折り、腕まくりをして片袖なきを隠し、出來り花道にて、

七之　今摺れ違つたあの坊主は、一昨日の晩おれがばらした善導寺の敎量が、連れの坊主に違へねえ、何で越ヶ谷くンだりへ。おれでも尋ねて來やあしねえか。こいつあ油斷がならねえわえ。何にしろ深川から夜通しに逃げて來たので、がつかりと草臥れた、それに片袖を引き切られ、晝の内は步き憎い、どこぞ爰らの辻堂か古宮へ引つこんで、ぐつすり一寐入りやりてえものだ。（ト向うを見て、）幸ひ向うに庵室がある。あそこへ行つて頼んで見よう。（と本舞臺へ來り門口より、）はい、お頼み申します〳〵。誰も居ねえか知らぬ。成程田舍は氣散じだ、何ぼ取られるものがねえとツて、何所もかしこも明けツ放しだ。もし、お頼み申します〳〵。（ト奥にて、）

西念　あい〳〵、誰だ、村の衆か。

ト上手より西念更けたる坊主鬘、鼠の着附、安下駄をはき、手桶を提げ出來る。

七之　いえ、旅の者でござります。

西念　あ、何ぞ用かえ。

七之　へえ、道で難儀に逢ひました者、どうぞ少しのうち、休ませて下さりませ。

西念　道で難儀に逢はしやつたとか、それは嘸困らつしやらう、遠慮はない、はひらつしやれ。

七之　左樣なら、御免なされませ。

ト木魚入りの合方になり、七之助おづ〳〵と内へはひる、西念賽錢箱の打返しあるを見て、

西念　はて、此の賽錢箱の打返してあるは。もし、旅のお人、今爰に四十ばかりの出家が、一人居ませなんだか。

七之　へい、四十ばかりのお出家なら、只今是れへ參る道、向うの畦で逢ひました。

西念　それではあれに違ひない、はて、太い奴だな。

七之　もし、何ぞなくなりましたか。

西念　いや旅の人聞いて下され、今の出家が昨夜來て、泊めてくれいと賴むゆゑ、一樹の蔭も他生の緣、殊には同じ出家ゆゑ快う泊めてやり、今わしが裏へ出て畑物へ水をやるうち、此の地藏尊の賽錢を盜んで逃げて行きました。何と太い奴ではござらぬか。

七之　私なども昨夜泊りで、其の盜人に出逢ひまして、大きな目に逢ひました、まことに油斷はなりませぬ。

西念　それは何にしろ氣の毒なことだ、そこに水も汲んであるから、足でも洗つて上らつしやれ。

ト言ひながら西念二重へ上る。

七之　左樣ならお詞に甘え、眞平御免なされませ。

ト七之助件の手桶の水を足へ掛けて洗ひ、二重へ上り下手へ住ふ、西念薬鑵の湯を茶碗へ汲んで、

西念　白湯ぢやが、一つ飲まつしやれ。

七之　有難うございます。

西念　さうしてこなたも昨夜の泊りで、盗人に逢うたと言はつしやるが、どのやうな目に逢はつしやつたな。

七之　へい、お聞きなされて下さりませ、昨夜草加へ泊りました所、晝から連れになりました二人連れの旅人、それが護摩の灰とやらで早立を進められ、八つを七つと聞き違へ、宿をば立つて小半道、人家放れた松並木で路用は元より荷物まで、持つて行かうといたしますから、遣るまいと引留めましたら、一人の奴が殺せというて、引ッこ抜いてかゝりましたから、命あつての物種と逃げる所を引き止められ、御覽なされませ、此のやうに片袖まで引き切られ。やう／＼逃げて來ました。

西念　それは危ないことであつた、どこも怪我はさつしやらぬか。

七之　仕合せと怪我はいたしませなんだ。

西念　金銀は世界の湧きもの、怪我のないのが何よりだ、嘸それでは空腹であらう、今に粥が出來るから、ゆつくりと喰はつしやれ。

七之　有難うはござりますが、すんでのこと殺されるかとびつくりいたしましたので、まだ喰べたくはございませぬ。
西念　必ず遠慮をさつしやるな。
七之　いえ、御遠慮はいたしませぬ。
西念　わしも丁度、こなた位の忰が一人あつたゆゑ、人の子のやうには思ひませぬ。
七之　有難うござりまする。
西念　さうしてこなたは、江戸の衆だの。
七之　はい、深川の者でござります。
西念　さうでござるか、わしも久しう江戸に居ました。
七之　左樣でござりましたか。
西念　して、こなたは何所へ行かつしやるのだ。
七之　へい、奥州へ參りますものでござりますが、今お話し申した護摩の灰には路用から着替まで殘らず盜まれましたゆゑ、所詮行くことは出來ませぬ、江戸へ歸りますにさへ此の裝でござりますから、どういたさうと存じます。

西念　ほんに其の裝では歸られまい。（ト思入あつて、）おゝ、丁度よい物がある、待たつしやれ／＼。（ト佛壇の下段より辨慶縞の片袖を出し、）縞も似寄りの辨慶縞、これを附けて行かつしやれ。

七之　え、（ト袖を取り上げ、合點の行かぬ思入。）こりやまあ同じ辨慶縞、片袖ばかりありますは。

西念　さあ、其の片袖ばかりあるに附いては、哀れな話しがござるわいの。

七之　して、其の話しとおつしやるは。

西念　さあ、片袖つぐも他生の緣、因果話しを一通り聞いて下され、旅のお人。（ト誂への合方になり、）元わしは此の在所の百姓でござつたが、三年程前のこと、總領の悴をば御領分の殿樣が、たつてお望みなさるゝゆゑ、音信不通で養子に上げ、跡に殘つた弟の悴を賴みに、それから江戸へ出、酒生業をして居ましたが、其の緣で茅場町の菊酒屋へ悴をば奉公に出した所、三年跡の盆のこと、掛先を七十兩受取つたのを人に盜まれ、言譯なさに身を投げて非業な最期を遂げました。其の時死骸の右の手に摑んで居たは此の片袖、この持主が悴の敵、憎い／＼と思つたも、是れも前世の約束と、ふつとあきらめ天窓を剃り、生れ故鄕へ引込んで朝夕悴が菩提のみ、思ひがけないこなたにまた、此の片袖を繼ぐといふも、最れも何ぞの緣であらう、人の難儀を救ふのも悴が後世を思ふゆゑ、不便と思うてどうぞこなたも、只一遍の回向をば、して遣つて下さりませ。

ト庵主涙ながらに言ふ。七之助はこれを聞き、びつくり思入。

七之　むゝ、すりや忘れもせぬ三年跡、しかも七月十三日永代橋から身を投げた、若いお人の親御であつたか。

西念　そんならこなたは、わしが悴を。

七之　知つたといふは其の晩に、橋の袂で摺れ違ひ、ちらりと見たる裝かたち。

西念　他人ながらも一度でも、逢うたこなたに此の袖を、繼ぐといふのも不思議な因緣。

七之　まだ〳〵そんなことぢやあねえ、不思議なことがござるから、必ずびつくりさつしやるな。（ト誂への合方になり。）斯うなるからは何を隱さう、わしやあ深川大島町で、網打七五郎といふ漁夫の悴で手癖が惡く、小猿々々と渾名に呼ばれた七之助といふ巾着切り、お前の息子が持つて居た、七十兩といふ金を取つたはわしの親父の仕業、其の金ゆゑに身を投げて死んだ死靈の崇りにて、親父は今年で三年越し足腰きかぬ長煩ひ、親の因果が子に報い、わしが妹も目がつぶれ、見るも哀れな貧乏暮し、喰ふや喰はずの難儀をば、世話のならねえわしが身は、江戸に居られぬ兇狀持ち、昨夜もとんだ間違ひから夜通しに來て疲れたゆゑ、寐ようとはひつた庵室で情に貰つた片袖から、話しを聞けば敵同志、廻り廻つて爰へ來たのはこゝで命を捨てろといふ、天道さまのお指圖かと、

心が附けば恐ろしく、死ぬる覺悟の七之助、お願ひ申すは御庵主樣、わしを親仁の代りに殺し、非業に死んだ息子どのゝ恨みの念の晴れるやう、未來へ詫びをして下され、どうぞ親仁の命をば助けてやつて下さりませ。假令一日半日でも、娑婆へ置きたいわしが願ひ、無理なことだが聞いて下され。

ト七之助よろしく思入にて言ふ、西念もびつくりなし、

西念 むゝ、すりや悴の金を取りし、敵はこなたの親御であつたか、これも前世の皆宿業、菩提の道に入るからは、假令敵が知れたとて、何しに人の命を取らうぞ、まして親御と事替り、何科もないこなたをば殺す所以がござらうぞ。

七之 いや、こなさんが殺しても、だいじない科がある。

西念 科があるとは、如何なる譯ぞ。

七之 仔細はこなたの息子どの、與四郎どのゝ許嫁、從兄妹同志なる瀧川を、無理に口說てわしが女房、いはゞ此身は間男同然、まだ其上に女房が弟、こんたの爲めには甥御なる善導寺の敎眞を、知らぬこととゝいひながら、殺して金を取つたる重罪、たつた一つの命では、足らぬ惡事の身の言譯、どうぞ殺して下さりませ。

西念　聞けば聞くほど重なる因縁、まこと悪心發起なし命を捨てる心なら、死ぬに及ばぬ、出家になりやれ。
七之　え。
西念　積る悪事の七之助が名をば殺して今よりは、生れ替りし心にて名も西心と改めて、出家堅固に亡き人の、菩提を問ふが死ぬより追善。
七之　それだといつて此の儘に、生き存へては人々へ。
西念　はて、悪いことは言はぬほどに、わしに任せて待たつしやれ。
七之　むゝ、（ト七之助思入あつて、）聞きわけました、御庵主さま。憎い奴をばそれ程に思つて下さるお心を、反故にいたさずお弟子となります。とてものことに此の場にて、直に坊主にして下さりませ。
西念　それとても性急に、今剃髪をいたさずとも、まあ吉日を選んだ上。
七之　いえ〳〵、善は急げといふからにやあ、是非とも剃つて下さりませ。
西念　はてまあ、急かずと其の内に。
七之　但しは殺して下さりますか。
西念　それぢやというて。

七之　そんなら剃つて下さるか。

西念　さあ、

七之　さあ、

兩人　さあ〳〵。

七之　どうぞ坊主にして下され。（ト思入あつて。）

西念　左程にまで言はつしやるなら、後ともいはずたつた今、剃髮いたして進ぜませう。

七之　そんなら剃つて下さりますか。

西念　こなたの望みに任する代り、剃髮いたせば世捨人、假令どのやうなことがあらうとも、決して荒氣は出さつしやるな、腹の立つことがあつたら、彌陀の稱號南無阿彌陀佛と、念佛を唱へさつしやれ。

七之　合點でござります。

西念　どれ、剃つて進ぜませうか。

ト竹笛入りの合方になり、西念戸棚より剃刀を出し研ぎにかゝる、七之助有合ふ手水盥へ水を汲み、元結を切り天窓をしめす思入、西念後へ廻り剃りに掛る、七之助澁團扇にて受ける、仕掛にて段々剃

り、トゞ七之助青坊主になる。

あゝ、至極よい出家振りだ。

七之　これでさつぱりいたしました。

西念　出家になつては其のやうな、單衣はもう着られぬ、（ト戸棚より鼠の單衣を出し、）幸ひわしが着替の浴衣、古いけれど帶も添へて、是れを進ぜるから着さつしやれ。

七之　何から何まで有難うござりまする、天窓を洗つて、着替へませう。（ト着物を抱へ、）もし、井戸はどこにござりまする。

西念　地藏堂の後にあります。

七之　どれ、汲み立てゞ洗つて來ませう。

ト木魚の勤めにて七之助單衣を抱へ、手水盥を持つて上手へはひる、西念殘り思入あつて、

西念　思ひ掛けない因緣で、あのやうな惡者が天然自然の道理に迫り、出家なせしは奇特なこと、又わしも一人でも善道へ導きしは、彌陀佛への御奉公、よい功德をしましたわい、南無阿彌陀佛々々。

ト西念珠數を爪繰り居る、花道より以前の海典出來り、花道にて、

海典　僅二百四五十の賽錢を盗んだので、一分通用の法衣をば、あの庵室へ忘れて來た。惡い事はしね

えものだ。(ト言ひながら平舞臺へ來り、)いや、御庵主、夜前は御造作に成りました、つひ道を急ぎましたゆゑ、今朝ほどはろく〳〵御挨拶もいたさず立ちましたは御免下され。

西念　何の〳〵、その言譯に及ばうぞ。して、道を急ぐと言ひながら、何しに歸つてござつたのぢや。

海典　餘り急いで面目ない。法衣を忘れて行きました。

西念　あゝ、さうでござつたか。(ト西念傍にある法衣を取つて、)これでござるか。

海典　これでござる〳〵。一分通用を種なしにする所だ、御庵主忝うござる。

西念　もう何も忘れたものはござらぬか。

海典　何も忘れたものはござらぬが。(ト海典四邊へ思入、)

西念　御出家、地藏尊の賽錢を置いて行かつしやれ。

海典　え、(トびつくりなし、態ととぼけて、)なに、地藏尊の賽錢とは、愚僧一向存ぜぬことだが。

西念　存ぜぬならばようござるが偸盜戒は五戒の一つ、以後をきつと嗜まつしやれ。

海典　偸盜戒は五戒の一つと、味なことを言はつしやるが、こりやあ愚僧が賽錢を盜んだと思はつしやるか。

西念　はて、盜まぬならばようござる。

海典　そつちはよからうが、こつちがよくねえ、盗人と悪名を附けられたからは濟まされねえ、それとも麁相とあやまるなら、あやまるやうに趣意を附けろ。

トきつといふ、ばた〳〵になり、上手より出前の七之助坊主天窓へ鉢巻をなし、鼠木綿の着附尻端折り、片肌脱ぎにて出來り、海典を取つて投げる。

海典　あいたゝゝゝ。（ト庵主見てびつくりし）

西念　あゝこれ、西心、何をするのだ。

七之　趣意を附けろと吐かすから、此の薪ざッぱで、でくぼく天窓を叩ッ毀してやらにやあならねえ。

ト海典これを見てびつくりなし。

海典　こいつはたまらぬ。（トばた〳〵になり、海典逸散に花道へ逃げてはひる。）

七之　うぬ、待ちやあがれ。（ト行かうとするを、）

西念　これはしたり、どうしたものだ。最前もいふ通り出家になつた上からは、荒氣を出しては濟まぬぞよ。

七之　成程さうでござりました。（ト七之助天窓をなで、びつくりして鉢巻を取り、肌を入れる。）

西念　天窓を丸くするからは、心も丸くせねばならぬぞ。

七之　それだといつて、今の坊主め。（ト立ち掛るを留めて、）

西念　さあ、腹が立つなら、

七之　むゝ、

西念　稱名唱やれ。

ト七之助の肩へ手を掛け、引き据ゑる、七之助下に居るを木の頭。

七之　南無阿彌陀佛々々。

ト天窓を押へる、庵主殊勝なといふ思入、寺鐘にてよろしく、

ひやうし幕

（附　記）

安政四年七月、此の作が稿下された時には、右の如き結末であつたのであるが、明治二十年前後に至り、演劇に對する風教上の取締りが勵行されるに及んで、右の如き結末では其筋に於て不滿足なりとあつて、作者自ら改訂を行つた結末が出來た。その年代は筆蹟其の他の關係から、明治二十年以後のことであるが、一種の勸善懲惡主義に添ふやうに出來てをり、一層芝居らしい、まとまりのついたものになつてゐる。何かの參考の爲めにもならうし、作

者自身の改訂でもあるから、次に輯錄しておくことにする。

（本書二九三ページの六行目、西念のセフリ「左程にまで言はつしやるなら、後とも言はずたつた今、剃髮いたして進ぜませう。」の次の行以下が、左の如くになるのである。）

七之　そりやア有難うございます。

ト此の以前下手へ法印姿のいなせの市先に○△□◎の捕手四人、海典に繩をかけて引立て出來り、門口に窺ひゐる。此の時竹簀戸を明けて、

市　やあ、人殺しの大罪人、坊主になつても許さぬぞ。（ト皆々内へはひる。）

七之　や、わりやあ三ケ月長屋で逢つた、さんげ〳〵の法印だが、何でこゝへうせたのだ。

市　倉ケ野屋の親分を殺して逃げた七之助、手前の跡を追つかける捕手の衆に頼まれて、見知り人におれが來たのだ。

○　又此の庵室へ入込んだを、知つたは、此の坊主。

△　捕手と知つてこそ〳〵と、逃げるは怪しい奴と認め、

□　取押へてたゞしたら、此の庵室で賽錢を、

◎　盗んで逃げた小盗人で、此奴がこゝを教へたのだ。(ト七之助思入あつて、)

七之　本街道は險難だから、在へはいつて裏通し、知れねえ積りで逃げ延びたが、とんだ坊主の案内で天の網がかゝつたは、逃れられねえ惡事の報い。

市　おゝ、其の惡事の報いにて、うぬが親仁の七五郎も、死靈の祟りでくたばつた。

七之　や、それぢやあ親仁は死んだといふか。

西念　死靈の祟りといふからは、忰の恨みであつたるか、南無阿彌陀佛。

○　最早脱れぬ。神妙に、

△　罪に伏して、

四人　繩にかゝれ。(ト七之助思入あつて、)

七之　親仁の命が助けたく、今の今まで思つたが、死靈の祟りで死んだとあれば、最早望みのねえ身體假令此の場を逃げのびても、儀兵衞ばかりか教眞殿、一人ならず二人まで人殺しのある七之助、所詮脱れることは出來ねえ。こゝらが此の身の年明け時、お手向ひはしませぬから、繩をかけて下さりませ。(ト後へ手を廻す。)

市　さすがは小猿、

四人　いゝ覺悟だ。（ト七之助へ捕手繩をかける。）

西念　そんならこなたは繩にかゝり、

七之　上のお仕置受けまする。

市　おのれが首になつたなら、これで親分が浮むだらう。

海典　浮ばれぬのは賽錢を、盗んだばかりで此の繩目。

西念　それもみんな天の罰。

七之　首になつたら一遍の、

西念　回向をするは出家の役。

七之　どれ、此の世の地獄へ、（ト立上ろを木の頭。）落ちようか。

ト覺悟の思入、西念は涙を拭ふ、皆々引張りよろしく、本釣鐘の寺鐘にて、

ひやうし幕

小猿七之助（終り）

ときに皐月狂言は
御贔屓様のおさし圖に
古きを以てあたらしく
字くばりなせし清書も
曲なりなる未熟の役割
わるい所はおとり立に
一段見ごとの御評ばん
願ふは朱書きの梅と松
昔を今に四十七字の榮

假名手本硯高嶋

「赤垣源藏」は安政五年五月、市村座に稿下された、作者四十三歳の時である。此作は忠臣藏銘々傳のやうなもので、書替への新作をも交へて、鶴ヶ岡から討入りまでの間に、彌作の鎌腹だの、佐藤與茂七の忠誠などがあつた。「赤垣源藏」も其の内の一幕として綴られたものであつた。「當狂言忠臣藏書替にて大出來、別して鹽山屋敷、高繩の場形見分け、赤垣源藏小團次大出來の處、病氣にて相休み云々」と豐芥子は歌舞伎年代記續篇に記してゐる。

書卸しの時の役割は市川小團次(赤垣源藏)、尾上菊五郎(與左衞門女房おさみ)、關三十郎(鹽山與左衞門)、松本國五郎(鹽山の若黨半助)、關花助(鹽山の子息與之助)、姉川源之助(鹽山の下女お梅)等であつた。

挿繪にしたのは、明治四十四年四月市村座に上演された時の舞臺寫眞で、六世尾上菊五郎の赤垣源藏である。

大正十三年九月　　　　編者誌す

假名手本硯高嶋（赤垣源藏――一幕）

鹽山邸玄關の場
同座敷別の場

（役名――赤垣源藏、鹽山與左衛門、悴與之助、若黨牛助、中間權平、同角藏、同丸助、同關助。
鹽山女房おさみ、下女お梅、其他）

（鹽山邸玄關の場）――本舞臺眞中より下へ寄せて九尺の玄關、敷臺、左右紋附きたる高張。正面中形の襖。是より上へ寄せて二間の障子屋體、下の方黑塀、玄關の柱に鹽山與左衛門同與之助といふ表札。舞臺花道とも雪布、總て秋坂の藩中鹽山玄關先の體。爰に中間權平一本差し、草鞋、雪掻を振上げ居る。牛助やつし、縞の袴一本差し、下駄穿き、更けたる若黨にて留めて居る。○△の中間二人、雪掻と竹箒を持ち立ちかゝり居る。此見得雪おろし、目出度〳〵の唄にて幕明く。

牛助　これさ權平、危ねえから止せといふに。

權平　いや、あの野郎の頭を敲ッこはさにやあ了簡ならねえ。

半助　了簡なるのならねえのと、盛切酒を半分づゝ、呑み合ふ仲ぢやあねえか。
○　その盛切酒を喰やあがつて、お株でぐづを言やあがる。
△　半助さんうつちやつて置きねえ。こんな分からねえ奴はねえ。
權平　何でおれが分からねえのだ。
半助　なに分からねえことがあるものか。手前の言ふことは分かり切つてゐらあ。
權平　さう言つてくれるは、お前ばかりだ。今夜小頭の言附で、御家中の雪を掻きに、こいつらと一緒に出かけたところ新めえの小野郎が一人精を出しやあがるから、もつと油を賣れと言ふのを、聞かねえから起つたことだ。中間奉公するものが、骨ツきり働いてたまるものか。
半助　尤もだ〳〵、手前の言ふのが尤もだから、早く大部屋へ歸つて、辻番でも抱いて寐るがいゝ。
權平　いや、あの野郎の頭を敲ッこはさねえうちは、おらあ寐ねえ。
半助　さうでもあらうが、手前に恐れて、相手は疾うに迯げてしまつた。
權平　大方こいつらが、迯がしやあがつたんだらう。
○　なに、おらたちが迯がすものか。新めえだつて足があらあ。
△　ぢつとして、手前に打たれるものか。

兩人　大べらぼうめ。

權平　なに、べらぼうだ。べらぼうとは誰がことだ。(ト雪搔を持ち立ちかゝる。)

半助　これさ、生酔に構はず、早く行きねえ。

△○　大べらぼうやァい。(ト下手へ迯げ込む。)

權平　うぬ、待ちやあがれ、迯げるとて迯がすものか。(ト雪を取つて無暗に打ち付ける。)

半助　えゝ、手前も執拗い、いゝ加減にしろ。

ト雪おろし合方になり、花道より與左衞門繼上下、大小爪掛けの下駄、澁蛇の目の傘をさし、紺看板の中間、赤合羽、饅頭笠を冠り、供をして出て花道にて、

與左　こりや關助、向うに立騒ぎをるは、何者ぢや。

關助　へい。大部屋の權平でござります。又呑みましたと見えまする。

與左　半助が困りをる樣ぢや、留めてやれ。

關助　畏りました。(ト舞臺へ駈け拔け來て)これ半助殿、旦那さまのお下りだ。

半助　これお下りだ。しつかりしろ〳〵。

權平　いやだ〳〵。(ト雪をぶッつける。過つて與左衞門へ打ち付ける。)

半助　これ權平、何ぼ醉つてゐるとて、旦那樣へ雪を打付け、濟むと思ふか。
權平　濟むも濟まぬもいるものか。旦那は四つさして四文だ。
關助　うぬ、そんな事をぬかしやあがつて。（ト胸ぐらを取る。）
與左　あこれ〳〵、かう見た所が泥醉の樣子。その儘にいたせ。
關助　それだと申して。
與左　はて、捨置け〳〵。（ト關助突放す。權平べつたりと倒れ、）
權平　これ、早く茶碗を廻さねえか、喉がぐび〳〵すらあ。あゝ、いゝ心持だ。（トその儘寐てしまふ。）
與左　さて〳〵彼も困つた酒ぢや。平生とは打つて變り、上下の見さかひなく、斯くも心の變るものか。酒は氣違ひ水ぢやな。
半助　お慈悲深い旦那樣、此儘お手討になりましても、いたし方がござりませぬ。
與左　あゝ權平を見るにつけ、案じられるは弟源藏。
半助　え。
與左　いや、玄關前に見苦しい、大部屋へ連れて行け。
半助　畏りましてござりまする。

ト此時奥より與之助、袴一本差しにて出で、式臺へ手をつき。

與之　只今お下りでござりましたか。

與左　おゝ、忰か、存外の大雪になつたな。

與之　嘸お寒うござりましたらう。

與左　今日は雪中の御徒然に、圍碁のお相手を仰付けられ、お側に居たゆゑ、さのみ寒うもなかつたわえ。

與之　それはよろしうござりました。

ト此内與左衞門玄關へ上る。關助は下駄傘を持ち下手へはひる。

與左　半助は、生醉を大部屋へ連れて參れ。

半助　以來は酒を呑まぬ樣に、小頭へ斷つてやりませう。

與左　いや／＼小頭へ屆けなば、彼れが迷惑、その儘にいたし置け。

半助　お慈悲深い旦那樣で、權平めは仕合せでござります。

與左　はて、酒興の上は是非もない。

與之　さやうなれば父上樣。

與左　どれ、奥へ行つて休息いたさうか。
　ト與左衞門、與之助奥へはひる。半助權平を起し、
半助　これ權平、起きろ／＼。
權平　もう呑めねえ、堪忍してくれ／＼。
半助　これさ、大部屋へ連れて行くのだ。しつかりしねえか。
　ト雪おろし、唄にて權平を肩へかけ下手へはひる。道具廻る。

（鹽山座敷の場）——本舞臺三間平舞臺、上の方床の間刀掛、用簞笥、謠本の箱等。刀掛けあり。此下腰張の茶壁、上下折廻し、雲母形の襖、總て鹽山座敷の體。上手に與左衞門、上下を取り座布團の上に住ひ、與之助大小を掛けてゐる。下女お梅上下を疊んでゐる。合方にて道具納まる。

與左　悴、森村氏のお出ではなかつたの。
與之　いえお出ではござりませぬ。
與左　此雪に弱られたと見ゆる。おゝ、弱ると申せば、おさみはどうぢや。
お梅　おい、御新造樣はお寒氣がなさるとて、奥においでゝござりまする。

ト下手襖を明け、おさみ女房の拵へにて出て、下手に手を突き、

さみ　只今お下りでございましたか。

與左　お丶、さみ、聞けば寒氣がいたすさうぢやの。

さみ　雪のせゐでもございませうか、ぞく〱いたしてなりませぬ。

お梅　それに御新造様は、お頭痛が御持病でございますゆゑ、一倍御難儀でございませう。

與左　もはや、當年も僅ゆゑ、寐ぬやうにいたしてくれ。

さみ　いえ〱、お案じなされますな。さのみな事ではございませぬ。

ト下手の襖より半助出て、

半助　へい、只今彼れを送り遣はしました。

與左　お丶大儀であつた。いや彼れが酒も、惡い酒ぢやな。

さみ　惡い酒とは、誰でございます。

與左　大部屋の權平めぢや。殊の外酩酊いたし、朋輩と喧嘩をいたし、半助が留めるも聞かず、なかなか聞かぬ様子であつた。

半助　揚句の果が人違ひで、旦那様へ雪を打附け、慮外をいたしましたゆゑ、小頭へ届けてやらうと存

じましたを、旦那樣がお留めなさるゆゑ、その儘許して遣はしました。

さみ　それはよう許してお遣はしなされました。お酒の上の事ばかりは、どうも仕樣がござりませぬ。

與左　取りわけ、斯くいふ某も、亂酒の弟を持つ身ゆゑ、權平が不埒をも、他人のやうには思はぬわい。

半助　御尤もにござりまする。源藏樣の御酒の上も、權平めにおまけはなされませぬ。

與左　いまだ當家にをる時分は、あいやうな亂酒ではなかつたが、去年鹽谷家沒落より、浪人なして身を持崩し、僅か二年經たぬうち、言はうやうない身持放埒。然し、此程は見えぬやうぢやな。

さみ　先月お出でなされてより、久しくお出でなされませぬが、もし、お風でも引きはなされませぬか。

與之　御浪宅へ半助を、お見舞に遣はしませう。

半助　いや、源藏樣のお使ひなら、御免下さりませ。

お梅　是はしたり半助殿、お主樣のおつしやり付けを、御免なさりませと言ふ事があるものかいな。

半助　御免を願ふは譯のあること、まあお聞きなされて下さりませ。此間旦那樣の御手紙を持つて、吉岡町の御浪宅へ參つた時。

さみ　あこれ半助、そのことを旦那様に申しては。

半助　それでも譯を申さねば、譯が分かりません。

さみ　分からないでもよいから、默つてゐやいの。

與左　いや〱、如何なる仔細か、遠慮はない。半助申せ〱。

半助　旦那樣、お聞き下さいまし、御浪宅へ來る途中、二つ目の角の居酒屋で、半助々々と呼ぶ者がございますから、内を覗いて見ましたら、源藏樣が中臺にづぶろく醉つておいでなされて、お兄い樣のお使ひかとおつしやりますから、左樣でございます、お手紙を持つて參りましたと申しましたら、そりやあ見ずとも御異見だらう。まあ一杯呑めとおつしやいましたが、もうお暇いたしますと立ちにかゝりましたらば、半助待てとお止めなされて、輕い身分でも主持ちの奉公人、おれは浪人の身の上だから、爰の勘定をして行けと、手を取つてお放しなされず、持ち合せがございませぬと、申譯をいたしても、錢がなければかたを置けと、六百七十二文のかたに、旦那樣からお貰ひ申した布子羽織を、その酒屋へかたに置いて歸りました。まだ取返して間もないに、又お使に參りましたらこの寒いのに布子羽織を置いて來ずばなりますまい。それゆゑ參りたうございませぬ。

與左　それは、はや尤も至極。そちに六百七十二文立替させては氣の毒千萬。おさみ、彼れにその代物を遣はせ。
半助　いえ、そのお錢は利を添へて、御新造樣からお貰ひ申しましてござります。
與左　おゝ、さうであつたか。
さみ　悪い事は、お耳へ入れぬやうに申して置きましたに、言はいでもよい事を申し、半助にも困りますわいな。
半助　それでもお話し申しませねば、參りたくないのが分かりませぬ。
さみ　まだ言やるか、默らぬかいの。
半助　へい。
與左　半助なればこそよけれ。他人にさやうな事あつては、身共許りか亡父の恥辱、憎いやつとは思へども、たつた二人の兄弟、殊に亡父の御祕藏にて、御死去の節も行末を賴むとわれへ御遺言、不行跡ゆゑ猶更に、あゝ此雪にどうしてゐるか、浪々暮しの肌薄に、風でも引いて寐てはゐぬかと、案じられてならぬわえ、定めし月迫いたせしことゆゑ、無心に參るであらう程に、身共が留守であらうとも、用立て遣つてくりやれ。悪い弟があるゆゑに、そち達までに苦勞をかけるも

是も前世の約束ぢや、皆の者許してくりやれ。（トホロリと思入。）

さみ　そりやもうおつしやりませいでも、お出でなさるゝ度毎に、源藏樣がおつしやるより餘計にお上げ申せばとて、お斷り申したことはござりませぬ。三度に一度は、お隱し申上げます事もござりますわいな。

與左　そちが素直な心ゆゑ、源藏めが仕合せぢや。惡い心の者ならば、たいてい來憎いことではない。

半助　旦那樣のおつしやる通り、御新造樣がよいゆゑに、御無心もおつしやりよい。

お梅　何時おいでなされてもお兄樣はお內かと、お聞きなされて、お留守の時はお悅びでござります。

さみ　現在實のお兄樣より他人の姉へ御遠慮なく、御意をおつしやりますが、却つて嬉しう存じますわいな。（ト此時うしろにて呼び）

呼び　賴まう。

與之　半助、表に御案内があるやうぢや。

半助　はッ。どうれ。（ト言ひながら上手玄關へはひる。）

與左　噂を申せば影とやら、源藏でも參りはせぬか。

さみ　然し此雪でござりますから、今日はおいではござりますまい。（ト半助出て手なつかへ）

半助　はッ申上げます。御前様から先刻の敵討に出いとの、お召しでござります。
與左　又候圍碁のお相手に、御前様よりお召しなるとか。
與之　雪中御苦勞に存じまする。
與左　御酒宴のお相手と違ひ、好きの道ゆゑ樂しみぢや。お梅、先刻の上下を。
お梅　畏りました。

トお梅上下を持ち來る。おさみ與左衛門の袖を見て、

さみ　あもし、お袖が濡れてをりますが、どうなされました。
與左　是は最前權平が、雪を打ち付けをつた時、しみになつたと見えるわえ。
さみ　見ともなうござりますれば、お召し替へなされませ。
與左　亡父の形見の大事の小袖ぢや。干して置いてくれ。
さみ　はッ。お梅、御納戸のお召を持つて來や。
お梅　はッ。お下着はよろしうござりますか。
さみ　上着ばかりでよいわいの。
與之　半助、お履物を。

半助　畏りました。（ト下手へはひろ。上手よりお梅小袖を持ち出て、）
お梅　お小袖を持つて參りました。
さみ　さあ、お召替へなさりませ。（ト與左衛門上着をぬぎ。）
與左　此の小袖は干して置いてくりやれ、
さみ　お屏風へ掛けて置きやいの。
お梅　畏りました。（トお梅小袖を屏風へかける。此内與左衛門着附を着ること、）
さみ　如何に御前樣のお相手なさればとて、嘸お寒うござりませう。
與左　そこが好きの道ゆゑ、手の冷えるのも思はぬて。
與之　先刻は御前樣が、御勝利でござりましたか。
與左　おゝ身共が續けて負けしゆゑ、敵討に出よとのお召し、今度はお負かし申さにやならぬ。
ト與之助思入あつて、
與之　父上、時にとつての此雪。
與左　何ぢやと。
與之　會稽の雪でござりまする。

與左　むゝ。（トよろしく道具替りのしらせ、）さうぢやの。
　　トく與之助を見て末頼もしいといふ思入、此道具廻る。
　　（鹽川邸玄關の場）――本舞臺元の玄關の道具になる。と雪おろし合方にて、下手より以前の關助
　　下駄を持ち出で、玄關へ直す。半助傘を持ち出て、
半助　關助、度々御苦勞だな。
關助　おゝ半助殿、何とよく降るぢやあねえか。
半助　今朝から降り續けたが、晩にやあしつかり積るだらう。
關助　もういゝ加減に止みやあいゝが。
半助　手めえ一杯やつたぢやあねえか。
關助　やつたとて二合ばかり、直に醉が醒めてしまはう。湯豆腐か河豚鍋で五ンつくばかり引掛けてえ。
半助　然し呑み足らねえところがいゝ、大部屋の權平のやうに、ぐづになつちやあ仕方がねえ。
關助　ほんに、權平野郎の樣な、悪い酒もないものだ。
半助　ねえどころか、上手があらア。おらが旦那の弟御源藏樣は。

ト言ひかけるを、後ろへ與左衞門、上下大小にて與之助送り出て、

與左　えへん〳〵。（ト咳拂ひをする。兩人びつくりして）

半助　さあ、源藏樣は。

與左　如何いたした。

半助　はやすがお好き、わい〳〵とはやせ。

與左　えゝ、何を申すのぢや。（ト下駄を穿きながら。）今宵は遲くならうも知れぬ。

さみ　お寒いに、御苦勞樣にござります。

與左　關助、大儀ぢや。

關助　はツ、

與左　湯豆腐か河豚鍋で、一杯遣りたいな。

關助　恐れ入りました。

さみ　與之　さやうなれば、御機嫌よろしう。

與左　おゝ。ます〳〵雪は積るわえ。（ト雪おろし合方になり、與左衞門關助花道へはひる。）

さみ　これ半助。

半助　へい。

さみ　へいではない、源藏様はいゝやすが好きとは、何のことぢや。

〽半助　面目次第もござりませぬ。

さみ　ちと、たしなんで口を利きやいの。

與之　いやもうし母上、御病氣でござりますれば、雪風は惡うござります。奧へおいでなされませ。

さみ　旦那様のお下りまで、奧で汗でも取りませう。

ト唄になり、おさみ與之助奧へはひる。

半助　あゝ降るは〳〵、此大雪では案内もあるまい。わしも是から抱き火鉢、炭團の頭でもはつて寐ようか。ハツクショ。（ト嚔をして）あゝ、御新造樣が惡く言つてゐさうな。

ト時計の音雪おろしにて、半助奧へはひる。是れより床の淨瑠璃になる。

〽入りにける。跡はひつそと鳴る鐘の時計の響き時まはり、外に聲なき屋敷町、降り積む雪を踏みわけて、酒にたわいと赤垣源藏、提げし德利のふら〳〵と、石に躓き立止り、

ト雪おろし、花道より源藏、木綿紋付の着附、大小下駄がけ、饅頭笠、赤合羽を着て風呂敷に包みし一升德利を提げ、醉ひたるこなしにて、ひよろ〳〵となし、花道に留り、

源藏　降るは〱、雪は鵞毛に似て飛んで散亂し、人は紙合羽を着て醉つて徘徊すか。本所から爰迄來るうち、醒めるとは呑み〱、いくら呑んだか知らねえが、醉つたお蔭にやあ寒くねえ。

〽直なしのいの字の道さへも、いくの字に歩く千鳥足、玄關前に佇みて、

ト舞臺へ來りて内を窺ひ、

雪の降るので半助も、臺所にかゞんでゐるか。どれ、一番脅かしてやらう。賴まう〱。

〽おとなふ聲に一間より、

お梅　どうれ。

〽どうれと下女が立出でゝ、（奥より以前のお梅出で）

はい、どちらからお使ひでござりまする。

源藏　どちらからでもない。本所からのお使ひだ。

〽笠ぬぎ捨つる顔見てびつくり、

お梅　源藏樣でござりましたか。

源藏　如何にも源藏、源藏でござる。

お梅　ようお出で遊ばしました。

源藏　お兄様は御在宿かな。
お梅　はい、旦那様は。
源藏　お内においでなさるか。
お梅　いえ、お留守でござりまする。
源藏　なに、此雪にお留守なものか。大方源藏が參つたら、留守だと言へとおつしやり附けたか。
お梅　いえ、左樣ではござりませぬ。
源藏　左樣でなくばお兄樣に、お目に掛りたいと取次をいたせ。
お梅　それぢやと申して、お留守でござりますれば。
源藏　お留守でないと申したでないか。
お梅　いえ、左樣な事は申しませぬわいな。
源藏　え丶手前ぢやあ分からねえ。半助に取次げと申せ。
お梅　はい〳〵、畏りました。
源藏　かしこまらずと立つて行け。
〽下女はとつかは立つて行く。（トお梅びつくりして奥へはひる。源藏後を見て）

面は小綺麗だが分からねえ奴だ。身共を何だと思つてゐる。鹽山與太夫の二男同苗與左衞門の弟甥與之助の伯父、當時浪人赤垣源藏、言はゞ主も同然だぞ。いけ巫山戲たやつだ。

〽一人呟く源藏を、それと見るより半助が。（ト奥より半助出て、困りものだといふ思入にて、）

半助　これは源藏樣、ようおいでなされました。

源藏　半助どうだ、雪が降つて寒いか。

半助　へい、寒うござります。

源藏　寒くば一杯呑まさうか。

半助　酒は眞平でござります。

源藏　なぜ、呑むぢやあねえか。

半助　布子羽織が大事でござります。

源藏　今日は脫がせねえから一杯呑め。そりやさうと、お兄樣は御在宅か。

半助　いえ、お留守でござりまする。

源藏　えゝ、逢はせめえと思つて、手前まで噓をつくな。

半助　さやうではござりませぬ。今日は御前樣の碁のお相手に、今朝ッからお上りなされて、先刻お歸

りになりますと、直にまた御前樣から、敵討に來いとのお召しで、たつた今お上りなされました。

ト是を聞き思入あつて、

源藏　なに、敵討にお出でなされた。むゝ、敵討とは面白い。

半助　折角お出でなさいましたが、今日はお留守でございますから、御用なら明日お出でなされませ。

源藏　いや、あした來てはゐられねえ。お兄樣がお留守なら、お姉樣にお目にかゝりたい。

半助　御新造樣も御風邪でお休みなすつておいでゆゑ、あしたお出でなされずば、明後日お出でなされませ。

源藏　なぜ、そんなに歸したがるのだ。是非ともお目にかゝらねばならぬ。

半助　それぢやと申して、御風邪でございますから。

源藏　これ、身共も鹽山與太夫が二男、言はゞ主も同然、詞を返すは無禮だぞ。と、さう理窟張つては言ふものゝ、實は一杯呑みに來たのだ。半助、手前も相手でもしやれ。

半助　それは有難うございますが、布子羽織は脱ぎませぬぞ。

源藏　また羽織の事を言ふか。いめえましい奴だ。

〽折から下女が立出でゝ、（ト奥よりお梅出て手をつき）

お梅　はツ、源藏樣へ御新造樣が、失禮ではござりますが、風邪にて引籠りをりますゆゑ、奥へお通り下さる樣にと、左樣おつしやりましてござりまする。

源藏　イヨ口上御苦勞々々。只今奥へ罷り通るでござらう。

ト合羽を脱ぎ捨て、德利を提げて上へあがる、半助足を見て、

半助　あもし源藏樣、お足に、泥がついてをりまする。

源藏　なに、泥がついてゐる。

お梅　ちよと拭いて上げませう。

源藏　いや拭くには及ばぬ。擦り附けておかう。

ト源藏足についたる泥を疊に擦附け奥へはひる。

〽疊へ泥を擦り附けて、奥の一と間へ入りにける。

半助　いや、ぢゞむさいお人だな。

お梅　奥へお通りなされたれば、急にお歸りはござんすまい。

半助　德利を提げてござつたから、又例の長酒に、ぐづ〳〵と呑んでゐて、めつたに歸る事ぢやアあるまい。

お梅　早くお歸りなさる樣に、箒を臺所へ立てようかね。
半助　箒位ぢやあなか〳〵利かねえ。
お梅　何ぞよい禁厭はござんせぬか。
半助　おゝいゝ禁厭がある。（トお梅へ囁く。）
お梅　そりや、下駄へお灸を、
半助　あこれ。

〽四邊憚り兩人は、勝手へこそは。
ト兩人奥を窺ふ見得にて、此道具廻る。

（同座敷の場）――本舞臺元の座敷の道具、爰に源藏眞中に、下手に與之助手をつかへ、傍に元服曾我の謠本を載せし見臺、正面に二枚折の屏風へ黑の小袖掛けあり、よろしく道具納る。

〽奥の居間には源藏が、熟醉なせど伯父甥の、禮儀正しき武士氣質。

源藏　これは〳〵與之助には、いつの間にか元服をいたしたの。
與之　はい、當月朔日に、御前樣よりお指圖にて、急に元服いたしました。

源藏　至極能う似合うた。若いと年寄りと言ふばかり、お兄様に生寫しだ。目出度い〳〵、一つ祝ひませう。甚だ失禮、御免下さい。（ト與之助のあたまを打つ眞似をして、）いや目出度い〳〵、是でお兄様も御安心だ。

〽言ふも詞の花形や、襖押明け立ち出る、姉は義理ある中垣に、隔てなけれど手をつかへ、
ト下手の襖よりおさみ出て下手へ住ひ、

さみ　これは〳〵源藏樣には、此大雪に、ようこそお出でなされました。折惡しく風邪にて、失禮御免下さりませ。

源藏　是はしたりお姉え樣、それでは御挨拶が出來ませぬ。先々是へ。

さみ　いえ〳〵、左樣おつしやりませずとも、それにお出で下されい。

源藏　然らば御免下されい。さてその後は、存外の御無沙汰を仕ッたが、お兄樣にもお變りもなく、又御前樣のお指圖にて、與之助が元服、いや、大慶至極な事でござります。

さみ　いえもう、俄の事ゆゑいづ方へもお知せ申しませぬ段、惡しからず思召して下さりませ。

源藏　何の惡しざまに思ひませうぞ。承ればお姉え樣には、御風邪との事、定めしお臥つてござらうに、お邪魔いたして恐れ入る。

さみ　いえ〳〵、臥せる程のことではござりませぬ。御存じの病身ゆゑ、流行ものは人さきでござりまする。あなたはいつもお達者でよろしうござりますな。

源藏　憎まれッ子國に蔓るとやらで、風を一つ引きませぬ。

與之　それは結構なことでござりまする。私なぞも母同樣、兎角病身で困りまする。

源藏　そこが百藥の長でござる、ちと伯父を見習つて、御酒をお初めなされい。

與之　有難うござりますが、一向不調法でござりまする。

さみ　いつも知れました事ながら、押詰りての忙しなさ。嘸御繁用でござりませう。

源藏　何の〳〵浪人暮しの氣散じは、盆でござらうが暮でござらうが、何の用もござらぬて。

さみ　何ほど御用がござりませいでも、盆と違うて又暮は、何かと御用のござりますもの、さしつけた事ではござりまするか、今日は、如何程の御用でござります。

源藏　なに、いか程の御用とは、何の事でござるな。

さみ　さあ、いつも御用だてまする。

源藏　いつも御用立下さるとは。（ト半助出かゝり居て、此時前へ出て、）

半助　源藏樣、丸印のことでござります。

さみ　是はしたり　づか／＼と、最前も申したではないか。
半助　でも、餘り分りませぬゆゑ。
さみ　まだ／＼言やるか。
與之　こりや半助、伯父樣へ對して、失禮千萬控へてゐや。
源藏　いや／＼苦しうござらぬ。幼年の砌彼れには世話になりし源藏、必ずお叱り下さるな。
さみ　源藏樣の御挨拶ゆゑ、今日は此儘許しますぞ。以後はきつと謹みませうぞ。
半助　へえい。（下控へる。）
さみ　して、只今申しました御用の儀は。
源藏　あゝ、丸印でござるか。
さみ　左樣にござりまする。ほゝゝゝ。
源藏　いや／＼今日ばかりは源藏も、左樣な儀では決して參らぬ。仔細あつてお兄樣に、お目にかゝり
度く參つたが、お留守と承り、甚だ殘念、お歸りはお遲うござりませうな。
さみ　外の事と違ひまして、碁のお相手のその時は、なう與之助。
與之　左樣でござります。何時にお下りがござりませうや、いつも限りはござりませぬ。

源藏　それは殘念千萬な、折角お目にかゝり度く、此の雪中に參つたが、それではお目にかゝられぬか。あゝ殘念なことでござる。

へ何か樣子は白雪の、解けぬ心を不審に思ひ、

さみ　何の御用か存じませぬが、與左衞門がをりませいでも、御用の筋を私へおつしやつて下さつても、よろしいではござりませぬか。これ迄留守の其時でも、おつしやる御用は足しましたのに、今日に限つて私へ、おつしやりませぬは源藏樣、ちとお恨みでござりまする。

源藏　いやく、左樣仰せられては恐れ入る。只今お話し申すでござらう。別儀でもござらぬが、昨年以來浪々中、長々お世話にあづかりましたが、此度仕官いたしてござる。

さみ　すりや、源藏樣には、御仕官をなされましたとか。

與之　それは恐悅な儀でござりまする。

源藏　いやお悅び下されい。さる大家の殿でござるが、殊の外なる御酒家にて、身共が大酒を御懇望にて、此度三百石にてお抱へに相成つてござる。

半助　へゝえ、物好きな殿樣がござりますな。

さみ　又口出しをしやるか。

半助　へゝえ。

源藏　爰が泰平の有難さ。弓馬槍劍の道も入らず、七五三の大盃で續け呑みにいたしたを、酒道にかけての豪傑と、御賞美あつてお抱へになり、主命によつてお國許へ明日お供で出立いたす。それゆえ、今日お暇乞ひに參つた處、お留守にてお目にかゝらず、殘念至極にござります。

〽殘り惜しげに夕暮を、今日の限りと定めし源藏、姉はかくとも知らざれば、

ト源藏名殘りなしき思入、おさみもこなしあつて、

さみ　それは結構なことでござりまする。お兄樣も常々から、武道にかけては一人前、過ぎたる弟が身の上ゆゑ、よき主取りでもいたしたらよからうと、明暮お噂申してならしたわいな。

與之　嘸父上にも此事を、お聞きなされたことならば、お悦びでござりませう。

さみ　して御仕官なせしお屋敷は、どなた樣でござりますな。

源藏　仔細あつて御家名は、追て御吹聽いたしませうが、此源藏が仕官いたすは、遙かに遠き西國でござる。

與之　すりや、西國の方でござりますとか。

半助　源藏樣なら北國でありさうなものだ。

源藏　そりやなぜに。
半助　棒鱈は松前様の名物だ。
さみ　又口出しをしやるか。
源藏　然し是は秀逸だ。感心々々。
さみ　何に致せ、お身の廻り、お腰の物や何やかや、御用の品もござりませう。今宵はお泊りなされましては、如何でござりまする。
源藏　その儀はお案じ下さりますな。大守より身の廻り大小萬端下し置かれ、何手間えの物もござらぬ。明朝未明の出立ゆゑ、一宿いたす譯にも參らず、お兄様お歸りあらば、御吹聽下されい。
〽言ひつゝ破れし風呂敷に、包みし德利取出し、(ト風呂敷に包みし、一升德利を出して)
是は粗末ながら源藏が、魂を籠めたる酒、お禮の印に差し上げます。どうぞおよりしなに召上つて下さいまし。
さみ　これは〳〵お志し有難く頂戴いたしまする。嘸歸りましたら悦びますことでござりませう。
源藏　御在宿であつたなら、お暇乞ひに御酒一獻、汲交さうと存じたが、お留守にて殘念千萬、是非に及ばぬ、お暇いたさう。

さみ　いやもうし源藏様、申さば目出度い御出立、お肴をお取らせ申さいでは、どうやら心にかゝりま
す。夫の代りに私が、お持たせを開きませうから、お寒さ凌ぎに御酒一つ、お上りなされて下さ
りませ。

源藏　それは何より忝い、酒と聞いては目のなき源藏、お兄様はござらずとも、お姉え様や甥御殿が
是にござればお暇乞ひに、一獻頂戴いたして參らう。

さみ　その内には、又夫も歸られませう。これ、梅や。

ト呼ぶ。奥よりお梅出て、

お梅　何の御用でござります。

さみ　此御酒をお燗して、お肴の支度しや。

お梅　畏りました。

ト下女は勝手へ立つて行く。（トお梅はひろい）

源藏　半助、そちにも長々世話になつた、暇乞ひに一杯呑ますぞ。

半助　御馳走なら呑みませうが、布子羽織は脱ぎませぬぞ。

源藏　えゝ、また言ひをるか。はゝゝゝゝ。

〽口に笑へど心には、今日が此家の見納めかと、邊り見廻し源藏は、ふつと目に付く屏風の小袖、見るも醉ひたるちよろ〳〵眼。

ト屏風に掛けし小袖を見て、これ幸ひといふこなしあつて、

お姉え樣、向ふの屏風に掛けてあるは、お兄樣のお小袖ではござりませぬか。

さみ　あれはおとつさまのお形見とて、旦那殿の御祕藏のお小袖、あなたにもお持ちなされましたな。

源藏　左樣でござる。拙者も頂戴いたしたが、浪々中にずた〳〵になり、今は何れの古着屋に掛つてをるやら行方は知れぬ。それに引換へて此お小袖は、色も變らずその儘に、毛ずれとて見えませぬ。持ち手に依つて違ひますな。したが合點の參らぬは、何んで屏風に小袖が、掛つてをりますな。

與之　それは最前御殿より、お下りなさるその折から、大部屋の中間權平が、酒興の上雪をとつて打ちつけしが、お小袖へかゝりしゆゑ、しめりの乾くその間、是へ掛けておきました。

半助　いや、あの權平は惡い酒で、醉ふと人の見境なく、箸にも棒にもかゝりませぬ。

源藏　おつと、左樣なことは船中にて申さぬ事にて候、はゝゝゝ。いや此小袖が思ひがけなく、爰にかゝりてありしは幸ひ、親父樣やお兄樣にお目にかゝるも同じこと。これ與之助、ちよと是へ。

〽手をとつて與之助を、小袖の前に坐らすれば、

與之　いえ〳〵、是では高上り。

源藏　はて、名代ぢや、苦しうない。

與之　それぢやと申して。

さみ　あの樣におつしやるからは、そなたはそこに。

與之　左樣なれば、御免下さりませ。

〽折目高なる與之助が、屏風の前へ座をしむれば、折よく下女が次の間より、運ぶ馳走の酒肴、

ト此内與之助眞中へ住ふ。奥よりお梅、廣蓋へ銚子、盃、鉢肴を載せ出て、

お梅　御新造樣、お燗がよろしうござりまする。

トよき所へ廣蓋を直す。おさみ盃をとつて源藏の前へ置く。

さみ　源藏樣、先づお始め下さりませ。

源藏　いや〳〵、お兄樣の名代に、與之助から始めてくりやれ。

與之　いえ〳〵、是は伯父樣より。

源藏　はて、さう申さずとそなたより、源藏へさしてくりやれ。(ト盃臺を與之助の前へ出す。)
さゝ　折角あの樣におつしやるもの、お詞に隨がやいの。
與之　左樣なれば、
〽諸禮亂さぬ與之助が、盃受けて源藏が、前へ直して手をつかへ、
ト下女酌をする、與之助吞んで盃臺へ載せ。
憚りながら、伯父樣へ。
源藏　頂戴いたす。
〽言ふにこなたも押頂き、吞む盃の酒よりも、胸一杯にこぼるゝ涙、源藏ぐつと吞み乾して、
ト源藏ホロリとして、ぐつと吞んで盃臺に載せ。
扨兄上、是迄は長々厚きお世話になり、お禮の申さう樣もござらぬ。然るに此度仕官致し主命により、明日西國へ出立いたせば、お暇乞ひの此盃、御返盃いたしまする。
〽涙隱してさし出せば、(ト與之助へ差す。)
與之　左樣なれば、もう一獻。

〳〵盃受くる與之助が、顏つれ〴〵と打ちまもり、

源藏　はて、親子とて爭はれぬ。男體せし與之助が、お兄樣に生寫し。（ト笙の入りし合方になり。）お姉え樣御覽なされい。目元といひ口元といひ、かうもよく似てをるものか。是れにて、お目にかゝつたも同然。

與之　伯父樣、お目出たく。

源藏　頂戴いたすでござらう。

ト又盃を受ける。下女酌をする。源藏呑んでおさみに向ひ、

只今迄は、兄上になり代つてお世話下さる御親切に、甘えまして度々の御無心、嘸おうるさうござりましたらう。然しそれも今日限り、お暇乞ひの此の盃、お受けなされて下さりませ。

ト差す。おさみ盃を受けて、

さみ　是はまあ、源藏樣の餘所々々しい、お兄樣に連添はゞ、私も同じ兄弟、他人がましいことをおつしやりますなぁ。（ト呑んで。）憚りながら、御返盃いたしまする。

源藏　何ばいでも頂戴いたす。（トまた呑んで。）いや、盃では旨くない。茶碗で一杯頂かう。（ト源藏茶碗でぐつと呑み。）半助、是れはそちへ。だいぶ年を取つたな。

半助　へい、有難く頂戴いたします。

〽押頂いて半助が、呑む酒さへも今生の、是が別れと源藏は、浮む涙を呑込んで、咳に紛らしかたへなるわざと見臺差覗き、

ト此内半助嬉しさうに酒を呑む。源藏是を見て別れの思入にて、ホロリとして思はず咳入り、傍の見臺を見て、

源藏　これ與之助、そちは謠の稽古を致すか。

與之　はい、若殿樣のお相手に、一二段習ひました。

源藏　それは何よりよい事だ。謠は第一身體の藥、おれも若い時分には、稽古をいたしたことがある。して何を習つてゐる。

與之　元服曾我を習ひます。

源藏　それは一段とよい物ぢや。本を見せやれ。(ト本を開き見て、)「一樹の蔭に宿るも是生々の契なり、同姓の流れを汲むも皆前生のかたらひの宿縁ぞかし。」實に此文句にある如く、同姓の流れを汲み、かく兄弟のかたらひをなすも。

さみ
皆々　え。(ト思入。)

源藏　前世よりの深き宿縁か、與之助、此文句を能く聞きやれ。「龍門原上の土に身はなるとも、屍の跡を思へたゞ惜しみても惜しむべきは、後名のあざけり、されば大國に千里を翔る虎は、一毛を惜しんで吹來る風を含みて、その身に替へて死するとかや、日本の弓取は、その名を末代の家に惜しみ、一命を輕んずるも是皆明經に本文を思ふ心なり、人は一代名は末代。「人は一代名は末代」此謠の曾我兄弟が十八年の辛苦の上、その名を末代の家に惜しみ、一命を輕んずるも親祐康へこれ孝行。與之助そちもお父樣へ孝行を忘れるな。又半助もその如く、曾我兄弟諸共に艱難なせし鬼王團三は、此上もない主へ忠義、そちも大事に奉公いたし、必ず忠義を忘るゝな。(トぢつと思入あつて氣をかへ、)なぞと、眞面目臭つた事は言へど、親の日にもお主の日にも精進さへせぬ此源藏、忠も孝もあらうかい。矢張り是れがくだでござる。最早お納め下されい。

さみ　まだよろしいではございませぬか。

與之　も一つお過しなされませ。

半助　親仁がお酌いたしませうか。

源藏　それは猶更眞平だ。

さみ　左樣なれば仰せに任せ、お預りにいたしまする。

源藏　どうぞ左様なされて下さりませ。

〽折から告ぐる鐘の音に、

あの鐘は何どきでござる。

さみ　大方七つでござりませう。

源藏　七つとあれば明朝の、支度もあればお暇仕らん。

さみ　すりやどうあつても。

〽源藏は醉うたる體にて、

源藏　主命ゆゑに是非がござらぬ。さてお姉え樣、くどく申すは生醉の常、先刻も申す通り、仕官いたせば勤めの身、明朝未明に西國へ主命に依つて出立致せば、一年經つて歸られますか。二年經つて歸られますか、三年經つて歸られますか、人間は老少不定、申す迄はござらぬが、お兄樣にもお健かではござれども、御養生を專一に、お嫌ひながらお灸治はお進め申して下さりませ。又お前樣もお癪持ち、暑さ寒さをお厭ひなされ、あがり物に氣を付けて、持藥をお絕やしなさるゝな。あ、是れが今生の。

〽後言ひさして源藏が、保ち兼ねたる別れの涙、右と左りに姉甥が、合點行かずと差覗け

ば、

ト源藏愁ひのこなし、兩人と顔見合せ、氣を替へ、

むゝはゝゝゝ。いやはや、詰らぬ愚痴をこぼし、今死ぬか何ぞの様に、むゝはゝゝゝ。明朝日出たく出立に、何で泣いたか。譯が分からぬ、むゝはゝゝゝ。

〽笑に涙紛らして、

お姉え様、お暇申す。

さみ　左様なれば、

三人　源藏様。

源藏　與之助、孝行を忘れるな。

與之　はツ。

源藏　半助そちも奉公忘るゝな、

半助　はツ。

さみ　左様なれば玄關迄。

源藏　あいや、御風邪なれば、そのまゝ〳〵。

〽別れてこそは、（ト源藏下手へ來り、辭儀をなす。これにてよろしく道具廻る。）

（鹽山邸玄關の場）――本舞臺元の玄關の道具に戻る。

〽行くそらの雪は次第に降りしきり塒に迷ふ鳥よりも、尾羽打ち枯れし源藏が、しどろもどろに立出でゝ、

ト奧より源藏醉ひたるこなしにて出る。跡より與之助半助附いて出る。

源藏　あゝ、いゝ心持に醉うたく。是れからぶらく雪を見ながら、川岸通りを歸らう。與之助、もうよいく、ゆつくり支度をするから、奧へ行けく。

與之　いえく風邪ゆゑ、母上が御免を蒙むりましたれど、私はそれでは濟みませぬ。

源藏　えゝ、濟むも濟まぬも入るものか。

與之　ではござりますが、

源藏　えゝ、行けと言つたら、行かぬかい。

與之　左樣なれば、御免下さりませ。

〽心殘して入りにける、跡見送りて源藏が、（ト與之助是非なくはひる。）

源藏　あれも兄の仕込んだゞけ、年よりませた萬事の仕こなし。始終は一廉の者にならう。あれでおれを見習つて、酒を呑むと猶いゝが、惜しい事に玉に疵だ。是から一杯やらにやならねえ。これ半助、布子羽織は脫がせねえから、一緒に附合へ。

半助　いや、眞平御免でござります。

源藏　えゝ、しみつたれな奴だな。

〽煙る足駄を打ち見やり、（ト下駄を履かうとして灸の据ゑてあるのを見て、）

おれを早く歸さうと、誰か足駄へ灸を据ゑたな。半助、手前か。

半助　え、いえ、私ではござりませぬ。

源藏　そんなら、下女のお梅が仕業か。（ト源藏下駄の灸を見て、ぢつと思入。）

あゝ身持不埒と言ひながら、現在產れし實家へ參り、かく下女小ものに疎まるゝも、是も矢張り（ト向うを見て無念の思入あつて氣を替へ、）あゝ、是れも矢張り、酒ゆゑだ。

半助　誰がいたしましたか、お氣の毒な、御免なされて下さりませ。

〽うろたへ灸を打拂へば、源藏心取り直し、

ト半助手拭で下駄を拂ひ直す。源藏下駄を穿き思入あつて、

源藏　氣を詰めて呑んだせるか、爰へ出たら素的に醉ひが出た。あゝ醉うたく。雪が顔へ當るのが、醉ひざめの水を呑むやうだ。もつと降れく、下戸のしらねえ心持だ。

〽合羽と笠を肩に懸け、吹雪いとはずいうくと、

〽花を見捨つる雁金の、それは越路、我はまた、あづまに歸る名殘りかなく。

ト熊野の謠をうたひながら、花道へ行き、振返り見て、

是が最早や、見納めなるか。

〽長の年月住馴れし、我が親里の玄關口、名殘惜しげに見返りく是非なくくも立歸る。

ト此内半助は式臺に手をつき居る。源藏愁ひのこなしあつて、笠にて顔をかくし花道へはひる。

半助　何の事だえ、泣いたり笑つたり、狐にでも化されてござるか。

〽半助は伸上り、

〽小首かたげて入りにける。

ト半助不審のこなし、奥へはひる。雪おろしにて此道具廻る。

（鹽山邸座敷の場）――本舞臺元の座敷の道具に戻る。爰におさみ掻卷を引かけ、下女お梅肩を叩

き居る。下手に與之助住ひ、合方にて道具留る。

與之　伯父様には只今お歸りでござりまする。

さみ　いつも源藏様がお出でなさると、早くて四つ九つ、今日はどうなされたか、御無心もおつしやらず常に變りし御様子にて、御酒も上らぬ旦那様へ、お土産の此徳利、何か様子があらうわいの。

與之　左様でござります。去年鹽谷家沒落後、仕官いたさず浪人なすと、立派におつしやつた伯父様が俄に御仕官なされたは、どうも合點が參りませぬ。

さみ　まこと明朝御出立なら、旦那様のお歸り迄、お待ちなさらにやならぬ筈を、何かそは〱お急ぎなされ、早うお歸りなされたは。

お梅　そりや御新造様、お禁厭が利きましたのでござりまする。

さみ　なに、禁厭が利いたとは。

お梅　早うお歸し申しませうと、源藏様のお足駄へお灸を据ゑて上げました。

與之　なに、お下駄へ灸を据ゑた。

さみ　なぜそんな惡い事をしやる。旦那様のお耳へでもはひらば、私どもが言附けてさせた様で濟まぬわいの。

お梅　悪い事をいたしましたな。
さみ　以後は決して止しやいの。
お梅　畏りました。（ト此時上手にて、）
半助　お歸りでござりまする。
さみ　それ、旦那樣のお歸りぢや。そこらを片附けてくりやれ。
お梅　畏りました。

ト　おさみの脱いだ搔卷をお梅片附ける。上手より以前の與左衞門半助附いて出る。

さみ　只今お下りでござりまするか。
與之　大ぶお早うござりましたな。
與左　おゝ、今日はお暇が早く出た。（トよき所へ住ふ。）おさみ、源藏が參つたさうな。
さみ　先刻お出でなされました。
與左　又例の無心であらうな。
さみ　いえ〳〵、左樣ではござりませぬ。
與左　それは珍らしい事であつた。して何用に參つたな。

さみ　今日は御無心もおつしやらず、さる御大家へ御仕官なされ、明日殿の御供にてお國へお出でなさるとて、お暇乞にお出でなされ、是迄長々世話になりしお禮ぢやとおつしやりまして、あなたへ寐酒に上げてくれと、これ此御酒を一升お持ちなされましたわいな。（ト以前の德利を出す。）

與左　すりや、源藏には仕官せしとて、此酒を持參せしとか。むゝ、して何れへ仕官いたせしとな。

さみ　それもお尋ね申しましたが、仔細あつて言はれぬとて、只西國とばかり、何か樣子のありげにて、あなたにお目にかゝらぬを、二言目には殘念なとおつしやつてゞござりました。

與左　すりや常々某が、よき主取りをいたしたらよからうと、言ひしを誠と心得、二君に仕へる人でなし、見下げ果てたる所存ぢやなあ。

さみ　何か御樣子ありげにて、今宵は只管お泊りなされませと、お勸め申しましたれど、明朝未明に御出立故、永く爰には居られぬと、是に懸けたるお小袖を、あなた樣になぞらへて、お暇乞のお杯を涙ながらになされまして、お歸りなされてゞござりまする。

與左　すりや、此小袖をかたしろに、暇乞をいたせしとか。聞けば聞く程殘念至極。

さみ　申せば目出たい御仕官に、主命に依つて出立なせば、一年經つて歸られるか、二年經つて歸られるか、是が今生の別れにもならうかとおつしやつて、そゞろにお泣きなされました。

與左　おゝ泣いたり笑つたりいたすのは、酒呑みの常なれど、何とやら心がゝり。して仕官いたすとあらば、定めて立派に身の廻り、拵へなして參つたらうな。

お梅　いえ、矢張りいつもの御紋附。

半助　そぼろな裝でござりました。

與左　仕官いたすにその儘とは、逢うたら樣子が分からうに、彼よりおれが殘念ぢや。

　　　トおさみ見臺の謠本をとつて、

さみ　まだその上に與之助が、謠の本を御覽なされ、元服曾我の文句を引き、

與之　親へ孝行盡せよと、私への御教訓。

半助　また私にも忠義を盡し、奉公を大事にせよとの御意見。

與左　すりや、兩人へ忠孝を盡せと教訓いたせしとか。して元服曾我は何れの文を意見の種にいたせしぞ。

さみ　卽ち是でござりまする。（ト謠本を出す。與左衞門開き見て、）

與左　「龍門原上の土に身はなるとも、屍の跡を思へたゞ惜しみても惜しむべきは後名のあざけり。」

さみ　「されば虎は一毛を惜しみ、吹來る風を含み、其身にかへて死すとかや。」

與左「又日の本の弓取りは、その名を末代の家に惜しみ、一命を輕んずるも。」
さみ「是れ皆明經の本文を、」
與之「思ふがゆゑの心なり。」
與左「人は一代名は末代。」むゝ。（ト膝を叩き、）そんなら、もしや。
さみ
與之　え、
與左　いやく、その性根はあるまいわえ。
さみ　でも、生醉は。
與左　これ（ト制するを木のかしら。世話にて、）彼れが宅は本所ぢやな。
ト向うを見て、謠本を見ては小首を傾ける。おさみと與之助顏見合せ、何の事だといふ思入、本釣鐘、合方にて、
幕

赤垣源藏（終り）

箱根權現　犬坊丸初春參籠　近江八幡曾我兄弟　ハテめづらしい　名代對面

奉掛寶前に木太刀の額は八重垣何某工を忍ぶ蔭山が手練を望の戀聟に思ひは殘るお雪が位牌へお柳が讓るあの世の杯結ぶ妻木の逸之進は老の一途に子ゆゑの闇廓を拔けし心中も誰白浪の四つ手網かゝりやつながる求女殺しまだ前髪に行先は賽の川原の石地藏に敵紋三と繁之丞が忠孝ふたつの白刃と白刃修羅の街や地獄谷鬼の女房に氣まぐれな坊主がへりの十六夜おさよ科の次第に清吉が身を捨札に書殘し千人塚の腹きりに孫には迷ふ西心が後世の菩提を塔十郎は隱し目附のしもをとこ大小さすが大寺正兵衞三千兩の盜人も妻のお藤が貞節に惡心たちまちひるがへし善人さかえる合巻仕ぐみふるき趣向をはぎあはせ仕立なほせし春着の新物

行丈長短一座拙

鬼あざみ清吉又鬼坊主清吉と十六夜との情話を骨子とした、「十六夜清心」は、安政六年二月作者四十四歳の時の作で、「小袖曾我薊色縫」の二番目狂言として新作されたものであつた。一番目は扉に附した「語り」によつて窺はれる如く、八重垣紋三を主人公とせる御家物であるが、賽の川原の對面と共に割愛し、十六夜と清心に關する世話物として獨立したものにしておいた。世話物としても白浪物としても、代表的なものとして一般に認められてゐる。粂三郎が此の作によつて大いに出世し、美しい毬栗姿を見せたことや、又心中を一種奇巧なる構想を以て描いた點などは注目すべき所であらう。「續歌舞伎年代記」に「當新狂言何れも大出來大當りの所、故障有之三幕ほど少々づゝ添削あり、狂言の筋譯分からずなり」とあるのは、この當時御金藏を破つて四千兩の金子を盗んだ藤岡藤十郎を、大寺正兵衛によつて暗示せんとしたのが官權の干渉を受ける原因になつたことをいふ。尙所謂御金藏破りの一件は、後年劇化して『四千兩小判梅葉』といふものになつた。

書卸しの時の役割は、市川小團次（清心、清吉）、岩井粂三郎（十六夜、おさよ）、關三十郎（白蓮、大寺正兵衛）、市村羽左衛門（求女）、淺尾與六（花賣り佐五兵衛、西心）、吾妻市之丞（正兵衛女房お藤）、市川米十郎（寺澤塔十郎、下男杢助）、坂東村右衛門（白蓮の下女おとら）、中村鶴藏（船頭三次）等。

挿繪にしたのは稻瀨川身投の場の錦繪で、龜井戶豐國の筆である。

大正十三年九月　　　編者誌す

花街模様薊色縫（十六夜清心―四幕）

（浄瑠璃）朧夜に憎き物は、男女の影法師、梅柳中宵月（清元連中）

由井ヶ濱の場

稻瀬川の場

〔役名――極樂寺の所化清心後に鬼あざみ清吉、俳諧師白蓮實は盗賊大寺正兵衛、花實佐五兵衞後に無縁寺の墓守西心、寺澤塔十郎、網船の船頭三次、足輕市介。扇屋の十六夜後に鬼あざみ女房おさよ、寺小性戀塚求女、極樂寺の小坊主教月、其他。〕

（鎌倉花水橋袂の場）――本舞臺眞中に二間の菰張りの飾小屋、軒口に輪注進を釣してあり、上の方に橋の袂、下の方に番小屋、後ろに淺葱幕、よき所に柳の立木、總て鎌倉花水橋の體。こゝに足輕市介木綿紋附の布子一本差にて、棒の尖へ草鞋を下げたるを擔ぎ、中間權次、傳八の二人立つてゐる。この見得通り神樂にて幕明く。

權次　これ市介、今日はこの花水橋へ女犯の坊主が引かれて來て、追放に遭ふぢやあねえか。

傳八　それだから廣小路に、晒し者の小屋ができてゐらあ。

市介　べらぼうめ、こりやあ飾り小屋の居殘りだ。
權次　何で輪注進があると思つたが、それぢやあ暮に賣殘つたのか。
傳八　さうして今日の女犯の坊主は、どこの寺の坊主だな。
市介　手前知らねえか、極樂寺の役僧で、淸心といふ坊主だが、大磯の扇屋の内の十六夜といふ女郎に馴染んで、たうとう終ひは追放だ。
傳八　然し、坊主だつて野郎だつて、元は同じ人間だから、女を嫌ふ筈がねえ。
權次　これから見りやあ、おらが宗旨の親鸞樣は通り者だ、肉食妻帶をお許しなされてあるとは、何と有難え宗旨ぢやあねえか。
市介　それから見ると、此方等は、遙に勝つた名僧知識、楊枝を賣るか草鞋を賣らにやあ、鰯のぬたで酒も呑めねえ。
傳八　そりやあ手前の言ふ通り、おれなどは後月から二月越しの名僧知識だ。
權次　何にしろおれが宗旨で、何處ぞで一ぺい飲まうぢやねえか。
市介　久しぶりだから附合ひてえが、何をいふにも一文なしだ。
傳八　そりやあ案じるな、あゝ言ふから權次が錢を出すだらう。

権次　なにおれがあるものか、錢がありやあ一人で飲まア。
市介　それぢやあ手前傳八があてか。
権次　いや、手前の草鞋があてだ。
市介　これを飲まれてたまるものか、やつとのことで作り溜めた、三百だけのこの草鞋、晩に寐酒に一合買ひ、夜鷹を百で引込む積りだ。
傳八　そいつあいめえましい話だ。
権次　何でもいゝから一合買へ、後はおれが飲込まあ。
市介　その飲込みが險難だ。
傳八　ぐづ〳〵言はずに來いといふに。
市介　えゝ、惡い奴につかまつたな。
ト傳八は市介を引張り、権次附いて上手橋の方へはひる。と花道より花賣り佐五兵衞、鼠の着附腰衣の小坊主教月の手を引き出來り、花道にて、
教月　これ佐五兵衞どの、清心様のござるところは、まだよほどあるかいの。
佐五　いえ〳〵遠くはござりませぬ、ついそこに見える橋詰へ、今に引かれてござりませう。

教月　そんなら向うで待つてゐませう。

佐五　さあ〳〵轉ばぬやうにござりませ。（ト兩人舞臺へ來り。）今後の番屋で聞けば、もう引かれてござるのにきつう間はないとのこと、獄屋へおいでなされてより久しうお目に懸らぬが、嘸お窶れなされたらう、これから何處へおいでなさるか、せめて御身の片附と思つた金も手に入らず、もしやと思つた悴が方も、今に沙汰がないからはこれも出來ぬと極つた、あゝ金は世間にないと見える。

教月　これ佐五兵衞どの、お金はないがお錢なら、こゝにお布施があるわいの。（ト懷より紙包の錢を出す。）

佐五　あ、いや〳〵今何も入りはせぬ、落さぬやうに持つてござれ。いやもう引かれてござりさうなものだが、（ト向うを見て、）噂をすれば影とやら、あれ〳〵向うへ。

教月　淸心樣がござるかいの。

佐五　おゝおいでなされまする、邪魔になつたら叱られませう、片蔭へ寄つてござりませ。

ト兩人は下手番小屋の蔭へはひる。時の太鼓に說教やうの合方になり、花道より菖蒲革の足輕二人一、二、六尺棒を持ちて先に立ち、後より淸心月代を延ばしたる坊主鬘淺葱の着附にて繩にかゝり、黑四天の捕手二人これを持ち、寺澤塔十郞半纏打割羽織大小にて附き、その後より中間二人陣笠床几を持ち附添ひ出來り、直に本舞臺へ來り、捕手は眞中へ筵を敷き、

捕手　下にをらう。

　　　トこれにて清心筵の上へ住ひ、繩取後に控へる。寺澤上手へ床几へかゝり思入あつて、

塔十　極樂寺教善弟子清心。

清心　はツ。（ト辭儀をなす。）

塔十　其方事出家たる身を以て、大磯宿扇屋抱女十六夜と申す遊女に馴染み、酒色に多くの金銀を使ひ捨て候段、重々不屆きに就き刑に行ふべきを、格別のお慈悲を以て、鎌倉谷七鄕お構ひにて、追放申しつくるものなり。

清心　はツ。

塔十　有難くお受けいたせ。

清心　一子出家なす時は九族天に生ずとて、亡き父母の菩提の爲め剃髮なせしこの清心、我師教善の敎を受け、これまで二十五年の間日夜勤行なしたるも、いまだ凡俗の輪廻放れず色道に迷ひ入り、つひにお上のお仕置蒙むり、今ぞ本心に立返り初めて眼覺めし我心、重き刑罪御赦免あつて、追放仰せつけられし御仁惠のほど、何程か有難う存じ奉ります る。（ト辭儀をなす。）

塔十　それ、縛を許し遣はせ。

捕手　はッ。（ト清心の繩を解く、塔十郎思入あつて、）

塔十　扨、これまでは役目の表、某事もその以前は極樂寺の教善老に、素讀の教へを受けたる者、申さば其方とは相弟子同然、それ故餘所には思はねど、何を言ふにも先達極樂寺へ盜賊入つて、賴朝公より奉納ありし三千兩盜みし者の行方知れず、それ故汝に疑かゝり一度拷問なしたれど、覺えなき言譯相立ち、女犯の罪にて則ち追放、常に汝が才智をば老師にも褒められて、二十五年がその間教諭なしたる甲斐もなく、嘸殘念に思はれん、まだ年若なことなれば心を改め修行なし、老師の恥辱を雪がずば、まことの僧とは言はれまい。

清心　御親切の御教諭有難う存じまする、一先これより當所を立退き、いかなる深山幽谷の荒れたる寺も厭はずに、この身を寄せて修行なし元の出家に立歸り、再びお目にかゝりませう。

塔十　その時こそは某が谷七郷のお構ひ、上へ御免を願うた上、目出度く再會いたすであらう。

清心　まづそれまでは御機嫌よろしう。

塔十　汝も堅固に修行いたしやれ。

清心　有難うござりまする。

塔十　最早役目相濟めば、上へこの由申上げん。（ト立上る、清心思入あつて、）

清心　左樣なれば寺澤樣。
寺澤　清心、長居はならぬぞ。
清心　はッ。（ト辭儀をなす。）
寺澤　家來まゐれ。
ト時の太鼓になり、塔十郎先に中間等附いて花道へはひる。とばた〳〵になり、下手より佐五兵衞、
敎月、走り出來りて、
佐五　清心樣、お達者でござりましたか。
兩人　お目出度うござりまする。（ト兩人清心に縋る。）
清心　おゝ誰かと思へば十六夜が親父、新發意の敎月か、ようたづねて來てくれたなあ。
トこれよりしんみりとしたる合方になり、清心兩人を見て嬉しき思入、佐五兵衞は窶れし姿を見て淚
をこぼして手拭にて拭きながら、
佐五　あゝ僅お目にかゝらぬ內、この世の地獄といふほどな、獄屋の住居にこのお窶れ、思へば〳〵お
いとしい、かゝるお姿にいたしたも元の起りは皆娘、思案の外とは申せども、十六夜故に御追放
どうもそれが濟みませぬ、お許しなされて下さりませ。（ト手を合せ拜む思入。）

清心　あゝそのやうに言はれては、わしがそなたへ面目ない、何の十六夜が科であらう、出家の身にてあるまじき色にまよひしばつかりに、繩目の恥を受けたるは、誰を恨まんやうもなし、これ皆愚僧が心一つ、まさしく佛の御罰なり、必ず心にかけてくりやるな。

佐五　それぢやといふてこのやうな、見る影もないお姿に。

清心　ほんに、これ〳〵何事も斯くならぬ前。今更言うて返らぬことぢや。（ト氣を替へ、敎月が頭を撫りながら、）これ敎月、よう顏見せてくれたな。

敎月　あい、今日お前樣が御追放になり、遠い所へおいでと聞き、いつお目にかゝられるかこれ限りになるか知れぬ故、お經を敎へてお貰ひ申した、お禮にこれまでまゐりました。

清心　それは〳〵感心な、よく尋ねて來てくれた、そなたは僅一二年、これまで長の年月に久しう敎へた者もあれど、扨々人は薄情にて落目になれば、誰一人尋ねてくれる者もない、そなたばかりぢや、嬉しいぞよ。

佐五　いやもう年に似合はぬ敎月どの、佐五兵衞そなたが行きやるなら一緒に連れて行てくれと、昨日からのお賴み、今朝も疾うから、さあ行かうまだか〳〵とせりたてられ、わしが連れられてまゐりました。（ト敎月懷より紙包の布施を出して、）

教月　これは少しばかりでござりますが、此間から葬式や、法事のお布施の貰ひ溜を、お小遣ひに上げまする。お遣ひなされて下さりませ。（ト出す、清心嬉しき思入にて、）

清心　何にも言はぬ忝ない、僅か十か十一の幼い心に然ほどまで追放に遭うて困らうと、わしを思うてこのお布施、忝ないく。（トいたゞいて、）志しは清心がこの通りいたゞくぞよ、然し一寺の住持たる我兄弟子も多くあれば、何れへなりとも尋ね行き合力受けて旅立てば、このお布施には及ばぬほどに、これはそなた持つて歸りや。

教月　いえく、お前樣に上げませうと、折角溜めたこのお布施、どうぞ受けて下さりませ。

清心　志しは受けるほどに、これはそなた持つて行て、好な本でも買ふがよい。

教月　いえく、假令何とおつしやつても、これは持つては歸りませぬ。

清心　それぢやというて、これを受けては。（ト兩人お布施を突きやる、佐五兵衞思入あつて、）

佐五　あ、もしく清心樣、折角あの樣に言はつしやるもの、教月どの〻志し受けてお上げなされませ、所詮お返しなされても、受取らつしやることぢやござりませぬ。

清心　そんならそなたの志し。

教月　お受けなされて下さりますか。

清心　忝なく貰ひまする。

敎月　えゝ有難うござりまする。

清心　（お布施を懷へ入れ、）佐五兵衞どの見さつしやれ、年よりませた利口な敎月、これに就けても思ひ出すは我が來し方の物語り、生れは下總舟橋在漁夫の悴であつたれど、一人の兄が十歳の年神隱しに逢ひ行方知れず、それを氣病に兩親とも引續いて果敢ない最期、世に賴りないわしが身に亡き兩親のその爲めに極樂寺の弟子となり、子供の折はよき出家になるであらうと師の坊が、あけくれ言はれし我身がこの仕儀、そなたは利口な生れ故、成人なさば一筋に佛道修行に心を委ね、惡しき道に迷ふまいぞ。一度は知れまい二度はよいと度重なればその果は、佛菩薩がお許しなされぬ、つひには上のお咎め受け、御恩になりし師の坊へ恥辱を與へその罰にて、その身も居所立所なく、これまで積みし勤行も一時に空しく、譬に言ふ實に千日に刈つた茅、この清心がよい手本、どうぞその身をまつたうに一ケ寺をも持つやうに、必ず辛抱しませうぞ。

敎月　有難いその御敎諭、よう辛抱いたします。

佐五　今清心樣がおつしやつたこと、大きうなつたらお守りなされ、よい御出家にならつしやりませ。お丶敎月どので忘れてゐたが、娘があなたに上げてくれと昨日よこしたこの小袖、穢れし衣類を

清心　脱ぎすてゝ清くお着替へなされませ。（ト風呂敷より小袖を出す。）

佐五　すりやその衣類を十六夜が、われにこしらへ呉れしとか。

清心　はい、お小袖、襦袢、帶、手拭、草履までござりまする。

佐五　あゝ遊里に稀な志し、忝く貰ひます。

清心　さあ、少しも早く穢れし布子、きれいにお着替へなされませ。

佐五　いや、このまゝ着るも穢い故、洗湯にて身を淨め、さつぱりと着るであらう。

清心　いかさま、それがよろしうござります。して、あなたにはこれより何處へ。

佐五　人目にかゝるも面目なき故、今宵の内に當地を立退き一先京地へ足を留め、心を改め修行なし、まことの出家になる心、不實なものと思はうが、かゝる仕儀故十六夜にも唯何事もこれまでと思ひ諦らめくれるやう、そなたから言うてくりやれ。

清心　あゝそれはよい思召し、實は出家の御身分にあるまじきことながら、濡れた袖故是非もなく、あゝ惡いことぢやと思つてをりましたが、雨降つて地固まると、これを幸ひふッつりと思ひ切らうとおつしやるは此の上もない御分別、そりやもう娘もこれ限りに上方へおいでなされたと聞いたなら、嘸やさぞ本意なく思ひませうけれど、それもいとし可愛いと思ふみんなあなたのお爲故、

假令何と申さうとも親の高下で、わしが彼女には思ひ切らせます、必ずお案じなされまするな。

清心　實は一目逢ひたけれど、逢うたら未練が出ようと思ひ。

佐五　お逢ひなされぬはうがよろしうござります、然しこのやうに申しましたら、極樂寺にゐる間は知らぬ顏で娘に逢はし、今の身になつた故逢はさぬなどゝ清心樣、決して思うて下さりますな。如來樣かけてこの佐五兵衞そんな心はござりませぬ。

清心　そなたの心は知つてゐる、何でわしが疑はう。（ト時の鐘鳴るに思入あつて、）最早暮れるに間もあるまい、いつまで言うても名殘りは盡きぬ、少しも早く歸られよ。

佐五　もうお暇いたしませうが、どうやらこれぎり逢はれぬやうで、

教月　お名殘りをしう存じます。

清心　いかさま、これが一年や二年で歸ることにも行かず、

佐五　長い月日のその內には、

教月　老少不定の世の中に、

清心　これが名殘りにならうやら。（ト教月の手を取り思入。）

佐五　あゝ忌はしいことおつしやりませ、鶴龜々々。

清心　そんなら目出度く、

佐五　その内お日に、

兩人　かゝりませう。（ト立上る。）

敎月　左樣なれば淸心樣。

清心　よう經文を覺えませうぞ。

敎月　有難うござります。

佐五　さあ、行きませう。

ト唄、時の鐘にて佐五兵衞敎月の手を引き、思入あつて花道へはひる。淸心見送り思入あつて、

清心　あ我身に附けても敎月が年よりませしいゝ志し、あれにて行かば行く〳〵はよい出家になられんが、愼み難きは色慾戒、あゝわしがやうにならねばよいが。（ト思入あつて、）最早黃昏、暗きを幸ひ人の目つまにかゝらぬ內少しも早く、（ト風呂敷包みを持ちて立上り、）とはいへ思ひ切つたれど、二年この方馴染みし十六夜、一目なりとも、（ト思入あつて手にてあたりを拂ひ、）あゝ、煩惱の犬追へども去らず、南無阿彌陀佛々々。

ト ぢつと思入、寺鐘にてこの道具廻る。

（百本杭の場）――本舞臺三間の間中足の二重石垣の蹴込み、上手へ寄せて百本杭の波除、舞臺前一面に流れの心。二重上の方に辻堂の後ろを見せ、下の方は柵矢來、見越の松、總て百本杭の體。時の鐘通り神樂にて道具留る。と、ばた〳〵にて、辻番より夜鷹ふが〳〵のお金、逃出て來るを、以前の足輕市介追かけ來りて、

市介　これ〳〵お八重、今の百を返してくれ。

お金　何であれを返すものか、昨夜もたゞで來たぢやあねえか。

市介　假令昨夜は借にしても、二十四文の所を百取られてたまるものか、今夜はちつと錢が入るからどうかあれを返してくれ。

お金　そんなけちなことを言はずと遊んでおいでな。

市介　どうして〳〵、今も言ふ錢の入ることがあるのだから、中々遊んではゐられねえ。

お金　遊んで行けずば、明日の晩おいでな。（ト行きかゝるを市介捉へて、）

市介　人がこんなに賴むのに、手前は錢を返さねえか。

お金　何でお前に返すものか。

市介　うぬ、さうぬかしやあ、ちよつとかうして。（トお金の帶際を捉へるを、お金男の思入にて、）

お金　何をこしやくな。（ト兩人よろしくをかしみの立廻りあつて、百錢を奪ひ合ひて落す。）おや〳〵大變お錢を落した。

市介　なに、落したと。

お金　半分上げるから搜しておくれ。（ト兩人にて搜し、淨瑠璃の觸書と百錢とを拾ひ上げる。）

市介　錢もあつたがこんな物を拾つた。

お金　何ぞお錢になるものか、早く讀んでお見な。

市介　おれに首尾よく讀めりやあいゝが。（ト觸書を開きて）「淨瑠璃名題――、淨瑠璃太夫淸元――三絃淸元――、相勤めまする役人岩井粂三郎、市川小團次。」

お金　何のことだ、そりやあ淨瑠璃の觸書だ。

市介　さあ約束だ、半分よこせ。

お金　何で半分やられるものか。

市介　うぬ、取らねえでおくものか。

お金　いゝ加減に強情を言ひねえな。

市介　おゝその強情で思ひだした。いよ〳〵この所淨瑠璃初まり、

お金　其の爲め强情、(口上)

市介　おきやあがれ。

ト波の音通り神樂にてお金上手へ逃げてはひる、市介後より追かけてはひる、これにて下手の櫓來を打返し、山臺の上に淸元連中居列び直に淨瑠璃になる。

〽朧夜に星の影さへ二つ三つ四つか五つか鐘の音も、もしや我身の追人かと胸に時打つ思ひにて、廓を拔けし十六夜が、

ト本釣鐘、合方にて、花道より十六夜袱紗帶部屋着の女郎裝にて、手拭を冠り走り出來り、花道へ留まり思入あつて、

〽落ちて行方も白魚の船の篝火に網よりも、人目厭うて後前に心おく霜川端を、風に追はれて來りける。(ト十六夜花道にて振あつて本舞臺へ來り、思入あつて、)

十六　嬉しや今の人聲は、追手ではなかつたさうな。父さん始めわたしまで御恩になりし淸心樣、今日御追放と聞いた故、ぬしに逢ひたく廓を脫け、こゝまで來ごとは來れども、行先知れぬ夜の道、どうぞお目にかゝられゝばよいが。

〽暫し彳む上手より梅見歸りか船の唄、〽忍ぶなら〳〵、闇の夜はおかしやんせ、月に雲の

障りなく、しんき待宵十六夜の、うちの首尾はえゝよいとの〳〵、〽聞く辻占にいそ〳〵と

雲足早き雨空も、思ひがけなく吹きつれて、見交す月の顔と顔。

ト十六夜思入あつて行かうとする、上草履の鼻緒切れ、これを直さうとして、面倒だといふ思入にて

草履を流れへ打込み、上手へ行かうとする、この時上手より清心色氣のある無地の着附に黒の頭巾を

冠り出來り、行違ひ、互ひに避け合ひ、月出で兩人顔を見合せ、

清心 や、十六夜ではないか。

十六 清心樣か。

清心 あ、悪い所へ。(ト行かうとするを、捉へて、)

十六 逢ひたかつたわいなあ。

〽縋る袂もほころびて、色香こぼるゝ梅の花、さすがこなたも憎からで、

ト十六夜清心に縋りつく、これにて清心是非なき思入にて、

清心 見ればそなたはたゞ一人、夜道厭はず今頃に、廓を脱けてどこへ行くのぢや。

十六 何處へとは清心樣、昨日父さんのお話に御追放の上からは、もう廓へもこれまでのやうにおいで

もなさんすまい、ひよつとしたなら其の座から、何處へおいでなさらうやら知れぬと聞いてなつ

かしく、長い別れにならうかと、思へば人の言ふことも、心にかゝる辻占ばつかり、いつそ事と暮合に廓を脱けてやうやうに、お前に逢ひたく來ましたわいな。

清心（思入あつて、）最早そなたに逢はれまいと、思つてゐたに測らずも、こゝで逢うたは盡きせぬ緣、如何なる過去の宿緣やら、見る影もない清心を、斯くまで慕ふそなたの親切、今日も今日とてこの小袖、送つてくれたばつかりに、身幅も廣き清心が、知邊の方へ行かれるわい。

十六　知邊の方と言はしやんすが、さうしてお前はこれから何處へ。

清心　さ、何處といふ當もなけれど、追放に逢ふ上からはこゝに足は留められず、一先當地を立退いて京に知邊の者あれば、それを賴つて行く心。

十六　そんならわたしもともどもに、連れて行つて下さんせいな。

清心　未來をかけたそなた故、連れて行きたきものなれど、行かれぬわけはこれ十六夜、ふとした心の迷ひより、女犯の罪に追放の刑を受けたるこの清心、我身ばかりか幼きより、御恩を受けし師の坊の名まで穢せし勿體なさ。

〽たゞ何事もこれまでは、夢と思うて清心は、今本心に立返り、

そなたのことを思ひきり、京へ登つて再行なし出家得道する心、そなたも廓へ立歸り、まだ年季

さへ長いとやら、よい客見立て身を任せ、親へ孝行盡すが第一。

十六 そりや情ない清心樣。

〽今更いふも愚痴ながら、悟る御身に迷ひしは、蓮の浮氣やちよつと惚れ、浮いた心ぢやござんせぬ、彌陀を誓ひにあの世までかけて嬉しき袈裟衣、結びし緣の珠數の緒を、たまく逢ふに切れよとは、佛姿にありながらお前は鬼か清心樣、聞えぬわいなと取縋り、恨み嘆くぞまことなる。

トこの内十六夜よろしくあつて清心に縋り泣く、清心もちつと思入あつて、

清心 この清心をさほどまで思うてくれるは嬉しいが、これが似合ふといふではなし、わしは形相さへ人並ならず、見る影もない所化上り、今大磯で評判のそなたを連れて行かれうぞ、外に男もないやうに、あの十六夜も物好と、何れも樣がお笑ひなさる、世の譬にも言ふ通り、釣合はぬは不緣の元ぢや。

十六 そりやもうよその女郎衆は、苦界の勤めの樂しみに浮氣なこともござんせうが、わたしや一生身を任す男といふは心一つ、この身ばかりか父さんまで、常々からのお心添へ、その御親切の清心樣、死なば一緒と思うてゐるに、お情ない今のお言葉、どうでもあなたはわたしをば、連れて退

いては下さんせぬか。

清心　さあ、それとてもそなたの爲め、少しも早く廓へ歸り、勤を大事にしやいの。

トこれにて十六夜思入あつて、

十六　そのお言葉が冥土の土産。

〽岸より覗く青柳の、枝もしだれて川の面、水に入りなん風情にて、

ト十六夜清心を恨めしさうに見て、死ぬ覺悟をなし、

南無阿彌陀佛、

〽すでにかうよと見えければ、清心あわて抱き留め、

ト十六夜前の川へ身を投げようとするを清心縋り留めて、

清心　あゝこれ待つた。早まるな。

十六　いえ〳〵放して、殺して下さんせ。

清心　これはしたり、そなたを殺せば親父どのまた弟がわしを恨み、女犯の上に重なる罪、それを知りつゝそなたをば、どう見殺しにならうぞいの。

十六　さあ、その後前を考へれば、猶々生きてはゐられぬ此身。

清心　そりや又何故、どういふ譯で。
十六　勤する身に恥かしい、わたしやお前の。
清心　え。（ト思入あつて、）そんなららしや、愚僧が胤を。
十六　あい、二月でござんすわいなあ。（ト恥しきこなし。）
清心　ほい。（ト當惑の思入、竹笛入りの合方になる。）
十六　さあ、それぢやによつて廓へ歸りわたしや勤めがならぬ故、淵川へこの身を投げて死ぬ覺悟、不便と思はゞ一遍の、御回向お願ひ申しまする。（ト思入にて言ふ、清心是非なき思入。）
清心　このまゝ別れて行く時は、そなたばかりか胎の兒まで、闇から闇へやらずばならず、とあつて一緒に伴はゞ、
〽廓を脱けしそなた故、捉へられなば勾引し、再び繩目に遭はねばならず、是非に及ばぬ今宵の仕儀、殺すも不便連れても行かれず。こりやもうおれもともぐに。
十六　一緒に死んで下さんすか。
清心　外に思案はないわいの。

〽ほんに思へば十六夜は、名よりも年は三つ増し、ちやうど十九の厄年に、我身も同じ二十五のこの曉が別れとは花を見捨てゝ歸る雁、〽そこは常世の北の國、〽これは淨土の西の國、賴むは彌陀の御誓ひ、〽なまいだ／＼なむあみだ、〽これがこの世の別れかと互ひに抱き月影も、おぼろに霞む雨催ひ。

トこの內兩人名殘りの思入にて死ぬ覺悟をなし、ト〻手を取交しぢつと顏を見て手を取り寄添ふ、淨瑠璃の切、時の鐘にて兩人ほぐれて立上り、

此の世で添はれぬ二人の惡緣、

十六　死ぬと覺悟極めし上は、

清心　廓の追人に逢はぬうち、

十六　手に手を取つてこの川へ、

清心　浮名を流す心中に、

十六　明日は浮世の話し草、

清心　斯くと噂を聞かれたら、

十六　嘸父さんが後での歎き、

清心　それも前世の約束と、
十六　先立つ不幸を、
清心　ゆるして下され。
兩人　南無阿彌陀佛。
〽西へ向ひて合はす手も凍る餘寒の川淀へ、ざんぶと入るや水鳥の浮名を後に、
ト兩人よろしく思入あつて河の中へ飛び込む、水の音激しく水煙りぱつと立つ、三重波の音にてこの道具廻る。

(稻瀨川西河岸の場)――本舞臺正面二間の水門、左右高き石垣、此上草土手、松の立木、舞臺は河中の模樣、總て稻瀨川西河岸の體。眞中に白魚の篝火を焚きし網舟ありて、四つ手網を下し、船の中に俳諧師白蓮實は大寺庄兵衞、いゝきめ頭巾縞の被布山刀一本差にて煙草を喫みゐる、船頭三次棹をさし船を繫ひでゐる、この見得船の騷ぎの端唄、波の音にて道具留る。

三次　もし旦那、どうか本降りになりさうだつたが、いゝ鹽梅にあがりやした。
白蓮　然し、まだ安心はならねえ、雲足が早いから、もう一降りかゝるだらう。この一潮で切り上げよ

う、かゝればかゝるほど止められねえ。

三次　いゝ所を二三番受けたら、手をしめておしまひなさい、もう四つに近うございます。

白蓮　おゝもう四つに近いか。夜はよつほどつまつたな。それぢやあ鮒治の終はねえ内、野暮なやつだが飯とせう。

三次　そいつあ有難うございます、旦那は御酒がいけねえが、二枚がけ位な大きな奴へ、熱燗をぶつかけて、ぐつとやつた心持は、あゝたまらねえ、咽喉がぐび〳〵する。

白蓮　然し鰻は酒呑にやあ、ひつこくつていけめえ。

三次　なにさ、なまこや洗へものを好んで食ふのは意氣がりさ、まあ早え話が肴でも女でも、あつさりとしちやあうまくねえ、何でもひつこくこつてりと、噫に出にやあうまくござりませぬ。

白蓮　それぢやあ三次が小塚原の馴染は、二枚がけの熱燗だな。

三次　當てられました、いつぞや旦那にお目にかけてえが、潮前河豚を踏んづぶしたやうな、ごくお粗末な御面相だが、又言ふに言はれぬ味がござります。

白蓮　こう〳〵、受債は何を喰はせる。

三次　えゝ、今鮒治で鰻を上げます。

白蓮　そいつあ御馳走だの。
三次　さういふ旦那も遊び好だが、あの扇屋の十六夜さんは、座敷はつんとしてゐなさるが、面白みはございますか。
白蓮　さうよ、面白みのないでもないが、もう少し愛敬がほしいな。
三次　それぢやあちつとお口に逢ひませんね。もし旦那、もうようござりますぜ。
白蓮　おゝ手前で話でさつぱり忘れた。（ト立上り、四つ手網の繩を引き思入あつて、）こいつあ何か引かゝつたわえ、おれにやあ重くつて上らねえ。
三次　何ぞ芥でもかゝりやあしねえか、旦那お退きなせえ。（ト網を引き、）なるほど、こいつあべらぼうに重い、（トぐつと網を引上げる。とこれに以前の十六夜かゝりゐる。）おや、何か引か、つてゐますぜ。
白蓮　（十六夜を見て、）むゝ、こりや女だ。
三次　なに、土左だえ。
白蓮　いや、まだ身を投げて間もねえ樣子、どうか助けてやりてえものだ、御苦勞だが引上げてくれ。
三次　とんだものがかゝりやあがつた。（ト兩人して十六夜を船へ上げ介抱して、）なるほど、こりやたつた今飛び込んだばかりだ。

白蓮　ほんに顔の色艶も。（ト十六夜の顔をぢつと見て、）や、こりや扇屋の十六夜だ。
三次　なに、十六夜さんだえ。ほんに違えねえ、十六夜さんだ。
ト白蓮紙入より氣附藥を出し、十六夜の口へ入れる、三次柄杓にて川の水を汲み、十六夜の口へ入れ、白蓮は抱へて胸を押しながら、
白蓮　これ十六夜、氣をしつかりと持て。
三次　十六夜さん〳〵。（ト呼び生ける。これにて十六夜うんと心附く、）しめた〳〵、息を吹返した。
白蓮　これ心が附いたか、氣をたしかに持て。（トきつといふ、十六夜心附きて、）
十六　あい、氣はたしかになりましたが、わたしや死なねばならぬもの、どうぞ殺して下さんせいな。
白蓮　これ十六夜、何で死なにやあならねえのだ。
トこれにて十六夜心附き、白蓮を見てびつくりなし、
十六　や、思ひがけない白蓮さん、そんならお前に。
白蓮　さあ、どういふ譯か白魚の折も四つ手にかゝつたは、神や佛のこりやお助け、まだ命數の盡きぬおぬし、この結構な世を捨てゝ死なうといふは惡い了簡、何故あつて死なねばならぬ。
十六　さあ、それは。

白蓮　佛隱者の白蓮と人にも知られた施し好、假令何處の誰ぢややら知らぬ者でもこの網へ、かゝつたからは助けにやおかぬ、ましてこれまで馴染のおぬし、死なねばならぬといふ譯を、どういふ譯か話して聞かしやれ。品によつたらおれも男、どこがどこまで引受けておぬしが難儀を救つてやらう。

三次　もし十六夜さん、旦那があのやうにおつしやるから、惡い裁きはなさらねえ、包まず譯をお話しなせえ。

十六　さあ、その譯は。

白蓮　膝とも談合、話して聞かしやれ。（ト端唄の合方になり、十六夜思入あつて、）

十六　今更お話し申すのも恥しうござんすが、此間から時候にあたり、店を退いてをりましたを、内證の旦那お上さん、お爪どんと三人して、ふて寐をするの何のと言うて、わたしを打つたりたゝいたり、何ほ苦界の勤めでも寐てるるほどの煩ひに、どうまあお客に出られませう、出ねば手酷い遣手の折檻、責殺されて死なうよりいつそのこと一思ひ、淵川へ身を投げて死ぬるがましと廓を抜け、稻瀬川へ身を投げて、死ぬる覺悟でござんしたわいな。

白蓮　はてさてそれは詰らねえ、さりとは一途な狹い了簡、死なずとどうともならうのに。

十六　それぢやというて、勤めの身故。
白蓮　さあ勤めの身故金を積み、身請をしたら濟むことだ。
十六　え、（ト思入。）
白蓮　今もおれが言ふ通り、思ひがけなくこの網に、おぬしがかゝつて上つたは、おれに助けろと神や佛の言はゞお指圖、おぬしが身請をしてやるから、三日なりともおれに從へ、情人があるなら改めて兄弟分の盃して、里になつて添はしてやらう、聞きやお親父もあるぢやあねえか、この年まで育つたは誰がお蔭だと思つてゐる、おのれ一人で育つたやうに、死なうといふは第一不孝、まあ死ぬことは止めにしやれ。
十六　何とお禮を申さうやら御親切な今のお言葉、ほんに涙のこぼれるほど有難うござんすが、どうもわたしや生きてゐては。（ト腹の子がといふ思入。）
三次　これさ〳〵十六夜さん、そりやあお前悪い了簡、今旦那が何とおつしやつた。由良之助のせりふだが、情人があるなら添はしてやらうと、あれほどまでにおつしやるに、死なにやあならねえといふからは、外に譯がなくちやあならねえ。
十六　いえ〳〵外に譯といふては。

三次　さあ、譯がなけりやあうんと言つて、あこの船に乘んなせえな。

ト十六夜思入あつて、腹の子を產むまで生きてゐようといふ心の思入あつて。

十六　お前までがとも〴〵に有難うござんす、そんならわたしや身輕になるまで。

白蓮　え。

十六　いえさ、身儘にならば父さんが、嘸や悦びなさんせう。

白蓮　得心ならば明日とも言はず、今夜の中に三次をやつて、廓の方は附けてやらう。

十六　然しお前に多くのお金を。

白蓮　なにさ、高の知れたおぬしが身請、何にしろづぶ濡れで、家まで行くが冷たからう、柳橋の若竹でお銀が着物を借りて着せよう。

三次　若竹の姐さんのなら、丁度ようござりませう。

白蓮　それぢやあ川岸へ附けてくりやれ。

三次　合點でござります。

ト三次繋ひを解く、幽めて波の音、十六夜川の中へ思入あつて、

十六　たしかにぬしは。(ト清心へ思入。)

白蓮　どうしたと。（ト十六夜氣を替へて）
十六　さあ、ぬしにはたしか、お上さんが。
白蓮　あつてもいゝわえ、圍つておくは。
十六　それが知れたら。
白蓮　はて、氣の弱い。
三次　もし、出ますよ。（ト棹を突張る、これにて船動く。）
十六　あれえ、（トよろ〳〵として白蓮にこけかゝる、白蓮十六夜を抱留めて、）
白蓮　わるくねえな。（ト三次これを見て、）
三次　とりかぢイ。
　　ト大きく言ふ、波の音、賑やかな唄にて、この道具廻る。
（元の百本杭の場）——舞臺は元の百本杭の場に戻ると、床の淨瑠璃（竹本）になる。
〽行く空も薄墨流す雨雲に、鐘は沈めど淸心はなまじ覺えし水心、死ぬに死なれず波除の百本杭に縋り附き、

ト こゝに清心濡れたる裝にて百本杭に取附き、思入あつて二重へ上り、

清心 あゝ、いくら死なうと思つても身體が浮いて沈まれず、此身は下總行德生れ、幼い時より海邊に育ち習ふとなしに覺えた水練、それが今の害となり死におくれたか、あゝ情ない。

〽恨めしさうに川の面、清心つく〴〵打ちながめ、

それには引替へ十六夜は、水に溺れて死んだであらう、いまだ形は定まらねど、腹に宿りし我胤も、

〽共にはかなや冥土の旅、我も後より死出三途、手に手を取つて渡らんと、賽の河原で幼兒が、積む石ならで清心は小石拾うて袂へ入れ、浮かぬ心に引替へて浮きたつ囃子上手より、梅見戻りの遊山船、

ト この內清心石を拾ひて袂へ入れ、此の身を投げようといふ思入、この時上手の揚幕へ丸物の屋根船を出し、內にて賑やかな騷ぎ唄する、淸心これへ思入。

せめてあの世は迷はぬやう、觀念なすにかしましい、三味線の音が耳に入り、邪魔になつてならぬわい。

〽兩手を合せ西の空、曇る涙の春雨も、身にふりかゝる憂き事と、さすが求女は白浪の傘のしづくを打拂ひ、

ト杭にもたれ向ふの船へ思入、花道より寺小姓求女、振袖一本差下駄がけにて傘をさし出來りて、

求女　今打ちしは後夜の鐘、宵の内にと思うたに俄の雨に雨具はなし、傘を求めて思はぬ暇入り、

清心　（騷ぎの耳に入る思入にて）あ、人の歎きも知りをらず、面白さうな遊山船、死なうと覺悟しながらも、耳へ入つて黄泉のさはり、

求女　昨日聞けば父樣が今日につゞまるお金の入用、どうか調へ上げたいと、思へど甲斐ない小性の身、

清心　人の盛衰貧福は、前生からの約束にて、力づくにも及ばぬもの、

求女　據なう大江家の主水樣へお願ひ申し、疵養生のお手當金、

清心　あれあのやうに面白う藝者幇間を伴うて、騷いで暮すも人の一生、

求女　少しも早う父樣に、これを上げたらお悦び、

清心　その日の煙りも立て兼ねて、襤褸を纏ひ門に立ち、手の内乞ふも一生にて、

求女　急ぐとすれど折惡しく、思はぬ雨に持病のなやみ、

清心　又このやうに身を投げて、死なうといふもこれも一生、

求女　頼む木陰もなき故に、猶更癪はをさまらず、

清心　死ぬに死なれぬ心の迷ひ、

求女　急げど道は捗らず、

清心　こりやどうしたら、

兩人　よからうなあ。

〽心々のちぎれ雲、塞がる胸の晴れやらで、又もや雨となりふりも癪に亂るゝ求女が苦しみ、トこの内清心杭にもたれ船の騷ぎに聞きとれる思入、求女は苦しき思入にて、やう〳〵舞臺へ來り胸を押へて、

求女　もし〳〵。（ト清心の背中をたゝくに、清心びつくりして、）

清心　誰だ〳〵。

求女　はい、わたくしでござります。

清心　わたくしとは誰だ。

求女　往來のものでござります。

清心　見れば年端も行かぬ若衆どの、どうさつしやつたのだ。

求女　持病の癪が起りまして、一足も歩けませぬ、御無心ながらお藥がござりますなら、お貰ひ申したうござりまする。

清心　うつかりとしてゐる所を呼ばれた故、迷ひの者かと思つた。然しまあそれは嘸難儀であらう、藥を持つてゐることなら進ぜたいものなれど、わしはたつた今、川から、いやさ、川向うまで二町も行かねば藥屋とてもないところ、はて困つたものだなあ。

求女　あいたゝゝゝ。

清心　あこれ、そのやうにさし込むなら、藥はないがその替り、胸を押して進ぜませう。

求女　それは有難うござりまする。

清心　どれ、どこらがさし込みますな。

〽苦しむ求女が懷へさし込む手先に金財布、

ト求女苦しむを清心抱き起し懷へ手を入れ、財布へ手の障りし思入にて、

これ若衆どの、こりや何でござる。

求女　そりや金でござります。

清心　よほどの嵩でござるの。

求女　はい、五十兩でござりまする。

清心　えゝ。

〽聞いて思はずゆるむ手に、うんとばかりに反りかへれば、
　ト清心びつくりして手を放す、求女反りかへり倒れる。
あゝこれ反つては悪い〳〵、氣をたしかに持たつしやれ。
〽手拭取つて川水を汲んで氣附に飲ませんと、（ト求女を介抱して、）
若衆どのいなう、若衆どのいなう、氣をたしかに持たつしやれ。
〽と呼生くれば、（ト求女心附きて、）
求女　はい、大きによろしうござります。
清心　少しは胸が開きましたかな。
求女　御親切な御介抱、有難うござります。
清心　さうしてまあお前は大まいの金を持つて、夜夜半どこへ行くのだ。
求女　さあ、この金はわしが親父が御恩になつたそのお人の、落目を貢ぐ大事の金、殊には今宵につゞまるせつぱ、それ故夜道も厭はずにまゐりましたが、折悪しう持病のなやみに思はぬ暇入り、嘸待詫びてござりませう。
清心　あゝさうであつたかいな。然し金を持つて夜道は物騒、これから二町行くと、四角に辻駕籠があ

るによつて、駕籠に乘つて行かつしやれ。

求女　有難うござります。

〽會釋こぼして立上れば、（ト辭儀をなし求女立上る、淸心思入あつて）

淸心　思ひがけなくこのやうに言葉交すも川添の、この青柳の一樹の蔭、

求女　一河の流汲合ふも、盡きぬ緣の稻瀨川、

淸心　結ぶ氷りも一夜に、

求女　別れて末は白浪の、

淸心　何處の誰やら、

求女　御緣があらば、

淸心　又重ねて、

求女　おさらばでござります。（ト行かうとするを）

淸心　もし、（ト袖を引く、）

求女　何でござりまする。

淸心　（思入あつて）氣を附けて行かつしやい。

〽本意なく放す求女の袖、振合ふ他生の因果同志、別れてこそは行過ぐる、後見送りて淸心が、胸に思案のとつおいつ、

ト求女思入あつて下手へはひる。後に淸心いろ〳〵思入あつて、ト〻下手へ追かけはひる。と、ばたばたになり求女逃げて出るを淸心追ひかけ出る。

〽なんなく捉へ引出す財布、求女はその手に縋り附き、

ト淸心求女を捉へ、金財布を引出す、求女その手に縋りて、

求女　やゝ、こりやこの金を取る氣ぢやな。

淸心　さあ、そのびつくりは尤もだが、癪に苦しむ胸先をさする拍子に金財布、手にさはつたが互ひの因果、惡いと知つて我と我が、心に異見はしたれども、思ひ切れずこの無體、惡い者に見込まれたと無理なことだがあきらめて、どうぞその金貸して下され。

求女　えゝ、すりや親切な介抱は、情ごかしに此の金を、取らう企みであつたるか。

淸心　さういふ心は少しもない、年の行かない身の上に、たゞでもあるか雨上り、不便なことゝ思つた故介抱なしてやつたれど、金を持つたがこなたの不運、これさへなければわしも亦この惡心は起らねど、最前からの遊山船人の榮耀が羨しく、道に缺けたる邪曲非道、嘸やこなたの心では、鬼

坊主とも思はうが、あの世は無間地獄へ落ち、呵責の責を受けるとも、此世で榮耀榮華をして、
娑婆の淨土で樂しむ心、理を非に枉げても借りねばならぬ。

求女　さう聞く上はやみ〳〵と、おのれにこの金渡さうか。

〽用意の一腰拔打に切つてかゝるを清心が、有合ふ傘にてちやうと受け、拔けつくゞりつ打合ふ折柄、又も聞ゆる騷ぎ唄。

トこの中求女脇差を拔き切つてかゝる、清心傘にて受ける立廻り、文句の切にて船の騷ぎ唄になり、清心上手へ逃げる、求女切らうとして杭を斜に切落す、又立廻つて脇差を打落し突く、求女たぢ〳〵として件の杭にて咽喉を突き糊紅になり、

求女　人殺しぢや、人殺しぢや。

清心　もうかうなつたら、是非がない。

〽言へど應答も亡き人と知らぬ絆の財布の紐、首に絡みて斷末魔、蕾のまゝに散りて行く最期のほどぞ哀れなる。

トこの内財布を引合ひ、求女の頸に絡みてよろしく苦しみ落入り、ばつたり倒れる。

これ若衆どの〳〵、や、こりや事はきれたか、やゝゝゝ。（トびつくりし、竹笛入りの合方になり）

非業に死んだ十六夜が親にこの金惠みなば、問ひ弔ひも心のまゝと思ひ附いたがそなたをば、殺して取つたこの金が、何の供養にならうぞい。（ト金を投げ捨て、求女の脇差を見て思入。）さうぢや、水で死なれぬわしが身體、この脇差で死ねといふ、草葉の蔭から十六夜が、やつぱりわしを導くのか。これ若衆どの、そなたを殺した言譯は、そなたの刀で自殺なし、水死なしたる十六夜や、そなたと共に死出三途、これぞ因果の罪ほろぼし、さうぢや〳〵。

ト端唄になり、清心その刀にて腹を切らうとする。この時月出て清心氣の替りし思入にて、

然し待てよ、今日十六夜が身を投げたも、又この若衆の金を取り、殺したことを知つたのは、お月樣とおればかり、人間僅五十年、首尾よくいつて十年か二十年がせいきり、襤褸を纏ふ身の上でも、金さへあれば出來る樂しみ、同じことならあのやうに、騷いで暮すが人の德、一人殺すも千人殺すも、取られる首はたつた一つ、とても惡事を仕出したからは、これから夜盜家尻切、人の物は我物に榮耀榮華をするのが德、こいつあめつたに、死なれぬわい。

へ忽ち替る淸心が、これぞ惡事の双葉にて、後にはびこる鬼薊、話草とぞ、

ト脇差を川の中へ打込み、求女を捉へ、

それ、水葬禮だ。

〽なりにけゑ。(ト求女を川の中へ入れる。これにて雨車になる。)

あゝ又降つて來たか。

ト時の鐘にて、上手より以前の白蓮下駄がけにて、十六夜世話裝同じく下駄がけにて、番傘を相合にさし、ぶら提灯を持ちて出來り、清心に行當り提灯を消し、時の鐘忍び三重、清心びつくりして財布を落す。

白蓮　や、今の音は。

清心　え。

ト兩人探り合ひの立廻り、後へ以前の船頭三次出てこの中へ入り、足に障る金財布を取上げ透し見て、

三次　や、こりや百錢と思ひのほか。

トこれを聞き、清心三次を引捉へて財布を取る、三次それをと寄るを、肘にて當てる。この間に白蓮は十六夜の手を引き花道へ行く、清心財布を口に銜へ三次を轉す、これと一緒に白蓮傘を持ちかへるを木の頭。清心財布をいたゞきにつたり思入、兩人は花道へはひる。これをキザミ、浪の音、佃にて、

ひやうし幕

二幕目

初瀨小路妾宅の場

〔俳諧師白蓮實は大寺正兵衞、道心者西心、下男杢助實は寺澤塔十郎、船頭三次、俳諧師扁福、道具屋銀七 白蓮妾おさよ、白蓮妻お藤、下女およれ、下女お虎。〕

（妾宅次の間の場）――本舞臺三間の間常足の二重、正面更紗の暖簾口、上下腰張の茶壁、三味線一挺かけてあり、上の方に障子屋體、例の所門口、下の方路地口、總て初瀨小路白蓮妾宅次の間の體。こゝに下男杢助俎板に鴨の骨を載せ包刀にてたゝきゐる、傍に船頭三次煙草を喫みながら見てゐる。よき所に八百善形の燭臺を灯しあり、この見得鞠唄通り神樂にて幕明く。

三次　杢助どん、御苦勞だの。

杢助　なに、こりやわしらが食ふのだから、御苦勞なことはねえ。旦那樣とお妾は笹身の附いた正身ばかり、骨と皮は、お下に出てお米どんと、わしが食ひ物さ。

三次　えゝちくしやうめ、澁りッ皮のむけたお米どんと、つッつき合つて食ふのだな。これがほんのちんちん鴨、何にしろ一羽にしちやあ、がうぎに骨が澤山あるの。

杢助　なにさ、わしが食ふのだから、思ひ入れ身を打ちこんでおいた。

三次　こいつァおれも突ッ込みてえな。

ト花道より俳諧師扁福道行振にて、木劍をさし、道具屋銀七同じく俳諧師の打扮にて出來り、

銀七　ときに扁宗おれが打扮は、俳諧師と見えようか。
扁福　大丈夫おれが受合ふ、どこへ出しても俳諧師、棒になる氣遣ひはねえ。
銀七　長く話をしてゐる中に、道具屋にならにやいゝが、
扁福　そこは和尚が引受けて、ワキをつけるから案じなさんな。
銀七　何にしろ金満で、いゝお妾のあるのが當だ。
扁福　隨分わかつたお人だから、出入をすれば損はない。
銀七　さあ、ちつとも早く行きやせう。（ト兩人本舞臺へ來りて、）
扁福　御免なせえ、旦那はお家かね。
李助　おゝ誰かと思つたら扁福樣か、家にゐさつしやる、はひらつしやれ。
扁福　それは丁度よかつた、さあ先生こちらへ。
銀七　御免なせえ。（ト兩人内へはひろ、三次見て、）
三次　これは先生おいでなせえ。
扁福　おゝ網船の三公か、この節は白魚はどうだね。

三次　この間の南風から、だいぶ上手へ上りやした。

銀七　白魚も子持になつちやあ話せやせぬね。（ト黄色な聲をする。）

杢助　もし扁福様、そのをかしな聲をする人は、何だね。

扁福　これはわしが朋友で、當時名うての俳人故、そこで旦那へお近附に、今夜ちよつと同道したのさ。

銀七　早く御主人にもお目にかゝりたし、美しい代物も拜見したい。

扁福　これさ。あんまり口を利きなさんな。

銀七　道具屋が出るかね。

扁福　えへん〳〵。おゝこりや杢助どの、鴨のお料理だね、うまいやつだが冬季の物だて、一夜明けては冷たくても、比良魚のお刺身が書拔さ。

銀七　大きにさうでごッす、つんと鼻を通されちやあ、實に涙がこぼれやす。

杢助　ほんに、涙がこぼれるといやあ、わしらが國などゝ違つてべらぼうに鳥の高い所だ、直後の溝なぞに澤山ぎやあ〳〵言つてるに、今日も魚屋の新公が、いかく高く賣りやあがつた。

三次　おきやあがれ、そりやあ蹄をねらふのだ。

銀七　いや、そのうぶな所が妙でげッす。

扇福　秀逸々々。
お米　（奥より下女裝にて皿を持ちて出來り、）これは先生、ようおいでなされました。
扇福　おゝお米どんか、よい春だの。
お米　お目出度うござります。
李助　これお米どん、何ぞ用か。
お米　骨がたゝけたらよこせと、旦那樣がおつしやいました。
李助　え、（トびつくりして、）なに、骨をよこせ、いつも上つたこともねえに。
お米　いつもは上らぬが、けふは上るとおつしやいました。
李助　扨は身を入れたのを見られたか、あゝ惡いことはしねえものだ。
三次　こいつあ一番上壺を食つたな。
李助　えゝいまいましい。
お米　又皆樣にも御遠慮なく奥へいらつしやいませと、旦那樣がおつしやいました。
三人　それは有難うござります。
三次　李助どんの思ひのかゝつた、鴨の骨を御馳走にならうか。

杢助　どうとも勝手にさつしやい。
銀七　先づそれよりもお妾の君を。
扁福　えゝ、無駄な口を利きなさんな。
お米　さあ皆様御一緒に。
三次　そんなら先生。
扁福　どれ、御同道いたさうか。（ト四人は奥へはひる。杢助殘りて、）
杢助　折角うまくして喰はうと身をどんと、入れておいたに、あの人數であらされては、わしが口へはむづかしい、俎板でもねぶつてやらうか。
ト俎板を恨めしさうに見てゐる。と花道より白蓮妻お藤御新造の打扮にて、下女お虎附添ひ小田原提灯をさげて出來り、
お藤　これお虎、きつとそなたの推量の通り、旦那様はおさよの所に、おいでになるに違ひない。
お虎　ほんに結構な御新造様を、毎晩巣守りにして憎らしい旦那様、何でも寐所へ踏込んで、思ひ入れ言つておやりなさりませ、ぜんたいあなたがお心好し故、こんな事がおこります。
お藤　それ故今日はそなたといふ、加勢を連れて言ひに來たのぢや。

お虎　わたくしが喋りましたら、どんな女でも負かします。さあ〳〵早くおいでなさりませ。（ト本舞臺へ來り、門口を明け、）杢助どん、杢助どん。
杢助　あい〳〵誰だ、本宅のお虎どのか。
お虎　御新造樣がいらつしやいましたよ。
杢助　なに、御新造樣がおいでなされた。おゝ、これはよくいらつしやいました。
お藤（内へはひりて、）杢助、旦那どのはおいでゞあらうの。
杢助　はい。いえ、おいでなさりませぬ。
お虎　たにおいでなされぬことがあるものか、一昨日から今日で三日家へお歸りなされぬもの、ほかへおいでになる所はない、隱さずと言はしやんせいな。
杢助　いえ〳〵決して嘘言は吐きませぬ、此方へおいではなさりませぬ。
お藤（思入あつて、）おいでなさらずばならぬでよいが、これ杢助、まことに旦那樣にも困りますよ、年始もろく〳〵濟むや濟まぬに、幾日も〳〵夜泊り日泊り、とんとお歸りなされぬ故、用は足らず家は淋しゝ、（ト杢助へ思入あつて、）それに就けてもわしがそなたに賴みがあるが、何と聞いてはくれまいか。

杢助　はい、どんなことか知りませぬが、わしに頼みとおつしやりますは。

お藤　さあ、その頼みといふはゝ(ト杢助の手を捉へる、杢助びつくりして振拂ひ。)

杢助　いえ、そのお頼みは聞かれませぬ。

お藤　何故わしが頼みは聞かれぬのぢや。

杢助　はて知れたこと、わしは一年二兩二分の奉公人、まだ一年になるかならず、首尾よく三年勤めねば七兩二分出來ませぬから、めつたに間男はなりませぬ。

お虎　えゝ押の強いことを言はしやんせ、何で御新造樣がそんなことを。

杢助　はあ、それぢやあ間男ぢやあござりませぬか、そんなら頼みを聞きますべい。

お藤　(紙入より金包を出し、)杢助、こりや少しばかりだが、わしが年玉、煙草でも買やいの。(ト遣る。)

杢助　(開き見て、)こりや一分でござりますね、こんなに煙草を買つてどうしますべい、わしが喫むのは一山八文。

お虎　ほんにお前も野暮な人、煙草を買ふとも、買はぬとも御新造樣の思召し、お貰ひ申しておくがよいわね。

杢助　それぢや、鄕里への土産にしますべい。然し燒金ぢやねえかな。

お虎　燒金をお前に上げるものかね。

杢助　あんまり氣前がいゝから油斷がならねえ。

お藤　（思入あつて、）これ杢助、賴みといふは外でもない、旦那はいつからおいでなさつたか隱さずと言つて聞かしや。

杢助　はい、決して言ふなと言ひつかりましたが、一分貰つちやあ言はずにやあられませぬ。實は一昨日からござつて、いやはやたまげたことさ、まだろく／＼日もくれねえ内から。

ト言ひかけ、お藤を見て思入あつて口をつぐむ。

お虎　これ何も遠慮するには及ばぬ、隱さずと言はしやんせ／＼。

杢助　毎晩々々酒宴だが、難儀なものは杢助さ、やれ八百半へ行つて來い、やれ杢助豆腐屋へ行つて來い、やれ杢助三ツ割がなくなつたわのと、いやもうわしは粉になります。

お虎　ほんにさう使はれてはたまるまい、さうして御酒を上つたあとで、嘸旦那樣と、

杢助　あい、お妾樣と、

お虎　えゝ腹の立つ、お妾どのと言はしやんせ。

杢助　そのお妾どのと旦那樣と、

お虎　どうなされたえ。

李助　先づ煙草にしますべい。（ト煙草を喫む。）

お虎　御新造様お聞きなされましたか、腹の立つことではござりませぬか。

お藤　そりやもうそれ〳〵者の果ぢや故、手事とやらがあらうわいの。

お虎　えゝ、聞くほど腹の立つ、これだから御新造様、わたくしが御異見を申すのに、女子のたしなみたしなみと、何にもあなたがおつしやらぬ故、こんな目にお逢ひなされまする、わたしや悔しい悔しいわいな。（李助の胸倉を取りて振廻す。）

李助　あゝ、これ〳〵喉仏様がつぶれる、放してくれ〳〵。

お虎　さあ、放してやるから今の先は。

李助　もう先はありませぬ。

お虎　えゝこなたまで馬鹿にして、旦那様も旦那様だ、芝蝦の天ぷらぢやァあるまいし、さう引附けてばかりでござらずとも、好ささうなものだのに。

李助　然し、それも無理ではあるまい。御新造様に較べて見ると、泥亀にお月様。

お虎　あい、わたしや泥亀さ。（ト腹の立つこなし。）

お藤　杢助なぞの目にさへも、較べて見れば泥龜とお月樣ほど違ふおさよ、旦那どのゝ現をぬかし家へお歸りなされぬも無理ではないが、家の爲よしやお氣に障らうとも、言はねばならぬ女房の役。
お虎　御遠慮なしにおつしやりませ。
お藤　とはいへ言ふたらわたしをば、悋氣深い女子ぢやと、蔭で人が譏るであらう。
お虎　でも、言はずにはをられませぬ。
お藤　(氣を替へて、)まあ何事も後方に。杢助、そなたの部屋を貸してたも。
杢助　穢い所を御承知なら、隱れておいでなさりませ。
お藤　そんなら杢助。
杢助　御新造樣。(トお藤奥へ思入あつて、)
お藤　あ、思へば〳〵、(ト氣を替へて、)案内してたもや。
ト唄になり三人上手へはひる。これにてこの道具廻る。
(奥座敷の場)——本舞臺三間の間常足の二重、正面床の間、この上に文臺を載せあり。この下簞笥、墨繪の銀襖、上の方に障子屋體、この前に石の手水鉢、續いて四つ目垣、春季の下草、梅の立木、例

の所枝折戸。上下建仁寺垣、總て妾宅奥座敷の體。こゝに白蓮、着流し白き毛織の下半纏にてなり、以前の扁福、銀七、三次居並び、廣蓋に平鍋、鉢の物など取散しあり、お米酌なしてゐる酒宴の體。端唄にて道具留る。

扁福　ときに旦那、これはわたくしの朋友で、大俳諧の執心故、今晩連れて上りました。

白蓮　これは〳〵ようこそおいでなされた、何分お心安う。

銀七　どうぞ扁福同樣に、お引立を願ひまする。

白蓮　してお名は何とおつしやります。

銀七　へい、わたくしは、なに、寶井其角。

白蓮　あのお前樣が。

扁福　いえ〳〵、その其角の弟子の又弟子で、

銀七　へい、寶井其角にならひまして、丸井四角と申します。

白蓮　それは面白いお名でござりますな。

三次　然し、顏を見りやあ丸くもなし四角でもなし、たゞ散蓮華を見たやうで、中央の凹んだ顏だ。

お米　ほんにあなたは、吉六のやうでござりますなあ。

銀七　これは御挨拶、吉六と二幅對とは、ちとお鑑定が違ひますね。
扁福　これさ、無駄口を利かつしやんな。
三次　そりやさうとおさよさんは、どうなさいました。
扁福　ほんに、先刻からお見えなさいませんな。
銀七　少しも早くお目見得がしたい。
白蓮　さつき本屋の彌三郎が封切を持つて來たが、大方それを見てゐませう。
お米　はい、左樣でござります、もう二三枚讀んでしまふとおつしやりました。
銀七　封切に惚れてとは、もしや笑本の新版ではないか、ちと氣がもめの吉祥寺。
扁福　これさ、そんな洒落は野暮やお七だ。
白蓮　いや、いつのまにか洒落は御上達だ。
扁福　面目次第もない。
　　ト端唄になり、奥よりおさよ派手なる妾の打扮にて出來り、
さよ　これはどなたも、ようおいでなされました。
扁福　いや、おさよ樣、いつもながらお見事々々。

さよ　扁福さん、なぶつて下さんすな。（ト言ひながら白蓮の側へ住ふ）
三次　もし、花魁ぢやあねえおさよ様、この間仲見世で、扇屋の遣手に逢ひましたが、二階中でお噂を申しくらしてをりますと言ひました。いやよく喋る婆ァさんで、逃げるにやあ逃げられず、まことに恐れ入りました。
さよ　さうでござんしたか、今度お逢ひなら、尋ねて來るやうに言うて下さんせ。
三次　はい、清正公様へまゐる時、お寄り申すと申しました。
扁福　ときにおさよの君へお引合せ申すは、わたくしの朋友、
銀七　丸井四角と申します者、お心安う。
さよ　はい、此方からお願ひ申します。
お米　さあ皆さん、お杯はどちらでござります。
扁福　いや、お杯はこゝにござりますが、もう澤山でござります。
さよ　何もござりませぬが、お燗のよいので、も一つお上りなされませいな。
銀七　いえ〳〵、御遠慮いたしませぬて。
白蓮　いや、御酒がお厭とあるならば、四角先生に何か一句お願ひ申したいものだ。

銀七　これは御主人のお言葉でござるが、今晩はちと胸が痞へて、
扁福　そんな勿體をつけずと、何ぞ一句おやんなせえ。(ト文臺を持つて來てなほす。)
銀七　これは甚だ迷惑な。(ト言ひながら文臺をひねくりゐる。)
扁福　さあ、四角先生、發句を早く。
銀七　承知しました。(ト考へる思入あつて、)先づ目いつぱい銀二兩でげッす。
扁福　これさ、十七文字だよ。(ト銀七の袖を引く。)
銀七　なに、十七匁え、さうはふめねえ、高い〳〵。
白蓮　なに、高いとは。
扁福　いやさ、高いと言つたはこの間の短册、それ十哲が九枚まで、
三次　なに短册が九枚ぞろひ、そいつあがうせいだね。
扁福　いや、お前もなか〳〵隅へはおけねえ、十哲を御存じとは御風流なことだ。
白蓮　先生、もうそろ〳〵花の世界でござりますな。
銀七　ときに、十哲先生お杯はどうだね。(ト三次へ杯をさす。)
三次　杯とは有難え、こいつが來ちやあいよ〳〵花見だ。

さよ　もし旦那さん、今年は龜井戸の藤から、木下川の杜若を見せておくんなさいましな。
白蓮　おゝ三次を連れて、一日行かう。
三次　なに、龜井戸かね、そいつあ面白え。
銀七　それから天神の裏へ拔けの吾妻の森はどうだね。
三次　裏菅原と來ちやあ獨じめだ。
扁福　兎角花時分は降りに困るて。
三次　いや雨は眞平だ、坊主を消しやす。
扁福　これは御挨拶。
銀七　それから前は花菖蒲だね。
三次　花菖蒲ならおいでなせえ、ちよつと一めえ引きやせう。
扁福　もし、船しう、お言葉の中だが、菖蒲に引といふ緣語はいゝが、一めえとは何のことだね。
三次　はア、お前花をしながら一めえを知らねえのかえ。
扁福　花の座も月の定座も心得てるが、一めえばかりは、
銀七　何のことだか分かりやせん。

白蓮　こりやあお二人の花と三次が花とは違つた話だ、先づ蒔きなほしにするがいゝ。
三次　それぢやあ手八かね。
お米　三次さん、もうお飯かえ。
白蓮　また話が間違つた、はゝゝゝ。
李助（奥より出來りて、）もし旦那樣、おさよ樣の親父樣がおいでゞございます。
白蓮　おゝ、おさよの親父が來たか。
さよ　李助どの、わたしの部屋へおいて下さんせ。
李助　へい、如在なくさうしました。
扁福
銀七　お客樣なら、お暇にいたしませう。
三次　わつちも御一緒に行きませう。
白蓮　まゝ、よいではございませぬか。これ三次、手前何ぞ用ぢやあねえか。
三次　へい、ちとお借り申したうございます。
白蓮　おゝ、いくらばかり、
三次　お氣の毒でございますが、五兩お借り申したうございます。

白蓮　何にするのだ。

三次　へい、この間化かされました、狐の穴を塡めるのでござります。

さよ　えゝ氣味の惡い、お前狐に化かされなさんしたか。

扁福　どんな狐たか知らないが、穴を塡めるに五兩とは、

銀七　よつぽど大きな穴と見える。

三次　また話が間違つたかね。

白蓮　何でもいゝからこれを持つて行け、然しもういゝ加減にするがいゝ。(ト紙入より五兩包んでやる。)

三次　こりやあ有難うござります。おさよ樣旦那へよろしく。

白蓮　(金を紙包みにして、)折角初めてのおいで故、穢くともお泊め申し、歌仙でも卷きたうござるが、今お聞きなさる通り、おさよの親父がまゐつたれば又後してのことにいたしませう。どうぞ今夜は大磯で御一泊下され、これは少しばかりでござるが、お駕籠賃を呈します。

ト扁福、銀七へ金包みを遣る。

銀七　これは〱初めて上りまして、このやうな御心配を受けましては。

扁福　殊に又わたくしは、毎度お惠みにあづかりますに、これを頂戴いたしては、甚だ恐入りまする。

白蓮　いや、この頃にお點を願ひますから、朱料にお納め下され。
扁福　それは有難うございます。（ト金をいたゞき、）定めて拜見事でございませう、先度の卷はどうでござりまする。
李助　（前へ出て、）いやもう生のせゐか、燃えなくて困りきりました。
銀七　これは怪しからぬ殺風景、こちらとは、かまが違ひますな。
李助　なに、いつもの釜で焚きました。
さよ　又李助どんが分からぬことを。
お米　分からぬ人でござりますな。
李助　なに、をかしいことがあるものか、まきはどうだといふから、生で燃えねえと言つたのだ。
白蓮　おゝこりやあ手前の言ふのが尤もだから、そつちの方へ引込んでゐろ。
三次　そりやあさうと、先生達は大磯は何處へおいでなさるか、お送り申しませうか。
扁福　いや、大磯より小磯の彼女へ、兩吟で行く積りだ。
三次　大萬か、畜生め。
銀七　たゞ恐れるのは、燒場の匂ひさ。（トこの時李助鍋の蓋を取つて、）

杢助　嬉しや、鴨い骨が殘つた。（ト大きな聲をする、皆々びつくりして、）
皆々　えゝ、びつくりした。
白蓮　いやもうかれこれ四つでもあらう、小磯へおいでなら早いがお德だ。
扁福　左樣でござります、道が淋しうござりますから、早くまゐりませう。
銀七　大磯へ行くと違つて、田圃だけ難儀だ。
三次　然し先生方はお駕籠だらう。
扁福　どうして／＼、小磯へ駕籠で行つて合ふものか。
三次　それおやお駕籠賃をお貰ひ申して、やつぱり歩いて行くのかね。
銀七　君を思へば徒はだしさ。
杢助　いや、慾はつた奴だ。
扁福　左樣なれば旦那樣、
銀七　おさよ樣、
さよ　早くおいでなさんして、お樂しみなさんせ。
扁福　いや、こちらは苦しみでござりまする。

銀七　たゞ、先方を悦ばせますのさ。
白蓮　いかさま、さうでござりませう。
扁福
銀七　はゝゝゝ、どれお暇いたしませう。
三次　さあ、おいでなさい。
ト端唄にて三人花道へはひろ、杢助門口まで送り出て、
杢助　をとゝひ來い。
お米　これはしたり、聞えるわいな。
杢助　なに、聞えたとて構ふものか。
白蓮　これ杢助、無駄な口を聞かねえで、おさよが親父にござれと言やれ。
杢助　へい、畏まりました。
さよ　お米はこゝを片附けておくれな。
お米　はい〳〵。（ト酒肴を片附ける、杢助奥に向つて、）
杢助　さあ、西心様、こちらへおいでなされませ。（ト奥にて今は西心となれる佐五兵衛の聲にて、）
西心　まつぴら御免下されませ。

ト しんみりとした端唄の合方にて、奥より佐五兵衛の西心坊主裝にて頭陀袋、手甲、脚絆、網代笠を持ち出來り、下手へ出て笠をおきて、

白蓮　旦那樣、よい春でございます。

西心　西心どのござつたか、さあ〱これへ〱。

さよ　父さん、ようござんしたな。

西心　有難うございます。

西心　おゝ娘、替ることもなうて目出度い〱。

お米　お茶をお上りなさりませ。（ト茶を汲んで持つて來る。）

西心　必ず構うて下さりますな。（ト茶碗を取り思入あつて、）扨旦那樣、年寄の癖でいつも同じ事を申すやうでございますが、杖柱と思ふこのおさよ、親の爲めの勤め奉公、苦界の辛さに思ひ詰め、廓を脱けてめつさうな、稲瀬川へ身を投げて死なうとしたを、折よくも旦那樣の網船で、お救ひなされて下されしたは、阿彌陀樣より有難いお慈悲深い思召し、苦界の勤めが辛ければ、樂にしてやらうとて、直に廓の身請をなされ、下男下女を使はせて、何不自由のない今の身の上、あゝ娘は仕合せ者、果報やけでもしひよつと夭死でもせねばよいと、よいにつけ惡いにつけ案じられるは親

白蓮　心。その親までも縁に連れお貢ぎ下さる御親切、何とお禮を申さうやら、これこの通り明暮に阿彌陀樣より先さきへ、あなたを拜んでをりまする。（ト珠數を出して泣く。）
父親父どの〻株の禮、もうくその禮は言つて下さるな、知らぬ者でもかういふことは助けたいがおれが氣性、まして馴染のおさよが事、恩に被るわけはない。さうこなたが來る度々、こんなに禮を言はれては、おれが方で却て迷惑、假にも親子の因みを結ぶは、前生からの緣づくだ。
さよ　ほんに不思議な御緣にて、何から何まであなたのお世話、ようお禮を言うて下さんせ。
西心　いやもう、言葉でお禮は申し盡されませぬ。（ト嬉し淚にむせる思入あつて、）あ〻年寄と申しますものは、悲しいことでも嬉しいことでも、淚が先で困りまする。（ト淚を拭ふ。）
李助　まだ淚より先へ、水ッ鼻がでませうが。
お米　また口出しをしなさんすか。
西心　いや、これは李助どのに當てられました。
白蓮　して、親父どのには何故剃髮いたされた。
西心　はい、ちと菩提を弔はねばならぬものがござりまして。
さよ　父さん、それは誰の菩提を。

西心　さあ。そちが弟の。
さよ　え。
西心　いやさ、一昨年死んだ婆の菩提に、髪をおろして佛三昧、その日〳〵はお惠みで、何の苦勞もござりませぬ、朝から晩まで有難いところへお參りでもするのが役、安樂なことでござります。
さよ　見れば父さん旅支度で、どこぞへおいでなさんすかえ。
西心　さあ、追々暖になつて來る故、善光寺へ參詣せうと、それ故今晩お禮やらお暇乞に上つたのぢや。
白蓮　なに、善光寺へ行かつしやる、そりやあいゝこつたが、然し彼地は名代の雪、三月にさつしやればいゝに。
西心　いえ、もう大がい雪も片附きましたらう。
杢助　どうして〳〵、わしらが國の雪といふものは、五月でなくちやあ解けはしねえ、今のやうに淚なこぼしたり、洟をたらしたりすると、直に氷柱にぶらさがるて。
白蓮　又杢助が御大そうに、嘘半分の國自慢か、はゝゝゝゝ。（トこの時四つの鐘鳴る。）
西心　ありやもう四つでござりまする、どれお暇いたしませうか。
さよ　この頃は物騷なといふこと故、泊つておいでなされませいな。

白蓮　ほんに、明日こつちから目出度く出立さつしやるがよい。
西心　左様なら、御厄介になりませうか。
お米　それがよろしうござりますわいな。
西心　いや、物騒なと申しますれば、鬼薊とかいふ泥坊が、所々へ入つたさうでござります。いやそれで思ひ出したが、去年極樂寺へ入りまして、頼朝様から納めた祠堂金を、三千兩そつくり盗んだ泥坊が、今に行方が知れぬさうでござりますが、運のよい奴でござりますな。
　　トこれにて白蓮ぎつくり思入。杢助白蓮へ眼を附ける、白蓮思入あつて、
白蓮　そいつは大方上方か、九州筋へ逃げたであらう。
西心　何にいたせ、こなた様なぞはお金が澤山ござるから、御用心なされませ。
さよ　ほんに、氣味の惡いことでござんすな。
杢助　油斷のならぬは、泥坊ばかりは上邊からは知れぬもの。
白蓮　え。
杢助　いや西心様、臺所でいつぱいやりませうか。
西心　それは何より有難い、旦那様の前よりも氣がつまらないで、却つてうまい。

杢助　ときに鴨の骨は上りますか。
西心　いえ、唯今では大精進。
杢助　しめたり、それではおれ一人。
西心　左樣なれば旦那樣。
白蓮　ゆつくりと休まつしやい。
西心　どれ、御馳走になりませうか。

ト端唄にて西心先に杢助鍋を持つて附き、奥へはひる。

お米　もう四つを打ちましたから、お床を延べませうか。
さよ　あい、さうして下さんせ。旦那お片附にしませうから、こちらへおいでなさんせ。
白蓮　だいぶ床急ぎだの。（トお米は上手の屋體へ入る。おさよは煙草をつけて出す、白蓮喫みながら、）今夜は寒いから着替へずに寐ようか。
さよ　それがようござんす。
お米　（上手より出來りて、）はい、よろしうござります。

ト白蓮おさよ上着を脱ぎ細帶をしめ、身支度をする、お米手を附きて、

左樣なら、御機嫌よろしう。

ト端唄の合方にておさよは奥へはひる、おさよ思入あつて、

さよ　さあ、おやすみなされませいな。(ト立上る、白蓮おさよの腹へ眼を附けて、)

白蓮　かう氣のせゐか、手前腹が大きいぢやあねえか。

さよ　え、(トびつくりして袖にてかくし)わたしのお腹の大きいのは、生得でござんす。

ト顔を背ける、白蓮腹へ眼を附けながら兩人上手の屋體へはひる。と奥より李助あたりを窺ひながら出來り、床の間の脇差をそつと持來り、拔放し灯にてとくと見、うなづきて鞘へをさめ、元の所へおき下手へ來り、

李助　まだ酒が、殘つてゐる筈だが。

トあたりへ思入あつて奥へはひる。時の鐘静かなる端唄になり、屋體よりおさよ出て下着の上へ上着を羽織り、手水鉢にて手水を遣ひ、簞笥の抽出より位牌珠數香爐を出し、文臺の上へ載せ、茶碗に水を汲み手を合せて、

さよ　春譽清心信士成佛得脱、南無阿彌陀佛々々。

トながら回向をなす。この内上手障子屋體を明けて白蓮窺ふ、と奥よりはお藤窺ひゐる。白蓮思入あ

つて、

白蓮　おさよ、何ををがむのだ。

さよ　え、(トびつくりして仕舞はうとするを、)

白蓮　あゝこれ、仕舞ふには及ばねえ。

さよ　それぢやというて。

白蓮　はて、遠慮せずにをがむがいゝ。(ト前へ出る。)

さよ　旦那さん、堪忍して下さりませ。(ト泣き伏す、白蓮思入あつて、)

白蓮　毎晩おれが寐息を考へ、そつと床を脱けだして、位牌に向つて神妙に回向をなすは親兄弟か、但しは勤めをしてゐた内言交して男の爲か、包まずおれに話して聞かしやれ。

ト白蓮煙草を喫みゐる、おさよ思入あつて、

さよ　これまでお隱し申したなれど、お目立まする上からは何をか包み申しませう、果敢ないこの身の一通りお聞きなされて下さりませ。(ト胡弓入りの合方になりて、)この位牌は二世までも言交したる我情人、名も清心と言はれまして佛の道に入つたお人、廓通ひの罪科に繩目の上に御追放、其の折わたしは清心どのゝ胤を宿して身重になり、苦界の勤めも末々はならぬ我身に廓を脱け、後や

前の考へなう、どうでこの世で添はれずばと清心どのと諸共に、死なうと覺悟死出の山、三途の川も手に手を取り越えて行く氣に稲瀬川へ、此の身は捨てゝも捨てられぬは、浮世の義理のあなたのお情、御介抱にて命も助かり廓の身請もして下され。まだその上に父さんまでお貢ぎ下さるお志し、世にも稀なる御親切に身重も隱しお寐間のお伽、それがせめてもの御恩返し、多くのお金で廓から身請をなされしわたし故、身體はあなたにお任せ申せど心の内はその時に、入水なしたる清心どのへ仕へる心の尼法師、いつぞはお暇お願ひ申し、菩提の爲めに國々の尊き御寺拜まんと、こしらへおきし袈裟法衣、これ御覧下さりませ。

ト簞笥の抽出より白の着附畳の衣手甲脚絆を出し、白蓮に見せる。お藤もこれを聞いて涙を拭ひ、白蓮感心の思入にて、手に持ちし煙管を捨て、

白蓮　いや、感じ入つたそなたの貞節、傾城に眞實なしとは譯知らぬ、野暮な口から行過ぎたとは、新内節の名文句、あゝどんな人だか清心どのは、死んだあとまでこれほどに思はれるとはその身の仕合せ、嘸これまでは義理故におれと寐るのが辛かつたらう、この貞節を見る上はこれから、同じ一夜着に寐ても、佛を抱いて寐るのも同じ、おれも男だ望みの通り、暇をやらう。

さよ　えゝ、すりやお暇を下さんすとな。

白蓮　おゝ剃髪なして心のまゝに、夫と思ふ清心どのゝ、跡懇に弔ふがよい。

さよ　えゝ有難うござりまする。

ト奥より佐五兵衞涙を拭ひながら出來りて、

佐五　旦那樣、始終の樣子は次の間で、涙ながらに承はりました、命をお助け下されたまだその上に身請の御恩、それもろく〱報いもせぬに、尼になり度く思ふなら、暇をやらうとおつしやります、結構過ぎたあなたの仰せ、何とお禮を申さうやら、えゝ有難うござりまする。

白蓮　何の〱、金は世界にいくらもあるもの、この貞節は千萬兩金を積んでも買はれねえ。

佐五　そのやうにおつしやつて下さりますほど、勿體なうてなりませぬ。これおさよ。そちはおれが娘には生れ優つた志し、嘸や草葉の蔭にても、入水なした淸心どのが、悦んでござるであらう。

さよ　旦那樣のお情で、世間晴れて淸心どのゝ菩提もこれから訪はるゝ嬉しさ、善は急げといふからは、今宵直に髮をおろし尼になりたうござりますわいな。

佐五　おゝ幸ひ明日は月こそ替れ、淸心どのゝ命日なれば、お經は知らねど出家の姿、おれが剃つてやりませう。

さよ　どうぞさうして下さんせいなあ。

白蓮　そんなら今夜剃髪なすか。
さよ　はい、お許しの出た上からは、
佐五　佛に仕ゆる日頃の願ひ、
白蓮　とはいへ惜しき緑の黒髪、
佐五　剃らば明日より花もなく、
さよ　身は青柳の青道心、
白蓮　出家堅固に、
さよ　旦那様、
白蓮　おさよ。（ト兩人顔見合せ、ホロリと思入。）
佐五　どりや、剃刀をあてゝやりませう。
ト唄になり、佐五兵衞泪ながらにおさよの手を引立てる、おさよ件の着附法衣を持ち奥へはひる。と
奥にてお藤わつと泣く、白蓮びつくりして奥を見て、
白蓮　そこで泣くのは誰だ。
お藤　はい、わたくしでござります。

白蓮　そちはお藤か、どうしてこゝへ。（ト お藤出來りて、）

お藤　あなたがお歸りなさらぬ故、忍んで今宵參りましたは、男を蕩す憎い女恨みを言はうと存じましたに、思ひのほかにおさよの貞節、まだ年若な身を以て女子の操を立て通し、尼にならうといふ心に、恨みも晴れて眞實の姪か妹のやうに思はれ、わたしや可愛しうてなりませぬ。かういふ譯とは知らぬ故、これまであなたに御異見を言うたはどうぞ旦那樣、お許しなされて下さりませ。

白蓮　日頃おぬしが兎や角と異見がましく悋氣をするも、尤もだとは思へども、今も聞いてゐる通り、賴り少ねえあれが身の上、かういふと言譯らしいが色氣ばかりといふではねえ、死なうとしたを助けた故、貢いでやらにやあならぬ仕儀、これからはおれも亦夜泊り日泊り止にして、家にゐるから案じるな。

お虎　（奧より出來りて、）御新造樣嘸お嬉しうござりませう、憎い〳〵と思うたお妾が坊主になつてしまふからは、これからはあなたの世界、わたしまでもとも〴〵に、嬉しうて〳〵ならぬわいな。

お藤　これはしたりどうしたものだ、そのやうな事を言やつて、わたしでも言はせるかとおさよどのに聞えて見や、顏向がならぬわいの、ちとたしなんで口を聞きやいの。

お虎　おや〳〵御新造樣、そりや何をおつしやります、わしは氣が弱くて言へぬ故、そなた思入れ言う

てくれと、おつしやつたぢやござりませぬか。

お藤　まだ〳〵言やるか、だまらぬかいの。

お虎　それぢやと申して、あれほどあなたが。

お藤　まだ口答へをしやるのか。旦那様、まことに口を利き過ぎますから、三月は暇をおやりなされませ。

お虎　こりやまあどうしたといふのだらう。

ト奥より杢助とお米出來りて、

杢助　もし旦那様々々、おさよ様が髪を剃り、尼法師にならつしやりました、惜しいことぢやあござりませんか、ほんに廣い世界なれどあんなお方が又とあらうか。わしがこんな不器用者故常不斷旦那様に叱られるのを、おさよ様が蔭になり日向になりお詫をして下さるのみか、酒が殘つたこれを飲みやれ、肴が殘つたこれを喰べれと、お情深いお心立、いかに菩提の爲めだとて、尼になるとは惜しいこと。

お米　杢助どのゝ言ふ通り、取分け足らぬわたくしを、お米かうせいあゝせいとお目をかけて下されたおさよ様がお髪をおろし、諸國修行においでなされ、長いお別れになりますとは、悲しいことでござりますわいな。

杢助　おゝこなたも悲しいか、おれも悲しい。（ト兩人泣く。白蓮思入あつて、）

白蓮　おゝ尤もだ〳〵、惚いやうだが手前達より涙をこぼさぬおれが心、厭な女に別れても三百落した心持、ましておさよは、（ト言ひかけお藤の顏を見て、）こりや御新造の前では差合であつた、はゝゝは。（ト笑ひに涙をまぎらす思入。奧にて西心の聲して、）

西心　さあ〳〵娘、早く來やいの。

ト奧より西心先に、おさよ墨の法衣、手甲、脚絆、淺葱の帽子を冠り出て、恥かしさうに下手へ俯向き住ふ、西心思入あつて、

旦那樣、西心めが剃刀で、目出度く剃髮いたさせました。

さよ　願ひの通り尼となり、浮世を捨てるもあなたのお蔭。

西心　有難うござります。（ト皆々おさよを見て泣く、白蓮不便なといふ思入あつて、）

さよ

白蓮　お藤見やれ、僅な内にさつぱりと、替り果てたる墨染姿。

お藤　爪繰る珠數の玉よりも、淸いお前の貞節に、わたしや感心しましたわいな。

さよ　お恨みのあるわたくしに、有難いそのお言葉。

西心　とてものことに親父がお願ひ、ぶしつけなことながら、斯うなる上は娘をば、御新造樣の妹には

なされては下さるまいか。

お藤　おゝ夫は何より易いこと、思ひたつたが吉日なれば後とも言はず今こゝで、盃をしてやりませう。

西心
さよ　すりや、お聞届け下さりますとか。

お藤　お虎、その杯をこれへ。

お虎　畏りました。（ト杯、銚子を持つて來る、お藤杯を取上げる。）

お藤　妹なればわしから先へ。

ト杯を出す、お虎酌をする、お藤呑んでおさよにさす、おさよ呑んで、

さよ　憚りながら。（トお藤へさす、呑んで、）

お藤　これで今日から姉妹。

西心　親父が望みもかなひまして、

西心
さよ　有難うござりまする。（トおさよ思入あつて、）

さよ　もし皆さん、今までのお世話になつたお禮やら、又二つにはわたしが形見、（ト懐より紙に包みし簪をお米に、櫛をお虎にやり、）古びたれど櫛簪、これをさして下さんせ。李助どのは男のこと故、少しなれども置土産。（ト金包を李助にやる。）

お米　そんならこれをお形見に。
お虎　わたくしにまで下さりますとか。
杢助　止さつしやればよいに、又お金。こりやあ煙草を買ひますのかね。
お米　何を買ふともお前の好、おさよ様からそれはお形見。
杢助　え丶有難う。
三人　ござりまする。
さよ　思ひ出す日があつたなら、お念佛を言うて下され。
三人　はあ丶丶丶丶、（ト泣く。）
西心　さ娘、お暇しようか。
白蓮　親父どの、ちよつと待つて下せえ。（ト紙入より金を出し、紙に包みて、）言はゞ目出度き法の旅立、少しなれどもこれは餞別。（ト金包みを西心にやる。西心取上げて、）
西心　これをお貰ひ申しましては、
白蓮　はて、行く先とても定めなき、長の旅路のことなれば、頼みになるは路用の金。
西心　何から何まで。

西心 さよ　有難うござりまする。

お藤　何はなくとも明日の朝、赤の御飯を炊かうから、祝うて出立して下され。

さよ　お志ではござりまするが、この姿を人様にお目にかけるも恥かしければ、

お藤　聞けばそなたは身重とやら、女子の大役案じらるれば、どこへなりとも落附いたら、わたしの所
　へ手紙でなりと。

さよ　きつとお報せ申します。

西心　左様なれば、

西心 さよ　御機嫌よろしう。

白蓮　二人も無事で。

杢助　又鎌倉へお帰りを、

皆々　お待ち申してをりまする。

　　ト西心おさよ平舞臺へ下り、門口へ出かける。時の鐘。思入あつて、

西心　行方定めぬ長旅に、

さよ　これが別れにならうやら、

白蓮　知れぬ浮世の仇櫻、
杢助　派手な姿の盛りの花も、
お藤　夜半の嵐にあらねども、
さよ　散りて行く身は墨染に、
西心　替りし頭を旦那様に、
　ト西心おさよの頭巾を取り、青頭を見せる。白蓮これを見て、
白蓮　扨も殊勝な、（トおさよと顔見合せる。）
さよ　あれ、（ト恥しき思入にて、傍にある西心の網代笠を冠る、これを木の頭。）お恥かしうござりまする。
　ト笠を冠りしまゝ白蓮を見る、白蓮はお藤に感心なことだといふ思入、皆々よろしく、本釣鐘の明六つ、烏笛、鳥追の合方にて、

ひやうし幕

三幕目

雪の下白蓮本宅の場

〔役名――鬼あざみ清吉、白蓮實は大寺正兵衞、下男杢助實は寺澤塔十郎、夜蕎麥賣り仁八、合長家どん七、同勘六、捕手。十六夜おさよ、正兵衞女房お藤。〕

（白蓮内の場）――本舞臺三間の間常足の二重、障子欄間、網代の蹴込、正面瓦燈口大鼓張の襖、右手地袋戸棚、左手腰張りの茶壁、上の方に障子屋體、例の所屋根附の門口、下の方後へ下げて九尺の玄關、間平棧の戸閉あり、三十郎（白蓮役）の替紋の高張提灯、總て鎌倉雪の下白蓮本宅の體。こゝに夜蕎麥賣り仁八弓張提灯を前におき、この後に合長家のどん七、勘六鉦と太鼓を傍へおき住ひゐる、この見得鞠唄にて幕明く。

仁八　お頼み申します。

どん勘六　お頼み申します。お頼み申します。

仁八　このやうに呼ぶのに御返事のないは、どなたもおいでなさらぬか知らぬ。

どん　こなたの娘のお虎どのが、一昨日の晩駈落をしたが、外に女中衆がないと見える。

仁八　お妾の方に一人あつたが、これはお虎と仲が惡くつて、下つたといふことだ。

勘六　それぢやあ嘸こちら樣でも、御無人でお困りだらう。

仁八　何にしろ、もう一ぺん呼んで見よう。
三人　お頼み申します、お頼み申します。
　　ト奥にて「どうれ」といふ杢助の聲して、奥より杢助出來りて、
杢助　おゝ、誰だと思つたら、お虎どんの親父どのか。
八仁　これは杢助どのか、お前には禮を言はねばならぬ、お虎が駈落をいたした故嘸御用が多からう、まことにお氣の毒でござります。
杢助　いやもう、お虎どのではひどい目に遭ひます、朝むつくり起きて飯を炊くから、夜ごろりと寐るまでは、水も汲んだり米も磨いだり、買物もしたり使もしたり。何でもかでも杢助々々、實に二人前の働きだが、給金でも喰物でも二人前はくれねえ、こんなうまらねえ事はねえ。
仁八　わたくしがどうかしてをりますと、お禮の仕樣もござりまするが、何を申すも夜蕎麥賣り、その日その日の仕込みに追はれ、長じけでもくひますと、三文の錢にも困ります。
どん　たゞ憎いのはお虎どの、父さんにも難儀をかければ、御主人樣にも難儀をかけ、
杢助　またその上に長屋の者にも、鉦太鼓で歩くやうな、こんな難儀をかけまする。
勘六　さうして行方が知れたかな。

仁八　三日此方捜しますが、今に行方が知れませぬ、何でもこれは男があつて逃げましたと見えまする。

どん　世間には物好な人が多くあるかして、

勘六　あんなでゞふくを連れて逃げるとは、どんな男でござりませう。

仁八　李助どのは朝夕に傍にござつたことなれば、何ぞ怪しいことはござりませなんだか。

李助　何も怪しいことはなかつたが、旦那樣のお妾であつたおさよどのゝ親父どのが、今では名越の無縁寺に墓守をしてゐるが、その寺の穴掘にべらぼうに淨瑠璃の好な奴があるが、御新造樣のお使にそこへ行つて歸つて來ると、淨瑠璃の噂をするが、もしその坊主が情人ぢやあねえか、無縁寺へ行つて聞いて見さつしやい。

仁八　そんなことかも知れませぬ、今言はしつたおさよどのは尼になつて、諸國修行に出られたと聞きましたが、歸られましてござりますか。

李助　さあ、親子連で出かけたが、聞けば箱根の裏道で、惡漢どもにおさよどのを連れて行かれて、親父どのは仕方なく〳〵歸つて來て、今いふ名越の無縁寺へ墓守に入つたのさ。

仁八　（思入あつて、）あゝわしも娘をなくしたので、思ひやらるゝその親仁、嘸寐覺が惡からう。子は三界の首枷でござりまする。

ト奥よりお藤御新造の打扮にて出來りて、

お藤　おゝお虎が親父どの、ようござつたの。

仁八　これは〳〵御新造様、まことに申譯もござりませぬが、今に行方が知れませぬ、お間をおかゝせ申しまして、濟まぬことでござります。

お藤　いやも、間のかけるは仕方がない、どうぞ早く知れゝばよいが、嘸そなた心配であらう。

仁八　御推量下さりませ、今日で三日駈歩き、生業もいたさぬ上に、小遣錢をつかひまして、これから又始めますに、仕込みの元手で困ります、これといふのもお虎故、不孝な奴でござります。

トこれを聞きお藤思入あつて、懐の巾着より金を出して紙に包み、

お藤　それは嘸困るであらう、これは少しばかりぢやが、元手とやらにしたがよい。（ト遣る。）

仁八　これは〳〵有難うござりまするが、お間をおかゝせ申した上、これをお貰ひ申しましては。

お藤　少しばかりぢや、取つておいたがよい。

仁八　でも、勿體なうござります。

杢助　はて、御新造様から下さるお金、煙草でも買ふがよい。

仁八　え、有難うござります。

どん　ときにもうお暇にして、向う川岸をぐるりと廻らう。
勘六　又お貰ひ申したお金をあてに、どこぞで一ぱいやらうではないか。
杢助　えゝ如在ねえ、直に附込んだな。
仁八　あゝこなた衆へお禮がてら、一合づゝ買ひませう。
どん　酒と聞いてはこたへられぬ。
勘六　もうお暇しようではないか。
杢助　えゝ呑みたがる奴等だな。
お藤　これはしたり、失禮千萬な。
仁八　左樣なれば御新造さま。
お藤　知れたら直に知らして下され。
仁八　畏まりました。（ト三人門口へ出て、）
どん　迷兒の〳〵、
三人　お虎やアい。
杢助　えゝ、こゝで呼ばずとものことに。

三人 迷兒やアい。（ト鉦太鼓をたゝきながら花道へはひる。）

お藤 ほんにお虎もどこにゐやるか、親の苦勞をするにも構はず困つたやつではあるわいの。それはさうと今しがた、誰か來たではなかつたかいの。

李助 はい、伊勢屋の小次兵衞どのが、此間の五兩を書替へ十兩にしてくれと、賴んでまゐりました。

お藤 おゝさうであつたかいの。

李助 それから芝居者だといふ奴が四五人連でまゐりまして、連印でお借り申した五十兩、初日まで待つてくれと、斷りにまゐりました。

お藤 あゝよし〳〵、旦那樣へさう申さうわいの。

李助 いやも利息も持たずにしやあ〳〵と、お先煙草にわしが煙草を、いくら呑んだか知れませぬ。あんな奴が來ちやあ、一分買つてもたまらねえ。

お藤 そのやうなことを言ふものではない、無くばわしが買つてやらうわいの。

李助 そりやあ有難うござりますが、今度からもうお貸しなされますな、芝居者くらゐ狡い者はござりましねえ。

お藤 そんな憎まれ口を利かずと、居睡りでもせぬやうにしやいの。

李助　合點でございます。

ト好みの端唄通り神樂になり、花道よりおさよ毬栗の延びし鬘半纏がけ世話裝、清心――今は鬼あざみ清吉世話裝三尺帶、尻端折り、兩人とも頬冠りなして出來り、花道にて、

清吉　こうおさよ、手前が世話になつてゐた、白蓮の家は何處だ。
さよ　大きな聲をしなさんな、向ふだよ。
清吉　むゝ、いゝ家だな、高張附の玄關構へ、名目金の貸附所だな。
さよ　何だか知らねえが、大そう金があるよ。
清吉　それが何よりこつちの附目だ。
さよ　ほんに緣といふものはおつなものだの、死んだとばかり思ひきつて坊主にまでなつたわたしが、髮を延ばして死んだお前とかうして一つになるといふなあ、どうしたといふのだらう。
清吉　これがほんの腐れ緣だ、おれも手前故にやあ構を喰ひ、頭は段々延びて來るが、種はすつかり耗つてしまつた、其所からふつと氣が替り、惡いことは覺え易く僅一年經たねえ中に、肩書の附く身體になつた。朱に交はりやあ赤くなると、いつか手前も板の間かせぎやら、ゆすりやら、いゝ稼ぎ人になつたな。

さよ　こんなこともわたしの家ぢやあ、株のやうになつてゐたが、意氣地がねえからしなかつたが、お前がやれこれ勸めるから、こは〴〵ながらするやうなもの丶、然しほんの附燒刄、さぞ皆さんのお心ぢやあ止せばい丶にと思召すだらう、それを思ふと氣恥かしいよ。

清吉　そりやあおれだつて同じことが、ゆすりかたりや盗人は鼻が高いか眼が大きいか、凄みな所がなくちやあいけねえ、見るかげもねえけちな小野郎、それせえもまだ一つ竈、ほんの肚胸でやる仕事だ、手前もおれも緣あつてかう一つになつたからにやあ、互ひに力になり合つて、今年やあ一番稼がうぜ。

さよ　まあ手始めに向ふへ行つて、旦つくにぶツつかつて見よう。

清吉　おれも一緒に入らうか。

さよ　お前は門に待つてゐるねえ、わたしが先へしかけるから。

清吉　え丶、黑人ツぽくなつて來たな。

ト兩人本舞臺へ來る、この內お藤は行燈の傍で本を見てゐる、杢助は居睡りをしてゐる、おさよ清吉に囁き、門口から、

さよ　はい、お賴み申します〳〵。

お藤　これ杢助、御案内があるぞよ。

杢助　はい。(トびつくりして飛起き、)どうれ。

　　ト大きな聲をして目をこすりながら門口を明ける、おさよ腰を屈め辭儀をする、杢助見て、

手の内なら今日は出ねえ、明日が出日だから四つ前に來い。

さよ　いえ、お手の内ではございませぬ、旦那様か御新造樣にお目にかゝりたうございまする。

杢助　旦那様か御新造樣に逢ひたい、途方もないことを言ふ奴だ。手の内はない、通れ〳〵。

さよ　どうぞ、さうおつしやらずと。

杢助　えゝしつこい、通れといふに。(トおさよを突く、おさよ思入あつて、)

さよ　なんだね杢助どん、あんまり手荒くしておくれでないよ。

杢助　なに杢助どんだ、杢助どんもよくできた、乞食に近附があるものか。

さよ　ねえことがあるものか。(ト手拭を取る、杢助見てびつくりなし、)

杢助　や、おさよどのか。もし御新造樣、おさよどのがまゐりました〳〵。

お藤　なに、おさよが來やつた。(ト立上り、)おゝよくたづねて來てくれた。さあ〳〵、こつちへはひりやはひりや。

さよ　御新造様、まつぴら御免なされませ。

トおさよやさしく辭儀をしながら内へはひり、下手へみすぼらしく住ふ。

お藤　まあ、どうしやつた、案じきつてゐた、あれぎり居所が知れぬ故、常不斷旦那樣と噂ばかりしてゐたわいの。

さよ　有難うござります、旅へ出まして父さんにはぐれ、それから惡い人の手にかゝり、まことに難儀をいたしました。

お藤　おゝさうであつたか、道理こそ替り果てたるそなたの姿。

杢助　わしが見違へたのも無理ではあるまい。

お藤　さうしてあの折は身重であつたが、どこで身二つになりやつたぞいの。

さよ　箱根山にをります內、首尾よう小兒を產みましてござりますが、乳が細うござります故、里に遣はしてござりますわいな。

お藤　それは仕合せなことであつた。して生れたその子は。

さよ　はい、男の子でござります。

お藤　おゝそれは〳〵目出度いことぢや、そなたの親の西心どのが聞かれたなら嘸悅び、早う知らして

やりたいものぢやわいな。（トこれを聞き思入あつて、）
さよ　まだ父さんに逢ひませぬが、そんならこちらへ上りますか。
李助　この間から度々來なさる。
さよ　左樣でござりましたか、これも旅で別れたぎり故、どこに今はござんすやら、居所さへも存じませぬわいな。
李助　今では名越の無緣寺といふ、千人塚のある寺に墓守をしてゐなさるよ。
さよ　それは有難うござります、お蔭で居所が知れました。早速たづねてまゐりませう。
お藤　おゝ早うたづねて行くがよい、親の身では、どのやうに案じてゐるか知れぬわいの。
さよ　まことに考へて見まするると、不孝なことでござりまする。
お藤　まだまあ先も長い體、これから孝行にしやいの。
さよ　有難うござります。さうして旦那樣はお家でござりまするか。
お藤　おゝ、奥に樂寐をしてぢやわいの。
さよ　左樣なれば御新造樣、ちとお願ひがござりますが、お聞きなされては下さりませぬか。
お藤　何だなおさよ改まつてお願ひの何のと、姉妹分の杯をしたからは、そなたは妹わしは姉、遠慮

なく言やいの。

さよ　其のお願ひと申しまするは、鎌倉へまゐりましても、頼ります所もござりませねば、どうぞお邪魔でもわたくしを、臺所の隅へなりと、お置きなされて下さりませ。

お藤　おゝそれは何より易いこと、親父どのゝゐる所とてお寺の内のことなれば、女を置くわけにも行くまい、こちをそなたの家と思ひ、心置なくゐるがよい。

さよ　御親切に有難うござります。

お藤　然し以前が以前故、ちとわたしの氣が揉めるわいの、ほゝゝゝ。

さよ　御新造様の御常談ばかり。いえまだその上に、もう一人お願ひ申したうござりまする。

お藤　もう一人とは連のお人か。

さよ　はい、左様でござります。

お藤　そりやどこにゐなさるのぢや。

さよ　表にをりまする。

お藤　何故こちらへお連れ申さぬのぢや。杢助お呼び申して來や。

杢助　はい、畏まりました。（ト門口へ出て、清吉を見て）おさよどのゝお連はお前かえ。

清吉　あい、わしでござります。
李助　はて、わりい風な。さあ、こつちへ入らつしやれ。
清吉　御免なせえ。
　　ト手拭を取りて清吉内へはひる、お藤見てびつくりし氣味の惡き思入。
お藤　そんならお前が。
清吉　へい、おさよが連の者でござります。
お藤　李助、旦那樣をお呼び申してくりや。
李助　はい、畏まりました。（ト立ちかゝる、この時奥にて、）
白蓮　いや、來るにやあ及ばぬ、今そこへ行かうよ。
　　ト奥より白蓮黑のきめ頭巾、被布、釣瓶形の煙草盆、煙管の入りし煙草壺を持ち出來り、
　　おゝおさよ來たか、久しぶりであつたな。
さよ　これは〳〵旦那樣、いつもながら御機嫌よろしう、お目出度うござりまする。
白蓮　あい〳〵。（ト言ひながらよき所へ住ひて、）おぬしも達者で仕合せだ。
さよ　有難うござりまする、唯今御新造樣に承はりますれば、又々親父が上りまして御厄介になります

さうでござりまする。

白蓮　なんの、厄介といふほどのことでもない。

お藤　もし旦那、今おさよがまゐりまして、此家へおいてくれと申します故、泊めてやらうと思ひましたら、あのやうな連のお方があるさうでござりますが、どういたしませうね。

杢助　喰ひつぶしは少ねえがいゝ、飯を炊くおれが難儀だ。

白蓮　やかましい、口出しをするな。（ト清吉に向ひ思入あつて、）あゝそんならお前がおさよの連かえ。

清吉　へゝえ、左様ならあなたが旦那様でござりますか、これは初めましてお目にかゝります、どうぞお心易うお願ひ申します。

白蓮　これおさよ、このお方は親戚の衆か。

さよ　はい、これはわたしの、（ト思入あつて、）亭主でござります。

白蓮　え、亭主だと。（ト思入。）

お藤　そんならおさよは、夫を持ちしか。

杢助　あゝ似た者は夫婦とて、坊主の亭主に坊主の女房。

白蓮　何にしろ、それはまあ身が堅まつていゝことだ。

清吉　御迷惑でも旦那樣、女房の緣でわたくしも、どうぞおいて下さりませ。

白蓮　そりやあ品によつたらば、おいて上げまいものでもないが、してこなさんの名は何と。

　　トこれにて清吉思入あつて、

清吉　御新造樣とこのさよと姉妹分の上からは、旦那樣とわたくしも言はゞ兄弟、弟故包み隱さず申しますが、（ト左りの腕を捲り、鬼薊の彫つてあるを見せて、）御覽の通りこの腕に鬼薊が彫つてあるので、鬼薊とも言ひますりやあ、根が淸心といつた坊主故、鬼坊主とも渾名をいふ、淸吉といふ坊主がへりさ。（トこれを聞き皆々ぎよつと思入。）

白蓮　あそんならおさよが情人であつた、淸心といふ御出家が、今名の高い鬼薊淸吉どのであつたるか。

清吉　左樣でござります。

お藤　さうしてお前の生業は。

清吉　なに、生業かえ、根が遊び人でござりますから、これが稼業といふこともござりませぬ。先づゆすりかたりぶつたくり、俗に言やあ盜人さ、習ふよりやあ慣れろとやらで、わつちにつれて今ぢやあおさよも、板の間ぐらゐは稼ぎやす。（ト此邊より段々凄みに言ふ。）

さよ　あれさ、そんなことを姉さんの前で、案じなさるからお言ひでないよ。

清吉　ほんに、いゝ妹をお持ちなすつて、お仕合せなことだ。
李助　そんなら二人は泥坊か。（ト大きな聲をする。）
清吉　えゝ、大きな聲をするなえ、盗人は言はねえでも知れた事だ、惡い人にでも聞かれて見ろ、直におれに繩がかゝらあ。さうなる日にはこゝは鋪、手前達まで引合だぞ。
李助　それだといつて泥坊だから、
白蓮　これ李助、又しても入らぬ口出し、默つてゐやれ。
李助　へゝい。

ト李助清吉に眼を附ける、おさよ思入あつて、

さよ　姉さん、いつぷくおくんなせえな。
お藤　あゝ、煙管がこゝらに。（トあたりを搜す思入。）
さよ　無けりやあ旦那お貸しなせえ。
白蓮　さあ、喫みやれ。（ト煙管の入りし煙草壺を出す。おさよそれを喫みながら。）
さよ　毎晩喫んだ旦那の煙管、久しぶりでの御馳走に、わたしやあ往時を思ひ出すよ。（ト吸附けて出し、）旦那、いつぷく上げようかえ。

清吉　これ、亭主の前で吸附煙草、ふざけたことをしやあがるな。

さよ　七兩二分取つて上げらあ、默つておいでよ。

清吉　どうして／＼、旦那にやあ御恩になつた手前の身體、日外ア御禮を申さうと思ひ思つてやつと來やした。前後見ずの無分別に此女を連れてどんぶりと、稻瀨川へ身を投げたその時旦那の網へかかり、助かつたのが此女の仕合せ、直に廓の方を附け、親父の世話までして下すつたその親切に引替へて、初瀨小路の妾宅で毎晩々々伽をさして、腹さん／＼なぐさんだ揚句の果がお爲ごかしに、死んだ男の菩提を訪へと姉妹分の氣休めに、僅な路用を手切にくれ、坊主にして突出すたあ隨分酷ひ仕方だね、きつとお禮は申します。

白蓮　（思入あつて、）いや、その禮は受難い、おさよが何と言つたか知らぬが、こなたの菩提を弔ふ爲め剃髮したいとおれへの賴み、死んだ男に操を立て、あゝ女郎には感心なと思つた故に望みをかなへ、高金出して請出したその身に暇をやつたのは、そつちは何と思ふか知らぬが、わしは隨分男の積りだ。

さよ　なるほど、口は調法なものだ。さう聞くと尤ものやうだよ。

お藤　（これを聞きむつとして、）これおさよ、口は調法とは何のことだ、剃髮ばかりか姉妹の杯したもそつ

ちから親父どのゝ頼み故、わたしが妹にしてやつたを、よもや忘れはせまいがの。

杢助　おゝそれ〳〵、その時宵に御新造から煙草の錢と一分貰ひ、又こなたから形見と言つて二分貰つたは忘れはせぬ。しめて三分今もつて褌に包んで持つてゐる、嘘なら出して見せようか。

トこれに構はず、おさよお藤に向つて、

さよ　もし姉さん、よくそんなことをお言ひだね、非業に死んだ男の爲め坊主になつて菩提を訪へと、往生づくめで剃らしてしまひ、妹分にしてやるから困つた時はいつでも來いと、情ごかしに突出したも元はと言やあお前の嫉妬、お蔭でそれからぐれ出して、どんな苦勞をしたか知れねえ、なんぼわたしがお心好しでも、さう言ひかけをなすつちやあ、姉さんとは言はさないよ。

お藤　えゝまあそなたはいつの間に、そんな心になつたのぢや。何でわたしがそなたに剃髮、すゝめさせよう譯がない。

さよ　なに、ねえことがあるものか、嫉妬故にさせたのだ。

お藤　假令何と言はうとも、わたしやそなたに。

さよ　いえ、お前だ〳〵、お前に坊主にされたのだよ。（ト大きな聲をする。）

清吉　えゝ、これやかましい、靜にしねえか。ゆすりかたりのやうで見つともねえ、大きな聲をするなえ。

白蓮　お藤、おぬしも默つてゐやれ。
お藤　それぢやというて。
白蓮　はて、言ふだけ無駄だわえ。
清吉　もし姉さん、堪忍してやつておくんなせえ、つまらねえことを言ひ合ふのも姉妹だと思ふからの心安でござります。これから何年一緒にゐて、お世話になるか知れねえ身體。然し唯、喰ひつぶしてもゐられめえ、お立關番でも勤めやせう。
さよ　ほんに、こんな頭にされた此のうめくさにやあ、もし旦那可愛がつて貰はにやあ合はねえよ。（ト白蓮の顏を見て思入。）なんだなお前眞面目な顏をして、今でこそこんな裝に、愛想が盡きたか知れねえが、これでもお妾でゐた時は、お伽をした仲ぢやあねえかな、そんな怖い顏をせずと、笑ひ顏をしてお見せな。
　　ト肩にかけし手拭を取つて白蓮の顏を打つ、お藤むつとして、
お藤　あれまあ、あんなことを。（ト立ちかゝるを、）
杢助　あもし、默つておいでなされませ。（ト留める。）
白蓮　むゝ、そりやあ以前の恩により、二人とも此の家においてやるまいものでもないが、御室の御所

の貸付所、見る通りの玄關構へ、どうれといつて取次に毬栗頭で出られもしまい、いつたん約束
したからは、厭とは言はぬがその頭が、人並になつたなら、尋ねてござれおいてやらうわ。

清吉　いゝへん氣の長いことを言ひねえな、明日が日知れねえ二人が身の上、こゝに居候にゐてえからつて、
この髪の延びるまで、まご〳〵してゐられるものか。

さよ　さういふ身性のわたし等故、家へおくのが怖いのか、そんなに恐れることはねえ、姉妹分になつ
たからは、もしもの時は口一つで連れて行かうと行くめえと、そりやあ此方の了簡さ、氣まづい
ことをしなさりやあ、いやでも一緒に抱込むよ。

清吉　これ〳〵一緒に連れて行くの抱込むのと、そんな野暮なことを言ふなえ。今時は流行らねえ。行
きやあ隱居と立てられて、見舞品の初穗を喰ふ株だが、脫れるだけは行きたくねえ、これが地金
だ案じずと、家へおいておくんなせえ。それともこんな頭故玄關附にやあ不釣合なら、延びる
まで旅へ行くから、路用を貸しておくんなせえ。

ト清吉思入、白蓮こなしあつて、

白蓮　むゝ、その頭の延びるまで旅へ行くとあるならば、澤山のことは出來ないが草鞋錢ぐらゐなら、
貸すといふのも面倒故、熨斗を附けて祝ひませう。

さよ　それでこそ同胞の誼、澤山祝つておくんなせえ。
白蓮　然し、當つて碎けろだ、いくらほしいかその額を。
淸吉　さうさ、これから何處といふ當もなけりやあ、草鞋錢も端金で貰つちやあ足らねえから、熨斗を附けて百兩くんねえ。
お藤
李助　えゝ、（トびつくりする。）
白蓮　むゝ、たつた百兩でいゝのか。
淸吉　え。
白蓮　易いことだ。お藤、手箱を持つて來やれ。
お藤　はい。
ト戸棚より手箱を持つて來る、白蓮錠前を明け内より百兩包みを出し、
白蓮　さあ、望みの通り百兩。
ト淸吉の前へ出す、淸吉びつくりし、おさよと顏を見合せ、
淸吉　こりやあ思ひがけねえ、（ト金を取る。）
李助　やあ、草鞋錢といふのは百兩か、ても高い草鞋だな、煙草の錢に一分貰つたを、大そうなことゝ

思つたら、いやはや魂消たことだなあ。

　　　トこの内清吉とおさよはよく呉れたといふ思入、清吉ふと百兩包の封印を見て合點の行かぬ思入。

清吉　や、この包みの封印は。

白蓮　えゝ。（トぎつくり思入。）

清吉　こりやあ極樂寺の印形だが、此の金は何處から出やしたね。

白蓮　さあ、それは。

清吉　こいつあ話が面白くなつて來たわえ。（ト思入あつて、）此の金があるからにやあ、百兩ばかりの目くされ金、草鞋錢にやあ入らねえわえ。（ト白蓮の前へ投出す。）

白蓮　して何ほど欲しといふのだ。

清吉　三千兩貰ひてえ。

白蓮　なんと。

清吉　まだこのおれが極樂寺で役僧をしてゐた時分、覆面頭巾に拔身で押込み、賴朝公から奉納の祠堂金の三千兩盜んだ奴の行方が知れず、その疑ひでおれが縛られ、つひにやあ女犯が露はれて谷七郷を構への追放、いはゞ敵のその盜人、今日が日までも知れねえで惡事に運のいゝ奴と思つてゐる

たが知れねえ筈だ、定紋附の高張に玄關構への貸附所、御室の御所の家來分、帶刀をする旦那衆が大泥坊とは、御詮議なさる御代官でも御存じあるめえ。

ト思入にて言ふ、白蓮ぢつと思入。

さよ　おや〳〵、それぢやあ旦那が三千兩極樂寺で盜んだのかえ、人は見かけに寄らねえものだ、道理こそ金の遣ひぶりがいゝと思つた。然しこれから兄弟なり、又仲間なりわたしらも、氣がおけなくつてとんだいゝ、男は男夜働き女は女相應に、姉さんこれから連立つて、板の間稼ぎに歩かうね。(ト思入。この內杢助腹の立つ思入にて、)

杢助　うぬこの坊主返りめ、言はしておけばさま〴〵なことを、何處の國にか旦那樣を、三千兩取つた泥坊なぞと、何を證據にぬかすのだ。

淸吉　やかましいや、椋鳥め、證據のねえことをいふものか。

杢助　して〳〵證據は何が證據だ。

淸吉　證據といふは外でもねえ、賴朝公から納つた祠堂金の三千兩、封印捺したはおれが役、知らねえ者が見た日にやあぶつこぬきの三文判、字性も朧に分からねえが、寺にゐたゞけ鮮に見えすく證據の三千兩、この封印があつたからにやあ目ぐしは拔けねえ大泥坊、睨んだ事ァ五分でもすかね

え、僅七分か一寸のこの封印がたしかな證據。印形捺して請合はう。

トこれを聞き、杢助扨はといふ思入あつて、わざと立ちかゝり、

杢助　まだ〳〵そんな僞りごと、どこの判やら知れぬものを、言ひかけをして盗人呼はり、出る所へ出れば分かることだ。うぬ、ふん縛つて連れて行くぞ。

清吉　面白え、縛るなら縛つて見ろ、おれを突出しやあ夫婦は元より汝等まで、珠數繋ぎにして引いて行くぞ。

お藤　てもまあ、あんな憎いこと。

杢助　うぬ、どうしてくれう。（ト立ちかゝるを白蓮留めて、）

白蓮　これ〳〵杢助、手前達の手に合ふやうな、そんな安い人ではない、然し何と言はうとも此方に覺えがないことなれば、惡い事も恐ろしい事もない、手前達は構はずと奥へ行つてくりやれ。

杢助　いえ〳〵行きませぬ、旦那一人おいては、どんなことをしようもしれぬ。

白蓮　はて、惡い人は人だけに又分かりのいゝものだ、案じずと行けよ。

杢助　それだといつて。（ト言ふを白蓮留めて、）

白蓮　これ〳〵お藤、おぬしもこゝで話を聞くと、却つて案じられるから、杢助と一緒に奥へ行つて、

こゝへ來ないやうに留めておいてくれ。
お藤　でも、あなた一人こゝへおいては。
白蓮　ちつとおれが了簡があるから、案じずと行つてくれ。
お藤　どうやら、それでも。
白蓮　はて、行けといつたら行かねえのか。（ト白蓮きつと言ふに、兩人是非なく、）
お藤　杢助來や。
杢助　はい、（ト清吉を見て、）いけ太え奴だなあ。
　ト唄になり杢助白蓮と清吉へ眼を附け、思入あつてお藤と共に奥へはひる。時の鐘。白蓮立上り暖簾口より奥をとつくと見て上下へ思入あつて、眞中へ住ひ、
白蓮　清吉、惡いことはしねえものだなあ。
清吉　なんと。
白蓮　いかにも手前が推量の通り、頼朝公から極樂寺へ、佛のための祠堂金三千兩納つたとちらりと聞いた地獄耳、その晩しかけておれが盜んだ、人の物は我物と濡手で安房から上總下總、常陸をかけて寺々へ仕事に入つて肩名に呼ばれ、而も大寺正兵衛といふ、おれも以前は盜人だ。

ト白蓮頭巾を取り、五十日鬘になる、清吉おさよ思入。

清吉　むゝ、そんならお前が噂に聞いた、大寺正兵衛といふ盗人かえ。

さよ　ほんにお前が泥坊とは、わたしやあさつぱり知らなんだよ。

白蓮　そりやあ素人にやあ話せねえが、盗人一代一晩に三千兩はおろかなこと、千兩でもかためちやあめつたに盗めるものぢやあねえ、そこでこゝが止時と仲間の者にも分けてやり、足を洗つてその金から思ひ附いての貸附會所、五兩十兩貸す金も難儀な者にやあ利息も取らず、月限なしにしておく故、佛々と人にも言はれ、今ぢやあ道に落ちたものせえ見向もしねえ堅氣になり、誰一人疑ふものなく、枕を高く寐てゐたが天道樣が許さねえ、うつかり出した先刻の封金、外の者なら不知をきり、どこがどこまで言ひ張るが、見咎められたは名にしおふ今で名うての鬼薊、脱れぬこと故明したが譬にもいふ壁に耳、もう浮々とこの土地におれも足は留められねえ、旅へ出かけて元の盗人、かう打ちまけて言ふからにやあ隱しやあしねえが三千兩も、手元にあるは二百か三百、殘らず手前にやらうから、娑婆にゐる內一日でも旨えものでも澤山喰ひ、してえことをするがいい、必ず身にやあ附かねえから、堅氣にならうと思ふなら、この正兵衛がいゝ手本だ。

ト手箱より二百兩出し、以前の金と一つにして清吉の前へ出す、清吉、おさよ顏見合せて思入。

さあ、此の金を持つて歸つてくれ、それともおれがどめてゞもおくと思つて不承知なら、手前もおれもこれまでだ、手前が抱くかおれが抱くか、一緒に入つて末始終板附に並んでかゝらう。

ト思入にて言ふ、兩人は感心の思入にて、

清吉　おさよ聞いたか、がうぎなものだな、遣ひ殘りの三百兩殘らず出して持つて行けとは、さりとはいゝ膽ッ玉だ、これから見るとけちな根性、おさよが緣から置いてくれと厭がらせの揚句の果、百と言つたら半分か少くつても二十や三十、取れる仕事と見込んで來たが、端金を當にして强請に來たおれが腹とは、これほどにも違ふものか、あゝ面目ねえ〳〵。

さよ　お前よりわたしが倘正兵衞さんにやあ面目ない、何にしろ此の金も素人なら知らねえこと、いはば仲間の上からは、唯貰つちやあ歸られめえよ。

清吉　おゝさうだ〳〵違えねえ、今聞きやあこれから又旅へ出るといひなさりやあ、先だつものは路用の金、志しは貰ひました、（ト金をいたゞき、）金はお前に返します。（ト白蓮の前へ出す。）

白蓮　その遠慮にやあ及ばねえ、旅をするのに二百兩の三百兩のと邪魔な路銀を持たずとも、行く先々で仕事をすりやあ、唐天竺まで行かれる身體、こりやあそつちへ持つて行つてくれ。

清吉　そりやあわつちだつて同じこと、一人と違つて夫婦稼ぎ、決して困りやあしねえから、こりやあ

そつちへ納めてくんねえ。

白蓮　さうでもあらうがおれも正兵衛、一旦出したこの金を、どう引込ませられるものか。

清吉　お前もさうならわつちも清吉、この金は貰へねえ。

白蓮　はて、さう言はずと、

清吉　いや〳〵こりやあ斷りだ。

ト兩人金を突合ふ、おさよ思入あつて、

さよ　爭ふものは中よりと、こりやあわたしが裁いて上げよう。正兵衛さんもあゝ云ひ出しちやあ、所詮止さうと云ひなさるめえ、これを貰ふとは言はねえのは知れてゐる故、こゝはわたしが中を取つて、一旦貰ふと約束をした百兩を草鞋錢に此方へ貰ひ、殘りをお返し申さうぢやあねえか。

白蓮　むゝ流石はおさよいゝ裁きだ、兎やかう言ふも面倒だから、二百兩はおれが取るから恩には被せねえ百兩は、淸くそつちへ受けてくりやれ。(ト二百兩を取り百兩を清吉の前へ出す。)

清吉　折角お前の志し無足にするも濟まねえから、それぢやあこりやあ貰ひやす。(ト百兩を取る。)

さよ　これで互ひに心も濟み、中へ立つたわたしが嬉しさ。

清吉　然し、百兩氣の毒だ。

白蓮　まだそんなことを言ふか。おゝ入物がなきやあ胴巻を遣らうか。

ト地袋戸棚から絹の胴巻を出す、清吉思入あつて、

清吉　さうさ、胴巻にも及ばねえが、何ぞ入物がほしいものだ。

さよ　お前腹帯にしてゐる、守袋の中へ入れねえな。

清吉　ほんに、こいつあ三つ兒に淺瀬だ。（ト懐より鬱金木綿の守袋を出す。）

さよ　いゝことを教へてやるに、負けをしみなことばかり。

白蓮　なるほど、こりやあいゝ思ひ附だ。

清吉　えゝ、べらぼうに詰つてゐる。（ト中より守りをふるひながら出し。舞臺へ守りばつと散る。）

さよ　えゝ勿體ねえ、お守りをこぼした。

トおさよ拾ふ、清吉は守袋の中へ金を入れる、白蓮守りを見て、

白蓮　清吉、手前は法華宗か。

清吉　親の代から法華さ。

白蓮　道理で經宗の守りばかりだ。中山の劍難除に、駒木の腹帯、柴又の一粒御符、下總のものが多いな。

清吉　あい、わつちが生れは行徳で鹽濱の漁夫の悴、親讓りの堅法華だが、いゝおつなもので信心も生れ故

鄕が懷しく、あの界隈のが多いのさ。

白蓮　（思入あつて。）むう、それぢやあ生れは行德か。

清吉　七歲の年に兩親に別れ、鎌倉にゐる伯父の世話で菩提の爲めに坊主にされ、極樂寺の弟子になつたが、これでもなつた一しきりやあ、名僧知識になる心だつた。

さよ　ほんにこれまで正兵衞さんと、一つにゐたこともあつたが、お前の生れは何處だやら。

白蓮　おれもやつぱり船橋生れで、親父は漁夫が稼業だつた。

清吉　はて似たこともあるものだ、こんなことから印籠と守袋を證據にして、兄弟の名乘りをするゝなあ、狂言にあるこつた。

白蓮　同じ行德とありやあなつかしいが、手前の親父は何といつた。

清吉　これ／＼、こゝにありやす。（ト取散せし守りの中より臍の緒書を取出し、開いて、）今はむかしの臍の緒書、下總國行德漁夫清次倅清吉。

白蓮　（これを聞き思入あつて、）それぢやあ親父に三日月の、額に疵はなかつたか。

清吉　あゝありやした／＼、大和田の宿と喧嘩の時、額に受けたといふことだ。

白蓮　そんなら手前はおれが弟だ。

淸吉
さよ　え、(ト兩人びつくりして、)なんと言ひなさるえ。

白蓮　あゝ思ひ出しやあ二十年前、而も手前が三歲の時神隱しになつた、おりやあ惣領、(ト思入あつて、)臍の緖書を出すのも面倒。淸太郞といつたはおれがことだ。

淸吉　そんならお袋の話に聞いた、お前はおれが兄貴かえ。

さよ　思ひがけねえことだねえ。

白蓮　假にもおさよと兄弟の緣を結んだこのおれが、やつぱり實の兄弟とは。

淸吉　こいつあ兄貴、芝居のやうだ。(ト三人よろしく思入。)

白蓮　あゝ考へて見ると、浮世ほど分からねえものはねえ、二十年から別れてゐて不思議に邂り逢つたのも、その弟が二世までと言交してるこのおさよを、圍つておいたが緣のはし。

さよ　亭主に繫がる兄とも知らず、圍はれたのを種にして、置いてくれろと厭がらせ、强請り取つたる金包み。

淸吉　その百兩の封印から、極樂寺で盜んだる三千兩のもくが割れ、

白蓮　包み隱した盜人を明かせばあかの他人でなく、胤腹一つのおれが弟。

さよ　それ故こゝに兄さんの居られぬやうになつたのは、いはゞ訴人も同然なれど、

清吉　今更言つても仕方がねえ、かういふ羽目になるのも時節、
白蓮　思へば親父が殺生の、報いか知らぬが二人とも、
さよ　どうで始終は天の網、
清吉　どちらが先へ切られるか。
白蓮　殘つた者が切首へ、
さよ　手向ける水も缺茶碗、
清吉　罅の入つたる身體故、
白蓮　今日逢つたのが形見にて、
さよ　娑婆の名殘にならうやら、
清吉　互ひに知れねえ危ふい身の上、
白蓮　結局の終ひは刀の銹、
さよ　疊の上ぢやあ、
清吉　兄貴、
白蓮　弟、

二人　あゝ死なれねえなあ。

ト三人よろしく思入。ばた／＼になり、奥より以前のお藤走り出來りて、

お藤　もし旦那どの、今杢助が湯へ行くと裏口から出て行きます故、拔けたであらうと留めたれど、振拂つて行つた樣子、どうも合點が行きませぬわいな。

白蓮　むゝ常から馬鹿げたその内に、見所のある彼奴の了簡、裏からこつそり拔けて出たは、もしや彼奴は廻し者か。

お藤　えゝ。

淸吉　さう聞く上は油斷がならねえ、いつぞやおれが構への時言渡しの役人が、瓜を二つの彼奴が面付、こいつあ早くふけ支度を。

白蓮　いや、おれよりやあ足弱連れ、手前ふけてくりやれ。

さよ　いえ／＼、かうなる上からは、どう見のがして行かれよう。

淸吉　今にも捕手が來たならば、命限りに働いて、かなはぬ時あ兄弟一緒に。

白蓮　そりやあ手前惡い了簡、おれよりやあ先が長い、ふけろと云つたら早くふけろ。

さよ　まあ、それよりやあ姉さんを。（トこの内お藤思入あつて）

お藤　いえ〳〵、わたしやお前方より先へこの場を。（ト行きかける。）

白蓮　こりや女房、何處へ行く。

お藤　奥で聞いた二人が身の上、この通りを代官所へ。（ト行くを白蓮留めて、）

白蓮　むゝ、扨は此身の訴人をする氣か。

お藤　あい、夫婦一つでない證據に。

ト振拂つて行くを清吉留める、白蓮傍の一腰を取り直に拔いて、

白蓮　うぬ、人でなしめ。（トお藤を斬下げる、これにてどうとなる。）

さよ　や、こりや姉さんを、

清吉　ばらしたのか。

白蓮　生けておかれず、ばらすのだ。

トお藤這ひ寄り苦しき思入にて、

お藤　さあ、足手まといのわたしを殺さば、お前は捕手の來ぬうちに。

清吉　やゝ、そんなら姉御は切られる覺悟か。

お藤　一緒に行けば道の邪魔、後に殘らば繩目を受け、お前の詮議にどのやうな憂目に合ふも知れぬ故、

訴人というて駈出したは手にかゝつて死ぬ覺悟、わたしがなければ身一つに、心殘りもござんすまい、少しも早う落延びて、命全う隱れ住み、逆ながら命日にはお前の手づから水一つ、どうぞ手向けて下さんせ、あの世で待つてをりますわいなあ。

白蓮　おゝ出來した女房、よくおれが手にかゝつて死んでくれた、禮は冥土で逢つて言ふぞよ。

さよ　思へば果敢ない姉さんの、この最期をば女の鑑。

淸吉　あゝ素人にやあいゝ覺悟だ。

お藤　さあ、苦痛をするだけ思ひの種、少しも早う。

白蓮　言ふにや及ぶ、（トお藤の胸先を取り、）南無阿彌陀佛。

ト胸を突く、お藤手を合せ落入る、おさよ見てハアと泣伏す、と花道の揚幕にてドン〳〵と捕物の鳴物になる。

淸吉　や、あの物音は、

白蓮　たしかに捕手だ。（トお藤を放す、おさよ介抱をなす。血を拭ひながら、）さあ、手前達も支度をしろ。

淸吉　合點だ。（ト門口へ掛金をかける、おさよ以前の二百兩を取つて、）

さよ　兄さん、さつきの金が。

白蓮　お、邪魔ながら持つて行かうか。

ト以前の胴卷へ入れ懷へ入れる、この內花道より杢助の寺澤塔十郎野袴打割、大小、襷鉢卷、草鞋、十手をさして先に立ち、後より三階黑四天の捕手六人一、二、三、四、五、六、附きて出來り、門口にて內を窺ひ、捕手の三、四の二人は下手へはひる。

おさよ、火鉢をこゝへ。

さよ　あい。

ト手焙りの火鉢を持つて來る、白蓮手箱の內の證文を火鉢に入れる、これにてぱつと燃える。

淸吉　や、火に打ちこんだ書物は。

白蓮　これこそ貸した金證文、後に殘らば人の難儀。

淸吉　さすがは兄貴。

トこの內後より廻りし捕手の三、四の兩人、白蓮、淸吉を目がけて、

兩人　捕つた。

トかゝるを身を躱しちよつと立廻り、兩人を一時に當て、白蓮淸吉に囁く。

淸吉　これから二人が落合ふ所は、

白蓮　小袋坂の地藏堂。
　　ト表へ聞えるやうに言ふ、塔十郎思入。白蓮小聲にて、
さよ　そんなら兄さん。
　　裏からこつそり。
　　ト捕手心附きて「捕つた」と兩人にかゝるを引附け、
白蓮　ちつとも早く。
淸吉　合點だ。
　　ト捕手を投げつけ、おさよを連れ奧へはひる。この時門口の戸をばら〳〵と毀し、塔十郎先に捕手內に入り白蓮を取巻き、
捕手　動くな。（ト白蓮塔十郎を見て、）
白蓮　むゝ、扨は下男の杢助は合點行かずと思ひしが、廻し者にてあつたるか。
塔十　いかにも、汝が身の素性不分明故下男となり、此家に入込む某は、盜賊詮議の役目を蒙むる、寺澤塔十郎といふものなり、最早脫れぬ汝が悪事、さあ尋常に繩にかゝれ。
白蓮　斯く露はれる上からは、幾人切つても兇狀はたつた一つのおれが命、片ッぱしから覺悟なせ。

塔十　何をこしやくな、それ、搦めとれ。

捕手　はツ。捕つた。

トドン〳〵にて白蓮へ十手にて打つてかゝる、白蓮一腰を拔き切拂ひ、烈しき立廻りになり、トゞ捕手奥へ逃込む、塔十郎鎖を持ち白蓮へ打ちかけ、兩人鎖と刀にて面白き立廻りあつて、兩人よき見得。

これにてこの道具廻る。

（裏手の場）——本舞臺三間の間眞中に一間中窓、左右窓下とも網代のしたみ、上下建仁寺垣、梅松の立木、總て奥座敷裏手の體。こゝに淸吉匕首を拔き、おさよを後に圍ひ立身にて、左右には捕手取卷きゐる、ドン〳〵にて道具留る、と捕手十手にて打つてかゝる、淸吉めつた切りに切りちらして立廻り、おさよは竹箒にて捕手の顏を突く。よきほどにばた〳〵になり、上手より白蓮拔身を持ちて出來り、この中へはひり切りちらす。これにて捕手上下へ逃げてはひる。三人顏を見合せて。

淸吉　兄貴か。

白蓮　弟、首尾よくいつた。（ト兩人血を拭ひ鞘へをさめる。）

さよ　そんならこれから、

白蓮　道を違へて、

清吉　合點だ。

ト此の時捕手兩人白蓮淸吉にうぬとかゝるを立廻つて、いゝどんとあて淸吉おさよはつか〳〵と花道へ行き、白蓮は東の假花道へ行く、この時正面の中窓を打り破り、塔十郎半身出し、

塔十　取逃がしたか。

白蓮　えい。

淸吉

ト石を取つて打附ける、塔十郎ちよつと身を引くと、この石あてられたる捕手に當り、一時に轉るを木の頭。

この間に、さうだ。

ト早めたる合方、時の鐘の送りにて双方花道へ出る、塔十郎窓から見送る。この仕組よろしく、

ひやうし幕

四幕目

名越無緣寺の場

同表門捕物の場

〔役名――鬼あざみ清吉、大寺正兵衞、蔭山繁之丞、墓守西心、無縁寺の穴掘鋤藏、夜蕎麥賣り仁八、船頭三次、湯灌場買どら市、合長屋どん七、同かん八、正兵衞手下。十六夜おさよ。下女おとら、其他。〕

〔無縁寺墓場の場〕――本舞臺三間の間上の方一間の湯灌場、正面は墓場入口の木戸、左右黒塀下の方丸井戸、所々に石塔だいぶあり、よき所に柳の立木、總て名越無縁寺墓場の體。こゝに穴掘鋤藏寺男の打扮にてをり、これを夜蕎麥賣仁八、合長屋のどん七、勘六引附けゐる、これな下女お虎留めてゐる、この見得禪の勤にて幕開く。

鋤藏　これ〳〵、こなた衆はそれを捉へて、どうするのだ。

仁八　どうするものか、勾引だから、代官所へ連れて行くのだ。

どん勘六　歩びやがれ。

お虎　これ父さん、腹の立つのも尤もだが、〽どうぞ許して下さんせと、

鋤藏　〽手を合せてぞ頼みける。

仁八　いや〳〵いくら拜んでも堪忍ならねえ、どこの國にか穴掘のくせに、人の娘を引拂ひ、湯灌場へ匿しておき疵物にするといふがあるものか、代官所へ連れて行かねばならぬ。

どん　これ〳〵こなたのお蔭ぢやあ、長家の者も此間から、幾日暇をつぶすか知れねえ。

勘六　この返報にやあ代官所へ勾引と訴へて、暗い所へやらにやあならねえ。

兩人　さあ歩びやあがれ〳〵。

鋤藏　あこれ〳〵二人の衆待つてくれ、〽これが連出したといふ譯ではなし、わしが義太夫に惚れこんで駈込んで來たこのお虎、それをとらへて勾引とは聞えませぬとぞ歎きける。（ト淨瑠璃を語る。）

どん　えゝ、何ぞといふとへゝほ淨瑠璃、聞きたくもねえわえ。

勘六　これに又惚れたといふは、お虎もよつぽど物好だ。

お虎　なに物好なことがあるものだ、そりやあもう淨瑠璃を語るものは、〽太夫を初め素人にも上手な者はいくらもあれど、大がい節が同じやう、この鋤藏どのゝ淨瑠璃は、お寺に居たゞけお經に似て三味線よりも銅鑼鐃鉢、磬や木魚によく合つて、類のない淨瑠璃故惚れたが無理ではあるまいと、親の頭を押へけり。

仁八　えゝ汝までが同じやうに、出たらめ節のその淨瑠璃、親を馬鹿にしをるのだ、もう了簡がならぬわえ。

鋤藏　〽もう了簡がと熱くなり、おこる親父が禿頭、

お虎　〽藥罐の煮え立つ如くなり。

仁八　まだそんなことをぬかしをるか。
どん　さあ、代官所へ、
三人　歩びやあがれ〳〵。

ト引立にかゝろ、葬禮の鳴物になり、花道より船頭三次尻端折にて先に立ち、後より單衣をかけし早桶を、正兵衞の手下一、二草履にて擔ぎ、この後よりどら市湯灌場買の裝にて鐵砲笊を擔ぎ附添ひ出來り、直に本舞臺へ來り、この中へはひり、

三次　これさ〳〵、何だか知らねえが、間違ひなら了簡しねえ。
手一　腹も立たうがお寺のことだ。
手に　佛に免じて往生しねえ。
三人　いや〳〵了簡ならねえ〳〵。
鋤藏　〽了簡ならずばどうなりとも、打ちたゝかれる身の覺悟、
どら　これさ〳〵鋤藏どの、この衆が留めてゐるのに、まあ待たつしやい〳〵。
鋤藏　おゝ、こなたは湯灌場買のどら市どのか。
三次　どういふ譯か知らねえが、わつちもこゝへ來合したからにやあ、默つちやあるられねえ。

お虎　御親切は嬉しいが、言うても聞かぬあの親父、うつちやつておいて下さんせ。

三次　（顏を見て、）おゝさういふお前はお虎さんか。

手一　ほんに頭の所にゐた。

三次　あゝこれ、頭ぢやあねえ貸附所にゐたのだ。さうしてこりやあどういふ譯だな。

どん　もし、この間違へはお虎どんが穴掘といゝ仲になつてゐて、父さんを置去りにして逃げて來たものだから、それでやかましく言ふのだ。

三次　それぢやあ父さんがおこるのも尤もな譯だ。

どら　然しこれも好き合つた仲なら仕方がない。

手二　何にしろわつちらが仲人に入るから、

三人　了簡してやんなせえ。

仁八　そりや、世間にないことでもございませんが、どこの國にか穴掘と、

手一　情事をする奴が、

三人　あるものでございますか。

どら　その腹立は尤もだが、そりや、父さん惡い了簡、わしも年中寺方の湯灌場を買つて歩くが、表店

を立派に張つてゐる古着屋さんより錢になります、穴掘りくと安く言へど、大がいの生業より錢になるのはわしが請合ふ、お前聟にとんなさりやいゝに。

勸藏 〽ほんにお前の言ふ通り、お寺で三度の飯は食ひ、着物は死人の皮を剝ぎ、又小遣錢は穴掘賃、法事のお布施で澤山あまり、

お虎 〽まだその上に饅頭や强飯は年中喰べ放題、思へばこんな生業は廣い世界に又無い故、惚れたが無理ではござんすまい。

ト兩人節を附けて口三味線にて言ふ。

仁八 えゝ親の心子知らずと、穴掘を聟に取つたと長家中へ言はれるものか。

どら はて、穴掘りだらうが隱亡だらうが、當時は慾の世の中だ、去年のやうにころりでも流行りやあ錢金の置所がねえ、それを當にやんなせえな。

仁八 えゝ緣起でもねえことを言はつしやい、又ころりが流行られてたまるものか。

三次 何にしろ話し合ひでどうとも方のつくことだ、わつちも見なさる通り葬式を持込んで來て、いつがいつまでかゝり合つてもゐられねえ、仲人の役だ一升買ふから、一ぺいづゝ吞みやつて話をしなせえな。

ト三次煙草入より一分出し、仁八に渡す。

仁八　そりやあ有難うござりますが、見ず知らずのお前樣に、

三次　なに、お前にやあ初めてだが、お虎さんとは近附だ。

どん　これ父さん、折角あの衆があゝ言ひなさるから、まあ一ぺい呑まうぢやねえか。

勘六　酒と言はれちやあ聞きのがしがならねえ。

三次　わつちが一緒に行きてえが、佛をおいても行かれねえから、二人を替りにやりますから、どこぞで笑つてくんなせえ。

勘藏　これは〳〵三次樣とやら、とんだ所へおいでなすつて、御厄介になりまする、〳〵その替りにはその佛の穴は深く掘つて上げます。

三次　さあ〳〵無駄口はいゝにして、わしらも一ぺい呑みてえ所だ。

手二　機嫌をなほして早く來ねえ。

三次　屑屋さん、お前も一緒に行きねえ。

どら　いや、わしやあ喰氣より慾氣のはうだ、お臺所へ行つて買物をしにやあならねえ。

三次　それぢやあ父さん、腹も立たうが兎角老いては子に從へだ、了簡してやんなせえ。

仁八　これは御親切に有難うございます。

お虎　左樣なれば三次さん。

三次　少しも早く。

皆々　これから酒屋へ。

鋤藏　〽打連れてこそ。

ト禪の勤めになり鋤藏三重を語り、お虎口三味線にて、仁八、どん七、勘六、手下一、二附いて下手へはひる。どら八は三次へ眼を附けて上手へはひる。時の鐘、合方になり、三次邊りを窺ひ思入あつて早桶の傍へ寄り、小聲にて、

三次　もし、頭々、嘸窮屈でござりませうが、晩までだから辛抱なせえ、人相書が廻つた故晝の内はうつかりと駕籠にもお乘せ申されねえから、とんだ故人南北だが、そつからわつちが新狂言に早桶といふ思ひ附さ、丁度上州から歸つて來た、顏の知れねえ二人の奴等を日雇取りにこしらへて、擔がせて歩くから人の氣の附く氣遣ひはねえ、今夜の闇を幸ひに、暮れたらそつと擔ぎ出し、燒場まで行くと思はせて、夜通しにやッつけやせう。

ト三次早桶へ耳を寄せ、何か聞く思入あつて、

えゝ何かえ、頭の弟の淸吉さんかえ、捕られたといふ噂も聞かねえから、旅へ出かけなすつたに違えねえ、ぬしのことだから如在なく山越に逃げなすつたらうが、姉さんが一緒だから足が附かにやいゝが。(卜思入あつて、)何にしろ湯灌場へ擔ぎ込んでおきてえものだ。

どら　(後へ出て、)もし、お困りなら、わつちが片棒擔いで上げようか。

三次　(思入あつて、)そいつあ有難い、お氣の毒だがお頼み申します。

どら　何の造作もねえことだ。(卜兩人して早桶を擔ぎ湯灌場へ入れ、)いや、べらぼうに重い佛だ、何でも立派な男と見えるね。

三次　なに、男ぢやあねえ女さ。

どら　女といふ目方ぢやあねえが、それとも金でも入つちやゐねえか。

三次　え、(卜ぎつくりこなし、どら市思入あつて、)

どら　もし、わしやあどら市といふ湯灌場買ひだが、直をよく買ひますが賣つちやあくんなさらねえか。

三次　なに、賣れとは何を。

どら　この早桶の佛をさ。

三次　え。

どら　物を言ふ死人は珍らしいから、買つて行つて直賣りをする氣だ。

三次　なんと。

どら　それとも賣らざあ買ふめえが、一旦見込んだこの代物、利分をくんねえ讓つてやらう。

三次　なに、この佛の利分をくれ、おつなことをお前言ひなさるの、寺の乞食や燒場の隱亡、出してい い酒手なら言はねえでもくれてやらあ、ちよつと片棒擔いだから、一ぺい呑ましてくれろと言や あ、話を附けねえこともねえが、をかしなことを言はれちやあ、三文でも出すものかえ。

どら　そりやあ眞の佛ならこんなことを言やあしねえが、物を言ふ佛だから口塞げをくれといふのだ。 ちよつと一肩擔いでも中は大方こんな玉と、秤の目よりおれの目で、ふんだらそれが定直投、三 分五厘違やあしねえ。嘘なら佛を出して見せろ。

三次　さあ、そりやあ、

どら　よもや佛は出せめえが。

三次　出せねえこともねえけれど、佛を出してもつまらねえ。まあそれよりやあ不承でも、これで一ぺい 呑んでくんねえ。（ト叺煙草入より一分出してやる。）

どら　なんだえ、一分ばかりの目くされ金、こんなものは入らねえわえ。（トたゝきつける。）

三次　うぬ、さうぬかしやあ了簡ならねえ。

どら　了簡ならざあ、どうともしろえ。

三次　しねえでどうするものか。

ト有合ふ卒塔婆を取つて打つてかゝる、どら八は秤の棒にてたゝき合ひ、兩人立廻つてトゞどら八花道へ逃げて行くを三次追ひかけはひろ、これにて道具廻る。

（墓守庵室の場）――本舞臺三間の間常足の二重、丸太の柱、藁葺屋根、竹の本緣附、正面鼠壁、暖簾口、上手に佛檀、内に佛具よろしく飾りあり、この前に白木の位牌、香爐、花、供物など並べあり、上の方一間湯灌場の後ろを見せ、下の方千人塚の石塔、この後卒塔婆を結込みし藪疊、總て無緣寺墓守庵室の體。こゝに西心鼠の着附、頭巾を冠り、佛前へ灯を點けてゐる。この見得木魚入りの合方にて道具をさまる。

西心　あゝ年々年齡を取るにつけ、一年經つは夢のやうだ、去年百本杭で殺された求女が明日は祥月命日、何者の仕業やら今に於て殺し手も知れず、何であのやうな孝行者が非業な最期を遂げたかと、いくら諦めても諦められなんだが、蕾で散つたも定業か、この春は彼岸に當つた、團子でも拵へ

てやらずばなるまい。（ト思入あつて上手を窺ひ、）先刻から蘭塔場で、穴掘の鋤藏が女子を連れて來たといふて、やかましいことであつたが、濟んだと見えて靜になつた、どれお念佛でも唱へてやりませうか。

ト西心佛檀へ向ひ珠數を爪繰り回向の思入。花道より淸吉先におさよ抱子を抱きて出來り、

淸吉　こうおさよ、坊主は寐たか。

さよ　やうやくすや〳〵寐入つたよ。（ト淸吉抱子を覗いて見て、）

淸吉　可愛さうに、この小僧も惡い親を持つたので、生れた日から他人の手ばかり、たま〳〵親の手へ歸りやあ、何處を當と家もなく、夜夜半まで連れて歩かれ、嘸これが身でも難儀だらう。

さよ　それにわたしが初めて故、どうしていゝやら樣子は知れず、いつそこのみじめを見せるくらゐなら、どんな所でもいゝから遣つてしまひたいよ。

淸吉　いくら遣りてえと思つたとて、里にせえ取手がねえもの、おれが子だといつて誰が貰ふものか、さういつて捨てゝしまふのも可愛さうだ。

さよ　まあ仕方がねえ、行く所まで此の兒も一緒に連れて行き、一日でもわたしの手で餘計に世話をしてやらうよ。

清吉　何でこんなに兒ばかりア、可愛いものだか分からねえ。
さよ　そこが親子の情合だね。
清吉　まあ、何にしろ父さんをたづねて見よう。（ト本舞臺へ來り、內を窺ひ思入あつて、）はい、御免なせえ、西心さんの家はこちらでござりますか。
西心　はい、これでござるが、どれからござつた。
さよ　父さん、わたしでござんす。
　　　ト門を明け內へはひる、西心見てびつくりなし、
西心　おゝこりや娘、清心樣。ても思ひがけない。
清吉　（外へ思入あつて、）いやも、こなたに逢ふのも面目ねえ。
西心　何の面目ないことがござりませう。さあ〳〵こつちへ上らつしやりませ。
　　　トこれにて清吉おさよ二重へ上る、西心捨ぜりふにて茶、煙草盆を出し、
　　　扨その後は、久々お目にかゝりませぬが、御機嫌ようて、お目出度うござります。
清吉　こなたも達者で何よりだ。
さよ　お前がこゝにゐなさんすも聞いたなれども、ついそれと尋ねて來られぬ身の上故、

西心　おゝその事は詳しう聞いた。娘は元より清心樣、どうしてそんなお心にならしやりました。今世の中に名の高い鬼薊といふ泥坊が、（ト言ひかけ、四邊を憚り小聲にて、）あなたと聞いたその時のこの西心のおどろきは、どのやうでござりませう、いかなる事でお心からお姿まで、そのやうに替り果てたことぢやゝら、あゝ情ないことでござります。

清吉　さうこなたに言はれると、穴へもおらあ入りてえ、たゞ何事も因緣づくと、父さんどうぞ許してくんねえ。

西心　勿體ないことおつしやりませ、こんな身の上にならつしやつたも、元はといへば娘故、おゝ、娘といへばおさよには、箱根山で惡漢に連れて行かれて別れたきり、あれからどこにどうしてゐて、この鎌倉へは歸つて來たぞ。

さよ　さあ、箱根山から惡漢に連れて行かれたその先は、小地獄谷といふ所で、一寸法師や鷄娘、片輪者を買込んで鎌倉へ賣る見世物師、地獄婆ァと名の高い何でも引込むぐれ宿さ、直にわたしを山向うの宿場へ賣らうとしたところ、身重なり坊主なり直打のないのがわたしが仕合せ、子を生むまではこの髮も延びるであらうと家へおかれ、怖い〳〵と思つたもいつしか馴れて半年越し、たうとうそこで此の子を生み肥立つた故に折を見て、この鎌倉へ逃げて來ようと思ふところへ折

よくも、山神祭りのその晩に良人に出逢つてその場から、故郷へ逃げて歸つて來たのさ。

西心　おゝさうであつたか、それはいかい難儀をしたであらう、おれもその折そなたを取られ、生てるても詮ない故、直に谷へ飛込んで死なうとは思つたが、志しの佛もあり、どうかしたなら又そなたに逢はれることもあらうかと、死後れて悄々とこの鎌倉へ歸つて來て、緣を求めて無緣寺の墓守とまでなつたわい。何は兎もあれその孫を、おれにちよつと見せてくりやれ。

さよ　さあ、初孫の顏を見て下さんせ。（ト出すを西心抱上げ見て、）

西心　おゝこれはよい子ぢや〳〵。おさよ、男か女か。

さよ　あい、男の子でござんす。

西心　おゝそれは何より手柄ぢや〳〵、あゝ親子とて爭はれぬ、清心樣に生寫し、おゝ今逢つたばかりのこの祖父に笑ひをる、可愛い奴ぢや、も一つ笑へ。

ト西心抱子をあやし、餘念なき思入。

清吉　何の役にも立たねえものだが、孫は可愛いものだと見える。

西心　こりや又別の味でござる。あゝおさよ、ぐつすりやつたわえ。

さよ　お祖父さんにとんだ御馳走だの。（ト抱子を取り、襁褓をあてかへる思入。）

清吉　そりやあさうと、早速に聞きてえはお前の身の上、おさよが世話になつてゐた白蓮とかいふ金貸は、おれが兄貴で、やつぱり盜人、緣につれてこの詮議をこなたもされたに違ひないと、おさよと二人で案じてゐた。

西心　おゝお前方が逃げたといふ翌日直に、下男でゐた塔十郎樣へわしは呼ばれ、御詮議に逢つたので、白蓮樣やお前樣、おさよが替つた身の上を、聞いてびつくりいたしました。したが元より知らぬこと故、繩目の恥も身に受けずそのまゝ許され歸つて來た。

清吉　そりやあ何より仕合せだつた、さうでもねえ、どのやうな憂き目に逢つちやあゐねえかと、今日逢ふまでは二人とも、どんなに案じてゐたか知れねえ。

西心　それは有難うございます。

さよ　まあ何にしろこのやうに、親子夫婦孫までも一つに寄つて一晩でも、話をするが互ひの仕合せ。

清吉　ほんにいつぞや手前もおれも、身を投げた時死んでしまやア、今父さんには逢はれぬわけだ。

西心　わしも箱根で死んだ日には、可愛い孫の顏も見られぬ。

清吉　假令どんな苦勞をしても、生きてゐにやあつまらねえ。

トこれにて西心求女を思ひ出せし思入にて、

西心　なるほど、お前樣のおつしやる通り、死ぬ者貧乏でございます、同じ同胞でありながら、はかなく死んだ弟が不便さ。

さよ　え、そんなら弟の佐之助は。

西心　今までそちにも隱してゐたが、明日が卽ち一週忌。

さよ　たつた二人の同胞だのに、何故知らしては下さんせぬ。

西心　さあ、病み煩ひで死んだのなら、死目にも逢はすけれど、非業な死をば遂げた故。

清吉　えゝ、そりやまあ何處で、

さよ　どういふ譯で。

西心　世にも哀れなあれが身の上、まあ一通り聞いて下され(ト一つ鉦の入りし合方になり、淚を拭ひながら、)而も去年清心樣が御追放にならるゝ時、お身の片附お手當にお金をどうぞ上げたいと、思へど甲斐ない貧乏暮し、その才覺に歩きし折、稱名寺へ小姓にやつた求女にふつと道で出逢ひ、その話をしたところ、どうか都合しませうと言つたを力に待てど暮せど、來ぬのは金ができぬ故と思ふ所へ近所の衆が、求女の死骸が百本抗に浮いてゐると、聞いてびつくり足も空に行て見れば、むごたらしう切りをつて、川へ捨てたる浮死骸、是非もなく〱引取つて葬りは葬りましたが、意趣斬

か物取りか今に樣子が分かりませぬ。何にいたせ年さへも十四か十五の蕾の花、殺しをつたは何者か、おのれ敵が知れたなら、むしやぶりついても殺してやらうと、その悔しさといふものは、今日で丁度一年經てど、寐た間も忘れはしませぬわいの。

と淚に咽せて咳き入る。おさよ泣きながら背中を撫る、この內淸吉術なき思入あつて、

淸吉　そんならいつぞや、百本杭で。

西心　えゝ、あなた御存じでござりますか。

淸吉　いやさ、噂に聞いた若衆の死骸、あゝ下便なことであつたなあ。(ト思入。)

さよ　いつぞやお前が妾宅で、菩提の爲に剃髮したと言はしやんしたのは弟の、菩提の爲でござんしたか、何故あの時にこの事を、わたしに言つては下さんせぬ。

西心　さ、そちに隱して知らさぬは、この歎きを見まい爲め、(ト思入あつて、)丁度幸ひ淸心樣へ、お願ひがござります。(ト白の卒塔婆と硯箱を持つて來て、)お所化に書いて貰はうと、墨も磨つておきました、菩提の爲めにこの卒塔婆を、お書きなされて下さりませ。

ト淸吉の前へ出す、淸吉思入あつて、

淸吉　いや、この卒塔婆はおれが書いては、却て佛の爲めにならねえ。

西心　そりやまた何故でござります。

清吉　さあ、以前なれば兎も角も、鬼と名のつくおれが書いては、追善供養にならねえから、所化に書いて貰ふがいゝ。

西心　そんなことをおつしやらずと書いて下さればよいに。仕方がない、明日誰ぞ所化に書いて貰はう。

ト卒塔婆を鼠壁へ立かけておく。おさよは子を抱きしまゝ佛前へ線香を上げる、清吉花道の方へ思入あつて、

清吉　やゝ、向うから侍がたしかにこゝへ來る樣子。

さよ　もしやわたしら二人が詮議か。

清吉　何にしろ險難だ。

西心　そんなら暫時奥に隱れて。

清吉　もし、詮議なら、

西心　裏からこつそり。

清吉　あ、これ。

ト四邊へ思入、時の鐘、清吉おさよは思入あつて奥へ入り、西心は案じる思入にて花道の方を見てゐ

ろ。と花道より仁八五合徳利を提げて出來り、後より陰山繁之丞打割羽織、大小袴にて忍び提灯を持ち出來り花道にて、

繁之　ちと物がたづねたいが、無緣寺と申すは、この寺でござるかな、

仁八　左樣にござりまする。

繁之　たづねたい墓がござるが、して墓所はいづれでござるな。

仁八　墓所は右でござりますが、向うに墓守がござりますから、それでお聞きなされませ。

繁之　これは親切に忝ない。

ト兩人本舞臺へ來り、仁八直に内へはひりて、

仁八　西心どの、最前は御地內を騷がしました、これは少しばかりだが一ぱい飲んで下され。

西心　あゝ、このやうな心配はよさつしやればよいに。

仁八　ほんの心ばかりだ、受けて下され。

西心　それは何より忝ない。（ト徳利を取つて、）もし、そこにおいでなされまするは。

仁八　おゝ、あの旦那は、何か墓を尋ねたいとおつしやつた。

西心　左樣でござりますか。（ト繁之丞内へはひりて、）

繁之　早速ながら三日以前、當寺へ大江の屋敷より、葬りしものがござるかな。

西心　はい、一昨日の夜ござりました。

繁之　その墓所はいづれなるか、承はりたくまゐつたて。

西心　はい、御案内いたしませう。（トこの內仁八繁之丞の顔を見てゐて、）

仁八　憚りながらあなた樣も、大江の御藩中でござりますか。

繁之　いかにも、大江の藩中でござる。

仁八　わたくしの僻目か存じませぬが、あなたは蔭山武太夫樣の、御子息樣ではござりませぬか。

繁之　どうしてそれを。

仁八　お提灯の紋所に見覺えのある旦那の俤、何をお隱し申しませう、わたくしは元お家にゐた、又助
　といふ中間でござりまする。

繁之　はて扨それは思ひがけない。

西心　いやもし、それなる旦那樣、至つて穢うはござりますが、まあこれへお上りなされませ。

繁之　然らば許しやれ。

　ト二重へ上り、飾りあり位牌を見、思入あつて上手へ住ふ、仁八下手へ住ひて、

仁八 不奉公をいたしました故、その後御機嫌も伺ひませぬが、大旦那様にはお替りはござりませぬか。

繁之 親共事は昨年中、不慮なることにてお過ぎなされた。

仁八 え、左様でござりますか、して、不慮なることゝは。

繁之 以前の家來(故)に申し聞かすが、仔細あつて父を討ち一度逐電なしたれど、二度我に討たれんと覺悟極めし甲斐もなく、お家の重寶緣丸がその夜紛失いたせし故、疑ひかゝつて終に切腹、汚名を受けしが殘念なと、死ぬる末期に我への遺言、敵同志といひながら、一旦因みを結びし兄弟、それ故夜に入り人目を忍び當寺へ參詣いたしてござる。

仁八 それは〳〵、とんだ事、嘸お力落しにござりませう。

西心 いや、お話の中へ言葉を出すは失禮でござりますが、今おつしやりました紋三樣は、八重垣流の達人にて流を苗字にお呼びなさるゝ紋太夫樣の御子息にて、劍術の爭ひより朋輩を殺害なし、立退れたお方でござりますが、御切腹なされましたとは、てもお情ないことでござりましたな。

繁之 すりやその方は紋三どのゝ、知る人にてあつたるか。

西心 はい、わたくしの女房が、お乳を上げたお子樣でござります。

繁之　はて扨、それは不思議な縁ぢやな。

西心　そんなら一昨日葬りしが、紋三樣でござりましたか、知らぬことゝて一遍の御回向さへしませなんだ、南無阿彌陀佛々々。

仁八　（この內思ひ出せしこなしにて、）いや、いつぞやお屋敷の裏手をば蕎麥を擔いで來ました折、二十四五な侍が塀を破つて拔身で出たが、たしかにあれが紋三樣、して又短刀の紛失は。

繁之　やはりその夜のことであつた。

仁八　扨はあの夜蕎麥を食つた、若い男が短刀を腰にさしてをりましたが、

繁之　それぞまさしく尋ぬる盜賊。

仁八　もしや彼奴が鬼あざみか。

西心　え。

仁八　油斷のならぬことでござる。

繁之　それにつけて承はりたいは、それなる位牌の俗名に、戀塚求女と記しござるは。

西心　はい、わたくしの悴でござりまする。

繁之　むゝすりや疵養生に五十兩、若殿より惠みを受けしは、そなたの悴であつたるか。

西心　え、そんなら忰は五十兩大江樣から頂戴せしとか、それぞまさしく我穎みし清心樣へ上げる金、それ故命を取られしか、思へば不便なことをいたしたよなあ。

繁之　いや、思はぬ話に暫時の暇入り、夜更けぬ内に紋三殿の墓へまゐつて本堂にて、回向を頼んで立歸らん。

西心　左樣なればわたくしが、お墓をお敎へ申しませう。

繁之　氣の毒ながら、案内頼む。

仁八　どれ、わたくしめも御一緒に。

西心　かうおいでなされませ。

ト唄、時の鐘にて西心先に提灯を持ち、繁之丞仁八下手へはひる。と下手より鋤藏肩衣を引掛け、横板へ紙で張りし人相書を持ち出來り、

鋤藏　西心どの〳〵、代官所からこのやうな人相書のお觸が廻つた、門の柱へかけておけと御住持から言附だ。なんぼ取らるゝものがないとて、明ッぱなしは不用心な、買物にでも行つたか知らぬ。（ト言ひながら觸書を見て、）なんだ大寺正兵衞人相書、あゝこりやあ極樂寺で三千兩祠堂金を盜んだ泥坊、何處に隱れてゐるか知らぬが、人相書で搜されては今に捉まるに違ひない。〳〵人の物をた

だ取つて長生せうとは惡い了簡、天道樣がお許しなされぬ。

　ト勘藏節を附けて語る、下手より西心出て來り、

西心　お丶勘藏どの、何ぞ用か。

勘藏　あい、大寺正兵衛といふ泥坊の人相書、門へ出しておけとの言附、御苦勞ながら明日から出入れはこなたの役。

西心　それは用が殖えて迷惑なことぢや。見れば立派な肩衣かけ、又淨瑠璃かな。

勘藏　表の師匠にさらひがあつて狐火を語る故、是非聞きに來て下され、師匠からも言傳ぢや。

西心　それは樂しみなことだ。後に行つて聞きませう。

勘藏　今夜中で聞事は戸和太夫市作で白木屋の引廻し、それに續いてはわしが狐火、ちよつと聞いて下され。〽回向せうとてお姿を、畫にはか丶せはせぬものを、田町で買つた反魂丹、

西心　や、そりやちと文句が違つたやうだ。

勘藏　いや／＼決して違ひはせぬ、違はぬ證據は反魂丹が一包二十四孔だ。

西心　とんだ口上茶番だ、は丶丶丶。

勘藏　〽そんなら今にござれやと、言ひ捨て丶こそ急ぎ行く。（淨瑠璃を語りながら下手へはひる。）

西心　はゝゝゝ、下手なくせに鋤藏めが義太夫に凝り固り、岡目で見ると馬鹿げたものだ。(ト人相書を取上げ見て)あ、この人相書はおさよとおれがお世話になつた、白蓮樣、(ト四邊を見て)思ひがけないことぢやなあ。

ト合方になり、奥より清吉とおさよ出來る、西心見て、

清吉　おゝ嚥窮屈であつたらう。思ひがけない人が來て、ろくく話もできぬわいの。

清吉　どうで今夜は久しぶり、夜通し寐ながら話しませう。そりやあさうと今聞けば、八重垣紋三樣といふは、おさよのお袋が乳を上げた若旦那かえ。

西心　おゝこのおさよの上に一人兄があつたが、水兒で死に、乳が澤山ある所から、乳母奉公に五年ほど行つてゐたが八重垣樣、その乳を上げた若旦那が、腹を切つて死なしやつたとは、あゝおいとしいことぢやわい。

清吉　縁といふものは、どこにどう引張つてあるか知れねえ、まだ鎌倉にゐた時分伯父の話で不斷聞いたが、清次といつたおれが親父は、その八重垣樣にゐた若黨。酒の上で失敗つて漁夫になつたといふことだ、(ト思入あつて)あゝ考へて見りやあ見るほど、こいつあ濟まねえことだらけだ。

さよ　そんならお前の父さんも、八重垣樣にゐなさんしたのか、さうして見ると母さんといはゞ朋輩同

然な、その子が二人夫婦になるとは、おつなものだね。

西心　かう入組んだ筋合を結び合すとは出雲の神樣も、芝居の作者と同じことだ。

清吉　違えねえ。芝居と言やあ狂言でも、人相書はよく出るものだ。（ト言ひながら人相書を取上げ見て、）おれが兄貴もこのやうに、人相書で搜されちやあ、もう長いことはねえわえ。

さよ　ほんに聞く事も見る事も、心にかゝる事ばかり、かうしてゐてもそは〳〵と、少しも氣が落附かない。

清吉　そりやあ此間から、逃げつかくれつとつくりと、夜の目も寐ねえせゐだ。

西心　今夜はゆつくりこの庵室で、枕を高く寐るがよい、おれは表の師匠どのに義太夫のさらひがある故、ちよつと顏を出して來る。酒もこゝに五合ばかり貰つたのがあれば飮むがよい、どうで歸りは九つ時分、それまでしつぽり水入らず、寐るなら夜具はこゝにあるぞよ。

ト戸棚へ思入。

さよ　あい〳〵、有難うござんす。

西心　そんなら、わしは行つて來ますぞ。

さよ　ゆつくりと行つて來なさんせ。

西心　（門口へ出かけ思入あつて、）然し用心、表はしつかり。
清吉　あい、合點だ。
西心　どりや、狐火でも聞いて來ませうか。
　　ト唄になり、思入あつて下手へはひる。時の鐘。淸吉は竹簀戶へ掛金をかける。おさよ抱子を寐かし、
　　有合ふ燗德利へ酒をうつし、居爐裏の土瓶へ入れ、燗をする。
清吉　又雲行が惡くなつて來たが、明日降らにやあいゝ。（ト言ひながら二重へ上り、机の上の位牌を見て、）
　　草露月照童子、あゝこれが手前の弟か、知らねえことゝて、南無阿彌陀佛々々。
　　　ト此の内おさよは有合ふ膳へ德利、猪口、丼物などを載せ、
さよ　さあ、お燗ができた、一つお飮みな。（ト猪口を出す。淸吉茶碗を取つて、）
清吉　面倒だ、大きいものがいゝ。
さよ　まあ、ゆつくりとお上りな。（ト淸吉ぐつと飮み咽せる。）あれさ、をしみはしないよ。
清吉　もう一ぺいくれ。（ト茶碗を出す。）
さよ　いゝかえ、お前そんなに飮んで。
清吉　何だかをかしな胸持だから、酒でも飮んだら開かうと思つて。（ト又ぐつと飮み、）さあ、手前もこれ

でぐつとやれ。
さよ　わたしや弟のことを聞いたので、癪が起りさうだから、今夜は止さうよ。
清吉　それぢやあ、これでお納杯にしよう。（ト又一ぱい飲む、この時抱子泣く。）
さよ　おゝ泣くな／＼、夢でも見たか、犬の子々々。（ト清吉抱子へ思入あつて、）
清吉　あ、蟲が知らすか。
さよ　え。
清吉　いやさ、蟲でもかぶりやあしねえか。
さよ　又すや／＼と寐てしまつた、此間に二人樂々と、ちつとの内でも寐ようぢやないか。
清吉　むゝ寐たけりやあ手前先へ寐ろ、おらあ寐られねえ。
さよ　そりや又何故でござんすえ。
清吉　（立つて机の上の位牌を持つて來て、）その位牌へ對して。
さよ　え、そりや何故に。
清吉　手前の弟は、おれが殺した。
さよ　えゝ。

トどうとなり、この音に抱子泣出す。清吉は外な擇り窺ふ、おさよは抱子をたゝきつける。

清吉　去年手前と川へ飛込み、死なうとしたも餓鬼の折覺えた泳ぎが邪魔になり、死ぬに死なれず上つた時、舟の騷ぎが耳に入り、同じ人に生れたら榮耀榮華がその身の德、持つて生れた果報でも盜みをすりやあ出來る樂しみ、ふつと浮んだ惡心に、現在おれが身を思ひ親父の所へ持つて行く金とも知らず殺した次第、おれが惡事のこれが初まり、知らねえ内は仕方もねえが、仇同志と知つた日にやあ、佛へ對して寐られねえ。

さよ　そんなら弟を殺したは、つながる緣のお前であつたか。（トびつくりする。又抱子泣く。）おゝ、泣くなく。（トいぶりつける。）

清吉　今父さんが悔しさは、一年經てども忘れぬと聞いた時のその苦しさ、濟まねえことゝ思ふ矢先、おれが親父や手前のお袋、故主であつた八重垣のその御子息の難儀となつた、綠丸の短刀を盜み取つたもおれが仕業、まだその上にこのやうに、人相書で兄貴が詮議、元はと言やあ強請に行つたこれもおれから露顯したのだ。

さよ　それもこれも知らぬ前、今更言つても仕方がねえ、そんな弱い心ぢやあ、この兒の末が見られないよ。

清吉　どうで惡事にちゞまる命、これまで非道の働きにおれを恨んでゐる人は、今父さんのいふ通り、寐ても覺めても忘りやあしめえ。人の物を盜みながら長生きせうとは惡い了簡、天道樣が許さぬと穴掘めがぬかしたは、時に取つての辻占に、死なうと覺悟極めたからにやあ、おれを殺して敵を取り、紋三樣や弟へ、首を手向けて父さんの、どうぞ恨みを晴らしてくりやれ。

ト短刀を出し、おさよの前へ出す。

さよ　そりやあさうでもあらうけれど、今更お前が死んだとて褒める人は一人もねえ、あの心なら盜みをば止せばいゝにと笑はれ草、一旦鬼と言はれたからは、どこがどこまで鬼になつて、死なうなどゝいふやうな、未練なことをお言ひでないよ。（ト抱子をいぶりながら、）おゝたがよく〳〵。

清吉　手前が何と言はうとも、兇狀持のおれが身體、生きてゐちやあ父さんにまだこの上どのやうな、難儀をかけめえものでもねえ、さうなる日にやあ猶々濟まねえ、ちつとも早く死ぬのが言譯、おれより手前が鬼になり、弟の敵を殺してくれ。（ト短刀を突附けるを振拂ひ、）

さよ　えゝつまらねえことを言ひねえな、假令敵同志にしろ夫婦となりやあ二世三世、なんでお前が殺されよう。（ト抱子泣く。）おゝ泣くなく〳〵、手前の父は分からねえ、あんなことを言つて困らせる。さあ達つて殺せと言ひなさりやあ、わたしが先へ行かにやあならねえ、知らねえことゝはいひな

がら、現在お前の兒さんと一つ枕に寐たからは、死なにやあならぬといふことは、疾うから心は附いちやあゐれど、可愛さうにこの兒をば他人の手にかけにやあならねえ、そればつかりで死なずにゐるに、お前も不便と思ふなら、そんなことを言つておくれでないよ。

ト抱子を清吉に突附け見せる、清吉も不便なといふ思入。

清吉　そりやあおれだつて同じことだが、この小僧が不便につけ、嚊父さんが悔しからうと、子を持つて知る親心、どうも生きちやあゐられねえから、手前の手にかけ殺さにやあ、一人で死ぬからその小僧を、おれと思つて育てゝくれ。

さよ　お前が死んで何のつけ後に殘つてゐられるものか、わたしが先へ今死ぬから、お前この兒を育てておくれ。（ト抱子を清吉の前へ突附け、短刀を取るを清吉留めて、）

清吉　えゝいゝ加減に馬鹿言へ、おれに餓鬼が育てられるも(の)か。

さよ　それだといつて男の子は、男に附くがあたりめえ。（抱子頻りに泣く。）

清吉　えゝ可愛さうに、これ、泣くな。（ト抱上げる。この間におさよ短刀を拔き、）

さよ　この間に早く、（ト死なうとするを、清吉片手で留めて、）

清吉　えゝこれ危ねえ、放さねえか。

さよ　いえ〳〵、わたしやあ死なにやならねえ。
　トおさよ死なうとする、清吉抱子を下におき、泣くを兩人氣にしながら立廻り、機にておさよの肩先を切下げどうとなる、清吉びつくりして、
清吉　やゝ、こりや手が外れて肩先に。
さよ　嬉しや、これでわたしが先へ。
清吉　えゝ、短氣なことをしてくれたなあ。（ト松蟲の入りし合方になる。）
さよ　さあ、お前に先へ死なれたら、後に殘つてどのやうなみじめを見ようも知れぬ身の上、一度ならず二度までも親に苦勞をかけるのも、不孝と知れど存らへても、どうで始終は繩目に逢ひ、歎きをかけねばならぬ故、いつそのことに親の家、こゝで死ぬのがまだしも孝行、お前はこれから逃延びてその子をどうぞ育てゝおくれ。賴みといふはこればかり。
清吉　いくら手前の賴みでも、おれが先へ死なにやあならねえ、この身に罪を背負ひながら、何ぼ餓鬼が不便でも、まご〳〵してゐられるものか、おれも直に死なにやならねえ。
さよ　そんならお前も今こゝで、死ぬと覺悟を極めたら、その兒もどうぞ共々に。
清吉　そりやあ言はずと知れたこと、後へ殘して父さんによけいな苦勞をかけるより、一緖に殺して連

れて行くわ。
さよ　思へばいつぞや稻瀨川へ、身を投げた時二人とも、
清吉　死んだらこんな憂目も見めえ、なまじ命があつたばかり、
さよ　横に車で世を渡り、この身に積みし惡の數々、
清吉　引くに引かれず今日明日と、廻る因果も丁度一年、
さよ　非業に死んだ弟の、
清吉　而も逮夜に今こゝで、
さよ　二人が死ぬも約束事、
清吉　思へば果敢ねえ、
兩人　身の上ぢやなあ。(トよろしく思入、抱子泣く。)
清吉　おゝ泣くな〳〵、(トたゝきつけながら、)これ、とても死ぬならこの事を、書殘しておきてえから、苦しからうがちつとの內、辛抱して待つてくれ。(ト抱子の泣くをぢつと見て、)おゝ澤山泣け、澤山泣け、手前も今殺してやるから、もう此の世の泣き終ひだ。
さよ　あゝ苦しい〳〵、水を一つ飲ましておくれ。

清吉　手負に水を飲ましちやあ、（ト思入あつて、）然し、どうで死なにやあならねえ身體、この世の別れ水杯、（ト墓手桶の水を柄杓に汲みて、）心殘さず一ぱい飲みやれ。

さよ　あゝ嬉しうござんす。（ト柄杓に縋りぐつと飲み、うつとりとなる、清吉耳へ口を寄せて、）

清吉　これおさよ、今後から行くぞよ。（トこれにておさよ心附き、）

さよ　小僧は何處にゝ

清吉　これ、こゝに。（ト見せる。）

さよ　あゝもう、顔が見えねえよ。

ト抱子の頭を探り、につたりと笑つてそのまゝ落入る、清吉どうとなり子をたゝきつけながら泣く。

この時隣家の二階にて、

呼ビ　「東西々々、戀娘昔八丈鈴ヶ森引廻の段、始まり左樣、」

ト呼ぶ。これにて床の淨瑠璃になる。

〽人の身の捨所とや名に古りし鈴ヶ森の仕置場所、靑竹にて矢來を構へ、側にきらめく拔身の槍、この世からなる地獄の責、忌はしくもまた恐ろしゝ、

トこの内淸吉抱子を抱へ寐かし、おさよの死骸を二枚折の屛風で隱し、短刀をよき所へおき、思入あ

つて、

清吉 折も折、時も時、隣りで語る淨瑠璃は、白木屋お駒が引廻し、この身の果は木の空と思ひのほかに今日こゝで、馬にも乘らず疊の上、身を捨札に罪科を野末にさらさず死ぬのが仕合せ、たゞ不便なはこの小僧、いはゞ同類卷添に命を捨てるも同じこと、惡い親に抱込まれ、切られて死なにやならねえぞよ。（ト抱子へ思入あつて）人の來ぬ内惡事の次第を、せめて一筆西心どのへ。（ト人相書を取つて）幸ひこゝに人相書、紙をへがしてこの板へ身の言譯を書殘さん。（ト抱子の泣くなだきつけながら）おゝちつとの間だ、泣いてくれるなく。

〽子を思ふ闇より闇に目もわかず、たゞさへ暗き父親が、

トこの内清吉抱子を寢附け、以前の硯箱を持つて來て筆を取り、抱子を見てこれを殺すのかといふ思入、ホロリとなし、紙をへがし書きかゝる。

〽涙に見えぬ道筋を、現ともなく走るとも夢路を歩む心地して、やうく彼處へたどりつき、

ト書置を書きしまひ、思入あつて卒塔婆を立てかけし上の鴨居の珠數を取つて首にかけ、その跡の釘へ札の紐をかけ、これにて捨札と見ゆる心、

身の言譯のこの書置、後でとつくり讀んだ上、西心どのにも弟を殺した罪を水にして、紋三樣へ

こなたからお墓へ詫をして下せえ。（ト抱子の泣く故抱き上げ、）西も東も知らねえ小僧が、此頃にねえ泣聲は、産神様が教へるか。

〽今日が親子の一世の別れ、せめて最期の暇乞ひ、

ト清吉抱子の顔へ頬をあて、頭を擦りなどして、

生先長い手前をば、殺してえ氣は少しもねえが、兩親ともに死んだ後祖父さんの手で育つとも、あれあの小僧は鬼薊清吉といふ泥坊の子だと人に言はれたら、一生出世はできねえ身體、それ故殺してしまふのだ、當歳ながらおれが胤、未練に泣かずと往生しろ。

〽見れば嚴しき竹垣に、さも恐ろしき拔身の槍、これで我子を殺すかと思へば胸も張裂く苦しみ、

ト清吉抱子を片手に捉へ、短刀にて突かうとして突兼ねる思入よろしくあつて、短刀を捨て、抱子をぢつと見て、

今殺されるも知らずして、にこ／＼笑ふ愛らしさ。

〽蝶よ花よと撫でし子を、科人にして殺すとは、よく／＼深い前世の因果、

これにて思ひあたりしは、弟求女を初めとして、これまで多くの人を殺し、その親達の歎きをば

今日といふ今日身に知つて、殺しともないこの小僧、手前勝手と笑はゞ笑へ、どうまお刄があてられよう。

〽未來は奈落へ落つるとも、どうぞ娘が助かるやう、お慈悲ぢや願ひ上げますと、愚に返りたる親心、（トこの内清吉抱子を遣ひ、よろしく思入あつて、）

後に殘して死にますから、行末賴むは西心どの、

〽さあ〳〵こちへと手を取つて、暫く傍に介抱なす。

ト清吉抱子を下へ寐かし、ほつと歎息なせし思入。

死ぬる覺悟も恩愛に、黃泉の障りはこの坊主。

〽思ふことかなはねばこそ憂きことの戀と義理との後たづな、不便やお駒は夫の爲め斯る憂き身の縛り繩、顏さし入るゝ懷をもれて流るゝ淚橋、居所の羊の步みより果敢なき身ぞと觀念し、力なく〳〵引かれ來る。

トこの內清吉白木の机に香爐花立を載せ、側に置き、肌を脫ぎ、短刀を手拭にて卷き、腹を切らうといふ思入。

いくら言つても返らぬ愚痴、どうで盜みをしたからは。

〽果はかうした淺ましい、この世からなる劍の山、

ト清吉思入あつて短刀を腹へ突立て、糊紅になり、

〽身を切裂かれ憂き恥をさらすも定まる因緣づく、（ト苦しきこなしにて）

〽二世と契りしその人と、一世を限る親子の名殘り、

トおさよの死骸へ寄らうとする。抱子泣く故這ひ寄りて、苦しみながらたゝきつけ、延上りて屛風の內を見る。

〽延上りても竹垣の隙間隱れの人群に、眼も泣き腫れて見え分かぬ、

トこの內死骸と抱子へ思入あつて、苦しきこなし、

〽折もこそあれこなたなる群集押分け兩親は、竹垣に縋り附き、

トこの時上手湯灌場の羽目を壞し、白蓮事大寺正兵衞着流し一本差にて出る、下手より西心出で、兩人清吉の傍へ寄りて、

白蓮　やれ早まるな、弟清吉。

西心　こりや何故に。

兩人　この生害。

清吉　仔細はそれなる書置に。

白蓮　なに、書置とは。

西心　たしかに、それでござります。（ト觸書の札へ思入、白蓮見て、）

白蓮　むう、「下總の國行德無宿鬼薊清吉　書置の事、一、この清吉事いまだ清心といひし出家の折、遊里へ通ひ女犯の罪にて追放受けし其の折柄、緣につながる弟と知らず、我身の爲めに才覺なしたる金子五十兩盜み取り、過つて殺害に及び、其の後大江の邸へ忍び、綠丸といふ短刀を奪ひ、故主八重垣紋三郎樣へ盜賊の疑ひかけ、又兄正兵衞が舊惡露顯、女房おさよが敵同志故、義理を立てゝの最期まで、元の起りは我がなす業、その他惡事は數知れず、今といふ今先非を悔い、三方四方へ申譯に、たつた一つの命を捨て、町人ながら左より右の肋へ引廻し、千人塚に於て相果て候ものなり。」（ト讀終りて、）すりや清吉にはそれ故に、先非を悔いての生害なるか。

西心　死なずと仕樣もあらうのに。

兩人　早まつたことしてくれたな。

〽縋り歎けば顏を上げ、

清吉　求女といひおさよといひ、非業な最期もみんなおれ故、腹も立たうがこれ父さん。（ト腹へ指さし、）

これで堪忍して下せえ。

〽言ふに母親うろ〳〵と、娘が姿見るよりも前後不覺に取亂し、

ト西心二枚屏風の内を見て、はあと泣かうとし、よろしくあつて、

西心　えゝ情ないこの姿、今更二人が死んだとて、求女が生きて返りはせぬ、何故それよりも包み隱し、心の内で不便と思ひ、後懇に菩提をば弔うてやつては下さらぬ、頼りに思ふ二人を先立て、よい年をして後に殘り、いかなる因果者のやうに後指をさゝるゝが、おりや口をしい〳〵、何故に死んでは下さつた。

淸吉　あゝこれ〳〵父さん、その歎きは尤もだが、

〽必ず〳〵泣かずとも、娘でも何でもない、ありや前生の敵ぢやと歎きを止めて下さるが、少しは冥土の罪ほろぼし、

（ト淸吉よろしく思入あつて、）

たゞ此の上のお頼みは、兩親のないこの坊主、どうぞお前の手しほにかけ、まことの人にして下せえ。（ト懐より金の入りし鬱金の守袋入れの胴卷を出し、）守袋に入れた百兩は、求女が金の五十兩、殘りは小僧が養育金。（ト西心抱子を抱き上げて、）

西心　おゝ孫がことは案じさつしやるな、わしが育つて行く〳〵は、立派な人にしてやります。

白蓮　思ひがけなく我も亦、この湯灌場に隱れゐて、はしおりかゞみの弟が、末期の際に廻り逢ふその嬉しさも情なや、人相書にて行方をば津々浦々迄詮議さるれば、明日をも知れぬ身の上だが、一日なりとも娑婆にゐる內、言ひおくことがあるならば、この正兵衞に言つておきやれ。

清吉　言ひおくことは何もねえが、この世の別れ兄の手で、介錯なしてこの首を、あの佛前へ供へて下せえ。

白蓮　いかにも介錯なした上、望みに任せ佛前へ、そちが首を手向けてやらう。

清吉　叉父さんは短刀を、蔭山樣へお渡し申し、紋三樣の疑ひが、晴れるやうにして下せえ。

西心　おゝ、それはわしが呑込んだ。

清吉　これにて心殘りはねえが、たつた一目坊主めが、笑ひ顏を見て死にてえ。

〽今死ぬる身の今までも、おぼこ娘のあどなさを思ひやりつゝ兩親は、前後不覺に打倒れ、泣音濱邊に打寄する波に波ます如くなり。

トこの內西心抱子を淸吉に見せる、淸吉苦しさを怺へてあやす思入。これを見て白蓮西心愁ひのこなし、トゞわつと泣く。ばた〳〵になり、下手より三次繩襷尻端折り、非人と見える打扮、手下の一二同じ打扮にて、竹槍を持ち出來りて、

三次　頭こゝにゐなすつたか。
白蓮　やゝ、三次を始め、此の體は。
三次　先刻頭を入れて來た早桶の內を、湯灌場買ひに見咎められて仕方なく、こゝを連出しばらしたが、
手一　惡事千里と頭の噂。
手二　ぱつとした故竹槍で、
三人　防ぐ積りでこの支度。
白蓮　それではうか〳〵もうこゝに、足を留めてはゐられねえ。
淸吉　少しも早く介錯なし、この鎌倉を落ちて下せえ。
白蓮　言ふにや及ぶ。
淸吉　父さん、お前はこの短刀、蔭山樣へ。
西心　おゝ合點だ。
　　　ト糊紅を拭ひ鞘へをさめる。ばた〳〵にて、下手より繁之丞出來りて、
繁之　持參に及ばぬその短刀、繁之丞が受取らん。
西心　いかにもお渡し申しませう。〔ト短刀を出す、繁之丞改め見て、〕

繁之　ほゝお、これぞまさしく縁丸が、これにて紋三が汚名も晴れ、ちえゝ忝ない。

白蓮　いでこの上は弟が介錯。（ト刀を持ち清吉の後へ廻る。清吉思入。）

三次　そんならこれが、

清吉　この世の別れ、

西心　せめては後世を安樂に。

ト西心鉦を出し。片手に抱子を抱きいぶりつけながらたゝく。繁之丞は上手捨石へ腰をかけ、下手に手下の一、二竹槍を持ち、三次は墓手桶を持ちて控へる、白蓮刀を出すとこれへ水をかける、清吉苦痛を怺へ畏まる、これを皆々見て、

白蓮　あ、惡に強きは善にもと、

繁之　武士も及ばぬ、

西心　この生害、

清吉　介錯したら、この首を、

白蓮　望みの通り佛前へ、

清吉　まッこのやうに、

白蓮　むゝ。

ト刀を振上げる、淸吉は側にある白木の机を取つて、兩足を持ち机へ首を載せる、これを一時に木の頭、

淸吉　供へて下せえ。

トよろしく思入、西心は鉦をたゝき念佛を唱へる、白蓮は名殘を惜しむ思入、本釣鐘にて、

ひやうし幕

ト幕引附けると、えいと太刀音し、後捕物の鳴物ドン〳〵にてつなぎ、直に引返す。

（表門の場）＝＝本舞臺上の方冠木門、この下に潜り門、續いて門番所、左右は練塀、門番所の脇に小高き用水桶、總て無緣寺表門の體、上下に垂をおろせし四つ手駕籠二挺あり、駕籠舁二人〇△立つてゐる、禪の勤めにて幕明く。

〇　こう相棒、八と權とはどうしやァがつたらう。

△　草鞋を買ひに行つたぎりだが、どこぞで片足上げちやあゐねえか。

〇　てつきりそれに違えねえ。（ト駕籠へ向ひ、）もし旦那、相棒を呼んで來ますから、ちつとの内お待ち下さりませ。さあ、お願ひ申したら搜して來よう。

△いめえましい世話のやけた奴だ。

ト兩人上手へはひる。と潛門より手下の一、二早桶を擔ぎ出來りて、

手一 なんでもこれから夜通しに、腰越から山手へ入らう。

手二 それに今夜は宵闇だから、ふけるにや丁度いゝ。

手一 ちつとも早く名越を越さう。

手二 合點だ。

トこの時上下より、黑四天の捕手四人出て、

捕一 捕つた。（ト十手にて打つてかゝる、）

手一 こりや何となされますする。

捕二 その早桶に隱れ忍ぶは、配符のまはつた大寺正兵衛。

手二 それ知られたら。

ト息杖にて打つてかゝる、禪の勤めになりちよつと立廻つて、手下の一、二花道へ逃げて入る。と捕手は早桶を擔ぎ後を追つて入る、時の鉦・誂への合方になり、潛門より白蓮鼠の着附墨の法衣、網代笠、無緣寺といふ弓張提灯を持ち出來り、捕手の後を見送り思入あつて、

白蓮　寺といふ名に今日までは、死人と見せて早桶に隱れてゐたも底が拔け、四つにかゝつた繩よりも又菱結にからまれて、暗い所へ投込に惡事は重いさし擔ひ、命を棒に振るところ、三次が施主の替りに立ち、首尾よく脫れた今夜の葬式、こいつあおれも浮まれるわい。

ト時の鐘、左右の駕籠の垂を上げると、内に黑四天の捕手二人づゝゐて白蓮を窺ふ。白蓮これを見てぎよつとなし、提灯の灯りを吹消す。捕手つか〳〵と出て、捕つたと十手にて打つてかゝる。白蓮笠を投捨て、ちよつと立廻り、捕手組附き捕押へる、白蓮はね返し、着附法衣取れて以前の裝になり、つか〳〵と花道へ逃げて行く。と花道の揚幕より、同じ捕手四人出て、そつと十手を振上げる、これにて是非なくぢり〳〵と本舞臺へ來る。と以前の捕手と共に八人にて立廻り、門番所の屋根、四つ手駕籠を遣ひ、捕物の立廻りあつて、トゞ捕手は花道へ逃げてはひる、白蓮思入あつて、

最早脫れぬ我命、此の場に於て潔よく。

ト腹を切らうとする。門の内より西心抱子を懷へ入れ、つか〳〵と出てこれを留め、

西心　あもし、正兵衞樣、待つて下さりませ。

白蓮　や、そちは西心、何故我を。

西心　さ、お留め申すはこの坊主、わたくしとても老の身に、明日をも知れず亡き後は、力と頼むはあ

なたばかり、

白蓮　む丶、我とても親もなく、兄弟もなく正兵衛が血筋は甥のこればかり、

西心　それ故死ぬる命を延ばり、どうぞこの子の行末を、

白蓮　とはいへあたりを、捕手が圍めば、

西心　これから寺の裏手を越え、

白蓮　廓を横に火葬場へ、

西心　少しも早く、

白蓮　む丶、一先づこの場を落ち延びん。（トこの時捕手四人出て取圍み、）

捕手　捕つた。

白蓮　何を。

ト眞中に白蓮事大寺正兵衞、下手に西心、捕手掉に列び、よろしく。

幕

十六夜清心（終り）

十干庚小猿拾遺

一富士を契情の山形に比
一重 姉妹異見
九重二羽鷹を辻君の異名に校
一歳 同胞馴染
十三 三茄子を小林の演話に准
一臈別當 兄弟對面

八百屋お七の名を假てお孃吉三が振袖姿誰も娘と夕まぐれに手に入る金の一包明けて名のれば弟の難儀を白髪の土左衛門爺が罪亡しの後生ねがひに佛久兵衛が子故の迷それと悟つて丁子屋の亭主が情におしづまで禁へしのんで件の由哀はつもる泡雪に
通客文里が恩愛噺

吉例曾我初夢 ハテめづらしい齋日三夜 地獄宴の榮

小姓吉三の名を忍ぶお坊吉三が浪人姿未な巧の朝ぼらけに落せし證據の封じ文明けて言はれぬ妹は犬の祟りに和尚吉三が引導渡せし身替り首も釜屋武兵衛が訴人故閑鳥にかゝる四つ辻の櫓の太鼓うち寄つて覺悟を死出のとりべやま袂をしぼる春さめに
俠客傳吉が因果譚

三人吉三廓初買

「三人吉三」は安政七年（萬延元年）正月、作者四十五歳の時市村座に書卸された作で、抒情的又繪畫美に富んだ劇曲であり、作者の代表的世話物の一つであることはこゝに改めて言ふまでもない。百兩の金と、谷峨の作から得たる文里一重の情話と兄妹の戀とを綯ひ交ぜて、纒綿複雜した構成と技巧の妙とは屢々世間の注目を惹いたところである。然し何故か初演の時はさしたる評判でもなかつたが、その後は三人吉三の分が數多く上演されるが、多くは相當の效果を擧げてゐる。お孃吉三が後半四郎になつた岩井粂三郎のやうに見かけは傳法でない優しい役者であることを要するとか、又は文里の如き通客は小團次の如き人を最も適當とすることなどが作者自身の口から殘されてゐるし、又後年までも作者の愛してゐた作の一つであつたことも傳へられてゐる

書卸しの時の主なる役割は、市川小團次（和尚吉三、木屋文里）、岩井粂三郎（八百屋お七、實ハお孃吉三、丁子屋の一重）、關三十郎（土左衞門爺傳吉、丁子屋亭主長兵衞）、河原崎權十郎（お坊吉三）、市村羽左衞門（木屋手代十三郎）、中村歌女之丞（丁字屋の吉野、傳吉娘おとせ）、吾妻市之丞（丁子屋の九重、文里女房おしづ）、市川米十郎（若黨彌作、八百屋久兵衞）、市川白猿（海老名軍藏、釜屋武兵衞）、關花助（紅屋與吉）、松本國五郎（研屋與九兵衞）、坂東又十郎（紅屋與左衞門、丁子屋遣手お爪）、嵐吉六（新造花巻）、坂東村右衞門（鷺ノ首太郎右衞門）等。吉六の顏が中低で散蓮華とまで渾名されてゐた場當りや、隣座に關する當込みなどが混入せられてゐる。序幕だけは原本に據り、二幕目以下は狂言百種本と原本とを參酌して校訂した。

挿繪にしたのは、龜井戸豐國筆の錦繪で、大川端に於ける三人の吉三出會の場面である。

大正十三年九月　　　　編者誌す

庚申堂
賽銭

三人吉三廓初買（三人吉三——七幕）

序幕

萿柄天神社内の場
同松金屋座敷の場
笹目ヶ谷柳原の場
同新井橋の場

〔役名　木屋の手代十三郎、安森の若黨彌次兵衛倅彌作、海老名軍藏、紅屋の倅與吉、紅屋與兵衛、鷺ノ首の太郎右衛門、研師與九兵衛、夜鷹の妓夫けんのみ權次、夜鷹茄餡のおいぼ、同虎河豚のお蝶、同婆あおはぜ。安森の一子森之助。文里女房おしづ、辻君おとせ、木屋の下女おちせ、非人等。〕

（萿柄天神社内の場）——本臺舞上手へ寄せて額堂、この前に梅鉢の紋の附いたる鐵の用水桶、額堂の内に出茶屋。下手に石の鳥居、石の玉垣、梅の立木、總て萿柄天神境内の體。茶屋の内に〇△□◎の町人、中間等四人腰かけてをり、茶見世の亭主茶を出してゐる。この模様大拍子にて幕明く。

亭主　皆様よう御參詣でござります。お茶を一つお上りなされまし ませ。

〇　なんと、今年は天氣都合がいゝので、盛り場は仕合せなことぢやあないか。

△さうとも〳〵それにこの天神の境内は見晴しがいゝから、きつい繁昌だの。

□こう、繁昌といへばこの頃噂の高い、笹目ケ谷の柳原に、おとせとかいふがうぎにいゝ夜鷹が出るぢやあねえか。

◎手前はまだ知らずか、美いの醜いのといつて、夜鷹にやあ勿體ねえ、交り見世の新造でも、あの位なものは少ねえぜ。

□そいつあえら物だの。

◎それで聞きねえ、去年の大晦日の日にやあ三百六十玉を賣つて、そこで一年が三百六十日だから一年と名を替へたといふことだ。

○もし、そりやあ、ほんまの話でござりますか。

◎お前方も試しに行つて見たがいゝやな。

△そいつあ一晩ひやかしに出かけませう。

◎とても行くなら、早く行かう。

□こう、先駈はならねえぜ。

○私どもゝ戻り路に、その夜鷹ををがみませう。

△ をがむといへば、早く參詣をしようぢやあないか。

○ 話にうかれて、肝腎のお參りを忘れたやつさ。

□ そんなら一緒に行きやせう。

亭主 まあお靜においでなさりませ。

○ 茶代はそこへおきましたよ。

皆々 さあ行きませう。

ト皆々鳥居の内へはひる。花道より鷺ノ首の太郎右衞門高利貸の打扮にて、後より研師與九兵衞町人裝にて、刀の風呂敷包を擔ぎて出來る。

與九 おい〳〵そこへ行きなさるのは、太郎右衞門さんぢやあねえか。

太郎 よう、研屋の與九兵衞さん、研與九さんか。

與九 お前のあとを追つかけて歩いてゐたわな。

太郎 私も亦おぬしのあとを、あとをと搜してゐたのだ。

與九 何にしろ額堂で、話しをしようぢやあねえか。

太郎 そんなら、向うで。

與九　さあ來なせえ。（ト兩人茶見世へ來り腰をかける、茶屋の亭主茶を出す。）ときに太郎右衞門さん、此間から お前に話をした丸印の一件はかういふ譯だ。おれが出入屋敷で、當時この武張つた世の中で一刀流の達人と人も知つたる鎌倉昵近のお武家の、海老名軍藏様といふお方が、急に庚申丸といふ短刀をおたづねなさるのだ。所でおれがその短刀をかぎ出して、おれが世話で賣る積りだが、その金にちつと手づかへたから、こなたを賴んだあの百兩の金子、今そのお方が崖の松金屋で取引をする積りだから、どんなに氣を揉んだか知れねえわな。

太郎　そりやあおれも承知だから、お前を捜して來たのだが、その百兩の金は持つて來たがいくら心安い仲でも金錢は他人だ、まづ禮金が五分で利息が五兩一分といふところだが、金が大きいから十兩一分で、こいつが二兩二分禮金が五分で五兩よ、まづ七兩二分はてんいく引で、この證文の月が切れると罰金を取るが、そこは手前も承知だらうの。

與九　おつと皆までいふべからず、そこは研屋の與九兵衞だ、お前の金を借りるからは利の高いのは合點だ。おれも隨分高利では、苦勞した人間だわな。

太郎　それさへ承知ならこゝで金を渡さうがの、七兩二分はてんいく引だよ。

與九　はて承知だといふことよ、お前もよつぽど慾肥りだの。

太郎　知れたことよ、酒を呑まねえから他に肥りやうがねえわさ。
與九　何にしろ海老名樣のおいでまで、松金屋で一ぱいやらうぢやあねえか。
太郎　そいつあ妙だ、然し割前ではあるまいの。
與九　はておれも研屋の與九兵衛だ、落附いておいでなせえ。
太郎　そんなら旦那、
與九　さあおいでなせえ。

ト兩人上手へ入る。花道より文里女房おしづ、人柄のよき世話女房の打扮にて、後より下女おちせ風呂敷包みを持ち、丁稚三太おしづの子鐵之助を脊負ひて出來り。

しづ　これおちせや、今日はいつもと違うて、坊は家へおいて來たほどに、天神樣へおまゐり申して戻りには、初瀨の觀音樣へ行つて、何ぞ土產を買うて行きませうわいな。
ちせ　ほんにそれがよろしうござりませう、おゝ三太どのお前にも何ぞねだつて上げようわいな。
三太　なんの、おれよりはお前の好きな金龍山でも。
ちせ　えゝも、何ぞといふと私ばかり。
しづ　又爭ひをしやるかいの。さあ、おまゐりをしませうわいの。

三太　もし、お上さん、この梅の盛りを御覧なされませ、見事なことではござんせぬかいなあ。

しづ　おゝ見事に咲きましたわいの。花でさへこのやうに春を違へず開くのに、何の因果でこのやうに（トおちせと顔見合せたが、氣を替へて）お茶を一つ貰うてたも。

ちせ　はい／＼畏りました。（ト茶を汲んで來て、）もしお上樣、旦那樣は今日も武者小路のお屋敷から、まだお歸りがござりませぬが、お遲いことでござりますな。

三太　どうで今夜も化粧坂のお屋敷だから、歸る氣づかひはございません。

しづ　またそのやうなことを言やるか、口出しをしやるときくこつてはないぞや。

ちせ　まことに、三太どのはおしやべりで困りますよ。

しづ　さあ／＼、神さんへおまゐりしませうわいの。

ト上手より紅屋與兵衞更けたる町人裝にて出來り、おしづを見て、

與兵　おゝ娘、天神樣へおまゐりか、見れば今日は坊が見えぬが、どうぞさつしやつたか。

しづ　いえ／＼今日はちと外へ廻らねばならぬ故、家へ殘してまゐりましたわいなあ。さうして父さんには何處へおいでゞござんすぞいなあ。

與兵　ちつと生業用があつて切通しまで行くのだが、そなたにいろ／＼話しもあり、わざ／＼逢ひに行

かうと思つてゐたところ、つい立ちながら話もできぬ。丁度食事時分ぢや、松金屋へ行てゆつくり話さう。お〻おちせに三太か、お〻御苦勞々々。

ちせ　いつもお達者で、おめでたうござります。

しづ　そんなら一緒に參じませうわいなあ。

與兵　さあ行きませう。

ト與兵衞鐵之助の手を引きて先に立ち、皆々附添ひ上手へはひる。花道より海老名軍藏武張つたる打扮にて出來り、後より門弟四人從ひ、安森の一子森之助を圍みて引立て出來り、舞臺へ森之助を引きすゑる。

軍藏　こりや〳〵門弟衆、そのわッぱめは如何いたしたのでござる。

門一　先生お聞き下され、この小童めはちつぽけな形をして、身共が鞘當をしたら、挨拶を致せと吐かしをる故。

門二　形に似合はぬこしやくもの、あまり面憎く存じました故。

門三　こまッちやくれた餓鬼が言分。

門三　以後の見せしめ、存分に致さうではござらぬか。

門一　（森之助の刀を抜き取り見て、）いづれも御覧なされ、鞘當致せしの挨拶のと、口は立派に利く奴が、豆腐も切れぬ竹光でござるわ。

門二　犬脅しにもなりはいたさぬ。こんなことを言ひかけて、物取いたす巾着切かも知れませぬ。

門三　こんな奴が油斷がならぬて。

門四　いつそこの場でひつくゝつて。

ト門弟の三、四兩人森之助の兩の手を取らうとするを、森之助ぐつと捻ぢあげて、

森之　假令中身は竹光でも腰に帶せば武士の魂、手籠になされしお侍樣、その分には致されませぬぞ。

ト兩人を左右へ投げ退け、きつとなる。

軍藏　なるほど、形に似合はぬ逞しき小悴、して其方は何者の悴だ。

森之　お尋ねにあづかりまして名乘るも便なきことながら、安森源次兵衛が悴森之助と申す者でござります。

軍藏　なに、安森が悴とな、いや親子とて爭はれぬ、何處やらが似てをるわ、はて氣の毒なものだなあ。

門一　元は鎌倉昵近で、刀劍目利の達人と、自慢顔したその罰で、

門二　頼朝公より預りの、庚申丸の短刀を盗人はひつて奪ひとられ、その越度にて切腹なし、

門三　家は斷絶それからは、母親妹ともぐ〵に微な暮しをすると聞いたが、
門四　謠をうたつて袖乞ひの長々の浪人者か、見れば見るほど、
皆々　みじめな態だ、むゝはゝゝゝゝ。
軍藏　こりやその筈でもあらうわえ、お上の祿を食みながら、目利々々と目を掠め、刀の賣買道具屋武士、潔白な侍はこの如く御奉公勤むるも、こりや天理と申すもの、この軍藏も遺恨ある源次兵衞、その腹癒せに短刀は身共が窃かに、いや、身共の前をも憚からず、慮外な小忰不便ながら、手討にせねば、身が一分が立たぬわえ。
森之　小身ながら私も武士の忰でござりまする、お手討とあるからはお相手になり、その上で命はあなたに差上げませう。
軍藏　いゝ覺悟だ、子供を相手に大人氣なけれど、あまり口が立派故、望みに任せ命を取るぞよ。
森之　御念には及びませぬ。
軍藏　いづれも、この小忰を引出さつせえ。
四人　心得ました。
　　ト門弟四人森之助を無慙に引立て前へ出す、軍藏刀を拔く、此時花道の揚幕にて、

彌作　暫く〱、暫くお待ち下されませう。

ト ばた〱になり安森の若黨彌次兵衞の忰彌作、古き紋附を着たる若黨裝にて走り出來り、

まづ〱暫くお待ち下さりませ。何か樣子は存じませぬが、いゝいゝよたけもないこの子供、お手討にでもなさるゝ權幕、見ますればお歷々のお武家樣、どうぞこの場の所はお詫言を申しまする。お助けなされて下さりませ。

門一　やい〱、むさくろしい態をしろいで、

門二　先生の前をも憚からず、

門三　橫合から入らざる詫言、

皆々　すつこんでをらぬかえ。

彌作　ではござりませうが、そこを何卒御了簡。

軍藏　いゝや了簡ならぬ、彼れが口より相手になると、子供ながらも申した故、是非とも相手にいたさにやならぬ。

皆々　えゝ邪魔な奴め、退きをらぬか。

彌作　いづれも樣、まあ〱お待ち下されませ。

軍藏　して〳〵われは何者だ。

彌作　何をお隠し申しませう、私は安森の若黨彌次兵衛が倅彌作と申しまするもの、可愛さうにこのお子のみじめな裝を御覽じませ。(トホロリと思入あつて、)お話し申すも涙の種、親御源次兵衛樣にはお預りの短刀を盗まれたる申譯に御切腹、つひにお家は斷絶にて浪人なして微なお暮し、お袋樣の手しほにてお育ちなさるゝその内に、御老病とは申しながら、瘦せる世帶に子供の介抱、つひには苦勞をなされ死に、又お兄樣の吉三樣には御放蕩にて御行方知れず、お姉樣のお元樣には母御樣の御病氣に、藥の代も内證の貧の病ひにその身をば吉原の勤め奉公、今では丁子屋の一重とて全盛なれど勤めの身の上、かゝる手段もないまゝに私親子が血の涙で、お世話を致すこのお子樣、いゝゝしがない活しの其中でも、どうぞ紛失の短刀を詮議し出しお家の再興、身を粉に碎く我々親子、以前の誼を思召し、お許しなされて下さりませ。

門一　えゝ聞きたくもねえ長談議、われの尋ぬる短刀も疾うにこつちが。

軍藏　こりや、(ト押へて、)不便には存ずれど、どうあつても了簡ならぬ。

森之　さあ軍藏樣、覺悟は極めた、森之助お相手になりませう。

彌作　これはしたり森之助樣、又そのやうなことをおつしやりますか。このお子樣が何とおつしやりま

しても、お相手にはなりませぬ。その替りには私を御存分になされまして、それで御了簡なされて下さりませ。

軍藏　了簡ならぬ所なれど、左樣に賴むそちが心底、えゝよいわ、以前の誼だ汝が替りとあるからは、聞入れてもくれうわ。

彌作　左樣なら私で御容赦なされて下さりますか、えゝ有難うござりまする。

門一　さあ下郎め、望みの通り名代に。

門二　不足ながらかうしてくれるわ。

ト門弟二人彌作を引立て前へ突出し足蹴にする、彌作起上らうとするを二人の門弟彌作の肩へ足をかける、彌作きつとなつたが思ひ返してぢつとしてゐる。

門三
門四　えゝ、張合ひのねえ、

ト又前へ蹴倒す、彌作起上らうとするを軍藏持つたる煙管を逆手に持ち、彌作の眉間を割る。森之助これを見て立寄らうとするを彌作留め、そのまゝ俯向になる。

軍藏　安いものだが、これで了簡いたしてくれるわ。

門一　主が主なら家來まで、あのみすぼらしい裝わえ。

門二　ときに先生、彼奴等にかゝつて餘ほどの暇どり、時刻もよろしうござらう。
軍藏　いかさま、松金屋で待ちわびてをるであらう。
四人　そんなら、先生。
軍藏　どりや、參らうかえ。
　　ト軍藏先に立ち、皆々上手へはひる。
森之　これ彌作、堪忍してくれ、おりや悔しうて〳〵ならぬわいの。
彌作　あゝ御尤もでござりまする。あの軍藏といふ奴が、並大抵の奴ぢやござりませぬ。この敵はきつと私がとりますほどに、必ずお氣遣ひなされまするな。あゝ世が世の時であらうなら、指でもささせることぢやござりませねど何を申すも今の成行、又來る春もござりまするほどにお案じなさることはござりませぬ。さあ〳〵親父めも嘸案じてをりませう、私がお供いたして參りませう。
（ト森之助の手をとり塵を拂ひて立上り、肩入の紋附へ血汐の附きしを見て思入あつて、）あゝ世の盛衰とは言ひながら、木綿布子の肩入へ殘る形見の御紋付、着物は垢に染むるとも心を汚さぬこの彌作、いかにお主の名代に手籠めに逢ふとは云ひながら、眉間に受けしこの疵もたゞ堪忍が大事故胸を擦つて怺へしが、血汐をあやした海老名軍藏、思へば〳〵。

ト無念の思入にて、思はず森之助の手を固く握る。

森之　あいたゝゝゝ。（ト叫ぶ、彌作これにてびつくりして氣を替へ）

彌作　さゝ、まゐりませう。

ト兩人上手へ行きかける思入にて、道具廻る。

（松金屋座敷の場）＝本舞臺常足の二重、上手障子屋臺、正面床の間、下手後へ下げて建仁寺垣、遠州透しのある庇附の門、いつもの所枝折戸。下手に梅の立木。總て松金屋座敷の體。こゝに紅屋與兵衞、おしづ住ひ、おちせ料理を載せし廣蓋を片寄せてゐる。

しづ　これおちせ、あの三太はどこへ行つてゐるであらう、困りものぢやの。

ちせ　いえ〳〵大方そこらにをりませう、私が見てまゐりませう。

與兵　大儀ながらさうしてくりやれ。

ちせ　畏りました、どりや行てまゐりませう。（ト下手へはひる。）

與兵　これ娘、今更改めいふも異なものなれど、そなたの夫文藏殿、世間の噂が耳へ入り、聞けば文里とやらいふて二年此方廓通ひ、内を外に遊び歩いて、假令有徳な身代でも廓の金には詰る慣ひ、

うか〳〵する間に家藏をたふしてしまふは知れたこと、それも若い者でもあれば、又心のしまる時節もあれど、四十歳に近い文里殿一人身でもあることか子供も二人ありながら、四十といへばもう初老、譬にもいふ四十下りの色事とやら、ありやもうなほる氣遣ひはない。こゝらが思案の極めどき、そなたもまだ老い朽ちた身ではなし、一つも年の若い内思ひきつて別れてしまひ、身の片附もせねばなるまい、まあよう考へて見たがよいぞや。

しづ　お前がそのやうに御心配なさるゝのは有難うございますが、つい一通りに申しますとそのやうなものなれど、主人も屋敷勤め故、多くは役人衆への權門に厭と言はれぬ仲間の附合、また、たまさかは氣晴らしに行かしやんすこともあれど、私や子供をふりすてゝ女郎藝妓に見返るやうな、そんな心でないことは、年來連添ふ夫ぢやものよう知つてをりまする。よし又まことの放埓でも、一旦夫と定めた文藏殿、子まで生したる二人の仲、假令嫌はれ去られようとも、別れる心はござんせぬわいなあ。

與兵　そなたの爲めを思ふ故、事を分けてこの親が、これほどいふのも聞入れぬか。

しづ　假令お前樣のお言葉背き、御勘當を受けましても。

與兵　あの勘當受けても、別れることは、

しづ　お許しなされて下さりませ（ト泣伏す。與兵衞思入あつて手をうち、）

與兵　あゝ感心なものだ、見上げた、娘、それでこそ天晴貞女、假令どのやうな貧しい暮しをするとても、夫に附くが女の操、いやもう年寄つたこの親も恥入るわい。さゝもうよい、その貞節な詞を聞く上は、おれも安堵ぢや、子供のあるこなた小遣錢にも困るであらう、澤山はないがこれをやるほどに、心おきなう遣うたがよい。（ト胴卷より紙に包みし金を出しおしづに渡す。）

しづ　いえ〳〵それには及びませぬ。もし困つたその時は、おねだり申しまする。

與兵　いや〳〵これはおれが心ばかりぢや。孫に何ぞ買つてやつてくりやれ。（ト無理に押しやる。）

しづ　そんならお貰ひ申しますわいなあ。

與兵　觀音樣へまゐるなら、おれも一緒に參詣しませう。

ト手をたゝく、女中出來りて、

女中　これはお客樣、お構ひ申しませぬ、何ぞ御用でござりますか。

與兵　大きに長居をしました。勘定を渡します。（ト紙入より金を出し紙に包みて渡す。）

女中　これは有難うござります、これではお剩錢がさんじますわいな。

與兵　いや〳〵剩錢は、お前煙草でも買うて。

女中　それは有難うございます。御新造、よろしく旦那様へ。

　　ト女中廣蓋を持ち奥へはひる。下手よりおちせ、丁稚三太鐵之助を脊負ひて出來る。

しづ　これはしたり三太、何處へ行つて遊んでゐたのぢや、ちと氣を附けたがよいぞや。

與兵　いや〱、叱らぬがよい〱。

　　ト此内おちせおしづと與兵衞の履物をなほし、皆々門口へ出る、奥より女中出て、

女中　まあお靜においでなされませ。

與兵　大きにお世話になりました。

しづ　さあ行きませうわいな。

　　ト鳥追通り神樂になり、皆々花道へはひる。女中は奥へはひる、と奥より軍藏先に門弟四人、後より
　　太郎右衞門、與九兵衞等附いて出來り、

軍藏　扨、今日は與九兵衞、何かと世話であつたな。

與九　いえもう、何も家業でございます、お望みの短刀さへお手に入りますれば、私は本望でございま
す、へゝゝゝゝ。えゝ卽ちこの人が、太郎右衞門でございまする、何分この以後ともお目かけら
れて下さりませ。

太郎　へい〳〵、研屋の與九兵衛殿とは入懇に致しまする、鷺ノ首の太郎右衛門と申しまする金貸渡世、生れは浪花の遊女町で、誰知らぬものもない烏の酷金、高利一通りの損料なら、恐らく私の持前の夜具から蒲團、帶、合羽、後家、尼、人の女房まで、段々の貸しやうは私が家の損料もの、もしもそんな御用なら頼ましやんせ。へお頼みあれと言ひ入るゝ。（ト義太夫のやうに語り、）あんまりしやべつて、おゝしんど、どなたか私に茶々ひとつ。

與九　えゝい、加減にしなせえな、いや、よくしやべる男だ。

軍藏　いや氣輕で面白いわえ、門弟衆太郎右衛門に、酒を一つ勸めて下され。

ト門弟の一手を叩く、女中酒肴を持來る。

門一　さあ〳〵太郎右衛門とやら、一つ呑みやれ〳〵。

門二　拙者がお酌をいたさう。

太郎　へい〳〵有難うはござりまするが、先づ生業が肝腎、與九兵衛殿委細はさつき話した通り、この金子をお渡し申して下さい。

與九　おつとよし〳〵。（ト百兩包みを受取り、封印を改め見て、）こりや封のまゝで間違ひもあるまい、先生卽ち百金お受取り下さりませ。

軍藏　たしかに受取り申した。

ト軍藏百兩包みを胴卷へ入れ懷中し、紙入より紙に包みし金を出し、

これ、與九兵衛先刻話しの禮金ぢや、あの者に渡してくりやれ。

與九　畏りました、太郎右衛門殿禮金ぢや、たしかに渡しましたぞ。（ト太郎右衛門に渡す。）

太郎　有難うござりまする。まづこれをお貰ひ申しまして、又女に騙される元手ができました。ちと私は用事もござりますれば、御免を蒙りまして、お先へお暇いたし度うござりまする。

與九　はてまあ、いゝではないか。

太郎　今のお金で歸り道に、ちよつと彼女の顏が見たいわ。

與九　北國ならば一緒に行かうか。

太郎　ところがこゝから筋違に、柳原の土手下で。

與九　扨は夜鷹の一年か。

太郎　おつと、船中にて左樣なことは申すべからず。左樣ならば旦那樣、いづれもさま。

四人　御苦勞々々。

ト太郎右衛門門口へ出る、與九兵衛立ちかゝりて、

與九　そんなら太郎右衛門さん、柳の下で。
太郎　や。
與九　おしげりよ。
太郎　とんだ蝙蝠だ。（ト花道へはひる。）
門一　ときに先生、もう木屋文藏方より短刀を、持參致して見えさうなものでござる。
三人　だいぶおそいことではござらぬか。
軍藏　いやもう見えるであらう、まあ待合す間與九兵衛一つ呑みやれ。
與九　有難うござります。
軍藏　ときに與九兵衛、あの短刀の紛失より十年あまりも相立つに、どういふ手から廻り廻つて文藏方へまゐつたのであらう。
與九　いえ、お聞きなされませ、妙なことがあるものでござります。二月ほど後のことでござりましたが、川浚ひの人足が川の中から掘り出したと私に見せましたが、少し見所がござりますから、何はなしに二分で買ひまして、少し研いで見まするると、金色と言ひ燒刄と云ひ、一通りの物ではないと思ひまして、當時の目利でござります故、木屋文藏に見せたところ、五十兩なら引取ると申

します故、二分の物が五十兩、直にその場で賣りましたが、もし惡錢は身に附かずとはよく申したもの、僅一月たつかた〻ぬにみんな耗つてしまひました。所であとで聞けば、お前樣が豫てお尋ねなさる品とのこと、早くそれを聞いたなら、直にあなたへ上げますもの、と云つたところが後の祭り、あの文藏が手に入つたばつかりで、もう百兩と直が定まつて、さる大名へ賣れたとのこと、それからあなたがお賴み故、元賣主のことでございますから、やう〳〵のことでこつちの手へ讓る積りでござりまする。

軍藏　川へ沈んだ短刀が廻り廻つて、おれが手へはひるといふも、これも緣の深いのだ。何を隱さうあの短刀は、安森源次兵衞が紛失させた一腰なれど、今身共が手より上へ差上げるその時には、一足飛の立身出世、そこで貴樣を賴んで高利の金で求めるのだ。

與九　首尾よくまゐつたその上では、たんまりお禮を。

軍藏　言ふまでもない、望み次第ぢや。

門一　與九兵衞、うまい罠に取りついたな。

與九　今年は初春早々から、どうか運がなほつたわえ。この圖に乘つてこれからは、金の棒でも掘出さねばなりませぬ。

ト流行唄になり、花道より木屋の手代十三郎箱入の短刀を風呂敷に包みしを持ち出來り、

十三　春になつてもそは〳〵と、用が多いせゐか日が短いやうだ。今日海老名樣がこの松金屋においでなさるとのこと、どうぞおいでなされぱよいが。（ト枝折戸より内を窺ひ腰を屈め、）へい、御免なされませ、木屋文藏が手代十三郎でござります。

與九　（見て、）よう木屋の手代十三郎殿、さあ〳〵旦那樣も先刻よりのお待兼だ。さあこつちへ入らつしやれ〳〵。

十三　左樣なら御免なされて下さりませ。

與九　軍藏樣、これが卽ち木屋の手代十三と申しまする者、お見知りおかれ下さりませ。

十三　下調法者でござりまする、何分御贔屓をお願ひ申しまする。

軍藏　さあ〳〵十三とやら、そのやうに堅くいたしては話ができぬ、遠慮なくこれへまゐれ。して、約束の短刀は持參いたしたか。

十三　へい卽ち持參仕りましてござりまする。（ト風呂敷を解き、箱のまゝ軍藏の前へおき、）御免下さりませ。

軍藏　（取つて改め見て、）なるほど庚申丸に相違ない、卽ち約束の代金渡すであらう。（ト以前の百兩包みを出

し、)改めて請取りやれ。

十三　有難うござりまする。たしかに頂戴仕りました。お請取を差上げませう。(ト腰より矢立を出す。)

與九　なに、汝へ旦那から直々にお渡しなさる金子、なに請取にやあ及ばねえ、先づこれで御用も調つたといふもの、十三郎今日はゆつくり一口頂戴致すがいゝ。

十三　有難うござりますが、ちと今日はお屋敷樣へ廻らねばなりませぬし、それに御酒は一向不調法でござりますし、今日はお預け申しまするでござりまする。

門一　さうでもあらうが先生が、折角の思召だ、是非一つ呑みやれ〳〵。(ト無理に杯をさす。)

十三　實に御酒は食べられませぬ。

門一　野暮を申すな、色事でもするものが、酒が呑めぬといふことがあるものか。

門二　身共が酌を致さう、是非一つ呑んでくりやれ。

門三　これ〳〵十三、皆樣のおすゝめだ、一つ呑め〳〵。

十三　左樣なればお杯ばかり頂戴致しまするでござりまする。(ト杯を受ける、と門弟は無理に酌をする十三郎一つ呑んで、)與九兵衛樣、憚りながら。

與九　これさ〳〵どうしたものだ、あまり見事だ、も一つお押へだ、改めて〳〵。

十三　それでは實に困ります。
皆々　我々どもが酌では、呑めぬと申すのか。
十三　左樣ではございませぬ。
門一　まあ〳〵いゝわ、も一つ受けろ、呑めずば助ける者もあるわ、さあ〳〵お酌だ〳〵。
　　ト又無理に酌なする、十三郎迷惑なる思入。
門二　これ〳〵十三、ちと酒の肴に娘子供にほれられた話をしやれ。
十三　どういたしまして、そのやうなことは一向存じませぬ。
門三　嘘言を申せ、たしかな所を見屆けておいたわ。
門四　だいぶお酌人なぞに情人があるさうだ。
門一　さあ話を聞いてあやかりたい、どうだ〳〵。
十三　御常談ばつかりおつしやりまする、まことに食べられませぬ口で、御酒を頂戴いたしまして、胸がどき〳〵いたしまする。與九兵衞樣どうぞ私は、お許しなされて下さりませ。
與九　まあよいではないか、そんならどうでもお暇いたすか。
十三　旦那樣、皆樣、失禮ではございまするが、お先へお暇頂戴いたしまする、與九兵衞樣よろしく

與九　御禮をお願ひ申します。（ト立上るを與九兵衞止めて、）

與九　あゝこれ十三殿、もう日が暮れるに物騷だ、提灯を持つて行かつしやい。（ト手をたゝき、）女中衆女中衆、提灯を一つ下さい。

十三　いえ〳〵それには及びませぬ、月夜でござりますから有難う存じまする。（ト又行きかける。）

與九　これさ、どうしたものだ、無提灯で歩くものではない、そして歸り道は淋しい道だ、是非提灯は持つて行くがよい。

ト此內女中松金屋と印したる小田原提灯を持來り、

女中　へい、お提灯を。（ト與九兵衞に渡し奧へはひる。）

與九　おい〳〵。さあ〳〵、これを持つて行かつしやい。

十三　折角の御親切、お借り申して參りまする。左樣なれば御免なされて下さりませ。（ト門口へ出て、）あゝ今のお酒で寒くなつた。（ト花道へはひる。）

門一　これ與九兵衞、何で嫌がる提灯を。無理に持たせてやつたのだ。

門二　貴樣もよつぽど粹興者だ。

門三　うつちやつておけばよいに。

與九　そこは研屋の與九兵衞、無駄に持たせてやりはいたしませぬ。
四人　そんなら、何ぞ役にたつのか。
與九　ちつと趣向がござりまするて。
四人　して、その趣向は。
與九　趣向といふは、もし、（ト軍藏始め皆々に囁く。）
四人　すりや、提灯を目印しに、非人どもを語らつて、
與九　細工はりう〳〵仕上げの出來を御覽じませ。
軍藏　はて、惡い事には拔目のない奴だわえ。何にいたせ明日鎌倉表へ差上ぐれば、賣物には花とやらこの短刀へ磨きをかけてくりやれ。（ト短刀を與九兵衞に渡す。）
與九　畏りましてござりまする。この短刀を研きあげて、鎌倉御所へ差上ぐれば、
軍藏　身共は立身、遺恨あるあの安森は生涯埋れ木、
門一　われ〳〵とても先生に、
門二　附き從へばとも〴〵に、
門三　榮耀榮華のし飽きをして、

門四　一生暮らす活計歡樂。
與九　この圖を外さず大締に、一つ此處で締めませうか。
軍藏　何でも物は祝ひからだ。
　　　ト皆々立上りよい〳〵と手を打つ、奧にて、
大勢　はあい。（ト大きくいふ。）
軍藏　へゝ、おきやあがれ。
　　　ト賑やかな流行唄になり、軍藏與九兵衞に囁く、四人は四邊を窺ひ、この道具廻る。

（笹目ヶ谷柳原の場）——本舞臺一面に屋根をおろし緣をあげし床見世、下の方片附けし出茶屋、大樹の柳澤山にあり、總て笹目ヶ谷柳原の體。こゝに以前の太郎右衞門においぼ、おてふ、おはぜ等三人の夜鷹喰つてかゝつてなり、妓夫けんのみの權次これを留めてゐる。

三人　いえ〳〵、了簡ならねえ〳〵、坊主にしにやあ了簡ならねえ。
太郎　これ〳〵何にしろ頭を放してくれ、痛え〳〵。
權次（中へ割つて入りて、）これさ〳〵お前方もどうしたものだ。いつも馴染の顏の知れたお客ぢやねえ

か、何にしろどういふ譯だか聞かせなせえな、人が見ても見つともねえわな。

てふ　おい／＼權次さん聞いてくんねえ、この野郎はおいら達が久しい馴染の客人だが、

いぼ　今夜私等を出しぬいて、おとせさんの所へ行つた故、こんな性惡は見せしめの爲めだ、

はぜ　くり／＼坊主にした上で、瘤の一つもこせえにやあ腹が癒ねえよ。

權次　そりやあお前方が尤もだ。旦那お前があんまり性惡をするからだ。この妓達を出しぬいておとせさんを買はうとは、張と意氣地は吉原でも柳原でも替りはねえわな。

てふ　もう權次さんうつちやつておいておくれ、存分言はにやあ腹が癒ぬ、もし土佛の太郎さんどぶ太郎さん、今權次さんのいふ通り、全盛な花魁でも私がやうな夜鷹でも、勤めといふ字に二つはない、あのおとせさんに見替へられ、そりやもうおとせさんは年は若し、飯田町ぢやあないけれど中高の器量好し、私はこんなおたふくだが、見返られては顏が立たない。

いぼ　何を言つても分からないこんな人に兎やかうと、口數をきくのは無駄だ、何にも言はずにおはぜさん、坊主に早くしようぢやないか。

はぜ　坊主にするにも剃刀がないから、一摑みづゝ引つこぬかうぢやないか、まづ小鬢から拔き始めよう。

兩人　それがいゝ〳〵。

ト三人太郎右衛門にかぶりつき、頭の毛を拔かうとする、太郎右衛門逃廻りて、

太郎　あゝこれ〳〵待つてくれ〳〵、たんともねえこの毛をば、引ッこぬかれてたまるものか、許してくれ〳〵。

てふ　いや〳〵許さぬ〳〵、一摑みづゝ毛を拔いて、

三人　坊主にしろ〳〵。

太郎　こいつはたまらぬ〳〵、逃げるが勝だ。

ト四人追かけ廻る。此の前方に折助出來りてともに追廻しながら、權次と共に皆々上手へ駈けてはひる。と花道より紅屋の忰與吉、町人の打扮にて出來り、後より十三郎提灯を持ちて出來り、花道にて、

十三　それへおいでなされますするは、紅屋の若旦那與吉樣ではござりませぬか。

與吉（すかし見て、）さういふそなたは、木屋の手代十三殿か。

十三　へい、左樣でござりまする。してまあ、あなたは今時分、どちらへおいでなされまする。まあ何にしろ、そこまで御一緒にまゐりませう。おあぶなうござります。

ト十三郎先に立ちて本舞臺へ來る。

與吉　別に案じることでもないが、今日親父樣が、荏柄の天神樣が惠方にあたるとおつしやつて、おまゐりにおいでなされた內、お屋敷から急な御用が出て、今までお待ち申しても、あんまりお歸りが遲い故、お迎ひがてらお話しも申したし、それでこつちへ來たのぢやわいの。

十三　左樣でござりますか、まあこの暗いのにお手代衆でも、お連れなさればよいのに、一人夜道はあぶなうござります。

與吉　このやうに遲うなる積りではなかつたが、つい一二軒寄り道があつた故、思はず遲うなりましたわいの。

十三　お父さまのお迎ひなれば、なるたけ道をお急ぎなされませ、この提灯を差上げますほどに、少しも早うお歸りなされませ。

與吉　それはまあ忝いが、私が提灯を借りましては、お前がやつぱり困るわいの。

十三　いえ〳〵私は暗くてもだいじござりませぬ、それについ先の古着店まで參りますれば、借ります所もござりまする。御遠慮なしにお持ちなされませ。

與吉　そんなら借りてもだいじござりませぬか。

十三　然し、道を氣を附けておいでなされませ。

ト蠟燭の心を切り與吉に渡す、此内後の夜鷹小屋より、おとせ夜鷹の打扮にて出で、十三郎たちつと見てゐる。

與吉　左樣なれば若旦那。

十三　お早うおいでなされませ。
ト與吉は提灯を持ち上手へはひる。十三郎下手へ行かうとするを、おとせ出て十三郎の傍へ行き、恥かしさうに「もし」と袖を引く、この時月出で兩人顏を見合せ、思入あつて、

とせ　私を留めたのは、何ぞ用でもござりますのか。

十三　なに、遊べとは。むゝ、そんならお前は。
ト扠は夜鷹かといふ思入、おとせは恥しき思入にて顏を隱す。

とせ　どうぞお遊びなされて下さりませ。
この頃人の噂をする、親孝行な辻君どのとかいふ娘は、もしやお前のことではござらぬか。

十三　はい、私でござりますわいな。

十三　(月影にてすかし見、思入あつて、)人の話に違ひなく、なるほど美しい娘御ぢやが、定めて樣子のあ

ることであらうけれど、なんでこのやうなさもしい世渡りをさつしやるのだ。

とせ　お尋ねにあづかりまして、お話し申すも恥かしながら、このやうな賤しい業をいたすのも、いたづらではない中譯、たつた一人の父さんを養ふ爲めにあられもない、恥しいこの世渡り、お察しなされて下さりませ。

十三　親孝行とは聞きたれど、若いに似合はぬ頼もしいこと、私も親がある身なれば人事とは思ひませぬ。これはあまり少しぢやが、その親御の好きな物でも買うてやつて下され。(ト金を紙に包みやる。)

とせ　これはまあ有難うござりますれど、通りがゝりのあなた様に、さもしいお話をお聞かせ申し、唯お貰ひ申しては、どうも心が濟みませぬ。

十三　それは志しで上げる金、濟むも濟まぬも入らぬから、まあ取つておきなさい。

とせ　それでは、どうも私の心が、

ト十三郎おとせの顏を見入つてゐて、

十三　初めて逢つた一年どの、親孝行と聞いた故心の内の優しさに、

とせ　賤しい姿で恥しい、私やあなたに思はずも、

十三　えゝ、

とせ　御親切にあまへまして、ちとお願ひがござりますが、お聞きなされて下さりますか。
十三　いかなる願ひか知らねども、袖振り合ふも他生の緣、
とせ　お聞きなされて下さりますなら、こゝは往來、あの小屋で、
十三　その話をば聞きませうか。（ト此時月隱れる。）
とせ　思はぬ雲で宵月を、
十三　隱すは幸ひ、
とせ　さあ、ござんせいなあ。
トおとせ先に十三郎附いて上の方へはひる。と上手より以前の與九兵衞尻端折り頰冠りにて出來り、後より非人四人ほど從ひ來り、
非一　もし、わつちらへお賴みとは、
三人　どういふ仕事でございます。
與九　賴みといふは外でもない、今この所を年の頃は二十歲ばかりで色の白い、すつぺがしの靑二才が松金屋と書いた、小田原提灯を付けて通るが、その提灯が目印だ、其奴にちと遺恨がある故、見附次第にどしい打に打ちすゑて貰ひたいのだ。

非一　こう〳〵今旦那の話しの二才は、たつた今こゝを通つて提灯に、
非二　松金屋と書いてあつたぜ。
非三　てつきり、彼奴に違えねえ。
非四　遠くは行くめえ追つかけて。
與九　骨は盗まぬ、まんまと野郎をやッつければ、酒手はたんまりしめさせるわ。
非一　そりやあ大丈夫だ、氣遣ひをなさいますな。
非二　少しも早く追附いて。
與九　必ず、ぬかるな。
皆々　合點だ。

ト皆々上手へ逸散に走りはひる。引違へて、以前の太郎右衞門片鬢ぬかれて逃げて出來り、後より三人の夜鷹追つかけ出る、折助も附いてわや〳〵と出來る。

太郎　あゝこれ〳〵、片こ鬢ぬいたら了簡してくれ〳〵。
三人　いやだ〳〵兩方ともぬかねえ内は、了簡ならねえ〳〵。
太郎　それはあんまり情ない、片こ鬢で澤山だ、あゝ小鬢が痛いわ、いゝいゝ、こびんと思つて許してくれ、許し

てくれ。

三人　いゝや、いやだ〳〵。

皆々　えゝ、ひつこぬけ〳〵、

太郎　えゝ、情ない、許してくれ〳〵。

ト逃廻るを三人の夜鷹追つかけ廻る、此内太郎右衞門床見世の蔭へ逃げてはひる。と、この途端に十三郎上の方より逃げて出來り、うろ〳〵してゐる、折助十三郎を見附けて太郎右衞門と思ひ、

折助　やあ、今の野郎が出て來やあがつた。

皆々　小鬢をひつこぬけ〳〵。

ト十三郎を皆々追廻す、十三郎びつくりして上手へ逃げてはひる。と床見世の蔭より、太郎右衞門逃げて出來りしどろな裝になり花道へ逃げて行く、後より夜鷹三人出來り、花道へ追ひかけ皆々はひる。

權次　これさ〳〵いゝ加減にしておきねえ、彼奴ばかりにかゝつてゐちやあ、生業ができめえぢやあねえか、ほんたうに困つたもんだぜ。

ト花道の方を見て獨語を言つてゐる、此内おとせ上の方よりうろ〳〵出來りて、

とせ　もし〳〵權次さん、今こゝに若いお人は見えなんだかえ。

權次　おらあ何だか氣が附かねえ、今の騷ぎでがつかりしたわな。
とせ　どこへ行きなさんしたやら、も一度逢うて何かの話を。
權次　話しどころか、あの肥大漢の太郎右衞門が性惡をしたので、坊主にすると亂騷ぎさ。
とせ　それにしても今のお方、今の騷ぎで逃げて行きなさんしたか。
權次　逃げたどころか一生懸命さ、よせばよいのにおてふやおいぼ、あのおはぜまでいゝ年をして追ひかけて行きやしたわな。
とせ　追ひかけようにも所も聞かず、後に殘つたこの財布、（ト十三郎の取落したる財布を袖にて隱し、思入あつて、）中はたしかによほどなお金。
權次　なに、金え。
とせ　（びつくりして。）いえさ、おかねさんはどうしたやら。
權次　あゝ婆あお兼かえ、今夜は寸白で腰が延せねえといふことだ。
とせ　嘸お困りでござんせう、どうか尋ねて。
權次　いゝ藥でもありやすかね。
とせ　えゝ（ト心附き、）わたしも寸白が持病故。

權次　あの、こんなほつそりした腰にかえ。(トおとせの背中をたゝく、おとせ金財布をばつたり落す)　おや、
今の音は。

ト權次手をかけようとする、おとせ財布の上へ膝を突くを、道具替りのしらせ、

とせ　あい、溫石でござんすわいなあ。

ト兩人よろしく、時の鐘、浪の音にて、この道具廻る。

(笹目ヶ谷新井橋の場)――本舞臺正面高き土手、所々に柳の立木、上手に手摺の附きたる橋を半分見せ、これに續いて高札、開帳札、下手へ寄せて火の用心を附けし箱番屋、後ろは向う川岸の遠見。總て笹目ヶ谷新井橋の體。こゝに與九兵衛と四人の非人立つてゐる。

與九　どつちから來ようとも、この橋詰で網を張れば道の違ふ氣遣ひはねえ、よく後先を頑張つてくれ。

四人　合點だ〳〵。

非一　噂をすれば影とやら、向うへ見えるあの提灯、

非二　たしかに二才の、

與九　必ずぬかるな。

四人　合點だ。

ト皆々上下へ分れて忍ぶ。上手より以前の與吉松金屋の提灯を持ち出來る、此内非人窺ひゐてやには
に提灯を棒にて打落し、左右よりうつてかゝる、與吉びつくりして身を躱し思入あつて、

與吉　こりや理不盡な、何とするのだ。

非一　何もかもあるものか、汝に遺恨のある者に、

非二　頼まれた故網を張り、

非三　歸り道をつけてゐたのだ。

非四　もうかうなつたら籠の鳥だわ。

與吉　遺恨を受ける覺えはない、おほかたそれは人違ひ、後で後悔さつしやるな。

非一　なに、ねえことがあるものか。

非二　四の五のと面倒だ、

四人　殺んでしまへ。

ト非人皆々與吉へ打つてかゝり暗の立廻り、此中へ與九兵衞窺ひ〳〵出來り、與吉を目がけて打たう
とするを非人は與吉と間違へ與九兵衞を打つ、をかしみの立廻りいろ〳〵あつて、トゞ與九兵衞與吉

の紙入をぬき取り、逸散に花道へ走りはひる。

與吉 うぬ、盗人め、紙入を

ト追ひかけて行かうとするを四人の非人與吉を散々に打倒し、花道へ逃げてはひる。與吉體の痛むこなし、上手よりおしづお高祖頭巾を冠り、おちせ附添ひ、三太廣小路花屋と印したる貸提灯を持ちて先に立ち出來り、與吉に行當りて、

しづ これは御免なされませ、提灯を持たせて麁相千萬、お許しなされて下さりませ。(ト與吉を見てびつくりなし。)や、そなたは弟の與吉ではないか。

與吉 さうおつしやるはお姉様でござりましたか、私はとんだ災難に逢ひまして、このやうな目に遭ひましてござりまする。(ト着物の破れしを見せる。)

しづ それはまあ〳〵危いこと。(ト三太の持ちし提灯をとり、與吉の體を見る。)

ちせ おゝどこもかも泥まぶれ、そしてお怪我でもござりませぬか。

しづ まあどうしたことでこの災難。

與吉 まあ聞いて下さりませ、今日お父様が天神様へ、お参りなされてお留守のうち、お屋敷からの急の御用、是非々々お目にかゝり、お話し申さにやならぬ事がござります故、お迎ひがてら参る途

中、お前様の所の十三郎殿に逢ひまして、この提灯を借受け、急いで參る所をば狼藉者が理不盡に、打つてかゝつてこの始末、何を申すも多勢に無勢、打ちたゝいたその上に一人の男が私の紙入を引拔いて、影もなく逃失せましてござります。

しづ　ほんにまあ油斷のならぬ、然しまあ怪我をせぬのがそなたの仕合せ、これも信心なす神佛樣の御利益ぢや。（ト與吉の塵を拂ひやり、）そしてその紙入の中には、何か大切なものでもはひつてはゐませぬか。

與吉　いえ〳〵、何も別に大事の品はござりませぬが、金子が少々はひつてをりますばかりでござります。

しづ　お金ばかりならまあ〳〵仕方がない、幸ひ私がこの紙入、中にお金もはひつてゐるほどに、これをそなたにやりませうわいな。

與吉　いえ〳〵大したお金でもござりませず、それではどうも濟みませぬ。

しづ　何のまあ濟むの濟まぬのと他人らしい、兄弟仲にいらぬ遠慮、殊にそのお金は今日父樣に天神樣でお目にかゝりお貰ひ申したお金故、やつぱりお前の物も同じことぢやほどに、遠慮なしに持つて行たがよい。

與吉　そんなら、父様にお逢ひなされましたか。
しづ　お目にかゝつたわいの、それから觀音様へも御一緒に參詣して、道でお別れ申して歸り道ぢやわいの、そなたも亦そのやうな裝で、今の狼藉に遭ひでもすると惡いほどに、話しながら一緒に行きませうわいの。
與吉　左樣なら、御一緒に、通り町までまゐりませう。
しづ　（與吉を介抱してやつて、）さあおちせや、この提灯を消さぬやう、氣を附けて持つて行きや。
ちせ　はい〳〵、お危なうござります。
しづ　さ、行きませう。

ト皆々花道へはひる。浪の音になり、上手より彌作頰冠り尻端折りにて出來り前後を窺ひ、身拵へなして刀の目釘をしめし、思入あつて下手番小屋の蔭へ忍ぶ。上手より以前の軍藏先に四人の門弟折を提げ酒に醉つたるこなしにて出來るを、彌作つか〳〵と出て立塞がる、四人の門弟これを避けると、避ける方へ彌作行くにより、門弟の一彌作をかき退けるを、取つてポンと投げる。門弟の二おのれとかゝるをも見事に投げる。門弟の三四左右よりかゝるをやはり見事に投げる。軍藏きつとなり刀を拔きかけるを彌作しやんと留める。

軍藏　やあ、物をも言はず理不盡に、狼藉なすは、

四人　何者なるぞ。

彌作　誰でもござりませぬ、安森源次兵衛が若黨彌作めでござりまする。

門一　扨は最前天神の社内に於て、

門二　恥辱をとつたを遺恨に思ひ、

門三　こゝへ來るのを待ちぶせして、

門四　先生始め我々へ汝や仕返しに、

皆々　うせたのだな。

彌作　いや仕返しではござりませぬ。御無心あつてわざ〳〵と、これにておいでを待受けましてござりまする。

軍藏　なに、この軍藏に無心とは。

彌作　外のことでもござりませぬ、源次兵衛が科となり、家斷絶に及んだる庚申丸の一腰をあなたがお求めなされたとのこと、その短刀がこの方の手に入らぬその時は安森の家はいつまでも埋れ木、武士の情と思召し、手前の方へ短刀をお譲りなされて下さりませ。

軍藏　えゝ馬鹿盡すな下司奴め、たゞでも貰つた品だと思ふか、大まい百兩といふ金を出し、手蔓を求

めて手に入つた庚申丸、身共が手より上へ差上げ、それを功に此方が立身出世をする積りだ。安森の家が立たうと立つまいと、乞食をしようとも、それを身共が知つたことかえ。

門一　汝が主人の安森は劍道の爭ひで、大先生にも遺恨があるわ。

門二　家滅亡はこつちの悦び、なんでおのれにやるものか。

門三　馬鹿も大概、前後を考へて物を言へ。

門四　むだなことだ。邪魔だてするなえ。

彌作　それは過ぎし貴殿の遺恨、今の難儀を思召して、その一腰をば。（ト軍藏の差したる刀に手をかける。）

軍藏　やい〳〵、人の魂へ手をかけて、汝やあはよくば取る氣だな、いやさ盜む了簡か、盜人なれば命がねえぞ、その素ツ首はとんでしまふぞよ。（ト軍藏彌作の肩へ足をかけ蹴倒す。）

彌作　これほどまでに事を分け、只管頼む短刀を讓らぬのみか土足にかけ、最前にても和子樣の、身の難題と手出もせず、ぢつと怺へた眉間の疵、血汐をあやした紋附は主人の形見肩入の、木綿布子の破れこぐち、さつきは無難で返せしが、もうかうなつたらこつちも武士、浪人なせど安森が家來の手練神影流、鈍らぬ腕の太刀先を、ならば手柄に受けて見よ。

軍藏　やあ、口の横に切れたまゝ、さま〴〵のよまひ言、面倒だ。殺らしてしまへ。

四人　合點だ。

ト四人彌作に切つてかゝり、土手を使つて烈しき立廻りあつて、トゞ四人を切倒す。軍藏窺ひゐてこの時前へ切つて出で彌作と立廻つて、きつとなり、

彌作　やあこの上は軍藏殿、庚申丸を異議なくこつちへ渡せばよし、異議に及ばゞ刀の錆、覺悟を極めて挨拶さつせえ。

軍藏　やあ、ちよこざいな覺悟呼ばゝり、汝等に渡してたまるものかえ。

彌作　何をこしやくな。

ト兩人土手を小楯に取つていろ〳〵立廻りあつて、彌作軍藏の刀を打落す、軍藏は有合ふ開帳札を引拔き土手へ上りよろしく立廻りあつて、トゞ軍藏の肩先へあびせる。これにて軍藏たぢ〳〵となり、手負ひの立廻りにて立廻りながら、よろ〳〵として土手より轉げ落ち下より刀をさし付ける、彌作は土手の上にてぎばをするを木の頭、浪の音にてよろしく、

ひやうし幕

兩國橋西川岸の場
大川端庚申塚の場

二幕目

〔役名――巾着切和尚吉三、浪人お坊吉三、旅役者お孃吉三、土左衛門爺傳吉、研師與九兵衛、金貸鷺ノ首太郎右衛門、劍術者廿繩丹平、修驗者無動院、百姓豐作。傳吉娘おとせ等〕

（兩國西川岸の場）――本舞臺四間常足砂地の蹴込、上手柳の立木下手は材木、向う一の橋辨天大川の遠見。總て兩國元柳橋川岸の體。爰に侍廿繩丹平武張つた打扮、修驗者無動院緋の衣頭巾篠掛達付戒刀を差し最多角の珠數を持ち詫り居る、百姓豐作手拭を冠り・脚絆草鞋の打扮にて留めて居る・傍に金貸太郎右衛門仕出しと共に見物して居る。此見得波の音舟の騷ぎ唄にて幕明く。

丹平　やあ留めるな〳〵、了簡ならぬぞ〳〵。

無動　どうぞ了簡して下され〳〵。

丹平　いや〳〵ならぬ〳〵。

豐作　もし、お侍樣、あの通り詫つて居ます。了簡のうしてやらつしやれ。

丹平　やあわいらが知つた事ではない、口出しせずとすつこんでをれ。

豐作　あゝ氣の毒なことだな。

太郎　もし〳〵、こりやいつたい何うしたのでござります。

豊作　もし皆様聞かつしやりませ、此のお侍様へあの法印殿が突當り、詫の仕様が惡いとて切つてしまふと言はつしやるのだ。

太郎　それは險難な事だな。

ト太郎右衛門惘りなす、修驗者思入あつて太郎右衛門に縋り、

無動　もし見掛けてこなたをお頼み申すが、どうか了簡さつしやる樣共々詫をして下され、これ拜みます〳〵。

豊作　こなたも爰で掛り合ひ、詫をしてやつて下され〳〵。

太郎　おゝ合點だ〳〵。いや申しお侍様、あの様に頼みます故あなたへお詫を致しますが、どうか御了簡なされて遣つて下さりませ。

豊作　お願ひでござります〳〵。

丹平　やあ又しても口出し致すか。これ身共を誰だと思ふ、伊賀袴に野太刀を差し、吸筒の酒にぶらぶらとよさこいを唄ふ侍とは譯が違ふぞ、凡十五の春よりして日本六十餘州をば、普く劍道修業なし當時一刀流の達人と云はるゝ、此大先生に突當り、ろく〳〵詫も致さぬ法印、無ぞりの太刀が目にはひらぬか、久しく胴試しを致さぬゆゑ眞二つに致してくれる。

太郎　其處をどうぞ御了簡なされて。

丹平　いやならぬ〳〵、達てわいらも詫事致すと、重ね胴にぶつぱなすぞ。

豐作　いえ眞平御免下さりませ。

丹平　さあ、法印は覺悟致してそれへ直れ。

ト是にて修驗者思入あつて、

無動　すりや、どうあつても斬らつしやるとか。

丹平　おゝ車斬に致してくれる。

無動　愚僧は事を好まぬ故、一旦詫は致せども、聞入なくば是非に及ばぬ、修驗道の行力にて、こなたの相手になりませう。

丹平　なに、身共が相手になると申すか。

無動　いかにも相手になりませう。これ慈姑天窓で錫杖を振り、舟玉十二社大權現と、そゝり半分切見世を流して歩く法印と一つに思ふと當が違ふぞ、こなたも日本六十四州劍道修業なしたならば、我も日本六十餘州あらゆる高山に分登り、難行苦行なしたる先達、今不動明王の金縛りの法を行ふから、拔かれるならば拔いて見よ、おのれが五體は動けぬぞ。

丹平　むゝはゝゝゝゝ、傍はら痛き其一言、如何なる邪法を行ふとも妖魔を拂ふは劍の德、さあ動けぬ樣に致して見やれ。

無動　云ふにや及ぶ、支度さつせえ。

丹平　心得た。

ト丹平は下緒を取つて襷に掛け袴の股立を取る、修驗者も衣の露をとり身拵へする、此内太郎右衞門百姓思入あつて、

太郎　はあゝ、そんなら法印殿も利かぬ氣で豫て噂に聞いて居る不動の金縛りとやらをさつしやるとか。

豐作　是はよい所へ來合せて、珍らしい事を見ますわえ。

無動　何れも方、それにござつて、愚僧が行力見物さつしやれ。

皆々　これは見物事だわえ。

丹平　さあ、今一刀の下に命をとるが、金縛りとやらを行はぬか。

無動　おゝ今卽座に汝が五體、立すくめに致してくれるぞ。

丹平　こしやくな事を。

ト丹平刀へ反りを打ら拔かうと身構へる、無動院印を結び、

無動　東方には降三世、南方には軍吒利夜叉、西方には大威徳、北方には金剛夜叉、中央大聖不動明王、なうまくさんまんだ、ばさらだせんだせんだまかろしやなそはたやうん、たらたかんまん。

ト無動院いろ／＼に印を結び突付ける、此内丹平抜掛けては抜けぬ思入、皆々びつくりして見とれ居る。丹平無理やりに抜に掛ると、無動院なうまくさんまんだと印を結び差付る、丹平の刀しやんと納り抜けぬ思入、太郎右衞門感心なし、

太郎　成程不思議なものだわえ。

無動　何と愚僧の行力は見さしつたか。（ト無動院印を結んだ手を開く。）

丹平（刀を抜き、）うぬ法印め、覺悟なせい。

無動　こいつはたまらぬ。

ト逸散に花道へ逃げだす、丹平刀を抜いた儘追掛けて花道へはひる。此内百姓は太郎右衞門の紙入皆皆の煙草入など引さらひ、上手へ逃げてはひる。

太郎　成程金縛りは不思議な物だ、印を結んで居る内は、ちよつとも抜けなんだが、其手がゆるむと直に抜けた。（ト懐を見て、）おや抜けたと云へば、紙入を抜かれたか。やあ、こりや大變だ／＼。

ト太郎右衞門立騒ぐ、仕出し皆々も懐腰の廻りを尋ね、

○　おゝ、ほんにわしも紙入をぬかれました。

△　お前も抜かれたか、私も煙草入を切られました。

太郎　たしかに今の百姓が、巾着切に違ひない。

□　是を思へば法印やあの侍も相ずりか。

△　何にしろ跡追かけ、見え隠れに付けて見よう。

○　それがいゝ〳〵、さあ何れもござれ。（ト皆々と共にどろばう〳〵。

ト ばた〳〵通り神樂にて仕出し花道へ追かけてはひる、跡時の鐘、太郎右衛門腕組をなし、

太郎　扨々つまらぬ目に逢つたわえ。昨日荏柄の天神で、てんびけに取つた利息禮金、直に子に子を産せようと紙入へ入れて置いたを、ちよろりせしめられてしまつた。考へて見ると夢の樣だが、夢なら早く覺めてくれぬか。

ト首をかたげ腕組をなし考へ居る、花道より研師の與九兵衞一腰を差し出て來り、

與九　昨夕十三が歸りを待ちうけ、百兩此方へせしめようと、思ひの外に人違ひで、引こ抜いた紙入には僅金が四五兩計り、それはみんな乞食に取られ、打たれたゞけが儲となり、つまらぬ事と思つた所、今日約束故海老名樣へ、庚申丸に研をかけ持つて行つたら飛んだ事、昨夜切られて死なつ

しやつた。其所で預りの此短刀は、主がなければ己が物、早く百兩に賣りたいものだが、只氣掛りは口入ゆゑ、鷺ノ首が百兩を己に返せといはにやあいゝが。(ト本舞臺へ來り、太郎右衞門に行當り、)

これは麁相を致しました、眞平御免下さりませ。

太郎　や、さう云ふこなたは研與九ぢやないか。

與九　おゝ鷺ノ首の太郎右衞門樣か、何を立つて居さつしやるのだ。

太郎　聞いてくりやれ、飛んだ目に逢つた。昨日取つた利息と禮金を紙入へ入れて置いて、巾着切に引つこぬかれた、早速紙入に困るわえ。

與九　お困りならば上げませうか、昨夕紙入を拾ひました。(ト前幕の紙入をやる。)

太郎　それは何より忝いが、中に金ははひつて居ぬかな。

與九　蟲のいゝ事を言はつしやる。

太郎　何ぞ金儲の口はないかな。

與九　儲の口はないが、損の口がある。

太郎　それは聞きたくないな。

與九　聞きたくなくても云はねばならぬ。昨日私が口入で、百兩貸した軍藏樣が、昨夜切られて死なつ

しやりました。

太郎　軍藏樣が、む〻〻。（ト太郎右衞門びつくりなし、目をまはし倒れる。）

與九　大方こんな事だらうと思つた。（ト抱起し。）これ太郎右衞門樣、氣を慥に持たつしやりませ、何だ口から泡を吹いて、こりや癲癇ぢやあないか。（ト邊りにある馬の草鞋を取つて。）幸ひ爰に馬の草鞋、是を頭へ乘せて遣らう。（ト草鞋をのせ紐を結ぶ。）いや、こりや癲癇ではないと見える。何ぞ氣付を呑まして遣りたいが、あひにく何も藥はなし。（ト川の中を見て。）おゝい〻所へ尿器が流れて來た、是で水を呑ましてやらう。

ト尿器で水を汲み、太郎右衞門の口へつぎ込む、是にてうんと心付く、

太郎　これ與九兵衞殿、軍藏樣はどうさつしやつた。

與九　人に斬られて死なつしやりました。

太郎　それでは貸した百兩は、

與九　冥土へ行かねばとれませぬ。

太郎　これ迄爪に火を燈しやう〳〵溜めたあの百兩、冥土へ行かねば取れぬなら、死んで取りに行かねばならぬ。（ト與九兵衞の差して居る脇差へ手を掛ける。）

與九　是はしたり太郎右衛門様、死んで冥土へ行つた日には、首尾よく金を請取つても、此婆娑へは歸られませぬぞ。

太郎　はあゝ生返つては來られぬか、それでは死ぬのはまあ止めだ。やゝ此脇差は軍藏様が、昨日私から百兩借りて、買はしつた庚申丸、こりやよい物が目に掛つた、是を代りに取つて置かう。

ト引たくる、與九兵衞其手を押へ、

與九　いえ〳〵、是は軍藏様から私が預つた庚申丸、めつたに是は渡されませぬ。

太郎　渡されぬとて百兩の代り、之を取らずにゐられるものか。

與九　それはお前、無理と言ふものだ。

太郎　無理ならこなたが口入故、百兩まどうて己に返すか。

與九　さあそれは。

太郎　此の脇差を、預けて置くか。

與九　さあ。

太郎　さあ。

兩人　さあ〳〵〳〵。

三人吉三

太郎　何と渡さずばなるまいが。
與九　えゝ仕方がない。（ト脇差を渡す。）
太郎　（腰へ差し、）あゝせり合うたので、喉がひッつくやうだ。
與九　喉がひッつくなら是を呑みなせえ。（ト腹を立て、尿器を突出す。）
太郎　や、こりや尿器ではないか。
與九　さあそれは。
太郎　（そつとして、）最前からの樣子といひ、爰に尿器があるからは。（ト天窓の草鞋を取つて、）扨はいよいよつまゝれたか。（ト狐に化かされた思入にて眉毛を濡し、）して見ると此脇差も、棒の折かも知れぬわえ。
與九　どうしたと。
太郎　うぬ與九兵衞に化けやあがつて、どうするか見やあがれ。
ト件の庚申丸を鞘の儘振上げ、與九兵衞に打つて掛る。
與九　是は氣でも違つたのか、何でわしを打ちなさるのだ。
太郎　打たねえでどうするものだ、大方さつきの法印も、一つ穴の狐だらう。

與九　なに、法印とは何のことだ。

太郎　何のことがあるものか、早く尻尾を出しやあがれ。

ト太郎右衛門與九兵衛を追廻し、トヾ與九兵衛上手へ逃げてはひる。太郎右衛門跡を追つかけはひる。花道より木屋の手代十三郎、羽織着流し頬冠りをなして、しを〳〵と出來り、

十三　今更言つて返らねど、昨夕思はぬ柳原で大事の金を持ちながら、袖を引かれてうか〳〵と、思案の外の夜鷹小屋、身の上話しを聞いて居る内、喧嘩々々といふ聲にびつくりなして逃出るはづみ、大まい百兩といふ金を、財布の儘に落してしまひ尋ねようにも騒ぎの中、程經て其處へ來て見れば歸つた跡にて誰も居ず、もしや昨夜の夜鷹殿が拾ひはせぬかと暮れるを待ち、尋ねて行たれど暗黒故、誰が誰やら顔さへ知れず、察する所あの金を、拾つて今宵は出ぬ事か、こりやどうしたらよからうなあ。(ト舞臺へ來り、思入あつて、)どう考へ直しても、死より外の思案はない。家へ戻つて兩親に此事を話したとて、是か一兩や二兩なら、どうか都合も出來ようが、百兩といふ大金が所詮出來よう當はなし、生中御苦勞掛けようより、いつそ此身を捨てたなら、お情深い旦那様故、親に金を償へと仰しやつては下さるまい。其御難儀を掛けぬが言譯。とは云へ肩へ棒を當てい、しがない暮しの其中で十兩取の賴母子講、月々掛けるも最う何年、そちの年の明けた時、元手の

足しと宿下りに行く度々に其話し、着物の丈の伸びるのと年季のつまるを樂しみに、待ちに待つてる兩親に死顏見するが情ない、嘸やお歎きなさらうが、是も前世の約束と諦らめて下さりませ。（ト手を合せ拜み、）人目に掛らぬ其内に、少しも早く此川へ。（ト石を拾ひ袂へ入れ、）南無阿彌陀佛。

ト後ろの川へ飛込まうとする。此以前上手より土左衞門爺い傳吉、もんぱ頭巾どてら半纏紺の股引尻端折、井桁に橘、信者講と印せし長提灯を持ち出かゝりゐて、此時つか〳〵と來て十三郎をとらへ、

傳吉　これ若い衆、待たつしやい。

十三　いえ〳〵死なねばならぬ譯ある者、こゝ放して下さりませ。

傳吉　知らねえ事なら仕方もないが、目に掛つたら留めにやあならねえ。

十三　其處をどうぞ見脱して。

傳吉　いゝや見脱す事はならねえ。待てと言つたら待たつしやい。（ト傳吉十三郎を引留め、眞中へ連れて來て中腰になり、）此結構な世を捨てゝ、死なうと云ふはよく〳〵な、切ない譯のある事だらうが、其處が若氣の無分別、死なずに思案をしたがいゝ、どういふ譯か膝とも談合、私に話して聞かせなせえ。假令及ばぬ事なりとも、其處は白髮の年の功、何處がどこ迄引受けてお前の難儀を救つて

上げよう、死なねばならぬ一通り、心を鎭めてこれ若いの、私に話して聞かせなせえな。

十三　見ず知らずの私を、御親切に仰しやつて下さりまするあなた故、隱さずお話し申しまする。私事は本町の木屋文藏の召仕十三郎と申すもの、昨日さる御屋敷へ百兩といふ商賣なし、金を請け取り歸る道柳原で袖引かれ、思はず遊んだ夜鷹小屋、喧嘩と聞いて逃げる折其百兩を取落し、もしや其夜の夜鷹殿が拾ひはせぬかと最前も、尋ねて行たれど廻り逢はず、それ故主人へ言譯に身を投げ死する此身の覺悟、折角お留め下すつたれど、大まい百兩といふ金がなければ生きて居られぬ仕儀、どうぞ見脱して下さりませ。いづくのお方かしらねども袖振合ふも緣とやら、不便なと思召さば死んだ後にて一遍の、御回向お願ひ申しまする。

ト十三郎泣きながらいふ。傳吉此内扨はといふ思入あつて、

傳吉　そんなら昨夜柳原で、(トいひ掛け、傳吉四邊を窺ひ、)金を落したのは、お前か。

十三　はい、左樣でござりまする。

傳吉　それぢやあ死ぬにやあ及ばねえ。

十三　えゝ死ぬに及ばぬとは。

傳吉　お前が落した百兩は、おれが娘が拾つて來た。

十三　して、おまへの娘御は、

傳吉　昨夜柳原で買ひなすつた、一年といふ夜鷹さ。

十三　え。

傳吉　大方お前が尋ねて來ようと、今夜も場所へ其金を、持つて行つたが間違つたか、何にしろ百兩に、恙がねえから案じなさんな。

十三　それは有難うござりまする。

傳吉　あゝ信心は仕ようものだ、題目講へ行つたばかりお前の命を助けたが、家に居たならやみ〳〵と、老先長い若い者を殺してしまふ所であつた。これも偏に祖師の御利益、南無妙法蓮華經々々

ト肌の珠數を出し拜む。

十三　落した金に恙なく、危い命を此場にてお助けありしあなたこそ、十三が爲の神佛、いづれ何處のお方にて、お名は何と仰しやりますか、お聞かせなされて下さりませ。

傳吉　お前の方から聞かねえでも、云はねえけりやならねえ名をつい年寄の後や先、私やあ本所の割下水で家業は賤しい夜鷹宿、以前は鬼とも云はれたが一年增に角も折れ、今ぢやあ佛の後生願ひ、土左衛門を見る度に引上げちやあ葬るので、渾名のやうに私が事を、土左衛門爺い傳吉といひま

す、見掛に寄らねえ信心者さ。

十三　そんなら、土左衞門傳吉樣とか。

傳吉　ちよつと聞くと惡黨のやうだが、惡い心は少しもねえから安心して家へ來なせえ、お前に廻り逢はねえけりやあ娘も歸つて來ようから、さうしたならば金を持つて、親元なり主人なり、己がお前を連れて行き、斯う〳〵いふ譯であつたと、詫事をして進ぜませう。

十三　すりや、詫事迄して下さりますとか。

傳吉　佛作つて魂入れずだ、主人方へ歸る迄、世話をしにやあ心が濟まねえ。

十三　え丶それ程迄に、有難うござります。

傳吉　（十三郎を見て）見りやあ見る程まだ若いが、お前幾つになんなさるえ。

十三　はい、十九になりまする。

傳吉　あ丶、それぢやあ娘と同い年だ。

十三　お娘御も戌でござりまするな。

傳吉　お丶戌さ。あ丶川端に浮か〳〵して、犬にでも吠えられねえ内、早く家へ行きやせう。

十三　はい、お供致しませう。

傳吉（十三郎をつく〴〵と見て、）さつき一足遲く來て、己が渾名の土左衛門に、なつたら嘸や親達が。

十三　え。

傳吉　いや己も惡い悴があるが、片輪な子程可愛いと、別れて居れど一日でも胸に忘れる事はねえ、必ず苦勞を掛けなさんな。

十三　はい。（ト思入。）

傳吉　さあ、更けねえ内に行きやせうか。（ト提灯を取上げる。）

十三　あゝもし、それは私が。（ト提灯をとる。）

傳吉　そりやあ憚りだね。

十三（提灯を取り中を見て）や、こりや蠟燭が。

傳吉　南無阿彌陀佛か。

十三　え。

傳吉　いや、念佛は謗法だつた。

ト十三郎先に提灯を持ち傳吉、十三郎上手へはひる。これにて道具廻る。

(大川端庚申塚の場)——本舞臺四間中足の二重、石垣波の蹴込み、上の方に四尺程の庚申堂、賽錢箱、軒口に青面金剛と記せし額、此脇に括り猿を三つ付けし額、後ろ練塀、斜に橋の見える片遠見、總て兩國橋北河岸の體。やはり波の音通り神樂にて道具廻る、と花道より辻君のおとせ、黑の着附手拭を冠り、莚を抱へ出て來り、

とせ　昨夜金を落せしお方は、夜目にも確と覺えある裝の樣子は奉公人衆、定めてお主の金と知り少しも早く戻したく、大方今宵柳原へ私を尋ねてござんせうと、拾うた金を持つていたれど、つひに尋ねてござんせぬは、もしやお主へ言譯無さにひよんな事でもなされはせぬか。たつた一度逢うたれど心に忘れぬいとしいお方、案じるせゐか胸騷ぎ、あゝ心ならぬ事ぢやなあ。

ト思入あつて揚幕の方を、もしや尋ねて來ぬかと見るこなし、花道よりお孃吉三島田鬘、振袖お七の打扮にて出て來り、

お孃　あもし、憚りながらお女中樣、お尋ね申したいことがござりますわいな。

とせ　はい、何でござります。

お孃　あの、龜井戸の方へはどう參りますか、お教へなされて下さりませいな。

とせ　はい、龜井戸へお出なされますなら、是から右へ眞直に、行當つたら左りへ曲り、ト言ひながらお

孃吉三の裝を見て）とさあ委しうお教へ申しても、お前樣には知れますまい、どうで私も歸り道、割下水迄共々に、お連れ申して上げませう、

お孃　それは有難うござりますわいな。連れて參りし供にはぐれ、知らぬ道にたゞ一人怖うてなりませねば、お邪魔ではござりませうが、どうぞお連れなされて下さりませいな。

とせ　いえもう、私が家へ歸りますには、一つ道でござりますから、お安いことでござります。

お孃　左樣なれば、お女中樣。

とせ　斯うお出でなされませいな。（トおとせ先にお孃吉三本舞臺へ來り）もしお孃樣、お前樣はどちらでござります。

お孃　あの私や本郷二丁目の、八百屋の娘でお七と申しますわいな。

とせ　八百屋のお七樣とおつしやりますか。

お孃　してお前樣のお家は。

とせ　はい私の家は割下水で、父さんの名は傳吉、私しやおとせと申します。

お孃　して御生業は。

とせ　さあ其生業は。（ト困ろ思入。）

お孃　何をお商賣なされますえ。
とせ　はい、お恥かしいが蓙の上にて、
お孃　あの十九文屋でござりますか。
とせ　いえ、二十四文でござります。
お孃　そんならもしや。
とせ　お察しなされませいな。
ト　おとせお孃の背中を叩く。此折懐の財布を落す。とお孃手早く取上げぎつくり思入あつて、
お孃　もし、何やら落ちましたぞえ。（ト出す。）
とせ　おゝ、こりや大事のお金。
お孃　えゝ、お金でござりますか。
とせ　あい、しかも大まい小判で百兩。
お孃　大層お商ひがござりましたな。
とせ　御常談ばかり、ほゝゝゝ。
お孃　あれえ。（ト仰山にお孃おとせに抱付く。）

とせ　あもし、どうなされました。
お孃　今向うの家の棟を、光り物が通りましたわいな。
とせ　そりや大方人魂でござりませう。
お孃　あれえ。（ト又しがみ付く。）
とせ　何の怖いことがござりませう、夜生業を致しますれば、人魂なぞは度々故、怖い事はござりませぬ。只世の中に怖いのは、（ト此時本釣鐘を打込む。）人が怖うござります。
お孃　ほんにさうでござりますなあ。（ト言ひながらお孃吉三おとせの懐から、財布を引出す。）
とせ（びつくりして。）や、こりや、此金を何となさいます。
お孃　何ともせぬ、貰ふのさ。
とせ　え〻〻〻、（ト驚き。）そんならお前は。
お孃　どろばうさ。
とせ　え。
お孃　ほんに人が怖いなう。（ト財布を引つたくろ。）
とせ　そればかりは。

ト取りに掛るを振拂ふ。おとせたぢ〳〵として思はず川へ落ちる、水の音波煙ぱつと立つ、

お孃　あゝ川へ落ちたか。（ト川を見込み）やれ可愛さうな事をした。（ト云ひながら財布より百兩包を出し）
思ひがけねえ此の百兩。

トにつたり思入れ、此時後ろへ太郎右衛門窺ひ出で、

太郎　その百兩を。

ト取りに掛るを突廻し、金を財布へ入れ懐へ入れる。太郎右衛門又掛る。此時お孃吉三太郎右衛門の差してゐる庚申丸を鞘ごと引たくる。太郎右衛門それをと寄るをすらりと拔き振廻す、此途端花道より駕籠舁垂を下せし四つ手駕籠を擔ぎ來り、是を見てびつくりなし、駕籠を下手へ捨て下手へ逃げてはひる。太郎右衛門は白刄に恐れ上手へ逃げてはひる。時の鐘、お孃吉三跡を見送りて、

お孃　はて、臆病な奴等だな。（と駕籠の提灯で白刄を見て）むゝ、道の用心丁度幸ひ。（ト庚申丸をさし、空の朧月を見て）月も朧に白魚の篝も霞む春の空、つめたい風もほろ醉に心持好く浮か〳〵と、浮れ烏の只一羽塒へ歸る川端で、棹の雫か濡手で粟、思ひがけなく手に入る百兩。

ト懐の財布を出しにつたり思入れ、此時上手にて、厄拂ひの聲して「お厄拂ひませう、厄落し〳〵」と呼ばゝる。

ほんに今夜は節分か、西の海より川の中、落ちた夜鷹は厄落し、豆澤山に一文の錢と違つて金包み、こいつあ春から縁起がいゝわえ。

ト此折下手にある四つ手駕籠の垂をばらりと上げる。内にお坊吉三吉の字菱の紋付の着附五十日鬘大小の打扮にて、お孃吉三を窺ふ。お孃もお坊吉三を見てぎつくり思入、時の鐘少し凄みの合方になり、お孃金を懐へ入れ、庚申丸を袖にて隱し上手へ行かうとする、お坊吉三思入あつて、

お坊　もし姐さん、ちよつと待つておくんなせえ。

お孃　はい、何ぞ御用でござりますか。

お坊　あゝ、用があるから呼んだのさ。

お孃　何の御用か存じませぬが、私も急な。（ト行きかけるを、）

お坊　用もあらうが手間はとらさぬ、待てといつたら待つてくんなせえ。

ト是にてお孃ムヽと思入。お坊駕籠より雪踏を出し、刀を持ち出てお孃を見ながら刀を差す、兩人顔を見合せ氣味合の思入にて中腰になり、

お孃　待てとある故待ちましたが、して私への御用とは。

お坊　さあ用といふのは外でもねえ、浪人ながら二腰たばさむ武士が手を下げこなたへ無心、どうぞ貸

して貰ひたい」

お孃　女子をとらへお侍が、貸せとおつしやる其品は。

お坊　濡手で粟の百兩を。

お孃　え。（ト思入。）

お坊　見掛けて頼む、貸して下せえ。

お孃　そんなら今の樣子をば。

お坊　駕籠にゆられてとろ／＼と一ぱい機嫌の初夢に、金と聞いては見脱せねえ心は同じ盗人根性、去年の暮から間が惡く、五十と纏る仕事もなく、遊びの金にも困つて居たが、なるほど世間は難かしい、友禪入りの振袖で人柄作りのお孃さんが、追落しとは氣が附かねえ。是から見ると己なざあ五分月代に着流しで、小長い刀の落し差し、ちよつと見るから往來の人も用心する打扮、金にならねえも尤もだ。

お孃　それぢやあお前の用といふのは、是を貸してくれろとか。（ト懐から手を出し財布を見せる。）

お坊　取らねえ昔と諦めて、それを己に貸してくりやれ。

お孃　（せゝら笑ひ。）こりやあ大きな當違ひ、犬脅しとも知らねえで大小差して居なさる故、大方新身の

胴試し命の無心と思ひの外、お安い御用の端た金、お貸し申して上げたいが、凄みなせりふでおどされては、お氣の毒だが貸しにくい、まあお斷り申しませう。

お坊　貸されぬ金なら借りめえが、形相應に下から出て許してくれとなぜ言はねえ。木咲の梅より愛敬のこぼるゝ娘の憎まれ口、犬脅しでも大小を伊達に差しちやあ歩かねえ。切取りなすは武士の習ひ、きりきり金を置いて行け。

お孃　いゝや置いては行かれねえ、ほしい金なら此方より其方が下から出たがいゝ。素人衆には大まいの金も只取る世渡りに、未練に惜しみはしねえけれど、斯う云ひ掛つた上からは空吹く風に逆らはぬ柳に受けちやあ居られねえ、切取なすが習ひなら、命と共に取んなせえ。

お坊　そりやあ取れと言はねえでも、命も一緒に取る氣だが、おぬしも定めて名のある盜人、無緣にするも不便な故今日を立日に七七日、一本花に線香は殺した己が手向けて遣るが、其俗名を名乘つておけ。

お孃　名乘れとあるなら名乘らうが、まあ己よりは其方から、七本塔婆へ書記す其俗名を名のるがいゝ。

お坊　こりやあ己が惡かつた、人の名を聞く其時はまあこつちから名乘るが禮儀、爰が渾名のお坊さん小ゆすり騙りぶつたくり押の利かねえ惡黨も、一年増しに功を積み、お坊吉三と肩書の武家お構

ひのごろつきだ。

お嬢　そんなら豫て話しに聞いた、お坊吉三はおぬしがことか。

お坊　して又そつちの名は何と。

お嬢　問はれて名乘るもをこがましいが、去年の春から坊主だの、やれ惡婆のと姿を替へ、憎まれ口もきいて見たが、利かぬ芥子と惡黨の凄みのないのは馬鹿げたもの、そこで今度は新しく、八百屋お七と名をかりて、振袖姿で拵ぐゆゑお嬢吉三と名に呼ばれ、世間の狹い喰詰者さ。

お坊　己が名前に似寄り故、疾から噂に聞いて居たお嬢吉三とあるからは、相手がよけりやあ猶更に。

お嬢　此百兩を取られては、お嬢吉三が名折となり。

お坊　取らねえけりやあ負けとなり、お坊吉三が名の廢り。

お嬢　互ひに名を賣る身の上に、引くに引かれぬ此場の出會。

お坊　まだ彼岸にもならねえに、蛇が見込んだ青蛙。

お嬢　取る取らないは命づく。

お坊　腹が裂けても呑まにやあ置かねえ。

お嬢　そんなら是を爰へかけ。（トお嬢百兩包み舞臺前眞中へ置く）

お坊　蟲拳ならぬ、
兩人　此場の勝負。
ト兩人肌を脱ぎ一腰を拔き立廻る、よき程に花道より和尙吉三、紺の腹掛股引どてら半纏頰冠りにて出で來り、此體を見て思入あつてつか〳〵と舞臺へ來り、
和尙　二人とも待つた〳〵。
ト此中へ割つて入り、双方を留める立廻り、トヾ和尙吉三着て居たる半纏を取つて、兩人の切結ぶ白刄へ掛け此上へのり、双方を留め、三人きつと見得。
お坊　やあ。見知らぬそちが入らぬ留だて。
何ういふ譯か知らねえが、留めにはひつた、待つて下せえ。（ト手拭をとる。）
お孃　怪我せぬ内に、
兩人　退いた〳〵。
和尙　いゝや退かれぬ、二人の衆、初雷も早すぎる氷も解けぬ川端に、水にきらつく刀の稻妻、不氣味な中へ飛込むも、まだ近附にやあならねえが顏は覺えの名うての吉三、いかに血の氣が多いとて大神樂ぢやアあるめえし、初春早々劍の舞、どつちに怪我があつてもならねえ。今一對の二人は

名におふ富士の大和屋に劣らぬ筑波の山崎屋、高い同士の眞中へ背い伸をして高島屋が見兼ねて留めにはひつたは、どうなる事とさつきからお女中樣がお案じ故、丸く納めに渾名さへ坊主上りの和尚吉三、幸ひ今日は節分に爭ふ心の鬼は外、福は內輪の三人吉三、福茶の豆や梅干の遺恨の種を殘さずに小粒の山椒の此己に、厄拂めくせりふだが、さらりと預けてくんなせえ。

トきつといふ。兩人も扨はといふ思入あつて、

お坊　そんならこなたが名の高い、

お孃　吉祥院の所化上り、

お坊　和尚吉三で、

兩人　あつたるか。

和尚　(頭を押へて、)さう言はれると面目もない、名高いどころかほんのぴい〱、根が吉祥院の味噌すりで辨長といつた小坊主さ、賽錢箱から段々と祠堂金迄盜み出し、たうとう寺をだりむくり鼠布子もお仕着の淺葱とかはり二三度はもつさう飯も喰つて來たが、非道な惡事をしねえ故、お上のお慈悲で命が助かり、斯うして居るが何より樂しみ、盜の科で取らるゝなら仕方もねえが己が手に、命を捨てるは惡い了簡、仔細は後で聞かうから不承であらうが此白刄、己に預けて引いて下

せえ。

お坊　いかにも和尚が詞を立て、向うが預ける心なら、此方はこなたに預ける氣。

お孃　そつちが預ける心なら、此方も共々預ける氣。

和尚　そんなら二人が得心して、

お坊　此場は此の儘、

お孃　こなたに預けて、

和尚　引いて吳れるか。

お坊　いざ、

お孃　いざ、

兩人　いざ〳〵。

　　ト和尚吉三半纏を取ろ、兩人刀を引いて左右へ別れろ。和尚思入あつて、

和尚　して二人が命を掛け、此爭ひはどういふ譯。

お孃　元は根も葉もないことで、おれが盜んだ其百兩。

お坊　貸せといふより言ひ掛り、つひに白刄の此爭ひ。

和尚 む丶そんなら二人が百兩を、貸す貸すめえと云ひ募り、大事の命を捨てる氣か、そいつあ飛だ由良之助だが、まだ了簡が若い〳〵。爰は一番己が裁きを付けようから、厭でもあらうがうんと云つて話に乘つてくんなせえ。互ひに爭ふ百兩は二つに割つて五十兩、お孃も半分お坊も半分、留には ひつた己にくんねえ、其の埋草に和尚が兩腕、五十兩ぢやあ高いものだが、拔いた刀を其儘に鞘へ納めぬ己が挨拶。兩腕切つて百兩の、額を合せてくんなせえ。

ト和尚吉三腕まくりをして兩人へ腕を突附ける。兩人感心の思入あつて、

お坊 流石は名うての和尚吉三、兩腕捨てゝの此場の裁き。

お孃 切られぬ義理も折角の志し故詞を立て、

お坊 こなたの腕を、

兩人 貰ひましたぞ。

和尚 おゝ遠慮に及ばぬ、切らつしやい。

ト和尚吉三腕を突出す、お坊吉三お孃吉三と顏見合せ、思入あつて一時に和尚の腕を引き、直に二人共我腕をひく、和尚是を見て、

和尚 我兩腕を引いた上、二人が腕を引いたのは。

お坊　物は當つて碎けろと、力にしてえこなたの魂。
お孃　互ひに引いた此腕の、流るゝ血汐を汲交し、
お坊　兄弟分に、
お孃　なりたい、
兩人　願ひ。
和尚　こいつあ面白くなつて來た。實は此方もさつきから、さう思つて居たけれども、自惚らしく言はれもせず默つて居たがそつちから、頼まれたのは何より嬉しい。
お坊　そんなら二人が望みをかなへ、
お孃　兄貴になつてくんなさるか。
和尚　いやならねえでどうするものだ。聞きやあ隣座は水滸傳、顏の揃つた豪傑に、所詮及ばぬ事ながら、こつちも一番三國志、桃園ならぬ塀越の梅の下にて兄弟の、義を結ぶとは有難え。
お坊　幸ひ爰に供物の土器。
お孃　是でかための血杯。
トお坊庚申堂より供物の土器を出し、三人是へ腕の血を絞り、

兩人　まづ兄貴から、

和尙　そんなら先へ。

ト和尙呑んでお坊へさす、お坊呑んでお孃へさす、お孃呑んで和尙へ戾す。

和尙　是で目出度く、（ト和尙呑んだ土器を叩きつけ、微塵になし、）碎けて土となる迄は、

お坊　變らぬ誓ひの、

お孃　兄弟三人。

和尙　思へば不思議な此出會、互ひに姿は變れども、心は變らぬ盜人根性。

お坊　譬にもいふ手の長い、今年は庚申年に、

お孃　庚申堂の土器で、義を結んだる上からは、

和尙　後の證據に三疋の、額に附けたる括り猿。

ト和尙庚申堂に掛けてありし、くゝり猿の額を取つて二人に一つ宛遣る。

お坊　三つに分けて一つ宛、

お孃　守りへ入れて別るゝとも、

和尙　末は三人繫がれて、

お坊　意馬心猿の馬の上、
お孃　浮世の人の口の端に、
お坊　斯ういふ者があつたりと、
和尚　死んだ後迄惡名は、
お孃　庚申の夜の話し草、
和尚　思へばはかない、
三人　身の上ぢやなあ。（ト三人宜しく思入あつて、）
和尚　さあ長居は恐れ二人ともに、此百兩を二つに分け、（ト以前の百兩包を取つて出す。）
お坊　いや其百兩は二人が、捨つる命を救はれし、
お孃　禮といふではなけれども、爭ふ物は中よりと、
お坊　そりやあこなたが納めて下せえ。
和尚　いゝや是は受けられねえ、是非とも二人に半分宛。
　ト百兩包を捻切り、ちよつと目方を引いて兩方へ出す。是にてお坊お孃顏見合せ、思入あつて金を受取り、

お坊　そんなら一旦受けた上、
お孃　又改めておぬしへ、
兩人　返禮。（ト兩方より出す。）
和尙　（思入あつて、）むゝ夜がつまつたにべん〳〵と、義理立するも面倒だ、いなやを云はず此金は、志し故貰つて置かう。（ト和尙金を取つて鼻紙へ包む。）
お坊　それで二人が、
兩人　心も濟む。
和尙　この返禮は又其内。
お坊　思ひ掛けねえ力が出來、
お孃　祝ひに是から。（ト三人立上る。此時以前の駕籠舁兩人窺ひ出て、）
駕舁　うぬ。盜人め。（ト和尙にかゝるを左右へ突きやる。お坊お孃引附けて、）
和尙　三人一座で。
ト兩人ムヽと頷き、一時に投退け、駕籠舁起上らうとするをお坊踏附け、お孃は腰を掛け押へる、和尙は半纏を引掛ける。三方一時に木の頭。

三人　義を結ばうか。

ト三人引張宜しく波の音舟の騷ぎ唄にて、　ひやうし幕

三幕目

新吉原丁字屋の場
割下水傳吉内の場

〔役名――木屋文藏、和尙吉三、土左衞門爺傳吉、お坊吉三、釜屋武兵衞、八百屋久兵衞、丁字屋の一重、九重、吉野、傳吉娘お年、木屋の手代十三郎、丁字屋の初瀨路、飛鳥野、花の香、花琴、花鶴、花卷、其他。〕

(新吉原丁子屋の場)――本舞臺一面の平舞臺、正面床の間。此脇違ひ棚黑塗の簞笥、下手夜具棚此下二枚襖、上下折廻し塗骨障子屋體、いつもの所障子の上り口、總て丁字屋二階吉野部屋の體、爰に臺の物白鳥の德利あり、新造花卷胴拔裝、おなか茶屋女にて爭ひ居る、傍に新造兩人部屋着の裝にて立掛り居る、この見得流行唄にて幕明く。

なか　もし花卷さん、惡ふざけも大概になさいまし。

花卷　おや、何を私が惡ふざけをしたえ、さあそれを聞かう〳〵。

花琴　何だが知らぬが見ともない、まあ靜にしなんしな。

花鶴　これおなかどん、何を花卷さんがしなんしたのだえ。

なか　もし皆さん聞いておくんなさいまし、吉野さんのお客の吉三さんが、引過に一杯呑むからいゝのを持つて來いとおつしやつた故、態々五十間の奧田へ、いゝのを取りにやつて、今爰へ持つて來たばかりの所、此花卷さんが呑みなすつたのでござります。それも一杯か二杯なら見ない顏も致しますけれど、御覽なさいまし、一滴もござりませぬ。（卜徳利を見せ、）何と腹が立ちませうぢやござりませぬか。

花琴　そりやあ花卷さんが惡うざます。何故そんな下司ばつた事をしなんす。

花鶴　お前ばかりぢやあない、花魁の恥になりんすよ。

花卷　なに、私しやあそんなことゝは知らず、今腹が痛くッてなりませんから、何ぞ藥を貰ひんせうと吉野さんの所へ來たら、あんまり吉三さんとよく寐て居なんすから、私しやあ殘り物だと思つて、藥の替りに此のお酒を、ちつとばかり呑みんしたのさ。

なか　殘り物といふのがありますものかね。たつた今持つて來たばかりでござります。

花卷　殘物でないといふが、此お酒は幾ら持つて來たのだえ。
なか　一升持つて參りましたのさ。
花卷　おやく、まあたつた湯呑で五六杯。あれで一升かえ、高いものだねえ。
なか　花卷さん大概になさいまし、腹さんぐ呑んでしまつて、人の家の酒が少ないの多いのと、そんな事を云はれては、私共の暖簾に拘りますから、遣手衆に斷らにやあならない。さあ私と一所にお出なさいまし。(ト花卷の手を取る。)
花琴　これさおなかどん、腹も立たうが春早々、花卷さんを叱らしても、あんまり手柄にもなりんすまい。
花鶴　腹も立たうが了簡しなんし。
なか　いえく、花卷さんには常不斷こんな目に逢ひますから、きつと斷らにやあなりませぬ。
花卷　さあ、斷るなら斷つて見ろ。
なか　斷らなくつてどうするもんか。
兩人　はてまあ、待ちなんしといふに。
ト おなか花卷を引立てようとする、これを兩人にて留める。下手より吉野胴拔しごき裝にて出て、こ

れを留め、

吉野　是はしたりお前方は、吉三さんが寐て居なさんすに、靜にしておくんなんしな。

花巻　もし吉野さん、聞いておくんなまし。

吉野　聞かずともようざます。今後で聞いて居りんした。

なか　もし花魁、私の申すのが無理ぢやあござりますまい。

吉野　まあよいからお前は家へ行つて、御苦勞でももう一遍持つて來てくんなまし。

なか　はい、參るのは參りますけれど。

吉野　（紙に捻つた金を出し、）こりや少しだが、お年玉だよ。

なか　（取つて、）是は有難うござりますが、お氣の毒でござります。（ト頂いて帶の間へ挾む。）

花琴　吉野さん、今文里さんがおいでなんしたから、お知らせ申しいすよ。

吉野　おや文里さんがお出なんしたか、よく知らしておくんなんした。

花巻　おや／＼文里さんが來なんしたえ、嬉しいねえ私も行かうや。

吉野　それぢやあ花巻さんも、文里さんに、

兩人　岡惚ざますか。

花卷　いゝえ文里さんがおいでなんすと、むせうに奢りなんすから、それがいゝのざます。
花琴　それぢやあ喰氣ざますか。
花卷　どうで色氣の方はむづかしいから、喰氣の方へ凝る積りさ。
なか　道理こそ今の一升も、ぺろりと吞んでしまひなさいました。
花卷　えゝ一升も氣が強い、五合あるか無しのくせに。
吉野　またそんなことを言ひなますか。
花鶴　早く文里さんの所へお出なんし。
なか　ほんに私も早く行つて、後のを取つて參じませう。
花卷　どれ行つて、うまい物を食べようや。
　　ト花卷は下手、おなかは階子の口へはひる。
花琴　もし吉野さん、何故二階中で嬉しがる文里さんを、一重さんは厭がりなんすだらうね。
花鶴　ほんに私等迄、お氣の毒ざます。
花琴　それに引替へ、吉野さんと吉三さんの仲のよさ。
花鶴　大方今夜はしつぽりと、文里さんの所へもおいでなんすまい。

吉野　なに、今直に參りんすから、宜しく申しくおくんなまし。
花琴　あい、そんなら吉野さん。
花鶴　早くお出なんし。（ト兩人は下手の障子屋體へはひる。）
吉野　此まあ吉三さんは、何時迄寐なんすのだらう。
　　　ト言ひながら上手の障子を明ける。内に吉三中月代前帶にて煙草をのみ居る。
お坊　べら棒め、あしかぢやァあるめえし、寐てばかり居るものか。
吉野　おや、起きて居なましたか。（ト吉三の傍に來る。）
お坊　手前の廓詞が、やうやく聞きよくなつた。
吉野　ほんに私しやあ南から、此地へ來た其當座は、ありんすに誠に困つた。
お坊　手前も己も四年越し、苦勞ばかりして居るが、いゝ客でも引掛けて、小遣ひでもくれねえか。
吉野　そりやお前のいふのが無理だ、元より意氣地のない上に、お坊吉三と名の賣れた惡足があるものを、何でいゝ客が付くものか。
お坊　言はれて見るとそんなものか、そりやあさうと今聞いた、文里と云ふのは、己の妹の、一重の所へ來る客だの。

吉野　あい、誠に程のいゝ客ざますが、何故一重さんは嫌ひなんすか。

お坊　爲になる客だといふことだが、さういふ客なら取留めて置いて、己にちつと貸してくれりやあいいに。

吉野　蟲のいゝ事を言ひなます。

ト流行唄になり、喜助若い者にて階子の口より留めながら出て來る。後より長次、熊藏、金太着流しそぼろなる浪人の打扮にて出て來る。

喜助　もし、お待ちなさいと申しましたら、まあお待ちなさいまし。

長次　いゝや待たれねえ、吉三に逢ひせえすりやあいゝのだ。

兩人　手前にやあ用はねえ。

喜助　それでも今日は、お出なさいませぬものを。

長次　なに、居ねえことがあるものか。

熊藏　慥に居るのを、

金太　知つて來たのだ。

お坊　や、あの聲は。（トお坊吉三三人を見て逃げようとする。）

長次　おい吉三々々、逃げるにやあ及ばねえぜ。
お坊　なに、逃げるものか。
喜助　あゝしまつた事をした。
熊藏　是程爰に居るものを、
金太　是でも今日は來ねえのかえ。（ト喜助を突倒す。）
喜助　いえ、眞平御免なさいまし。
長次　これお坊、ちつと手前に用があつて厭がられるを合點で、のたくり込んだ蛇山長次、
熊藏　鷲の森の熊藏が、てつきり爰と覘つて來たのだ。
金太　穴ッ這入りを搜すのは、外れッこのねえ狸穴の金太だ。
長次　うんざりする顏だな。（ト三人よき所住ふ。）
吉野　これ喜助どん、あれ程お前に言つておくのに。
喜助　それだからお斷り申しましたけれど。（ト喜助頭を掻く。）
お坊　あゝこれ何をぐづぐづ言ふのだ。さあみんな此方へ來て、まあ一ぺい遣らッしな。
長次　どうで馳走になる積りだ。

金太　おいお杉さん、ぢやあねえ今ぢやあ吉野さん、もし花魁、昔馴染の金太だ、何とか言つてもいゝぢやあねえか。
熊藏　こう一分の女に出世したつて、そんなに重ツくれるな。
長次　ほんに品川ぢやあ、一つ蟹の味噌を喰合つたもんだ。知らねえ顏をしなさんな。
熊藏　あの時分にやあ莫連だつたが、豪氣に人柄になつたな。
ト吉野脇を向き煙草をのみ居る。吉三思入あつて、
お坊　ときに三人顏を揃へて、己に逢ひに來たは何ぞ用か。
長次　用がありやこそ、突當に來たのだ。
お坊　むゝ用といふのは外ぢやアあるめえ。（ト丼の紙入より金を出し、紙に包みゝ）さあ是で揚屋町へでも行つて寐やれ。（ト投つて遣る。）
長次　（取上げ見て、）なんだ、三人の中へたつた三分か。
熊藏　三人で三分無くなす智慧を出しと、川柳にやアあるけれど、三分ばかりぢやあ酒にも足りねえ。
金太　只取る金でありながら、しみつたれな事をしねえで、器用に分けてくんなせえ。
お坊　何だ手前達は凄みを付けて、是で足らざあ足りねえから、幾らくれろと言はねえのだ。

長次　こりやあ此方が惡かつた、兄い堪忍してくんねえ、それぢやあお詞に從つて、三分ぢやあ足りねえから、十兩ばかり貸してくんねえ。

お坊　なに十兩貸してくれ、いゝこけを相手にする樣に、御大層な事を言ふなえ。

長次　言はねえでどうするものだ。兩國橋の川岸端で、馬乘袴に朱鞘の大小、劍術遣ひに己を化かし、

熊藏　家をかぶつて法印町に、居候に居たとこから、山伏姿で喧嘩と見せ、

金太　留めにはひつた百姓の間拔な裝で氣をゆるさせ、見て居る奴の紙入や煙草入を己にすらした、狂言の作者は手前、

長次　何ほ筋を立てゝ渡したとて、一人で浚つて隨德寺は、あんまり蟲がよすぎるから三人揃つて分前を、

三人　貰ひに來たのだ。

ト是にて吉野四邊を兼ねる思入、喜助びつくりする。此時上手障子屋體を明け、文里羽織着流しにて喜助を招く、喜助そつと上手へ行く、文里樣子を聞き思入。

お坊　これ、貸せなら貸して遣りもせうが、そんな言ひ掛りをされちやあ。

三人　なに、言ひ掛りをするものかえ。

お坊　はて野暮に大きな聲をせずと、まあ靜にいつても分かる事だ。
長次　いゝや、靜に言つちやあ二階中へ、
三人　盜人をしたのが分からねえ。
吉野　あゝもし、其樣な事を言はずとも、主も惡い樣にはしなさんすまいから。（ト吉野氣をもみ留める。）
長次　えゝ、手前の知つたことぢやあねえ。
熊藏　さあ吉三、大きな聲をするのが厭なら、
金藏　器用に分前、
三人　出してしまへ。（ト三人尻をまくり、吉三へ詰寄る。）
お坊　どうしたと、さう手前達が友達のよしみもなく爰へ來て、大きな聲をするからは、此以後己と附合はねえ了簡で言ふのだらう。友達づくなら五兩が十兩、ありせえすりやあ貸しても遣るが、愛敬こぼして來たからにやあもう三分の金も遣らねえから、荒事か荒磯か鯉は此方の持前だ、汝等の聲に怖れるものか。元はれつきとした扶持人、お乳母日傘でそやされた、お坊育ちのわんぱくが異名になつた此吉三、惡い事なら親讓り見よう三升に一年增し、其御最屓を笠に着て、形より肝が大きくなり、怖いといふ事しらねえ己だ、斯う云出したら二朱もいやだ。爰に持つてる此金

を中へ土産に地獄へ魁け、二人連れて行かうから、肚胸を据ゑて一緒に行きやれ。

三人　おゝ、行かねえでどうするものだ。（ト三人立掛る。）

喜助（出て三人を留め、）まあ〳〵、お待ちなされませ。

三人　えゝ、汝等が知つた事ぢやあねえ。

喜助　いえ私ではござりませぬ。あのお客様がお留めなされまする。

三人　なに、あの客とは。

文里　へい、憚ながら私でござりまする。（ト文里前へ出る。）

お坊（見て、）これは〳〵何方でござりますか、御親切に有難うござりますが、お構ひなすつて下さりますな。

吉野　もし吉三さん、ぬしが今言うた、文里さんでありんす。

お坊　それぢやあ妹一重がお客か。

文里　はい時折二階へ遊びに來る、文里といふ小道具屋でござりますが、どうぞ是からお心安く。

長次　こう〳〵、其挨拶より此方の挨拶。

三人　どう埓を附けるのだ。

文里　いや、どうのかうのと商人故、斯ういふ事はたべ附けませぬが、見えの場所にて其樣に大きな聲をなさるのは、深い樣子もござりませうが、其處を何ともおつしやらず、一口上つて御機嫌よく、お歸りなされて下さりませ。仲人役に爰で御酒をと存じますが、又もや兎やかうない樣に、定めてお馴染もござりませうから、それへどうぞお出なされ、一口上つて下さりませ。

長次　そりやあ通人と噂ある、こなたが留める事だから、

熊藏　了簡なして呑みもせうが、

金太　酒ばかりもをかしくねえな。

ト此内文里紙入より金を出し、紙に包み喜助に渡す。

喜助　もし、文里樣から御挨拶、失禮ながらお三人へ。

長次　（取つて）こりやあ小判で十五兩。

熊藏　一人前が五兩宛か。

金太　然し是を出さしては、

文里　はて、御遠慮なしに、どうぞそれで。

長次　いや流石は名高い、文里先生。

熊藏 恐れ入つた此扱ひ、

金太 通り者は別なものだ。

文里 左樣におつしやりますと、面目次第もござりませぬ。

長次 左樣ならお辭儀なしに、貰ひ立ちと致します。おい兄イ、腹も立つたらうが堪忍しねえ。

熊藏 つい播磨屋で一ぺいやつた、御酒の加減で言つたのだ。

金太 花魁後でいゝ樣に言つてくんねえよ。

長次 左樣なら文里先生。

三人 お暇を申します。（ト三人辭儀をして立上る。）

お坊 御挨拶故默つて居るが、此儘あいらを歸すのは。（ト立掛る。）

文里 （止めて、）はて何事も私に免じて。それ喜助、お三人をお送り申せ。

喜助 畏りました。

長次 そんなら吉三、花魁、

三人 お喧しうござりました。

喜助 さあ、お出でなされませ。

ト流行唄にて、三人に喜助附いて階子の口へはひる。跡端唄の合方になり、

お坊　豫て噂に聞いて居りましたが、初めてお目に掛り早々、飛んだ御厄介を掛けて、お氣の毒でござ
りまする。

文里　何さ萬更知らぬ人ぢやあなし、一重さんの兄御とあるからは、見ても居られぬ繋がる縁、必らず
心配なさいますな。

吉野　ほんに私しやどうなることかと、案じてゐたによい所へ、

お坊　文里さんのござつたので、

吉野　波風なしに此場の納り。

お坊　有難うござりまする。

文里　（思入あつて、）其お禮には及びませぬが、聞けば以前は御身分のあるお方といふ事だが、いかに若
いと云ひながら、何故あんな衆に附合をなされます。朱に交はれば譬の通り、お前にわるい氣
はなくともつい染み易いが人心、此後決してあんな衆と附合はなされますな。惡い噂のある時は
其身の、としかつめらしく云ふ私も、女房子がありながら斯うして遊びに参りますから、立派な
口は利けませぬが、然し己が稼業を精出し餘分があらば氣保養、遊ぶ爲の遊女屋だから誰に遠慮

もない譯だが、それも又凝り過ぎると果は人の物笑ひにならぬ樣程よく遊びにお出なさい、吉野さんも無理留めは、決してよしになさるがいゝ。

吉野　ほんに嬉しい主の御異見、

お坊　是からきつと愼みます。

文里　いや、私とした事がつまらねえ事を言つて、大きにお邪魔を致しました。（ト立上る。）

お坊　まあ、いゝぢやあござりませぬか。

文里　又お目に掛かりませう。

吉野　そんなら文里さん。

文里　お休みなさい。（ト流行唄になり、文里思入あつて上手へはひる。）

お坊　なるほど噂にやあ聞いて居たが、行渡りのいゝほんの江戸ッ兒、何故妹が嫌ふのか、己なれば大事にするのに。

吉野　ほんに文里さんには、誰さんでも。

お坊　それぢやあ手前も。

吉野　あい、私きやあ一倍大事にするよ。

お坊　あの文里を。

吉野　いえ、お前をさ。（ト顔をぢつと見て寄添ふ。）

お坊　（突退け、）おきやあがれ。（トせゝら笑ふ、流行唄にて此道具廻る。）

（一重部屋の場）――本舞臺一面平舞臺正面床の間違ひ棚、下手夜具棚、此下白木の簞笥、上下折廻し塗骨障子、總て一重部屋の體。蒲團の上に以前の文里煙草を呑みゐる、此傍に一重部屋着の打扮にて硯箱を前き巻紙へむだ書をしてゐる。下手長火鉢の傍に花の香番新の打扮にて鼻紙にて火をあふぎ、新造花琴、花鶴兩人居る。此模樣端唄にて道具留る。

一重　えゝ人の氣も知らずに、あの騷ぐことは。これ花琴、又誰か筆を持つていつたのか。

花の　外山さんか、さう云つて來な。

花琴　あい外山さんが、御免なんし、つい急に入りいしたから、お借り申すと先刻禮を言ひなんした。

花の　ほんに外山さんも大概だよ。いつでも部屋の物を遣つて。これ花琴さんも花鶴さんも、今にぬしが御酒をお上んなんすから、もつと炭をついで、ちろりや何かを揃へて置きなまし。

兩人　あい――。（ト酒道具を出す。）

一重　これ〳〵花鶴、もつと行燈を明るくしな、何故こんなに暗い行燈だの。

花鶴　幾ら掻立ていしても、これより明るくなりいせん。

一重　明日から、もつと明るい行燈と取替て貰や。（ト無駄書をして引裂き、じれる思入。）

文里　これ、どうしたのだ。

一重　どうもしいせん。

文里　何だか顔附が惡い樣だ、花の香や藥でも呑ませればいゝに。

花の　幾らさう申しても呑みなんせん。

一重　なに、私の顔付の惡いのは生れ付さ。

文里　そんな愛想盡しをやめて、一つ呑んだら氣が晴れよう。

一重　私しやどういふ生れやら、人に物を云はれると、腹が立つてなりいせん、何も言つておくんなんすな。

文里　いやもう年の行かねえ其内は、をかしくもねえに笑つたり、何でもねえ事に腹を立つものだ。さうしていつ迄も、爰に居たら風を引くと惡いから、羽織でも着ればいゝ。

花の　もし花魁、文里さんが氣を揉みなんす。花鶴さん、何ぞ着せ申しな。

花鶴　あい〳〵。

一重　え丶もう、うつとしい。(ト筆を打付け、)私に構つておくんなんすな。

ト一重ついと立つて下手障子の内へはひる。

文里　又癇癪か、困つたものだ。

ト端唄の合方にて引違へて下手より、九重部屋着姉女郎の打扮にて出來り、

九重　おや、一重さんは。

花の　今ちよつと下へ。まあお這入りなんし。

九重　これ花鶴さん、文里さんが來なんしたと、吉野さんに知らしておくんなんし。

花鶴　今初瀨路さんや飛鳥野さんが、知らせにお出なさんした。

九重　おや、さうかえ。(トよき所へ來る。)

文里　お丶九重さんか、待兼ねて居ました。

九重　よくお出なんした。久しくお出なさんせんから、みんな待兼ねて、噂ばかりして居りいした。

文里　いつ來てもさういつてくれるので、實に己あ嬉しいから、友達と寄ると、お前方の噂ばかりして居るよ。

九重　おや、悪くかえ。
文里　なに勿體ねえ、誰が惡く言ふものか。
下手より以前の吉野出來り、
吉野　九重さん、お出なんしたか。
九重　吉野さんか、文里さんがお出なんして嬉しいね。
吉野　文里さん、何とお禮を申さうやら、ぬしも宜しく申しいした。
文里　何の禮に及ぶものかな。
吉野　いえ〳〵、ぬしのお蔭で助かりいした。
文里　こう〳〵そんなにお前に言はれると、却て此方で氣の毒だ。もういゝ加減にしてくんねえ。
吉野　それはさうと、一重さんは。
九重　又何處ぞへか行きなんしたとさ。
文里　さあ一重に構はずお前方と、久しぶりで一ぱい呑まう。みんなの口に合ふものを、海老長へ云付けて置いたから、今に忠七が持つて來るだらう。
九重　それは嬉しうございますね。

文里　これ花琴、初瀬路さんや飛鳥野さんを呼んで來てくれ。

花琴　あい〳〵。

ト上手にて初瀬路、飛鳥野、「花琴さん、今其處へ參りんすよ」と言ひながら兩人出來る。

文里　さあ〳〵、是でいつもの顏が揃つた。

花の　丁度お燗がようざます。

文里　それぢやあ一つ初めようか。

ト花琴、花鶴臺の物を出し、是より捨ぜりふにて酒宴になる、階子の口より茶屋の若い者忠七肴を持つて出來り、

忠七　もし旦那、大きに遲なはりました。

文里　お〻忠七か。

忠七　あいにく客が落合ひまして。

文里　なに丁度よかつた。まあ爰へ來て一つ呑むがいゝ。

忠七　有難うございます。其替り花魁方のお好な物ばかり持つて參りました。

初瀬　ほんに、仲の町にも多く若い衆があるが、

飛鳥　忠七どんに限るね。
忠七　氣の利かないのが、
花の　まあ、そんなものさ。
忠七　是は御挨拶。
ト皆々わや〳〵と酒宴になる。下手よりおつめ遣手の打扮にて出て來り、跡よりさしがねの狆付いて來て、文里の膝へ上る。
つめ　是は文里さん、よくお出なさいました。此頃はさつぱりとお見限りでござりますね。
文里　何さ、此間から來たかつたけれど、仲間の市が續いたので、それで大きに御無沙汰をした。
花琴　おや〳〵そんなに市へお出なんすなら、今度羽子板を買つて來ておくんなんし。
忠七　そりやあ觀音様の市だ、旦那の市は道具市のことさ。
つめ　ほんに此子達は何時でもそんな事ばかり、これだから旦那世話がやけて困ります。
文里　然し爰が廓の命だ。(ト紙入より包んだ金を出し、)こりやあわざとお年玉。(トおつめへ祝儀をやる。)
つめ　是はいつもながら有難うござります。忠七どん宜しく。(ト狆を見て、)おや、いかなこつても、駒が旦那のお膝へ乘つてさ。

花の　いつでも主がお出なんすと、直に來てねだりいす。
九重　狆迄文里さんはいゝと見えるよ。
吉野　そりやあ可愛いざますね。
喜助　(下手へ出て來り、)もしおつめどん、按摩さんが來て待つて居ますぜ。
つめ　今行かれないから、歸して下せえ。
喜助　そんな事を云はねえで、早く行つて揉んで貰ひなせえ。
つめ　それぢやあ旦那御免なさいまし。
文里　まあいゝぢやあねえか。
つめ　いえ按摩が待つて居りますから。さあ駒よ、來い〳〵。(ト狆を抱き下手へはひる。)
九重　折角御酒が初まつて面白くなつた所へ、おつめどんが來たからうんざりしました。
吉野　それに文里さんが合はせなますから、何時迄居ようかと思ひした。
花の　御說法の話が出ると、引がものはありますね。
忠七　そいつは眞平だ。
喜助　大方皆さんがお困りなさるだらうと思ひましたから、按摩さんを呼込んで、おつめどんを呼出し

ました。

忠七　そいつあ喜ス公大當りだ。

文里　こりやあ早速、當座の褒美だ。（ト文里紙包の祝儀を遣る。）

喜助　これは有難うございります。

ト此時ばた〳〵にて花卷駈けて來り、忠七の蔭へ隱れる。

忠七　花卷さん、どうなさいました。

花卷　今廊下で與助どんにからかつたら、何處迄も追掛けんすものを。

忠七　ときに喜助どん、一拳いかうか。

喜助　何のへいぼのくせに。

忠七　へいぼなら何ぞ賭けてやらう。

喜助　いまお貰ひ申した、御祝儀を賭けよう。

忠七　己も先刻頂いたのがあつた。（ト兩人紙包みの祝儀を賭ける。）

花卷　こりやあ面白うざます。さあ〳〵、早くやんなまし。

ト是より流行唄の狐拳になり、兩人振あつて喜助負ける。

喜助　え丶忌々しい、負けたか。
初瀨　おつめどんの怨念ざます。
花卷　忠七どん、何ぞ奢んなまし、お前の樣にい丶人はないに。
忠七　まだ花卷さんの好な物があります。
花卷　おや誰ざますえ。
忠七　新仲の丁え。
花卷　なに、新仲の丁え。
忠七　それ櫻の木の大福が、餡が澤山でい丶と言ひなすつた。
皆々　こりやあ當てられたね。
花卷　え丶憎らしい。（ト忠七の背を打つ。）
忠七　そんなことをしなさると、とうすみさまに言付けますよ。
花卷　とうすみ樣とは、冬映樣のお弟子かえ。
忠七　なに、きのえねやのさ。
花卷　え丶かつぎなます。

喜助　あゝ、いゝ氣味だ。
初瀨　花卷さん。
皆々　つねつておやんなんし。
忠七　いや、いたち屋は御免でござります。
ト忠七逃出すを花卷追掛ける、是を喜助留めながら下手へはひる。此内始終文里鬱ぐ思入
九重　こんなにみんなが騷ぐのに、いつにない文里さんが、今日は顏の色も惡し、
吉野　どうやら鬱いで居なます樣子、
初瀨　お氣に濟まぬ事でもあらば、
飛鳥　御遠慮なしに私等へ、
花の　どうぞ言うて、
皆々　おくんなんし。
文里　(思入あつて、)さあ、此のふさぐのは名殘の惜しさに。
九重　え、名殘の、
皆々　をしさとは。

文里　さう親切に言つてくれるお前方へ打明けて、疾から言はうと思つて居る、私が心の一通り、九重さんを初めとして、みんなもどうぞ聞いてくんねえ。（トしつぽりとした合方になり。）どういふ事の因縁か、二年此方通ふのも初手は仲間の交際で、一度が二度の酉の町、雪の朝の居續けも、ふり通された此文里、笑つた顏を見た事もまだ内證の手を離れたばかり、年の行かねえ一重故氣随氣儘も尤もだが、どうせ苦界と云ふからは好いた客ばかりはねえ。厭な客にも程を合せ、人の上に立つ者は慾を知らにやあ身が立たねえ。行末長い苦界の入譯とつくり云つて聞かしたいが、顏を見るのもいやな私故、いゝ事も惡く聞いて却つて爲にならねえから、爰は仲よしの九重さん、お前が異見をしてやんなせえ。是せえ頼めば私も安堵、もう心殘りもねえ故、思ひ切つて是から來ぬ氣、然し附合で來た時は格子迄來ようから、今迄のよしみを思ひ、よく來たと云つてくんなせえ、二年越に馴染で來た今夜が二階の見納めだと、思へば、名殘が惜しまれて、それで己らあふさぐのだ。

ト文里ホロリと思入、皆々も泣きながら、

九重　そんならぬしは今宵限、

吉野　もう此二階へは、

皆々　お出なんせぬか。
文里　來ぬといふのも是迄の、やつぱり緣であつたらうよ。
初瀨　こりやあどうしたら、
皆々　ようざませう。（ト皆々泣く。）
吉野　ほんにまあ今宵限りお出なんせぬお心で、今も今とて一重さんの、緣に繫がる吉三さんの難儀を救ふお志し、こんなお方が又とあらうか、心で拜んで居りんした。（ト吉野泣く。）
九重　其御親切を聞く上は、一重さんに意見をして、聞かぬ時は內證の耳へ入れても一重さんに、詫をさせねば濟みいせん。
文里　はて、其異見は歸つた後で、云つて聞かしておくんなせえ。
九重　いえ〳〵、ぬしの居さつしやる內、
花の　どうぞ九重さん、よいやうに。
九重　わたしが云つて聞かせよう。
ト立上り下手へ來る、此以前より下手障子の內へ一重出て是を聞き居る、九重見て「や一重さんか。」といふので、一重「え」とびつくりなし逃げ出す。

九重　あれさ、待ちなんしといふに。（ト追掛けて下手へはひる。）
吉野　お腹も立たうが文里さん、どうぞ今夜は私らに免じて、泊つて行つて、
皆々　おくんなんし。
文里　さうみんなに言はれると、歸るにも歸られず、といつて居れば未練の種、（ト湯呑を出し、）吉野さん一つ注いでくんな。
吉野　おや、是でかえ。
文里　二階の名殘だ、滿々注ぎな。
吉野　それだといつて、
文里　はて、酒でも呑まねば居られねえ。（ト是にて吉野是非なく注ぐ。此の見得流行唄にて、道具廻る。）

（九重の部屋）――本舞臺矢張平舞臺、向ふ廊下を見たる遠見の座敷、上下折廻し塗骨障子屋體、九重部屋の體。上手に九重煙管を持ち、下手に一重俯向居る。

九重　これ一重さん、お前何と思ひなんすか、文里さんの今の詞、人に知らせもしなさんすまいが、お前の胸に覺えのある事、勿體ない程親切にしなさんすほど意地を張り、ふり通すのを此里の意氣

地と思つて居やしやんすが、そりや大きな了簡違ひ、初手は厭でも眞實の心に惚れるが遊女の習ひ、取分けて又文里さんは、一座をせぬ者迄が惡く云ふ者は一人もおッせん。ちつと足が遠くなれば待遠がつて噂ばかり、お前も聞いて居なさんしたらうが、吉野さんの今の話、今宵限りもう來ぬと、愛想の盡きたお前の兄さん、吉三さんの難儀をば救ひなさんす其親切、人の事でも刎體なく、私しや涙が止りいせん、お前も以前は武士の胤、よう思案してみなさんせ。

一重　此九重さんの其お詞、身に染々と嬉しうおッす、ほんに久しう來なんす中も、遂にいやらしい事もなく紋日物日の苦勞もさせず、私が氣儘を柳に受け、歸らしやんした其後では、あゝ氣の毒なと思ひしても、つい浮かくと今日迄も。

九重　さあ惡くしたのは濟まぬことゝ、お前の心が附いたなら、文里さんにあやまつて呼遂げなんすやうになさんせ、辛い勤の其中でも、姉と云はるゝ私故、妹と思うて此異見、必らず惡く聞きなますな。

一重　何の惡う聞きませう、お前の異見に氣を取直し、呼び申す心なれど、今更どうも此顏が。

九重　合されぬと思ふなら、何故あの樣にしなんした、浮氣な廓にも契城の、意氣地と義理がありんすぞえ。(ト九重鼻紙を顏へ當てゝ泣く。)

一重　九重さん堪忍して下さんせ、今更何と云譯も、言ひおくれたる身のつらさ、顔を拭うて文里さんへ、私しやあやまりに參りいす。
九重　そんなら私の異見に附き、
一重　さあ濟まぬ事と氣が附けば、今も今とて兄さんの、難儀を救うて下さんした、お情深ひ文里さん命に替へても取留めて、お呼び申す樣にしいす。
九重　おゝそれでこそまことの契情、異見を云うた私を初め、傍輩衆も嘸悦び。
ト此時初瀨路、飛鳥野出て來り、
初瀨　九重さん、先刻からのお前の異見、障子の外で聞いて居いした。
飛鳥　よく一重さんも氣を取直し、あやまる樣になりんした。
初瀨　善は急げといふからは、
飛鳥　歸らしやんせぬ其内に、
九重　少しも早う文里さんへ。
一重　あい。（ト涙を拭ひ、）あやまりに參りいせう。（トしをく\と立つて下手へはひる。）
九重　ほんに、あんな困る子はない。

初瀬　然し、九重さんのお骨折で。

飛鳥　どうか今宵は仲直り、

九重　やうやく安堵致しいした。あいた〳〵〳〵。（ト癪の痛む思入。）

初瀬　もし、九重さん、

兩人　どうなさんした。

九重　あんまり文里さんの事で氣をもんだ故、痞えが下りたら又癪が。ほんに苦界でござんすなあ。

ト宜しく道具廻る。

（元の一重の部屋の場）――になり、流行唄の合方にて道具留る。と獨吟になり、下手より一重出て來り、上手の障子を明けようとして明け兼ねる思入あつて、障子の傍へ來て、

一重　もし文里さん〳〵、嘸腹が立ちなんしたらうが、どうぞ今迄の事は堪忍して、機嫌を直しておくんなんし。もし文里さん〳〵。

ト呼べども返事なき故ハアと泣き、袖を口へ當てる。是にて又獨吟になり、物を云はぬは尤もだといふ思入あつて、

二年此方お出でなんすに、遂に一度機嫌ようお歸し申した事もなく、今更私があやまつたとて、

心の解けぬは無理ならず、何故今迄はあの樣に、人が褒めれば逆らうてつまらぬ意地を張通し、惡くしたりか勿體ない。思ひ廻せば廻す程、主には濟まぬ事ばかり。（ト障子の内へ思入あつて、）はあゝ。（ト泣伏す、是にて文里障子を明け、煙草盆を提げ出て來り。）
文里　花魁、何を泣くのだ。
一重　もし文里さん、是迄長の私が我儘、嘸お腹が立ちましたらうが、どうぞ堪忍しておくんなんし。
文里　なに、腹を立つものか、嫌がられるを知りながら、やつぱりお前の顏が見たさ、べん〳〵と來たのは此方があやまり。
一重　えゝも其樣に云ひなんす程、いつそ死にたうござんす。
文里　つまらねえ事を云つたものだ、今仲の町で指折の花魁、文里風情の義理立に、死なうなぞとは惡い了簡、嘘にもそんな事は云ひなさんな。
一重　今更何と云はうとも所詮お心は解けまいが、せめて私が身の言譯。（ト又獨吟になり、一重簞笥の抽出より小刀を出し、煙草箱へ小指を當てゝ小刀で切る　文里是を見て思入、一重痛みを俅へ件の指を紙へ載せ。）今改めてぬしの心中、是で心の疑ひを、どうぞ晴らしておくんなんし。
文里　花魁、こりやあ指かえ。

一重　あい。

文里　いやお志しは忝いが、是ばかりは貰ひたくねえ。（ト指を取つてはふり出す。）

一重　えゝ。（トびつくりなす。）

文里　女郎の指を嬉しがつて貰ふ氣なら二年越し、ふられに爰へ來やあしねえ。流石年端が行かぬ故慾を知らねえ花魁と、子供の樣に思ふから惡くされるも厭はずに、無駄な金を遣ひに來たが、かういふづぶとい仕打をされちやあ持て生れた癇に障らあ。惣體苦界といふものは三つ蒲團の花魁でも、菰一枚の夜鷹でも、己が勝手に身を賣つて勤めをする者は一人もねえ。親兄弟や夫の爲め切ない義理に沈める身體、それを思へば不便さに氣隨氣儘も廓の習ひと、柳に請けて氣に入らぬ風も素直に通してやつた。辛くするなら一筋に、何故辛くはしねえのだ。なまじ情の空淚、今になつて何の事だ。云ひてえ事も數々あれど、云へば云ふ程此身の恥、若い者でもある事か四十に近い文里故、恥を思つて何にも言はねえ、痛え思ひの此指は、何處ぞへ賣つて金にしろえ。

ト文里きつと云つて烟草をのみ居る。

一重　（始終泣居て、）成程腹も立ちいせう、それも私が心柄故身を恨んで居りますが、せめて一言堪忍したと、言ひなんすを聞いた上では、命も私しや惜しうおツせん。

文里　今更言つても無駄な事、おれも何にも言はねえから、お前も何にも言ひなさんな。
一重　そんならどうでも。
文里　言へば云ふ程、互ひの恥だ。
一重　はあゝ。(ト泣伏す。又獨吟になり、一重以前の小刀を取り。)さうぢや。(ト死なうとする。)
文里　(あわてゝ留めて。)あゝこれあぶねえ、何をするのだ。
一重　どうぞ死なしておくんなんし。
文里　えゝ怪我でもするとならねえわ。放せと云つたら放さねえか。(ト小刀を無理に引たくる。一重はハッと泣伏す。文里小刀を見て、)此の小刀を、どうしておぬしが。
一重　さあ、これは私が親の形見。
文里　此小刀は我親文藏様が祕藏にて、其頃花の友達に達て望まれ讓りしは、たしか安森源次兵衞樣。
一重　えゝ。(ト思入。)
文里　そんなら、若しや安森の、
一重　あい、恥かしながら、娘でござんす。
文里　むゝ、其安森の娘御が、どういふ譯で此廓へ。

一重　まだ其時は子供故、後々聞けば父樣が御主樣より預かりの、庚申丸といふ短刀を、盜み取れし越度にて御切腹故家斷絕、それから長の浪々中、母の病氣に苦界の勤め。

文里　すりや、研屋與九兵衞が世話にて買ひし庚申丸、あの短刀故沒落ありしか。知らぬ事とて其短刀一昨日海老名軍藏樣へ研屋與九兵衞が百兩に賣つたが、其代金を請取りし十三はそれより行方知れず、聞けば買主軍藏樣も人に殺され死んだとやら、何にしろ短刀は研屋に聞いたら行方も知れよう。はて、とんだ話しになつて來た。

一重　そんなら失ふ短刀が、お前のお手にあつたるとか。

文里　それも一昨日賣つた故、今では何處の手にあるか。

一重　其短刀を御上に上げれば、末の弟で家再興、昔馴染とあるからは只是迄は水にして、力となつて下さんせ。

文里　見る影もねえ男だが、江戶の氣性に後へは引かねえ。

一重　ゑゝ嬉しうござんす。是に付けてもまだ外にお賴み申す事もあれば、私と一緒に奧へ來ておくんなんし。

文里　知らぬ先は兎も角も、安森樣の娘とあれば、賴む事なら聞いてやらう。

一重　どうぞ聞いておくんなんし。（トいそ〳〵して立上る。此時雨車になり、一重思入あつて、）もし文里さん、雨が降つて來いしたよ。

文里（立上り櫺子の外をちよつと見て、）どうで今夜も、

一重　え。

文里　ふられるだらう。

　ト文里につこりと思入、一重憎らしいといふ思入、あれ又憎やの唄にて道具廻る。

（傳吉内の場）＝本舞臺三間の間常足の二重、正面暖簾口上手緣起棚内に宜しく福助土の金など飾り、此脇鼠壁神棚に札箱、備を飾り、下手佛檀付の押入戸棚、上の方一間障子屋體、下の方一間臺所口三尺の戸障子、提灯の皮の櫺子窓、いつもの所門口。總て割下水傳吉内の體。爰に夜鷹のおはぜ小さな箱に化粧道具を入、れ己惚鏡で顔をしてゐる、傍におてふ半分顔を塗り、煙管を持つて叩き立て居る。下手においぼ摺鉢の火鉢へ焚火をして、傍に五合德利皿にうで蛸の足二本あり、茶碗にて酒を呑みゐる、四つ竹節通り神樂にて幕明く。

はぜ　え丶耳喧しい、何をそんなに大きな聲をするのだ。

てふ　さういふ汝が聾だから、小さな聲ぢやあ分からねえ。
いほ　何だか知らねえが、靜に云つても分からうぢやあねえか。
てふ　こう、おいぼさん聞いてくんな、今顏をしようと思つたら白粉が足らねえから、貸せと云へば貸さねえと云ふ故、そんなら私が貸してやつた、錢を返してくれと云ふのだ。
いほ　さうでもあらうが、親方もおとせさんが歸らねえので、氣を揉んで居なさらアな。
てふ　それをわつちあ知つて居るから、言ひてえ事も言はねえのだ。
はぜ　言ひてえ事があるなら思ひれ言ふがいゝ、何ぞといふと返せ〳〵と、此方こそ貸があれ、そつちから借りた覺えはねえ。
てふ　なに、ねえ事があるものか、一昨日の晩蕎麥が二杯、歸りがけに夜明しできらず汁に酒が一合、今朝も漬物屋の澤庵を、八文買ふ時四文貸し、丁度それで百ばかりだ。
はぜ　そりやあ手前が此間和田の中間に立引く時、七十二文貸があらあ、まだ其上に四文屋の、十二文といふ棒鱈を、手前に二つ喰したから、此方も百貸があるのだ。
てふ　べら棒め、あのぼう鱈は歯がなくつて喰へねえといふから、それで己が喰つてやつたのだ。
はぜ　何でもいゝから己が方へ、百返して置いて理窟を云へ。

てふ　うぬに返す錢があるものか、此方へ百取らにやあならねえ。
はぜ　幾ら取らうとぬかしても、遣らねえと言つたらどうする。
てふ　どうするものか、腕づくで取る。
はぜ　面白い、取らるゝものなら取つて見ろ。
てふ　取らねえでどうするものだ。
　ト獅子の鳴物になり、おてふは長煙管、おはぜは有合ふ薪を持つて打つて掛るを、おいぼ是を割つて入り、双方を留め、
いぼ　これさ〳〵、いゝ加減にしねえのか。（トおいぼ半纏を脱いで兩人の叩き合ふ煙管と薪を押へ）待てといつたら、まあ〳〵待つた。
てふ　いらぬ留めだて。
兩人　退いた〳〵。
いぼ　いゝや退かれぬ退きませぬ、あぶねえ煙管と薪の中、見兼ねて留めにはひつたは、三十振袖四十島田、今一對の二人は、名におふ關のばゝあおはぜに外に嵐の虎鰒おてふ、互ひに爭ふ百の錢此貸借は夜鷹湯の下水に流してさつぱりと、綺麗に預けてくんなせえ。（ト半纏を取る、兩人別れて）

てふ　おゝ、さういふ事なら預けもせうが、
はぜ　さうして百の貸借は。
いぼ　中へはひつた私が不承、昨夜お信の床花に小錢交りで貰つた百、二つに分けて五十宛、足らぬ所は兩腕の替りに二本の鮹の足、高い物だが五十として、是で百にしてくんねえ。

ト桔梗袋へ入れし錢と鮹の足を二本出す。

てふ　流石は名代のうで鮹おいぼ、兩足出しての扱ひを、
はぜ　まさか此儘取られもしめえ。
いぼ　そんなら爰に二合ばかり、殘つた酒で仲直り、
てふ　物は當つて碎けろか。
はぜ　犬と猿との嚙み合も、
いぼ　是から兄弟同樣に。
てふ　三人寄つて、
兩人　義を結ばうか。

ト四つ竹通り神樂になり、三人酒を呑み居る。花道より權次の妓夫出て來り、直に内へはひり、

權次　こう、お前達はまだ支度をしねえのか。
いぼ　なに、しねえ所か、疾に身支舞もしてしまつて、
てふ　お前の來るのを待つて居たのだ。
權次　己あ又遲くなつたから、場所へ小屋を掛けて來た。
はぜ　そりやあいゝ手廻しだの。
權次　さうして親方は奥かえ。
三人　あい、奥に居なさるよ。
傳吉　おゝ權次か歸つたか。（ト奥より、前幕の傳吉行燈を持ち出て來り。）やれ〳〵大きに御苦勞だつた。
權次　つい先から先を歩いて、思ひの外遲くなりました。
傳吉　何うだ娘の居所は知れねえか。
權次　あい少しでも當りのある所を、方々尋ねて來やしたが、どうも居所が知れませぬ。是が身性でも惡けりやあ逃げでもしなすつたと思ひやすが、親分の娘にしちやあ堅過ぎるおとせさん、そんな氣遣へもあるめえし、それに爰に居る三人なら、おッ放して置いても大丈夫だが、野玉に過ぎた器量ゆゑ、引かつがれでもしやあしねえか。

傳吉　さあそれを己も案じられて、今日はろく／＼飯も喰へねえ、こんな氣ぢやあなかつたが、爰が段段取る年で、先から先を考へるので、ほんに餘計な苦勞をするよ。

權次　然しこんなに案じるものゝ、昨夜何處ぞへ泊りなすつて晝間歸るも間が惡く、直に場所へ行きなすつたかも知れねえ。

傳吉　何にしろ手前達は、是から直に場所へ行き、おとせが居たら誰でもいゝから先へ一人歸つてくれ。

はぜ　あい／＼、居なすつたら年役に、わつちが先へ歸つて來よう。

權次　えゝ、おつかあ樂な方へ逃げたがるな。

はぜ　こりやあ年寄の役德だ。

權次　さあ／＼、支度がよけりやあ出舟とせうぜ。

ト此内權次緣起棚に盛つてある鹽へ切火を打ら、門口へ蒔き、跡を三人にやる。皆々鹽を振り、權次錢箱を風呂敷にて脊負ひ、

權次　そんなら親方、行つて來ます。

傳吉　行く道も氣を付けてくれ。

權次　合點でござります。

ト三人鼠鳴をして、おはぜおいぼ黑のお高祖頭巾、おてふは頰冠りをする。傳吉向うへ思入あつて、

傳吉　たゞならいゝが、から身でねえゆゑ。

權次　えゝ。

傳吉　いやさ、傘を持つて行くがいゝ。

權次　ほんに惡い雲行だ。

いぼ　水晴れは眞平だ。

てふ　ばれねえ内に、

權次　道を急いで、

三人　さいでく。（ト四つ竹節、通り神樂にて皆々花道へはひる。）

傳吉（見送りて、）あゝ案じられるは娘の身の上、大まい百兩といふ金故、ひよつと間違ひでもある時は己は兎もあれ奧に居る昨夜助けた木屋の若い衆、家へ歸すこともならずどうしたらよからうか、なるほど道に落ちた物を拾ふなとはよく言つた事だ。とんだ金を拾つたばかり、餘計な苦勞をしにやあならぬ。あゝ早く便りを聞きてえものだ。

ト矢張り右の鳴物にて、花道より久兵衞半纏股引尻はし折にて、弓張提灯を持ち、前幕のおとせを

連出て來り。

久兵　これ娘御、お前の内は何處らだな。

とせ　はい、向うに見えますが、私の家でござります。

久兵　あゝそんなら向うでござるか。是から家へ歸つても、死なうなぞといふ、無分別は決して出さつしやるな。

とせ　御親切にお留め下され、有難う存じます。

久兵　嘸親御が案じてござらう。さゝ少しも早く行きませう。（ト本舞臺へ來り、門口にて）はい、ちよつとお頼み申します。

傳吉　あい、何處からござりました。

とせ　父さん、私でござんす。（ト内へはひる。）

傳吉　おゝ娘か、やれ、よく歸つて來た。

とせ　昨夜飛んだ災難に逢うて既に死んでしまふ所、此お方に助けられ、お蔭で歸つて來た故に、ようお禮を言うて下さんせ。

傳吉　これは〳〵どなた樣でござりますか、娘が命をお助け下され、有難う存じます。

久兵　いやも既の事に危い所、やう／＼の事でお助け申しました。

傳吉　してまあ、昨夜の災難とは、どんな目に逢つたのだ。

とせ　さあ金を落した其お人を尋ねに場所へいた所、お目に掛らずすご／＼と歸る途中の大川端、道から連になつたのは、年の頃は十七八で振袖着たるよい娘御、夜目にも忘れぬ紋所は、丸の內に封じ文、其娘御が盜人にて持つたる金を取られし上、川へ落され死ぬ所を、此お方に助けられ、危い命を拾うたわいな。

傳吉　（是を聞きびつくりなし、）えゝ、すりや拾つた金を取られしとか。

とせ　あいなあ。

傳吉　はて、是非もないことだなあ。（ト當惑の思入。）

久兵　（前へ出て、）いや、其後は此の私が、かいつまんでお話し申さう。私は八百屋久兵衞といふて百姓半分青物商ひ、昨夜東葛西から舟に牛蒡や菜を積んで通り掛つた兩國川、水に溺れて苦しむ娘御、やう／＼上げて介抱なし、我家へ伴ひ歸りし所、御覽の通りの貧乏暮し、着替の着物もない故に紡太を着せて夜通し掛り、やうやく火箱で着物を干上げ、今朝連れて參らうと思ふ出先へひよんな事、私が悴が奉公先で金を百兩持つた儘、行方が知れぬと主人より人が參つてびつくりなし、

取敢ず先先方へ顔を出し、それから方々心當りを、尋ね捜せど行方知れず、それ故大きに遲なはり、餘計に苦勞を掛けましたは、どうぞ許して下さりませ。

傳吉　それは〱お前樣の、御苦勞の中で太いお世話、何とお禮を申さうやら。それに付けて此方にも似寄つた話しがありますが、して息子殿の年恰好は。

久兵　今年十九でござりますが、私と違つて色白で目鼻立ちもぱつちりと、親の口から申し憎いが好い男でござりまする。

とせ　どうか樣子をお聞き申せば、金を落したお方の樣。

久兵　それ故もしや言譯なく、ひよんな事でもしはせぬかと、案じられてなりませぬ。

傳吉　其お案じは御尤も、誰しも同じ親心、したが其息子殿は別條ないから安心なさい。

久兵　え、すりや達者で居りますとか。

傳吉　今お前に逢はしませう。おい十三さん〱。

十三　はい、只今それへ參ります。

ト奥より前幕の十三郎しを〱と出で來る、久兵衛見てびつくりなし、

久兵　や、悴か。

十三　親父樣か。
久兵　よくまめで居てくれた。
十三　あゝ、面目次第もござりませぬ。（ト俯向く。）
とせ　（見て、）や、お前はどうして此方の家へ。
十三　さあ金を失ひ言譯なく、川へ身を投げ死なうとせしを、傳吉樣に助けられ、昨夜から御厄介。
とせ　それはよう來て下さんした。是に付けても今の今迄、私や死にたう思うたは、どうした心の間違ひやら、死んだら爰で逢はれぬもの。もう〳〵死ぬ氣は少しもない。鶴龜々々。
ト　おとせ十三郎に惚れて居る思入。傳吉扱はといふこなし。
久兵　そんなら死ぬ氣はなくなりましたか、やれ〳〵それはよい了簡。あゝ思へばいかなる緣づくか。
傳吉　此方の息子は己が助け、
久兵　お前の娘は私が助け、
十三　捨てる命は拾へども、
とせ　拾うた金は盜まれて、
傳吉　今となつては、

久兵　互ひの難儀。

十三　こりやどうしたら、

四人　よからうぞ。（ト四人思入。）

傳吉　まあ何にしろ其の百兩、娘が拾つて盗まれたら、此方も脱れぬ掛り合ひ、死に身になつて共々に金の調達しようから、まあそれ迄は息子殿、行方の知れねえ體にして、私に預けてくんなせえ。惡いやうにはしめえから。

久兵　それは〳〵有難い御親切な其お詞、あまへてお願ひ申すのも、そでないことではござりますが、何をお隱し申しませう、實の親子でない故に、此方に隔てはなけれども難儀を掛けて氣の毒なと、居憎い事もござりませうかと、それが案じられまする。お願ひ申したうござりますが、然し馴染もない貴方へ、お氣の毒でござりまする。

傳吉　なに、其氣兼には及ばねえ、こんな生業、年中人の一人や二人ごろついて居る私が家、決して案じなさらねえがいゝ。

久兵　それは有難うござりまする。

十二　そんなら私は此方の家に、

とせ　是から一緒に居さんすのか。
傳吉　おゝさ、なくした金の出來る迄は、己が預り家へ置くのだ。
とせ　そりやまあ嬉しい。
傳吉　や、
とせ　いやさ、家が賑やかでようござんすな。（トおとせ十三郎と顏見合せ、嬉しき思入。）
傳吉　そりやあさうと、此息子殿義理ある仲と言ひなさるが、貰ひでもしなすつたのか。
久兵　いえ、拾ひましたのでござります。
傳吉　えゝ。そりやあ何處で。
久兵　忘れもせぬ十九年後、實子が一人ありましたが、子育ちのない所から名さへお七と附けまして、女姿で育てましたが、丁度五歳で勾引され、行方の知れぬを所々方々捜して歩く歸り道、法恩寺の門前で拾つて參つた此の悴、こりや失ふ悴の其替り祖師樣からのお授けと、家へ連れて歸つて見れば、守の内に入れてあつた土細工の小さな犬に、十月十三日の誕生と、書記してあつたので、戌の年の生れと知れ、十三日の生れ日は卽祖師の御緣日故、直に十三と名を付けて育てましたる此悴、實の親は何者か、どうで我子を捨てるからは、ろくな者ではござりますまい。

ト、これを聞き傳吉ぎつくり思入あつて、おとせ十三郎を見て愁ひの思入。

傳吉　すりや、法恩寺の門前で息子殿は拾つたのか、はて思ひがけねえ事だな。（ト宜しく思入。）

久兵　いや、勝手ながら、私は主人方へ言譯に、是から廻つて行きますれば、もうお暇致しまする。

傳吉　それぢやあ息子殿の身の上は、私に任せておきなせえ。

久兵　何分お頼み申しまする。

十三　（前へ出て、）あ思ひ廻せば私は、何處の誰が胤なるか、實の親は名さへも知らず、まだ當歳の其折から此年迄の御養育、大恩受けし親父樣へ何一つ御恩も送らず、御苦勞かける不孝の罪、どうもそれが濟みませぬ。

久兵　はてそれとても約束事、必らずきな〱思はぬがよい。（ト久兵衛立ちかゝる。）

とせ　そんならもうお歸りでございますか。

久兵　はい、又お禮に上りますが、何分ともに悴がお世話を。

とせ　そりやもう私が、（ト嬉しき思入にて、）どの樣にも。

久兵　それは有難うございます。左樣なれば傳吉殿。

傳吉　久兵衛殿。

久兵（門口へ出て、）忰。

十三　はい。（ト門口へ來る。）

久兵（顔を見て、）煩はぬ樣にしやれ。（トホロリとして門口をしめる。唄になり久兵衞涙を拭ひ花道へはひる。）

傳吉　折角娘が歸つたらと、思つた金も鶍となり、今更仕樣もねえ譯だが、然し金は世界の湧物、明日にも出來めえものでもねえ、まあ案じずと二人共昨夜からの心遣ひ、奥へ行つて寐るがいゝ。

とせ　そんなら父さん十三さんと、奥へ行つてもようござんすか。

傳吉　あゝいゝとも〳〵、若い者は若い者がいゝ、年寄ぢやあ話が合はねえ。

とせ　さあ十三さん、父さんのお許し故、是から奥でしつぽりと、いえ、今宵はしつぽり降りさうなれば、寐ながら話しを。（ト嬉しき思入にて、十三郎の袖を引く。）

十三　いえ、まだ私は睡うござりませぬ。

とせ　睡うなくとも私と一緒に。

十三　ではござりまするが。（ト行兼ねる思入。）

傳吉　睡くなくば炬燵へでも、當りながら話しなせえ。

とせ　あれ、父さんもあゝ言はしやんすりや。

十三　そんなら、御免下さりませ。

傳吉　どうで夜具も足りめえから、睡くなつたら其儘に、炬燵へ直に寐なさるがいゝ。

十三　有難うござります。

とせ　ほんに、此樣な嬉しい事が。（ト嬉しき思入。）

傳吉　（見て。）あゝ、何にも知らず。

兩人　えゝ。

傳吉　早く寐やれよ。

ト唄になり、おとせいそ〳〵として十三郎の手を取り奥へはひる。傳吉跡を見送り溜息をつき、ちつと思入、四つ竹節通り神樂になり、花道より和尚吉三前幕の装、頰冠りにて出來り、

和尚　昨日思はず大川端の、庚申塚でお孃お坊の二人と、兄弟分になつた時、己によこした此百兩、こいつばかりは滿足に貰つた金だ。然しあいらが持つてる金だから、どうで淸くもあるめえが、己が爲にやあ淸い金だ。久しく親父にも逢はねえから、まあ半分は親父へ土産、こんな根性でも親父が事は案じられらあ。おつなものだな。（ト門口へ來り。）あい、御免なさい。（ト門口を明ける。）

傳吉　誰だ。

和尚　とつさん己だよ。(ト手拭を取り内へはひる。)
傳吉　おゝ吉か、何しに來た。
和尚　何しに家へ來るものか、お前も段々取る年だから、替る事でもありやあしねえかと、ちよつと見舞に寄つたのだ。
傳吉　そりやあ奇特なことだつたが、おらあ又無心にでも來たかと思つた。
和尚　父さんそりやあ昔のことだ。今ぢやあ何處にくすぶつて居ても、鹽噌に困る樣なことはねえ。寐て居て人が小遣ひを、持つて來て呉れる樣になつた。是と云ふのも親のお蔭、是迄度々無心を言ひ何の中にも義理とやら、小遣ひでも上げてえと思つた壺に目が立つて、昨夜ちつとばかり勝つたから、それを持つて來やしたのさ。
傳吉　いや其志しは忝いが、勝つたといふ其金も、噂の惡い手前故おらあどうも安心ならねえ。大方五兩か十兩だらうが、そりやあ手前のことだから、己に難儀は掛けめえが、端た金で其時に、苦勞をするのはおらあ厭だ。志しは貰つたから、金は持つて歸つてくれ。
和尚　(むつとして、)そりやあお前が言はねえでも、百も承知二百も合點、えゝ幾つになつても小僧の樣に己を思つて居なさるだらうが、三年立ちやあ三つになりやす。久し振で尋ねて來るに、まさか

わつちも五兩や十兩の、端た金は持つて來ねえ。

傳吉 なに、端た金は持つて來ねえ。

和尚 ちよつとしても、そりや、五十兩あるよ。(ト懷から前幕の金を出し、傳吉の前へはふり出す。)

傳吉 (取上げて。)すりや、あの是を。(トびつくりなす。)

和尚 又入るなら、持つて來やせう。

ト和尚吉三かます煙草入を出し、煙草をのみ居る。傳吉は此金が欲しき思入あつて、どうで盜んだ金だから止さうといふこなし。

傳吉 僅五兩か十兩の端た金と思ひの外、こりやあ小判で四五十兩、丁度此方に入用の、さあ欲しい金でも貰はねえ、以前と違つて惡事を止め、今ぢやあ信者講の世話役に、お題目と首ッ引放、そでねえ金は貰えねえ。

和尚 何故貰えねえと言ひなさるのだ。親の難儀を貢ぎの爲、子が金を持つて來るのは、言はずと知れた親孝行、お上へ知れりやあ辻々へ、張札が出て御褒美だ。何でそでねえと云ふのだらう。

傳吉 いや御褒美が出て辻々へ、張札が出りやあいゝけれど、もう百兩と纏まれば此江戸中を引廻し、其身の惡事を書記した、捨札が出にやあならねえわ。端た金でも取るめえと思つた所へ五十兩、

猶々こりやあ貰えねえ、早く持つて歸つてくれ。（ト金を吉三の前へ突戻す。）

和尚　そりやあ父さん分らねえといふものだ。假令此金でくれえ込み、明日が日首を取らるゝとも、お前に難儀を掛けるものか、堅氣な人なら怖からうが、根が惡黨のなれの果、びくびくせずと取つて置きねえ。

傳吉　いやいやこりやあ取られねえ、と云ふのは若い時分にした惡事が段々報つて來て、今も今とて現在の。まだ此上に此金を取つたら、どんな憂目を見ようか、あゝ恐ろしいことこと。

和尚　何だなそんな愚痴を云つて、取る年とは云ひながら、お前もけちな心になつたの。それぢやあどうでも此金は、入らねえと云ひなさるのかえ。

傳吉　さあ今も己が云ふ通り、なくてならねえ百兩の土臺に据ゑる五十兩、唾の出る程欲しいけれど。

和尚　ほしけりやあ、取つて置きなせえな。（ト又金を傳吉の前へ置く。）

傳吉　いやいや此金ばかりは取られねえ、早く持つて歸つてくれ。

　ト金を取つて吉三にはふり付ける。吉三むつとなし、

和尚　えゝ入らざあよしねえ上げますめえ、惡黨ながら一人の親、ちつとも樂をさせてえから、わざわざ持つて來た金も、氣に入らざあよしやせう。（ト吉三金を取つて懷へ入れる。）

傳吉　さあ〳〵外に用もねえことなら、手前が居ると目障りだ。ちつとも早く歸つてくれ。

和尚　歸れと云はねえでも歸りやす、何時迄爰に居られるものか。

傳吉　其根性が直らずば、此後家へ來てくれるな。

和尚　なに、來いと云つたつて來るものか。（ト云ひながら腹を立てし思入にて門口へ出る。）

傳吉　おゝ、來てくれぬ方が孝行だ。

和尚　（門口へ出て思入あつて、）以前は名うての惡黨だつたが、あゝも堅氣になるものか。（ト門口にて、）それぢや、父さん。

傳吉　何だ。

和尚　首にならにやあ逢はねえよ。

ト門口をぴつしやりとしめる。時の鐘誂の合方にて吉三花道へ行掛け懐の金を出し、どうぞして遣りたいといふ思入あつて頰冠りをなし、門口へ歸る。此内傳吉も思入あつて暖簾口より奥を窺ひ、

傳吉　二人ながら昨日からの、勞れでぐつすり寐入つた樣子。（ト平舞臺へ下り、よき所へ住ひ、）あゝ寐て居る姿を見るに付け、思ひ出すは此身の惡事。（ト誂へ合方になり門口の吉三是を聞き窺ひ居る、）可愛や奥の二人は知らずに居るが双生子の同胞、生れた其時世間を憚り、女のがきは末始終金にしよ

うと家へ残し、藁の上から寺へ捨てた男のがきがあの十三、廻り廻つて同胞同士枕を交し畜生の交りなすも己が因果。而も十年跡の事、以前勤めた縁により、海老名軍藏様に頼まれ、安森源次兵衛が屋敷へ忍び、御上から預りの庚申丸の短刀を盗んで出たる塀の外、吠付く犬に仕方なく其短刀でぶつ放したが、はづみにそれて短刀を川へ落して南無三寶、其夜は逃げて明る日に素知らぬ振で行つて見りやあ、切つたは雌の孕犬、遂に短刀の行方も知れず、考へて見りやあ一飯でも貰ふ恩を忘れずに門戸を守る犬の役、殺した己は大きな殺生、其時嬶が孕んでゐて、産れた餓鬼は斑の様に、身體中に痣のあるので、初めて知つた犬の報い、一伍一什を女房に話すと直に血が上り、生れた餓鬼を引抱へ川へ飛込み非業の最期、それから惡心發起して罪亡しに川端へ、流れ付いたる土左衛門を引揚げちやあ葬るので、渾名になつた土左衛門傳吉、今ぢやあ佛になつた故死ぬる命を助けたる十三が双生兒に又候や、犬の報いに畜生道、惡い事は出來ねえと思ふ所へ吉三が來て、己へ土産の五十兩なくてならねえ金なれど、手に取られぬは段々と此身に報ふ是迄の、積る惡事の〆高に算用される閻魔の帳合、はて恐ろしい事だなあ。

ト傳吉宜しく思入にていふ。此内門口の吉三頷づき、下手臺所の口より二重へ出て、佛壇へ件の百兩の金包みを載せ、思入あつて又元の門口へ出て是でいゝとの思入あつて、花道へ行きかける。矢張右

の合方にて花道より武兵衛羽織ばつち尻端折頬冠りにて出で來り、花道にて行合ひ、吉三は花道へはひろ。

武兵　はて、今摺れ違つて行つた奴は、傳吉の悴の慥に吉三、おとせを女房に貰ひてえが、あいつが兄故玉に疵だ。（ト揚幕の方を見て、吉三を見送り思入）

傳吉　（思入あつて）あゝ是を思ふと非業ながら、死んだ嬶がまだしもだ。（ト言ひながら佛檀へ線香を上る。）

武兵　どれ、傳吉に逢つて掛合はうか。

ト武兵衛本舞臺へ來る。此内傳吉佛檀の金を見付け取上げて、

傳吉　やあ、こりや今の金。（ト是れにて武兵衛頬冠りをした儘そつと門口を明ける、傳吉是を見て）うぬ、まだ其處に居やあがつたか。

武兵　え、（トびつくりして後へ身體を引く）

傳吉　此金持つて、（ト武兵衛に金包を打付け、門口をしやんとしめる。是を木の頭）をとゝひうせろ。

ト門口を押へる、武兵衛は百兩包を拾ひびつくり思入、四つ竹節通り神樂にて、

ひやうし幕

四幕目

新吉原日本堤の場
同丁字屋二階の場
廓裏大恩寺前の場

〔役名　土左衞門爺傳吉、浪人お坊吉三、釜屋武兵衞、紅屋息子與吉、研屋與九兵衞、損料屋利助、丁子屋の一重、文里女房おしづ、吉野、おとせ、花の香、花琴、花鶴、やりてお爪、新造花巻、手代十三郎等〕

（新吉原日本堤の場）　本舞臺三間後小高き土手、向う土手下の遠見、上下葭簀張の出茶屋、總て新吉原日本堤の體。よき所に床几を直し、爰に地廻りの仕出し○△□の三人立掛り居る。通り神樂にて幕明く。

○　こう手前達は知つて居るか、此頃大層安い見世が出來たぜ。四百の轉寐で湯豆腐に酒一本、おまけに湯へ入れるといふのだ。何とすてきぢやないか。

△　そいつは滅法安いものだ、併し廓となると氣が張つていけねえ、行きやあ滿更それればかりでも歸られねえから、是非一枚一本と來るから、やつぱり小塚原がいゝのよ。

□　小塚と云やあ此間、五人一座で押上つた所がみんな醉つて大騷ぎ、其中で喜三の野郎が厭みをし

○　やあがつて、忌えましい野郎よ。

△　そりやあさうと、是から何處ぞへ、泊りを付けようぢやあねえか。

□　手前勤めはあるのか。

兩人　馬鹿をいへ、女が本物だ。

三人　こいつは大笑ひだ、はゝゝゝ。

三人　さあ〳〵、行かう〳〵。

ト矢張右の鳴物にて三人上手へはひる。花道より與九兵衞羽織ぱつち尻端折にて出來る。少し後より利助損料屋にて、縞の風呂敷を肩へ掛け出て來り、花道にて、

利助　もし〳〵其處へ行きなさるのは、硏屋の與九兵衞さんぢやないか。

與九　おゝ誰かと思つたら損料屋の利助さんか、お前何處へ行きなさるのだ。

利助　何處へ行くにも氣が氣でなく、お前をどんなに搜したか知れやあしない。

與九　あゝ、此間借りた代物のことでかえ。

利助　さうさ、今日で五日になるが料錢はよこしなさらず、うちへ行けば留守で分らず、お前又例の肚胸で、代物を曲げなさりやあしないかえ。

與九　これさ何ぼ己が悪い顏でも、年中人の物を預かる硏屋生業、人の代物を曲げる樣なことでは、稼業が出來ない。そんなやけな事はしない。

利助　そりやあもうなんぼお前が悪い人でも、生業が生業だけ、よもやと思ふけれど貸してから今日で五日沙汰なしにして置かれては、おいらだつて案じようぢやあないか。

與九　成程それは尤もだ、何しろ向うの茶見世へ行つて話しをしよう。

ト矢張右の鳴物にて、兩人舞臺へ來り、床几へ掛け、

利助　さうしてあの代物は、いつたいどうなつて居るのだ。

與九　あれはかういふ譯だ、實は己が借りたのではない、何を隱さう今では下谷に逼塞をして居る、本町通りの小道具屋、以前己が得意先であつた、木屋文藏といふ人に賴まれたのだが、今では以前に替る貧乏暮し、實は己も不安心なれど、昔のよしみに否とも云はれず、無據貸した譯よ。

利助　あゝ、そりやあ今此廓で、文里々々と人の云ふ、丁子屋の一重といふおいらんの、間夫だと噂のある人の事ぢやあないか。

與九　さうよ、其文里の女房が年始に出るに、困るといつて賴むから、それでお前に借りたのだが、己も氣掛りだから如在なく、今日も催促に行つた所が留守さ、何でも見え掛りに脫がせようと方々

捜して歩く所さ。

利助　何にしろそいつあ飛んだ者に貸した。然しながら與九兵衞さん先の相手は見ず知らず、お前を見込んで貸した代物、私に損は掛けまいね。

與九　何のつけ貴樣に損を掛けるものか、何でも此方の方へ其女房が來たといふから、お前もちつとは掛り合ひだ、土手下の吉本で、一ぺいやつて一緒に捜して下さい。

利助　その吉本は私も馴染だ。

與九　馴染とあれば、丁度幸ひ。

利助　それぢやあ直に行きませう。

ト兩人上手へはひる。花道より文藏女房おしづ、人柄のよき世話女房の打扮にて出で來る。八百屋久兵衞付添ひ出で來り、花道にて、

久兵　もし御新造樣、あなたは今日どちらへ、お出なさるのでござりまする。

しづ　今日は無據用事があつて、廓の丁子屋迄參るわいの。

久兵　左樣でござりましたか。丁度幸ひ私も此近所迄參りがけ、其處ら迄お供致しませう。

しづ　おゝさうであつたか、それはよい處で逢ひましたわいの。

久兵　まづ何に致せ往來中で、ろく〳〵に御挨拶も致されませぬ。向うの茶見世へ行つて、御休息なされませ。

しづ　ほんに、さうして行きませうわいの。

ト矢張右鳴物にておしづ先に久兵衞付き舞臺へ來り、久兵衞手拭にて床几の塵を拂ひ、

久兵　御新造樣、是へお掛けなされませ。（トおしづ會釋して床几へ掛る。此内久兵衞自身に茶を汲持來り。）生憎茶屋の者も居りませず、おぬるうはござりませうが、お息つぎにお茶一つお上りなされませ。

しづ　もう私に構はず、そなたも休息したがよいわいの。

久兵　へい〳〵、左樣なら御免なされませ。（ト久兵衞下手の床几へ住ひ。）扨改めてまだ御挨拶も致しませぬが、旦那樣お子樣方にもお變りはございませんか。只蔭ながらお案じ申して居るばかり、手前にかまけまして、存じの外の御無沙汰を致しましてござりまする。（ト久兵衞丁寧に辭儀をなす。）

しづ　親切に忝うござる、仕合せと皆息災でござんす。其の内にも私なぞは知つての通りの病身なれど、今の身の上になつてから、ほんに何處共云ひませぬが、是が御方便とやらであらうわいの。

久兵　左樣でござりまする、昔に替り只今ではお家の事はあなたの手一つ、もしもお前樣にお煩ひでもござりましては、それは〳〵大變でござりまする。其樣にお達者におなりなされたは、矢張信心

をなさる、神佛の御利益でござりませう。

しづ　ほんにそなたの云やる通り、御利益でもあらうかいの。（ト少し愁ひのこなし、）其神佛の御利益なら、私が身は厭はねど今の貧苦に引替へて、昔の身分に立返り、早うそなた衆の悦ぶ顔が見たいわいなう。

久兵　仰しやる通り然うなりましたら、どの樣な悦びでござりませう。（ト思入あつて、）それに付けても申譯もなきは、悴十三郎が不始末にて失ひました百兩の金、段々と延引致し、只今にては以前に替る御身分故、どうぞして一日も早くと存じますれど、御存じの通りの貧乏暮し、何を云うても大まい百兩、心に絕間はござりませねど、つい延引致しまして申譯もござりませぬ。

しづ　それはもう云はいでも、そなた衆親子の心をば主もよう知つてござんす故、決して惡くは思ひませぬ程に、都合次第に持つて來たがよいわいの。

久兵　有難い其お詞、お主樣が貧苦に迫り、御艱難遊ばすを見捨て置くは悴が不忠、それさへあるにお金の恩借。

しづ　是はしたり其樣な事を、きな〳〵と思ひ續け、煩ひでも出ようなら、常から孝行な十三郎案じるは知れてある。必ず苦勞にせぬがよいぞえ。

久兵　其樣に仰しやる程、猶々どうも濟みませぬ。

しづ　はて、濟まぬといふて仕樣がないわいの。

　　ト通り神樂鳥追唄になり、上手より與九兵衞、利助出で來り、おしづを見て、

與九　もし木屋の御内儀、お前の行方を一ぺんと尋ねました。（ト云ひながら前へ出る。）

しづ　（見て。）お前は砥屋の與九兵衞樣。

與九　おゝいゝ所で逢ひました。今日も家へ行つた所、錠がおりて誰も居ず、たつた一日と云はつしやる故、借りて上げた身の廻り、今日が日迄も音沙汰なしで、こりやあ一體どうさつしやる積りだえ。（ト與九兵衞ずつと床几へ腰を掛け、居丈高に云ふ。）

しづ　御催促を受けまして面目次第もござりませぬが、一日のお約束で拜借を致しましたれど、不斷出つけぬ女子の事故、出ます次手にそれからそれ、無沙汰のかどを濟まさうと、存じまして逐々延引になりましたが、全く麁略に致す心ではござりませぬ。申して上げぬはこちらの無念、どうぞもう一兩日の中、（ト云掛ける。）

利助　あゝもし〳〵、それぢやあお前がお借主かえ、私しやあ損料屋の利助と云ふ者でござりますが、そりやあ幾日でも貸すのが生業だが、料錢も入れず、さうべん〳〵と引張られては生業になりま

せぬ。

與九　お前方に口入をしたばかりで、己迄が面皮をかいて、こんな馬鹿々々しい事はない。

兩人　さあ〳〵脱いで貰はう〳〵。

ト大きく云ふ、此内始終おしづは久兵衛へ面目なき思入、久兵衛も氣の毒なるこなし、

しづ　あなた方の仰しやる所は御尤もでござりまするが、左樣なれば今日一日お貸しなされて下さる樣、お前樣からあのお方へ、どうぞお頼みなされて下さりませ、（ト手を突き與九兵衛へ頼む。）

與九　どうして〳〵、假令此人が貸さうと云つても、もう己が不承知だ、貸す事はなりませぬ〳〵。

利助　私しやお前は見ず知らず、與九兵衛さんに貸した代物、當人があゝ云ふからは、もう片時も貸されねえ。

兩人　さあ〳〵、脱ぎなせえ〳〵。

ト兩人おしづに立掛る、おしづは脱ぐまいと三人爭ふを、久兵衛支へておしづを圍ふ、兩人見て、

與九　これ〳〵とつさん、貸した物を取らうといふに、邪魔をしてはいけませぬ。

利助　お前方の知つた事ぢやあない、往來の者なら通らつせえ。

兩人　さあ〳〵、退いてゐな〳〵。（ト又おしづへ掛るを、久兵衛支へて、）

久兵　まあ〳〵待つて下さりませ。何か樣子は存じませぬが、女儀の事なり殊には往來、どうぞ待ちにくうもござらうが今日一日の所を待つて上げて下され。私がお願ひ申しまする。（ト是にて兩人何うしようといふ相談のこなし。此内久兵衞はおしづを介抱しながら、）御新造樣、私が惡い樣にははからひませぬ程に、落着いておいでなされませ。

しづ　久兵衞殿、面目なうござるわいの。（ト俯向き居る。）

與九　もし、お前が達て賴みなさるものだから、損料屋さんに待つて貰ふ樣に云ひませうが、只はどうも云はれない、今日で五日の損料を、殘らず爰で拂ひなせえ、さうした事なら賴んで遣らう。

久兵　そりやもう隨分拂ひませうが、して其損料は何程でござりますな。

利助　さうさ、身ぐるみ一緖で一日が三分といふのを二朱引いて、二分二朱宛、五日で丁度三兩二朱、たつた今貰ひませう。

久兵　これは高いものだなあ。

利助　惡くすりやあ着逃を喰ふから、其處らの差引勘定して、澤山取らにやあ生業にならねえ。

與九　さあ、待つて遣るから料錢を拂ひなせえ。

久兵　さあ、其損料は。（ト久兵衞當惑の思入にて、もじ〳〵して居る。）

與九　お前、金はないのかえ。
久兵　はい、爰に持合せはしかも小錢で、二百四五十より外はござりませぬ。
　ト云ひながら懷より財布を出し中より錢を出し見せる。
與九　えゝ何の事だ、すつ込んで居やあがれ。（ト久兵衞を突倒す。）
利助　飛んだ交返しで暇がいつた。さあ此上はおかみさん。湯もじ一つになつて下せえ。
　ト利助おしづに立掛る。
しづ　其處をどうぞ。（ト利助に縋つて賴む。）
利助　それぢやあ、勘定しなさるか。
しづ　今と云つては、どうも爰に。
與九　但しは着物を脫ぎなさるか。
しづ　さあそれは、
兩人　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵。
兩人　あゝ面倒な、脫ぎなせえ。

ト兩人又おしづに掛るを久兵衞支へる、與九兵衞は久兵衞を引附け、利助はおしづを引立てる。此以前より、上手へ紅屋の忰與兵衞窺ひ居て。

與吉　いや其勘定は、私がして進ぜませう。

兩人　どうしたとえ。(ト是にて皆々ほぐれ、與吉床几へ住ふ。)

しづ　(與吉を見て、)そなたは弟。あゝ面目ない〳〵。(トおしづ其儘控へる。)

與九　もし〳〵、お前何處のお方か知らないが、外の借貸とは違ひますよ。惡く口を利きなさると、目串は拔けませぬぞ。

利助　大概の事なら見ぬ振で、行きなさるのが上分別、それともお前が料錢を、見事此場で拂ひなさるか。

與吉　(思入あつて、)なるほど私が年が行かぬから、飛んだ口を利出して、跡で後悔しようかとお前方の其御異見、然し御念には及びませぬ。滿更お前方にも損を掛けまいから、まあ落着いて居なさるがいゝ。

與九　そりやあ大きに有難うございます。

利助　お禮から先へ申して置きます。

與吉（こなしあつて、）もし姉様、弟から返さう〳〵と心に思へど遂それなり、日外お借り申した此紙入、（ト懐中より紙入を出し、）長く大きに有難うござりました。是はお前にお返し申しまする。其中にはお前から小遣ひに下さつた、お金も入つて居ります。それで勘定してお遣りなされませ。

ト與吉紙入をおしづに渡す。

しづ　それぢやと云うて、そなたにこれを、

與吉　はて借りた物を返すのに、いらぬ御遠慮なされまするな。（トおしづに呑込ませ、）少しも早く、それで勘定なされませ。

しづ　（紙入を頂き、）弟何にも言はぬ嬉しいわいの。（トおしづ手早く紙入から出し、紙に包み、）さ與九兵衛殿、三兩二朱渡しまする。憚に請取つて下さんせ。

與九　是は大きに有難うござります。（ト金を改め見て、）思ひ掛けない料銭が、耳を揃へて三兩二朱。利助さん、結構なお得意ぢやあないか。

利助　いやもう是なれば、いつ迄もお置きなされませ。もし縞物がお氣にいらずば、御召縮緬でも結城紬でも、好いものと取替へて差上げます。

與九　實は私もお世話になつた、文里様がお困りなさるとの事故、御口入をしたのだ。若し又御用が

ございましたら何なりともお口入れを致しますから、旦那へ宜しくおつしやつて下さりませ。
久兵　でも、薄情な人達だなあ。（ト呆れしこなし。）
與九（久兵衞に。）これはお前さん、只今は大きに失禮を致しました。
利助　皆さんへ宜しくおつしやつて下さりませ。
與九　そんなら利助さん、そろ／＼出掛けよう。
兩人　こりやあ大きに、お喧しうございました。（ト行掛る。）
與吉　あゝもし／＼、ちよつと待つておくんなさいまし。
兩人　まだ何ぞ御用がございまするか。
與吉　お前方の方は勘定取れば、言分はありますまいね。
兩人　何言分がございませう。
與吉　其方になければ此方にある。とさあ親父なれば言ひませうが、見なさる通りの若輩者、よし又若氣の向う見ずにお前方を打擲したら此場の花は咲くにもしろ、立者衆の眞似をする樣で何れも樣の思召し、斯ういふとをかしいが物に出過ぎぬ氣質故、お前方も私で仕合せ、怪我のないのを儲けにして、少しも早く歸りなさるがよい。

兩人 へい／＼、歸りますと／＼。（ト兩人よき所迄行き、）

與九 なるほどさつぱり氣が附かなんだ、云はれて見ると違ひない、いつもいぢめた其後は、打たれるのが當りまへな仕組みだ。

利助 其處を一番新らしく此儘はひる其上に、此料錢の儲けの金で、重箱へ行つて鯰でも喰ひませう。

與九 鯰とは有難いが、實は今夜誘はれて、廓へ附合はねばならねえから、己は爰で別れよう。

利助 遊びならまだ早い、鯰で精ぶん付けて行くがいゝぢやあないか。

與九 待たせるだけ罪になるわな。

利助 あんまりもてもしまいに、止しなさればいゝに。

與九 これは御挨拶。

利助 それぢやあこれで、お別れかね。

兩人 大きにお喧しうござりました。（ト通り神樂鳥追唄になり、兩人足早に花道へはひる。）

しづ これ弟、いかに眞身であればとて、面目ない今の始末、どうしようと思うた所、そなたが見えたばかりに、さのみに恥もかゝずにしまひ、このやうな嬉しいことはないわいの。

久兵 御新造樣のおつしやる通り、よい所へあなた樣がおいで下されました故、實に私迄安心致しま

してござりまする。

しづ　ほんに此恩は忘れはせぬ、忝いわいの。

與吉　何そのお禮に及びませう。とはいふものゝ其以前は、本町で指折の小道具生業、ふとした事から文里殿が廓通ひに身上仕もつれ、それから終には見世をしまひ、逼塞なして幽なお暮し、今も今とて往來中で恥をかくのもお厭ひなされず、文里殿へ操を立て太い御苦勞なさるのが、おいとしうござりまする。（トホロリと思入あつて、）何故この樣な事なれば、家へ行つてはおいでなされませぬ、便りないあなたならよけれども、紅屋と云ふ里がありながら、見捨ておきさうもないものぢやと、世間の人に言はれゝば、内の暖簾に疵が付きまする。殊更眞身の弟へ何御遠慮がござりませう。何故其樣に隔てゝは下さりまする。お恨みに存じまする。

しづ　私がやうな者でも、姉と思へばこそ親切によう言うてたもつた。さりながら私の身は一旦木屋へ嫁入るからは、假令何の樣な難儀をしても、夫に從ふが女房の常、又此樣な惡い耳を、父さんにお聞せ申すは不孝故、それで家へは言うては遣らぬ。必ずそなたを隔てるのではないほどに、惡う思うてくれぬがよいぞや。

久兵　其御苦勞を聞くにつけ、少しも早く調達して、お返し申し度い百兩の金、私共親子故御苦勞をな

さるかと、思へば生きては居られませぬ。

しづ　これはしたり、又其様な事を言やる、今弟が言ふ通り里へ言うて遣ればどうかなれど、言つてやらぬは今も言ふ親へ悪い耳を聞かさぬ爲、まさかの時は言つて遣れば、少しも困る事はないほどに、其事は案じぬがよいわいの。（ト與吉紙入より金を出し紙に包み、）

與吉　姉様是は少しばかりなれど、お小遣ひになされて下さりませ。（ト出す、おしづ其まゝ突戻し、）

しづ　いやく是は受け難い、今も今とてあの樣に世話になりし其上にて、是迄貰うては濟ぬわいの。

與吉　只今も申す通り、其御遠慮が悪うございまする。他人に貰ふといふではなし、弟の私が上げまする物、納めてお置きなされませ。

しづ　そんならそなたの詞に任せ、是は貰うて置きませうわいの。（トおしづ金をしまふ。）

與吉　もし、お前樣には今日は、どちらへおいでなされまする。

しづ　さあ聞いてたも、其方も知つて居やる通り、丁字屋の一重といふ傾城に文里殿が馴染を重ね、身重で居ると聞いた故、明暮案じる女子の大役、殊には勤の身の上なれば身二つになつたとて、手しほに掛けて育てもならず、幸ひ私に乳もあれば、産落したら其幼兒は、私が引取り世話しようと、其事で今廓へ行くところぢやわいなう。

與吉（感心のこなして、）悋氣は女の愼みなれど、現在夫を寐とられし女郎の許へ態々と、

久兵　世間に女子も多けれど、あなたの樣には、氣は持てますまい。

しづ　これも夫の爲なれば、嫉む心はござんせぬ。（ト時の鐘鳴る。）最早入相、そんなら私は日暮れぬ內に行きませう。

與吉　隨分道を氣を付けておいでなされませ。

しづ　そなた家へ歸つても、今日の事は父さんへ、沙汰なしにして下さんせ。

與吉　それはお案じなされまするな、申すことではござりませぬ。

久兵　御新造樣、私もこれでお別れ申しまする。

しづ　久兵衞殿、大きに御苦勞でござんしたわいの。

與吉　左樣なればお姉え樣。

しづ　そんなら弟。

久兵　お二人樣。

三人　又お目に掛りませう。（ト唄になり、おしづは上手、與吉は花道へはひる。久兵衞殘り、思入あつて、）

久兵　いかに浮世とは云ひながら、移れば替るお身の上、木屋文藏と云はれては何御不自由もない分限、

其御新造が今のお恥辱、それも仕樣がない事か立派なお里がありながら、あの御樣子では今日迄も、まだ御無心も仰しやらぬお堅い氣性の文里樣、是に附けてもわしが養子、十三郎が失ひし百兩の金子さへ御催促もなされずに、いつでもよいと情のお詞、假令よいとおつしやつても、どうも今の樣子を見ては、こりやもう打捨てはおかれぬ。膝とも談合傳吉殿へ、委しい話しをした上で、急に調達せねばならぬ。どれ、暮れぬ内急いで行きませう。

ト時の鐘になり、久兵衞下手へはひる。通り神樂鳥追唄になり、花道より釜屋武兵衞ぱつち尻端折にて出て來る、跡より傳吉半纏股引尻はしをりにて出來り、花道にて、

傳吉 武兵衞樣、よい所でお目に掛りました。ちよつと向うの茶見世迄來て下さりませ。

武兵 どんな用か知らないが、ちつと心の急く事がある。明日では惡いのかえ。

傳吉 何さ手間は取らせません、直分かる事でござりまする。

ト言ひながら兩人舞臺へ來り、床几へ腰を掛ける。武兵衞氣のせくこなし、

武兵 さあ、父さん氣がせいてならぬ、早く言はつせえ。

傳吉 其用と云ふのは外の事でもござりませぬか、豫てお前樣が私共のあまッちよをくれるなら、望み次第金を出さうと言ひなすつたが、金を取つてもなくなり易く、彼女さへありやあ其日々々を樂

にして暮されるから、今迄は辛抱しましたが、此節ちつと金が入用だが、何と娘を百兩で買つても
おくんなさらねえか。

武兵　そりやあちつとおそ巻唐がらしだ、此間中は貴樣の娘おとせに惚れて、百兩が二百兩でも出す氣だつたが、くれぬと云ふから癇癪で一晩廓へ行つた所、丁子屋の内の一重といふ女郎を買うたが又別なもの、其處で己も乘が來て、今ぢやあ馴染んで末始終は、女房に持たうならうといふ仲だ。

傳吉　もし〳〵もうようござります。其のろけは又ゆつくり聞きませう。年寄は氣が短けえ、むだな事を言はないで、眞劍な事をいつておくんなせえ。

武兵　いや無駄ぢやあない眞劍の話しだ。先度も已に無心を言ふから、これ見さつせえ此金を。(ト懐より胴巻の百兩を出し)今夜其一重に遣つて、女房約束をする積り、斯うならねえ前ならば、又話し合もあつたれど、今ぢやあ百兩は扨ておき、一兩も出せねえ。(ト百兩を見せびらかしてしまふ)

傳吉　人じらしな事をしちやあいけません、無い物なら仕方がねえが、それ程持つて居なさるぢやあござりませぬか。

武兵　いやさ、あつても是は今言つた、丁字屋の一重といふ女郎に遣る金、どうして貴樣に貸されるものか。(ト是にて傳吉少しむつとしたるこなし。)

傳吉　いゝ加減になさいましな、わつちも土左衛門傳吉だ、無ければならぬ百兩の金、よくせきな事だから、先刻から手を下げて頼むぢやあござりませぬか。（ト武兵衛も少し腹の立つたこなしにて、）

武兵　いくら頼んでも、無駄だからよさつせえ。（ト知らぬ顔なして居る。傳吉思入あつて、）

傳吉　譯をお話し申さねば、私風情の貧乏人が何うしてそんな大金が、入るだらうとお疑ぐりは御尤もでござりますが。何をお隱し申しませう、私の一人の忰めが奉公先の引負で、濟さねばならぬせない義理、今日此金が出來ぬ日には、首でも縊つて死なにやあなりませぬ。それも年寄の事だから死ぬのは厭ひはしませぬが、さうなる日には三方四方、難儀の上に難儀を掛け、實にそりやあ浮べませぬ。これもやつぱり子故の闇、無理な事だが此お願ひ、どうぞ叶へて下さりませ。

ト武兵衛の袖をひかへ頼む、武兵衛袖を振拂ひ、

武兵　えゝしつこい、出來ぬといふに。（ト言ひながら武兵衛ずつと立つ。是にて床几轉り、傳吉下へどうと倒れる。武兵衛はついと上手へはひる。傳吉下に居た儘ホツト溜息をつき、）

傳吉　こりや、思案をせにやあならぬわえ。

ト腕を組み、きつと思入。時の鐘にて此道具廻る。

（丁字屋二階の場）＝本舞臺三間正面上の方三尺の床の間、眞中に違ひ棚、下手油單を掛けし夜具棚。此下黒塗の簞笥・上下一間の障子屋體、花道の付際へ二階の手摺を出し、すべて一重部屋の模様。爰に一重胴抜女郎部屋着の装、以前のおしづに煙草を吸付け出して居る、下手に花の香番新、花琴花鶴の新造、火鉢にて茶を拵へゐる。此模様流行唄にて道具廻る。

一重　ほんにおかみさんよう來て下さんした、久しうお見えなさらぬ故、お鹽梅でも惡いかと、此中からお噂ばかり、申しくらして居りましたわいな。

しづ　私も疾からちよつと間を見て、來ようとは思うて居たれど、何やかやと忙しなく、それ故に存じながら御無沙汰をしましたわいの。

花の　實に花魁も毎日々々、あなたの事ばかりお案じ申して、ちよつと人でも上げてくれろと仰しやつてゞござりましたが、物日々々で私も忙しく、それ故人も上げませぬが堪忍してくんなまし。

花琴　此間も花魁がお文を上げるとおつしやつて、便り屋どんに頼みましたら、あひにくお宅の邊へ便りがないと、それで御無沙汰になりんしたわいな。

しづ　どういたして、其御無沙汰はお互ひのことでござんす。

花鶴（茶を汲み持來り、）お茶一つ、おあがんなんし。

しづ　どうぞ構うて下さんすな。（ト花鶴湯呑へ茶を汲み、一重の前へ置く。）

一重　もうお前方はよいほどに、早う見世の支度をしなんし。

花鶴　そして花魁、あなた身仕舞はようござんすかえ。

花の　それは私がして上げるほどに、早う見世へ行きなさんせ。

花鶴　そんなら花の香さん、頼みんしたぞえ。

花琴　左様なればおかみさん、緩りと是に。

兩人　花魁お先へ。（ト兩人階子の口へはひる。跡三人殘り。）

しづ　ほんにまあ賑やかなこと、苦界とは言ひながら此樣な所で暮すは一生の德、女子でさへ斯う思ふもの、殿御達の來たがるは、是を思へば無理ではないわいなあ。

一重　それに付けても文里さんは、久しうお見えなさらぬが、お替りはござんせぬか、此間から夢見の惡さ。お案じ申して居ります。

しづ　有難うござんす、別に替る事はなけれど、何を言ふにも今の身の上、人に顏を見らろゝも面目ないと、家にばかりをられまする。

花の　それにこちらの方も茶屋へ遠慮で、お出なさんせぬか知らぬけれど、ちよつと格子迄も來て下さ

んすりやようござんすなあ。

しづ　少しでも都合がよくば、茶屋の方へは少々なりとも勘定をして、それに又お前もたゞならぬ身の上故、逢ひたいと言うてぢやけれど、自由にならぬはお金の才覺。

ト少し涙ぐみて言ふ。一重も愁ひの思入。

一重　産は女子の大役なれば、ひよつと是限りにでもなつたならば、此世でお目に掛られぬ故、一日逢ひたうござんすわいなあ。(ト言ひさして泣伏す。)

しづ　えゝもそんな忌はしい事、あゝ鶴龜々々。(ト袖を拂ひ、こなしあつて懐より守を出し、)是見やしやんせ、お前の産に怪我のないやう、今日も淺草の觀音樣でお腹帶を頂いて來た程に、是さへあれば心丈夫に思うてゐやしやんせ。

一重　(涙ながら顔を上げ、)御親切に有難うござんす。ほんにお前樣の樣なお方が、又と一人ござんせうか、云はゞ憎まにやならぬ私を、それ程迄に思うて下さんすお志し、忘れは致しませぬわいな。

しづ　何のまあ憎いことがござんせう、こちの人をいとしがり、世にある昔は知らぬ事、今は此身になりさがれば、愛想づかしは遊女の常、それをお前に限りては以前に勝る今の眞實、褒めてこそ居れ惡うは思はぬ、ほんに私しや妹のやうに思うて居ますわいの。

一重　不束な私をば、其樣に思うて下さんすお志し、女郎の癖かしらねども私もお前さんの心に惚れ、實の姉さまの樣に思うて居りまする。

しづ　ほんに思へば思はるゝでござんす。又お前が身二つになつたなら、其幼兒は私に預けて下さんせ、また乳も澤山出れば、どうぞ私が育て度いわいなあ。

一重　有難うござんす、どうせ私も勤の內は、手しほに掛けて育てもならず、他人の乳を賴まねばならぬ所、お前さんなら私も安心して居りまする。

花い　花魁も其事ばかり、いつそ苦勞にして居なさいましたが、それではまあ嘸お嬉しうござんせう。それに又私共は何にも知らず、お產の時はどうしたうよからうと、今から苦勞になりまする。

しづ　案じるより產むが易いと、其心遣ひには及ばねど、何でも產月迄は身體が大切、食物に氣を付けて決して高い所へなど手をあげては惡いぞや。

花の　それはお案じなされまするな、內證のおかみさんが、それは／＼よく氣を付けて下さいまする。此間も私を呼んで、腰へ灸をすゑてやれ、必ずかるはずみな事させてはならぬと、度々私へ仰しやつてゞござんす。

しづ　はゝ、それではお前の身重の事、內證とやらでも知つて居やしやんすのかえ。

一重　旦那さんもおかみさんも御存じにて、產月前になつたなら、直に根岸の別莊へ、病氣の體で行つて產めと、おつしやつてゞござんす。

しづ　それはまあ、よい御主人で一つの安堵ぢやわいなあ。

ト又流行唄になり、下手より忠七茶屋の若い者にて出來り、

忠七　もし花魁、武兵衞さんがやかましくていけませぬ、ちよつと顏をお出しなすつて下さりませ。

一重　（じれしこなしにて）えゝもう、うつとしいぢやあないかね、なんとか言つて置いてくんなまし。

忠七　どうして、何と言つたつて歸る〳〵と言つて、なか〳〵聞きやあしません、あゝいふ甚助な客には、消炭は實困りますよ。

一重　歸ると言ふなら、歸し申すがいゝぢやありませんか。

花の　あゝもし花魁、それでは惡うござんす、それに今夜はかのを、持つての筈ぢやありませんか。

ト一重へ金を持つて來たらうとこなし、一重頷き、

一重　あい、今行きんせうわいなあ。

ト花の香立つて、鏡臺を持つて來て一重の前へ直し、衣桁の仕掛を取つて着せる。此内忠七おしづを見て、

忠七　おや、あなたは、文里様の御新造ではござりませぬか。
しづ　忠七どの、大目に見て下さんせ。
忠七　是はよくいらつしやりました、久しくお目に掛りませぬが、文里様にもお變りはござりませぬか。
しづ　有難うござんす、いつもお前の噂をして居なさんすわいなあ。
忠七　惡くではござりませぬか。
しづ　何でお前を。
花の　ほんに、忠七どんの樣な人はござんせぬ。
忠七　もし花の香さん、そんな事を言つて下さいますな、二階を留められると困ります。
花の　おや、きつい己惚だねえ。
一重　（支度を仕舞ひおしづに向ひ、）お前さん直行つて來る程に、少し待つて居て下さんせ。
しづ　いゝえ、私ももうお暇しませうわいなあ。
花の　まだよいではござんせぬか、丁度御時分時でござんす。（ト一重に向ひ、少し小聲になり、）もし花魁梶田屋へでもさう言つてやりませうか。
一重　さうさ、それがようござんせう。

しづ（花の香立掛るを引留め）何かしらぬが、私はもうさうしては居ぬ程に、必ず心配して下さんすな。
花の　まあ宜しいではござりませんか。
一重　今宵はこちらへ、お泊りなさんせいなあ。
しづ　いえ〱子供が、家で待つてゐるわいなあ。
忠七　なにお子さん方より旦那様が、お待兼ぢやあござりませんかえ。
しづ　ほゝゝ、そりや昔のことぢやわいなあ。
忠七　然し、こりやあ花魁の前では、禁句でござりましたねえ。
一重　忠七どん、あんまりなぶつて下さんすな。（ト少しつんとする。）
忠七　是は粗相、眞平御免なすつて下さいまし。もし此新造さん、どうぞ旦那へ宜しくおつしやつて下さりませ。
しづ　主もお前の家へ、濟まぬと言つて居やしやんすが、何れ其内少しなりとも入れる程に、お前も家へよく言うて下さんせ。
一重　（聞き思入あつて、）其事ならお案じなさんすな。今夜少し心當りがござんす故、首尾よういたら忠七どんの方は、私が道を明けませうわいな。

しづ　お前にも是迄色々世話になりながら、苦勞を掛けては濟まねども、出來る事ならよい樣に。
　　ト此内一重花の香に囁く、花の香立上り、菓子簞笥と人形を持來る、一重菓子を紙に包み、
一重　是はつまらぬ物なれど、子供衆にお土産に上げてくださんせ。（ト件の人形と菓子を出す）
しづ　是はまあ何よりな物、嘸悅ぶでござんせう。（トおしづ人形と菓子を仕舞ひ、身繕ひして立上る。）
一重　然し夜道を、お一人では。（ト心遣ひの思入。）
忠七　いえ、お案じなさいますな、私が大門迄お供致し、お駕籠でお歸し申しまする。
一重　どうぞ、さうして上げて下さんせ。
しづ　何の、それには及びませぬわいの。
忠七　いえ、お駕籠でお歸りなされませ。
一重　左樣なればお機嫌よく。
しづ　お前も寒さを厭ひなさんせ。
花の　どうぞ、文里樣へ宜しく。
しづ　大きにおやかましうござんした。
忠七　どれ、御案内致しませう。（ト流行唄にて、忠七先におしづ階子の口へはひる。一重花の香殘り、）

花の　もし花魁（ト一重に囁き）ようござんすかえ、それも文里さんの爲でありんすぞえ。

一重　それは私も承知でありんす。

花琴（下手より出て來り）もし花魁、武兵衛さんがやかましくていけません。花巻さんが困つて居なさいますから、早くおいでなすつておくんなまし。

一重（腹の立つこなしにて）えゝも、忙しないことでありんす。

ト一重ずつと立つて仕掛をさばく、花の香は一重の後より仕掛の襟を直してやる。花琴は上草履をよき所へ直す。三人此模様宜しく、流行唄にて道具廻る。

（丁子屋二階の場）――本舞臺三間正面通しの襖、上の方一間襖にて見切り、此上隣座敷の心、下手折廻し一間の障子屋體、總て廻し部屋の模様、よき所に臺の物など取散しあり、爰に以前の武兵衛立掛り居るを新造花巻抱留めて居る。遣手お爪、研屋與九兵衛下着裝新造花鶴皆々留めて居る。此の見得所作の切にて道具留る。

皆々　まあ〳〵、お待ちなさいまし〳〵。

武兵　いゝや留めるな、歸るぞ〳〵。（ト立騒ぐをおつめ留めて）

つめ　お前さんをお歸し申しては、遣手の私が濟みませぬから、どうぞ待つて下さいまし。
與九　みんな斯うして留めて居るから、もういゝ加減に了簡しなさい〳〵。
花卷　お待ちなんしと言つたら、待つてくんなまし。
花鶴　花卷さんが困りんすから、待つて上げてくんなまし。
武兵　花卷でもしつぽこでも、斯う云出しちやあ了簡ならぬ、何處の國にか宵ッから己を揚げぼしにしやあがつて、面も出さねえで濟まうと思やあがるか。
與九　それはお前ばかりではない、己も宵から枕と首引だ。仕方がねえから了簡しなせえ。
つめ　斯う申しては濟みませぬが、生憎お客が落合ましたものだから、ついお粗末になりまする、どうぞ御免なすつて下さいましよ。
與九　込合候節は前後御容赦は、何生業でもお定まりだ。
つめ　ほんに花魁もどうしたのだらう、いゝ加減に來なさるがいゝぢやあねえか。
武兵　來て貰はなくつても困らねえ、もう歸るから留めるな〳〵。（ト又立掛るを花卷留めて、）
花卷　おまはんも聞分が無いぢやありませんか、そりやあ花魁に當りはありませうが、何も私に科はありますまいぢやあないか。

武兵　べらぼうめ、斯うなつて何奴此奴の、何で容赦があるものか。

花卷　それだつてわちきも、名代に出ておまはんを歸し申しては、あんまり手がない樣で、外聞が惡うざます。此中低の鼻が、猶々低くなりますからさあ。（ト花卷少しじれて泣聲になつて云ふ。）

つめ　此妓も骨を折つてをりますし、內證へ知れても濟みませぬから、どうぞ待つておくんなさいましよ。

武兵　濟むも濟まねえもあるものか、何と云つても歸るのだ、放せ〳〵。

ト又立掛るを皆々捨ぜりふにて留める、此時一重に新造付出て來り、一重武兵衞の後より留め、

一重　外聞の惡い、おまはんどうしたと言ふのだねえ。（ト是にて武兵衞一重の顏を見て、ぐにや〳〵となり。）

武兵　どうするものか、歸るのよ。（ト柔らかにいふ。）

一重　なぜそんな事を言ひなますの。（ト一重武兵衞を無理に下に置く。是にて皆々下に居て、おつめ一重に向ひ、）

つめ　お前さんも、まあどうなすつたのでございます。何ぼお客が落合つても、ちよつと顏でもお出しなさるがいゝぢやァありませんか。お馴染の武兵衞さんだからよけれ、外のお客で御覽じまし、遣手の私が濟みませぬ。（ト叩き立て言ふ。）

一重　堪忍してくんなまし、實斯うする譯ぢやあないけれど、彼方の座敷の長酒で、つい遲うなりんし

た、悪く思うておくんなんすな。

與九　何ぼ流行子のお前たと云うて、さう勿體を付けて客をじらすものぢやあない、罪になるわな。

花卷　實に花魁どんなに困りましたらう、ほんに〳〵甚助で。（ト云掛けて口を押へて、）いえ、じんじやうで柔形な、武兵衞さんの樣な客人だと、わちきなら命でもほんに遣る氣になりますに、馬鹿らしいぢやアありませんか。（ト花卷脇を向いて舌を出す。一重は武兵衞に向ひ、）

一重　主もまあ大概ぢやアありませんか、宵にあれ程迄、今夜は茶屋のお賴みで、義理一遍の客人だから、少し手間が取れませうが、あちらの座敷をしまつてからしみ〴〵話しがありますと、申して置いたではありませんか。（ト是にて武兵衞心の解けしこなしにて、）

武兵　それだと云つて宵ッから少しも顏を出さないで、こんな者を名代に押付けておかれては、何ぼ己でも腹が立つ。（ト是を聞き花卷腹の立つこなし、）

花卷　おや武兵衞さん大概にしなまし、散々わちきに氣を揉ませこんな者もすさまじい、何ぼ私の顏が足の裏に似たと云つて、あんまり踏付にしてくんなますな、馬鹿々々しいしいいしやあつくやあ。

一重　これはしたり花卷さん、いゝ加減にしなましよ。

花卷　それだと云つてあんまりだから、悔しくッてなりんせん。（ト大聲にて泣出す。）

つめ　え丶此子はどうしたといふのだ、己等の前でお客へ對し、ふざけた事をしなさりやあ、此分にしちやあ置かれねえ。（トおつめ煙管を持つて立掛るを、與九兵衞留めて、）

與九　これ／＼、折角座敷が靜になつて、是から旨く呑直さうと思つた所で、折檻されては此場の興がさめるから、どうぞ了簡して遣つて下せえ。（トおつめ呟きながら下にゐる。）

武兵　こりやあ己が惡かつた。（ト紙入より金を出し、紙に包み、）中直りに花卷さん、煙草でも買つて下せえ。

ト花卷の前へ投げて遣る

つめ　およしなさいましよ、癖になりますわね。

花卷　（金を見て、）おや／＼是は大きに有難う、ほ丶丶丶丶。（ト笑ひながら金をしまふ。）

與九　いや呆れたものだ。泣くかと思へば直に笑ふ。まことに重寶な顏だ。

花卷　いゝえ、私の泣くのは癖でありんす。

新造　おやまあ、どうしたらよからう。

花卷　花魁、武兵衞さんへ宜しく。（トおつめ新造兩人に向ひ、）

つめ　お前方はもうようござんす、早う見世へ行きなさんせ。

花琴　そんならおつめどん、賴みましたぞ。

新造　どれ、見世へ行きませう。（ト兩人立上る。花卷も立上り、）

花卷　もし、私あ髮部屋に居るから、かのが格子へ來たらちよつと知らしてくんなましよ。

つめ　花卷さん、見世で買喰はならねえよ。

花卷　おやおつめどん、戀知らずだねえ。

與九　何だかちつとも分からない。

花卷　じれッたいんだよう。（ト大きく言ひ、）皆さん、おやかましう。

三人　左樣なれば御機嫌よう。

ト三人下手へはひる、跡合方になり、此内始終一重は煙管を突き。おつめ思入あつて、

つめ　もし花魁、お前さん先刻から何を鬱いでゐなさいます。私も遣手の役目だから言ふのは知つて居りますが、外の者の居る前で言はれたらばお前の恥、そこを思つて大目に見れば、いゝかと思つてふてなさるが、もう大概にしなさいましな。

與九　これ〳〵そりやあ云ふだけ野暮だ、此一重には文里といふ惡足のあることは、此廓は言ふに及ばず世間の人迄知つて居るのだ。どうして外の客が手に付くものか。

武兵　それを馬鹿のろくなつて來るのは、云はゞ此方が間拔といふもの、迚も嫌がられる位なら、爰ばかり女郎屋といふではなし、此廣い廓内、外へ巣を替へて遊ばうよ。

一重　もし武兵衛さん、人を疑ぐるも大概にしなさんせ、二言めには文里さんの事を言はしやんすが、切れてしまへば未練もなし、又一人の男を守れぬは替る枕の勤の習ひ、それを兎や角う云はしやんすは、あんまり分らぬではありませんか。

つめ　それ程文里さんの事に就いて思ひ切りのいゝお前さんなら、何故鬱いでゐなさいます、替る枕が常ならば、お客を大事になさいましな。

一重　お前迄が其樣に私の事をいひなんすが、勤めは苦勞にはなりいせん。私ぢやとて親もあり、兄弟もござんすから、鬱ぐ事もありいせう。

與九　いや〳〵これは大笑ひだ。金を出して遊びに來て、親兄弟の述懐を並べ立つて言はれては、こんなうまらないことはない。

武兵　（思入あつて）いや〳〵こりやあ此方が惡かつた、其親兄弟の話しに就いては、先度一重が己への無心、一人の弟が道樂で何かむづかしい、譯のある金を遣つた其穴を、是非とも埋めねばならぬから、母親が氣を揉むので其身の年季を入れねばならぬと、涙をこぼして己への頼み、それ故百

兩持つて來たが、おぬしの心を疑ぐつて、實は今迄出さずに居たが、さう事が分るからは、此百兩はおぬしに遣らう。（ト懷より、胴卷の百兩を出し）ちと受けさせるやうだけれど、以前己が世話をした女があつたが、その親父、土左衞門爺い傳吉といふ者に、先刻途中で無心を言はれ、貸さにやあならぬ義理なれど、それをことわり此百兩、おぬしに遣らうと持つて來た、何と、心中者ぢやあねえか。

つめ　ほんにまあ御親切な、よく／＼に思へばこそ、誰が百兩といふ金を下さるお方がございませう。是ほど實のある武兵衞さんを、粗末にすると罰が當りますよ。

一重　有難うござんす、お前さんへ此樣な事をお願ひ申しては濟みいせんが、知つての通り是ぞといふ爲になるお客はなし、お願ひ申すはよく／＼な、事だと推してくんなまし。

與九　然し其百兩は結納替り、今日からしてはお前の身體、勤めの內でも女房同然、武兵衞さんの云ふ事は、是から何でも聞かずばなるまい。

武兵　そりやあ假にも大まい百兩、此の儘只は遣られねえ、其方からも己に又慥な心中立てゝ見せやれ。

一重　心中立てろと言はしやんすが、浮氣らしい事をするより、互ひにまことの心と心、是が何より誓ひでござんす。

與九　それは何より胡亂なものだ、その頼みにする心といへば、嘘をつくのが生業だもの、何の當になるものか。

一重　お前迄が私の心を、疑ぐつてゐなさんすは、誓を立てろと言ひなんすのかえ。

武兵　いゝやそれはおぬしが不承知なら、かれこれは言はねえが、ちつと氣障な事があるから、それで己も斯う言ふのだ、忘れもしまい此間、おぬしが腕の入黒痣、ちよつと見せろと手を取つたら、そんな野暮な事をするなと、けんもほろゝの挨拶故、それなりに濟ましたが、今夜は一番流の身の塵芥のねえ所をそゝぎ上げ、水際立て貰ひたい。

つめ　なるほどこれは武兵衞さんが、氣にお掛けなさるも御尤もでござんす。花魁こりやあ面晴に、さつぱりとした心中を、お立てなさらずばなりますまい。

一重　それ程まで私の心を、疑ぐつて居なんすならようざんす。慥な心中お目に掛けませう。(ト有合ふ鏡臺の引出しより剃刀を出し、煙草箱へ小指を當て)さうぢや。(ト切らうとするを、武兵衞あわてゝ留め)

武兵　こりやあおぬしは、どうするのだ。

一重　私が心の誠をば、お目に掛けるのでござんす。

武兵　いやそんなことで指は切れねえ、しらじらしい野暮をするな。(ト剃刀をもぎ取り)可愛いおぬし

に指を切らせ、片輪にしてつまるものか。

一重　さうして其心中は、どうすればよいのでありんす。

武兵　己が望みは外にある。（ト言ひながら一重の手を取り、袖をまくり、）さ、この文里一世の妻を消し、己が名を其通り、彫替へて貰ひたい。（トきつといふ。一重思入あつて、）

一重　それぢやというて。

與九　それぢやあ文里に、心が殘るか。

一重　さあそれは。

兩人　さあ。

三人　さあ〳〵〳〵。

武兵　きり〳〵と返事をしろ。（トきつと言ふ、一重當惑のこなしにて思入あつて、）

一重　もう金は入りいせん。

武兵　どうしたと。

一重　假令今は切れたにせよ、お世話になつた文里さんの、お名を金故消しましては、世間の手前がありんすから、金はお貰ひ申しんすまい。（ト件の百兩を突戻す。）

つめ　そりや何を言ひなさいます、お客へそんな事を言つて濟まうと思ひなさんすか、遣手の私が濟まぬわいなあ。

一重　えゝも、濟むも濟まぬも入りいせん。(ト脇を向き知らぬ顏をして居る。)

つめ　てもまあ、呆れたものだねえ。

武兵　それ程入らぬ金ならば、どれ〳〵持つて歸りませう。(ト金を懷へ入れ、立上るをお爪留めて、)

つめ　まあ〳〵お腹も立ちませうが、私の方から又お詫の、致し樣もござりますから、どうぞ待つて下さりませ。

與九　こう〳〵留めなさんな〳〵、歸すも歸さぬも、あの女の了簡にあることだ。

一重　おつめどん、歸ると言ふなら歸し申すがようざんす。

武兵　歸らなくつてどうするものか。(ト立蹴に臺の物を引くり返し、)阿魔め、覺えて居ろ。

ト枕を持つて立ちかゝるを、與九兵衞是を留める、一重脇を向き煙草をのみ居る。おつめはちらかしたる皿小鉢を片附け居る、此模樣流行唄にて、道具廻る。

(丁字屋二階の場)――本舞臺三間正面上の方三尺の床、下手上に地袋のある違ひ棚、上下一間の障

子屋體、總て以前の部屋の隣座敷の體。よき所にお坊吉三中月代寐卷裝にて腕組なして居る、吉野閑拔女郎の打扮煙草を吸付けて居る。此見得端唄の合方にて道具留る

お坊　先刻から隣の樣子、馴染の客へ一重が無心、其金高も大まい百兩、何であんなに金が入るか。

ト合點の行かぬこなし。

吉野　なに、ありやあ斯うざます、お前も知つてゐなさんす文里さんといふお方が、今ではしがない暮しになりんした故、方々は塞がるし其道も明けたり、又文里さんに貢ぎなさんす氣で、あの厭な武兵衞の機嫌を取つて居なさんすのでありんす。

お坊　そりやあ何にしても氣の毒なことだ、さういふ身分になり下るも、元はと云へば妹一重、己も以前は妹の緣でお世話になつたこともあつた。及ばずながらどうかして、恩返しをして上げ度いものだ。(トお坊吉三思案のこなし。)

吉野　私も都合が出來るなら、どうぞして上げ度いが、南と違つて此方へ來ては是ぞといふ客もなし、人の事より私の身の上、物前毎に困る故心に思ふばかりで、ほんにじれッたい樣でありんす。

お坊　又此己も其通り、いゝ目が出りやあどうでもなるが、知つての通り間が惡く、手前の世話で斯うやつて居るが、實は手前にも氣の毒よ。

吉野　何だね他人行儀な事を言つて、好で苦勞をするのだから、お前の事はどうでもいゝが、一重さんの事が氣になつて、どうしたらよからうおざりんせう。（ト吉野ぢつとなる、お坊吉三思入あつて、）

お坊　いくら苦勞をした所が、先立つものは金なれば、知らぬ昔と諦らめて、不實な樣だが捨ておくがいゝ。

吉野　ほんにさう思ひ切るより外、仕方がありんせんね。（ト吉野吉三に寄添ふ。）

武兵（上手にて）歸る〳〵、留めるな〳〵。

新造　それでは惡うおざりんす。

一重　歸りなさんすなら、歸し申しなよ。

武兵　歸らねえでどうするものだ。

ト流行唄になり、上手より武兵衞腹の立つ思入にて、疊を蹴立て出て來る。後より新造捨臺詞にて留めながら出て、下手階子の口へはひる。此内吉三武兵衞の後を見送り、

お坊　吉野、一重の客はあれか。

吉野　あい、あれが武兵衞といふのでありんす。

お坊　なるほど、生利らしい野郎だなあ。

吉野　きざな人だが、れこはしつかり持つて居るぞえ。(ト金はあるといふこなし。)

お坊　さうだらうよ、ちよつと無心に百兩も手放さうといふ客だから、餘程懷がいゝと見える。あゝこれ、どうぞ仕樣はねえかしらぬ。(トお坊吉三腕を組んで思入。)

吉野　どうして〳〵恐ろしい強情だから、あゝ言出しては、なか〳〵聞くことではごさんせん。

お坊　(此の內思入あつて)然し今夜も彼是引過ぎ、何處へ歸るかしらねえが、此物騷だと噂のあるに、百兩といふ大金を持つて夜道をするといふは、よつ程肚胸のいゝ野郎だ。さうして彼奴の家は何處だ。

吉野　たしか家は、本鄉だといふことだわな。

お坊　それぢやお家は本鄉か。

吉野　あい。

お坊　むゝ本鄉ならば歸る道は。(ト思入あつて、)さうだ。(トずつと立上る。)

吉野　えゝもびつくりするわね、どうしたのだえ。

お坊　南無三、己らあ飛んだことをした。今夜は友達の民がお袋の通夜をしてゐる積りだつた。さつぱりと忘れたが、今から行つてちよつと顏を出して來よう。(トいひながら立上るを、吉野引留めて、)

吉野　お前今夜は遅いから、明日にしたがようざます。（帶をしめながら行掛る。）

お坊　いや、今夜行かにやあ義理が濟まねえ。（ト言へども吉三は始終向うへ思入あつて、）

吉野　そんならどうでも、行きなんすのかえ。

お坊　是より直に、後追ッかけ。

吉野　え。（ト思入、吉三心附き氣を替へ、）

お坊　いやさ、後を氣を附けろよ。

ト云捨て階子の口へはひる。吉野も心ならぬ思入にて吉三の後を追うて階子の口へはひり、此道具廻る　本舞臺元の廻し部屋の道具へ戻る。と一重片手にて癪を押へながら湯呑にて酒を呑みゐる。新造兩人一重を介抱して居る。

花琴　もしおいらん、癪の起るにお酒は惡うありんすぞえ。もう止しにおしなんし。

花鶴　お心持が惡ければ、玉屋へ袖の梅でも取りに遣りんせうかえ。（ト色々心遣ひのこなし。）

一重　もう快うおざりんすから構うてくんなますな、ほんにお前方も私の樣な者に使はるゝ故、色々な苦勞をしなさんす、堪忍しておくんなんし。

花琴　花魁としたことが、私共へ其の御遠慮には及びませぬ。

花鶴　お心遣ひをしなんすと、却つて惡うおざんすから、氣を靜めておいでなんし。

ト云ひながら兩人介抱する

吉野　(下手より出來り、)一重さん、委しい樣子は殘らず部屋で聞いてをりんしたが、折角辛抱しなさんしたも、今となつては無駄となり、實にお前のこゝろの内を、推量して居りんす。

一重　それもぬしの爲なれば、少しも厭ひはせぬけれど、あんまりな武兵衛の言條悔しうおざりんす。

ト身をもんで悔しきこなし。

吉野　尤もでおざりんすが、そんなにお前氣を揉むと、必ず體に障るから、氣を揉まずにおいでなんし。

一重　生中生きて居ようより、いつそ死にたうおざりんす。

吉野　えゝつまらない、死なうなどゝそんな氣を出しなんすな。(ト一重を介抱する。)

一重　えゝじれツたい。(ト湯呑を打付け、)どうしたらようおざりんせう。

ト泣伏す、吉野初め新造二人介抱する。流行唄にて道具廻る。

(大恩寺前の場)――本舞臺三間後ろ一面の藪疊、此奧向う廓を見たる田圃の遠見、上下に藪疊、すべて大恩寺前通り夜の體。時の鐘にて道具留る。と時の鐘ばたくになり、以前のお坊吉三尻端折一

本差にて走り出で、直に舞臺へ來り向うを窺ひうなづいて頰冠りをなし、下の方の藪蔭へ忍ぶ、と時の鐘端唄の合方になり、花道より以前の武兵衛出て來り、花道にて、

武兵　あの鐘は最う八つか、夜は短くなつたな。おゝ金と云やあ此春だつたが、土左衛門爺いが門ぐちで思ひ掛なく拾つた百兩、ほんに夢に牡丹餅でそれを貸出し金が殖え、僅一年立つか立たぬに百兩位はいつ何時でも、家に遊んで居る樣になつて、今夜も一重が無心故、百兩遣つて文里が手を切らせようと思ひの外、得心せぬ故遣らなんだが、ふられて歸る果報者だ。(ト舞臺へ來り向うへ思入あつて、)あの與九兵衛はどうしやあがつたか、察する所己をまいて、何處へか上がつたと見える。何にしろ物騷だといふに、夜道に百兩險難なものだ。

ト此内お坊吉三出て後に窺ひ居て、

お坊　險難なら、預かつてやらう。

武兵　え。(トぎよつとこなし。)

お坊　いゝや、今われがぬかした百兩を、預らうといふことよ。

ト お坊吉三一腰を拔き、武兵衛の目先へ突付ける。

武兵　はあ、大恩寺前は物騷だと、疾から噂に聞いて居たが、そんならお前は物取かえ。

お坊　おゝ知れたこと盗人だ、我が百兩持つてゐるを、確に知つて附けて來た。隱さず爰へ出してしまやれ。

ト是にて吉三頰冠りを取る、武兵衞是非がないといふ思入。

武兵　さう見拔かれりやあ仕方がねえ。いかにも百兩持つて居るが、只此金を渡すのはあんまり智慧がない樣だが見込まれたれば命が大事、素直に百兩上げませう。（ト云ひながら百兩出し、吉三へ渡す。）

お坊　さう又綺麗に出されちやあ、取り憎いのは人情だが、命を元手にするからにやあ、さうかと云つても返されねえ。こりやあ己が貰つて置かうよ。（ト金を懷へ入れる。）

武兵　金は渡した其替り、命と着物は助けて下せえ。

お坊　身ぐるみ脫げと云ふとこだが、金を器用に渡したから、命と着類は土產に遣らう。

武兵　そりやあ忝ねえ。そんなら是でお別れ申します。あゝ、初春早々。

お坊　え。（ト兩人顏見合せ思入。）

武兵　とんだ厄落しをした。（ト時の鐘にて武兵衞思入あつて上手へはひる。お坊吉三後を見送り、）

お坊　どれ、更けねえ中に行かうか。

ト行掛るを、此以前より傳吉後に出掛り窺ひ居て、

傳吉　もしお侍様、ちよつと待つて下さりませ。
お坊　え、(トびつくりなし、月影にて傳吉を透し見て、)己を呼んだは、何ぞ用か。
傳吉　へい、ちつとお願ひがござりまする。
お坊　なに、己に願ひとは。
傳吉　まあ、下においでなされて下さりませ。(トお坊吉三思入あつて下に居る。)さてお願ひと申すは、外でもござりませぬが、只今お手にはひつた百兩を、何とお貸しなされては下さりませぬか。
お坊　や、すりや今の樣子をば、
傳吉　後で殘らず、聞いて居りました。
お坊　む〻。(トぢつと思入。)
傳吉　何を隱しませう、あの百兩は私が晝から、借りよう〳〵と附けてをつた金でござりまする、それがお前樣のお手にはひりまして、私も望みを失ひ、無據御無心を、申すのでござりまする。
お坊　こう〳〵爺さん、そりやあたゞ取つた金故、たゞ貸せといふのだらうが命を元手に取つた金、それも餘儀ない入用故、氣の毒ながらこればかりはお斷りだよ。
傳吉　さ〻、さうでもござりませうが、私が方にもせつない譯、まあ一通り聞いて下さりませ。私の實の

悴が養子先から奉公に出まして、主人の金を百兩失ひ、私が所へ引取つてある所、見なさる通りの貧乏人、大まい百兩といふ金故、盗み騙りをしたら知らず、所詮出來ぬ金なれば、其御主人といふ人が、それは〳〵よい人で、今では幽な暮しなれど失うたのは是非がないと、其日の煙りに困る身で、遂に一度催促をさつしやつた事はござりませぬ。それだけ猶更一日も、早くと思へど出來ぬは金、主人の難儀養父の迷惑、見て居られぬが實の親、どうぞ不便と思召し、無理な事だが、お侍樣、私に貸して下さりませ、娘を賣つても其金は、きつとお返し申しまする、どうぞ貸して下さりませ。

ト手を合せお坊吉三へ頼む。

お坊　そんな哀れッぽい事を言ひなさるが、此方も義理ある其人に、貢ぎ度いばかりに、彼奴を脅して取つた金、幾ら言つても無駄だから、出來ねえむかしと諦らめねえ。

傳吉　御尤もではござりまするが、其處をどうぞお慈悲をもつて、

ト お坊吉三へ縋つて頼むを振拂ひ、有合ふ石に腰を掛け、

お坊　これ爺さん、見りやあこなたも年寄だが、眉間の疵を見るに付け、堅氣と見えぬぐれい仲間、出して遣りてえものなれど、露顯すりやあもうそれ迄、身を捨札の高臺へ首を載せにやあならねえ仕

事、素人ならば不便と思ひ、小遣ひ位はくれもせうが、拵へ事の哀れな話し、そんな甘口な筋ぢやあ、鐚三文でも貸されねえ。

傳吉　そんなら是程お願ひ申しても、どうでも貸しては下さりませぬか。

お坊　知れたことだ、己をたゞの者だと思やあがるか、十四の年から檻へはひり禁足なしたも幾度か、惡い事なら拔目はねえ、汝等にけぢめをくふ様な、そんな二才ぢやあねえぞ、人を見そこなやあがつたか、はツつけ親仁め。

ト此内傳吉此儘では行かぬといふ思入あつて、お坊吉三を見てせゝら笑ひ、

傳吉　小倅、もう臺詞はそれ限りか。

お坊　何だと。(トきつと思入。)

傳吉　こんな臺詞も幾度か、もう言ふめえと此の如く珠数を掛けて信心するが、貸さぬとあればもう是迄っ(ト珠数を出し二つに切つて投付け、)いかにも汝が推量の通り、己も以前は惡黨だ、若い時から性根が惡く或は押借ぶつたくり、暗い所へも行飽きて今度行きやあ百年め、命の蔓のさんだんに風を喰つて旅へ出て、長脇差の附合に場業の上の立引にやあ、一六勝負の命の遣り取り、其時受けた向う疵、惡事に掛けちやあ仕飽きた身體、うぬらが様に駈出しのすり同様な小野郎とは又惡

黨の質が違ふ。それ程惡い身性でも、不圖した事から後生を願ひ、片時放さぬ肌の珠數、切つたからにやあ以前の惡黨、すべよく己に渡さにやあ、腕づくでも取らにやあならねえ。

お坊 うぬ、さうぬかしやあ命がねえぞ。(トきつとなつて立上る。)

傳吉 まだ餓鬼同樣にひよむきもかたまらねえ分際で、ふざけた事をぬかしやあがるな。

お坊 何をこしやくな。(ト切つて掛るを、傳吉身をかはし、)

傳吉 大人そばえをしやあがるな。

ト垣根の卒塔婆を取り打つて掛る。ちよつと立ち廻つてきつと見得、誂の鳴物になり、兩人宜しく立廻りの内吉三目貫を落す事、トヾ傳吉卒塔婆を打落され、一刀切られて糊紅になり

人殺しだ〳〵。

ト云ひながら逃廻るを吉三追廻して切付け、トヾ傳吉を切倒し乘懸つて止めをさす、吉三ホツト思入。傳吉仕掛にて喉へ刀の通つた儘すつくと立上り、よろ〳〵となり吉三をきつと見て、ばつたり倒れ落入る。吉三刀の糊を拭ひ、

お坊 思ひがけねえ、殺生をしたなア。

ト言ひながら刀を鞘へ納める。此時人音する故吉三下手の藪へ小隱れする。時の鐘合方になり、花道

より十三郎提灯を持ち、跡よりおとせ出で來り、

とせ　私しやきつう胸騷ぎがしてならぬが、父さんはどうなさんしたか、案じられるわいなあ。

十三　もうそこら迄行つたら、お目に掛るであらうわいの。（ト提灯にて四邊を見て、）何にしろ道がわるい、辷らぬ樣にするがよいぞや。（ト云ひながら兩人舞臺へ來り、おとせ糊に辷る、）それ見たことか、それだから云はぬ事ではない、氣を付けて歩くがよい。（ト提灯の明りにて死骸を見付、）何やら人が倒れて居るが。（トよく見てびつくりなし、）や、こりや父さんが。（ト兩人駈け寄つて死骸に取付き、）

兩人　父樣いなう〳〵。（ト呼生けながら、十三郎涙を拭ひ、）

十三　え丶これ、酷たらしう父さんを、何者か殺せしか。（ト思はず四邊を見て、吉三の落せし目貫を見付け取り上げ提灯の明りにて透し見て、）死骸の傍に落ちたるは、吉の字菱の片々の目貫。

ト此時上手の藪を押分け、以前の武兵衞出で、

武兵　そんなら先刻の泥坊が、落した目貫は、後日の證據に。

ト此内吉三はそつと花道へ行き、是を聞きえいと礫を打つ、此の礫提灯に當り灯り消る、是にて十三郎目貫をくはへおとせを圍ひきつと思入、藪の中より武兵衞片足踏出すを木の頭、吉三は逸散に花道へ走りてはひる。舞臺の武兵衞十三郎向うを見送る。時の鐘忍び三重にて、

幕

五幕目

根岸丁字屋別莊の場

夜鶴姿の泡雪（花園連中）

一重文里が子故の闇に（淨瑠璃）

〔役名 ――木屋文里、丁子屋長兵衞、若い者喜助、醫者養仙、吉野、初瀨路、飛鳥野、花の香、花琴、花鶴、花卷、文里女房おしづ、文里娘おたつ、忰鐵之助等。〕

（丁字屋別莊の場）――本舞臺四間通し常足の二重、雪の積りし本庇本緣付、正面床の間地袋戶棚腰張りの茶壁三尺口太鼓張の襖出入り、此前側一面に塗骨障子、上の方雪の積りし梅の臺幹、此前に石の井筒、いつもの所枝折戶、下の方淨瑠璃臺の隣の一階家、此の下建仁寺垣、舞臺花道共雪布を敷き、總て初音の里丁字屋別莊の體。爰に二幕目の初瀨路、飛鳥野、花卷、花琴、花鶴、禿ゆかり、たより皆々紙撚の百度緡を持ち、跣足にて庭の内を百度を踏居る、此見得一中節模樣の端唄にて幕明く。

皆々　南無妙法蓮華經々々。

ゆか　早く花魁のよくなりますやう。

たよ　御利益をお願ひ申します。

兩人　南無妙法蓮華經々々。

飛鳥　ほんに此子達は感心だよ。嘸一重さんが聞きなんしたら、嬉しい事でありんせう。

花琴　話してお聞せ申したいが、病ひのせるか此頃は、直に涙をこぼしなんす故。

花鶴　此子達の事を話したら、どんなに泣きなんすか知れんせん。

初瀬　そりやもう一重さんばかりぢやない、私ら迄もあの様に、二人が眞に御祖師様へ、お願ひ申す心根を思ひ遣ると悲しくなりんす

飛鳥　泣顔をするは悪いから、泣くまいと思ひゝしても、つい涙が出てなりんせん。

花卷　もう／＼そんな事をお言ひでないよ。私なぞは泣蟲だから、直に涙が流れて困りんす。

花琴　おや、お前涙が流れるかえ。

花卷　私だつて流れなくつてさ。

花琴　私やあ散蓮華の様に、溜つてゐるかと思ひした。

花卷　花琴さん大概におしよ、何ぼ私が中低だつて、涙が水溜の様に溜るものかね。

初瀬　溜らない事はありんせんよ、此間花卷さんが仰むけに寐て居なんした時、横山町の若旦那がお出なすつて、成程花卷は中低な顏だ、どの位低いか酒をついで見ろと仰しやつて、低い所へ酒をついだら、丁度二銚子半、五合入りんした。

花巻　えゝも默つて居ればいゝ事にして、五合入といふ顔が何處にあるものかね。
初瀬　外にはないが、爰にありんすよ。
花巻　私しやあもう、聞くこつちやあないよ。
　　　ト花巻立掛るを、初瀬路突く、是にて仰向けに後へひつくり返る、禿是を見て、
ゆか　おやまあ、どうしようねえ。
兩人　南無妙法蓮華經々々。（ト禿兩人花巻を拜む眞似をする。花巻起上り、）
花巻　えゝ、子供迄馬鹿にするか。（ト雪を取つて禿に打付ける。）
吉野　（奥より出來り、）これさ、お前方はどうしたものだ、一重さんが昨日より今日は惡いと云ひなんすに、ちつと靜にしなんしよ。
花巻　それでも私の事をみんなが寄つて、中低だといつて。（ト泣きながらいふ。）
吉野　何も中低でないものを、中低だと言ひはしまひし、そんなに泣かずともいゝぢやありませんか。
花巻　それだつて私しや、くやしくつて〳〵なりいせんものを、
吉野　悔しいと云つたとて仕方がないわね、まあ、窪溜りの涙でもお拭きよ。
花巻　えゝも吉野さん迄おんなじやうに、覺えてお出なんしョウ。（ト花巻上手へはひる。）

吉野　ほんに花卷さんの樣に氣を持つと、苦勞がなくてようありんす。

飛鳥　あれがほんの、後生樂といふのでありんすね。

養仙　(障子の内にて、)おいや〳〵、送るには及びませぬ。

ト障子を明け、養仙長合羽一本差し、醫者の打扮にて出て來る。

飛鳥　これは養仙樣、雪の降りますのに、御苦勞樣でござります。

養仙　いや、雨と違つて雪が降ると、いつ迄も道が惡くつて、醫者などには甚迷惑だて。

花琴　もしお供さん、お歸りでありますよ。

供　はい〳〵畏りました。

ト下手庭口より紙合羽を着たる供、爪掛付の下駄と澁蛇の目の傘を持出て來り、足駄を直す。

養仙　左樣なら、大事になさい。

皆々　有難うござります。

養仙　どりや、藤寺へ廻つて行かうか。(ト合方にて養仙花道へ行く、後より吉野付いて來て、)

吉野　もし養仙さま、お待ちなすつて下さいまし。

養仙　はあ、何ぞ用でござるか。

吉野　外の事でもございませんが、一重さんはどうでござりませう。

養仙　あれは、所詮むづかしいて。

吉野　え、むづかしうございますとえ。

養仙　されば產後の血の納まらぬ所へ、何か心配な事があつて、氣から出た病で、俗にいふ血勞といふ
のおや、愚老も旦那からお頼み故、色々と骨を折つて配劑をして見たが、どうも藥が屆かぬて、
所へ此寒氣を受けて、猶々むづかしくなつたて。

吉野　えゝ、(トびつくりなし、)こりやまあ、どうしたらようござりませう。

養仙　どうといつて壽命ばかりは、耆婆扁鵲でも仕方がない、愚老も歸りに廓へ廻つて、內證へ委しく
お話し申すが、若し身寄でもあるならば、知らして遣るがようござる。

吉野　有難うございます。(ト泣き居る。)

養仙　若し變が參つたら、早速にお人を下さい、お見舞に參るでござらう。

吉野　何分お頼み申します。

養仙　左樣ならお暇申す。

吉野　これは御苦勞さまでござりました。

養仙　さあ、八助参らう。（ト養仙先に供付いて花道へはひる。皆々傍へ寄り。）
初瀬　もし、養仙様は、なんと言ひなんしたえ。
吉野　所詮一重さんは治らないとさ、どうしたらよからうね。（ト泣く。）
飛鳥　何ぞいゝお薬は、ありませんかね。
花琴　明日お張御符の張替だから、堀の内様へお参り申し、
花鶴　よくお祖師さんへ、お願ひ申して参りんせう。
吉野　明日お願ひ申されゝばよいが。
初瀬　そんなら今宵が、
皆々　はあゝ。（ト泣く。）
吉野　あもし、静にしなんし、一重さんへ聞えると悪うざます。
ゆか　花魁が死なしやんしたら、
たよ　私等はどうしませう。（ト同じく泣く。）
吉野　ほんに此子達が、可愛さうだね。
ト雪下し、雪は巴の端唄になり、花道より丁子屋の亭主長兵衛、毛織の半合羽、ぱつち尻端折、山刀

なさし爪掛の下駄蛇の目の傘をさし、喜助股引尻端折下駄がけ、風呂敷包を脊負ひ、番傘をさして出で來る。

長兵　今し方いゝ鹽梅に、雲切れがして止みさうだつたが、又強く降つて來たな。

喜助　これでは今夜は積りませう、お歸りはお駕籠でなくてはいけませぬ。

長兵　おゝ日が暮れたら迎ひに來いと、油屋へ言付けて置いた。そりやあさうと、今日文里さんの所へ使に行つたのは手前か。

喜助　いえ私ではござりませぬ。與助でござります。

長兵　是非おいでなさるやう、さう申したかしらぬ。

喜助　たしかお預け申してある、一重さんのちいさいのもお連れなさるやう、さう申して參つたさうでござります。

長兵　わづかな内に零落なされ、お困りなさるといふことだが、今ぢやあどんなお暮しかしらん。

喜助　與助から承りましたが、今では今戸の瓦屋の裏で、しがないお暮しださうでござりまする。

長兵　それぢやあ、お駕籠とも行くまいかの。

喜助　どうして、お傘があればようござりますが。

長兵　あゝ、それはお氣の毒なことだな。（ト兩人舞臺へ來り、）
喜助　はい、旦那樣がいらつしやいました。（ト門口を明ける。長兵衞内へはひる。皆々見て、）
吉野　これはまあ、寒いのに、
皆々　ようお出でなさんしたな。
長兵　あいく、惡い物が降つたな。いや惡くもないが、跣足で寒いのに雪ぶッつけか。
　ト云ひながら緣側へ上る。
初瀨　いえ、一重さんの鹽梅が、ちつとも早く治るやうにと、
花鳥　堀の内樣へお願ひ申し、庭の内で先刻から、
花琴　お百度を上げたのでござります。
長兵　そりやあよくして遣つてくれた。
喜助　もし旦那、子供等も一緒でござりますぜ。
禿　旦那さん、おいでなさいまし。
長兵　おゝ手前達も一緒か、やれ奇特なことだ、其一心ぢやあ花魁も、今に全快するだらう。
　ト奥へ聞える樣に大きく言ふ。

吉野　其全快が、あればよいが。
長兵　あこれ、其事は養仙様に。
吉野　そんなら様子を。
長兵　今道で聞いて來た。
ト思入、矢張右の合方にて、奥より花の香番頭新造の打扮にて出來り、
花の　旦那さん、おいでなさいまし。
長兵　おゝ花の香か、どうだえ花魁は。
花の　兎角同じ事でございますよ。
長兵　嘸手前も心配だらう。
花の　いつそお目にかゝりたいと、言つて居なさいました。
長兵　おれも此間から、逢ひたかつた。（ト此内花の香障子を明けに掛る。）あゝこれ、障子を明けたら寒かららうに。
花の　いえ、雪の降るにしては、寒くありませんよ。
ト此内皆々も足を拭ひ上へ上り、障子を殘らず明ける。よき所に六枚屛風を立廻しあるを、花の香明

けろ、内に二ツ蒲團、本夜具の上に、一重病ひ巻鉢病氣の打扮にて居る。

長兵　花魁どうだ、少しはいゝかの。

一重　旦那さん、よく來ておくんなんした。

長兵　あゝ起きるにやあ及ばねえ、寐て居ればいゝに。

一重　いえ、先刻から寐て居た故、起きた方がようざます。（ト夜着に寄掛り、起直る。）

長兵　どうだ、藥は呑むだらうの。

一重　あい。

花の　いえ、兎角厭だと言ひなまして。

長兵　そりやあ惡いこッた、藥を呑まにやよくならねえぜ。

一重　どうでよくはなりませんから、藥は堪忍しておくんなんし。

長兵　むゝ。それぢやあまあ氣任せにするがいゝ。

一重　もし花の香さん、何故こんなに皆さんが、寮へ來て居なさんすのだえ。

花の　花魁が淋しからうと、旦那さんの言附で。

一重　それは嬉しうおすが、お氣の毒でありんすね。

長兵　なにさ、多く病ひは氣から出るもの、其處でおぬしが氣を晴らさうと、仲のいゝ者をよこしておくのだ。これ、其風呂敷包を。

喜助　畏りました。（ト風呂敷包を出し、）花魁新作でござりますか、つい忙しいので、お見舞も申しませぬ。

長兵　（風呂敷より杉折を出し、）こりやあ毒だ。養生糖といつて、桐山三丁で賣る藥菓子だ。病人の喰ひ物にやあいつちいゝ、益になるから、食べなせえ。

一重　有難うおすが、どうも食べたくありいせん。

吉野　折角旦那さんがお持ちなんしたのだから、一つ厭なら半分でも。（ト一重に勸める。）

長兵　あこれ、厭なら無理にはよすがいゝが、さう物を食べねえぢやあ、藥の廻りが惡いから、治る病ひも治らねえぜ。それに付けておぬしにも云つておきてえ事がある、みんなも爰に居るこそ幸ひ聞役に聞いてくりやれ。（ト誂へ尺八の入りし合方になり、）今更言はねえでもの事だが、勤めの身にて子迄なした、文里さんのことなれば、毎日顏の見たいのを、段々溜る勘定に外の者へ示しにならねば、無據二階をせき、久しく足を留めた中も、あゝ文里さんは突出しから二年此方通ひ詰め内證の爲にもなつたお方、いかに生業とはいひながら、不實な者と思はつしやらう。又女の狹い

心から、無分別でも出しはしめえかと、案じたのも、四年後中萬字屋の玉菊が、新之丞といふ客故、義理に迫つて非業な最期、遖れ遊女の鑑ぞと世の人毎に褒めれども、ならう事なら其樣な憂目を見まい見せまい爲め、病氣の儘に此家で、産をさせたも有り樣は廓と違つて人目もなければ文里さんに逢はせる爲め。産れた子をば親切に内儀が引取り世話すると、聞いても聞かぬ顏をして、寐物語りに女房と喜んでゐる己が心は、無分別を出させまい爲。はて人間の一生は七轉び八起とやら、文里さんも又元の身分になつたら其時は、手かけ妾もある習ひ、おぬしを引取り世話もなさらう、己も男さうなれば、立派に支度をしてやらう、兎角命が物種だ、そりやもう傍輩初め子供等迄此雪の中を跣足詣り、其の一心でもおぬしが病ひ、治るは知れた事なれど、(ト思入あつて、)こゝが又人の覺悟、死なねえのは知れて居れど、命は限のあるものだ。己なぞはついちよつとかぜ風を引いても死ぬかと思ひ、己が死んだら斯う〳〵しろと、遺言をすると直に治り、後で女房に笑はれるが、何と目出度いぢやあねえか。それだによつておぬしも末、言ひおく事でもあるならば、何なりとも己に言やれ。はて、よくなつた其時に、おぬしはこんな事を言つたと、どうぞおれに笑はしてくれよ、よ。斯ういふのもおぬしたば娘と思ふ心からだ、世間の人は遊女屋の亭主は鬼か何ぞの樣に無慈悲な者に思へども、鬼ばかり世にはねえ、心置ずに何なりといふ

ことあらば云ふたがいゝ。なう吉野、そんなものぢやあねえか。

　ト宜しく思入あつて言ふ。一重初め皆々泣きゐる。

吉野　あゝ有難い旦那さんの御異見、みんなお前の爲なれば、惡う聞いては濟まぬぞえ。

一重　何の惡う聞きませう。其御親切を徒にして斯うして居るが勿體ない、少しも早くよくなつて御恩送りがしたうざます。

長兵　むゝ、よくなつたらば稼いでくりやれ、寐てゐる內は入らぬ心配、それが病ひの大毒だ。（ト懷から年季證文を出し）其心配をさせぬ爲め、おぬしへ土產の年季證文、是を遣つた上からは身儘の身體に遠慮はねえ、一年なりと二年なりと、よくなる迄は寐て居やれ。

一重　何と申さう樣もない、

吉野　旦那さんの思召し。

初瀨　私ら迄も、

皆々　有難うおざりんす。

長兵　おゝ、まだ肝腎な事を忘れた、文里さんのお家が知れて、今日おいでなさる樣、お約束を申しておいた。

一重　そんなら文里さんが、

花の　おいでなんすとかえ。

長兵　定めておぬしも逢ひたからうし、又文里さんも一生の、いやさ、一緒に今夜は爰へ寢て、ゆつくり話しをするがいゝ。

一重　えゝ、何から何迄。

長兵　はて己あ娘と思つて居れば、其禮にやあ及ばねえ。

花巻　（奥より以前の花巻走り出て）あゝ、どうしたらようざませう。香煎と間違へて、振出しの胡唐辛子をお湯へ入れて呑んだので、口がひり／＼してなりんせん。

花巻　花巻の又お株で、そゝッかしい事ばかり。

花の　ちつと性を付けなんし。

花巻　おゝ辛い／＼、何ぞ甘い物を、一つくんなんし。

長兵　花魁の見舞に持つて來た、養生糖はどうだ。（ト長兵衛折を出す。）

花巻　そりやあ丁度ようざます。（ト花巻一摑み取らうとするを、喜助留めて、）

喜助　おつと花巻さん待ちなせえ、養生糖に唐辛子は、煤掃に鰒を喰ふ樣な物で大敵藥だ。

花卷　なに、敵藥でもよいよ。

喜助　お前はよからうが勤の身、旦那さんがつまらねえ。

花卷　いえ〳〵、敵藥でも死にやあしない、實は唐辛子は喰べないのだよ。

長兵　それぢやあ、養生糖は遣られねえ。（ト折を片附ける。）

花卷　えゝ忌々しい、喰べそくなつたか。

喜助　見出してやつた。

皆々　ほゝはゝゝ。（ト皆々笑ふ。是にて一重もにつこり笑ふ。）

長兵　いや、思ひがけなく花魁の、笑ひ顔を見て己も嬉しい、然し是が。

一重　え。

長兵　いやさ、こんな事でなくツちやあ氣が晴れねえ。

吉野　晴れると云へば此雪は、いつ迄降るのでありんせう。

長兵　いやもう今に止むだらう、さうしたら文里さんも出掛けておいでなさるから、冷えねえ樣に寐て居るがいゝ。

一重　あい、ちつと横になりんせう。

長兵　どれ。己も笹の雪で一口やらうか。（ト立上る。）

皆々　そんなら旦那さん、

長兵　氣を付けてやりやれ。

ト唄になり、長兵衛先に新造四人禿付いて奥へはひる。吉野花の香は屏風を立廻し内へはひる。花卷、喜助障子を閉めながら、

花卷　喜助面覺えてゐろよ。（ト脊中を叩き、ついと奥へはひる、此時口紅の文を落す。）

喜助　いや、喰物の意趣はひどいものだ。（ト喜助花卷の文を取上げ見て、）花卷さんが文を落したが、どんな事を書いて遣るか、大方落し咄でよく言ふ、あばいが惡い類だらう。（ト云ひながら開き見て、）淨瑠璃名題、文里一重が子故の闇に、夜鶴姿泡雪相勤めまする太夫、花園宇治太夫わき花園多喜太夫、三絃花園豐造上調子花園榮造、相勤まする役人。」（ト役人替名を讀み、）こりやあ今度吾妻路が花園と改名した淨瑠璃の觸書だ、それぢやあ爰に淨瑠璃があるか、さつぱりと知らなんだ。然し默つても引込まれまい。いよ〳〵此所淨瑠璃初まり、其爲口上左樣。

ト下手二階家の伊豫簾を捲上げる、内に花園連中 羽織 袴にて居り、喜助此内奥へはひる。淨瑠璃に

〽立つ春に氣色替りて枝ながら惠みの雪に花の園色音優しき鶯や、哀れ文里は去年の儘ぶ

梅の裾に綿、替らぬ姿しよんぼりと、

ト本釣鐘雪おろし、雪頻に降り、花道より文里やつし裝、頰冠り尻端折安下駄を穿き、やぶれし番傘をさし懷に抱子を入れ出來り、

文里　あゝ誰やらが雜俳の句に、鶯や同じ垣根の幾曲りと、初音の里ほど同じ樣に垣根のある所はない。只でさへ知れ悄いに、此雪で眞白故何處がどうやらさつぱり分らぬ、今後の酒屋で聞いたら、角から二軒目とあるからは、爰の寮に違ひない。(ト此時抱子の泣くをいぶり付けながら、)おゝ泣くな泣くな、家でしつかり呑まして來たが、一里餘り抱いて來た故、呑度くなつて來たと見える。あれ泣くな〳〵、こりやあ尿がしたくなつたのか知らぬ。あゝ、ぐつすりぬいたわえ。

〽野邊の綠子懷に、吹雪厭うてさす傘も濡れじと横に人の目を、忍ぶが岡の山の蔭、心細くも水涸れし流れに添うて來りける。(ト文里宜しく思入あつて、本舞臺へ來り、)

〽音なう聲は聞馴しゆかしき人に吉野は立出で、(ト屛風の内より吉野出て、)

はい、お頼み申します〳〵。

吉野　どうやら今のは聞いた聲。(ト言ひながら下駄をはき枝折戸の側へ來て、)もし、其處へお出なんしたは、

文里　吉野さん、文里だよ。（ト手拭を取る、吉野見て）

吉野　おゝ、よくお出なんした、先刻からお待ち申して居りました。

文里　はひつてもいゝかえ。

吉野　よいどころか、さあ〳〵爰へ。

文里　あゝお前方に逢ふのも面目ない、此ざまだ。（トいひながら内へはひろ、と抱子泣く。）おゝ今にお母あに逢はせるから、泣くな〳〵。

吉野　一重さんの産みなんした、梅吉さんとは其子かえ、ちよつと抱かしておくんなんし。

文里　手が替つたら泣くだらうが、それぢやあ足を拭く内頼まうか。

　　ト懐から出して吉野へ渡す。吉野抱いて、

吉野　おや、こりや尿をしなんしたのかえ。

文里　冷たからう。是を當てくんな。（ト袂より襁褓を出して渡す。）

吉野　でも親子とて、一重さんによく似て居なんすね。（ト吉野泣子をいぶり付け居る。文里足を拭ひながら）

文里　ほんにお前に逢つたら禮を云はうと思つて居た、此間吉三さんが親切に金を持つて見舞に來てくんなすつたが、大まい百兩といふ金を、お貰ひ申す譯がない故お斷り申したが、何とか思ひなさ

りやあしねえか、よくお前から來なすつたら言譯をしてくんなせえ。

吉野　おやさうでありましたか、久しく此方へ來なさらないから、一重さんの病氣も知らしたし、又私も逢ひ度く思へども、惡い身性に。（ト鬱ぐ。）

文里　さあ、それ故此方も氣味惡く。

吉野　え。

文里　いやさ、氣の毒だからお返し申した。（ト文里足を拭ひ上へ上る。屛風の内より花の香出て、）

花の　文里さん、よく來ておくんなんした、待ちきつて居りました。

文里　そつちより己が又、どんなに逢ひたかつたか知れねえ。

吉野　花の香さん、一重さんは。

花の　すや／＼寐入つて居なんすよ。（ト此時抱子頻に泣く。）

吉野　おゝたがよ／＼、何故こんなにお泣きだね。

文里　そりやあ乳が吞みたくなつたのだ。

花の　丁度幸ひ寮番の、上さんに乳があれば。

文里　そんなら一ぱい貰つてくんな。

花の　あい、たんのうさせて上げいせう。（ト花の香抱子を抱き奧へはひる、吉野屏風の傍へ來て、）

吉野　もし一重さん、文里さんがお出なんした、もし一重さん〱。

〽明る屏風もやつれたる、互ひの姿にふさがる胸、一重は戀しき其人に、飛立つ思ひも病ひの床、

ト吉野屏風を明ける、文里一重を見てこなし、一重は嬉しく起上らうとして、起兼れる思入。

もし、文里さんがお出なんしたよ。

文里　これ一重、可愛さうに、飛んだ目に逢つたな。

一重　文里さん。

〽逢たかつたと胸せまり、先立つ淚にくれければ、（ト一重嬉し泣に泣く。文里傍へ來て、）

文里　己も煩つて居ると聞いて、逢度く思つて居たけれど、來るに來られぬ今の身の上、所へ御亭主から迎ひ故、飛立つ思ひで逢ひに來たが、昨日若い衆に聞いたより、おぬしは大層やつれたな。

一重　お前も僅逢はぬ内に、みすぼらしい裝にならんしたな。

吉野　ほんに以前の文里さんの、俤はありんせん。

文里　さあ是ゆゑ何ぼ逢ひたくても、どうも逢ひに來られねえ。

一重　さうして今日はおしづさんも、一緒にお出でなんしたか。

文里　あれにも來いと云つたれど、雪で頭痛がすると云つて一緒に來ぬは、久振おぬしに話しもあらうと思ひ、粹を通して來ぬ樣子、それ故道で坊主に泣かれ、どんなに困つたか知れねえ。

一重　そんなら連れて來てくんなんしたか。

文里　おぬしに見せようと、懷へ入れて來た。

一重　嘸大きくなりんしたらう、早く見せておくんなんし。

文里　今ひもじがつて泣いた故、花の香が緊番へ乳を貰ひに抱いて行つた、飲ましたら連れて來るだらう。

吉野　お前に早く見せたうござんす、どんなに太つて居なんすだらう。

一重　おや、さうざますかえ。

文里　其太つたに引替へて、おぬしア大層痩せたな。

一重　それ故身體が痛うざます。

文里　嘸是ぢやあ痛からう、どれ、己がさすつてやらうか。

〽いたはる手さへ柔らかに、積る傍から消えて行く、春のならひに泡雪も、軒の雫と鳴る鐘

に、哀れを添ふる相の山。

ト此内文里一重の介抱をしながら、吉野と所詮助からぬといふ思入あつて涙を拭ふ。と、時の鐘合方雪おろしにて、花道よりおしづ一文字の編笠を冠り、安下駄を穿き、胡弓を持出で來り、後より娘おたつ芥子坊主に、手拭を頬冠りにして鐵之助を脊負ひ、破れたる番傘をさし出來り、花道にて、

たつ　もしお母さん、鐵が何か喰べたいといひますわいな。

しづ　なんの鐵が其樣な、さもしいことを云やるものか、おぬしが大方言ふのであらう。行儀の惡い、往來中で物を喰べるといふがあるものか。なう鐵、姉さんが言ふたであらうの。

鐵之　あい、おいらぢやあない、姉さんぢや。

たつ　えゝ此子は、何で私が其樣な、さもしい事をいふものかいの。

しづ　はて、そなたの云うたにして置きやいの。

〽おしづは夫の後を追ひ、爰へきゞすの小鳥さへ、十と五つにまだ春も、二十日を越さで冴返る、寒さ忍びてやう〳〵と枝折の外に佇みて、

ト此内おしづは兩人をいたはりながら舞臺へ來て、

〽慥に爰とさし覗く、内には尋ぬる文里の聲、

文里　これ一重、ちつと横になればいゝ。

一重　いえ、此方がようざます。

吉野　ちつと替つてさすりんせう。

文里　まだ草臥ねえからいゝ。

たつ　（文里を見付けて、）あれ、お父さんが。

しづ　あこれ。（トおたつを留め、胡弓をしやんと構へる。是にて相の山になり。）

〽ゆうべあしたの鐘の聲、じやくめつゐらくと響けども、聞いて驚く人もなし。

ト此内一重苦しき思入、文里種々介抱する。吉野は口の内で題目を唱へ、盆の米を算へ居る。おたつは睡がる鐵之助をいぶり付けながら寒き思入。

文里　これ一重、だいぶ息遣ひが惡いが、差込でもするのか。

一重　あい、久し振で來なんしたお前に、案じさすまいと怺へに怺へて居たれども、所詮私しや助からぬぞえ。

文里　なに、助からねえ事があるものか、己が慾目か知らねえが、顏の色なぞは不斷の樣だ、そんな弱い氣を出しちやあいけねえ。

一重　いえ〳〵、助からぬといふことは疾から。
吉野　え、そんならお前はあの疾から。
一重　お洗米さへ只一粒。
〽三度の食も見たばかり、喉へ通らぬ病ひ故、此世を申の御縁日、帝釋樣のお水をば末期の水と心にて、
戴いて呑む私が覺悟。
吉野　あれ、あの樣な事言うて、
〽妙法蓮華けふあすと繰る珠數よりも玉の緒の、今にも切れるかなんぞの樣に、祖師さん願ふ死に急ぎ、
傍で聞く身の私が悲しさ。
〽推量してと共々に、なみだは雪解の行潦。
文里　お前迄が同じ樣に、春早う緣起でもねえ、あゝ鶴龜〳〵。
〽いふ表には相の山、寒さに聲もふるはれて、
〽花は散りても春は咲く、鳥は古巣へ歸れども、行きて歸らぬ死出の旅、

ト是を聞き一重思入、文里、吉野惡いものが來たといふこなし、おしづ內の樣子を窺ひ居る。おたつは此內袂より錢獨樂を出し、雪釣をして鐵之助に見せ、始終口にて手を溫め寒さを怺へるこなし、

吉野　えゝも、心に懸るあの唱歌、

一重　行きて歸らぬ死出の旅。（ト愁ひの思入。）

鐵之　かゝ樣、寒いわいの。

しづ　おゝ寒からう〳〵、ようおとなしくして居やつた。

文里　あゝ哀れな文句につまされて、よけいに淚をこぼさせる。どれ、手の內を遣つて行つて貰はう。

〽連添ふ妻や我子とも思ひがけなく白雪に、文里は枝折の傍へ來て、

ト文里懷より財布を出し、內より小錢を出して是を持ち枝折戶の傍へ來る、おしづ二人を後へ隱し編笠にて顏を背ける。

これ〳〵相の山どの、ちつと內に取込があるから、早く隣へ行つて下せえ。

〽差出す錢におしづははツと、顏を隱せば頑是なき、子供は傍へかけ寄つて、

ト文里錢を出す、おたつ傍へ來て、

たつ　や、お父さんか。

文里　やゝ、そちは。（トびつくりなす。）
しづ　文里殿。
文里　あ、これ。
〽あたり憚り目で押へ、其處に暫しと敎ゆれば、おしづは我子の口に袖、松の小蔭に忍び居る。
ト文里思入あつて其處に待つて居ろと敎へる、おしづ鐵之助の口を袖で押へ、おたつに囁き、兩人思入あつて下手へ忍ぶ。文里元の所へ來る。
吉野　もし文里さん、今の相の山は、子供を連れて來いしたのか。
文里　おゝ、なんぞ樣子のあるかは知らぬが、此雪も構はずに、可愛さうに子供を連れて、
吉野　袖乞をして歩くとは、御亭主でもない人か。
文里　いや、あつてもどうで腑甲斐ない、己の樣な者と見える。（トホロリと思入。）
一重　嘸寒いことでありんせう。（ト言ひながら一重泣伏す。）
文里　あゝ又泣くのか。
一重　何を聞いても悲しくなつて。

文里　その悲しいはおぬしより、

一重　え。

文里　いや、おぬしの身體へ明け放しで、雪風が染みては悪い、ちつと障子をしめて置かう。

吉野　ほんに、それがようざます。

〽立てる障子の紙一重、薄き縁しの別れとは、後にぞ思ひ白妙の雪は次第に、

ト文里一重を見て助からぬといふ思入、吉野障子を見て、三重雪下しにて、此道具半分廻し、下手の枝折戸上手になる。

本舞臺正面一面雪の積りし建仁寺垣、後見越の松、雪一面に積つてゐる。爰におしづ鐵之助を抱き、おたつ傘をさしかけ居る。

〽降しきり風も烈しく親と子が、さす傘よりも破れ衣に寒さは骨にしみ渡り、悚へるおたつは齒の根も合はず、

たつ　もし、お母さん、雪で閊へが發つたと言はしやんしたが、どうぢやぞえ。

しづ　おゝよう尋ねてくりやつた、きつい事もないけれど、此寒さ故、どうもまだ。

鐵之　寒くば坊が温ためて上げよう。（トおしづの手をとり、顔へ當てる。）

しづ　おゝ、あつたかになつたわいの。
たつ　お寒ければ私の半纏を、肩へ掛けて上げませう。
しづ　あいや〳〵私よりはそなたが、嘸寒いことであらうわいの。
たつ　いえ〳〵私しや寒うはござんせぬ。
しづ　何ない事があるものか、齒の根も合はぬ胴震ひ、
〽不便のものやと右左り、伏見常磐の悲しみも斯くやとばかり泣沈む、折から爰へ若い者門の掃除に目に角立て、
トおしづ兩人を抱き宜しく思入、下手より喜助竹箒を持ち庭を掃除に出て來り、
喜助　これ〳〵、何時迄其處に休んで居るのだ、澤山降らねえ内に行かねえか。
しづ　はい、癪が發つて困りますれば、どうぞもう少々。
喜助　いや置く事はならねえの、此間も此先の寮へそんな事を云つて子を一人置いて行つたといふ事だ。
しづ　いえ、左樣な者ではござりませぬわいな。
喜助　誰も左樣な者だと云つて居る奴があるものか、さあ〳〵、早く行つたり〳〵。
たつ　どうぞさう云はずと、もうちつと。

喜助　えゝしつこい、ならねえといふに。（トおたつをむごく突倒す。）
たつ　あれ、痛いわいの。
しづ　えゝ可愛さうに、科もないものを。
喜助　何ねえことがあるものか、行けと云ふに行かねえからだ。
しづ　いえ、行かぬとは申しませぬわいな。
喜助　えゝきりきりと、行きやあがらねえか。
〽箒おつとり立かゝれば、（ト喜助竹箒を持つて立掛る、此時文里出て、喜助を留め）
文里　あゝこれ喜助、可愛さうにひどい事をするな。
喜助　いえ、子でも捨てられると掛合ひになります。
文里　さうでもあらうが一重が病氣、まあ靜にしたがよい。
喜助　それだと言つて。
文里　はて、待てと言つたら待つたがいゝ。（ト喜助を留める。）
鐵之　父様、何ぞ下されや。
しづ　あこれ。（ト口を押へる。喜助びつくりして、）

喜助　や、そんならもしや。
文里　喜助、面目ないわい。
たつ　もうお父さんと云うても、ようござんすかえ。
文里　むゝ知れたる上は仕方がない。
喜助　（びつくりして手を突き、）是れは飛んだ粗相を致しました、御新造樣御免なすつて下さりませ。あ
あお孃さんといひ、お坊さんといひ、
〽よいお子樣と若い者、追從たら〳〵雪の中、汗を拭うて入りにける。
ト喜助氣の毒なる思入にてこそ〳〵と下手へはひる。
〽後見送りて親と子が、三筋四筋に相の山、
鐵之　父さん冷めたい、抱いて下され。
文里　あゝ抱いて遣りませう、さあおたつも爰へ手を出しやれ。
たつ　あい〳〵。（ト文里鐵之助を抱き、片手におたつの手をとり懷へ入れ溫めながら、）
文里　してまあそちは此雪に、何でそんな裝をして、どういふ譯で爰へ來たのだ。
しづ　さあ、一重さんがむづかしいと知らせの人に、お前より私が逢ひたく思へども、久し振で行かし

やんすに女房が居てはよい仲でも、話しの仕難い事もあらうと、癪を幸ひ家に居たれど、氣にする故か烏鳴き聞く辻占もよい事なく、一重さんが悪いのか、但しは梅が這入つてひよつと蟲でも出はせぬかと、心に掛つて家に居られず、せめて門から餘所ながら様子を見ようと此おたつが、蹄りに遣うた冬編笠、是幸ひと相の山、大概様子も聞いた故早う歸ればよい事を、長居をしたでお前に迄、女房が袖乞する様に、恥をかゝせし私があやまり、何と云うたらよからうぞ。

文里　むゝそんなら梅吉を案じて、そなたは此雪も厭はず、爰へ來やつたのか。

しづ　あい、悪い心でせぬ事なれば、どうぞ堪忍して下さんせいな。

文里　あいや其詫言はそなたより、己が方から言はねばならぬ。ふとした事から二年越し、廓へ通ふ其内も男の高下と諦めて家へ歸れば水雜炊、迎ひ酒のと手當して、只一言の悋氣もせず、

〽いかに亭主は女房子を、養ふものとはいひながら、己が勝手に夜泊り日泊り、最うふッつりと廓へは、

決して足をば向けまいと思つた事は幾度か、聞けばそなたの親達も、己にふつ〳〵愛想が盡き、別れて歸れといふとの事、

〽里へ歸れば樂々と、暑さ寒さの苦勞もなく、暮らされる身も共々に、

苦勞するのも皆己故、それを恨まず梅吉迄我子に替へて世話する親切、あだに思はゞ女房の罰、今日といふ今日手を下げて、そなたに己が詫びるぞよ。

〽ゆるしてくれと雪の中、殘る手形の楓葉や、涙に誠の色ませば、

しづ　あゝ勿體ない女房に、何の禮に及びませう、私に罰が當るわいな。

鐵之　これ父樣、睡くなつたわいな。

文里　おゝ睡くなつたら寐るがいゝ。

しづ　梅を私が抱いて寐るので、鐵がお前に馴染だこと。

文里　世帶の苦勞を忘れるのは、今の身では子供ばかり、

しづ　それはさうと一重さんは、どういふ樣子でござんすぞえ。

文里　勞といふ字の付く病ひに、見た所はさのみでもないが、今傍輩の吉野に聞いたが、先刻お醫者樣の仰しやるのに、今夜あたりといふことだ。

しづ　え、すりや、あの一重さんは。

文里　此方のものぢやァあるめえよ。

〽はッとばかりに、差込む癪、

トおしづ癪にて取詰める。文里びつくりなぜど子供故起されず、おたつ介抱なす。

文里　これ〳〵おしづ、どうしたのだ。

しづ　今朝から雪で癪氣の所、一重さんの事を聞いて、はツと思ふたら、あいたゝゝゝ。

たつ　もし、私が押して上げませうか。（トおしづの介抱をする。）

文里　あたしが力ぢやあ利くめえが、押して遣りたいにも此坊主、あゝ困つたものだなあ。

しづ　あゝ此の樣に差込んでは、あいたゝゝゝ。（トおしづ苦しむ、文里片手で押して遣る。）

鐵之　父さん、抱こして下され。

文里　えゝ、抱いて居るといふに。

〽足手纏ひの幼子に、如何はせんと立ちつ居つ、氣を揉む折柄一間の內、

吉野　（上手にて。）もし〳〵文里さん、一重さんが取詰めなんした、ちよつと來ておくんなんし。

花の　花魁氣をしつかり持ちなましよ。

〽聞くにびつくりどきつく胸。

文里　すりや一重には取詰めたとか。ほい。

しづ　もし、早く行つて上げて下さんせ。（ト文里上手へ思入あつて、行兼ねるこなし。）

文里　なに、あつちやあ大勢居るから、己が居なくつてもいゝ。

しづ　いえ〳〵假令幾人居ようと、便りに思ふはお前一人、私が身に覺えがある。早う行つて上げて下さんせ。

文里　それだといつて是を見捨て、どう己が行かれるものか。

たつ　いえ〳〵、私が押して居りますから、お父さんは構はずに。

文里　そんなら手前を頼むぞよ。（ト文里行掛るを、鐵之助留めて、）

鐵之　父さん、爰に居ておくれよ。

文里　おゝ案じるな、何處へも行きはしねえ。

〽行くに行かれず桓山の、四鳥の別れ恩愛に、身をしぼるゝ血筋の繩。

ト此内文里上手へ行かうとするを、鐵之助袖に縋る故、振返り見る、おしづ苦しみ居るを、おたつ介抱して居る。是にて行きつ戻りつ宜しくあつて、

あゝあちらも氣遣ひ、こちらも氣遣ひ、こりやどうしたらよからうなあ。

ト茫然と思入、おしづも思入あつて、

しづ　あゝおたつが押してくれたので、大きに私やようござんすから、早く行つて上げて下さんせ。

ト おしづ苦しみを怺へる思入、文里も行度き思入にて、

文里 そんなら行つてよからうか。

しづ あゝ、ようござんすから、鐵を爰へ。

鐵之 いゝや、おいらはお父さんと一緒に寐たい。

文里 おゝお父さんはお醫者樣へ行つて、お灸をすゑて來るほどに、ちつとの内待つて居や。

鐵之 あい〱。

しづ さ、これに構はず、

文里 おゝ、行つて來るぞよ。

〽妻子に心殘んの雪。消えぬ内にと、急ぎ行く。

ト文里宜しく思入あつて上の方へはひる。おしづ後を見送り苦しき思入。

しづ あいたゝゝゝゝ。

たつ 又差込んで參りましたか。

しづ お父さんを上げようと、我慢をしたが、もうどうも。

たつ （擦りながら雪の降り出したを見て、）あれ、お天道樣も意地の惡い、又大層降つて來た。

鐵之　坊が傘をさして遣らう。

たつ　おゝ、さうしてくりやいの。

しづ　これおたつ肩を貸してたも、爰に長く居たならばお父さんの心掛り、そろ〳〵そこら迄行かうわいの。

〽我子を杖の力竹、姿は野邊に冬枯れし案山子の蓑の惣毛立ち、いとゞ哀れに始終をば後に窺ふ此の家の主人、

トおしづおたつの肩へ縋りて立上り、苦痛の思入にて行兼ねる、此時後へ長兵衞出て、

長兵　あいやおしづ樣とやら、先々お待ち下さりませ。

しづ　さう仰しやるは、一重さんの。

長兵　はい、文里樣には御恩になつた、長兵衞でござりまする。

しづ　して、私をお呼びなされしは。

長兵　いや別の事でもござりませぬが、此雪降に持病のお惱み、何れへおいでなされますか、滿更知らぬ所でもなし、文里樣もおいでなされば、むさくろしくとも此寮で、まあお休みなされませ。

しづ　お志は嬉しいけれど、以前に替る今の身の上、御覽の通りの姿故。

長兵　其御遠慮には及びませぬ、綾羅錦繡身に纏ひ綺羅を飾つたお人でも、穢れた心でござりましては襤褸に劣る樣なもの、假令以前に替ればとて、替らぬあなたのお心は、實に錦でござりまする。

しづ　それぢやと云うて、どうもお內へ。

長兵　まだそんな事を仰しやりますか、殊には一重も今夜らが、別れにならうも知れませぬから、逢つて遣つて下さいまし。

しづ　さあ、其一重さんには逢ひたけれど。

長兵　其思召しなら少しも早く。

しづ　そんなら此儘。

長兵　さあ、おいでなされませ。

〽流石廓の主人とて粹もあまいも味ひしは、色香もうせぬ梅暮里の谷峨が作の二筋道、四方に其名や香るらん。

トおしづ行かうとするを長兵衞引留め、一緒に來いといふ思入、是にておしづおたつに鐵之助を背負はせ、胡弓編笠を持つて長兵衞先に上手へはひる。と、雪下しにて道具廻り、元の舞臺へ戾る。本舞臺元の二重の道具、床の上に文里一重を抱き、傍に吉野共々介抱して居る。上下に新造四人禿二人

泣居る、花の香同じく泣きながら薬を煎じてゐる。

一重　文里さん、私しやもう死にますよ。

文里　おゝ助かるといひたいが、此様子ぢやあむづかしい。言置く事でもあるならば、己に言つて置くがいゝ。

一重　死ぬるいまはの心掛りは、身持の悪い兄さんの事。

文里　そりやあ決して案じねえがいゝ、身持の悪いもいつか一度は、根が馬鹿でねえ人だから、直るには違ひねえ、又話に聞いて居る末子殿も親切な、若黨が預つて居れば、やがて尋ぬる短刀も手に入つて、歸參が出來よう、及ばずながら己も又、相談相手になる程に、必らず〳〵案じねえがいゝ。

一重　それで私しや心殘りは、おゝ此世の別れ梅吉に、どうぞ逢はしておくんなんし。

花の　寮番さんに預けてあるから、誰ぞちよつと。

花琴　あい、お連れ申して參りんせう。

長兵（奥にて）いや迎ひに來るにやあ及ばねえ、今其處へ連れて行かう。

吉野　あの聲は。

皆々　旦那さん。

ト長兵衛先におしづ抱子を抱き、おたつ胡弓と編笠を持ち、鐵之助の手を引き出て來る。

長兵　扨文里さん、其後は久しくお目に掛りませぬが、いつもながらお替りなく。

しづ　長兵衛樣のお勸め故、一重さんの顏も見たく、それゆゑ參りましたわいな。

文里　や、そなたはどうして。

ト一重を吉野に抱かせ文里前へ出て、

長兵　何面目ない事がございませう、七百貫目の借錢した、藤屋の伊左衛門が此編笠、（トおたつが持つてきた笠を見せ）手前勝手を云ふ樣だが、遣ひ果して紙衣を着ねば、粹の粹とは言はれませぬ。

文里　いえもう替りがなければようござりますが、替り果てたる此姿、お目に掛るも面目ない。

文里　いえも、其お詞で肩身を廣う、是に夫婦が居られまする。

長兵　や餘事な話しはまあ後で、さあお上さん、一重に逢つて遣つておくんなせえ。

しづ　はい、有難うござります。（ト一重の傍へ來て）一重さん、私でござんす。

一重　おゝお上さんか、よく來ておくんなんした。

しづ　あゝ大層やつれなさんしたな。

たつ　伯母さん、お鹽梅はようござりますか。

一重　あい有難う。もし花の香さん、子供衆になんぞ。

花の　あい〳〵。

文里　あゝ、苦しい中でそんな事迄。

長兵　是がやつぱり病ひの種だ。

しづ　さあ一重さん、梅を連れて來ましたよ。

一重　どれ何處に、（ト抱子を抱かせる、一重顏を見て）おゝ梅かよ。

ト顏をぢつと見て泣く。皆々是を見て愁ひの思入。

長兵　あれ、親子とて爭はれぬ、一重におとなしく抱かつてゐる。

吉野　もし文里さん、ちよつとお見なんし、乳が呑みたうありんすか、紅葉のやうな手を廣げ、いつぞ胸を搜しなんす。（ト文里是を聞き、たまらぬ思入にてわざと顏を背け居る。）

一重　これ梅、私しやお前の親ではないぞえ、お前の親はおしづさまぢやぞ。（ト子を見て泣く。）

初瀨　あれ一重さんが顏を見て、あの樣に泣きなんすに、

飛鳥　何にも知らずにこ〳〵と、笑うて居なんす梅吉さん。

花の　ほんに佛樣でありんすね。
一重　其佛樣になる私、よう顏を見て置かうぞよ、はあゝ。（ト泣く。）
しづ　黄泉の障りは此子であらうが、今日袖乞の姿となり、逢ひに來たが前表で、此末乞食になればとて、我子を捨ても此梅は、私が立派に育てるほどに、必ず案じなさんすな。
一重　それで迷はず死にまする。
しづ　何ぞ外に言ひ置くことは。
一重　言ひ置く事はなけれども、此子が大きくなつたなら、此書置を。
ト蒲團の下より文を出し、おしづへ渡す。
しづ　此書置を讀んで見たけれど、私しや涙で讀兼ねる。もし、お前讀んで下さんせ。（ト文里に渡す。）
文里　あゝ己も涙で讀めればいゝが。（ト書置を開き。）「書殘す教訓の事、一そもじの母我身事は吉原の遊女丁子屋の抱にて一重と申候、文里樣に馴染を重ね終にそもじを姙て產落し候處、文里樣のお內樣が他人の手しほに掛候より、幸ひ乳も澤山に候へば、我等引取り世話致し候と、藁の上より御養育下され候、然るに其頃は文里樣も以前に替りまづしき御暮し被成候、是皆廓通ひより起りし事なれば我身をお恨みあるべき筈を、實の兄弟も及びなき程御親切になし下され候、

其御恩の程海山にも盡し難く、長く御恩送りと存じ候甲斐もなく、産後の大病にて僅十九歳を一期として此世を短く相果候まゝ、そもじは我身になり替り文里樣は言ふに及ばず、大恩のあるおしづ樣へ孝行盡し申しべく候。」もし丁子屋の、どうぞ此跡を讀んでおくんなせえ。

ト長兵衛へ書置を渡す。

長兵　（開き見て）「何々、又丁子屋の御夫婦樣は突出しの其日より、一方ならず御世話なし下され候御恩送りも致さず、剰年のある内御損を掛け相果て候へば暑さ寒さには御機嫌伺ひにまゐるべく然し乍文里樣御夫婦が大切なれば、假令野暮者と言はれ候共、お父樣が手本なれば廓通ひなど致すまじく候、若御苦勞掛け候と我身事草葉の蔭にて浮み申さず候、くれ〴〵此事忘れ申すまじく候、まだ書殘度き事山々御座候得共、病に筆も廻り兼候儘、十が一つ教訓に書殘しまゐらせ候、あら〳〵目出度かしく、梅吉殿へ母一重。」（ト讀み文里と顏見合せ）流石以前が以前たけ、遊女に稀な此書置。

文里　そんなら疾から死ぬ覺悟で、

一重　あい、書いて置いた其教訓。

長兵　未生先の長い身で、思ひ切つたる此書置、立派な覺悟を世間の人に、話して自慢がしたいわい。

ト長兵衞宜しく思入。

一重　是で思ひ置く事なし。

吉野　風が寒くはありいせんか。

一重　屏風を立つておくんなんし。

吉野　あい〳〵。（ト屏風を立廻し、中へはひる。長兵衞・文里思入あつて、）

長兵　男も及ばぬ一重が覺悟、どうか達者にして遣りたいが、所詮あれは助かりませんぜ。

文里　明日來ようと思つたを、雪を厭はず今日來たは、別れになるを蟲が知つたか。

しづ　相の山の編笠を、此子に着せたくないものだ。（ト此時屏風の内より吉野出て來るを見て、）

長兵　一重はどうだ。

吉野　差込がありんせんから、よい方でござんす。

長兵　よいと云ふのは何よりだ。

ト下座にて獅子の囃子になる。

鐵之　父樣、獅子が來ました。

文里　此雪降に珍らしい、何處か家例で、行く所でもあつて大方來たのだらう。

長兵　何にしろ緣起直しに、獅子に惡魔を拂つて貰はう。
吉野　ほんに、それがようざます。
文里　今迄陰に閉ぢられて、
しづ　雪よりしめりし御座敷も、
長兵　獅子の囃子の陽氣を招き、
文里　思はず愁ひを、（ト立上るを木の頭）拂ひました。
　ト皆々愁ひを忘れし思入、獅子の囃子で賑やかに、

ひやうし幕

六幕目

巢鴨在吉祥院の場

〔役名――和尙吉三、お坊吉三、お孃吉三、手代十三郞、長沼六郞、堂守源次坊、おとせ、捕手等〕

（吉祥院の場）――本舞臺三間の間古びたる金襴卷の柱、天人の大欄間。上下蓮の畫の杉戶、正面大机の上に三つ具足、此後戶帳のおりし厨子、所々に古びたる幡を下げ、すべて吉祥院古寺の體。

爰に堂守源次もんぱの頭巾を冠り、大圍爐裏で古びたる卒都婆を焚いてゐる。禪の勤にて幕明く、

源次　今年は節が若いせゐか、一夜明けたら猶寒い。門松へ雪が掛ると七度降るとよくいふが、今夜は又雪か知らん、暮れねえ内に卒都婆をこなし、焚木をしつかり拵へて置かう。和尚が歸りに五ンつくも提げて來て呉れりやあいゝが、酒でなけりやあ凌げねえ。おゝ寒い〳〵。

ト火にあたり居る、花道よりお坊吉三頬冠り、大小尻端折りにて出來り。

お坊　天高しといへど脊をくゞめ、地厚しと云へど荒く踏ずと、よく芝居で落人の臺詞に云ふが違えねえ、其身にならにやあ知れねえが、實に段々喰ひ詰めて斯う忍んで歩いて見ると、廣い往來がせめへやうだ、兄貴が此寺に居るといふから、暇乞に酒でも呑んで、旅稼ぎに出にやあならねえ。（ト本舞臺へ來り、源次坊を見て、）お頼み申します。

源次　あい、何だえ。

お坊　以前此寺に勤めて居た、辨長といふ和尚は居ませぬかえ。

源次　今湯へはひりに行きましたが、用なら爰へ來て待つて居なせえ。

お坊　そりやあ、お邪魔ながら御免なせえ。

源次　明寺で寒いから、爰へ來て當んなせえ。

お坊　いや、當れとは有難い。（ト手拭を取り、圍爐裏の下手へ住ひ、源次の顏を見て）や、手前は漁夫の源次ぢやあねえか。

源次　ほんにお前は吉三さんかえ、思ひがけねえ所で逢ふものだ。

お坊　見りやあ變つた姿になつたな。

源次　わつちも網打の七五郎が死靈の崇りで、親子共非業に死んだ所から、漁に出るのも怖くなり、丁度體も惡いから、御覽なせえ。（ト頭巾を取つて坊主天窓を見せ）くりくり坊主に剃りこくつて、此明寺の堂守さ。

お坊　七五郎にも世話になつたが、可愛さうな事をしたなあ。

源次　何にしろお前さんにも、久し振でお目に掛つたから、御酒の一つも上げてえが。

お坊　いや、己が方も和尚の土產に、樽でも提げて來るのだが、何をいふにも勝手が知れねえ。源公御苦勞ながら、二升ばかり買つてくんねえか。

源次　なに御苦勞のことがあるものか、酒と聞いちやあ直に行きやす。

お坊　ついでに何ぞ、是で肴を。（ト天鵞絨の丼から一分銀を出して遣る。）

源次　寒いから、軍鷄でも買つて來ませう。（ト源次立上り、下手から鼠鼻緒の草履下駄を出し、それぢやあ

わつちやあ行つて來やすが、お前爰に居なすつていゝかえ。

お坊　いや、此間から己が行方を搜して居るといふことだから、うつかり人にやあ逢はれねえ。

源次　逢つて惡くば歸る迄、須彌壇の下に隱れて居ねえ。

お坊　合點だ。

源次　どれ、一走り行つて來ようか。（ト源次花道へはひる。）

お坊　（邊りを見て、）以前は立派な寺ださうだが、久しい間無住になつて見る影もなく荒果てたが、然し狐狸やお尋ね者、晝間徘徊出來ねえものが、隱れて居るにやあ妙な所だ。（ト向うを見て、）や、向うへ誰か來る樣だ、うつかり爰にやあ居られねえわえ。どれ、須彌壇の下へ隱れて居ようか。

ト修彌壇の下へ隱れる。と、花道より、和尙吉三毬栗縹色の布子、鼠の帶、繻子はぎ合の半纏、草履下駄にて出で來る、後より捕手四人十手を持て窺ひ出で、此後より捕手頭半纏ぶつさき大小にて附添ひ出來り、

捕頭　それ、召捕れ。

四人　はツ、とつた。

ト四人十手にて和尙吉三へ打つて掛る、和尙身を躱して左右へ投退け、又二人掛るを立廻りながら本

舞臺へ來り、ちよつと立廻り、四人を投げのけ下に居て、

和尚 こりや、何となされまする。

捕頭 何とするとは知れた事、三人吉三と世に名高く、惡事を働く其の一人、以前は當寺の所化辨長、只今にては和尚吉三、脫れぬ舊惡。

四人 繩にかゝれ。（ト四人十手を振り上げ、取卷く。）

和尚 （思入あつて）只今にては善心に立返つたる和尚吉三、舊惡故に召捕ると仰しやりますれば是非がない。いざ、繩をお掛け下され。（ト和尚吉三後へ手を廻す。）

捕頭 はて適れなそちが覺悟、其心底を見る上は、繩目はかけぬ、許してくれる。

和尚 すりや、此儘に私を。

捕頭 いや、たゞは許さぬ其替り、そちが兄弟の義を結びし、安森源次兵衞が悴武家お構のお坊吉三、又八百屋久兵衞が娘お七と名乘るお孃吉三、種々の惡事を働く故からめ捕らんと此程より、草を分けて詮議致せど、一向に行方知れず、殊には又彼等が面體身共確と存ぜぬ故、汝に詮議を申付ける、搦め捕らば重疊なれど、手にあまらば討取つて、首になしても苦しうない。手柄次第で是迄の汝が舊惡許せし上、褒美の金子遣はす間、命に替へて詮議致せ。

和尙　すりや私が舊惡を、お許しあつて兩人の、詮議をなせと仰しやりますか。
捕頭　いかにも。
和尙　（思入あつて、）脊に腹は替へられぬ。假令いづくに隱るゝとも元が三人一つ穴、蛇の道はへびとやら、きつと尋ねて差出しませう。
捕頭　萬一以前のよしみを思ひ、彼等を助ける其時は、汝が罪は十倍だぞ。
和尙　そりやあお案じなされますな、身の舊惡が消えた上褒美の金になる事なれば、其處が元が惡黨だけ、何助けますものか。して御褒美は、幾ら下さります。
捕頭　先一人前が五兩宛だ。
和尙　なに、たつた五兩か。
捕頭　五兩宛では不足と申すか。
和尙　言はねえでも知れたことさ、兄弟分のよしみを捨て、人に惡く云れるのを承知で詮議を受合ふのは、褒美の金がほしい故、澤山はいらねえ百兩なら、詮議をしだして差上げませう。
捕頭　高いものだが仕方がねえ、望みの通り遣はす間摑め捕つてさし出せ。
和尙　金にさへなることなら、明日とも云はず今夜中に。

捕頭　然らばそちが吉左右を。
和尚　お待ちなされて下さりませ。
捕頭　承知致した。家來參れ。
捕人　はあゝ。

　　ト時の太鼓になり、捕手一同花道へはひる。和尚後を見送り、

和尚　お孃お坊二人とも、斯う詮議が嚴しくなつちやあ、もう、うか／＼と此江戸に、足を留めちやあ
　おかれねえ。
お坊　（出て來り）兄貴、歸りなすつたか。
和尚　や、こりやお坊にやあいつの間に。
お坊　さつき來たが人目がある故、須彌壇の下に隱れて居た。
和尚　よく尋ねて來てくれた。久しく手前に逢はねえから、逢ひたく思つて居た所だ。二三日泊つて行
　くがいゝ。
お坊　いや、さううか／＼としちやあ居られねえ。己も段々喰詰めて、この江戸にも居られねえから、
　旅へでも出かけようと、暇乞ながら尋ねて來たが、どうでいつかは捕られる體、さあ己に繩を掛

けてくれろ。
和尚　なに、己に繩を掛けろとは。
お坊　他人の手に掛つて行かうより、兄弟分の手前の手にかゝつて己も行きてえから、繩を掛けて送つてくれろ。
和尚　はあゝそんなら今の話を聞いてか、いや手前も分らねえものだぞ、一旦兄弟になつたからにやあ己が命を捨てればとて、手前達を出すものか、そんなしみッたれた根性の和尚吉三と思つて居るか。
お坊　さうだらうとは知つては居るが、どうで一度は行く體、とても命を捨てるなら、一旦兄と頼んだ故、手前の悪事を消して行く氣だ。
和尚　其志しは忝ないが、そんなそでねえ事はしねえ。褒美を百兩くれるなら捜し出さうと云つたのは、慾に迷つてする樣に氣をゆるさせて其內に、何處へなりとも逃す氣だ。とても草鞋を穿くならば近くに居ずと遠くへ行つて、手足を伸ばしてゆつくりと枕を高く寐るがいゝ、聞きやあ手前は武家育ち、安森源次兵衛が悴だといふが、それに違えはねえかえ。
お坊　いかにもおらあ元は眤近、親父は安森源次兵衛といつて堅藏な人であつたが、其頃刀の目利者で

將軍家から預かりし庚申丸といふ短刀を、盗まれたので言譯なく、切腹なして家は斷絶、浪人してからお袋の長の病氣に妹は、其身を賣つて苦界の勤め、高い藥の甲斐もなく遂に死なれて仕方なく、末子の弟森之助を若黨の親仁に預け、それから氣儘にぐれだして、してえ三昧する内にも其短刀を尋ね出し、再び家を興さうと、心に忘れはしねえけれど、いまだにありかゞ知れねえから、己が望みは叶ふめえよ。

和尚（扨はといふ思入あつて、）それぢやあ手前は昵近の、安森源次兵衞といふ人の悴であつたか。はて、知らねえ事とて。

お坊　むう、手前親父を知つて居るか。

和尚　おれが親父が。

お坊　え。

和尚　いやさ、親父が噂に聞いたばかり、其代物は知らねえが、さうして其短刀の恰好は。

お坊　相州物の無銘にして、しかも燒刄に三疋の猿の形の亂れ燒き、丁度長さは此位だ。

ト目貫の差添を出す。和尚取つて、

和尚　むゝ、それぢやあ長さは此位か。（ト見て、）や、吉の字菱の此目貫は、片々ねえがどうしたのだ。

お坊　そりやあ此間、大恩寺前で。

和尚　え。

お坊　犬に吠えられ追散らす、はづみに何處へか落したが、さし裏だから其儘置いた。

和尚　そいつあ惜しい事をしたな。

お坊　おゝ何だか話しが理に落ちた、早く一ぺえ呑みてえが、源次は何處迄行つた知らぬ。

和尚　ほんに源次は其以前、手前とは馴染ださうだが、何ぞ買ひに遣つたのか。

お坊　あんまり寒いから、酒を買ひに遣つた。

和尚　そいつは惡い者に買ひに遣つたな。口がもろいから喋べらにやあいゝが。何にしろ日が暮れてゆつくりと話さうから、まあそれ迄窮屈でも、今の所へ隱れて居ろ。

お坊　それぢやあ、一寐入やつて待たう。

和尚　寐るなら是を抱いて寐ろ。（ト打敷と辻番火鉢をやる。）

お坊　こいつあ有難い。

ト木魚入りの合方になり、お坊須彌壇の下へ隱れる、此鳴物にて花道より以前の源次二升樽、軍鷄葱を提げて出て來る。跡より前幕の十三郎、おとせ附添ひ出で來る。

源次　もし、お前方が尋ねなさる、吉祥院は向うだよ。
十三　是は有難うござります、して辨長殿は居られますかな。
源次　さつき湯へ行くといつて出られたが、もう大方歸られましたらう。
とせ　憚りながら妹が參りましたと、仰しやつて下さりませ。
源次　あい〳〵承知しました。（ト本舞臺へ來り、十三郎おとせは下手に、源次は圍爐裏の傍へ來り、）あい、今歸りましたよ。
和尚　お、源次坊、何を買つて來た。
源次　さつきお前の留守に、お坊吉三が。
和尚　あこれ。（ト言つては惡いといふ思入。）
源次　酒を買つて來てくれといふから、寒さ凌ぎに軍鷄と葱を買つて來た。
和尚　そいつあ妙だ、併したれがなくつちやあいかねえが、源次の事だから貰つて來たらうな。
源次　所がすつかり忘れて來た。
和尚　氣の利かねえ奴だな。
源次　おゝ忘れねえ內言つて置くが、今そこでお前の妹だといふのが、尋ねて來たから連れて來たよ。

和尚　なに、妹が來た。
とせ　兄さん、私でござんす。
和尚　おゝおとせかよく來た。もし、こつちへおはひりなさい。
十三　御免下さりませ。(ト下手へはひり住ふ。)
源次　どれ、忘れねえ内に軍鷄をこせへようか。
和尚　手前出來るか。
源次　出來なくツてさ、坊主軍鷄に二年居やした。(ト軍鷄と葱と酒を持つて奥へはひる。)
和尚　さあ妹、遠慮はねえ、爰へ來い。
とせ　兄さん御免なさいまし。さあ十三さん、お前も爰へ。(ト十三郎前へ出て、)
十三　これは初めてお目にかゝりますが、私は十三と申しまして。
和尚　其挨拶には及ばねえ、友達から聞きましたが、不思議な縁で妹と、(ト二人を見て思入。)たつた一人の妹故、可愛がつてやつておくんなせえ。
十三　いえもう、私とても便りのない者、おとせを縁に是からは、あなたを力にお頼み申します。
和尚　そりやお兄弟になるからは、云はねえでもお前方の、力にならねえでどうするものだ。

十三　それは有難うござりまする。
和尚　して、父さんにやあ變りはねえか。
とせ　え、それならお前知んなさらぬか。
和尚　なに、知らねえかとは。
十三　親父樣には此間、人手にかゝつて敢ない御最期。
和尚　え、そりやまあ何處で。
とせ　しかも先月三日の夜、大恩寺前でむごたらしう、人に殺されなさんしたわいな。
和尚　えゝ、そんなら父さんは死なれたか、やれ可愛さうに。（ト兩人を見て、）然しその方が仕合せだ、して殺した者は知れねえか。
とせ　ぬしは誰とも知れねども、死骸の傍にあつたのは。
十三　吉の字菱の片々の目貫、是が卽ち敵の手掛り。
ト十三郎紙入より、吉の字菱の目貫の片々を出す。和尚見て、
和尚　そんなら是が。（トびつくりする。）
十三　え。（トこなし。和尚は須彌壇へ思入あつて、）

和尚　こりやあい〻手掛りだ。（ト十三へ目貫を渡し、）斯うとは知らず爺さんが、金に困ると聞いた故、昔に返つて、いやさ、昔に返つて今では坊主、餓鬼の折から苦勞を掛けた、せめて不孝の恩返し、來世のくげんを助かる樣、菩提は己が弔はう。（トホロリとして、）それに付けても二人が身の上、また百兩の金の入譯。

十三　お尋ねなくとも身の上を、お話し申しに參つた二人。

とせ　金の入譯段々の、せつない話しの一通り。

十三　お聞きなされて、

兩人　下さりませ。

十三　元私は木屋文藏が召仕、先達御昵近の海老名軍藏樣といふ御武家樣へ、短刀を賣りました其代金百兩を請取り、歸る道すがら引かる〻袖に大事を忘れ、これなるおとせの小家の内、語らふ間もなく喧嘩の騷ぎ、あわて〻迯げる其はづみに、取落したる百兩金。

とせ　それを私が拾ひし故、大方尋ねてござんせうと其明る夜に金を持ち、小家へ行たれど廻り逢はず、すご／＼歸る兩國橋、道から連になつたのは年の頃が十七八で、丸の内に封文の五つ所紋の振袖着た、人柄向のよい娘御、油斷のならぬは盜人にて、金を取られたその上に、私や川に突落され、

死ぬ所をば緣でがな、此十三さんの親御、八百屋久兵衞樣に助けられ、危い命を拾ひました。

十三　又私はさうとも知らず、身を投げ死なうと致した所、傳吉樣に助けられ、娘が金を拾つた故我家へ來いと聞く嬉しさ、參つて見れば右の始末、それから金の出來る迄此方に居ろと御親切な、其お詞が緣となり、媒人なしの夫婦の約束。

とせ　それから金の才覺に朝から晩迄父さんは、所々方々へ行かしやんすれど、何をいふにも百兩故、容易な事で手に入らず苦勞くけんの甲斐もなく、大恩寺前でむごたらしう、人に殺され非業な御最期、かうして居ても其時の姿が目先へちらついて、悔しうてノ〜なりませぬわいな。

十三　かてゝ加へて私の主人木屋の文藏樣、ふとした事から丁字屋の一重といふ女郞に馴染み、引くに引かれぬ意地となり廓の金にはつまるのならひ、それから内は左り前段々續く不時の物入、終には家も仕舞はれて、今では今日に微なお暮し、どうぞして其金を、少しも早く上げたいと、心に思へど出來ぬは金。

とせ　父さんはない上からは、外に賴みにする人もないてばかり二月越し、四十九日も立つた故

十三　親父樣の敵をば、尋ねて討ちたうございますれど、御覽の通り弱い體、助太刀をして下さる樣

とせ　又二つには文里樣も、御難儀故に上げたいお金。

十三　御迷惑ではござりませうが、頼みに思ふはお前様。
とせ　どうぞ二人が力となり、
十三　敵の助太刀。
とせ　金の調達。
十三　偏にお頼み、
兩人　申しますな。

ト兩人思入あつて言ふ。此内和尚も思入あつて、

和尚　手前達が頼まずとも、己には親の敵なれば討たねえでどうするものだ、又たつた一人の妹につながる縁のこなたの事、金もおれが呑み込んだ、必ず〳〵案じさつしやるな。
十三　そんなら二人が頼みをば、
とせ　聞届けて下さんすとか。
兩人　えゝ、有難うござりまする。（ト兩人悦ぶ。和尚是を見て愁ひの思入あつて）
和尚　其悦びが、もう此世の。
兩人　え。

和尚　いやさ、これに付けて二人に話さにやならぬ事があるが、奥に今の坊主が居れば、是から裏の墓場へ行き、三つがなわで相談しよう。
十三　それは〳〵忝ない、嘸や草葉の蔭にて親父樣のお悦び。
とせ　少しも早う、裏の墓場へ。
和尚　後から行くから二人は先へ。
兩人　そんなら兄さん。
和尚　湯灌場で待つて居やれ。（ト十三おとせ下手へはひる。後を見送りて）あ、何にも知らず睦まじく、連立つて行く二人が身の上、これといふのも親の報い。あゝ、惡い事は出來ねえなあ。
源次　（奥より出來りて、）なに、出來ねえことがあるものか。
和尚　や。（トびつくりなす。）
源次　それ見なせえ、すつかり出來た。（ト軍鷄の皿を出し見せる。）
和尚　むゝ、こりやあよく出來た。
源次　其替り庖刀を、どんなに骨を折つて研いだか知れねえ。
和尚　むゝ、こいつあ切れさうだ。

和尚 (庖刀を取つて思入あつて)お丶さつぱりと忘れて居たが、御苦勞ながら源次坊、駒込迄行つて下ッしな。

源次 切れるどころか、人でも切れらあ。

和尚 暮れねえ内に行つて貰ひてえ。

源次 今ッからかえ。

源次 行けなら行きやすが、

和尚 道で喰つて行つてくれ。それ、萬の鍋が二枚に、酒が五合、殘りは使賃だ。(ト和尚一分出してやる。)

源次 おや、あの額かえ、こいつあ有難い。さうして用は、何だえ。

和尚 駒込の早桶屋へ行つて、早桶に經帷子一式揃へて、二人前買つて來て下せえ。(ト一分やる。)

源次 えゝ、何にしなさるのだ。

和尚 亡者の打扮で、仕事があるのだ。

源次 それぢや行つて來ますよ。

和尚 遲くなつても大事ねえよ。

源次 どうで一ぺいやつちやあ急にやあ行かれねえ。(ト下駄をはき、花道附際迄行く。)

和尙（庖刀の刃を見てうなづき、手拭へ卷き、）あゝ厭ながら、殺生を。（ト二人を殺さうといふ思入。）

源次　えっ（ト振返る。）

和尙　えゝ、まだ行かねえのか。

源次　急がなくつてもいゝといふぢやあねえか。

和尙　ぐづ〳〵言はずと早く行けよ。

源次　あい。何だかさつぱり分らねえ。（ト花道へはひる。）

和尙　源次が研いだ庖刀で、こりや一番ひ〆にやあならねえ。（ト禪の勤にて和尙下手へはひる。）

お坊（出來りて、）知らぬ事とて此間、大恩寺前で殺した親仁、只の者とは思はなんだが、和尙の親とは知らなんだ、其夜取つたる百兩も、妹が縁に文里殿へ見繼の爲の恩返し、又傳吉があの折にわッつ口說いつ貸せと言つたも、やつぱり同じ文里殿へ落した金を償ふ百兩、明し合つたら命をば捨てずに事の濟まうのに、言つて返らぬ互ひの因果、まだ其上に百兩も噂の惡い己が手で、出來たと聞いて文里殿も氣味を惡がり請取らず、重ッたらしに持つて來て、此入譯を聞くといふは、爰で死ねとの知らせなるか吉の字菱の目貫が證據に、和尙は己が殺したと推量したに違えねえ、知らぬ先は兎も角も、それと知つた上からは、未練に影は隱されねえ。どうで此身も喰詰めて、長

く生きちやあゐられぬ體。とても死ぬなら此金を、親父を殺した言譯に和尚へ渡して今爰で、死なにやあ義理が濟まぬわい。

トちつと思入。とこの時欄間の天人の彫物を取り、內よりお孃吉三亂れたる島田髷振袖裝にて半身出し

お孃　おい、吉三〳〵

お坊　はて誰か呼んだやうだが。（ト四邊へ思入。）

お孃　おい、吉三〳〵。

お坊　又呼ぶやうだが、何處か知らぬ。

お孃　おい爰だよ。

お坊　（お孃を見て、）や、其處にゐるのはお孃吉三か。

お孃　これ。（ト押へ四邊を窺ふ。）

お坊　そんなら手前も。

お孃　二三日跡から爰へ來て、此欄間に隱れて居た。

お坊　あゝ、手前にも逢ひたかつた。

お孃　己もお前に逢ひたかつたよ。

お坊　まあ何にしろ、この下へ。
お孃　おゝそこへ行かうか。（ト お孃傍に下つてゐる幡を便りに飛下り、傍へ來て）
お坊　手前に逢つたも何日だッけか。
お孃　明暮思ひ出すけれども、
お坊　互ひに忍ぶ身の上に、
お孃　何處に居るやら、
お坊　便りもしれず。
兩人　あゝなつかしかつたなあ。
お坊　欄間の内に居たからは、手前も今の樣子をば。
お孃　殘らず聞いてびつくりなし、生きて居られず一緒に死ぬ氣だ。
お坊　手前が死ぬとは、どういふ譯で。
お孃　譯といふのは外でもねえ、和尚吉三が妹の、金を百兩取つたのは、娘姿の此吉三、丸の内に封文の紋が證據に我業と、和尚は知つたに違えねえ、つくづく寐ながら考へれば己が金せえ取らねえけりやあ、落した十三が手に這入り、波風なしに納る所、盗んだばかり其金故、和尚が親父も非

業な最期、己が親父の久兵衛にも貧苦の中で苦勞をさせ、義理ある弟の十三が主人文里様へ御難儀掛けしも、元はといへば皆己故、濟まねえことゝ思ふ矢先、今もお前が言ふ通り、どうで清く死なれぬ體、爰で死ぬのはまだしも死花、三方四方へ言譯に、己もとも〴〵爰で死ぬ氣だ。

お坊　さう聞いて見ると尤もだが、併し手前は手をおろし殺したと言ふ譯でもなけりやあ、今死ぬにやあ及ばねえ、盗んだ金も廻り廻つて和尚へ己が返すから、手前は後に生存らへ、委しい譯を兄貴に話し今日を此身の命日に、兄弟分のよしみを思ひ、水の一杯も手向けてくれ。

お孃　そりやあ手前でもねえことだ、手を下して殺さねえとて、それから事が起つたら己が殺したも同じ事、人も死ぬ時死なねえけりやあ、餘計な恥をかゝにやあならねえ。生存らへて居ろといふ何故其口で道連に、一緒に死ねといつてくれねえ。

お坊　なるほど言やあそんなもの、さう心が据つたら、くどくは言はねえ。そんなら爰で、手前も己と一緒に死ね。

お孃　それでこそ兄弟のよしみ、留められるよりおらあ嬉しい。

お坊　あ、考へて見ると勿體ねえ、是でも生れた其時は惣領故に安森の家名を嗣がす大事の悴と、おたいこぐるみで育てられ、先祖の名だが源次兵衛は若い者に似合はぬから、四十を越えたら名を嗣

げと百迄も生す心。それが此身の惡事故、まだ二十五の曉も越さずに死ぬを冥土にて、嘸兩親が恨んでゐよう。

お孃　それに引替へおらあ父、九つの時にかどはかされ他人を親に旅役者、娘姿で歩いたを女と間違へ口說かれた所でふッと筒持せ、惡い事は馴れ易く、人の物は我物と積り〳〵し惡事の終り、實の親父も知つては居れど、名乘りあつたらまさかの時、苦勞を掛けねばならぬ故、逢はずに居たが此事を後で聞いたら歎くであらう。

お坊　只何事も皆約束、今更言ふはほんの愚痴、なぜ其了簡があるならば盗みをしたと人毎に、惡くこそ云へ褒めはしねえ。

お孃　ほんにそりやあ言ふ通り、是がお主か親の爲、死にでもしたら若いのに、不便なことゝ言はうけれど、非業に死ぬも其身の科。

お坊　これ迄多くの金銀を、取られた人の了簡では、逆磔にも掛けてえ心。

お孃　疊の上で人らしく、身の言譯に死んだと聞いたら、嘸や悔しく思はうが。

お坊　此世で苦患を受けぬ替り、來世は二人阿鼻地獄。

お孃　あれあの掛軸に記しある、その身の罪は淨玻璃の、鏡に寫つて明白に。

お坊　血を吐く思ひ血の池の、淵に望んでいだく石。
お孃　天秤責に掛けられて、業の秤に罪科極り。
お坊　畜生道の赤馬に、修羅餓鬼道を引廻され、
お孃　八寒地獄の氷より劍の山の錆となり、
お坊　果は見る目や嗅ぐ鼻と、臺に列んで晒す首、
お孃　今一時か半時の、
お坊　息ある内が極樂世界。
お孃　思へばはかない。
兩人　身の上ぢやなあ。(ト兩人宜しく思入。)
お坊　とは云へ二人が今爰で、此儘死なば何故か、
お孃　命を捨てる仔細が分らず、
お坊　幸ひ是なる白幡へ、
お孃　せめて一筆、
兩人　書殘さん。

ト時の鐘合方にて、お坊は白綸子の幡をとり、お孃は硯箱を出し墨をすりにかゝる。此見得にて宜しく道具廻る。

（吉祥院裏手の場）――本舞臺三間の間所々に石塔、上手にこはれ掛りし湯灌場、下手に同じく崩れかかりし車井戸、柳の立木、後ろ藪疊、日覆より、朧月をおろし、總て本堂の裏手墓場の體。爰に以前の和尚吉三出刄庖刀を振上げ、上下に十三、おとせ手を負ひ居る。此の見得にて道具留る　と、ちよつと立廻つて和尚肌を脱ぎ切つて掛る是にて石塔の廻りをまはり、車井戸を遣ひ立廻り宜しくあつて、トヾ兩人を切倒しきつとなり。

とせ　こりや兄さんには、氣が違つてか。

十三　何故あつて二人を、

とせ　お前は手に掛け、

兩人　殺すのぢや。

和尚　おゝ氣も違はぬが二人を、生けておかれぬ其譯を、苦しからうが苦痛を怺へて聞いてくれ。（ト和尚石塔へ腰を掛け、）さつき二人が物語り、委しく聞いて一々に胸に當りし覺えの證據、おとせが金を盜んだる丸の内に封文の五所紋の振袖で、娘と見せる盜人は、お孃吉三といふ若衆、又親父

を殺して其場所へ、吉の字菱の片々の目貫を落した主も同じ仲間のお坊吉三といふ浪人、此二人とは去年の春義を結んだる己が兄弟、而も使つて來た故に、欄間の内と須彌壇の下へ隱して泊めてある。定めて二人が物語、敵の二人も聞いた故、不便ながらも殺すのだ、茲が素人と譯が違つて、惡黨同士の附合に敵と覘ふ手前達を殺して置いて義理を立て、お孃お坊の二人の吉三討つて敵は己が取る。惡い兄貴を持つたばかり、よしねえ命を捨てるのも、親の爲だと諦めし、無理な事だが命を呉れ。これ手を合して拜むぞよ。（ト和尚宜しく思入にていふ。）

十三　さういふ事であるならば、何しに命を惜しみませう。思へば日外身を投げて、死ぬる命を助つたも傳吉樣のお蔭故。

とせ　私も其折死ぬ所、今日の今迄生きた故、十三さんと夫婦になり、あの世へ迄も手に手を取り、一緒に行くが此身の仕合せ。

和尚　いつそ其折死んだなら、今の歎きは見まいもの。

十三　それも定まる前世の宿業。

とせ　思へば因果な。

三人　身の上ぢやなあ。

ト これより地藏經の樣な獨吟になり、和尙墓手補茶碗を持つて來て水を汲み、兩人に水杯させる
兩人犬の思入にて這ひ寄り水を呑む。和尙是を見て情ないといふこなし、十三思入あつて、

十三　只此上のお願ひは、十の年より御恩になつた、文里樣へ失うた金を濟して下さりませ。
和尙　其事ならば案じるな、命に掛けて百兩は、久兵衞殿へ己が渡さう。
十三　それで思ひ置事なし、迷はず往生いたします。
和尙　妹も敵は己が取るから、心殘さず冥土へ行け。
とせ　なんの殘さう十三さんと、一緖に行けばあの世にて、
十三　一つ蓮に二世のかため。
和尙　其極樂へは行かれぬ二人。
兩人　なに、行かれぬとは。
和尙　親の因果が子に報い、あの世へ行けば畜生道。
兩人　えゝ。
和尙　いやさ、犬畜生に劣つたる和尙吉三も惡事を止め、今は佛のあの世へ引導。
十三　其功力にて極樂へ、

とせ　二人連立つ旅立ち、

和尚　行つて歸らぬ、此世の別れ。（ト和尚兩人の頭へ手を掛け、顏をぢつと見て愁ひの思入。）

十三　最早近づくこの身の知死期。

とせ　苦痛を助けて少しも早く。

和尚　云ふにや及ぶ。

ト獨吟になり、和尚庖刀を振上げ兩人を殺さうとする、兩人這ひ寄り苦しむ、和尚殺し兼る思入、トド兩人うんと倒れる、和尚庖刀を下へ打付けどうとなり涙を拭ふ。此見得寺鐘にて道具元へ戻る。

（本舞臺元の本堂の場）――爰に以前のお坊お孃書置を書き仕舞ひたる體、獨吟にて道具留る。

お坊　親父を殺した一部始終、斯うして置きやあ二人が身の上。

お孃　是で兄貴の心も晴れし。

お坊　思ひ掛けねえ義理立で。

お孃　疊の上で、

兩人　死なれるわえ。

お孃　これお坊、お前は武家の息子だから、腹の切り樣は知つて居ようの。

お坊　そりやあ話に聞いて居るから、まさか死にそこなふ様な事もしめえ。
お孃　おらあ切り様を知らねえから、つまらなく突込んで、ひく〳〵するもみつともねえ、お前己を先へ殺し、後で死んでくんねえか。
お坊　知らざあ己が殺して遣らう、何の造作もねえことだ。
お孃　それぢやあ、和尚の歸らぬ内、
お坊　ちつとも早く。（ト兩人身拵へして、）さあ覺悟はいゝか、
お孃　未練はねえよ。
お坊　どれ、一思ひに。
　　　トお坊脇差を拔き、お孃の胸づくしを取り、兩人顏見合せ、突かうとする。ばた〳〵になり、下手より和尚血のにじみたる白木綿の風呂敷に二つの首を包み、是を抱へ走り出て、お坊の手を留め、
和尚　やれ待つた、早まるな。
お坊　いゝや、死なにやあならぬ譯、
お孃　放して二人死なしてくれ。
和尚　いゝや放さぬ、殺しやあしねえ。

兩人　それだと言つて、

和尚　やい、待てと言つたら待たねえか。（トお坊の脇差を引たくり、）こりや、二人は最前の、話しを聞いて死ぬ覺悟か。

お坊　いかにも、生きて居られぬ譯は、

お嬢　書殘したる此書置。（ト白幡の書置を出す。和尚どれと取つて是を讀み、）

和尚　流石は二人、死なうとはよくぞ覺悟をしてくれたが、もう死ぬには及ばねえ。

兩人　なに、死ぬに及ばぬとは。

和尚　お嬢吉三が妹から、盜んだ金は三人が、出逢つた時に己への寸志、思ひがけねえ金故に、親父へ見繼に持つて行つたを、其時十三が主人方へ戻せば事の納るに、そでねえ金は受けねえと突戻したは親父があやまり、さすればお嬢に科はねえ。お坊吉三も己が親父を大恩寺前で殺したは則親の敵討。

お坊　何と。

和尚　仔細は十年以前の事、お坊が屋敷へ忍び入り、庚申丸を盜みしは、己が親父の傳吉だ。

お坊　むゝ、すりや庚申丸を盜みしは、おぬしが親であつたるか。

和尚　其越度にて安森の家は斷絕親御は切腹、取も直さず親父は敵、非業な最期も惡事の報い、二人に恨みは少しもねえ。
お坊　假令敵に當ればとて、己も現在殺せし敵。
お孃　金はお前に遣つたれど、一旦盜みし科ある此身。
お坊　殊には是迄種々樣々、つくせし惡事の重なりて、
お孃　最前來たる詮議の役人。
お坊　繩目の恥を受けるより、
お孃　身の言譯に、
兩人　死ぬのが本望。
和尚　其喰詰めた科をぬき、世間を廣く步ける樣、二人が身替り、それ。

ト十三、おとせの切首を出して見せる。

兩人　これは。
和尚　手に餘つたら首にしろと、長沼からの言附に、お孃お坊が身替り首。

ト風呂敷を明け、內より十三、おとせの切首を出す、兩人びつくりなし。

お坊　おゝ、こりや現在の妹に、
お孃　縁につながる義理ある弟。
お坊　清い體を穢れたる、なんで二人が身替りに、
お孃　首を切るとは無慈悲な事。
和尚　いゝや二人を殺したは、無慈悲にあらぬ兄が慈悲。
兩人　とは又、何故に。
和尚　此二人は畜生故。
兩人　やゝ、なんと。（ト兩人詰寄る、和尚愁ひの思入あつて、）
和尚　何を隠さう此二人は、親父が胤の双生兒にて藁の上より捨てたる十三、廻り〳〵て同胞が畜生道の交りも今も話した庚申丸、盗んだ其夜塀を越し迯出る所へ吠付く犬、聲立てさせじと殺したる犬の祟りと親父の懺悔、それと知つたら二人も如何なる因果と泣あかし、果は死ぬより外はねえ。其悲しさはどの様と、思ひ過しに親の爲命を吳れと僞つて、情なれども現在の我同胞を殺すまで、俺が心の苦しさを推量してくれ、これ二人。（ト和尚吉三涙を拭ひ、）せめての事に犬死をさせねえ爲に首を切り、詮議厳しい二人が身替り、幸ひ是なる自筆の書置、先非を悔んで死したりと持つ

て行つたら二人の詮議も、それなりけりに世間も晴れ、何處へなりとも行かれる體、向後己も惡事を止めれば、二人も生れ替つた積りで心を入替へ堅氣になり、いづくの浦に居ようとも、これら二人を不便なと思ひ出す日があつたなら、直に其日を命日に、水でも手向けて遣つてくりやれ。

ト和尚宜しく思入、兩人も愁ひの思入あつて、

お坊　初めて聞いた二人が身の上、兄の情に其事を、言はずに殺すは尤もながら、

お孃　現在敵の身替りに、二人をしては心が濟まぬ。

お坊　我々二人も、

お孃　冥土の道づれ。（ト兩人脇差を拔くを、和尚留めて。）

和尚　そんなら二人を此世から、畜生道の犬死さすか。

お坊　それだと云つて。

和尚　おれが心を無にするか。

お孃　さあそれは、

和尚　さあ、

兩人　さあ、

三人 さあ〳〵。

和尙 どうぞ二人が畜生の、苦痛を脫れる放生會、修羅の苦患を助けて下せえ。

お坊 是程迄に二人を、思つてくれる志し、

お孃 いかにも詞に從つて、一先此場を立退かん。

和尙 ちえゝ忝い。

お坊 (懷より百兩包を出し)忘れて居たが此百兩、落せし金の償ひに、死んだ二人へおれが香奠。

お孃 向後惡事は思ひ切る證據は入らぬ此脇差、是は兄貴へ置土產。

トお坊は百兩包、お孃は脇差を和尙の前へ出す。

和尙 すりや百兩に、此脇差。(ト和尙脇差を取つて拔きかけ見ろ、是へお坊目をつけ。)

お坊 はて心得ぬその一腰、似寄りし寸に勝れし金味。

和尙 やゝ燒刄にあり〳〵三疋猿。

お坊 それぞ正しく庚申丸、どうしてこれを。

お孃 日外百兩盜みし折、途中で手に入る其一腰。

和尙 思ひがけなく今爰へ、

お孃　落せし金に、
お坊　失ふ短刀。
和尚　二品揃ふ上からは、お孃は金を久兵衛殿へ、（トお孃へ金を出し、）お坊は刀を、實家へ早く。
　　　トお坊へ短刀を渡す。
兩人　そんなら是より。（トドン〳〵と、捕物の鳴物になる。）やゝ、あの物音は。
和尚　たしかに捕手、
お坊　爰へ來ぬうち、
お孃　道を違へて、
和尚　ちつとも早く。
兩人　合點だ。
　　トドン〳〵ばた〳〵にて、兩人花道へ走りはひる。和尚後を見送り、二つの首を下へ置き思入あつて
　奥へはひる。花道より以前の源次早桶を二つ重ね、繩にて背負ひ早桶の棒を手に持出て來り、ドン
　ドンを聞き、後前へ思入あつて直に舞臺へ來り、
源次　おい兄貴、今歸つたよ。おゝ、まツ暗でさつぱり分からねえ。おい兄貴々々。（ト舞臺をうろ〳〵

して以前の首に躓き、どうと倒れ、早桶をはふり出すと、中より經帷子に編笠など出る、源次探り〳〵首に手が障る故、是を取上げ撫で見てびつくりなし、）おや、こりやあ生首だ。

ト震へる、此内和尚身拵へをして出で來り、源次の後ろより首を引ッたくる。これにて源次びつくりなし、たぢ〳〵として又首へ手がさはる故、取上げ見て、

あゝ又あつた。（ト言ひながら、和尚を透し見て、）兄貴か。

和尚　えゝ。

ト源次の持つてゐる首を引たくり突く、源次突かれて早桶の中へぼんと這入る、是を木の頭。和尚は首を持ち向うを見込む。此の見得宜しく寺鐘のキザミにて、

ひやうし幕

七幕目大切

本郷火之見櫓の場

（淨瑠璃）　吉三〳〵の三人が　初櫓噂高島　（淸元連中、竹本連中）

太鼓に廻る

三つ巴

〔役名――和尙吉三、お坊吉三、お孃吉三、八百屋久兵衞、長沼六郞、釜屋武兵衞、蛇山長次、鷹の森熊藏、狸穴ノ金太、木戶番人時助等。〕

（本鄕火の見櫓の場）――本舞臺眞中に雪の積りし火の見櫓、此前に町木戶、觸書の板札を掛け、上手も雪の積りし屋根、戶の閉りたる町家、下の方材木の書割、打返して淨瑠璃臺になる仕組、上の方雪幕を張りし出語り臺。後ろ黑幕、舞臺兩花道とも雪布を敷き、總て本鄕二丁目火の見櫓雪降りの體。雪おろしさんげ〳〵の合方にて幕明く。と爰に浪人長治、熊藏、金太頰冠り一本差にて木戶の傍に立掛り居る。

長治　もし、お賴み申します〳〵。

ト上手より番太の打扮の時助、火の番と記せしぶら提灯を提げ出て來り、

時助　誰だ〳〵。

長治　はい、近所の者でござりますが、今女房が蟲氣付いて、取上げ婆あさんを呼びに參ります者でござります。どうぞお通しなされて下さりませ。

時助　そりやあ嘸困るだらうが、此木戶は通されぬから、早く取上爺いでも賴むがいゝ。

トいひながら上手へはひる。

長治　大きにお世話な事を言やあがる。

熊藏　どれ、今度は己が頼んで見よう。もし、お頼み申します〳〵。（ト木戸を叩くと、時助出て、）

時助　えゝうつたうしい、又來たか。

熊藏　もし、今私のお袋が、息を引取り掛つて居りますので、此先のお醫者樣へ參ります者、ちよつとお通しなされて下さいまし。

時助　そりやあ氣の毒なことだが、通す事はならねえから、醫者樣を呼びに行くより、お寺へ知らせに行くがいゝ。

熊藏　いゝいゝおつゥひやかしやあがる。

金太　何でこんなにやかましくなつたか。もし、どういふ譯で宵ッから木戸を打つて通さねえのだ。

時助　それ其處にお觸が出て居るが、三人吉三と名うての惡漢、行方を御詮議なされるに付き、和尙吉三といふ者に二人を捕へて出したなら、其身の科は許してやらうとお慈悲の詞に、殘りの二人お孃お坊の首を切り、長沼樣へ持つて來た所、釜屋武兵衞といふ者が其首を知つて居て、僞首だと訴人をしたので、和尙吉三は直に縛られ、跡の二人を召捕る爲に木戸を打つて往來留め、首尾よく三人召捕れば合圖に櫓の太鼓を打ち、木戸を明けて通すのだ、幾ら何と言はうとも太皷が鳴ら

ねば通されぬ。

ト三人是を聞きびつくりなし、

長治　それぢやあ三人吉三の內、和尚吉三がくらひ込んだか。

熊藏　お坊吉三が捕れると、三人が身にも拘はる事、うかくしちやあ居られねえ。

金太　何にしろ此木戶をどうかして通りてえものだ。(ト思入あつて、)もしちよつと一合貿ひますが、內證で通しちやあくれめえか。(ト木戶の間より百錢を出す。時助取つて、)

時助　通すことはならぬのだが、それぢやあこつそり一人宛、潛門から通らつしやい。

兩人　それは有難うござります。

ト長治木戶の潛門より內へはひる。前幕の長沼先に捕手二人出て、

長沼　怪しい者ども、それ召捕れ。

捕手　はツ。捕つた。(ト長治を十手で打ちすゑる、長治びつくりなして迯げようとするを繩を掛ける。)

長沼　えゝ忌々しい。(ト兩人是を見て、)

熊藏　こいつアたまらぬ。

金太　早く迯げろ。(ト迯げに掛る、下手より同じく捕手二人出て、)

捕手 捕つた。（ト立廻つて兩人を打ちすゑ、繩を掛ける。）

兩人 えゝ、喰ひ込んだか、

三人 口惜しい。

ト時の太鼓になり、長沼先に捕手三人を引立て、時助附いて上手へはひる。時の太鼓打上げ、上手の雪幕を切つて落すと、竹本連中居並び、下手材木の張物を打返すと、清元連中居並び、掛合ひの淨瑠璃になる。

清元〽春の夜に降る泡雪は輕くとも、罪科重き身の上に、吉三々々も世を忍び派手な姿も色さめて

竹本〽去年の椿の花もろく落ちて行方も白妙の、清〽四つの街や六つの花。

ト本釣鐘を打込み、花道よりお坊吉三頬冠り尻端折、大小米俵を冠り出で來り、是と一時に東の假花道よりお孃吉三頬冠り褄を端折、絲だてを着て出で來り、双方一時に花道へ留る。

お坊 思ひ出せば十年以前盜み取られし庚申丸、今宵計らず我手に入り、

お孃 義理ある弟が失ひし其代金の百兩も、廻り廻つて持ちながら、

お坊 晝は人目を忍ぶ身に、夜明けぬ内に屆けたく、

お孃 思ふ計りに行く事の、ならぬは二人が身替り首。

お坊　水のあはれや顯れて、擒となりし和尚吉三、
お孃　助けたいにもこの如く、
お坊　我々二人を捕へんと、
お孃　行く先々の木戸を打ち、
お坊　行くに行かれぬ、
兩人　今宵の仕儀。
竹〽後ろ見らるゝ落人に軒の氷柱も影淒く　清〽ぞつと白刄にあらねども襟につめたき春風は、
竹〽筑波ならひか、　清〽富士南、　竹〽吹雪厭うて、　清〽來りける。
ト雪下しを冠せ、兩人本舞臺へ來り、眞中の木戸を見て、
お坊　やうやく跡の木戸を越し、やれ嬉しやと思ひしに、
お孃　又もや爰に、閉りし木戸。
〽ふさがる胸の晴れやらで、星はなけれど雪明り、若しやと顏を見合せて、
ト兩人困る思入あつて木戸の間より互ひに透し見て、傍へ寄り、顏を見合せ、
お坊　や、其處へ來たはお孃吉三か。

お孃　さういふ聲は、お坊吉三。

お坊　あ、これ。(ト兩人四邊へ思入。)

清〽逢ひたかつたと木戸越しに、縋る手さへも震はれて、竹〽まだ春寒く溫め鳥、放れ片野に餘所目には、清〽色とみよりの片翅、(ト木戸越に手を取交し、雪にこゞえる思入。)

お坊　和尚吉三が異見により、惡事に染まぬ白絲の心の元へ繰返し、手に入る短刀渡せし上、此江戸を立退いて家名の穢れをすゝぐ了簡。

お孃　同じ心に百兩を親へ渡して是からは、男姿に立返り、生れ替つた積りにて善を盡して亡き人の、菩提を訪はんと思ひしに、

お坊　天道樣がお許しなさらず、行くに行かれぬ四鳥の四つ辻。

お孃　脫るゝだけはと思へども、今宵の內には捕へられ、

お坊　繩目の恥に死ぬのも約束。

お孃　今更いふも愚痴ながら、

清〽五つの年に勾引され、故鄕を放れ旅路にて憂年月を越路潟、苦勞信濃についいつか慾には迷ふ陸奧、竹〽立ちし浮名の白浪に跡を隱して此江戸で、同じ吉三に兄弟の結びし緣も薄氷、

清〽砕けてけふは散々に、落せし金の百兩は我手に入つて行く事の、ならぬは何の因果ぞや、(ト此内お孃こなしあつて)竹〽まだ其上に花の兄、木咲にまがふ室の梅、其身替りに捕へられ、清〽散行く覺悟と聞くからは、魁なして救ひし上死なば諸共死出三途、竹〽ほんに是迄親達へ孝行さへも白玉の身の詫すけは冥土でと、清〽心の根〆哀れにも、竹〽落る涙ぞ誠なる、(トお坊、お孃木戸を隔てゝ宜しくこなしあつて)竹〽暫し歎きに沈みしが、ふつと目に附く櫓の太鼓、

ト雪おろし、時の鐘、雪しきりに降る、兩人後の櫓を見て、

お坊　むゝ、あれに掛けたる觸書に、我々二人を捕へなば、合圖に櫓の太鼓を打ち、四方の木戸を開けとある、

お孃　若し又猥りに打つ者は、曲事なりと記しあれど、どうで脱れぬ上からは、罪に罪を重ぬるとも、

お坊　四方の木戸を開かせて、首尾よく二品渡せし上、

お孃　命を捨て和尚吉三を、

お坊　助けてやらねば義理が濟まぬ。

お孃　幸ひ是に梯子もあり。

お坊　打てば打たるゝ櫓の太鼓。

お孃　やはか打たいでおくべきか。

〽（清）見上げる空に吹下す、夜風に邪魔な振りの袖、帶に挾んで裾引上げ、〽（竹）登る後に窺ふ捕手、

ト　お孃櫓を見上げきつと思入、身拵へして梯子へかゝる。お坊は四邊を窺ひ居る。此時　上下より捕手四人出て、

捕手　やあ、櫓へ登る狼藉者、そこ一寸も、

四人　動くまいぞ。（ト取卷く。兩人きつとなり、）

お坊　むゝ、見咎められたら、もうこれ迄。

〽（竹）命一つを捨鐘と、胸に時うつ左右より、（ト兩人身拵へするを）

捕手　それ、打つてとれ。

トドン〳〵になり、捕手二人づゝ掛りてちよつと立廻り、上手へ捕手を追ひながらはひる。知らせに就き鳴物にて此道具をせり下げ、櫓の上になり、左右に屋根、雨落より霞を出し、向う打抜き町家灯入りの遠見、子持筋の提灯をあまた見せ、道具納まる。

〽（竹）降積る雪に山なす屋根の上、お坊吉三は邪魔させじと、さゝゆる捕手を追ひ散らす、吹雪烈しき働きに、（ト此内お坊下手の屋根へ、捕手四人を相手に立廻りながら出て來る。）

竹〽打つて掛るを身をかはし小腕取つて左右り、雪に悦ぶえのころ投げ、シャ小ざかしと前後よりむんづと組むを切拂ふ、刄風するどき屋根傳ひ、

トドン〳〵にてお坊捕手と立廻りあつて、屋根傳ひに後ろへ捕手を追つてはひる。

清〽裾もほら〳〵やう〳〵と、お孃吉三が竹梯子、登れば辷る水氷、足に覺えもなく雁の聲も亂れて後や前、（トお孃上手の屋根へ捕手四人と立廻りながら出て、ドン〳〵にて立廻りあつて、）

竹〽あしらひ兼ねし後よりお坊吉三が助太刀に、こなたはなんなく火の見の上、撥おつとつて打つ太鼓、（ト此内お坊後から出て捕手を投退ける。お孃櫓へ上り、太鼓を打つ。お坊捕手を追込み櫓の柱へ取附ききつと見得、揚幕にてドン〳〵になる。）

清〽音に開きし木戸よりも、和尚吉三は武兵衛を討ち、遺恨の胸を開かんと、馳來る姿見るよりも、

お坊　やあ、そこへ來たは、

兩人　和尚吉三か。

和尚　さういふ聲はお坊、お孃か。（ト下手の屋根へ和尚吉三出て來る。）

お坊　こなたの命を救はんと、

お孃　是なる櫓の太鼓を打ち、

和尙　すりや、此木戶の明いたるは、二人が情であつたるか。（ト此時上下へ捕手四人づゝ出て、）

捕手　それ、三人とも打つて取れ。

皆々　合點だ。

和尙　おゝ何をこしやくな。（ト上手の屋根のお坊、下手の屋根の和尙へ四人づゝ掛る。）

〽雨はふれ〳〵ふれ〳〵小雨、濡れて嬉しき屋根の上、追ひつ追はれつ戯れ狂ふ猫の戀路の仇枕、ヨイ〳〵ヨイ〳〵ヨイヤサ。（ト此内よろしく立廻りあつて、）

〽流石の捕手もかなはずして、逃るをやらじと追うて行く、トドン〳〵になり、和尙お坊上下の後ろへ捕手を追ひながら飛下りる。お孃　櫓より下を見て、

お孃　和尙吉三を救ひし上は、少しも早く此の百兩、手渡しゝたいものぢやなあ。

ト櫓の柱へ取附き下を見込む。是をきつかけに迫り上げの鳴物になり、知らせに附き此道具迫り上げ、元へ戾る。舞臺眞中へ和尙吉三と武兵衞切結ぶ形にて迫り上がりちよつと立廻つて、

和尙　おのれ武兵衞め、よくも訴人をしをつたな。

武兵　おゝ贋首だから訴人をした。

和尙　犬死させた返報は、己が命を貰つたぞ。
武兵　こしやくな事を。
〽切込む刄てうと受け、訴人の遺恨覺えよと、
ト和尙武兵衞立廻り、此內櫓よりお孃屋根へ下りる。捕手一人掛るを、立廻つて上手へ飛下りる。下手へお坊捕手一人と立廻り出て切倒す。三方宜しく、和尙武兵衞を切倒し、止めをさす。
〽難なく武兵衞を差殺す、折から來る八百屋久兵衞。
トばた〳〵になり、下手より八百屋久兵衞八百久とした弓張提灯を持出來り、お孃を見て、
久兵　や、そちや別れし悴なるか。
お孃　さういふは親父樣か。
久兵　あなたは安森樣の若旦那。此方は傳吉殿の息子どのか。（トお坊、和尙へ思入。）
お坊　扨はお孃が親父といふは、屋敷へ出入りの八百屋なるか。
和尙　思ひ掛けない三人に、繫がる緣の久兵衞どの。
お孃　弟が失ふ百兩が、手に入つたれば。（ト懷より前幕の金を出し渡す。）
お坊　又我家で紛失せし、此短刀を彌次兵衞へ。（ト懷の內に差したる短刀を出す。）

久兵 すりや噂に聞きし庚申丸、百兩の金が手に入りしか。ちえゝ忝ない。

和尙 又も捕手の來らぬ内、久兵衞殿には二品を。

久兵 おゝ、言ふにや及ぶ。これさへあれば安森のお家再興に、木屋のお内も再び立たん。心殘れど長居は恐れ。（ト金を懷へ入れ、短刀を腰へ差す。）

三人 少しも早く。

久兵 おゝ、合點。

竹〽おゝ合點と勇み立ち二品携へ久兵衞は、飛ぶが如くにかけて行く、

ト雪おろしばたくにて、久兵衞花道迄行き、提灯を吹消し逸散にはひる。

淸〽早是迄と三人は互ひに手に手取交し、

和尙 最早思ひおく事なし、

お坊 是迄盡せし惡事の言譯、

お孃 我と我手に、

三人 身の成敗。

淸〽櫓太鼓の三つ巴廻る因果と三人が、竹〽差し違うたる身の終り、淸〽惡事は消える雪解に

清〽浮名ばかりぞ、

ト三人名殘りを惜しむ思入あつて、和尙眞中に、お坊お孃下に居て、三つ巴になり、差違へる。捕手出て、

捕手　動くな。

三人　何を。

トきつとなる。此時樂屋頭取出て、

頭取　今日はこれぎり。

ト目出度く打出し

三人吉三（終り）

緑林白波の漢和有るが中にも魁首の雲霧仁左衛門が
手下のおさらば傳次逃足早きすばしりとは四五段上
手の六之助裏は有徳の息子株廣間の客で初會からお
そのと女房約束に心を鬼に品川を逃げた夜に八ッ山
下の人殺しも身に降りかゝる雨宿り身は野ざらしの
罪深き子故の闇に妙法の功力でも助からぬ七三郎お
吉が情死の孝道せめては忠と主恩の繩目にかゝる因
果小兵衛と因果小僧が輪廻はめぐる世話ものがたり

「因果小僧」は文久元年(萬延二年)五月、作者四十六歳の時、守田座に稿下された。本來守田座は狂言堂左交(三世櫻田治助)が立作者であつたのであるが、默阿彌と深く提携してゐた小團次の出場に伴つて、「スケ」として應援に行つたもので、此の時も「龍三升高根雲霧」の題下に、雲霧仁左衛門を主役とした白浪物の一部分へ、因果小僧六之助、野晒し小兵衛の件二幕を助筆したものである。獨立したものと見て差支へないので、二幕の世話物として取扱はれ、近時市村座の六世菊五郎等によつて復演された。序幕の八つ山下の情景、それから二幕目の瘧の病を中心としての舞臺效果等は、此の作の呼物になつてゐる。書卸しの時の役割は、市川小團次(因果物師野晒し小兵衛)、尾上菊次郎(お園)、市川市藏(因果小僧六之助)、市川九藏(おさらば傳次)、中村鶴藏(判人見てくれ權次)、市川小半次(お角)等であつた。挿繪にしたのは、稿下當時の繪草紙の繪である。語りは明治八年五月中村座に於て「誠ぐさ戀は偷兒」といふ名題で上場された時のものである。

大正十三年九月

編者誌す

龍三舛高根雲霧（因果小僧——二幕）

序　幕

品川福島屋の場

高輪八ッ山下の場

〔役名——因果物師野晒し小兵衛、因果小僧六之助、おさらば傳次、判人見てくれ權次、福島屋の若い者喜助、同太吉、近江屋手代九助。福島屋抱へかしくのお關、同お勘、同お菊、同お玉等。〕

（福島屋見世先の場）——本舞臺四間通し常足の二重、上手戸棚踏段、向う下手へ寄せて福島屋と記したる柿暖簾、此の上襖、間平戸の戸棚、左右折廻し板羽目、下の方一間千本格子、此の前に手桶を積み重ねたる用水桶、二階格子、煙出しの附きし庇の張物をおろし、總て品川宿福島屋見世先の體。二重真中に大きな角行燈、此の側に帳箱、喜助着流し若い者の装にて帳を調べゐる。側に見てくれ權次着流し半合羽判人のこしらへにて煙草を呑み居る、下手に太吉臺の物を片附け居る、此の見得賑かなる流行唄にて幕明く。

喜助　權次さん、好い掘出しもないかね。

權次　此の間一人醫者の娘で、五年百兩といふ好い玉があつたが、二十兩のことで吉原の中萬字へ買はれてしまつた。
太吉　萬字屋は豪氣に出來るさうだね。
權次　元地の假宅ぢやあ、あすこなざア當りさ。
喜助　久しく何處へも行かないが、川崎へでも行かうかね。
權次　廓へでも行きやあ知らねえが、宿ぢやあ何處へ行つても顏が知れて化けられねえ。

ト此の時奥よりお勘胴抜卷帶新造のこしらへにて出來り、

お勘　おや、權次さんおいでかえ。
權次　誰だと思つたらお勘さんか、お前も圖拔に大きいの。
お勘　お前の口に似てさ。
權次　こいつア一番お前の鼻だ。
お勘　何だとえ。
權次　凹んだといふことよ。
太吉　凹んで居るは有難い。

お勘　なに、有難いことがあるものかね。
喜助　ほんに自由にならねえもので、此の脊丈が鼻へ延びたらよからうに。
お勘　大きにお世話だ。權次さん、一服おくれよ。（卜權次の煙管を取り煙草を呑む、）
權次　お勘さん、豪氣に賑かだね。
お勘　あの騷ぎはお園さんの座敷さ、それ、お前も知つておいでの、本鄕の九助さんさ。
權次　あゝ、あの近江屋の手代の九助さんか、あの人もお園さんにやあ大層熱くなつて居るが、あれがほんの無駄を知らねえといふのだ。
喜助　然し都合がよさゝうだが、金でも貸して居るのかね。
權次　とんだ店卸しをするやうだが、元本鄕の元町で、近江屋喜左衞門といふ金貸の内の手代さ、所で聞きねえ、そこの家の女房が見世の若い者と情事をして、著類から天窓の物、金もよつほど掌握して其の若い者と逃げた所、向島で盜人に、持出した雜物から金まですつかり取られた上、二人とも殺された。
喜助　その話しは此の間、講釋師の琴鶴さんと伯圓さんが一座で來て、種になりさうだと話しなすつた。
權次　それから後が大變よ、家へも又盜人が入つて亭主を殺し、有金をそつくりと持つて行つたさ、だ

が、その騷動が仕合せで、九助さんなざあそれまでに、こかした金がそれッきり、今ぢやあ小金を貸すさうだ。

喜助　道理こそ見掛けより、金が廻ると思つたが。

太吉　性來はよかあないね。

權次　どうして／＼油斷はならねえ。

お勘　道理こそ、お園さんが厭がんなさる筈だね。

權次　これさ、今のことを言つちやあ惡いよ。（ト此の時奧にて、）

九助　いやだ／＼、歸るから留めるな／＼。

お榮　あれさ九助さん、お待ちといふに。

ト流行唄になり、奧より九助着流しにて手に羽織を持ち出來る、これをお榮胴拔卷帶女郎のこしらへ、お玉縞の着附・端折つて細帶新造にて留めながら出來る。

あれさ、お待ちと言つたら待つておくんなさいなね。

九助　こうお榮さん、お前にいふのぢやあねえけれど、斯う來る度に廻しだ／＼と、馬鹿にされてたまるものか、爰ばかり女郎屋ぢやあねえ、何處へ行つても憚りながら買手のある九助さんだ、あん

まりてうせへばうにして貰ふめえ。（トこれにて喜助、太吉立ちかゝり、）

喜助　こりやあ九助さん、どうなさいましたのでござります。

九助　どうもかうもいらねえ、歸るのだ、履物を出せ。

お榮　あれさ、お前さんをお歸し申す位なら、こんなにお留め申しやあしない。

お玉　まあ靜になさいまし、お園さんが氣を揉むから。

九助　何のあいつが氣を揉むものか、お前方がそんなことをいふと、尚おらあ癪に觸らあ。

喜助　生憎今夜は、やかましいお屋敷のお客樣で、それでお園さんが明けましたのでござりませう。

太吉　只今お座敷へあげますから、まあ御勘辨なさいまし。

九助　いやだ〳〵、歸ると言つたら歸らにやあならねえ。（ト行きにかゝるを、）

お榮　あれさ、お待ちなさいといふに。（トこれにて權次出て、）

權次　もし九助さん、何をそんなに腹をお立てなさるのだ。

九助　や、お前は判人の權次さんか。

權次　何だか譯は知らないが、お前さんにも似合はねえ、好い加減に野暮をおつしやいな。

九助　言はにやあならねえ、斯ういふ譯だ、お前も判方のことだ聞いてくんねえ。あの駿河の府中から

來た鞍替ものゝお園にやあ、是れまで物日はいふに及ばず移替から天王樣、軒提灯までおれが厄介、この間も大枚の五十兩といふ金を、貸して遣つた九助樣だ、その恩を忘れやあがつて野呂間が鰹を買やあしめえし、やれ〳〵さしがある〳〵と白癡にするから歸るといふのだ、何と無理ぢやァありますめえ。

權次　そりやあお前さんが尤もだが、斯うしてみんなも留めますから、今日の所は御不承なせえ。

お榮　さあ、見世先きで外聞が惡いから、座敷へおいでなさいよ。

お勘　おいでなさいと言つたら、おいでなさいよ。（トお勘手を取つて引張るを振拂ひ、）

九助　えゝ引張りやあがるな、歸るといつたら歸るのだ。（ト行きにかゝるを皆々留める、）

喜助　これさ、九助さん、

皆々　お待ちなせえ〳〵。

ト九助歸らうとするを皆々わや〳〵と、捨ぜりふにて留める、やはり流行唄にて、奥よりお園さら毛の結び髮へ抱柏の紋の附きし鼈甲の簪を立挿しにさし、緋の長襦袢好みの仕掛を羽織り上草履にて出來り、九助の後より手を執つて留め、

お園　もし九助さん、お前どうしたのだね。（ト九助お園を見て思入。）

九助　どうするものか歸るのだ。
お園　何だねお前歸るのなんのと、今夜のお客は分らないから、ちつとのうち待つてゝおくれと、あれ程わたしが言つて置くのに、お前にやあ分らないのかねえ。
九助　えゝ、聞きたくもねえ止してくれ〳〵。（ト無理に振放さうとするを、）
お園　お前も不斷からわたしの氣を、知らないぢやァあるまいし、あつちの客を早く寐かしてゆつくりお前と樂しまうと思つて居るに、それも知らず座敷でゞもあることか、見世へまで出て腹を立つちやあ、實にわたしやあ仕樣がないわね、斯うして恥をかゝせなさるからは、やつぱり只のお客の氣かえ、さういふ中ぢやあないぢやあないかね。
　　ト お園泣聲にて九助の體をゆすぶる、これにて九助ぐんにやりとなる。
權次　これさ九助さん、惚れて居りやこそお園さんが、あんなに氣を揉んで居なさらあ、罪になります、いゝ加減になせえ。
喜助　ほんに權次さん聞いておくんなせえ、九助さんがお出でなさると、お園さんが浮々と外の客人を粗末にしなさるから、お部屋ぢやあ小言をいふし、わたしでも賄でもどんなに心配をいたしませう。
權次　併し、さういふ日には逢ひてえものだが、金づくぢやあ出來ねえことだ。

ト お園思入あつて、

お園 賄のおしげどんが、いつでも異見をするけれど、ちつとはさういふ樂しみもなけりやあ、苦界の勤めが出來るものかね。（トお園權次と顏見合せちよつと舌を出す、九助これを見て、）

九助 やい、その舌は何だ。

お園 えゝ、あの是れは、歸らうといふお客をば、留める時の禁厭さ。

ト言ひながらお園九助の額へ顏をおッ附ける、九助ぞつとする思入。

お榮 さあ、九助さん後生だから機嫌を直して、早く座敷へお出でなさいよ。

お玉 あんまりお園さんに氣を揉ませると、

お勘 又あとは癪でございませうよ。

喜助 まあ兎も角もお座敷へ、お出でなすつて仲直りに、

太吉 お一つお上りなさりませ。

權次 わつちも久し振りでお附合ひ申しませう。さあお園さん、早くお連れ申しておくんなせえ。

お園 それだつても九助さんは、わたしの言ふことを聞いておくれでないものを、どうしたら好いのだか、じれつたいよ。（ト九助をゆすぶる。）

權次　さあ〳〵九助さん、夜が短い、わつちと一緒にお出でなせえ。（ト九助思入あつて、）

九助　歸るのだが仕方がねえ、みんながそんなに言ふのだから、座敷へ行つて酒でも呑まう。

皆々　それがようございます。

九助　然しお園に引かされて歸るのぢやあねえぜ、みんなへの義理で歸るのだよ。

お榮　何でもようございますから、

女皆々　早くお出でなさいましよ。

九助　それぢやあ行かうか。

お園　さあお出でよ。（ト手を取る。）

九助　えゝ、みつともねえわ。

ト流行唄になり、お園九助の手を取り引張りながら奥へはひる。跡より權次、お榮、お玉、お勘、附いてはひる。

喜助　いや、あの人もたふしもんだぜ、何時でもぐづ〳〵言やあがらあ、其の癖しみッたれだ。

太吉　全體廣間で遊ぶ種ぢやあねえのだ。

トやはり流行唄にて、花道より〇△の駕籠舁二人垂を下せし四手駕籠を舁き出來り、直に舞臺へ來て、

二重へ横附にする。

喜助　へい、いらつしやいまし。お客樣だよ。（ト奥にて、）

大勢　あいー。

此の内駕籠の垂れを上げる、内より因果小僧六之助剃立て着流し、粋な町人の息子のこしらへにて、羽織を手に持つて出る。

喜助　これはどなたかと存じましたら、六さんでございますか。

太吉　よくいらつしやいました。

六之　大分賑かだね。

喜助　へい、仕合せと賑かでございます。（ト〇駕籠よりばら緒の雪駄を出し、）

〇　はい、お履物。

太吉　あい〳〵。（ト草履札を附ける、此の時奥より以前のお榮、お玉、お勘出來り、）

お榮　おや六さん、よくお出でなさいましたね。

お玉　お前さんの聲だと思つたから、駈出して來ましたよ。

お勘　お園さんが、どんなに待つておいでだらう。

六之　こりやあれんなお揃ひで、今に遊びに來ておくれよ。
お榮　來るなといつても行きますよ、みんなが待人を掛けて、待つて居ましたものを。
六之　嘘にも有難いね。おい若い衆大きに、御苦勞だつた。（卜懷より二つ折の紙入を出し、額を一つ紙に捻つて、）歸りに一口やつて行きな。
〇　へい〳〵、是れは有難うござります。棒組、お禮を申しな。
△　旦那有難うござります。（卜喜助に向ひ、）
兩人　よろしう。（卜辭儀をなし下手へ來て、兩人駕籠を疊んで居る。）
六之　おい、御苦勞でも、ちよつと清水を呼びにやつておくんなせえ。
喜助　へい〳〵畏まりました。丁度お仙どんが參つて居ります。
六之　そりやあよかつた。
お勘　もし六さん、今日は何をお奢りか知らないが、わたしやあ甘味がよいよ。
六之　あゝ奢らうとも〳〵、何でも奢るが、わたしやちつと腹が來たから、先きへ結びたいものだ。
太吉　畏りました、清水へさう申して遣りませう。
お榮　ほんに六さんよくお出でなすつたね、今もお勘さんとお前さんの話しをして居た所でありますよ。

六之　悪く言つてかね。
お榮　いゝえ、誰かゞ好い人だと言つてさ。
六之　大分程があがつたね。
お榮　お前さんの仕込みでさ。
お勘　六さん早く座敷へお出でなさいよ。甘味が喰べたいからさ。
六之　よく喰ひたがる子だの。
お榮　喰物無用の札でも附けて遣りませうよ。
六之　それがいゝ。
喜助　さあ、いらつしやいまし。
六之　どれ、座敷へ行つて話しでも仕ようか。
　トやはり流行唄にて六之助先にお榮、お玉、お勘、喜助、太吉奥へはひる。○△殘り思入あつて、
○　こう棒組、今の客人を知つて居るか。
△　さうよ、お馴染ぢやあねえか、何處かで見た人だ。
○　裝かたちは違つて居るが、いつか向島ででツくはした。

△ 違えねえ、人殺しか。

○ あこれ、靜に言へ、似た人もあるものだ。

△ いや、錢放れがいゝから、さうかも知れねえ。

○ 掛り合ひにならねえうち、早く行かうぜ。

△ さうだ〳〵、引合ひは眞平だ。（と兩人駕籠を擔ぎ花道へ行く、此の以前より後へ權次出て居て、）

權次 おい、駕籠屋さん〳〵。

○ はい〳〵、何でござります。

權次 お前方は何處だ。

△ はい、あつちの方でござります。

權次 えゝ分らねえ、所はどこだ。

○ 山下でござります。

權次 聞きてえことがあるから、ちよつと來ねえ。

△ いえ、急ぎでござりますから、

兩人 眞平御免なさいまし。（ト駕籠を擔ぎ、逸散に花道へはひる。）

權次　え丶待ちやあがらねえか。（ト思入あつて、）今廊下でちらりと見た、粹なこしらへの息子株、聞きやあお園さんの客ださうだが、形恰好が似て居るゆゑ、若しやと思ふ出合頭、今の駕籠屋の話しぢやあ、慥にあれが、（ト權次思入あつて、）こいつあお部屋へ言はにやあならねえ。
ト思入、流行唄になり向うへ思入あつてうなづく、是にて道具廻る。

（下座敷廻部屋の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面茶壁、床の間、上の方一間の附屋體、此の内、向ふ廊下の書割り出はひりあり、下の方後へ下げて誂への階子出はひりあり、總て品川島崎屋下座敷廻し部屋の體。爰に屏風を建て蒲團の上に六之助住ひ、小楊枝を遣ひ居る、お園煙草を吸附けて居る、側に臺の物を取散らし、お玉蝶足の膳を片附け居る、此の模樣よろしく流行唄にて道具留る。

お園　六さん、今夜は生憎だつたから、明日はおいでな。
六之　降りでもすりやあ仕方がないが、お天氣ぢや歸らにやあならねえ。
お玉　きつと明日は降りますよ。
お園　どうぞ降らしたいものだね。
六之　降ると嫌ひな雷さまが鳴るぜ。

お園　なに、鳴つてもよいよ、溜池の黑田さまの天神さまの梅のお守りを、裏河岸の蔦頭から此の間貰つたから、もう鳴つても大丈夫さ。

六之　そりやあいゝものを貰つた、あの溜池の天神さまは、去年から參詣させるが、今ぢやあ大層人が出るよ。

お園　金毘羅さまに續いて、お流行りなさるさうだね。

六之　さうよ、此の頃の流行ものぢやあ、黑田の天神さまと福島屋のお園さんだ。

お園　えゝも、憎らしい。（ト六之助を抓る。）

六之　あいたゝゝゝ。

お園　誰に逢ひたいえ、おまんさんにかえ。

六之　おまんさんとは。

お園　表二階のさ。

六之　又詰らないことを。

お園　なに、詰らないことはありません、お前に大層惚れて居るよ。

お玉　ほんにおまんさんは、六さんの噂ばつかり言つて居なさいます。

六之　お前までがおんなじやうに。（ト お園六之助に寄り掛り）
お園　もし、浮氣をするときかないよ。
六之　誰がするものか。（ト肩へ手を掛けて引寄せる。）
お園　本當にかえ。
六之　知れたことよ。
お園　うまく言ふね。（ト背中を叩く、此の時下手階子の口より、太吉鰻の岡持を二つ持ち出來り）
太吉　へい、六さんあなたへ、お遣ひ物でございます。
お園　どこの客人だえ。
太吉　今夜初會でお出でなすつたお客でございますが、慥傳さんとおつしやいました。
六之　その客は、幾歲ぐらゐだえ。
太吉　二十七八でございます。
六之　むゝよしく、分つたく。
太吉　何れ後程お目にかゝりますと、おつしやつてゞございました。
六之　よろしく申してくんな。

太吉　畏りました。（ト下手へはひる。）

六之　こう、此の鰻は冷めないうち賄のおッかあに遣んな。

お園　あい、さうしませうよ。お玉さん、六さんからと言つて持つて行つてくんな。

お玉　あい〳〵。（トお玉岡持を提げ下手へはひる。）

お園　さあ六さん、引けようぢやないか。

六之　引けてもいゝかえ。（ト此の時上手屋體より九助下りて來り、）

九助　いや、惡からう。

六之　え、（ト思入、合方替つて、）

お園　誰かと思へば九助さん、何しにお出でだ。（ト九助よき所へ住ひ、）

九助　何しに來るものか、これお園、大概に馬鹿にしてくれ、冷てえ夜具に一人寐る位なら、えつちらおつちら品川まで金をなくしに來やあしねえ。然し斯ういふ色があつちやあ、おれが所へ來ねえも尤も、見りやあ見るほど好い男だ、此の太ッちようで張合つて氣を揉むのは駄目だから、最う色男はすつかり止めて、是れから慾張りと生業替へだ。さあ、此れまで手前に拵へて遣つた、諸道具は云ふに及ばずその抱柏の紋附の鼈甲の簪から、仕掛は元より長襦袢、褌までおれがもの

だ、細に勘定したならば六七十兩もあらうけれど、見切物で五十兩、たつた今貰ひたい。

ト お園思入あつて、

お園　これ九助さん、どうしたといふのだ、無理も大概にお言ひな、これが貸借りといふぢやあなし、お前わたしに呉れたのぢやないかえ。それを今更五十兩金にして返せとは、そりやァ無いもの喰はうといふもの、酸も甘いも知りながら、野暮なことをお言ひでないよ。

九助　いゝや、おらあ野暮だから金を取らにやあ承知しねえ、今言ふ通り大枚な金を掛けて物を遣るも、訝な氣休めを聞かうばッかり、それも色氣を捨てた日にやあ、是非とも金を取らにやあならねえ。

お園　いくら取らうと言ひなすつても、わたしやあ上げる金はないよ、仲の町を張る花魁ならちよつと簞笥の抽斗しに五十や百はありもせうが、お恥かしいが宿場の飯盛、一分のお金もありやあしない。よしんばあつても此の金は、二朱でもお前にあげられないよ。

ト 此の時下手から喜助出來り、

喜助　もし〱お園さん、どうしたものでござります、さう色氣なく言ひなすつちやあ、九助さんが腹を立つばかりだ。

お園　腹を立たうが背を立たうが、これから呼ぶといふ客ぢやあなし、喜助どん、打捨つて置きなよ。

喜助　それぢやアどうも濟みませぬ。（ト九助立ち掛り、）

九助　さういふて勝手を言はれちやあ、金が出來ざあ座敷の諸道具、さし物から仕掛は元より、褌まで、素ッ裸になつて今返せ。

お園　馬鹿らしい、お客の前で女郎が、裸になられるものかね。

九助　なれざあ代りの金を寄越すか。

お園　さあそれは。

九助　裸になるか。

お園　さあ、

九助　さあ、

皆々　さあ〳〵〳〵。

九助　どうでも片を附けてくりやれ。（トきつといふ、此の内六之助思入あつて、）

六之　もし、憚りながら其處のお方え、わたしも斯うして遊びに來て、女郎が裸にされるのを、まさか見ても居にくい譯、五十兩あげりやあいゝのかね。

九助　左樣さ、六七十兩掛つたものをぐつと負けて五十兩、安いものだ買ひなせえ、然し玩具の金ぢや

あねえよ、本當の金で五十兩だ。

六之　お園、あの人に返してしまひな。

お園　金をかえ。

六之　さうよ。（ト六之助懐より紙包みの五十兩を出し、お園の前へ投り、）これを遣つたらいゝだらう。

お園　六さんそれぢやどうも、わたしが。

六之　はて濟むも濟まぬもお前のこと、どうでしげ／＼來るわたし、なし崩しに遊ぶわさ。

お園　そんならお借り申しますよ。

六之　いや貸すんぢやあねえ、そりやァ遣るのだ。

お園　六さん、何にも言はないよ。（ト金を取つて戴き、）さあ九助さん、五十兩持つてお出で。

ト九助の前へ投り出す。

九助　おゝ、持つて行かねえでどうするものだ、六七十兩掛つたものを、五十兩で負けて賣るのだ、恩いゝひらなしに持つて行くわ。

六之　もし、玩具ぢやァないから、改めてお見よ。

九助　御念の入つたことだ。（ト九助金を取つて改める。）

お園　もし九助さん、斯ういふ器用なお客があるから、お前をわたしが厭がるのも、何と無理ぢやァあるまいがね。

九助　どうしたと。（ト立ち掛らうとするを喜助留めて、）

喜助　これさ九助さん、金を取つたら何にも言はず、早く二階へお出でなすつて、見立替へでもなさいましな。

九助　おゝ、今夜はこれから夜明しに、此の五十兩を撒散らして、大騷ぎに騷いでやらう。

喜助　それでは定めし渡りがしつかり、何より有難うござります。

お園　えゝ、取る物を取つたら、早くそつちへ行つておくれな、何處まで野暮だか分らないの。

六之　これさ、いゝわさ、打捨つて置きねえ、ちつと爰は放れにくからうよ。

九助　なに、放れにくいことがあるものか、居ろと言つても居やあしねえ。

お園　そんなら早く行つておくれよ。

九助　行かねえでどうするものだ。

ト金を懐へ入れ上手へ行きかける、此の時お園煙草を吸附け六之助の膝へ凭れかゝり「あい」と煙管を出す、ちよツと手を掛けて煙草を呑む、是れを九助見て腹の立つ思入にて、

えゝ、小駒の悪い。(ト立歸らうとするを喜助留めて、)
喜助　はて、外に女郎衆もござりまさあ。
九助　むゝ、覺えて居ろ。
ト流行唄にて九助先きに喜助附いて上手屋體へはひる、跡誂へ端唄の合方になり、お園思入あつて、
お園　六さん、わたしやお前にあの金を、出さして濟まないが、堪忍しておくんなさいよ。
六之　詰らないことを言ひねえな、お前が無心でも言やあしめえし、おれが粹狂に出した金、何濟まないことがあるものか、そんなくだらないことを言はずと、もう寐ようぢやないか。
お園　わたしや疾うから寐たいのだが、何だかおつウいらけたから。
六之　厭になつたと言ふのか。
お園　なに、お前ぢやァあるまいし。
六之　何時おれが厭だといつたえ。(トお園を引寄せる。)
お園　それぢやあいゝのかえ。
六之　よくなくつてどうするものだ。(トお園六之助の顏をちつと見て、)
お園　六さん。

六之　何だ。
お園　なぜこんなに、
六之　え。
お園　いゝ人たらうね。
　ト お園上着を羽織り顔を隠し恥しきこなしにて屏風を引廻す、やはり右の合方にて上手廊下より傳次好みの鬘肩流しにて出來り、四邊へ思入あつて屏風の側へ來て、
傳次　おい六さん、もう寐たのか。
六之　さういふ聲は、誰だ。
傳次　傳次だが、明けていゝかえ。
六之　明けてもいゝ、大よしだ。
傳次　御免なさい、（ト屏風を明ける、床の上に六之助居る。）お邪魔ぢやあなかつたかね。
六之　なに、そんなことがあるものか。（ト お園煙草を吸附けて、）
お園　もし、一服お上んなさい。（ト出す。傳次ちよッと戴いて呑む。）
六之　さつきは有難う、止しなさりやいゝに。

傳次　詰らねえ、禮を言つちやあ損が行きます。
六之　そりやあさうと、何ぞ用かえ。
傳次　ちつとお話し申したいことがあつて。
六之　何の用だか知らないが、まあ後で聞きませう。お園ちよつと燗をつけねえか。
お園　お肴が何にもないね、何ぞさう言つて遣らうぢやあないか。
傳次　いゑもうよしておくんなせえ、わたしあ此の頃願酒だから、お酒はお預けにしませう。
六之　それぢやあ甘味でお茶でもいれねえ。
お園　あい、さうしませうよ。（ト此の時階子より太吉下りて來り、）
太吉　もし、お園さん、ちよつとお部屋で逢ひたいから、お呼び申して來いとおつしやいました。
お園　何だえ、お部屋でかえ。今時分何だねえ。六さんじれツたいぢやないかね。
六之　何も遠くへ行くのぢやあなし、お部屋までなら造作もねえ、早く行つて來ねえな。
太吉　お手間の取れることぢやあございませんから、ちよつとお出でなすつて下さいまし。
お園　それぢやあちよつと行つて來ますよ。もしお前さん、遊んでお出でなさいましよ。
傳次　お前の歸つて來なさるまで、留守番をして上げませう。

お園　どうぞさうしておくんなさい、此の頃ぢやあ六さんも、性惡になつていけませんから。
傳次　わたしが番をすれば大丈夫さ。
太吉　お園さん、お早くお出でなさいまし。
お園　えゝも、忙しないぢやないか。

ト右の合方にてお園上草履を履き、ばた／＼と、太吉附いて二階へはひる、跡時の鐘合方替つて兩人四邊へ思入あつて、胡坐をかき、

六之　こう傳次や、どうしておれが爰に居るのを突當てゝ來たのだ。
傳次　さつき駕籠から出る所を、ちらりと見たゆゑ茶屋をこせえ、初會の客で上つたのだ。
六之　手前もさうして居る所は、おさらば傳次と名に高い盗人とは見えねえが、おれも斯うして居る所は、因果小僧とは見えめえな。
傳次　見えねえ所か、何處へ出しても、小道樂をする息子株だ。
六之　斯うして化けて遊んで居ると、人を馬鹿にして面白いよ。
傳次　然し、化けた／＼と思つてると、いつか尻尾が出て居るよ。
六之　なに、尻尾が出て居るとは。

傳次　おれが隣に居るとも知らず、あの本鄕の九助野郞が、若い衆に話すを聞きやあ、手前があいつに渡した金は加賀樣のお國紙で包み紙に印があつて、近江屋から出た金に違えねえから、それを持て訴へに行くといふことだ、うつかりしちやあ居られねえぜ。（ト六之助是を聞きぎつくり思入）

六之　むゝ、そんならさつき渡した金の包み紙に印があつて、それを證據に訴へるとか、はて氣の附かねえことをした。然し今夜行きもしめえ、どうなるものか仕方がねえ。

傳次　そこでおれが話しがあらあ、今夜引けにあの野郞が高輪通りを歸るといふから、跡を附けてあいつをばらし手前の難儀を救ふから、あの金はおれにくんねえ、そいつを直に路銀にして上方の方へふける積りだ。

六之　そりやあ丁度いゝ都合だ、實はおれも此の頃はちつと噂が惡いから奥州の方へ行く積りで、今夜來たのは餘所ながら、あの女に暇乞をして、のろいやうだが小遣ひにやらうと思つて持つて來た、五十兩の包み紙から盜んだ足が附くといふのも、こう傳次、天道樣は怖ろしいものだ。

傳次　成程惡いことは出來ねえが、然したゞ取る生業だから、止めろといつても止められねえ。

六之　やるだけやつた曉は、此の首一つで濟むことだ、考へて見りやあ安いものだ。

ト兩人よろしく思入、此の時上手障子の內にて、

お園　お仙さん。善さんによろしく。
六之　や、あの聲はお園だ。
傳次　素知らぬ振で。（ト兩人居住ひを直す、合方にて下手障子を開けお園出て來る。）
六之　お園もう用はいゝのか。
お園　詰らねえことで呼び附けられて、癪に障つてなりやあしない。（ト言ひながら六之助の側へ住ひ、）傳次さん、有難うございますよ。
傳次　しつかりお渡し申しますよ。夜の短いに浮々と、大きにお邪魔をいたしました。（ト言ひながら立ち上り、）お園さん、ちつと時代だが、たんとお樂しみよ。
お園　まあ、いゝぢやアありませんか。
傳次　又來ませうよ。
六之　そんなら傳次、
傳次　兄貴、
お園　え。（ト思入、傳次氣を替へ、）
傳次　六さん。

六之　お匆々よ。（ト流行唄にて傳次六之助うなづき合ひ、上手廊下へはひる。）
お園　もし六さん、今夜お前鬱いでおいでだが、何ぞ氣になることでもありやあしないかえ。
六之　何も氣になることもないが、ちつと差掛つた用があるから、今夜は早く歸らにやならぬ。
お園　そりやあまあいけないことだが、さうしてお前何日お出でだ。
六之　又四五日うちに來やせうよ。
お園　きつとお出でかえ。
六之　來なくつてどうするものか。（トこれにてお園思入あつて、）
お園　もし六さん、おつなことを聞くやうだが、あの奥州とやらまでは、どの位あるえ。
六之　さうさ、七八十里もあるだらう
お園　その七八十里ある所から、四五日のうちに來られるかえ。
六之　どうしたと。（トびつくりなし、きつと思入、時の鐘誂への合方になり、お園思入あつて、）
お園　さあ、わたしがお部屋へ呼ばれたのは、あの六さんといふ客人はどうも錢の遣ひやうが、常ならねえと思つた所、見てくれ權次が話しに聞けば、さつきこつちへ乘せて來た駕籠屋が見世で問はず語りに、向島の人殺しによく似た人と言つたとのこと、そこへ又喜助が來て、今夜近江屋の九助

さんに渡した金の上包みが、何處とやらの國紙で、これも盗んだ金とやら、どうも怪しい客人だから、何かのことに氣を附けろと、旦那さんからわたしへ言附け。もし六さん、お前そんな覺えがあるかえ。

トこれにて六之助南無三といふ思入あつて、

六之 そんなら亭主がその事を、（トもう仕方がないといふ思入にて、）勘附かれたら仕方がねえ、實はおらあ因果小僧、六之助といふ盗人だ。（トきつといふ。）

お園 あれさ、六さん、靜かにおしな、そりやわたしやあ知つて居るよ。

六之 むゝ、そんなら疾うから、おれの身性を。

お園 知らなくつてどうするものかね。（ト合方きつぱりとなり、惡婆の思入になり、）あばずれたことをいふやうだが、初めてお前が上つた時、何處の息子か小粹なと、初手は浮氣の初會惚れ、何時來ておくれと約束して裏馴染から三囘目、そこでふつと氣が附いたが、なまじ堅氣の生業より、榮耀榮華の仕飽きをして樂に暮すが當世に、人の怖がる泥坊と知つて惚れた上からは、お前ゆゑなら命も捨てる氣、今奥州へ行きなさりやあ、何時逢はれるか知れねえ譯、跡に殘つてくよくよと夢見の惡いその度に、若しや切られはしなさらねえかと、案じるだけが餘計な仕事、苦勞するな

ち共々に何處が何處までわたしやする氣、どうぞ一緒に連れて行つておくれな。

トよろしく思入にて言ふ。

六之　いや手前もたゞの鼠ぢやあ初手からねえと思つたが、盜人をば合點で色になるとはいゝ肚胸、おれから見るとよつぽど上手だ。

お園　なあにわたしは意氣地はねえが、ほんの親仁の附燒刄、音羽屋といふ家名からこんなせりふも言ふものゝ、訛りの拔けねえその口で、よせばよいにと皆樣が、嘸おつしやつてゞあらうと思ふと、實にわつちやあ恥かしいよ。

六之　そりやあおれも同じことだが、出來ねえながらに御當地の、眞似がしたさに故鄕を捨て、六年此方六之助も水道育ちの今ぢやあ江戸ッ子、然し肚胸でやる仕事さ。

お園　ほんにわたしも是れまでは、駿河の府中で丁字屋の、かしくといつて其の土地ぢやあ、花魁といはれたが、身性が惡さに借金で、あそこや爰へ住替へも箱根を越して品川で、かしくのお園と肩名のある、莫連者もこれで年明け、命を掛けて添ふ氣だから、早く連れて逃げておくれ。

六之　斯うなるからは何處が何處まで、おれが街へて歩かうが、まだ逃げるにやあ時刻が早い、もう一寐入りやつて行かう。

お園　然し斯うして居るうちに、若しやお前の身の上を、
六之　詮議に來たら、それはそれまで、
お園　成程先きを苦勞しちやあ、
六之　片時でも寐られねえ。
お園　それぢやあこれから、もう一寐入り、
六之　八ツを打つたら出掛けよう。
お園　ほんに、どうした緣でがな、
六之　斯うして一つになるといふなあ、
お園　これが世に言ふ譬の通り、
六之　鬼の女房に、
お園　鬼神だねえ。

ト時の鐘、合方にて屛風を立廻す、流行唄になり、上手の障子より以前の九助喜助出來り、

喜助　それぢやあ九助さん、明後日いらつしやいますか。
九助　明後日はきつと來るよ。

喜助　氣休めぢやあございませんか。

九助　なに、氣休めを云ふものだ。

喜助　あんまりさうでもありますまい。（ト言ひながら花道へ行き掛け、振返つて、）

九助　二人ともに待つて居ろ、夜が明けると吠え面だぞ。

喜助　もう譯が分つたら、いゝぢやあございませんか。

九助　それだといつて

喜助　はてまあ、お出でなさいまし。

トやはり流行唄にて、九助階子の口へはひる、時の鐘凄き合方にて、下手より以前の傳次窺ひながら出て、九助の跡を附ける思入にて、階子の口へはひる、これにて屏風を開け、六之助思入あつて、

六之　とろ／＼と仕ようと思つたら、廊下を歩かれるので寐られねえ。

お園　それに、是れでも氣になるからさ。

六之　もうかれこれ八つだらう、そろ／＼出船の支度をしようか。

お園　何處からお逃げか知らないが、裏梯子から庭口へ。

六之　そんなことは案じるな、盗人に拔目はねえ。

お園　お前支度はいゝのかえ。

六之　おらあいゝが、手前其の裝か。

お園　爰を出りやあどうでもなるわね。

六之　なりやあなるが、金でもあるか。

お園　馬鹿をお言ひな、何があるものか。

六之　ちつともねえか。

お園　宵越しの錢は、わつちやあ嫌ひさ。

六之　成程手前も、

お園　え、

六之　持餘しものだよ。

ト六之助帶を締め、尻を端折り、お園身拵へをする、此の模樣よろしく、時の鐘合方にて道具廻る。

（八つ山下の場）――本舞臺向ふ黒幕、通しの波手摺、下手に葭簀張りの出茶屋、疊みたる道具、床几二脚程重ねあり、前側葭簀立廻しあり、此の側に永代兩國乘合船の立札、側に船板の崩れ、櫂の

折れなど積みあり、上の方松の立木、同じく釣枝、總て八つ山下、夜の模樣、波の音にて道具留る。
波の音、佃ばた〳〵になり、上手より以前の九助逃げて出て來るを、跡より傳次追つかけ出で、舞臺にてちよつと立廻つて、傳次九助を引提へきつとなつて、

九助　こりやあうぬは、盜人だな。
傳次　知れたことだ、とんだ定九郎のせりふだが、われが持つてる五十兩、福島屋から附けて來たのだ。
九助　そんなら是れを。(トびつくりなし懷を押へて思入。)
傳次　さあ、きり〳〵と出しやあがれ。
九助　むゝ。さう知られたら隱しやあしねえ、如何にも爰に持つて居るが、うぬ等がやうな小二才に、是れを取られて詰るものか。
傳次　いや、形は小さな野郎だが、金ばかりぢやねえうぬが命も、取らにやあこつちの都合が惡い。
九助　洒落ツくせいことを言やあがるな、取れるものなら取つて見ろ。
傳次　取らねえでどうするものだ。
九助　何を。

ト波の音、佃になり、傳次船板の折にて打つて掛る、九助も櫂の折れにて受ける、是れより兩人立廻

りよろしくあつて、トヾ九助の向臑をなぐる、是れにてひよろ〳〵として、

人殺しだ〳〵。（ト逃げようとするを、傳次追打ちになぐる、九助逃げながら、）あッ苦しい〳〵。

トのたうち廻ろ、傳次手拭を持つて、

傳次　どれ、苦痛を助けてやらうか。

ト九助を手拭にて締殺す、九助よろしく苦しみ落入る、傳次鼻へ手を當て、よしといふ思入にて、九助の懐より以前の五十兩を出し旨いといふ思入。此の時風の音になり、出茶屋の葭簀ばら〳〵と仕掛にて下手へ倒れる、内に野晒小兵衛、白髪鬘やつし裝、半合羽脚絆麻裏草履、好みのこしらへにて床几へ腰を掛け、煙管を銜へ摺火打にて火を打ち居る、傳次これを見て、ぎつくり思入あつて上手へ行かうとするを、

小兵　おい兄イ、ちよッと待らな。

傳次　呼んだのは、わつちかえ。

小兵　おゝ、お前よ。

傳次　何ぞ用かえ。

小兵　手拭が殘つてゐらア。

傳次　え。(トびつくり思入、時の鐘誂への合方、かすめて波の音になり。)
小兵　證據になるから持つて行きねえ。(ト死骸の首の手拭に思入。)
傳次　むゝ、それぢやァこんたはさつきから。
小兵　お前の仕事を見て居たのよ。(ト知らせに附き、日覆より月出で、兩人顏を見合せ、)
傳次　や、こなたは六が父さん。
小兵　誰かと思へば、おさらば傳次か。
傳次　やれ〳〵是れで落着いた、呼び返された其の時ばらさうかと思つたが、あんまり肚胸が好過ぎるから、實はわつちも恐れて居たのさ。
小兵　おれも葭簀の蔭に居て、いゝ働きをする奴と思つて居たが其の筈だ、雲霧仁左衞門が手下の內、五本の指へ折らるゝこなた。
傳次　何だな父さんそんなことを言つて、腋の下から汗が出らあ。そりやあさうと今時分、お前一人で何處へ行つたのだ。
小兵　大森在の百姓家に鷄娘があるといふから、相談旁々池上へお參り申した歸り掛け、宿へ泊りやあよかつたを年寄の氣忙しなく、八つまでにやあ歸られようと、ぶら〳〵出掛けて來た所、今し方

のばら／＼降りに傘を買ふにも夜半だし、仕方なしに爰へ這入つて雨宿りをして居たのだが、さうして手前はどこへ行くのだ。

傳次　何處といふ當てもねえが、詮議が嚴しく江戸にも居られず、上方へでも行かうかと思ふ所へ此の野郎が、五十兩といふ金を持つて居たのが運の盡、殺して取つたも此の金で上方筋へ行く積りさ。

小兵　そんなら五十兩取つたのか。南無妙法蓮華經々々。

傳次　あゝそんな氣ぢやアなかつたが、父さんお前も年を取つて、後生心になつたのか。

小兵　なにおれが後生は願ふものか、堅氣な者ぢやアあるめえし、鰹が來りやあ朝飯から刺身で飯を喰つて來たから、今更味噌汁に香物で、ひね臭へ飯が喰はれるものか、もうよく生きて五年か七年、野晒小兵衛と異名を取つて、因果物師をするからにやあ、どうで死にやあ地獄の厄介だ。

傳次　それに又今のやうに、何で題目を唱へたのだ。

小兵　おれが後生は願はねえが、案じられるは野郎が身の上、どうか凶事のねえやうと、勘當しても爰が親、彼奴は何とも思やあしめえが、おれが方ぢやあ一日でも胸に忘れたことはねえ、聞きやあお前の父さんは堅氣な人だといふことだが、惡い耳を聞かせなさんな。

傳次　お前と違つて惡堅いから、つひに是れまで親父の所へ、逢ひに行つたことはねえ。

小兵　時折便りをするがいゝ。いや、便りと言やあおらが野郎も、久しく噂を聞かねえが、どこに此の頃は燻つて居るな。
傳次　兄貴はさつき、品川に、
小兵　え、（ト思入、傳次言つては惡いと思入にて、）
傳次　いや、信濃の方へ行つたさうだ。
小兵　江戸に居にやあ先づ安堵だ、どうで彼奴も又お前も、人の物をたゞ取るゆゑ生涯盗みは止められめえが、婆婆に長く居る氣なら惡いことをしねえがいゝ。盗みをしながら惡いことをするなといふはをかしいが、その内にも次第があらあ。近くは次郎がいゝ手本、先づ第一が强婬だ、こいつが一番罪になる。又なくつてならねえ金などは取つても返しに行くがいゝ、有り餘る所の金なら向うも取られて疵にならにやあ、こつちも取つて罪にならねえ、ちよつとしても今のやうに、手拭でも忘れるか、又は提灯傘のしるしが證據に持主へ、難儀の掛ることがある、そいつがみんな身に報はあ、爰が盗人の心學だから長くしようと思ふなら、非道な惡事はしねえがいゝ。
傳次　成程こりやあ尤もだ、六にも逢つたら言つて遣らうよ。
小兵　詰らねえことで足を留めた、ちつとも早く行くがいゝが、是れからどつちへ掛つて行くのだ。

傳次　厚木に知つた者があるから、そこまで今夜乘ッ附けて、笠や脚絆の支度をして、それからぶらく甲州から東海道へ出る積りだ。

小兵　それぢやあ別れに一杯と、

傳次　言つた處が夜る夜半、

小兵　縁があつたら、又その內、

傳次　ゆつくり江戸で呑みやせう。（ト上手へ行きかけるを、）

小兵　おい、傳次待ちな。

傳次　また何ぞ落したかね。

小兵　いや、これから旅へ立つのだから。（ト煙草入の摺火打を出し、）ちよッと祝ひに淸めてやらう。

ト傳次に切火を打ち掛けてやる。

傳次　そんなら、父さん。

小兵　傳次。

傳次　おさらばだよ。

ト時の鐘、波の音にて傳次頰冠りをしながら上手へはひる、これにて月隱れる。

小兵　いや、あの傳次を見るにつけ、野郎ちやつぱり何處ぞの果で、こんな仕事をして居るだらう、久しく噂を聞かねえが、どうで始終は切られる體、どうぞおれの目に掛らねえ所へ行つて死んでくれ、南無妙法蓮華經々々。（ト雨車になり、）あゝ又今の間にすつかり曇り、ばら／＼降りに降つて來た、爰に浮々まごついて喰えこんぢやあ詰らねえ。どれ大木戸までやツつけようか。

ト身拵へする、浪の音、雨車、誂への合方ばた／＼にて、上手より以前の六之助頰冠り尻端折り、お園頰冠り裙を端折り、男の羽織を引掛け、手を引合つて出て來り、小兵衛に行當り、双方びつくりなし三方へ別れ、ちよつと探り合ひの立廻り、よき程に後へ以前の權次尻端折にて窺ひ出で、

權次　うぬ、見附けたぞ。

ト六之助に組付くを振拂ふ、權次たぢ／＼となり小兵衛へ行當る、小兵衛その儘突廻す、六之助はお園を搜す心にて小兵衛の手を取り引張る、小兵衛びつくりして振拂ふ、爰へお園來るを、小兵衛天窓な探つて、女ゆゑ突放す、此の時ばつたりと音して、お園紋附の簪を落す、此の内六之助は權次と立廻りあつて、權次小兵衛煙草入を捉へて引張る、それを爭ふ機に取り落す、小兵衛これを搜す思入にて簪を拾ふ、此の内六之助はお園を連れ、花道へ行く、權次は煙草入を拾ひ、小兵衛諸共透し見て

小兵　こりや簪。

權次　煙草入。

六之　や。

トこの聲にて權次立ちかゝるを小兵衞留める、お園六之助入替り跡を見返る、双方見合つて木の頭、波の音かすめて佃になり、六之助お園の手を取り、逸散に花道へはひる、權次は煙草入を衝へ尻を端折る、小兵衞は簪を持つたまゝ跡を見送る、此の模様よろしく右の鳴物にて、

ひやうし　幕

大切

因果物師内の場

〔役名――因果物師野晒し小兵衞、因果小僧六之助、判人見てくれ權次、家主閻魔の正兵衞、六之助弟七之助、見世物師岩戸安、同じやがたらお角、同六部兼、小道具屋嘉兵衞。福島屋抱へかしくのお園、洗濯屋娘お吉、鷄娘おけつこ等。〕

（見世物師内の場）――本舞臺一面の平舞臺見世物職の暖簾口、上手一間押入戸棚、下手鼠壁番附の張交ぜ、よき所に神棚、熊手、緣起の百兩包みなど飾りあり、上の方一間の中二階、丸太梯子、例の所毀れる仕掛けの門口、下の方朝鮮矢來、向う惣雪隱の張物、總て本所回向院裏手見世物師内の體　じ

やがたらお角島田鬘首ばかり白き引張者の女のこしらへ、岩戸安五郎流し三尺帯木戸番のこしらへにて、兩人立ちかゝり居る、是れを六部兼鼠の着附六部のこしらへにて、おけつこ鳥冠のある島田鬘順禮装にて此の兩人を留めて居る、さんげ／＼の合方へ、かすめて屋體囃子を冠せて幕明く。

兼　これさ、二人とも靜にしねえか、親分も此の間から瘧をふるつて寐て居るに。

鷄娘　とツけツこ／＼、とツけツこう。

兼　えゝ、又手前が同じやうに、猶喧しい、默つて居ろ。

安　こう兼や、おれが無理が聞いてくれ、さつき勤番者のお侍が此のお角の顏を見て、がうせい氣に入つた所から小白を一つ取りやあがつたから、此間の晩おれが貸した二百の錢を返せといふのだ。

兼　成程こりやあ尤もだ、お角もそんな浮いた錢なら、二百返してやりやあいゝに。

お角　そりやあ一朱貰はうが二朱貰はうが、小屋の内はわつちが餘祿さ、小遣ひに困るからくれと云ふなら遣りもせうが、返さねえでもいゝ借りだから、返せといつちやあ遣らねえよ。

安　あゝいふ生利なことを言やあがる、返さねえでもいゝ借りが、何處の國にあるものだ。

兼　何でまた、返さねえでもいゝといふのだ。

お角　わつちの恥だから言ひたくもねえが、此の野郎が鹽増に困つて、首も廻らねえ御難の時に、血の

安　出るやうなひどい錢を貸してやつたをいゝことにして、それからおつウ自惚れやあがつて、亭主氣取りでゐやあがるくせに、借りを返せもねえものだ。べらぼうめ亭主氣取りだらうが何だらうが、錢金は他人ッこだ。

お角　他人ッこなら、なぜ返さねえのだ。

安　えゝ、人を馬鹿にしやあがるな。（ト立ちかゝるを鷄娘留めて、）

鷄娘　とツけツこう〱。

兼　まあお互ひに靜にしろ、さうお互ひに角目だつと、血で血を洗つてあらが出るから、まあいゝやこゝは一番日延べをしたがいゝ。

安　いゝや、返せといつたら、何でも今取らにやあならねえ。

お角　えゝ面白くも無え、取れるものなら取つて見な。

兼　まあ、いゝから、おれに任せろといふに。

鷄娘　えゝ、とツけツこ〱とツけツこう。（ト鷄娘笑ふ思入。）

安　鷄娘がをかしいか、笑やあがる。

トやはり右の鳴物にて、奥より小兵衛着流し三尺帶、水引で拵へし小搔卷を引ッ掛け、出來る。

小兵　おゝ、みんな歸つたか。
お角　親分、今日はどうだね。
小兵　晝の内は大きにいゝが、日が暮れるとふるふので、燈火の附くのが思ひだよ。
安　此のごろぢやロぶるひださうだが、もう落してもいゝぢやあねえかね。
小兵　早く落すとぶり返すから、今まで我慢をして居たが、もう落してしまはうよ。
粂　もし、七さんが見えねえが、何處ぞへ行きなすつたかえ。
小兵　村松町まで使ひにやつたが、何處で遊んで居やあがるか。
安　大方隣のお吉さんのとこだらう。
お角　ほんに、七さんはお吉さんと。
小兵　え、（ト聞き咎める、お角氣を替へ）
お角　まことに仲がいゝね。
粂　六さんと違つて、あの子はおとなしいよ。
小兵　ありやあお袋に似たのだが、氣のいゝ代りに役に立たねえ。ときに今日はどうだつた。
安　さつきばら〳〵と來た水ばれで、三ベいに四へいさ。

小兵　そんな事ぢやあ水も呑めねえ。今日の割はいゝから、手前達の方へ持つて行け。
お角　然し、それぢやあお氣の毒だね。
粂　四百ばかり置きやせう。（ト四文錢を出す。）
小兵　なに、おらあちつと算段にやつたから、錢はいらねえ。
　　　トやはり右の鳴物にて、路地口より正兵衞着流し役半纏、更けたる家主のこしらへにて出來り、
正兵　あい、今日はいゝ天氣だね。（ト門口を明け、内へはひる。）
安　もし大家さん、今日は降りましたぜ。
正兵　降つたのはさつきのことだわ、今に見ろいゝ天氣だ。
小兵　大家さん、お出でなせえ。
正兵　どうだ小兵衞どん、瘧はもう落ちたか。
小兵　まだ落ちませぬ。
正兵　いゝ加減に落してしまへばいゝに。（ト正兵衞眞中に住ひ、）時に店賃はどうする積りだ、婆アどんを寄越しても、いつもおんなじ挨拶だから、今日はおれが自身で來たのだ。
小兵　なに、お前出來せえすりあ、上げねえでどうするものだ、今日斯うして親子のものが、雨露に濡

れねえのは誰がお蔭、この潰れかゝつた家を貸しておくんなさればこそ。何處の借りを遣らねえでも、米屋と店賃はあげにやならねえ。（ト正兵衞むつとせし思入）

正兵　何ぼおれが舌が廻らねえとつて、此方で言ふことをみんな言つてしまやあがる。さあ、さう譯が分つて居るなら、店賃を勘定さつせえ。

小兵　勘定しろと言はねえでも、出來せえすりやあ上げますが、此の間からの長時化で米の錢にもなりやあしねえ、もうちつと待つておくんなせえ。

お角　お氣の毒だが大家さん、親分も煩つて居るから、待つて上げておくんなせえな。

正兵　いや今日は待てねえ、さつき婆ァを寄越したら、ふて勝手な事を言つた。さうだ表裏かけて二十七軒の束ねをするおれも大家だ、默つちやあ聞いて居られねえ。そりやあ江戸向きと違つて場末の事だから、羅宇のすげ替へ、とつけいべい、錢のある店子はねえ、みんな二ツ三ツは貸しがあるが、實に錢のねえのだから、催促しても仕方がねえが、聞きやあ今朝も深川ものを、三百ばかり買つたさうだ、肴を買ふ錢があるなら、なぜ店賃を拂はねえ。

ト此の内正兵衞煙草を呑みながら、煙管を叩き立てゝ言ふ。

小兵　そりやあお前さんのお詞だが、わつちも先きのねえ體だから、今日肴を喰はねえで今夜死にやあ

損だらう、今日店賃をやらねえで、今夜死にやあ德だらう、損と德だから店賃は上げられねえ。

ト正兵衞腹の立つ思入にて、

正兵 こう小兵衞、先役の六兵衞どんは手前のそんな脅しを喰つて、恐れて店賃を貸したらうが、おらあさうはいかねえよ。今でこそ羽織を着て、町役人と大家めかすが、元を明しやあ吉田町で、野玉の妓夫に出た男だ、芝居でする大家のやうに道化師ぢやあねえぞ。此の町内の番屋でも煙ッたがられる正兵衞さまだ、どんな出入事を持つて來ても、びくりともするのぢやあねえ。店子の預りは暇な時書留めておく家主だ、手前がいくら太え奴でも、おらあちつとも怖かあねえ。さあ、店賃が出來ずば店を明けろ。

安 もし大家さんえ、お前さんがお腹立ちは御尤もだが、親分も病氣ゆゑついお氣に障ることを申します。

兼 跡でわつち等がどうかしますから、まあ今日はお歸りなすつて下さいまし。

正兵 いや歸らねえ〳〵、これ三月溜りやあ店立ては、世間一統當り前だ、おれなればこそ七月八月、質でも流れる時分だわ。

安 そこは分つて居ります、お前さんだからお貸しなされるのだ、外にこんな大家さまはござりませ

衆　ぬ、實に此の町内の大黒柱。
お角　イヨウ家主の親玉。
正兵　兀天窓大明神樣。（トこれにて正兵衞腹を立てし思入にて）
安　えゝ、こいつ等まで同じやうに、家主を馬鹿にしやあがるか。
三人　なに馬鹿にしますものか、お前さんを、
正兵　褒めましたのだ。
小兵　こうはぐらかされちやあ了簡ならねえ。さあ、たつた今店を明けろ。
正兵　そりやあ明けろとおつしやりやあ明けもしませうが、お氣の毒だが行く所がござりませぬ。
小兵　そりやあ何處でも勝手な所へ、引越して行くがいゝ。
正兵　引越して行きたくつても御存じの生業に、勘當してありますが、因果小僧六之助と肩書のある餓鬼はあるし、年が年中居候でけんのんな事受合だから、間拔な大家なら知らねえこと、誰が店を貸すものかね。
小兵　店の貸し手がねえならば、お定りの店受けへ引取られて行くがいゝ。
正兵　大家さん、店受けはありますかえ。

正兵　なくつてどうするものだ、本所松倉町二丁目與九右衛門店の權兵衛だ。

小兵　その權兵衛は四年後、ヽヽヽコロリで夫婦行きましたよ。

正兵　行つたとは何處へ行つたのだ。

小兵　何處へ行くものか冥土へさ。

正兵　や、そんなら店受けは死んだのか、（びつくりなし、）なぜそれを知らさねえのだ。

小兵　誰が店受けの死んだのを知らせる間抜があるものだ。

お角　それぢやあ大家さんお氣の毒だが。

衆　生涯お前の御厄介だ。

小兵　たつて店立てがしたけりやあ、ちよつとした庭附といふ、小綺麗な店を借りて、お前が店受けになつて遣つておくんなせえ、何處へでも行きます。

正兵　いや太えにも程がある、何處の國に家主が店受けをして店立てをする、そんな篦棒があるものか。

安　まあありやあお前さんだね。

正兵　えゝやかましいわえ。さあ行き所がなけりやあ召連れ訴へをして、寄場へでも遣つてやらう。

ト正兵衛立ちかゝるを皆々留めて、

安　これさ、どうしたものでございます、それぢやあ大黒柱とは言へませんぜ。
衆　家主の親玉なら、
お角　まあ／＼待つておくんなせえ。
正兵　いゝや、斯う言ひ出したら一寸も待たれねえ。さあ、一緒にうしやあがれ。
鷄娘　とツけツこう／＼。
　トやはり屋臺囃子にて正兵衛小兵衛を引立てようとする、これを皆々留める、此の以前よき程に花道より七之助剃立て着流し、草履下駄にて出來り、門口にて此の様子を聞き内へはひり、正兵衛を留め、
七之　まあ／＼大家さま、お待ちなされて下さりませ。
正兵　や、手前は悴の七之助。
七之　お腹立ちは御尤もでございますが、その御勘定は私が上げますから、どうぞお待ちなされて下さりませ。（ト言ひながら懐より財布を出し、中よりばら／＼と額銀を出す。）
正兵　やあ、こりや額銀で慥に四五兩。
　ト取りにかゝるを、小兵衛突廻して財布の中へ金を入れて引取り、
小兵　これを取られて、たまるものか。

正兵　さあ、斯ういふ金があるならば、たつた、今勘定しろ。（ト小兵衛思入あつて、）
小兵　えゝ手前も氣の利かねえ、悪い所へ出しやあがつて、見られたからは仕方がねえ、さあ大家さん、上げやすよ。
正兵　そんならこれまでの勘定するか、一分二朱づゝ八月ゆゑ、丁度數よく三兩だ。
小兵　遣らねえでもいゝ金だが、仕方がねえ、さあ上げやす。（ト一分銀を一ツ投げて遣る。）
正兵　や、こりやたつた一分か。
小兵　知れたことさ、三兩はさておいて、十と二十と借りがあつても、家主の借りは一分で澤山だ。
正兵　成程手前は太え奴だ、せめて一兩も入れるかと思やあ、素一分ぢやあ待たれねえ。
小兵　待たれざあよしなせえ、五十兩の貸借りでも、一分で日延べが出來やさあ。
正兵　どう言へば斯ういふと、（ト立ちかゝるを、）
七之　どうぞそれで今日の所を、お待ちなされて下さりませ。
正之　むゝ、一分でも取らねえにやあまし、どうで召連れ訴へをしにやあならねえ、辨當代に取つて置かう。（ト一分とつて煙草入の中へ入れ、立上り行かうとする。）
小兵　おいおい大家さん、受取りを置いて行きなせえな。

正之　なに、一分ばかりに受取りが入るものか。

小兵　受取りを置いて行かねえと、一兩遣つたと言ひやすよ。

正兵　えゝ、何とでも勝手にぬかせ。（ト言ひながら門口へ出て、）いや太え奴もあるものだ。

トやはり屋體囃子、さんげ〳〵にて路地口へはひる。

安　いや兀天窓め、豪氣に怒りやあがつた。

粂　この町内にも大勢あるが、あんな慾張つた奴はねえ。

お角　見るから好かねえ大家だね。

小兵　店子の褒める家主は、何處の町内にもねえものだが、其の内にも彼奴の面を見ると、つい癇癪に障るから憎れ口をきく氣になる。そりやあさうとして、手前達は湯へでも行かねえか。

安　あい、一風呂いつて來やせう。

小兵　これで歸りに呑んで來い。（ト額銀を一つ投げてやる。）

安　こりやあ有難うござります。おい、みんな親分から。（ト見せる。）

粂　そいつはすてきだ、暮れねえうちに出掛けよう。

お角　この子も一緒に連れて行かうか。

小兵　それは內へ置いて行くがいゝ、晚に蕎麥でも喰はしてやらう。
安　それぢや、親分、行つて來やす。（ト三人門口へ出る、）
小兵　おいお角、雨の手に桃櫻だなあ。
お角　おや、親分厭でありますよ。
安　こいつあ面目ねえ。（トやはり右の鳴物にて三人は、花道へ鷄娘は奧へはひる、小兵衛思入あつて、）
小兵　七や、あの簪はいくらに賣れた。
七之　あい、嘉兵衛さんに譯を言つて、五兩に買つて貰ひました。
小兵　そいつはいゝ直になつた。
七之　あの簪は池上の歸りに、高輪で拾つて來たのだね。
小兵　さうよ、あれを拾つたその代り、煙草入を落して來た。手前嘉兵衛さんにさう言やあしめえの。
七之　いえ、お前の判でやつてある、女郎衆のだと言ひました。
小兵　むゝよしく、そいつあ氣がきいて居た。おゝそこへ慈姑を買つて置いたが、皮を剝いて置いてくれ。
七之　あいく。（ト桶にはひりし慈姑を見て、）こりやあいゝ慈姑だね。

ト誂への端唄になり、七之出俎板と庖刀を出し慈姑の皮を剝き居る、路地口よりお吉やつし世話娘のこしらへ、駒下駄にて風呂敷包みを持ち出で來り、

お吉　はい、御免なさいまし。

小兵　誰だ。

お吉　小父さん、わたしでござりますよ。

ト右の合方にて内へはひろ、七之助顏見合せ思入あつて、知らぬ顏をして居る。

小兵　おゝお吉坊か、爰へ來な〳〵。

お吉　お鹽梅はどうでござりますえ。

小兵　今日はちつといゝやうだ、おれが斯うして煩つて居るのに女房のねえ家だから、おつかァの世話になるよ。

お吉　いえもう仕事で忙しいゆゑ、ろく〳〵お見舞にも參りませぬわいな。

小兵　おゝ仕事といやあ、此の間頼んだ七が袷はまだか。

お吉　あい出來ましたから、持つて參りました。（ト風呂敷包みより袷を出す。）

小兵　おゝ、それは御苦勞。（ト袷を見て、）とんだ仕立榮えがした。（トお吉いそ〳〵と七之助の側へ來り、）

お吉　七さん、何をおしだえ。
七之　慈姑の皮を剝いて居るのさ。
お吉　憎らしい、知らない顔をしてさ。（トお吉七之助を抓る。）
七之　あいたゝゝ。
小兵　どうした、指でも切つたか。
七之　なに、お吉さんが。
お吉　あゝもし。（ト七之助を留める、小兵衛思入あつて、）
小兵　あゝ兀大家にからかつて、豪氣に肩が張つて來た。七や、ちつと叩いてくれ。
七之　あい〳〵。
お吉　小父さん、わたしが叩いて上げませうか。
小兵　お前は慈姑を剝いてくんねえ。
お吉　あい〳〵。

ト七之助小兵衛の後へ廻り肩を叩く、お吉は慈姑の皮を剝き居る、小兵衛お吉を見て

小兵　あゝお吉坊はいゝ娘になつたな、親子とツて爭はれねえものだ、死んだとつさんに生寫しだ、今

おいて見せてえな。こりやあお前にやるから、頭掛でも買ひな。
ト以前の額銀をお吉にやる、お吉取つて、
お吉　まあ小父さん、こりやあ金でござりますね、こんなにお貰ひ申しては。
小兵　なに、一分ばかりの金を。又やるから切でも買ひな。
お吉　まことにお氣の毒でござりますね。（ト金を戴いて紙に包み、帶の間へはさむ）
小兵　さうしてお吉坊は、いくつになる。
お吉　あい、十六になります。
小兵　それぢやあ、もうお嫁にいけるの。
お吉　小父さん、厭でござりますよ、わたしやそんなことは嫌ひでござります。
ト　お吉七之助へ思入あつて恥かしきこなし。
小兵　あゝ、お前は嫌ひか。
お吉　大嫌ひでござります。
小兵　それぢやあ仕方がねえが、おらあ好きなら七のお嫁に、貰はうかと思つたのだ。
お吉　え、（ト持つたる慈姑を投り出し）小父さん、そりや本當かえ。

小兵　本當に違ひねえが、嫌ひぢやあ無駄な話だ。

お吉　いえ〳〵、わたしや七さんなら、あの疾うから。

ト言ひ掛けるを七之助言つては惡いといふ思入にて、頭を振りながら小兵衛の天窓を押へ、同じやうに頭を振らせる、お吉思入あつて、

さあ、よいと思へど七さんは、人の心も知らないで、此の間も橫丁のお民さんと連立つて、毘沙門さまへ參つてさ。

ト悋氣の思入。

七之　そりやわたしよりお前こそ、熊さんの小父さんと寄席へ一緒に行つたくせに。

お吉　何の一緒に行つたとて、熊さんの小父さんはおぢいさんだわね。

七之　おぢいさんでも男は男さ。（ト七之助空を向いて、うつかりと小兵衛の天窓を打つ、）

小兵　あいたゝゝゝ、何をするのだ。

七之　ついうつかりと、（ト肩を叩きながら、）おぢいさんでも、男は男さ。

ト七之助お吉にひそりながら肩を叩く、小兵衛煙草を吞み居る、お吉悔しき思入にて、

お吉　えゝ、人の事を言ひながら、お前もそこらの三毛猫を、可愛がつて抱くくせに。

七之　ありやお前、猫だもの。
お吉　猫でも女は女でござりますよ。(ト俎板を庖刀で叩く。)
七之　そんならお前も、なぜ人形をお抱きだ。
お吉　ありやお前持遊びだものを。
七之　持遊びでも男は男でござります。(ト七之助俎板を叩くやうに小兵衞の天窓を叩く)
小兵　あゝ痛え、何をするのだ。
七之　眞平御免なされませ。
小兵　もういゝ〳〵、手前に叩いて貰ふと、どんな目に逢ふか知れねえ。
お吉　わたしが叩いて上げませうか。
小兵　いやも、按摩は懲り〳〵だ。(ト七之助お吉が惡いといふ思入、お吉過つて庖刀で指を切る)
お吉　あいたゝゝゝ。(ト紙にて指を結へる。)
小兵　お吉坊、どうした、七が抓つたか。
七之　え。
お吉　いえ、つい指を切りましたわいな。

小兵　そいつは危え、どの指だ。
お吉　小指を切りました。
小兵　丁度そりやあ心中に、
兩人　え、
小兵　あゝ、女郎だといゝ金だ。
　　トさんげ〳〵になり、路地口より前幕の權次半合羽脚絆尻端折り、嘉兵衞着流し前垂掛けにて出來り、權次嘉兵衞に囁く、嘉兵衞思入あつて路地へはひる。
權次　あい、御免なせえ。
七之　どちらからお出でなさいました。
權次　品川から來ました。（ト門口を明ける。）
小兵　なに品川から。おゝ、權次か。
權次　とつさん、此の間は。（ト思入あつて內へはひる。）いつもお達者でようございます。
小兵　なに、達者所か煩つて意氣地はねえ。
權次　そいつは惡いね。（ト言ひながらきよろ〳〵四邊を見廻す。）

七之　はい一服お上んなさいまし。（ト煙草を出す、權次見て、）
權次　この子は、六さんの弟だね。
小兵　さうよ。
お吉　お茶をお上りなさりませ。（ト盆へ茶碗を載せて持出る、權次お吉を見て、）
權次　こりやあ好い玉だ、內のかえ。
小兵　なに、隣の娘よ。
權次　話しにやあならねえかね。
小兵　直に慾張るな。
權次　そりやあ生業さ。（ト小兵衞思入あつて、）
小兵　さうしてそつちは、何しに來たのだ。
權次　ちつとお前に話しがあつて來たのよ。（ト誂への合方になり、小兵衞思入あつて、）
小兵　何の話しか知れねえが、年を取ると氣がせはしねえ、早く筋を聞かして下せえ。
權次　いや外のことでもねえが、わつちが判で入れた福島屋のお園がことさ、聞きやあお前の息子の六之助が連れて逃げたといふことだ、そこでわつちが態々來たは、知らねえ中といふぢやあなし、

お前とおれのことだから氣障なことを言ひッこなしに、話し合に仕ようと思つて來たのさ。あの子も是れまでよく賣つて何時の勘定でも玉頭、もう一年で明く年だから證文巻いて遣つてもいゝほどお部屋ぢやあ儲かつて居るが、然し、逃げたものをそれなりにしちやあ、外の奉公人の示しになりやせぬ、そこで一旦三日でもあの子を返してくんなさりやあ、年季も貰つて及ばずながら、わつちが媒人で上げやせうから、どうぞ器用にあの子をば、福島屋へ返してくんなせえ。

小兵 こう權次や、さつきから默つて聞いて居りやあ、おれの內にその玉が、隱してあると思つて來たのだな。

權次 これさとつさん、しらばつくれちやあいけねえ、御免の場所でねえからといつて、お傳馬を勤める御用宿、飯盛何人とお代官へ書上げになつてる女だよ、お恐れながらと出る日にやあ言はずと知れた勾引し、然し何も知り合つた仲で、そんな荒ッぽいことを仕度くねえから、態々わつちが出て來たのだ。とつさん、隱さずと出しなせえ。

小兵 いや手前も目先きの見えねえ奴だ、おれが所へ駈込んで來りやあ、何のつけに隱すものか、此方から掛り合ひをつけて、假令何年あらうとも、年季はおれが踏んで見せらあ、吉原町なら知らねえこと、高が宿場の旅籠屋に江戸で育つた遊び人が、いゝけぢめを喰つて詰るものか。

ト小兵衞きつと言ふ。

權次　詰るか詰らねえか知らねえが、宿場々々と安くしなさんな、五街道の其の内で、東海道の咽喉ツ首大名衆の下り上りにやあ、天窓を下げにやあならねえ土地だが、江戸の勢ひや破落戸に天窓を下げたことはねえ、山向うは知らねえこと、小田原切つて宿々で誰知らねえものゝねえ、品川宿の見てくれ權次、こつちも態々脚絆掛けで、江戸へ出て來て籠められちやあ、生れた土地へ歸られねえ。

小兵　歸られざあ何時までも、おれが内に遊んで居ろ、米は三合五勺しても居候の絕えねえのは、江戸の遊び人の習ひだから、四五日遊んで見て行かッし。

權次　おゝ、居るなと言つても居にやあならねえ、隱した玉を出さねえうちは、金輪奈落動きやあしねえ。

ト權次胡坐をかき、煙草を呑む七之助お吉思入あつて、

七之　もし權次さんとやら、今お尋ねの女郎衆は、本當にこつちに居ないから、どうぞ疑ひ晴らして下され。

お吉　ほんに七さんのいふ通り、わたしも知つて居ることゆゑ。

權次　えゝ喧しいわえ、うぬ等が知つたことぢやあねえ。態々おれが來るからにやあ、きつとした尻尾

を見て掛り合ひを附けに來たのだ。
小兵　ムウ、それぢやあ手前はどうあつても、おれが匿つたと思つてるな。
權次　知れたことだ。
小兵　何ぞ證據でもあつてのことか。
權次　おれも權次だ、來るからにやあ證據のねえことをいふものか。
小兵　して、證據といふは。
權次　今見せるから、びつくりするな。（ト此の以前門口へ正兵衞と嘉兵衞出來り、囁き合ひ居る。）おい道具屋さん、こつちへ這入んな。
嘉兵　はい、御免なさい。（ト嘉兵衞内へはひる、小兵衞見て、）
小兵　や、こなたは。
七之　道具屋の嘉兵衞さん。
嘉兵　小兵衞さん、とんだ目に逢はしたの。（ト小兵衞ぎつくり思入。）
權次　今の簪を。
嘉兵　へい。（ト誂への前幕の簪を出す。）

權次　とつさん、この簪はどうしてありやした。
小兵　さ、それは。
權次　こりやお園が馴染の客の九助といふ、金貸の手代が拵へてやつた定紋附、惡いことはしねえもの、さつき此の道具屋さんの見世へ立つて、煙草入を何心なく見て居ると、これ此の息子が賣りに來た、抱柏の紋附は覺えのある簪ゆゑ、氣の毒ながら道具屋さんを、證據に一緒に連れて來た。これ、此の簪があるからは、お園は内に居ざあなるめえ、四の五のなしに出しなせえ。
小兵　その簪がお園のか、何處の女の簪か、おらあ持手は知らねえわ。
權次　持手の知れねえ簪が、何でお前の手にあつた。
小兵　そりやあおれが拾つたのだ。
權次　して、拾つた其の先きは。
小兵　さあ。（ト小兵衞言兪れる。）
七之　慥高輪八ツ山下。
權次　して又そりやあ、いつの幾日に。
小兵　いつであつたか忘れてしまつた。

七之　それは先月池上へ、お參りに行つた歸りがけ。
お吉　そんなら大方十三日。
權次　む丶、此の簪を後の月、十三日の晩高輪の八ッ山下で拾つたら、まだ此の外にとつさんに、見せにやあならねえものがある。
小兵　して、其の品は。
權次　この煙草入は、覺えがあらう。（ト懷より前幕の小兵衞の煙草入を出す。）
小兵　や、これは。（トぎつくり思入。）
權次　しかも其の晩殺された、九助が死骸の側にあつた、赤銅鎖の煙草入、前金物の野晒しは。
七之　そりやとつさんの煙草入。
小兵　あこれ、その煙草入は、おらあ知らねえ。（ト嘉兵衞思入あつて、）
嘉兵　いや、知らねえとは言はれまい、しかも去年の春のこと、其の金物に取合せ、わしが拵へた煙草入。
權次　小豆鎖のしつくりと、拔き差しならねえ此の證據、これでもお前はいゝしらを切るか。

ト小兵衞思入あつて、

小兵　何處がどこまで、覺えがねえ。

權次　どうでおれにやお言ふめえから、出る所へ出て白狀しろ。大家さん御苦勞ながら。

ト門口に正兵衞窺ひ居て、

正兵　おいく。（ト內へはひる。）

權次　樣子は門で、お聞きなすつたらうね。

正兵　おゝ、殘らず聞いて居ました。

權次　どうで一筋繩ぢやあいかねえ爺ィ、出る所へ出ますから、お氣の毒だがお預け申します。

正兵　おさしつかりと預りました。早くこんな事で喰ひこんで、片附いてしまふ方が、此の家主も厄介拂ひだ。

權次　道具屋さん、こりやあお前に預けるよ。（ト簪を嘉兵衞に渡し、煙草入を懷へ入れろ。）

嘉兵　あゝ二三兩も儲けようと、思ひの外に簪ゆゑに、引合ひになるとは難儀なことだ。

權次　全體お前も五兩とは、あんまり見倒し過ぎたから、

正兵　こんな目に逢ふも當り前だ。

嘉兵　いや、これに懲りねえことはねえ。

權次　それぢやあ大家さん、わつちア是れから代官所へ。

正兵　ちつとも早く訴へさつせえ。（ト權次立上り、下手へ來る、七之助留めて、）

七之　あもし、どうぞ代官所へは。

權次　えゝ、何をしやあがる。（ト振拂ひ、）

小兵　あこれ、七や打捨つて置け、こいつらに言つたつて分らねえ、分る所でわけて見せらあ。

ト小兵衞仕方がないと覺悟の思入、三人は門口へ出て、

權次　それぢやあ大家さん、お預け申しましたよ。

正兵　しつかりと預りました。

權次　おい、とつさん、（ト門口から顏を出す。）

小兵　何だ。

權次　砂利の上で逢ひやせう。

トさんげ〳〵になり、權次、嘉兵衞は花道へはひる。正兵衞いゝ氣味だといふ思入にて路地口へはひる。時の鐘合方、七之助お吉案じる思入。

七之　こりやとつさん、どうしたらよからうな。

小兵　どうしたらぢやあねえ、われが間抜けからだ、言はねえでもいゝ事を高輪で拾つたの、池上へ行

つた時のと、そりやあまだ仕方もねえが、死骸の側にあつたといふ、證據に彼奴が持つて來たのに、そりや父さんの煙草入と、手前が一口言つたので、もう拔き差しはなりやあしねえ、あゝいふ證據があるからにやあ、此の金を土產にして喰へ込まにやあならねえわ。是れまで積る舊惡に、今度行きやあ出られねえ。同じ兄弟でも六之助は因果小僧と名に呼ばれ、おれが手にせえ合はねえからお帳に附いてしまつたが、其の代りにやあ何處へ行つても喰ふに困るやうなことはねえ、手前などはおれが死ぬと直に明日から孤ッ冠りだ、片輪な子程可愛いと殘して行くが心掛りだ、いつその事三年後大煩ひをした時に、死んでしまつてくれたなら、今この苦勞は見めえもの、あゝ餓鬼は厭だ〳〵、死んでゝもくれゝばいゝに。

ト小兵衛宜敷思入にて言ふ。七之助は俯伏き言譯なく泣いて居る。お吉も是れを聞き、同樣に泣き居る。

お吉　おゝお吉坊、まだ居たか、おつかあが案じて居よう、早く內へ歸るがいゝ。

お吉　あい、今歸りますわいな。

小兵　手前は油掃除でもして置けよ。

七之　あい。（ト顏を上げずに泣いて居る。）

小兵　一時でも我が內で、足を伸ばして寐て置かうか。

ト時の鐘獨吟の端唄になり、小兵衞看板で拵へた二枚屏風を立て、掻卷を持つて此の蔭へはひる、七之助屏風へ思入あつて、そつと門口へ出る、お吉も跡より出て、

お吉 もし、七さん。

七之 あ、これ。（ト四邊へ思入、）

お吉 情ないことになつたわいな。（トお吉七之助に縋り泣く。）

七之 今お前も知つての通り、ひよんなことをわたしが言つて、それが證據に父さんが命を取られるやうになつても、打ち打擲もなされずに、跡でわたしが困るだらうと、終に泣いたことのないに、ほろ〳〵淚をこぼしながら、三年後に死んだなら此の苦勞はあるまいにと、聞いては生きて居られぬゆゑ、死んで御苦勞かけぬ心、是れまでのことはこれぎりに、水に流して下さんせ。

お吉 そりや七さん聞えない、小い時から隣同士、仲のよいのでかゝさんが、夫婦にしたらよからうと言はれた時の嬉しさに、其の常談が誠となり、去年の秋から言交し、早く一緒に成り度いと茶斷ちをしたる甲斐もなく、お前が先きへ死なしやんして、何で殘つて居られませう、わたしも共々死ぬるわいな。

七之 その志しは嬉しいが、わたしは死なねばならぬ體、お前は死ぬに及ばぬゆゑ、後に殘つて命日

に、お念佛でも申して下され。

お吉　いえ〳〵わたしも共々に、死なねばならぬ譯あるゆゑ。

七之　そりや又何で。

お吉　恥かしいゆゑ今日までは、お前にさへも隱して居たが、わたしや疾うから、

七之　え、

お吉　身重になつて居るわいなあ。

七之　そんならそれゆゑ。

お吉　後に殘つて居られぬ體、一緒に殺して下さんせいな。

ト七之助に縋り泣く、七之助是非なき思入にて、

七之　さういふことなら仕方がない、二人一緒に死ぬわいの。

お吉　えゝ、嬉しうござんす。（ト兩人手を取り交し、よろしく思入、時の鐘。）

七之　とはいへ跡でかゝさんが、嘸やわたしを恨むであらう。

お吉　その言譯は彼の世から、

七之　きつと詫びを、

兩人　いたしまする。（卜時の鐘、屛風の內にて、）

小兵　七や〳〵、灯りを附けねえか。

七之　さあ、見咎められぬ其の內に。

お吉　石を拾うて、

七之　少しも早う。

卜時の鐘獨吟の端唄にて、兩人石を拾ひ袂へ入れながら花道へはひる。時の鐘合方にて、屛風の內より小兵衞出來り、

小兵　これ七や〳〵、えゝ、彼の野郎め、叱られてお吉が所へでも遊びに行つたか、灯りを附けて貰ひてえが、誰もまだ歸らねえか知らぬ。（卜奥より鷄娘出來り、）

鷄娘　こツけツこ〳〵。

小兵　えゝ、手前ぢやあ分らねえ、飯を喰つたら寐てしまへ。

鷄娘　こツけツこう。（卜羽根ばたきをして二階へ上る、小兵衞火鉢を見て、）

小兵　おゝ、すつかり火が消えてしまつた。（卜行燈と燧箱を出し火を打ち、）あいたゝゝゝ、いやといふ程拇指を打つた、又水ばれか豪氣に濕つた。（卜又火を打ち見て、）おきやあがれ、蓋がしてあら

あ、（ト又打つて、）やつとのことで附いた。（ト行燈へ灯りを附け思入あつて、）そろ〳〵兆して來たわえ。何にしろ素敵な蚊だ。どれ、燻しを仕掛けて遣らうか。

ト時の鐘端唄になり、小兵衞火鉢へ蚊燻しを仕掛ける、此の內花道より六之助好みのこしらへ、尻端折り頬冠り、お園卷帶宿場女郎好みのこしらへ、同く手拭をかぶり出來る。跡より黑四天の捕手一人菰を冠り、窺ひながら出來る、花道にてお園つまづく。

六之　あ、危ねえ、氣を附けて歩け。

お園　つい心が急くものだから、石に躓いたのさ。

六之　そんなにおど〳〵することはねえ、これから旅に出掛けりやあ、もう後は見られねえ。

お園　今まで江戸に隱れて居て、今夜捉まりでもしてお見な、苦勞した甲斐がないわね。

六之　もう二十日から日が經つたから、江戸に居るとは思ふめえ、何にしろ父さんに逢ひてえものだ。

お園　わたしやあ初めてだから、極りが惡いね。（ト此の時捕手つか〳〵と側へ來る、お園振返る、これにて花道へ引返してはひる。）おや、誰か跡を。

六之　なに、氣のせゐだ。（ト右の唄にて兩人舞臺へ來て門口から覗き、）丁度父さんが一人居る。

お園　そんなら、あれがおとつさんかえ。（トこれを聞き、）

小兵　そこに居るのは、誰だ。
六之　父さん、おれだよ。
小兵　おれだとは誰だ、名があるだらう名を言へ、おれといふ人に近附きはねえ。
六之　入り早々もう皮肉だ。（トこれにて小兵衞思入あつて、）
小兵　さういふ聲は、六ぢやあねえか。
六之　あい、六之助さ。（ト小兵衞惡い所へ來たといふ思入にて、）
小兵　これ、手前はお帳に附いた體、おれの所へ何しに來た。
六之　今度奥州の方へ行くに附き、又何時逢はれるか知れねえから、ちよつと暇乞ひに來たのさ。
小兵　そりやあ何處へ行かうと、うぬが足でうぬが行くのに、他人のおれが構ふものか。
六之　さうでもあらうが、ちよつと內證で內へ入れてくんなせえ。（ト小兵衞瘧にて寒き思入。）
小兵　あゝ、又寒氣がして來やあがつた。（ト門口を見て、）此の野郎め、まだそこに居やあがるか、まごまごすると叩き挫くぞ。（ト立上り、ぶる／＼顫へどうとなる。六之助これを見てつか／＼と內へはひり、）
六之　父さん、こりやあどうしたのだ。（ト側へ來て介抱するを、）
小兵　どうでもいゝ、打捨つておけ。（ト六之助を突き退ける。）

六之　それだといつて、こんなに顫へて。

小兵　顫へようが顫へめえが、うぬが世話になるものか。（ト又側へ寄る六之助を突き退け、）あゝ、寒い寒い。

ト搔卷を着て顫へ居る、六之助側へ行かれぬ思入、お園見兼れて内へはひり、

お園　もし、こりやどうなさんしたのだえ。

小兵　えゝ、喧しいやい。（ト大きな聲をする、）

お園　えゝ。（トびつくりする、小兵衛お園を見て、）

小兵　や、お前は。

お園　お初にお目に掛りますが、品川の園でござります。

小兵　むゝ、話しに聞いたのはお前か、よく來たの。（ト言ひながら矢張り顫へて居る。）

お園　不思議な緣で六さんと、斯うして一緒になりますれば、お前さんとは申さば親子、出過ぎたやうだがわたしのお願ひ、どうぞ今日ばかりは六さんを、堪忍して上げておくんなさいな。

ト小兵衛思入あつて、

小兵　六ばかりならどんなことでも、敷居から內へは入れねえが、初めて逢つたお前の賴み、愛敬もこ

ほせめえから、今日ばかりは大目に見ようよ。
お園　そりやあ何より有難うございます。さあ六さん、こつちへお出でよ。
　　トこれにて六之助小兵衞の側へ來て、
六之　父さん、お前どうしたのだ。
小兵　瘧を久しく煩つて居るのよ。
お園　それでそんなに顫へなさんすのか。
小兵　おゝ、寒くつて堪えられねえ、そこの戸棚に蒲團があるから、此の上へぶツ掛けてくれ。
お園　あいく。
　　トお園戸棚より蒲團を出し、小兵衞に着せる、此の内六之助思入あつて、門口へ掛金をかける。
小兵　これ六や、家へ誰ぞ來ると惡い、入口を締めて置け。
六之　案じなさんな、掛金を掛けて置いた。
小兵　拔目はねえな。あゝ寒いく、もつと何ぞ掛けてくれ。
六之　おゝ、今掛けてやるよ。（ト六之助着物を脫ぎ、紺の腹掛白縮緬の褌一つになり、小兵衞へ着物を掛け、）
父さん、何うだ。

小兵　まだ寒い〳〵。

六之　お園や、手前も脱げ。

お園　あい〳〵。（ト卷帶を解き、緋の長襦袢一ツになり、小兵衞へ着物を掛けて、）

六之　これぢやあどうだえ。

小兵　まだ〳〵寒くつて堪えられねえ、六や上へ乘つてくれ。

六之　合點だ。（ト小兵衞の上へ馬乘りに乘り、押へ居る、）おらあ瘧の味を知らねえが、豪氣に顫へるものだなあ。（ト小兵衞苦しき思入、六之助は體へ蚊が取附きしこなし、お園蚊を打たうとして背中を叩く、）あゝ痛え、何をするのだ。

お園　蚊が取ッ附いて居るからさ。

六之　さつきから喰やァがるけれど、手が放せねえから我慢をして居たのだ。

ト六之助蚊にくはれたる思入、お園これを追ひながら、

お園　もしおとつさん、少しはようございますかえ。

小兵　あゝ大きに凌ぎよくなつた、此の擧句が熱が出て、あつくツて堪へられねえ。

六之　嘸毎日困るだらうの。

お園　誰がこんなお世話をしなさいますえ。
小兵　此の野郎の弟が、よく世話をしてくれるよ。
お園　そりやあ慥、七さんといひなさるのだね。
小兵　さうよ。
六之　おゝ、其の七は何處へ行つたえ。
小兵　今まで家に居たが、隣りへでも行つたか。
六之　あれにも逢つて行きてえが、早く歸つてくれりやあいゝが。
　　　トばた／＼になり、花道より以前の岩戸安走り出來り、門口を叩き、
安　　親分々々、大變だ／＼。
小兵　なに、大變だと。（ト小兵衞飛び起き、）
お園　あもし、危いわね。（ト留める。）
小兵　これ安や、大變とは何だ大變だ。
安　　七さんとお吉坊が、大川へ身を投げたよ。
三人　えゝ。（トびつくりなし、）

六之　それぢやあ七が、

小兵　あこれ。（ト六之助を留めて）さうして、どうした。

安　どうした所かお袋がそれを聞くと逆上せあがり、此奴も跡から川へどんぶり。

小兵　やれ、可愛さうに。

安　わつちやあ是れからみんなを連れて、いゝゝすばりをして尋ねて來やす。

小兵　御苦勞だが賴むよ。

安　合點だ。（トばた〳〵にて逸散に花道へ走りはひる、後三人愁ひの思入にて、）

小兵　あゝ、とんだ事をしてくれたなあ。（ト小兵衞うつむき歎く思入。）

六之　それぢやあ逢ひたく思つたが、もう逢ふことはならねえか。

お園　何で身をば投げなさんしたか、愛しいことをしたぢやあないかね。

六之　父さん、何ぞ當りはねえかえ。（ト小兵衞我慢の思入にて、）

小兵　別に仔細もねえけれど、おれが小言を言つたので、それで大分死んだのだらう。

六之　おれが斯うして內に居ず、親一人子一人だのに、何を小言を言つたのだ。

お園　まだお目には掛らないが、すなほなお子だといふことだのに、惜しいことをしましたね。

ト お園泣く、小兵衛思入あつて、

小兵　なに、根が役に立たねえから、こんなことを仕出來すのさ、こつちアどうで死ぬ體、心殘りがなくなつていゝが、可愛さうなはお隣の娘、とんだ者にくッ附いてお袋まで死ぬといふはよく／＼深い惡緣だ。あゝ店受けの久六が難儀をするのが氣の毒だ、おれが裟婆に居られるなら、どうかしてやらうのに、明日をも知れねえおれが身の上。

六之　父さん、明日も知れねえ身の上とは。

お園　お鹽梅が惡いのかえ。

小兵　なに、煩つたとて高が瘧、死ぬほどのことはねえが、今夜か遲くも明日の晩は、喰ひ込まにやあならねえ譯だ。

六之　そりや又どうして、

お園　どういふ譯で。（ト合方替つて、小兵衛思入あつて、）

小兵　譯といふのは外でもねえ、手前達が品川を逃げた晩におれも亦、池上歸りで雨に逢ひ、八つ山下で休んで居たら鼻の先きで人殺し、誰かと見りやあおさらば傳次、盜んだ金を路用にして上方筋へ出掛けると、右と左りへ別れたが、月は隱れて眞ックらがり、男と女の駈落を追掛けて來た出

合頭、逃げる機會に腰提げの煙草入を落したゆゑ、探す手先きに拾つた簪、お園がものと露知らず貰つた先きから足が附き、見てくれ權次がおぬしの詮議、文句をいやあ勾引、まだ其の上に煙草入で目串の抜けねえ人殺し、此の二口で送られたら、再び娑婆へは出られねえ。

六之　むゝ、そんならあの晩八つ山下で、出ッ會したのは父さんか。

お園　其の時それと知つたなら、さういふ事にはなるまいものを。

小兵　元より知らねえことなれど、今となつちやあ抜けられねえ、これが堅氣なものならば身の言譯も立たうけれど、年來名うてのおれだから、誰でもたゞぢやあ通さねえ、若いうちなら逃げもせうが白髪頭でそれも出來ねえ、そこで是れまでの罪滅しに、手前や傳次が科を背負つて、此の世の別れに行く積りだ。（ト此の内六之助お園これを聞き顔を見合せ思入あつて、）

六之　お園、今父さんの話しを聞いちやあ、おらア奥州へ行けなくなつた。

お園　さあお前も此の儘行けまいが、わたしも一緒に行かないよ。

小兵　なに、二人が旅へ行かねえとは。

六之　行かれぬ譯は今もいふ、其の勾引も人殺しもお前の知つたことぢやあねえが、その時拾つた簪に又落して來た煙草入が、證據になつちやあお前だけ、抜けられねえのは尤もだ、勘當受けても

お園 親子は親子、知らねえことなら仕方もねえが、それと聞いちやあ行かれねえ。元はといへば品川をわたしが逃げたとこからして、お前にかゝる其の難儀、どこが何處まで六さんと添はうと思つて逃げは逃げたが、斯ういふ譯では逃げられねえ、わたしが是れから福島屋へ歸つたならば勾引の、まあ一方は濟む道理。

六之 又人殺しの其の科も、證據になつた煙草入も親仁にわつちが貰つたと、此の身に背負つて駈込んだら、どんな惡事があらうとも、父さんお前は拔けようぜっへト是れにて小兵衞起返り、感心の思入。

小兵 あゝ惡い奴ほど分りがよく、勘當すりやあ他人だが、よく二人とも言つてくれた、其の志しは忝けないが手前も行きやあ重なる惡事に、人殺しゆゑ切られにやならねえ。又この子も宿へ歸つたら外の者の示しにも、酷い仕置をした果が年季を增して住替だ、もう早桶へ片足は突込んで居るおれが體、生き甲斐もねえ命をば助かりてえとて手前達に、どう難儀が掛けられるものだ。

六之 そりやあ父さんお前も無理だ、現在親が殺されるのを何で子が見て居られるものだ、元よりお前の科ぢやあなし、勾引はおれがしたの、又人殺しは傳次が仕業、何でお前に其の科をおれが背負はせてやれるものだ。

お園 わたしだつて其の通り、これから歸つて見せしめに、三度の食を止められて體に斑の出來る程、

責めせつちやうにあつたとて、高が三日か五日のこと、わたしも駿河の府中から旅を稼いで來たからは、お部屋の仕置はお茶漬さ。

六之　そんなら手前も辛からうが、是れから宿へ歸つてくれ、おらあ直支度をして代官所へ駈込むから、駕籠にでも乘つて早く行け、ぐづ〳〵しちやあいかねえぜ。

ト言ひながら六之助着物を着る、お園も着ながら、

お園　わたしもお前に連れ添ふからは、くだらぬ氣でも心では、鬼の女房に鬼神とやらさ、未練の心は少しもないよ。

六之　どうで出られはしめえけれど、萬に一つお赦でもあつて出られたならば逢はうけれど、さもねえ日にやあこれが別れだ。

お園　何だな六さん、是れッ切り逢はれぬ人ぢやァあるめえし、お前が死んだと聞く時は、直に跡から死んで行くから、六道とやらに待つてゝおくれ。

六之　それぢやあ手前も死んでくれるか。

お園　行かねえでどうするものだな。（ト兩人よろしく思入、小兵衛是れを聞き思入あつて、）

小兵　成程、似た者夫婦とは、よく言つた世の譬、二人ともいゝ肚胸だ、今殺すのは勿體ねえ、おらあ

どうせ近いうち瘧で死ぬと思つて居るのだ、手前達が死んだ後で、長生きでもすりやあいゝが、間もなくおれが死んで見ろ、虻も取らず蜂も取らず、悪いことは言はねえから、おれに任して二人とも、命を大事に逃げてくれ。

七之　そりやあ父さん無駄な話しだ、達者な時なら知らねえこと、今煩らつて居る其の體で、行つた日にやあ直ぐに往生、長く生きちやあ居られねえ。

お園　それを知りつゝ子の身として、何で見捨てゝ行かれるものかね。

小兵　えゝ、べらぼうめ、氣を揉ませるな、年は取つても野晒し小兵衞、行きやあ娑婆より樂をすらあ、向ふ通りへ押付けられ名主の手當を頂いて喰ふ、そんなしみつたれな親仁ぢやあねえぞ。（ト小兵衞片肌を脱ぐ、この二の腕に野晒しの彫物ある、お園これを見て思入）あゝ、熱が出てべらぼうに熱い。

お園　や、お前の腕の彫物は。

小兵　こりやあ譯があつて彫つたのだが、此の彫物があるゆゑに、渾名を野晒し小兵衞といふのよ。

お園　そんならお前は若い時、三島の宿の初音屋に、お出でのことはなかつたか。

小兵　おゝ、かれこれ三十四五年先、そこに奉公して居たよ。

六之　其の初音屋といふ穀物屋でお前の首は取られるところ、繼いで貰つたといふことだの。
小兵　忘れもしねえ掛先きを、八十五兩早乘つて既に縛られて行く所を、お慈悲深い旦那さまで、金は世界の湧き物だ、人の命にやあ替へられねえと、八十五兩損をしておれを助けて下すつた、其の時彫つた此の彫物、骨になるまで此の御恩は、忘れぬといふ心の誓ひ、さほどお慈悲の旦那さまが、僅か十年たゝねえ內に、ひよんなことから左り前、店をしまつて幽なお暮し、せめて以前の御恩送りと金を十兩拵へて持つて行つて彫物を、お目に掛けたが其の後は、便りもないが御無事だか、おれが死んでも親の恩、手前達は忘れてくれるな。
六之　それはおれも聞いて居るゆゑ、心に忘れたことはねえ。そりやあさうとお園は又、どうしてそれを知つて居るのだ。
お園　知つて居るのは面目ないが、その初音屋の、わたしや娘さ。
小兵　え、そんならお前が。
お園　さあ、尋ねてお出での其の時は、わたしはやうく五ツか六ツ、詳しいことは知らないが、跡での話しに彫物は、幽に覺えて居ましたのさ。
小兵　成程お前がさう言ひなされば、御新造さんに瓜二ツ、まことによく似ておいでなさる。

ト お園の顔を見て思入。

六之　それぢやあお園は父さんが、御恩になつたお主の娘か。

お園　思ひがけない彫物から、互ひの素性の知れるといふは、

小兵　これも盡きせぬ主從三世。

六之　こつちは二世の約束に、

お園　一世の親子が寄合つて、

小兵　話す間もなく、

六之　此のまゝに、

お園　逢ふは別れの、

三人　始めだなあ。（ト三人よろしく思入あつて）

小兵　してまあこりやあどういふ譯で、お前は勤めをさつしやります。（ト合方替つて）

お園　話せば長いことながら、見世をしまつて在方へ僅の田地を力にして、しがない暮らしにどうせうかとそれを氣に病み母さんが、三年越しの長煩ひ、搗て加へて父さんが風から終に傷寒で、僅か五日で果敢なくなり、跡の始末に仕方なく、しかも府中の丁子屋へ、泣きの涙で此の身を賣り、

心のまゝに訪ひ弔らひ、やれ嬉しやといふ間もなく、又その月に母さんが直に亡くなり、それからは、便りない身にぐれ出して流れ〳〵て品川へ、五年あとから宿場の勤め、よく零落れて以前はと人は言へども身の恥に、今日までわたしが隱して居たゆゑ、六さんさへも知らぬ譯さ。

ト これを聞き、お園を見て思入あつて、

小兵　あゝ、そんなら小兵衞が大恩受けし、お二人さまとも此の世には、もうおいでなされませぬか。南無妙法蓮華經々々。（ト ちよつと手を合せ拜んで）これ六や、手前のやうな惡黨に惚れて駈落するからにやあ、ろくな者ぢやアあるめえと、思ひの外に大恩ある、お主さまのお孃さん、たゞの女房とは譯が違ふぞ、行末長く見捨てずに、よくお世話をしてくれよ。

六之　これさ父さん、何を言ふのだ、おらあ彼方へ行く體、お前は殘つて恩返しに、お園の世話をしてくんねえ。

小兵　いや知らねえ内は兎も角も、おれが命を助けて貰つた大恩のあるお主さま、お助け申さにやならねえは、手前が行つて死ぬ時は直に死ぬと今の詞、こゝが御恩の返し時この御子の命が助かるやう、おれを見捨てゝ行つてくれ、それともそれが不承知なら、爰でおれが先きへ死なうか。

ト 以前の庖刀を取るを留めて、

六之　あこれ、危ねえ、まあ待ちねえ。
小兵　そんなら爰を、逃げてくれるか。
六之　さあそれは。
小兵　但しは死なうか。
六之　さあ、
小兵　さあ、
兩人　さあ〳〵。
小兵　惡いことは言はねえから、親の言ふことをきいてくれ。（ト是れにて六之助是非なき思入、）それ程までお前のいふのを、達てといつて死んだ日にやあ、孝行する氣もやつぱり不幸、仕方がねえ、お園行かうよ。
お園　行きは行かうがわたしゆゑ、義理に搦んで斯うなつては。
小兵　濟まぬとあるなら、わしが死なうか。
お園　あもし。（ト留める。）
六之　父さん、行くから案じなさんな。

小兵　あゝ忝ない〳〵、それでおれも落着いた。これ六や、もう今までとは違ふぞ、女房でもお主さま、是れから旅へ出掛けたら泊り〳〵で足でも摩り、又馬駕籠のねえ所なら負つてゞも上げろよ。お孃さん、遠慮なしに遣つておやんなせえ、はゝゝゝ。

お園　あれさ、其のお主あしらひは止しにしておくんなさいよ。（ト此内六之助花道へ思入あつて、）

六之　いや、此方のことで忘れて居たが、七の死骸はまだ知れねえか、せめて別れに死顏でも、

お園　わたしも一目見て行きたいに。

小兵　もう一歩早く來れば、生きて居るうち逢はしたに、不斷彼奴も逢ひたがつて、兄さんは何處に居るか、煩つてゞも居やあしねえかと、箸の上げ下しに言つて居たよ。

六之　明日まで居たら逢はれもせうが、

お園　待つて居られぬ今宵の仕儀。（ト兩人本意なき思入、小兵衛思入あつて、）

小兵　銘々傳の赤垣を、芝居でした時着物を掛け、德利酒の別れをしたが、幸ひこれに七が袷これを此の場の形代に、あれと思つて逢つて行きやれ。

ト地藏經になり、以前の袷を看板の屛風へ掛ける、これを兩人見て、

六之　あゝもうこんなに、丈を着やすか。

お園　話しに聞くより大きな形。

小兵　六に似て丈が高い。（ト小兵衞茶碗へ水を汲み、着物の前へ手向け思入あつて、）これ七や、不斷手前が逢ひたがつた、兄ィが來たよ。

六之　これ七坊、手前何で死んだのだ、おれが此の通り身性が惡く、お帳に附いてる體だから、三人居ても位牌所は、手前が繼がにやならねえに。

お園　お前ばかりか娘御まで年端も行かない身の上で、死なうと覺悟しなんすは、よく〳〵なことであらうけれど、ひよんなことをしなさんしたな。

小兵　手前ゆゑに三人四人、死んだ中にも不便なのは、娘は七が胤を宿し、もう五月になるとやら。

六之　それでは、腹のその子まで、

お園　闇から闇へやる愛しさ、

小兵　親子四人同じ日に、

六之　水へはひつて死ぬといふは、

お園　如何なる前世の惡緣か、

小兵　是れまで人の因果をば、

六之　引張りもの〻見世物に、
お園　見せたる罪が廻り來て、
小兵　今日は、此の身の、
三人　因果だなあ。（ト三人愁ひの思入、時の鐘。）
小兵　いや、詰らぬことで引留めた、〻〻すばりに行つた若い奴等が、歸らぬうちに行くがい〻。
六之　斯うなる上は父さんに、氣を揉ませぬがまだしも孝行。
お園　少しも早う。（ト立ちか〻る。）
小兵　あ、二人共待つてくれ、いはゞ目出度い旅立ちだ、箸を取つて行つてくれ。
六之　なに、手のねえに、
お園　いらぬ事を。
小兵　手間は取らせぬ、待つてくれ。（ト言ひながら戸棚を開け、内より八寸の上へ茶碗、皿、箸を二人前取膳に並べあるを出し、）さあ、態と箸を取つてくれ。
六之　この膳は、（ト合點の行かぬ思入。）
お園
小兵　手前達が品川を逃げたと聞いて二人とも、こいつは慥に旅の空、本街道は行くめえから、嘸喰物

にも困らうと、勘當しても親子は親子ひもじい目をばさせぬやう、人目を忍んで戸棚の蔭膳。

ト これにて六之助お園膳を取つていたゞき、

六之 いゝろくでなしのおれでせえ、是れほど思ふ親心。

お園 さぞ孝行な七さんが、殘り多うござんせう。

小兵 地鐵を言やあ親子の別れ、口ぢやあ強いことを言ふが、心の内ぢやあ泣いて居るわい。

六之 父さん、そりやあ尤もだ。

お園 わたしでさへも胸が一杯。

小兵 みつともねえと、笑つてくれるな。

ト 小兵衛手拭を顏へ當てゝ泣く、六之助お園顏を背けて泣く、此の時薄ドロ／＼になり、上手二階の障子の骨を殘し紙ばかり引いて取る、内に七之助お吉水へはひりし鬘、薄色の衣裳にて皆々を拜んで居る、二階より鷄娘つか／＼と下りて來て、

鷄娘 とツけツこ／＼、とツけツこう。

小兵 えゝびつくりする、どうしたのだ。

鷄娘 とツけツこう、（ト上手二階へ指さして奥へはひる、これにて六之助お園二階を見て、）

六之　や、思ひ掛けねえ七之助。

お園　側に可愛ゆい娘御さん。

小兵　なに、七と娘が。

ト上手を見る、ドロ〳〵掛焔硝、障子の紙を下し兩人を消す、此の途端路地口より以前の正兵衞先きに、黑四天の捕手出來り、

正兵　小兵衞どん〳〵、ちよつと明けて下せえ。（ト門口を叩く、）

小兵　大家さんか、寐ましたよ。

正兵　寐たぢやあ濟まねえ、起きさつせえ、身投げの息子を連れて來た。（ト又門口を叩く、）

小兵　えゝやかましい。（ト立つて來て門口を開ける、捕手十手を振上げ、）

捕手　捕つた。

トこれにて門口をぴつしやり締め、きつとなり掛金をかける。時の鐘合方になり六之助お園思入あつて身拵へする、小兵衞六之助に囁き早く逃げろと言ふ、六之助これを見捨てゝは行かれぬといふ思入。小兵衞行かにやお死ぬと庖刀を取上げる、これにて六之助お園是非なく奧へはひる、小兵衞熱の浮きし思入にて、手桶を持出し柄杓で水を呑む、此の内門口の捕手うなづき合ひ門をばら〳〵と毀こ

内へはひり、捕つたと十手を振上げる。小兵衛柄杓の水をぶつ掛け行燈を消し、きつと見得　これより竹笛入り誂への合方にて、小兵衛闇黒捕物の立廻りよろしくあつて、よき時分下手より六之助お関頬冠りをなし窺ひ出る。正兵衛見附け、うぬとかゝるを突廻して蹴る、正兵衛うんと倒れる。兩人は花道へ行く。舞臺は皆々小兵衛に繩を掛ける。此の時蚊燻しばつと燃え上る。花道の兩人振返り見る。小兵衛立上らうとするを、十手で打たれ、下に居るを木の頭。三重模樣の合方早めたるドン／＼にて兩人は花道へはひる。小兵衛は二人を見送る、此の見得よろしく、

ひやうし　幕

因果小僧（終り）

〈附録〉主なる興行年表

傾城玉菊

年時	安政七年四月	明治六年九月
座名	市村座	中島座
名題	網模様燈籠菊桐（あみもやうとうろのきくきり）	花廓賑燈籠濫觴（さとのにぎはひとうろのはじまり）
役割		
玉菊	尾上菊五郎	喜瀬川露紅
新之丞	坂東彦三郎	中村重藏
軍十郎	淺尾與六	吉川鳥路
治左衛門	淺尾與六	中村璃久三郎
お民	中村歌女之丞	坂東吉彌
彌兵衛	市川小團次	中村壽三郎
畑作	坂東又太郎	なし
左七郎	坂東鶴三郎	坂東橋三郎
玉萩	坂東橋之助	嵐德之丞

小猿七之助

年時	安政七年四月	慶應元年四月
座名	市村座	中村座
名題	網模様燈籠菊桐（あみもやうとうろのきくきり）	義高島千尋網手（よしたかしまちひろのあみので）
役割		
七之助	市川小團次	河原崎權十郎
七五郎	坂東龜藏	坂東龜藏
吉三	河原崎權十郎	松本錦升
與四郎	坂東彦三郎	市川左團次
瀧川	尾上菊五郎	岩井紫若
お杉	中村歌女之丞	尾上榮三郎
お波	市村羽左衛門	河原崎國太郎
儀兵衛	淺尾與六	市川小團次
西念	坂東龜藏	市川小團次

年時	明治六年九月	明治十一年二月	明治三十年七月	大正十年十月
座名	中島座	大阪中座	歌舞伎座	市村座
名題	花廓賑燈籠濫觴（さとりにぎはひとうろのはじまり）	時得物千引綱舶（ときをえものびきのあみぶね）	網模樣燈籠菊桐（あみもやうとうろのきくきり）	網模樣菊江戸染（あみもやうきくのえどそめ）
	坂東太郎	嵐橋三郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎
	吉川路鳥	中村傳五郎	尾上松助	大谷友右衛門
	中村重藏	中村飛鶴	市川八百藏	市川男女藏
	尾上幸藏	中村珊瑚郎	市川八百藏	坂東三津五郎
	澤村巴杖	嵐璃笑	中村福助	市川鬼丸
	嵐德之丞	中村紫琴	尾上榮三郎	尾上榮三郎
	坂東吉彌	嵐璃幸	尾上丑之助	尾上榮三郎
	中村璃久三郎	市川市十郎	尾上松助	淺尾工左衛門
	なし	不明	市川八百藏	なし

赤垣源藏

年時	安政五年五月	安政六年十月	慶應三年八月	明治四年六月	明治八年十月	明治十二年二月	明治十七年九月
座名	市村座	市村座	市村座	中村座	大阪中座	久松座	新富座
名題	假名手本硯高島（かなでほんすずりのたかしま）	假名手本忠臣藏（かなでほんちうしんぐら）	稽古筆七いろは（けいこふで）	義士外傳復讐鑑（ぎしぐわいでんあだうちかゞみ）	十二時義士廻文（じふにときぎしのくわいぶん）	忠臣藏月雪花誌（ちうしんぐらつきゆきはなし）	天下一忠臣照鏡（てんかいちちうしんかゞみ）
源藏	市川小團次	市川小團次	市村家橘	尾上菊五郎	中村福助	市川九藏	尾上菊五郎
與左衛門	關三十郎	關三十郎	市川左團次	坂東彥三郎	中村宗十郎	中村翫雀	市川團十郎
おさみ	尾上菊五郎	吾妻市之丞	市川新車	市川門之助	中村喜代三	大黑家昇若	坂東秀調
與之助	關花助	關花助	坂東市之助	尾上幸藏	不明	中村助藏	中村福助
半助	山崎國五郎	山崎國五郎	中村仲太郎	中村相藏	中村碑礫六	坂東橋十郎	尾上松助

年時	座名	名題	役割1	役割2	役割3	役割4	役割5
明治二十六年六月	淺草座	末世鑑譽義士傳	市川九藏	市川瀧十郎	市川女寅	不明	市川喜猿
明治三十二年四月	東京座	義士銘々傳	市川團藏	中村時藏	市川莚女	不明	市川喜猿
明治卅三年十一月	歌舞伎座	名高忠臣藏	尾上菊五郎	市川八百藏	坂東秀調	尾上丑之助	尾上松助
明治四十一年六月	歌舞伎座	雪曙譽赤垣	市川團藏	市川八百藏	中村芝翫	尾上菊太郎	尾上松助
明治四十四年四月	市村座	赤垣源藏	尾上菊五郎	中村駒助	尾上芙雀	尾上菊太郎	尾上菊三郎
大正十一年四月	明治座	雪曙譽赤垣	片岡仁左衛門	市川左團次	澤村源之助	片岡千代麿	片岡我十

十六夜清心

年時	座名	名題	清心	十六夜	正兵衛	求女	西心	塔十郎	おふぢ
安政六年二月	市村座	小袖曾我薊色縫	市川小團次	岩井粂三郎	關三十郎	市村羽左衛門	淺尾與六	市川米十郎	吾妻市之丞
明治三年五月	中村座	鬼薊達染絺	尾上菊五郎	坂東三津五郎	大谷廣次	尾上幸藏	中村仲太郎	松本錦升	嵐榮三郎
明治十一年八月	喜昇座	白時遊形薊新染	市川團升	坂東吾妻	中村時藏	嵐音丸	坂東橋十郎	坂東鶴藏	中村十藏
明治十七年二月	新富座	柳巷春着薊色縫	尾上菊五郎	助高屋高助	市川團十郎	尾上菊之助	中村仲藏	中村芝翫	岩井紫若
明治二十七年十月	春木座	鬼薊廓色縫	市川九藏	中村福助	中村芝翫	不明	中村駒之助	市川團三郎	中村富十郎
明治二十八年六月	大阪浪花座	鬼薊花街十六夜	尾上菊五郎	中村福助	尾上松助	市村家橘	尾上榮十郎	尾上菊三郎	尾上榮三郎

年時	座名	名題							
明治三十二年八月	歌舞伎座	花街小袖薊色縫	市村家橘	澤村源之助	尾上菊四郎	關花助	澤村宗十郎	市川新十郎	坂東三津五郎
明治三十六年二月	宮戸座	鬼薊廓色縫	市村家橘	尾上榮三郎	市川八百藏	尾上丑之助	尾上松助	尾上菊三郎	尾上菊三郎
明治四十二年一月	歌舞伎座	柳巷晴着薊色縫	市村羽左衞門	尾上梅幸	市川八百藏	澤村宗十郎	尾上松助	市川高麗藏	中村芝翫
大正四年一月	市村座	柳巷晴着薊色縫	尾上菊五郎	尾上芙雀	中村吉右衞門	坂東三津五郎	市川新十郎	尾上榮三郎	河原崎國太郎
大正五年四月	歌舞伎座	柳巷春着薊色縫	市村羽左衞門	中村歌右衞門	片岡仁左衞門	市村竹松	なし	片岡市藏	澤村源之助
大正七年二月	帝國劇場	柳巷晴着薊色縫	尾上菊五郎	尾上菊次郎	守田勘彌	中村おもちや	尾上松助	中村吉右衞門	河原崎國太郎
大正九年二月	歌舞伎座	柳巷春着薊色縫	市村羽左衞門	尾上梅幸	市川中車	市村竹松	尾上松助	片岡市藏	坂東秀調
大正十三年六月	本鄕座	花街模樣薊色縫	市村羽左衞門	尾上梅幸	市川左團次	尾上榮三郎	なし	尾上幸藏	市川松蔦

三人吉三

年時	座名	名題	和尙	お坊	お孃	傳吉	十三	おとせ	久兵衞	文里	一重
萬延元年一月	市村座	三人吉三廓初買	市川小團次	河原崎權十郎	岩井粂三郎	關三十郎	市村羽左衞門	中村歌女之丞	市川米十郎	市川小團次	岩井粂三郎
明治十一年四月	大阪南座	三人吉三廓初會	市川右團次	實川八百藏	中村駒之助	市川鰕十郎	三枡源之助	嵐團之助	中村友三	なし	なし
明治二十八年三月	大阪中座	三人吉三廓初買	市川右團次	實川延三郎	嵐巖笑	中村琥珀郎	實川延三郎	中村玉七	市川團若	なし	なし

年時	明治三十一年十一月	明治三十四年十二月	明治四十二年十一月	大正四年五月	大正五年一月	大正九年二月	大正十年一月
座名	明治座	東京座	明治座	大阪中座	歌舞伎座	市村座	歌舞伎座
名題	三人吉三巴白浪（さんにんきちさともゑのしらなみ）	三人吉三巴白浪（さんにんきちさともゑのしらなみ）	三人吉三巴白浪（さんにんきちさともゑのしらなみ）	三人吉三廓初買（さんにんきちさくるわのはつがひ）	二筋道曲輪初夢（ふたすぢみちくるわのはつゆめ）	三人吉三巴白浪（さんにんきちさともゑのしらなみ）	三人吉三巴高浪（さんにんきちさともゑのしらなみ）
	市川左團次	市川猿之助	市川左團次	尾上卯三郎	市川八百藏	尾上菊五郎	市川左團次
	市川權十郎	市川染五郎	澤村宗之助	中村魁車	市川左團次	中村吉右衛門	市川中車
	澤村源之助	市村家橘	市川女寅	片岡我童	市村羽左衛門	澤村宗之助	市村羽左衛門
	市川壽美藏	中村勘五郎	中村勘五郎	嵐璃珏	市川段四郎	大谷友右衛門	市川段四郎
	市川米藏	市川團吉	市川左喜之助	中村魁車	實川延若	中村時藏	市村龜藏
	澤村訥升	市川女寅	市川莚若	市川福之助	中村雀右衛門	市川米藏	中村福助
	勝川又吉	市川壽美五郎	市川團吉	不明	中村歌六	尾上菊三郎	中村傳九郎
	なし	なし	なし	嵐徳三郎	片岡仁左衛門	坂東三津五郎	なし
	なし	なし	なし	片岡我童	中村歌右衛門	なし	なし

因果小僧

年時	文久元年五月	明治八年五月	明治四年八月
座名	守田座	中村座	久松座
名題／役割	龍三升高根雲霧（りうとみますたかねのくもきり）	誡ぐさ戀は曲者（いましめぐさこひはくせもの）	綴合戯場畫双紙（とぢあはせかぶきのゑざうし）
小兵衛	市川小團次	中村仲藏	中村仲藏
六之助	市川市藏	中村時藏	市川九藏
おその	尾上菊次郎	岩井半四郎	尾上多賀之丞
傳次	市川九藏	市川團升	片岡我當
權次	中村鶴藏	中村鶴藏	片岡市藏
七三郎	中村兒雀	市川團升	市川新藏
おきち	坂東三津五郎	坂東しうか	尾上多賀次郎

年月	劇場	外題	役者						
明治三十三年七月	春木座	因果小僧傳（いんぐわこぞうでん）	片岡市藏	澤村訥子	市川女寅	市川猿之助	坂田半五郎	市川染五郎	片岡龜藏
大正四年十一月	市村座	誡草芒野晒（いましめぐさすゝきのゝざらし）	尾上松助	尾上菊五郎	尾上菊次郎	中村吉右衛門	中村翫助	市川新之助	河原崎國太郎
大正十年八月	帝國劇場	因果物師（いんぐわものし）	尾上松助	尾上菊五郎	岩井粂三郎	大谷友右衛門	中村翫助	市川新之助	市川男女藏

大正十三年十月八日印刷
大正十三年十月十一日發行

著作權者印

『默阿彌全集第三卷』
非賣品

補修　河竹糸女

校訂編纂者　河竹繁俊

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者　堀江關武

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所　常磐印刷所

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂

上演、轉載等の場合は藏版者の許諾を得られ度候。